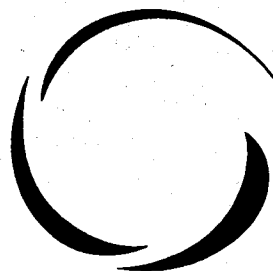


C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

# 上原信夫

## オーラルヒストリー

元沖縄民主同盟青年部長



GRIPS

政策研究院  
政策研究大学院大学

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

## 上原信夫 オーラルヒストリー

略歴……………4  
はじめに……………5

## 第 1 回

兵隊時代の思い出……………12  
 終戦の日・八月十五日前後……………18  
 沖縄本島を目指す……………22  
 奥に帰還し、青年会を組織……………26  
 部落内での家畜飼育問題……………28  
 山城善光との出会い……………33  
 沖縄南部の戦跡調査……………37  
 南部で出会った人の思い出……………42

第 2 回

南部戦跡調査で感じたこと……………49  
 子ども時代……………51  
 生年月日にまつわるエピソード……………52

## 第 3 回

山城善光主宰の「七滝会」……………59  
 郷里・国頭郡での暮らし……………59  
 沖縄の社会主義運動……………66  
 普天間会談……………69  
 記憶に残る食べ物について……………69  
 普天間会談の位置づけ……………72  
 部落内での家畜飼育問題で民政府に請願……………73  
 民主同盟設立前の活動状況……………78  
 当時の食料事情……………84  
 党解体のきっかけになった『自由沖縄』出版事件……………86  
 民主同盟結党大会——宮森小学校……………90  
 沖縄警察とC I C……………92  
 沖縄政党の特質……………95  
 米軍の沖縄統治とその世界戦略……………96  
 関西での活動……………98

第 4 回

中国留学生問題への関わり……………105

帰国までの経緯……………108

『自由沖繩』廃刊後の党活動……………112

『自由沖繩』発行までの思い出……………115

高等軍事裁判の対応……………121

仲宗根源和の独立論……………124

大宜味朝徳の思い出……………128

石川市の思い出……………130

上原氏への弾圧……………134

本土への密航……………140

体験的に共産主義を学ぶ……………142

日本共産党へ入党……………144

ストックホルムへ向けて密航……………146

### 第 5 回

石川中央ホテルの思い出……………152

民主同盟事務所の変遷……………154

党内における仲宗根源和の位置づけ……………163

国頭村議時代……………165

仲宗根源和との確執……………172

### 第 6 回

密航（沖繩から大阪へ）……………180

日本共産党時代……………182

密航（日本→シンガポール→香港→中国）……………190

広州での暮らし……………195

徳田球一への思慕……………199

当時、中国にいた日本人……………201

中国での仕事……………203

文化大革命を経験……………205

帰国するまでの経緯……………208

二十数年ぶりの沖繩の印象……………214

### 第 7 回

國場幸太郎の思い出……………221

福建・沖繩友好会館……………225

米軍基地の返還策を提言……………227

西銘順治の思い出……………229

松岡政保の思い出……………231

文教部長・山城篤男の思い出……………235

沖繩民主同盟に党綱領がなかった理由……………237

離沖の状況……………242

### 第 8 回

「福建・沖繩友好会館」建設についての補足……………249

沖繩と中国のつなぎ役……………253

西銘訪中を企図……………260

大田知事に意見具申……………264

沖繩歴代宝案の収集に尽力……………271

## 上原信夫 略歴

年	月	略 歴
1924年	12月	上原直榮（父）、苗（母）の4男4女の次男として国頭村奥で誕生。
1938年	3月	(14歳) 国頭村奥尋常高等小学校卒業
1938年	3月	(14歳) 青少年義勇軍に入隊 渡満
1941年	12月	(17歳) 関東軍、砲兵学校入学
1943年		(19歳) 同校卒業と同時に関東軍に任官
1945年	8月	(21歳) 宮古島にて終戦。 上原氏、日本軍の武装解除前に脱走
1946年	4月	(22歳) 奥で青年団を組織し、青年文庫、夜学などを設立。国頭村全村に拡大。
1947年	6月	(23歳) 「沖縄民主同盟」結党大会、青年部長に就任。
1948年	2月	(24歳) 国頭村議会議員選に当選
1950年	1月	(26歳) 民主同盟・人民党主催の「警察官暴行事件」演説会（於那覇市役所前広場）を最後に大阪へ密航。
1950年	2月	日本共産党へ入党（大阪南地区委員会所属）
1950年	5月	ストックホルム世界平和擁護大会とフルシャワ第2回世界平和擁護大会で「沖縄報告」のため密航。シンガポールで密入国発覚し香港へ強制送還。香港紙「大公報」の食客を経て、1951年1月ごろ香港から中国へ密航。
1952年	5月	(27歳) 中国科学院研究院の研究員に。
1974年	5月	(50歳) 日中国交回復に伴い、中国から帰国。
1974年	7月	社団法人中国研究所事務局長、専務理事
1979年		(55歳) 日本中国留学生研修生援護協会設立し、理事長に就任。
2005年	3月	現在、特定非営利活動法人・日本中国留学生研修生援護協会理事長

## ■はじめに■

本オーラルは、偶然の積み重ねで始まった。

東京・駒込に琉球センター「どうたち」という在京の沖縄県人が集う物販店がある。この店で、偶然、上原信夫氏が自身の体験を述べる会合に居合わせた。話を聞くと、沖縄本島で戦後初めてできた沖縄民主同盟で中心的に活躍した人物の一人で、しかも最後の生存者だということもわかった。

そこで、元沖縄県知事・大田昌秀氏のオーラルヒストリーで、懇意にしていたいただいた、中京大学助教授（当時・政策研究大学院大学助教授）の佐道明広先生にご相談。かねてから続いている沖縄プロジェクトの一環でということになった。上原氏にも、このような経緯をお話したところ、快諾していただき、かくして、上原氏のオーラルを記録として残すことになったのである。

上原氏は沖縄県出身で民主同盟の青年部長だった。民主同盟は、戦前の沖縄県には本土政党の支部はなく、この意味で戦前戦後を通じて、沖縄本島で初めて結成された政党なのである。

本オーラルでは主に、民主同盟の設立経緯、活動状況、解散過程について聞いた。その中から、民主同盟の特徴は以下の五点を指摘できる。

第一点目は、党綱領がないことである。政治学の政党の定義に従えば、厳密には政党ではなく政治勢力なのである。これは、直接統治を行っていた米軍政府の代行機関・沖縄民政府を批判する立場から、

民政府入りしていない在野の知名士を集めて結成されたためで、イデオロギーの相違を乗り越え、在野の勢力を総結集するというひとつの知恵だった。

第二点目は、政権獲得運動というより、自由民権運動だったことである。結成の目的として、戦後の混乱期において、荒廃する民心の啓蒙運動を最初に掲げ、次いで、結社の自由、出版・言論の自由、公選の獲得を目指していた。

第三点目は、二点目と関連して、炭鉱のカナリアのような役割を果たしたことである。すなわち、米軍政が、民主同盟の要求をどの程度までなら、受け入れるか、もしくは弾圧を加えるか、ということである。

第四点目は、民主同盟が戦後に誕生する沖縄政党の源流になっている点である。五〇年九月に行われた群馬知事選挙が、後の沖縄保守、革新の分水嶺になっている。民主同盟は党代表の仲宗根源和が立候補しなかったため、沖縄民政府工務部長だった松岡政保を擁立。一方は、民主同盟中央委員にも名を連ねていた平良辰雄を推した。結果は、群馬知事には平良が就任し、その与党として、平良を中心に革新の沖縄社会大衆党が結成される。敗北した松岡は、民主同盟を改組して共和党を結成した。五一年四月に、全琉四群島に分かれていた群馬政府を廃止して、全琉を統一した琉球政府が発足。米軍に任命された行政主席には、民主同盟中央委員だった比嘉秀平が

就任。比嘉は、議会対策上から松岡・共和党と合流して任命主席与党の琉球民主党が結成する。この琉球民主党は、のちに沖縄自由民主党へと変遷していく。このように、戦後沖縄政治の草創期には、民主同盟が保革を問わず、人材の供給源になっていたことが分かる。

第五点目は、地縁や友人関係など「ヒト」のつながりで民主同盟は結成された点である。これは、現在でも沖縄県内の政治動向を見る上でカギになる要素であろう。民主同盟の設立の際は、中心的に活動していた、本島北部出身の山城善光と上原信夫、中部出身の桑江朝幸の三人が、それぞれの地縁や友人関係を募って、党勢力の核になっている。

この他、本オーラルの成果として明らかになったのは、次の二点である。

まず、沖縄県の政治意識を持っている人々の共通する思考方法である。すなわち、沖縄を中心とした国際情勢（本土や中国、台湾、アメリカなどの動き）について、独特な価値観感から分析し、沖縄の取り得るべき戦略について思いをはせる点。

次に、特に革新系のイデオロギーを持っている人に共通する思考方法である。一六〇九年の薩摩入り、一八七九年の琉球処分、一九四五年の沖縄戦、一九五一年のサンフランシスコ平和条約で米軍統治が確定と、いずれも沖縄が主體的に判断できずに、大国の思惑に翻弄されてきたという歴史観を持ち続けている点である。これは、自治権や自己決定権の要求から、しばしば、独立論へ発展するのはそのためである。あわせて、沖縄プロジェクトで実施した、「大

田昌秀元沖縄県知事」「吉元政矩元沖縄県副知事」のオーラルも参考にしていただけだろうと思う。

上原氏のオーラルは、補足を含めて都合八回に上った。一回あたりのヒアリングは、四時間を越えることも珍しくなく、それにもかかわらず、雄弁にお話していただいた。オーラルは戦後沖縄の風俗にも及び、またとない経験をさせていただいた。しかし、対象者は八十歳を越えるご高齢で、しかも、約六十年前の記憶をたどりながらのオーラルであった。そのため、重複しているテーマがあることをご容赦願いたいと思う。

本オーラルは、中京大学助教授の佐道明広と元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員の眞板恵夫が主に担当した。

沖縄の地元でも、戦後沖縄政治史を研究する学者は少なく、研究論文も手薄なのが現状である。そうした状況に、この上原オーラルが少しでも貢献できれば、望外の喜びである。

最後に、本オーラルを沖縄プロジェクトに採用していただいた、リーダーの伊藤隆教授と佐道明広助教授に改めて感謝の意を評したい。そして、なによりも、対象者である上原信夫氏に感謝の意を述べて、この項を閉じたい。

二〇〇五年三月

政策研究院大学院大学  
C.O.E.オーラル政策研究院プロジェクト  
元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員

眞板恵夫

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第1回

---

開催日	2003年10月18日
開始時刻	14:00
終了時刻	17:30
開催場所	政策研究院 虎ノ門プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成・眞板恵夫

## 第1回インタビュー質問項目

2003年10月18日

- 1 敗戦は宮古島で迎えたようだが、「いつ」「どこで」武装解除になったのでしょうか？
- 2 沖繩本島へは「いつ」「どのように」復員したのでしょうか？
- 3 復員してからは何をなさっていたのでしょうか？
- 4 山城善光氏とは「いつ」「どこで」知り合ったのですか？
- 5 山城主宰の「七滝会」に入会していましたか？ いつごろにできたどのような会でしょうか？
- 6 桑江朝幸氏に会ったのは「いつ」「どこ」でしょうか？
- 7 中部に移動したのはいつごろですか？ 山城氏と行動を共にしていたのでしょうか？
- 8 沖繩民主同盟成立までの活動状況について教えてください。
- 9 普天間会談についてなにか覚えていることはございますか？
- 10 沖繩建設懇談会には参加なさいましたか？ どのような雰囲気でしたか？ そのような役割を果たされましたか？
- 11 沖繩民政府志喜屋知事訪問（四七年五月七日）について、お尋ねします。どのような雰囲気でしたか？ どのような話をなさいましたか？
- 12 民政府から沖繩建設懇談会の決議に対して、「お咎めなし」となって、政党結成に動き出すことになりましたが、このことについてはいかがですか？
- 13 党名の由来はなんですか？
- 14 大会宣言文の文案については、いかがでしょうか？
- 15 「綱領」がないのはなぜですか？



16 結党大会の様様について、ご記憶に残ることは？

17 出版物「自由沖繩」の許可申請の経緯について、教えてください。

18 山城、桑江逮捕の経緯について（四八年六月初旬）教えてください。

19 C-I-Cの尾行等何か異変を感じたのはいつごろからですか？

20 「自由沖繩」廃刊の経緯について教えてください。

21 民主同盟の“職員”の給与はいくらくらいだったですか？

22 沖繩を離れたときの経緯について教えてください。

(オーラルに入る前の説明と資料についての解説)

上原 ……私についても山城善光、桑江朝幸同様、警察が手配したけども、本人がどこにいるかわからない。しかも、そのときの辺土名警察署の署長は、上部に対してあまり忠実でなかったようで、「あいつは、家がないんだから、どこにいるのか分かりません」と、うそをつけて上原の所在不明で分からないと報告したらいいんですよ。だから、私が沖繩から逃げた後、大変ひどい目にあって、地位も降格されて署長を辞められたそうです(笑) 私がいなくなったその後、追及は相当ひどかったようですね。山城善光がこれを書いた(注『荒野の火』初期の段階ではねえ。全然、私の名前を出してないんだよ。そして、彼はこれを書いている中ごろから、私が中国にいたことが分かってたようだ。

こないだ話したかな。友人で少し中国語を知っているのが、アメリカ軍の憲兵隊から、中国語をできる軍作業員を募集したときに、一次試験は受かったのね。だが、二次試験の時に、「中国との関係は? 中国語をどこで勉強したのか?」という話し合いの中で、「沖繩の上原信雄っていうのが、中国語ができるのがいたんだけど、キミ、その人知らないか」と聞くので、「名前は知ってる」と答えたら、憲兵隊の雇用はダメになったそう。数ヶ月経ったあとで、もう一回二次試験をやるといって行ってみたら、さあ、「上原とどこでどういうふうに会ったのか?」と聞くので、「いやあ、どっかで誰からか、そういう話を聞いただけの話です」と、「そうかそうか本当に付き合えないのだな」と、それで採用された。以来、彼は中国放送の盗み聞きを毎日やらされていた。そこで、「シヤン・エン」。昔の沖繩の王様・尚の音「シヤン」と上の音「シヤン」とは似ているから私は、中国で一時「尚」を使っていたこともあったので、それをどっかの講演か、あるいは新聞かなんかにたまたま載ったものを中国のラジオが伝

えていたのだろう。友人はその放送を聞いた。彼は驚いて急に震えだして、「お腹痛い!」って言って苦しんだ。そこに憲兵隊の隊長なんかがついて、「どうした、食あたりか」ってね、休ませてくれて、早引きして、当時の沖繩農業試験場の私の友達の平良っていうのに、彼は報告したそう。彼は同級生だったから。そして、彼はすぐに山城善光に報告しようということで連れて行かれた。山城善光は報告を聞くと「はあ、信夫は生きていたか」と言っていて喜んだ。その頃からだよ、私の名前が復活したのは。(注『荒野の火』二十六回)一番下にね解放された上原初登場って、私、書いたから。

眞板 持ち帰って、ゆっくり読ませていただきます。

上原 ゆっくり見てください。

眞板 はい。

上原 この仲宗根、山城、桑江この三人の著書にあるように、私は彼らと一緒にやって来た。とにかくどのような困難な問題についても、私と山城、桑江の三人が、中心になってやり、仲宗根源和を支えて、最後までやった。その最後っていうのは、知事選挙が始まる五〇年代初めですね。

眞板 はい。

上原 だから、その前夜までのことしか彼らの書いた物にも載っていない。この人たちが書いた私に関する事柄は、私がいなくなると同時にほとんど記録されていないと思っっています。また、民主同盟の結成過程っていうのは、主なことは彼らがすでに書いた。したがって、おおよそのことは、あなたがまずこれを見てね。そして、次、あなたが整理した中で、さらに私が補った方がよい部分があると思うんだよ。そういう回り道をしながら、それなりに補っていくというような二人の共同作業が必要です。それが一定期間、続けないとどうしようもないこと。

沖繩関係のこないだの会合で、これもらいましたね。これは一

部だけど、これから、私が見て分かったんだけど、沖繩タイムスが出した『沖繩大事典』というものの付録としてこれ（注・「沖繩戦後史年表」）があるんです。これから、その時代の国際的な、あるいは日本と世界及び沖繩との関係、状況を参考にして下さいね。

眞板 ありがとうございます。

上原 どのくらい時間がかかるかわからないけれども、二人の共同作業だからね、あなたの計画に合わせなきゃいけないと思うし。

眞板 分かりました。すみません。質問項目としては、まずこれが伺いたい流れなんですけど、本日、最後までいけるかどうか、分かりませんが、伺えるだけ伺って、伺った中で新たな疑問点が出てくると思いますので、また質問項目を作らせていただきます。上原 じゃあ、そういう形で、作業の進め方は、あなたが主体になって、計画して進めて下さい。

眞板 今回は、民主同盟の設立経緯の部分を中心に上原さんから思い出話というか、回想を語っていただく、というような感じで考えております。

## ■兵隊時代の思い

眞板 時系列的に伺ったほうが、お答えしやすいかなと思ひまして、開戦以降からのお話でいいんじゃないかと思ひまして、確か宮古島でしたよね。

上原 宮古島。

眞板 やっぱ四五年ですか。昭和二〇年？

上原 『沖繩年鑑』の付録年表を見ながら、四四年にね、宮古島の私の部隊は、他の部隊と合流したんですよ。これ関東軍のね、一七七部隊という部隊名が記録されてますね。

眞板 これ、昔の旧軍って、中隊長とか大隊長との名前を取って、

「島部隊」とか「〇〇隊」とかと、愛称みたいなのがあったようですよ。

上原 これね、混成旅団、独立混成第五九旅団、これに第三二軍、第十八師団となっているね。「とよ部隊」になっていますね。

眞板 三二軍って牛島満中将の部隊じゃないですか。

上原 その配下の下に宮古島に配置すって出ているね。

眞板 三二軍に編入されたってことなんですか。

上原 まあ、同じ沖繩戦線だからね。

あなたのこれにありますように、いつ敗戦になったかということですが。私が怪我をしたのはね、四五年の三月一日なんだ。三月一日に米軍機動部隊の艦載機・グラマンが、宮古島を空襲となっています。そのときに、グラマン戦闘機三機が撃墜された。この時、一機は海軍が落とした、他の二機は暁部隊の特攻隊という陸軍で編成した機関砲隊が落とした。これは、宮古島の沖にいた輸送船からの友撃でということ、これは時の戦記にも載っているはずですよ。私はその戦闘で全身火傷の怪我をして意識不明のまま、何時間か海で漂流してね。海軍に救助された後、宮古の人たちの協力で野戦病院に担ぎ込まれて、今日の私の命があるのです。日本に帰国して以来、宮古に行つて、そのお礼参りに行こうと思うのだけれども、なかなか時間が取れないから。

眞板 ちなみに、野戦病院は宮古のどこにあったんですか？

上原 鏡原小学校。鏡の原の小学校ね。僕は宮古に行つて間もない頃、その学校の近くに部隊が野営していたことがあった。

眞板 宮古だと米軍が進駐してくるのはちよつと後じゃないですか？

上原 米軍は上陸しないで空襲だけだったんだよ。

眞板 しませんでしたか？

上原 上陸しなかったから、私はね、野戦病院の地下壕で蛆虫が湧いていたのだが、今もこうして生きていますよ。

眞板 青酸カリとか持たされていたんですか？

上原 いや、私たちの場合は、まず、米軍との決戦準備が第一で自分で命を絶つなどについては話がなかった。

いちばん最初に与えられた任務はねえ、宮古島現地の新兵を、徴集というのをやってだね。若い兵士たちを、ベニア板で作った小さな舟に爆弾を一トン爆弾を積んで、一人ずつ乗ってですね、アメリカの軍艦が来たら、ぶち当たれっていうことですね。海上特攻隊・暁部隊。朝の暁部隊ですね。暁特攻隊、海上特攻隊って言うんですよ。宮古島のこの若い十七、十八歳くらいの新兵を強制的に徴用して訓練し、特攻要員を組織するということで、宮古の各部隊からその指導要員として下士官を集めたのですね。それを主体にして、宮古島暁部隊・特攻隊を作ったんだ。

だが、まだ新兵も集めていないのに、南下する日本軍最後の輸送船団が、宮古島まで来たけれども、更に南下できないで、宮古沖で停泊しているんです。なにしろ、制空権、制海権はアメリカの手にありましたからね、それは無理な話でしたね。それでも、どうしても南下させようと、軍の上層部は考えていた。間もなく、沖繩戦が始まる直前ですからね。米軍は台湾に上陸するのか、沖繩に上陸するのか、ということでも日本の参謀本部でも大激論になっていたらしい。それで、輸送船は沖繩に上陸するのではなく、まず台湾に上陸させよう。だから、最後の航空用ガソリンを積んで、最後の戦争手段に必要な貴重な物資をどうして台湾戦線まで運ぼうということなんです。どういう態勢を組んでいたかという、船が港につけない場合は、船はどこかの浜か浅瀬に乗り上げてしまい。乗り上げたならば、どうするか。荷降ろし役としての朝鮮人軍夫約百五十名が乗船していたのです。私は何名かの朝鮮の軍夫たちと言葉を交わすことができた。正確な人員は百五十名くらいと聞いたと思う。このような多数の軍夫を連れていた目的は、船がどこかの浜か浅瀬に着いたら、その軍夫がドラム缶

を担ぎ上げてね、陸揚げする。陸に揚げたら、担いで、何十キロでも歩かせて運ぶ運搬道具として、どんな山でもどこでも運べる便利な運搬手段として計画をしていたんだね。しかし、残念ながら、宮古まで来たが、もう南下できず、とうとう撃沈されてしまった。

そこで、考えてみると、この戦闘に参加したのは、いったい、誰の命令だったのか。東京の軍司令部か、とよ部隊の牛島満の命令なのか分からないが、あのベニヤのボートで特攻隊の組織を作り、特訓をさせておいて、輸送船団を護衛せよ、と新任務を命ぜられた。しかし、急いで船に乗ったら、なんと高射機関砲も、まだ据え付け終わらないのに、「敵機動部隊接近しつつあり、戦闘準備せよ！」という緊急命令が伝わって来た。あまりにも急なことなので、二台持って行った機関砲は何か据え付けたものの、その射手はまだ訓練していないので、機関砲を撃てる者は私一人だけだった。それは、兵科の違う各部隊から集まって二、三日しか経っていないのだからね。で、その機関砲っていうのは、アメリカかイギリスのをどこかの戦闘で分捕った最新式もので、十五ミリか十六ミリだったかな。それを追い立てるように、一発ぶつ放してみたら、はじめて、こういうものか、こんな大きな弾丸を沖に向けてね。本当は弾帯をもう一人がこう支えなきゃいけない。もう一人にそれをやらせようと、おまえ弾を送れと、彼は歩兵銃しか撃つたことがないので、なかなかやれない。そうしている間にグラマンが突っ込んできた。いざ、戦闘開始となると、すぐ、弾送りの人も怪我して、船倉に入っちゃってね。とうとう、私一人だけで、弾送りをやりながら、撃ちまくった。甲板上の仲間が倒れて行くのを見てみると、戦争が嫌いだとか嫌だとか反戦って言うってみても、仲間が殺されるんだから、俺があいつを落とさなければ、船がやられてしまう。船の中には、二百名か百五十名か知らないが、朝鮮の軍夫もいるじゃないか、と思うと、私は勇気

が溢れてどんだん撃ちまくった。それで、二機を私が落としたりということらしいんだよ。それが、私が軍隊でひたすら戦争は嫌だと反対してみても、実際、戦闘になつて、仲間が殺されてくると、仲間を殺したあいつに銃を向ける、それもまた、戦争に反対する自分の同胞愛っていうか、それは自ずから、味方と仲間を守つてね、仲間意識というのか、私はどんな（笑） やつだらうと、病院で救われたあと考えたこともあつた。確かに私は戦争には反対したからな。

そんな私を、一一七部隊の自給隊で知っていた、宮古の人たちが私が陸上に上げられたときに、埋めるほうと生きているのと軍が分類し、私は埋めるほうに並べられていたらしい。それを見つけたのが宮古の防衛隊の人たちで、「上原班長は死んでいない」と言つて、彼らが兩戸をはずして、持つてきてね、その兩戸に乗つて、指揮官が「あいつは埋めるほうだ」と言つても、「何を！ 生きているんだ」と言つて走つて、鏡原病院まで浜から約一時間かかるか二時間かかるか、私は分からないけれども、運んでいったんだそうです。

※上原氏が乗船していたのは「大建丸」（一九四四年六月建造の貨物船、総トン数は二千二百二十トン、載貨重量四千五百四十四トン、船主は太平洋海運（株））

眞板 ちなみに、そのころ上原さんの階級は何だったんですか？

上原 伍長です。

眞板 伍長？ じゃあ、下士官なんですね。

上原 だから、下士官だね。病院で助かつて入院していると、なぜ看護婦たちが一所懸命になつてね、なぜ看護をやってくれたかつていうと、私が飛行機を落としたり人だつていうことが、分かっているんだよね。するとね、英雄視してね（笑） 私のために、

もう、朝起きたら、すぐ担架にのせて防空壕に避難させて、彼らが付き添つて、それでも蛆が湧くんですからね。どこに蛆がいたのかなと思つただけども。

そこで、宮古の人たちが、私を助けなさいけないという一心で、上官の命令に反してだね、私を野戦病院に担ぎ込んだので、彼らは上官から大変罵倒されたつていうんですからね。いわゆる、軍令にそむいてだね、上原を病院に運んで、指揮系統に従わないつて言つてね、大目玉を食らつた。これは、私が病院で元気になつてね、見舞いに来た防衛隊の彼らから直接聞いた話なんです。それが、誰なのか名前も思い出せないの。

それで、元気になつて、彼らはなぜ、私を助けたかというところ、軍の自給隊つて言つて、野菜を作つたり、イモを植えたりするね、その仕事を私はやらされたわけですよ。だから、その自給班としてね。班長として。その宮古島の農家の馬を雇つたり、畑を貸してもらつたり、農具を貸してもらつたりして、イモ苗を分けてもらつたり、農事試験場の方の指導を受けたりですね、兵隊を二、三人と共に行つてですね、馬にいっぱいそれを積んできて、それを植えさせてね、そういうときに、日本軍のやり方が、あまりにもひどいから、その人たちは面と向かつてだね、指揮官を罵倒したり（笑） 言うことを聞かない兵隊に対して、今度は私はいけないと言つてほしい。戦争を共に戦う大事な仲間なんだということ、彼らを説得した。それを見ているからね。私と一緒に仕事をした宮古島現地の人たちは、あいつは俺たちの仲間だという意識があつたからこそ、私を死人の山から、死んでいないと、私を匿つて野戦病院に送つてくれた。

眞板 宮古の方とのコミュニケーションは、やつぱり、ウチナーグチ（注・沖縄方言）でなさつていたんですか？

上原 いや、私自身、ウチナーグチは下手ですから……（笑） やまとーグチ（注・標準語）です。だけど、私たちとその共同作

業の中でね、逆に宮古の人たちが、私よりウチナーグチが上手でしてね。逆に私にウチナーグチで言うわけですよ。私は宮古島滞在中にウチナーグチは少し進歩していますね、確実に。

当時、宮古の農民をまるで植民地住民みたいな対応をするほかの部隊の自給隊にはね、馬を貸さないとかの反抗がありました。しかし、私が行くと必ず貸してくれる。そして、借りたら、きれいに洗ってだね、農具も洗って、それで、私は、ほかの兵隊と一緒に返す。そういうようなことで、上原は山原(ヤンバル)の人間だと、彼らは分かっているから「ヤンバル班長」という名前で呼ばれていたんです。

そのように、私と農民たちの関係は極めて仲が良かった。老人たちは私をまるで自分の子供のようによく可愛がってくれました。その結果は、後日、軍から天皇の名によって、私は打ち首を命ぜられたのだが、その罪状の中には、農民に対して、反軍・反国家的宣伝をしたという項目もありますからね。

眞板 病院に入院なさったのは、そうすると、いつぐらいまでになるんですか？

上原 三月一日に怪我して、その夜運ばれているわけですね。朝の一番で船に乗ったから、おそらく九時か十時ごろだと思うんだけど、戦闘はほんの何分間だったかもしれない。私が覚えているのは、このグラマン機がね、低空で飛来して銃撃と共に魚雷を发射してね。船上をぐるっと回ってね。おそらく四、五回くらいかしら。この船を攻撃した二回目ごろには、もう船に魚雷が数発命中してね。ガソリンを積んでいるのだから、たちまちどつと火柱が上がってね。そして、第三回目ぐらいの突入のときには、おそらく船全体は燃えていた。私も燃えていたわけですね。鉄兜をかぶっているから頭だけは免れてね、全身燃えている。真っ赤になつて、「ハッ」どうしたんだと思つたら、目が見えなくなつてしまつて、そして、上を見たら、「ハッ」と、飛行機がまだ飛んでい

る。魚雷が何発か当たったんですかね。その時は全身が「カーッ」と燃えているので、そこで、船に残ったら焼け死にするだけだ。だったら、燃えている海に飛び込めつてわけで、飛び込んだ。飛び込んで、幸いだったのは、私が飛び込んで間もないころ、船は沈没。沈没して、船がこう立つんですよ。その前に船のハッチと言うんですかね、厚さの約五センチくらいしか知らんけど、長さ八メートルか十メートルくらいの大きい板がですね、「バアッ」と目の前に流れてきた。そのとき、それを捕まえようと思つたが、なかなか難しかった。それでも、そのハッチは何としても捕まえようと思つたが、私は、そのとき、出血多量と全身火傷で、体液が流れ出ているので、意識がだんだん朦朧として、ハッチに上りきれないんですよ。その力がまっただくなかつたようですね。それを誰かが、私を後ろから押し上げてね。乗つけてくれた。すると私は、ハッチに乗つかるとすぐダウンしたようだ。

では、私を救ってくれた人はいったい誰だったのだろうか。私は鏡原の野戦病院で、やっと意識を取り戻し、まだ立つて歩けない時だったが、ある日ひとりの下士官が、空襲下にわざわざ私を見舞いに来たことを覚えています。その人は、私と同じように、宮古で新しい海上特攻隊を作ろうと各兵科の部隊から下士官を約二十名くらい集めたうちの一人でした。集まった下士官の所属部隊は、歩兵部隊、それから砲兵、騎兵部隊、工兵部隊など、その他いろんな部隊からね。集まっていた。寄り集まったその下士官っていうのが、だいたい招集兵の下士官だったので、年配は二十七、二十八から、三十何歳代以上の老兵が多数でした。実は私は、この人たちと、二晩か三晩しか生活してないんですよ。だから、四十近い東京出身のほか、ほとんどの人の名前も思い出せない。そこへ、急に任務変更の命令がきて、宮古沖の輸送船団に乗って、それを防衛したんですね。その押し上げたという人は、私が病院にいるとき、一回お見舞いに来てくれたんですよ。

眞板 ほおし、生き残ったんですね。

上原 そう、生き残ってた。その人は、懇々と私に「あんた勇敢な人だねえ。われわれは早めに飛び込んで逃げました」と、こうなんだよ。まだ、燃えてないときなんだね。そう、燃えてないときに飛び込んだ人は助かった。燃えてから私は飛び込んだ。泳ぐ力のない私の前に、たまたま、ハッチが流れてきたのを彼が、私にも取ってくれたんだよ。そういうのは、何分間、いや何秒間かの争いですからね。

その人はね、私は名前、聞いたんだけど、騎兵部隊で富山県の出身の人。「葉売りの富山知っているか」と私に言うから、「知っていますよ」と。「その出身だ」ということで、簡単な身の上話をやって、私はまだ、頭がはつきりしないときだったけどね。そのときは、あまり覚えていない、私なんかが比較できないような、非常に誠実そうな人だったけど。その人はね、こうこうして、押し上げたのは私だよ。そして、何時間か流されてね。三時間か五時間か知らないけれど、流されているところを海軍の舟艇がね、アメリカの機動部隊が引いた後、海へ生き残りを探しに来たんですよ。そのときに、それまで私は、その板に乗つけて（笑）意識不明だから、彼ももう一枚の板に乗ってだね。共に助った。助けられたときに、私のことを同じ船に乗っていた、同じ部隊の機関砲の射手で、仲間と一緒に戦った彼が、「私もその仲間でした」と。「私は彼（上原氏）が飛行機を落としたのを見ました」と。彼が報告したんだね。それで、後で聞くと、陸上では三機撃墜ということを軍は確認したと。一機は陸上の方の海軍の基地から、高射砲でもって撃った、それが当たったんだっていうことで、あとの笑い話なんだけど、海軍が一機も落とさなかったら、申し訳ないから、陸軍が一機分けてやったんだそうだった話があったようですけどね。

それはどうでもいい、私が中国から宮古に来て、宮古から沖縄

を経て数年後にやまとに行つて、やまとでしばらく関西地方を主に、共産党の地下活動をしているときに、どうしても、富山まで行つて、その人を捜そうと思つた。だが、どうしても名前が思い出せない。日本を離れる計画もあったので、とうとう実現しない。もし、その人が健在なら、九十近い方だろうと思う。

別の人なんだけど、その人は私の打ち首処刑騒動のときに、私をかばってくれたね。「上原より、俺を先に斬れえ、先に斬れえ」つてやった、義人またはその侠客といった方が良いかな、その人は上野義雄つて言つてね。この人は私より五歳くらい年上で、初年兵の時から部隊で一緒だから、この人たちは、見方によつては非常に、進歩的といつたら進歩的ね。しかし、その立場というのと、労働者・農民の側に立つた昔気質の非常に正義感の強い右翼的な面もあるが、いざという時は断固として人民の立場に立つような、革命家になれるような進歩的なもんもあつたんだ。なかなか私と気の合つた、気が合つたつていうのは。彼はね、いや二・二六事件とかね、いわゆる陸軍と海軍が決起して、大臣や三井、三菱、住友あたりの財閥の代表をね、倒したように、われわれもやるんだつて言つていたんですよ。彼のその理論的な根拠が、大川周明つて言うんですよ。それから、もう一人はね……。

眞板 陸軍の皇道派だったんですか？

上原 そして、もう一人はね。北一輝。この人は新潟出身ですよ。ね。

眞板 上野義雄さんのお名前は？

上原 「義」「夫」、「雄」ですね。

眞板 「義」「雄」？

上原 「義」「雄」ですね。よしお。私が、今度、日本から外国へ逃げる前に、上野義雄を訪ねた。お礼言わなきゃいけないつていうことで、調べたが、残念ながら目的を達成できなかった。

眞板 この人、横浜の方？

上原 横浜。その私たちの仲間の中には都市出身者も多かったが、他は農村出身のねえ、兵隊でね、何回も召集されたっていう農村で過ごした人たちが、なんか少しでもヒマがあるとね、いろいろな問題を話し合うんだよ。あるとき、彼らは二・二六事件の参加者の某士官のね、思い出話をしていたけどね。だからね、共産主義者とね、同じくらいにね、彼らの意見と相通じるような面があるんだ。ある日の議論で、私が十四、十五歳の時、日本軍に抵抗しようと思ったとかなんかですね。彼らに話をしたんだ。そして「当たり前前だ、おまえたちは、満州で苦勞しているんだから、俺たちは若いときから、労働者・農民の苦勞はよく分かっていたんだ」と。私を反軍事思想と言わないんだ。で、一緒に私に共鳴してくれるんだね。

彼らは、もうだいたい招集兵だから、三十代以上でしよう、上野なんか二十五、二十六歳だったと思う。五、六年くらい兵隊にいますよ。その仲間たちがね、上官に食事などを持って行くのね、当番兵にね、「キミこれやったか」って頭をかまくまねをすると、「やりました」と言うよね。「ちつとも、効いていないじゃないか」と。俺は今度馬のふけをね、めしにかけるんですよ。砲兵隊の大砲を引っ張る馬がいるから、馬のふけを持ってきて、こういうめしを上官に食べさせて下痢させる。下積みの老兵のなかにはね、「まず戦闘が始まったら、第一発目はあいつだ」と、公然と言うんですよ。彼らは私の前ではそういうことを公然と平気でね。私が打ち首の刑になったら、なおさらなんだ。しかし、そのふけめしを食べた隊長など将校たちを私、知っているからね。あまりこう言えないけども、私の打ち首役になった将校もその一人だが、彼はまだ生きているからね。

この経緯はね、あとで話が面白くなるために、ちょっと言っておきますけど。私が中国から帰ってきた。そのころは、珍しい男が中国から帰ってきたということで、新聞ダネにもなったわけ

です。誰もどうして行ったか、誰も分からない。どうして帰ってきたのかも分からない。いまでもそうなんだけれどもね。

打ち首役をやった将校は、中尉か。彼は腕が良いからということで、命ぜられたのか、自分で引き受けたのか、よく分からないけど。彼は学校の先生をやっている。それで、ずうっと、定年になるまで、学校の先生をやったらしいんだけどね。

私が中国から帰って間もなく、「社団法人中国研究所」の方で私は、四年間くらい事務局長と常務理事をやったからね。そのころは、中国研究所っていうのは最新の中国情報を提供する唯一の場所であつたわけです。これは、岩村美千夫・伊藤武雄とかその他いろんな中国関係のジャーナリストや満鉄関係の人たち。で、その前は、浅野義太郎とか慶応大学の教授。この中国研究所っていうのは、最初は戦後すぐに日本共産党が作った研究機関だった、研究所だったんです。私が帰ってくるときは、中国派とソ連派に分かれていて、中国とソ連が対立しているころ。私が帰ってくるなり、私をそこへ引っ張り込んだのが、中国派の先生方なんだ。元満鉄の調査部長をやっていた伊藤武雄とかね、それから、読売の中国派遣特派員その責任者であつた岩村美千夫とか、そういうような人たちの集まりだった。私が帰ってきたころは、週に一回週報『中国週報』というのを出していた。経済問題でね。それから、『中国月報』というのを出していた。『中国年鑑』というのを出して、この三つの出版物を定期刊行物として四年間、私がその事務局長として、ずっと継続して出したんだけど。だいたい月一回くらい、各大学で中国研究をしている専門の先生のほか、日本の対中国貿易と関係のある大手商社の中国室長クラスのね、場合によっては、その中国問題の担当者とか、そういう人たちを集めて、シンポジウムを開いたんですよ。そういうことで、当時は一九七五、七六年ごろはね、中国研究所へ行けば、中国問題は分かると、そこへ集まるのは、全国の各大学の中国問題のい



わゆる教授・研究者、それからアジ研のね、若手の連中。だから、アジ研にたくさんの知り合いがいて、彼等の翻訳したものを「ちよっと手を入れてください」って持ってこられたりね。余談だけでも、そういう手伝いもずいぶんさせられたというようなきだつた。私も東京大学とか東京周辺の各大学がね、学生たちの団体から呼ばれて、よく講演に行ったりしたもんですよ。

そしたら、ある県の教職員組合、学校長会、その学校長会議があつてね。学校長会議、ま、いろいろな団体もそうなんですけど、年間何回かの総会があるのかも知れないけど、そんなときに、いわゆる何か専門知識の人をお招きして、講演を頼むということをよくやってたんですね。私はそのころ、中国研究所だから、そういう活動の時間は、いくらでも取れた。ある県の教員組合、校長会の、校長会の某県の年度大会かで、五百、六百名くらい集まったか、そこで、「中国問題についての講演を是非お願いしたい」と来たんです。そしたら、当の中国研究所の責任者たちは、「新中国とともに、生活してきた研究者だから、日本でこの人（上原氏）の右に出る中国問題を知っている人はおりません。この人にお願ひして欲しい」と。私を推薦したら、その講演の主催者がお願ひをしに来たね、何人かがね。

眞板 いたんですか？

上原 いたんです。これは、まだ書かない方がいい。まだ生きています。呼ばれた私は、そ知らぬ顔で講演をした。その会合ではね、この先生が司会者の一人として特に「うちの部隊と一緒に何年間かね、やってきた先生で、残念なのが終戦のときに、日本に戻らないで、中国で現地除隊をした」ということを彼が、ちゃんとはつきり言ってくれた。その挨拶の中でわざわざ私に対して、「あなたを知っている先生方が何名か参加しております」と、親切に教えてね。

それで、私は中国の建国は、いかに苦難な道を歩いてきたか、

ということと、中国がいまどのように、自分たちの国造りを自分たちの力で推し進めて来たか、ということを含めてだね、講演したんだ。質問事項も多く、とうとう予定の時間を一時間くらいオーバーする大盛会でした。ほいで、あとは、懇親会までもって、特別の講師料もいただいて（笑）

で、私、そのときに、戦争に行った人たちの本当の気持ちをつかたような気がした。私は教育者っていうのは、戦争を起ささないようにね、ご協力お願いしたいと。私なんか、平和のために頑張つて生きておるし、こうしてまだお会いできたけれども、とくに死んでいたはずの人間なんです。ただし、幽霊ではありませんって言つて、笑われた（笑）

そういうことがあつた。そのときに、軍隊のあの規律のきつい軍隊のなかに、私をかばつてね、自分が犠牲になろうとした人たちもいた。だから、戦争が人間の善悪も決定する。こんにちまで私にもいろいろあつて生きている。そういうこともあつて、あんなの問題に戻りませんけどもね。

## ■終戦の日・八月十五日前後

眞板 ええ。

上原 私は、沖繩の宮古島で、さてどうしようか、どこへ帰るか、どこへ行くか、どうせ帰る方法としては、部隊と一緒に帰れないならば、こっちは病院は退院したが、傷も身体もまだ回復してないしね。

眞板 では、玉音放送は病院で聴かれましたか？

上原 玉音放送はね、あつそう、陣地に帰つて、いわゆる、私は陣地に配属されていたから、陣地に帰つてね。そこで、玉音放送があると知っていたけど、私は聴いていない。聴きに行っていない。負けたんだらうっていうことだね。俺はもう解放されたと思つたね。

眞板 八月十五日にはその事実はお知りになった？

上原 はっ？

眞板 八月十五日にご自身で玉音放送を聴いていないにしても、

上原 そのときは、負けたんだ、負けたんだ、その上野が「負けたぞ」(笑) 彼が教えてくれたんだ。それを正確に言えばね、

(年表を示しながら) 沖繩がやられて、私が打ち首を命ぜられたのは、沖繩戦がもうたけなわになってですな。

眞板 という、四月以降ってことですか？

上原 三月の一日ですからね。

眞板 沖繩戦は三月二十六日の慶良間上陸から始まるんですが。

上原 ここにも、沖繩本島の戦況は届いていた。どうせ、沖繩がやられるんなら、こいつを処分した方がいいと言ったことだったと思うのね。怪我をしたのが、三月だから、四、五月？ 四月に上陸しているわけでしょ。

眞板 そうです。四月一日に沖繩本島へ上陸しています。

上原 それから、あの四月末か、五月くらいでしょう。私の打ち首は。まだ、その先だったけど。

眞板 そのころには、もう病院から出てらっしゃったんですか？

上原 そう。病院はむしろ、危険だということで、薬をもらってね、部隊の衛生兵か、自分で包帯を取り替えるとかね。病院は解散してたか、危険な状態だから。いつかはよくわからない。部隊に帰るときには、いわゆる仲間たちが馬を持ってきてね、馬に乗つけられて帰った。だから、まだ歩くことはできなかったんだね。私、そのとき、一番安全な大きな壕の奥に、私を配置して。

終戦を直接聞いて、あるいは聴きに行った。なんか全員じゃなくてね、選ばれて、部隊から何とか小隊とか、なんか何名かずつか、知らないけれど、選んで連れて行ったんじゃないか。誰でも良かっただろうきつと。だけでも、天皇の言葉ってというのは、「ガーガー」しちゃって、何を言っているのか分からなかったと

いうことを聞いたんだ。

眞板 あの、ちよつと前後して申し訳ないんですが、

上原 えっ？

眞板 あの、沖繩戦の組織的な抵抗は六月二十三日の牛島満中将の自決で終わったことになってるんですけども、そういった情報ってというのは、宮古にいて、

上原 宮古では、牛島が司令部を解散する前までは、無電で聴取していますよ。上下関係あるもんね。ほいで、最後の終戦の調印は、宮古の司令官がやったんでしょ。

眞板 あ、そうですか。

上原 司令官いないから。

眞板 確か、降伏文書の調印は、奄美大島に駐屯してた部隊指令だったと思うんですけども。

上原 いや。

眞板 それも、九月に入ってからですね。

上原 あの、とよ部隊。牛島、長たちの指揮官でやっている八重山はね。いやいや宮古はね。(年表を見ながら) 第十方面軍司令官・宮古の第二十八師団に迎撃体制の完備を命じると。牛島満の配下にあつたんですよ。これは、六月の八日ですか。先島集団長(注・第二十八師団長)・納見敏郎中将が嘉手納で無条件降伏に調印とこうなっているね。

※沖繩戦の終結・四五年九月七日、南西諸島の日本軍代表(沖繩守備隊を代表して宮古島から第二十八師団の納見敏郎中将、奄美大島から陸軍代表・高田利貞中将、海軍代表・加藤唯男少将)と米軍の代表(第十軍司令官スチルウェル大將)との間で降伏文書に調印が行なわれ、日本軍は正式に降伏した。

眞板 これは九月ですよ、確か。

上原 これはね、九月の七日。

眞板 そうすると、米軍が進駐してきたのはいつぐらいになるんですか？

上原 えっ？

眞板 やっぱり、アメリカ兵に武装解除されたわけですよ。

上原 うん？

眞板 あの、上原さんが、

上原 これは宮古のね、先ほどの天皇のそれが報告されてね。イギリス軍が、宮古に進駐して武装解除（注・四五年九月二十四日から二十七日）したんですね。アメリカは、沖繩問題にとらわれて、手がいっぱいだから、イギリス軍が何方面から進駐してきたか、知らないけれども、マレーシアかどっかの戦線からね。それが進駐してきたと思うの。敗戦処理に来たんだろね。そんな大部隊ではなかったようだ。宮古島の日本兵は全員、どっかの宮古島の何飛行場か、分らないけども、そこに集められて、そこで、調印式をやっている。全員そろって司令官と一緒にね。それが、終わってから、英軍は沖繩に行ったのか、どうしたか、その先は私にはわからない。おそらくその日で帰ったのか、飛行機で。それはアメリカとの連合作戦であるのだから、一部アメリカ軍も一緒に動いているかもしれない。

眞板 では、収容所とか入れられてないんですか？

上原 え？

眞板 収容所とか？

上原 だから、私、戦争が終わったと分かったから、その日から自由の身になって、なぜかという、どっかの収容所に入れられてね、組織的に東京へ部隊と一緒に引き揚げると、東京でどのような目に遭わされるか分からないと、上野たち友人や仲間が、「おまえ早く逃げたほうがいいよ、おまえ早く離れる」ということを勧めた。仲間たちの情報を基にだね、——収容所に入ったら、

私は、作業もできない。怪我しているから。——前々からちゃんと、準備していた通りにだね、敗戦が分かったら、その日のうちに、住み慣れた洞窟から離れて、上野を初め、私を守ってくれた戦友たちとお別れして、平良港に近い東何とか、東添なんとか、というところのある農家のところへ行きました。その農家は、畑で、イモの栽培をしているわけですね。良い土地ではないが、大きな広い畑を持った人が、イモ畑の近くに掘って立て小屋を作っていて、見張り小屋みたいなのを作っていたわけですね。仲間さんっていう人なんだけどもね。そこからすぐに外間宅の近くに移り、その人のところで、そこで、匿ってもらって、家族みたいに、世話になった。

眞板 では、捕虜にはならなかったんですね。

上原 私はもう、天皇のなんとか声を聞いたという報告を受け、敗戦したのだと分かったんですから。部隊は、その翌日からかな、全員解除だかなんかしてだね、集まって、その調印式に参加した。私は参加していないから知らない。その間に私は、いろいろと自分が逃げ出す準備をしていたからね。農民との関係は良いから、馬も貸してくれて道案内も約束してくれて。俺もこれで親しい戦友たちとお別れだから、さよならの挨拶をすると、「どこ行くんだ」と心配してくれた。私も「どこ行くかわからないよ。ゆっくり考えてみるよ」と。彼らからは「一緒に行こう」と、ずいぶん、誘われたけれどもね。彼らの中には、私と同じ部隊で、苦勞した仲間たちで、大変お世話になった人たちがいた。

とりわけ、十五人ほどは、私と同じ血液型でね、私が怪我をして、地獄の入口でもたもたしているその夜、病院から部隊に通知があったわけね。しかし、私の原隊は分からないから、直接、曉部隊の特攻隊に連絡したが、そこは数日しか所属していない部隊だから、兵隊って言うても、私を知ってるのはそんなにいない。それで、私が、もともと所属していた部隊っていうことで、一七

七部隊だからね。その部隊に対して、ちゃんと病院から連絡があったんでしょね。そしたら、入院した翌日、夜が明けたらね、早朝から、私のために、十何人かがね、順番に輸血をしてくれたそう。ああ、この連中は私の命の恩人ですね。

これはもう、初年兵のころから一緒だったような連中ですね。その連中に、「それではもう、さよならだよ」と。「じゃあ、おまえどうして、生きていくんだ」ってね。彼らは自分の身の回りのもので何か使えるものがあれば、タオル一枚、残った手袋一枚でもいい、持って来てだね、「きつと困るときもあるだろうから」といろいろ心配してくれた。その連中が、どっからか、酒を見つけてきてだね。私の送別会をやってくれた。上野っていうのが、中心になってね。別れ際に彼はこう言った。「もし、おまえ生きてだね、日本に来るようなことがあつたら、必ず俺のところへ訪ねに来て」と、「おまえ、どうせ行くところないだろう」と。私は「いやあ世界は広いんだから、どっかに居場所はあるはずだよ」と応えた。それに、そのころ、沖繩に行けると思ってたが、どうしようかなあ、この島で生活できないんだつたら、しかし、体力はね、回復するまでここに居らなければいけない。その農家のね、お手伝いでもしたらいいし、というようなことで、いろいろ、ま、自分のこれから、どうして、どのような生活で生きていくかっていう問題に直面しながらね、やったけども。そもそも本来、私は非常に楽道家だから、あんまり深刻に考えてなかったよな。なんとかなるだろうと思っていたと思う。

眞板 結局、農家の外間さんという方にお世話になった？

上原 そうそう。

眞板 フルネームを覚えていらつしやいますか？

上原 えっ？

眞板 フルネームを覚えていらつしやいますか？

上原 うーんとね。家に帰らないと、よく分からない。

眞板 場所は何と言つてどこですか？

上原 五年ほど前にね、平良市の東中とかいうので、平良郵便局に電話したんですよ。そしたら不思議なもので、外間さんの息子さん、郵便局の職員としてそこに勤めていた。その息子っていうのは、海軍に行つていてね、私が宮古にいる間に復員して帰ってきた。その人が出て、「お父さんはとくに亡くなったよと。今生きてたら、百を超えているよ」と笑っていた。「あなたは、家にいた信夫さんですか」「ヤンバルの信夫さんですか」って言うて、「宮古に来てくれ」と。こっちは「宮古のご両親へのお礼にお墓参りに行きたい」と言つたら、「早く来てくれ」と言つたんだけれども、留学生問題で忙しくてね。一日だけじゃ行けないだろうけど、一週間くらい時間を作つて、行こうと思つたんだけれども、その時間が作れないまま、時間が経つてだね。やつと、一回、手紙を出したつきり。それから、年一回は電話したり、年賀状のやり取りしたりしている。来年はなんとかしようと考えている。

眞板 傷が癒えるまで、外間さんにずっとお世話になっていたんですか。

上原 そう、宮古を離れるまでね。

眞板 あの、傷が癒えるまでは、

上原 天皇が敗戦を宣告して、その何日後か知らないけど、日英両軍で調印式か何かやった。その時点で私は、部隊から離れていたから、あんた書いている意味での復員は、一九四六年の春、すなわち、宮古を離れた時でしょうね。いやいや、日本軍人としての組織的な復員は、一九四五年の八月、ま、これは戦争が敗戦になったのが八月だから、正式には八月（笑）ですね。

眞板 そうですか。

上原 八月の何日だったか知らないけれども、天皇のその声を聞いた上野たちが、私に「早く逃げた方がいいよ」と勧め、協力し

てくれた。それから、翌年の四六年になると、沖縄に行くことを計画したが、はつきりした日時はよく覚えていない。

眞板 当時、沖縄は米軍統治下にありましたから、上原 もちろん

## ■沖縄本島を目指す

眞板 島ごとの移動ってというのは、基本的には密航船しかなかった？

上原 密航船ですよ。さて、沖縄に帰ったら、私の両親のいずれかでも、生きていたかもしれない。兄弟の誰かが生きていたかもしれないという希望みたいなものがあつたから、まず、どうであろうと、沖縄に行ってみようかと考えた。沖縄に行つてから、親兄弟、親戚もいないとなると、身体の弱っている私は、生きていけないんじゃないかと真剣に考えたこともあつた。しかし、この宮古の場合は、外間さんが、自分の子どものように面倒を見てくれるから、何とか生きては行ける、などいろいろ考えた。もう一つの考えは、宮古から台湾は近いんだから、台湾あたりまで行けば、なんかできるんじゃないだろうか。台湾まで行けば、中国大陸へ渡つてもいいじゃないかと。こういう考えだつたんだね。だけでも、台湾に行く密航船も危険だということで、沖縄の方が台湾より安全だと思つた。

しかし、その後、調べてみたら、宮古から台湾に密航船を出していることが分かつた。それは戦前、宮古の学童たちが台湾に強制疎開しているでしょ、民間人と疎開児童が何百名か行っているのに、戦後、アメリカ軍政府と沖縄民政府は、その人たちの帰還させる義務があるにもかかわらず、その業務を積極的に行わない。宮古の人たちの強い要求があつても、その業務に協力しない。宮古の人たちは、密航船で自分たちで肉親を台湾から帰還させよう

と実行に移し始めていた。人道的には、当たり前のことだと思つてんです。彼らに言わせると、「自分の肉親をね、送つたり迎えたりするために、当たり前のことじゃないか」と。私は人民のたくましさ大いに励まされた。私もじゃあ、なるべく早く沖縄に行つてみようと思つたわけですよ。

その頃はまだ、宮古島から沖縄への密航船も大変なかつた。で、平良町（当時）のそういう方面を仕切っているね、親分みたいな人に（笑）「こういうのことで、俺、宮古で生きていけないんだから、どうせ、どうなるうと、一応、沖縄まで行つて見たいと、それからどうするかは、分からないけれども、カネは少ししかないけど、私が持っているもの全部差し上げるから、私を是非連れて行つてくれ」と頼んだ。「運賃はいくらか」って、聞いたら、大変な金額だつたから、「友人たちと何とか工面するから」と言つたら、「キミみたいな若者は特別だ。俺も男だ」って（笑）安くしてもらつて乗船できた。それから、一週間くらいで、港を出た。三月の何日だったのかなあ、三月になつていたのかなあ、すっかり分からなくなつてしまつた。とにかく、宮古から沖縄本島への一番早い方だつたと思う。そのときには、沖縄では軍政が布かれていた。

眞板 ああ、そうですね。これ、結局、おカネの工面とかどうなさつたんですか？

上原 軍隊でね、郵便貯金っていうのを強制的にさせられた。だけれども宮古島の郵便局でもう取り扱かわらないでしょ。だから現金がない。それで、親しかつた、その戦友たちに、先ほど私、言った、私をいろいろ守つてくれた連中がだね、持つていたおカネを少しずつね。「おい、生きていくのは大変だぞ」と。もちろん、私よりか、みな年上だつたから（笑）それで、無理に私のポケットに押し込んだり、いろいろしたりして、そういうのが少々あつた。それから、この宮古の人たちが同情してくれてだね、私が

沖繩に帰ると言ったら、——私が野戦病院に入院中、自分のニワトリを潰してね、スープを作って持って来たとか、早く体力をつけろと言って、いろいろ励まして私を助けて下さった——そういう人たちも含めて、カンパしてくれたとかいうかね。

眞板 それ、いくらぐらいになったんでしょう？

上原 えっ？

眞板 いくらぐらいになったんでしょう？

上原 そのカネ？ そうだね、四五年八月から働くこともできないで、外間さんの家で居候しているから、皆から、支援してもらって、もともと小さなおカネしかないでしょ。働かなきゃ、そのおカネは減ることはあっても、増えることはないから、残りほどのくらいだったんだらうかね？ おそらく、あの頃のおカネで、何百円かな？ 何十円だったのかな？ 思い出せないね。

眞板 当時のおカネですからね。

上原 何百円か何十円か知らないけど、ま、そういう。

その船長がね、「キミのその傷はどうしたんだ」と聞くので、私はこうこうであつたと長々と説明したんだ。そしたら、船長は大変感動したようで、とうとう、彼は私を英雄視してだね、「平和な時代だったら、二階級進級して、金鷄勲章をもらって、大手を振って歩けたんだらう」って。

眞板 二階級特進だと、曹長ですか。

上原 負傷してから軍曹だから、二回進むと、曹長、准尉かな？ 具体的な計算はしたこともない。

眞板 じゃあ、少尉じゃないですか。

上原 そう、「そういう人がね、なんで打ち首にされなきゃ、いけなかつたんだ」と聞くから、「俺は天皇が始めた侵略戦争に反対したことと沖繩人だからそうされたんだ」と。「あんとき、宮古の人たちの利益を守るぞと思ってやったために、私はね、だから反軍反国家、天皇に不忠な国賊にされたんだ」とその人に言ったら、

ほとんど船賃とらなかつたね。なかなか男気のある人だった(笑)  
眞板 ちなみに、その船主さんって、やっぱり伊良部の方ですか？

上原 えっ？

眞板 船主さん？

上原 船主は、さあ？ あの人は、どこの人だったかな？ 宮古の人かな？ そういう密航だから、お互いの私みたいなものは身分が、こうだとは言うけれど、あの人たちは、自分たちの身分を明かさなない。船名も出さなかつたからね。で、そういうふうにして、乗って、

眞板 船はどこに着いたんですか？

上原 えっ？

眞板 船はどこに着いたんですか？

上原 船はね、これが、いやっ、もう思い出せないんだよ。なんとか馬がついている名前だったんだね。

眞板 馬天港じゃないですか？

上原 中城湾、あれは？

眞板 馬天港は、そうです。

上原 与那原のね

眞板 与那原、ああ。

上原 あ、そうだ、馬天って言った。

眞板 与那原のあつちの方に、

上原 馬天港です。その近くの海上で、薄暗くなってね、大事をとって、安全な船着き場を見つけようと思ったんだね。沖に泊まっていた、そして、あれっ？ 船からは大きな沖繩の島が見えるんだね。どこだろうかな。あつちこつちの山全体が、白くなっているんだよ。「どうしてか」って聞いてみたら、艦砲射撃でね、やられて、岩肌が出ているんだ。「すごいなあ」と思ったんだ。何しろ、沖繩の岩山は石灰岩だからと教えられてね。そして、そ

ういうふうには、驚いたりして、沖繩にやっと思つて来たかと思つて来たからね。

「ウーウーッ」てね、船が近づいて来た。「監視艇だ！」と船員が言うんだ。アメリカの沿岸警備隊っていうのかね、もうこれはだめだと、思つたの。そしたら、私はもう、そのときは表に出ないほうがいいと思つて、船倉に入つていた。口伝えに馬天港にいるらしいということだね、その監視艇に引つ括られたのか、その船について行つたのか、その船は比較的大きかつたから、引つ張つたのかもしれないね。

眞板 ということは、拿捕されたつてことですか？

上原 拿捕された。

眞板 ああ。

上原 密航船だから。馬天の港に、入れたのかな？

眞板 馬天港つて、引揚者が結構多かつたんですよ。

上原 ああ、そうですか。

眞板 あと、それと久場崎の二カ所くらい

上原 じゃあ、南側だから、宮古から来るの一番近いはね。で、そこで、今度はその船着場に連れて行かれて船上で一泊。翌日の朝、乗船者の内、前々から、沖繩本島に住む家族や親類、友人などから手紙をもらつてたりしていた人がいるわけですな。その人たちは、それを見せてだね、「私はこういう家族が、どこそこにおりました」、なんて、説明すると、その連中は、さつと、トラックに乗つけて、連れて行つたんだ。私みたいに手紙などの証明できるものを持たない者は、はつきりとした行く場所が、何もない者なんだね。こうした者が何十名かくらい残された。乗船者は、六十名ぐらいたつたみたいですよ。満杯だもの甲板でも。

で、何人が残された者の内、私は包帯を巻いていますからね。こういうところの傷はむき出しだからね。アメリカ兵は「おまえはなんだ」つて言つて（笑） 「ついて来い」つて、連れて行かれ

たところは、どうもみんなとは、別のところだつた。そこには、先客が何名かいたよ。今日から当分ここで生活するんだということを通訳を通じてね、知らされて。そしたら、ご飯を食べ、朝めしを食べて、アメリカのめしつて、こんなものかと思つたね（笑）

眞板 おいしかったですか？

上原 いやあ、そうでもなかつたけど。変なパンもくれてだね、全部缶詰みたいなもんですよ。冷たいやつだね。パンとちよつとした缶詰を切つたやつを二切れ、三切れずつ食わしてくれた。

そして、当分ここで生活すると言つたので、仕事は掃除をしたり、ゴミを捨てることだつた。ゴミ捨てに行くのはね、一人がお手伝いで運転席に。沖繩人の運転手さんと並んで座る。これが毎日交替で、一人ずつ乗つかつて、運転手さんの手伝いに行くんだ。あ、この手があるんだ、と私はひらめくものがあつた。

私はね、あのゴミの入つたドラム缶の中に入れてね、外に出られると分かつたんだ。その機会を狙つていて、四日目ごろに私は、「今度は俺の番だ」と名乗り出たんだ。そしたら、「おまえ、怪我しているからいいよ」と、みんなかばつてくれるんだ。「いいよ、いいよ」と、「俺はきょう、ちゃんと立派にやつてあげるよ」と。そして、運転手さんに、「きょうの当番、俺だからね」。すると、運転手も「おまえだめだよ。傷あるからね」。「いや、これでも、片手でも、力があるんだよ」と。運転手さんの肩を押すと、「おまえすごいな」つて。「怪我する前は、連隊で相撲は強い方だつたんだぜ」つてうそついでだね（笑） 実際、相撲なんかで育つたから。「よし、じゃあ、おまえ乗れ。早めに帰つて来るから、おまえが怪我しているから、アメリカ人が怪しんでいるから」と注意してくれた。「俺がドラム缶に入ると、ゴミをかぶせてくださいよ」と、手を合わせて頼むと、変な顔をしていた運転手さんは、「よしよし」と、ゴミをかぶせてくれた。彼は、「どこで降ろせばいいの」つて聞くので、「俺は昔の那覇しか知らないが、那

覇の近くまで行けないか、なるべく那覇に近い方がいいな」と。「ヤンバルに行くのには、どういふふうに行くのか分からないから、那覇まで行けばだね、ウチナンチュは多いだろうから、頼む」と。ということ、彼は、途中で、そのドラム缶のゴミを捨てて、空のドラム缶を積んで、私を連れて行った。そして、彼は「ここからは与那原から近いですよ」と。それで、与那原まで連れて行ってくれた。与那原の町はまだ、テント小屋だけでね。その近くで降ろしてね、「おまえ、沖縄知らないのに大変だぞ」と。その運転手さんは言うわけですよ。彼はタバコを二個くれてね。私は「タバコ吸わないのに、いいよ」と言ったらね。「タバコあったらね、人にものを頼むのにな、これは効果的だぞ」と教えてくれた。その運転手さんは三十代くらいだったね。

眞板 ほお。

上原 タバコをもらってね。部落へ行くと、小さいテント小屋があった。その中を覗くと、老婦人ひとり子どもふたりがいた。中に入れてくれたので、私は「こうこうして、宮古島から帰って来たんだけど、寝るところがない。ヤンバルに行くには、車にどこで乗ったら、行けるのかも知らない」と申し上げると、「あなたは与那原に知った人はいないのか」と言うからね。考えたら、「昔ね、大田っていう家があつてねえ、うちのおじいさんの知り合いが居て、私、子どものときに一回、ここへ連れて来られた覚えがあります」と言ったら、「では、その与那原のどこだったか」と言うから、「それは、分からない」。ぜんぜん、様子が変わっているからね。「じゃあ、今晚寝るところないんなら、私たちと一緒にということはどうぞ」と泊めてもらうことになった。四名くらいの家族で、おばあさんの他、生き残った人たちがここに集まっていたんだね。そしたら、土間なんだよ。土間にシートを敷いて、「こんなところだけでも、ひと晩、ふた晩いいよ」と。そこへ泊まって。で、泊めてくれて、息子がトラッ

クのね、運転手をしていた。「戦果」があつたんですよ。

眞板 (笑)

上原 だからね、戦果があつてね、そうしたらね、そのおばあさんの説明によると、おじいさんは戦争で死んだ。子どもも何人か死んだって話をしていたら、その息子が帰ってきた。「少し戦果がある」と言うからね、何だろうかと思つたら、そして、紙袋にね、これくらいの紙袋の包みを出したが、「やあ、お客さんがあるんだつたら、もつと持ってきて来ればよかった。明日は、もつとたくさん持つて来てやる」と。それでね、私はお礼を言つて、ゴミ捨ての運転手から頂いたタバコを二個あげた。「これはね、並なんだ、まずいんだよ」と。俺はこういうもんだよと、アメリカ・タバコの上等みたいなやつをだね、吸つていた。そこで、何日間かいて、彼は車関係の仲間がいて、どうすれば、北部のほうへ行けるかと、彼がいろいろ調べてくれてね。那覇の軍港には、アメリカの船が着く、そのアメリカの船から、荷物を積み降ろすために、そこにはたくさんの軍作業員がいる。全島から軍作業員を運ぶために、たくさんトラックが動いているから、運転手の知っているやつに頼んで、その場所を覚えてもらつて、ヤンバルから来た車をね、捕まえることができるかもしれない、という話を聞いて、あ、これはもう天の助けだつてね。

で、私は「じゃあ」とお礼を言つて、ヤンバル方面のトラックを探すことにした。ヤンバルの同郷だという軍作業員に相談したら、「どうなるかわからないけれども」と。同情してくれた。で、協力することになったその人は、軍作業の人で、——その頃の軍作業員っていうのは、各村ごとに人数の割り当てがあつて、健康でまじめな働き者を集めたようだ。——彼は、ヤンバルに行く車は、何時に那覇を出るということを教えてくれてね。そのころ、私は宮古から着てきた服から、後ろにPWつて書かれた服に着替えさせられていたね。馬天か。馬天でもう、着替えさせられ



ていたと思うね。

眞板 軍服ですか？

上原 いや、下の方は軍服のズボンだ。上のほうは、軍服を着て歩いていると困るだろうと、宮古の人たちがね、誰か麻で作ったね、大変古い洋服をくれたんです。それを馬天の収容所で着ていたのかな？ まだ寒かったみたいなきがしましたよ。

眞板 沖縄で寒かったっていうと、一、二月じゃないですか？

上原 あ、そこらあたりは、よくはつきりしないんだけどね。さて、与那原でお世話になった恩人の家で何日かいたかな。四日か五日くらい、いたかもしれないね。私は彼らを通じて、やはりウチナンチュだ！ 兄弟だ！ と非常に感動したな。

眞板 お名前とかご記憶にありますか。

上原 いや、その後、その人たちのところへ、私が、沖縄で政治活動を始めた頃にね。与那原で、講演などあるときにね、一所懸命、捜したの。そしたら、この人たちはね、別のところへ移って行ったことが分かったの。その人たちは、もともとその土地の人じゃないんだ。少し自由に移動できるようになったので、那覇かどっかへ引越したというんだね。だから、その人を、とうとう訪ねることができなかった。名前は大城なんとかと言ったと、覚えていたんだけど。

お陰で、私は順調にヤンバルの奥に帰ってみると、幸いに両親が生きていたんだよ。家も親父の努力で、人が住めるようになっていたんだよ。

## ■奥に帰還し、青年会を組織

眞板 奥に着いたのはどのくらいになるのか、やっぱり分かんないですか？

上原 えっ？

眞板 奥に着いたのは？

上原 奥に着いた？

眞板 四六年の春ぐらいですか？

上原 四六年のね、春、春だな。これもね、四六年の春だ。宮古島から帰ったのが、だいたい春だから、そこで、考えてみると、宮古から奥まで、一週間から二週間くらいだったのかね。最初、考えていたより、意外と早く帰っているから。春だね。何月だったのか。よく分からないの。

眞板 いえ、いえ、大丈夫です。

上原 考えてみると、私が奥に帰ったのは、何月の？ とにかく、三月以降だったんだろうと思います。私は奥に帰ってすぐに、感じたことは、こんな状態では大変だと思った。私の年頃だと、軍隊か、防衛隊かなんかで生き残った連中っていうのはね、もう、人生に希望がもてないとか、それか、なんかあるとね、自分の仲間が戦場で殺されたり、死ぬのを目の前で見たりして、それこそ地獄絵を見るような体験をしているから、想像を絶するような体験から、精神的なショックを受けているからね。気の弱い人間っていうのは、夜も眠れないとか、というような状態の連中がいるんですよ。このような気の弱い人々は、どうせまた戦争があったらおしまいなんだから、というようなやけっぱちだね。深刻に考えているものも多かったね。そこで、私は生き残った若い人たちを集めてね、「青年団」を作った。その青年団を組織して、その根幹になる連中には夜学をもったんですよ。

眞板 夜学？

上原 夜学を作った。

眞板 これは奥ですか？

上原 奥で。その頃になつてくると、軍隊や台湾、やまもとに行っていた若い人たちの生き残りも帰ってきた。

眞板 これ、何名くらいですか？

上原 そうね、私の子どもの頃の奥の部落には、一千人くらいの人口がいたんだけど、生きて帰ってきた者は、十八から二十四歳くらいで、二十名ぐらいでしたね。私の親戚だけでも、士官学校や海軍航空隊に行った者、海兵学校に行ったものも含めて、十人ほど死んでしまった。その生き残った人たちは、戦争で経験した痛手っていうのは、計り知れない大変大きな打撃を受けていたんですね。

このような現状の下、私が考えたことは、俺だって万難を排して生き残れたんだぞと。おまえたちは生き残ったってことだけでも幸せなんだと。生き残った仲間、新しい沖繩を築かなきゃいけないんだと。もう一回やり直そうじゃないか、ということ、まず、青年文庫っていうのを作って、本をどこからか見つけ出し、手に入る書籍を全部集めよう。高台に青年文庫を作り、そこを母体として、文化活動や会議をやり、夜学校も開いた。私が沖繩の現状分析を受け持ち、なぜ日本は戦争を起こしたのか、なぜその結果、沖繩はこんなひどい目に遭ったか、というような問題を長々と私がやると、——一晩中もやり続けたこともあるんですよ

——そういう中で、ちょうど、東京のあはれは、大学を出た上原和夫ともうひとり宮城貢が帰ってきたのがいて、二人の協力で、せめて中学校か高校初めくらいのね、中学くらいのね、どこの職場に行っても常識的に通用するようにと、彼ら二人が、数学や文化、一般的な社会常識などを教えてもらったね。

台湾から帰って来た上原力三は、私と同じ年なんだけど、彼はね、電気の問題については、もう、みんなが「技師、技師」って言うくらいにね。優れた技術を持っていた。それがアメリカの軍作業に行つて、電気関係の部品を集めて、発電機を作り、昔から電灯のともったことがない奥で、初めて電灯をつけたよね。アメリカ軍が廃棄した電線や拡声器、マイクなどを持ってきてだね。

「放送局」を作り、朝一番に、これを活用して、「青年よ！ 起き

ろっ！」てね、号令をかけさせる。そして、奥郵便局長の金城親昌・ツル老夫婦は、人格者で、奥の人たちから尊敬されていた方々。そのお二人が、毎朝、朝一番に沖繩の何とかという歌を青年文庫から三味線でやるんですよ。奥の高台に神社があつて、そこに、拡声器をつけてですね、そのとき、おじいさん、おばあさんは、六十か七十だったんだらうな。お二人は大変お元気で、毎朝青年文庫の「放送局」に出かけて三味線を弾いて歌うんです。十分くらいだったかなあ。それから奥の朝は、始まるというふうになつたんですよ。

そして、青年たちの文化活動も盛大になりだしてね、それで、青年団も作つた。青年団を作つてね、隣の部落の辺土、宜名真といるところがあるけど、そこにも呼びかけてね。青年団を作らせた。そして、私は辺土名まで行つて、国頭村青年会の組織化に協力した。そのころなんだろうね。名護に行ったのも。名護に基地を引き受けますと言つた市長は、比嘉なんかとこいいましたかな？

眞板 比嘉鉄夫

上原 鉄夫か。私は、いまから四年くらい前か、名護で徳球の記念碑を立てたんだね。除幕式があり、私も参加したんだ。

眞板 鉄也でした。

上原 その比嘉鉄也が、「久しぶりです」と言いながら、「元市長の比嘉です。上原さん、お元気でございましたか」と。「いや、私の顔よく見てください」と。なにしろ、五十、六十年経っているからね。分からないわな。「思い出せない」と言つたら、そしてたらね、「あんたが、名護で、講演会やる時は、私は一番前に座つていたんですよ。あの比嘉です」って言うんだ。その当時、名護の主な同志は、照屋規太郎、宮里とかね、元気の良い人たちが、一緒に、活動したんですよ。その照屋さんっていうのは、医者でね。「そのとき私（注・比嘉鉄也）は、まだ高校二年生とか三年

生くらいでした。そして、上原さんたちの講演会に、私は感動してね、よしつ沖繩をなんとかしてやろうと、青年部に飛び込んでね。名護の発展のために、活動しました。あなたのお陰です(笑)」  
と思いを語ってくれました。

## ■部落内での家畜飼育問題

眞板 あの前後して恐縮なんですけど、もう、奥に帰られて、すぐこういう活動を始められたんですか？

上原 そう。二、三週間くらいしてから始めた。ということはない、私が、放っておけないと思ったのは、私たちの家は農家で、戦前はね、牛一頭、それから、豚何頭か飼い、その他に養蚕もやっていたんです。これは、どうして豚を飼うかというと、自家用食肉と肥料を作るため。そのため、ヤンバルで独立した農家を経営するには、どうしても家畜の飼育は必要だと。なのに、聞くところによると、アメリカは、屋敷内や部落内で家畜を飼育することを許さないと、農家の皆さんから知らされた。部落内で、もちろん、その頃は、まだ、家畜は、ほとんど、いないわけですよ。しかし、離島に親しい友人がいる農家では、部落から数百メートル離れた、目立たないところで、まるで「隠し飼い」みたいにして飼っている。私はそれをまず見てだね。「どうして、こんな飼育の仕方をするんだ」と部落の長老たちに聞いてみたら、「軍の命令によって、——公衆衛生部というところがあった——部落内で家畜を飼育することが禁止されているんだ。違反者は厳罰に処する」という軍命令です」と。「じゃあ、それを仕切っているのは、いったい民政府のどこだ」と聞いたら、「辺土名地区公衆衛生部だ」と言うんだ。農民運動の第一歩は、ここから始まったんですよ。

それで、私は家畜はいま、どのようにすれば、手に入るか、早

速、調査したら、離島から知り合いの協力を得て、船を仕立てて行って、少数が入ってくるけれども、難しいらしいことが分かった。だから、みんな飼いたいけれどもね。戦前沖繩では、お正月に豚一頭は、潰したんでしようが、今は飼いたくても飼えない。そのための飼う場所がないからだ。特に年取った人しか、残っていないのだからね。豚を飼っているおばさんに聞くと、豚のえさを家で温めてね、豚を喜ばせてやろうと思つて、担いでいくと、そこに行くまでに、すっかり冷えてしまつて、豚が喜ばないと。だから、家族の一員でもある、豚とのつながりつていうのはね、断絶してしまつたんだね。

それで、知っている人たちが、「上原、こういう問題を解決しないとな、アメリカがいくら、自給自足だと怒鳴つても、また、おいしくない缶詰をね、高い値段で売りつけてもだね、我々はどうしようもないんだよ」と言うことが分かった。

早速、国頭村役場へ行つて、アメリカがどういう布令・布告を出しているのか、調べたんだね。その件で、二回くらい役場に通つた後、辺土名地区公衆衛生部長の宮里部長のところへも行つて、何回か議論をしたり、お願いしたりしてたんだ。すると、だんだん、民政府についても初歩的な知識を得てきたので、石川の沖繩民政府に直談判、または意見具申をすることを決意したんですよ。

眞板 移動とかは、どうなつたんですか？

上原 えっ？

眞板 移動は、奥からじゃあ大変ですよ。

上原 移動？ 辺土名までは、歩くんですよ。普通は

眞板 半日かかりませんか？

上原 急いでも四時間くらいかかる。しかし、「アメリカ文明」の恩恵に預かるうと欲張れば、朝、三時ごろ、起きてね、奥の山を越えてだね、宜名真の先まで行くとね、先ほど言つた那覇港の軍用船の荷物降ろしの軍夫が、六時ごろに出発するんだ。それを

めがけて行っても、一分でも遅れるとダメだった。しかも、石川市に入るのには、東海岸は封鎖されていたので、西海岸からしか入れない。仲泊っていうところからね。

眞板 遺跡が出てきたところですね。

上原 しかも、仲泊から、約二キロのところは米軍の関所があって、厳戒体制で警備していた。軍作業関係者以外は、人を絶対に通行さないの。そこは私も通れないから、その関所の一千メートル手前で、トラックを降ろしてもらって、山の中へ入る。山の中へ入って、恩納岳の山麓をくぐってだね、石川に入るんだ。石川に入れば、石川から今度南下するのはやさしいから。そういうことを繰り返した。しかし、世の中は狭いもので、私が何回かの山越えのとき、偶然に発見したのだが、のちに国会議員になった國場幸昌さんだった。それ以来、彼とは意気投合する機会が多かった。「類は友を呼ぶ」ということか。

眞板 はい、はい。

上原 奥における初歩的な政治活動は、始まったけれども、軍・民両政府に対する、具体的な政治活動は、まず、家畜を部落内で飼わせるとの要望から、段階的に屋敷内に戻せっていうことなんだ。私かね、こう演説会で明らかにしたわけなんです。そして、部落の先輩たちはじめ、ほとんどの人が、「よくやってくれた」と喜んだ。このことは、私への大きな励みだった。そして、「自分たちで養った豚を食べてこそ、新沖縄を建設する力が出てくるんだ」と。実際、私も、「それぐらいの勇気がないと、沖縄はアメリカの植民地になり、われわれは奴隷民族になるのだ」と呼びかけたんだ。

眞板 この演説はどこで？

上原 えっ？

眞板 この演説はどこで？

上原 最初に奥で。同じ内容の講演会は、国頭全村の各小中学校

でもやった。

眞板 奥で？

上原 特に奥では、部落民を集めて、ほとんど一週間に一回はやってた。夜はヒマだから、みんな退屈だからさ。いっぱい集まったね。青年会が、いつ、何時から演説会をやりますとスピーチで流してね。力三の拡声器は、威力を発揮したね。

眞板 これはやつぱり、神社でやってたんですか？ 神社の境内で？

上原 神社は焼けてしまっていたから、境内にスピーカーがひとつ。奥共同店の上にもひとつ。集会は公会堂と言ってもね、茅葺なんだよ。そこで、青年会の上原の演説会って言ったら、もういっぱいになるんだよ。青年も年寄りも、みんな来る。

眞板 だいたい、どのくらい入りました？

上原 えっ？

眞板 どのくらい、いましたか？

上原 はっきりしたのは分からないけど、部落の仕事のない人は、だいたいみんな集まったんじゃないですかね。

眞板 部落っていうと、一千名ぐらい集まったんですか？

上原 いやいや、戦争で亡くなった人も二百人くらいいるので、そんなに多くはない。子どもたちも参加して、まあ、四五百名くらいで、だいたい満杯だった。そういうことをやりながら、私は、村長や村の主だった人たちのところへ行って、部落内での家畜飼育の問題を話し合っていました。村長はじめ、みな「我々も同感ですけども、それを言ったら大変ですからね。米軍政府の命令ですから」と。それで、地区の公衆衛生担当の宮里さんに会って、懇談したんだ。宮里さんは「あんたの言うことは道理があります。私も同感ですよ。農民も喜ぶでしょう。ただし、これは米軍政府と民政府からの命令ですから、もし、この運動を進めると、軍令違反で責任者は逮捕されるかも知れません。米軍ですから銃

殺されるかもしれませんよ」と心配してくれました。そして、民政府の中に、公衆衛生部というのがある、その部長は、大宜味朝計っていうんだと教えてくれました。では、民政府の所在地を尋ねると、「石川の近くの山の上のなんと言った村に民政府がある」と言うので、「じゃあ、二人で、一緒にお願いしに行こうじゃないか」と申し上げると、「それは、私の権限外のことだから、とても協力できない」と断られてしまった。それでも、いろいろと相談に乗ってくれましたね。私は、「米軍政府も民政府も、沖縄住民に対して、自給自足せよって命令や指令を出して、黙っていいのか」と言ったら、「どうしようもないですよ」と。「それじゃ、「私が一人でやってみます」と。

そういうことでね、私、奥に帰ってきて、村の若い人たちにね、私の最近の調査状況と村・地区の行政責任者との闘争結果と経緯を報告したんだ。そしたら、役員たちは、「危ないから、止めたほうがいいな」(笑) と少し尻込みしたのもいたが、しかし「信夫がやれるなら、やれよ」と励まされ、引き続き努力したわけです。私はみなに「あんたたちは、もっと、自分たちで、自給可能な自力更生の体制を強化しよう」と話し合った。奥には昔、自力更生と子どもたちに、教えていた。誰が書いたか知らないけれど、戦前「自力更生」という額もあったぞうだ。

古老の話によると、石黒農林大臣という方がね、奥の部落は、非常に自力更生精神が旺盛だということだね、大臣賞として、その額をもらったと言うんだ。その額は、部落のどっかに飾られていた。僕にもどこかで、そのような話を聞いた思い出があったからね。農林省もね、奥のその積極的な農村振興活動を自力更生って言って、表彰したんでしょうな。具体的には、茶園などによる農村経営は、農村経済建設の一定の成果で、全国的にも有名になったことがあったらしいんだ。

で、そういう先輩たちの業績をね、ちゃんと位置づけ、それを誇りに、我々はそのアメリカの言うままに脅されたからと、そのまま「ハイッ」って、引つ込むわけにはいかないと激励したら、みんなはまた元気を盛り返してだね。最後まで一致団結して頑張ろうということになった。私はこの軍からの非常識な要求に対して、奥の人たちは、まず、農業生産体制で、合理的な自給体制を組んで、自分たちで作ったものを自分たちで食べるという「自給自食」を、できるようにならなければね、アメリカの脅しにすぐ、参ってしまうと考えたんだ。これは、いわゆる沖縄の経済復興の根本なんだから、一歩も譲ることはできないんだと主張したわけなんだ。「どうだみんな、米軍のこの肉の缶詰を食ったことがあったか」と空き缶を見せながら、「このアメリカの缶詰の肉と自分の手で飼育した豚肉とどっちがおいしいんだ」と私が聞いたからね。みんながね、「自分たちが飼育した新鮮な肉の方が、当然おいしい。早く自分たちで飼育した豚肉が食べたい」とそれぞれが語っていたものですよ。このアメリカの缶詰はね、二キロくらいあったのかなあ。

※石黒忠篤…第二次近衛内閣で農林大臣(一九四〇年七月二十四日から四一年六月十日在任)、鈴木貫太郎内閣で農商大臣(一九四五年四月七日から同年八月十七日在任)をそれぞれ歴任。

眞板 大きいですね。

上原 大きい。これくらいか、まずは量の問題ではなく、米軍の缶詰の十分の一でもいいから、自分たちで飼った生肉の方が、おいしいんだという結論になったんだ。

では、公衆衛生部長に提出する書類は、どう書こうかとみんなで考えようと、「申請書」ってことにするのか、「申請書」にするのか、と相談の結果、これは農民全体の意見だが、ことを荒立て

て米軍が、弾圧するかも、という意見もあったので、私は私個人の意見ということだね、「一塊の肉」って書いたんだよ。一塊の肉の尊さっていうのは、部落の農民たちは、このアメリカの缶詰の肉よりも、生の一塊の肉、自分たちが飼育した家畜の肉の方が、欲しいと言っている。その新鮮な肉を食べられたら、沖縄人はもっと元気が出て、戦後復興速度は倍加するだろうと、強調したんだ。

そのほかにね、日本では昔から家畜はね、全国どこでも、農村では家族の一員として扱ってきた。それは日本だけではない。アジア諸国の農業成立の歴史から見てもそうだ。中国で、少年時代から私が見た限り、中国の多くの農村では、まさに家畜はその一家の家族の一員としてね、飼われて可愛がられている。なのに、アメリカ軍は、勝手に沖縄から家畜を追い出そうとしている。軍政府は戦後、沖縄の自力による復興を真剣に考えていないのだ。実に、けしからんという意味のことをね、わら半紙に二枚か三枚に書いた。それを持ってね、石川に乗り込んで行った。

そして、公衆衛生部長の大宜味朝計さんに会った。朝早く行くのと、民政府の役人たちが、いろいろ、ああだこうだと言っていて、私の話を聞くとうもしない。誰も相手にしないんだ。こんな米軍の古着を着た、おかしい男を入れようとしなわけだね。私は、彼らに「重要な沖縄復興についての意見書を持ってきたんだ」「じゃあ、どんなもんか」って言うからね。「担当者しか見せられない、重要文書で、公衆衛生部長・大宜味朝計先生宛だ」と言うのと、相手は、びっくりしてだね。「キミは公衆衛生部長を知っているのか」と言うので、私は「ちゃんと、関係方面から紹介を受けてきたんだ」と、ホラも吹いたんだね。そしたら、すっかり、態度が良くなって、部長室へ案内してくれたんだ。大きな部屋には、大宜味朝計が待っていて、「キミは誰だ。何の用だ」と言うんだ。いやいや横柄な言葉で、彼はそういう人間だったんだね。

あとで、分かったんだだけどね。私は立ったまま、「ヤンバルの農民たちは、自分が飼った豚肉の方が、おいしいし栄養がたっぷりで、沖縄復興の力はこのから出るんだ。家畜は部落内や屋敷内で飼育させて下さいとお願いに来たのだ」と申し上げたんだ。「奥の、ヤンバルから、農民を代表して来ているんだ」と大きな声で言った。部長は「どこの農民か」と聞くので、「私は国頭村だ。大宜味村も東村も応援すると言っている。辺土名地区全部が、私を支持している」と答えた。彼は私の顔をまじまじと見て、「まあ、座んなさい」、それで、「なんだそれ」、私の顔を見ながら書類を受け取って、書面を見ながら、「うん。そうか、そうだな」ってひとこと言っていて、「誰が、俺のこと教えたんだ」って言うから、「辺土名地区公衆衛生部長さんだ」「そうか、その人、知っているのか」って言うから、私は「よく知っています、彼はこの問題について、立场上、石川へは一緒にいけないから、キミ一人で行ってくれて、だから、彼も含めて辺土名地区農民の私は代理で来たんだ」って言ったからね。ああいう連中にははったりが利くんだな。「しばらく俺が預かっておく」と言っていて、握手したもののね。

眞板 では、先生は、お一人で行かれたんですか？

上原 一人で行ったんだ。当時のことから、辺土名地区部長も、心で理解していても、私みたいな若者とは行動を共にできなかったんですよ。下手をすれば、軍命違反に問われるかも知れないことでしたからね。その頃はまた、山城善光も知らないときだからね。そうだ、山城善光はまだ、帰っていないところだからね。

眞板 奥の青年団では、特に、上原さん、リーダーお一人で、他にサポートするような副リーダーみたいな……

上原 それはね、宮城貢、上原力三、与那城定三郎、宮城親雄などが協力してくれた。特に、私の力の源泉は、宮城親榮さん、上原直帯さんなど、部落の大先輩たちの信頼と支持だった。

眞板 りきぞうって、ちからに

上原 ちからの「力」に漢数字の「三」。この力三っていうのは、台湾からね、引き揚げてきた、技術関係、電気や機械に詳しい男なんだ。

眞板 ああ、電気技師。

上原 そうそう。いやー、そのときの、軍の命令と指示というのは、いかに怖ろしいものであったかかっていうことはね、こういう例を挙げると、分ると思うね。

眞板 結局、それで、家畜飼えるようになったんですか？

上原 そうだ。大宜味部長はね、「私は、キミの意見に同感だ。農民の心をよく分かっているんだ」と言っていたんだからね。彼も、どっかの農村出身なんですな。私が子どものときと同じように、戦前の沖繩の農村の生活を、よく見て知っているわけです。具体的な話になって、部長は真顔になってね、「しかし、これはね、軍の厳しい命令だから、これは守らなきゃいけないから、しばらくね、俺に預けてくれないか」と言ってる。この「一塊の肉」の意見書を彼は受け取ったよ。

そして、私が民主同盟で活動しているころだね。山城善光と一緒に、何回か部長と会う機会があったよ。山城善光も彼を知っているんだ。あとでね。「いや、なんで、信夫はこの部長を知っているのか」と言うから、「いや、私が彼に大事なお願いごとをして、知り合っただ」とある日、大笑いしたこともありましたよ。その後、部長の努力と決断で、屋敷内や敷地内でも、「飼ってよろしい」ということになった。

眞板 ほう、良かったですね。ちなみに、この出来事はだいたいいつぐらいの話ですか？

上原 これはね、四六年の四、五月ぐらいじゃないかな。

眞板 じゃあ、(奥に) 帰って本当にすぐなんですね。

上原 すぐなんです。なにしろ、沖繩農業の最重要問題のひとつ

ですからね。それから、一〜二ヶ月くらいしてかね、部落から離れた何キロっていうようなことではなく、家から離れたところで、公衆衛生に反しないところで、ということになる。部落内で家畜を飼えるようになった。これは軍命令を絶対化するというわけではなくて、一応、地方の公衆衛生部長さんたちの裁量で、行える範囲内で、軍命令の訂正というよりも、家畜飼育についての改正というような条項でね、伝達されたと思う。四月か五月に、奥の有志が、船を仕立てて、伊平屋島に子豚を買いに行くので、私も、連れて行かれたことがある。だから、みんな、「信夫のお陰で、豚が飼える」って喜んでた(笑)

眞板 ちなみに、この子豚は何頭くらい買い付けたんですか？

上原 買ってきたのは、みんな自分の豚を一頭か、小さな子豚を、小さな舟艇だからね。小さな豚を一頭くらい買って帰った。なかには友人の分として三頭買ったのもいたかな。私は一頭持って帰ったからね、うちの母、喜んでね。しばらくしたら、四、五頭くらいにすぐ増えた(笑)

そしたらね、私はそのころになると、大変忙しくなった。奥の青年の文化活動と同時に、国頭村全域で青年活動を展開した。先ほど言った、名護の徳田球一記念碑の除幕式に参加したとき、比嘉さんが言うには、私が国頭村の青年団の代表として、名護で討論会をしたことがあるって言うんだ。私は思い出せないんだ。「あんたが団長だった」ってね、「軍政府を批判してだね、アメリカが嫌って言ったのを覚えています。私の記憶間違えありません」って言うんだから。国頭郡の範囲で活動していたんだらうな。

眞板 当時、大変な時期ですから、何かめしを食べるために、何か仕事であるとか、しなくても済んだんですか？

上原 結局、奥でいる限り、奥から離れない限り、まだ農業生産の大部分が復活していなかったけれども、めし食うのは困らないから。私の家も、食うには困らない家庭だったから。もし、仕事

があるとするれば、それは100%民主同盟の活動です。

眞板 じゃあ、裕福な？

上原 えっ？

眞板 裕福な？

上原 いや、裕福というか、みんなもう米軍の払い下げ。あのね、その『沖縄の証言』の中に、そのころの写真がある。「懇談会」をやった後かな。

眞板 あ、いますね。

上原 これが私だ。これが桑江朝幸。これは仲宗根源和。これ山城善光。これが宮城無々。これが会計部長をやった添石。

注添石良恒氏は資金部長（『荒野の火』山城善光著）

眞板 スーツ着ている人、一人しかいませんね。

上原 これにあるかなあ。これにも写真があるなあ。これないね。

こんな軍服を着ている。アメリカ軍の。背広着ているのは……

眞板 二人だけですものね。青年団って、結局、何人くらいいたんですか？

上原 えっ？

眞板 それは、そんなに組織としてかっちり固まったものでもなかったんですか？

上原 何が？

眞板 青年団？

上原 青年団っていうのは、戦中を生き残った、当時、十八くらいから二十五歳くらいのそれぞれ自分の生きること、食うことで、精一杯に生きている人間だから、昼間働いているけれども、夜はヒマだから、若い者はみんな集まって、いろいろ話し合う中で、組織化を考えていたと思う。ほとんど、毎日って言うていくらい、最初は集まっていた。だんだん落ち着いてきたら、毎一週間

一回くらい討論会や座談会をやったりした。ただし、朝の毎日の行事としては、先ほど言ったようにいつの間にか、力三くんが作った「文化施設」を利用してだね、朝の一番から雨が降らない限り、その郵便局長の三味線と挨拶、そういうことをやった。青年団に参加していたのは、三十人くらいだったと思う。

そのころになると、組織もがっしりしてきたので、私は今度は、活動を部落以外にもね、ずうっと、東海岸の楚州や安田、安波なども、だいたい月一回くらいは講演に行っておりますよ。その青年というよりは、部落民全部集めてだね。そういう啓蒙活動をしていた。

眞板 じゃあ、ほとんど国頭村の部落、全部じゃないですか？

上原 全部。だから、国頭村のどこへ行っても、食うには困らない。「晩飯は、まだか？」「俺の家に来い」。「今晚、寝るところあるか？」と言うと「ない」って応えると、「俺の家に来いっ」。そういう調子だった。だから、国頭村の人たちは、ほとんど、全村がね、私のことをよく知っていた。そういう基礎固めをしているときに、山城善光がだね、帰ってきた。彼は四六年の十二月に帰っていますね。だから、私の方が何ヶ月か前に帰っているわけさ。彼が帰ってくる前に、私はもうすでに国頭村内においては、ひとつの活動体系を作っていた。

## ■山城善光との出会い

眞板 あの、善光さんはどういう位置づけの方なんですか？

上原 えっ？

眞板 あの、善光さんはどういう位置づけになるんですか？

上原 どういう人？

眞板 内地から引き揚げて来られるわけですよ。

上原 この中（『荒野の火』）に、自分で自分の生い立ちを書いて



あるから。ここに書いてあるけれどもね、簡単に言えばだね、彼は中学時代から、左翼運動をやっている。徳田球一は、中学時代、那覇で、金城清松との出会いがあった。その方は同じ大宜味の出身で、——その方は徳田にも思想的に大きな影響を与えているが、——山城たちにも関係がある。金城清松は、近代医学を沖繩に広めただけでなく、河上肇のように左翼運動にも少なからず貢献している。まあ、徳田球一たちの先輩にあたるんだな。そういう関係で、この喜如嘉つていう部落は、大宜味つていう村は、非常に進歩的などころであった。そして、彼は青年時代に、上里春生つていうねえ、「春」に「生まれる」と言うんだけどねえ。この人は、東京、大阪で日本共産党の指導する消費組合運動の幹部だった。ある任務で、沖繩に派遣されてきてね、沖繩で、山城たちと村政改革運動というのをね、理論的に指導するんですよ。山城たちが、先頭になって、日本でも珍しい農村の新しい型のね、運動を始めるんだよ。そういう中で、まず、第一回なんだが、弾圧を受けてだね、逮捕されて監獄に入った。彼は合計、十回か捕まっつて、ぶち込まれている。そういう、だから、戦時中は彼は特赦されて、東亜なんとか同盟（注・東亜連盟）というところに、引つ張り込まれてね、そこで、ある外務大臣あがりか、なんかの外交関係者のかばん持ちなんかしてだね。そして、敗戦後、東京で沖繩人連盟、その事務局担当者になって活動して、それから、沖繩に帰ってくる。四六年十二月ころかな？ 彼が書いたものを見るかね。

眞板 最初に知り合つたのはどこになるんですか？

上原 それは、山城たちの村政改革運動と関連するんだよ。その運動の時に、大宜味の若い人たちがたくさん逮捕されたんだ。すると、逮捕されたものは、監獄に入ったんだから、警察に捕まっただけだから、ということ、ろくな仕事に就けないわけですよ。そこで、働く場所がない、その連中を沖繩県有林かな？ 国有林

かな？ その事務所が辺野喜というところであつて、辺野喜には、林業試験場みたいなのがあつてね、そこに技術者をやっている私のいとこがいたんだ。金城秀一つていうんだ。私の母方の本家の長男だけれどもね。彼が彼ら失業青年に仕事を作ってくれたんだ。そうだ。彼は山城たちの運動に対して、共鳴していたんだね。この金城秀一が

眞板 「しゅういち」は、「修める」に「一」ですか。

上原 えっ？ 「しゅう」は「秀でる」。

その運動には参加していないけれども、職がない青年たちを雇用して、植林とか木材加工とかに使つて、青年たちを保護したわけなんです。仕事を与えて、そこで働かせて、給料を与えて、めし食えるようにした。

そういう関係で、山城善光とこの秀一つていうのは、若いときから、親しかつたのだ。その秀一が、ある日突然、私に「キミに紹介したい人がいるから、会え！」と言う。彼が言うには、山城善光というのだ。「信夫、キミと彼とはね十いくつか、二十歳くらい上かな」。山城善光は、ひと回りくらい、歳の差があり、秀一とはほぼ同年齢だという。山城善光が、やまとから帰つてきていると知つたことを知つていたから、秀一はもうどこかで、一回くらい会つていたのかもしれない。彼は、「信夫、おまえみたいなマクーだよ」と。マクーつて知っています？ 意地つ張り、暴れ者だという（笑） 秀一は昔、辺野喜の県有林で、善光の同志たちをたくさん使つて協力したんだぞつてね、自慢話を長々としてね。「キミ、善光に会つたら、きつと意気投合するよ」ということだね、辺土名で善光のことをよく知つている大城感一を通じてね、山城善光の住所まで案内してもらつた。

四六年の、いや四七年だったか？ 一月か二月のいつごろだったかな？ 忘れたけど、彼がまだ帰つてきて、一カ月前後だったと思いますよ。私は朝、奥を出たけれども、歩いて喜如嘉まで行

ったんだね。午後の二、三時ごろ着いたんでしようね。そしたら、二人、これは秀一兄が言うとおりに、意気投合しましてね（笑）まず、彼は、沖繩に過ごしてから、二ヶ月くらいしかたつていないからね。私はすでにこうこう運動して、こうこうやっていたから、しかも、そのころ私は、もうすでに、沖繩監獄に何ヶ月か入っているんだからね。少しは、アメリカの民主主義というの、体験して知っていることも最初に話したと思う。二人の話が、終わらないんだよな（笑）それで、泊まってしまった。あまり遅くまでだと申し訳ないからと、辺土名の大城は、先に返してね。とうとう夜明けまで、二人で話をしてだね、翌日の朝、何時か知らんけど、帰ってきた。それはね、考えてみるとね、この中（『荒野の火』）に書いてあるかな？ あ、これに書いてあるね。桑江朝幸が山城善光を訪ねて行って、間もないころだね。こうこうしてね、桑江朝幸っていうのがいて、一週間経っていたのかも、しれないけど、それを彼は、思い出しながら、また話が盛り上がってきたので、どっからかしら、お酒も少し、ちよっぴりだけ、どこからか工面してきて、気分だけは酔っ払った気になってた、という思い出がある。それから、私は、一週間に一回くらい会っている。そして、具体的な動きっていうのは、それからになるんだけど。

眞板 その当時、主にどういうことを話し合われたんですか？

上原 とにかく、何で沖繩はこんなひどい目に遭わなきゃいけないのか、ということ、沖繩のころ、私は……。

この秀一っていうのは、空手の達人なんだよ。昔、「チャンミーグウワー」っていうね、有名な空手の大先生がいたんですね。秀一は、その先生の高弟だったんだそうだ。思想的にはかなり進歩的であった。だからね、いわゆる山城善光とかそういう村政改革運動や農民運動に対して共鳴をして、その仕事のない人たちをだね、匿ってやるくらいだから。そういうことがあって、山城善

光との関係というのは、それから始まっていく。そして、一番最初に、山城善光との共同行動っていうのは、私を塩屋の平良助次郎に紹介し、三人で何回か話し合った。

それから、私は「A・J」行きだ。アメリカの軍事基地建設の土木基地。普天間にある。私はそれまでに、すでに、先ほど言ったようにね、民間人が自由に移動できないので（笑）その恩納岳のところを迂回してだね、山の中を通って、石川市に出て。石川ホテルで、落ち合おうと、その翌日から軍作業のトラックを利用して、彼と共に、「A・J」建設集団基地で泊まることができた。大宜味村の軍作業員は、いっぱいいたから、あそこからトラックに乗って。

それから、私ひとりのときは、石川のホテルで、山城と一緒に、ときは、「A・J」を利用した。当時、石川の民家は壊されて、焼けていた。けれども、昔の部落跡地には、民政府職員などのテナント張りの官舎が、所狭しと立ち並んでいた。そのはずれに、ぼつんと、屋根瓦が残っている一軒家があった。そしてね、壁もないんだ。床もね、どっからか集めてきた床板を敷いてね、「石川ホテルはどこですか」って聞いても、わからない誰も。石川の人でも。それで、ある人が「石川ホテルはここですよ」と教えてくれた。行ってみたらね、部屋の数が四つか五つある。七、八畳くらいの、広いのが十畳くらいが一番大きな部屋とあとは、六畳か八畳くらいの部屋が二つ、三つあった。それが、石川ホテル（笑）なにしろ、唯一、焼け残った、雨の漏れない家だからさ。一番最初、山城と二人が落ち合ったのは、そこだったと思うんだ。で、落ち合って、彼が「桑江朝幸に会いに行こう」と言って、桑江朝幸の家に連れて行ったんだ。また、三人でやってね、わっと。

※「A・J工作隊」は、米国の土建会社「A・J」で、その仕事を請け負う、沖繩側の組織。国頭村や大宜味村出身者を中心に、

約二千数百人いた。『荒野の火』山城善光著

眞板 じゃあ、石川まで出てこられたんですか？

上原 えっ？

眞板 石川まで出てきて、それで、そこで桑江朝幸さんと会われた？

上原 いや、なにしろ、どこかで落ち合う約束しても、私が、奥からね、喜如嘉まで歩かなきゃいけない。もし、奥から早めに出て、宜真名で、軍作業のトラックをもし四時から五時までに捕まえたなら、私はそれに乗って、大宜味まで行けるわけだね。喜如嘉までね。だけれども、残念ながら、私が寝坊して、四時から五時ごろ、ゆっくりゆっくり、山を越したら、もう、一時間も前にトラックは出てしまったことなるから。それで、私はどこでもいいから、乗れるところで車に乗って、石川に出てきて、石川ホテルで落ち合うということにしたんだと思う。彼（山城善光）が地図を書いてね。俺はここで、待っていると書いても、そのとき、俺自身は、沖繩のどこにいるか分からないくらい地理を知らなかったから。場合によっては、車より俺の二本足が、便利なきがあらんだよ。

まあ、とにかく、石川から軍作業の車に乗って、桑江朝幸の家のあるコザまで行って、コザで彼の家を訪ねた。桑江朝幸と彼の両親、奥さんが、喜んで、事前に聞いていたようで、「ヤー（あなた）、ヤンバルの信夫か」と喜んでね、ご馳走してくれてね、また、一晩中、山城、桑江と私の三人で話し合っていて、そこへ泊まった。それから、ほとんど一週間に、一、二回は桑江と会い、まるで桑江の家族みたいに。私は、食べ物がないんだな。小遣いがないから。ちよつと、前なんか一日一食しか食べない場合もあった。ヤンバルだったら、私と会うと、「食べてないだろう」、「来い」、「食べる」とこうなるんだよ。はじめのころはね。石川、コ

ザではね。私はやけどの跡が酷いから、ひげをはやしていたんだよ。おかしい顔をしていたらうな。お腹が空いたら、桑江さんのところへ行つてね。オジー、オバーは、私を見るなり、何かを作って元気をさせせてくれた。活動資金がなくなると、たまに、奥まで帰ってくる。

で、それを繰り返していたけれども、四七年の三月ごろになるとね、具体的な政治活動が活発になり、時間的に無理なもので、私は辺土名に泊まる。「ホテル辺土名」ではね。辺土名に知人が多いから。いわゆる下宿生活。下宿生活を始めると、腹が減つたら、みなが、少ない食事を分けてくれた。車に乗っても、賃金を支払わなくても、いいんだよね。降りたら、「さよなら」でいいわけ。その後ね、ちよつと、いつからかは忘れたけども、軍のトラックに幌をかけてだね、沖繩バスとかね、アラカキバスとか言つたかな。バス会社ができたんだ。今度はカネを出さなきゃ乗せてくれない。そのバス代だけは、なんとか工面しなきゃいけないわけね。それでも、大変、楽になつてね。疲れたらどこかへ野宿するんじゃないかと、バスで辺土名まで帰つて来て、辺土名の知っている人の家や下宿など、どこでも休めた。それで、たまに、お腹空いて山城善光の家にも行かなくても、もう自分でなんとか食事を取ることができる、普通の生活ができるようになった。おかげで、国頭村内での講演会の回数も増加し、村民との結びつきも、ますます強くなつていった。

奥に帰つても、すでに家畜の屋敷内飼育の問題が、解決したので、部落民も村民も、私の政治活動を認め、あいつは本当に命をかけてやつているんだ。ということ、私の支持が、だんだん広がっていった。そのころね、村議員の選挙というのがあつてね、私は二十二歳だったと思つたけれど、奥の先輩や友人たちも、「村会議員になって頑張れ」って勧めるが、私には年齢が年齢だからと、「うん」と言わなかった。たまたま、石川で民主同盟の

何か会議があったときに、国頭村の同志たちから、「おまえ、今度の選挙で、村長になったらいいんだけども、村長はちよつと、若すぎるからね。村会議員くらいなら、歳をごまかせるだろうから」と、みんなが推薦するから、村会議員なら、いいだろうという。「私はよく知らないが、まだ満二十五歳以上にならないと、被選挙権ないんじゃないですか」。国頭の友人たちは、「かまわん、かまわん、おまえ、二十五歳以上に見えるから。戸籍もないでしょ。焼かれて」、国頭村の連中は私が知らないうちにね。村会議員にしてしまった。そういうことになったら、どうしようって言ったらね、山城は、「いいじゃないか、みんなが推薦するんだったら、これが民主主義っていうもんだよ」。仲宗根源和はね、「それがいま必要な民主主義ということにしよう」と言っただけで済んだ。そうこうして、変な民主主義を教えられてね。そのまま村会議員としても、活動することになったんだ。

眞板 選挙出られたんですか？

上原 えっ？ 立候補しないで村議会議員。二十二歳だったと思う。しかし、私は沖繩に帰って間もなくしてから、アメリカ軍のMPに日本軍の生き残りだと刑務所に何ヶ月か入れられたこともある人間がですよ。

眞板 それ、いつごろですか？

上原 選挙は一九四七年だな？ 刑務所は一九四六年の夏から秋のころだったと思う。

眞板 選挙は四七年ですか、じゃあちよつと、これ調べておきます。

上原 山城善光はそのときに、桑江朝幸も立候補して、軍政下の沖繩で、初めて高等軍事裁判にかけられた、にもかかわらず、当選しているんだ。桑江は町会議員、山城は村会議員に。私は立候補しないでだね。国頭村の村会議員にね。

政治活動をはじめの前だが、私がMPになぜ、捕まったかとい

うことを説明しないと分からないと思うんだけど。私はそのころ、国頭村やヤンバルだけでさえ、こんなにいっぱい問題があるのだから、軍政下の沖繩全体だと、いったいどうなっているんだと心配になり、本当の被害状況も理解しなければならぬ。私は父から、何円だったか借りて、五十円玉ではなかったな。軍票だったよ。

※一九四八年二月に市町村長選と市町村議選を実施。この選挙には、山城善光氏は大宜味村議に、上原信夫氏は国頭村議に当選。桑江朝幸氏は当選しておらず、同氏は一九五〇年のコザ市議選で当選している。（『戦後沖繩選挙史』）また、高等軍事裁判は、一九四八年六月なので選挙後。

眞板 まだ、B円の軍票時代ですね。

## ■ 沖繩南部の戦跡調査

上原 緑色だったか赤色だったか、わからないけど、何円だったか分からないけど、それをおしただいて、沖繩南部の戦跡調査に出発したんだ。そのころの交通手段は、まず、第一に自分の二本足、運が良ければ、軍作業のトラックを利用していただくということだ。石川を通って、那覇近くまで歩いたり、車に乗せてもらったりして、南部戦跡に入った。私にとっては、初めての土地なので、地名も分らない。とにかく、南に向かって歩いたわけだ。時には、米兵に捕まって、叩かれたりしてね。言葉ができない、何も分からないふりをする。米軍は私を精神障害者だと思っただろうね。そうすると、通行を許すんだ。それで、沖繩南部をなんとかひと回りしたんだよ。そのとき、草葺のね、小屋があれば、泊めてもらうの。時間も分からなかったね。那覇を離れ

てね、鳥尻の何村だったかも、分からないです。ずっと、暗くなるまで歩くんだった。疲れたら野宿した。

ある朝、目を覚ますとね、ものすごくいい匂いがするのね。天国かどっかじゃないか、分かんないけれども、いいところだなと思つて。前の晩は疲れきつて、すっかり暗くなってから、木陰で倒れるように、寝てしまったんだよ。おそるおそるその匂いがするところを訪ねていったら、そしたらね、小さな草葺屋根の中に夫婦と子ども一人。年のころ、三十代か四十代の人だね。お豆腐を作っているんですよ。お豆腐は大豆が原料でしょ。それと、海水が必要でしょ。私はどんなにして作るのかを少し聞いていますよ。私はその匂いに、びっくりしたね。しかし、私より相手の方が、もっとびっくりしてね。それで、「あんたどうしてここへ来たの？」と尋ねるのだ。私は「沖繩に帰って間もないんだ。沖繩、いまだどうなっているのか、いろいろ調べているんです」つて答えた。相手は「どこから来た？」とまた聞くから、「ヤンバルです」。「どこで泊まっているのか？」「十メートルくらいの高さもあるところの草の中に入つてね。そこで、私は泊まった。おいしい匂いがするから、匂いにひかれてきました」つて言つたらね。「はっ、あんた、めし食べてないんだな」。顔見て分かるんだな。お椀にね、豆腐をいっぱい山盛りに入れて、「これ、召し上がれ」つて。はあ、私はもったいなくて、いまでも思い出すけど、泣きながらね、食べたよ。もう一杯ね、私の様子を見て、そのおばさんがね、「腹いっぱいになるまで、食べなさい」つて。私は「これで商売するんですよ」。「商売するけど、少しくらい食べたつて変わんないんだよ」つて。こういう目に遭つて、初めて、本来のウチナンチュの心が良くわかるんですね。「これ、どこで売りますか」つて聞いたら、名前忘れたけども、「近くに村落があつて、そこへ持つて行って売ります」と言う。問題はお塩、「いまごろ、よくこんなもの手に入ります

たね。大豆はあるんですね」と感心したら、「内緒、内緒」つて。私は、そのあとは聞かなかつた。それが分かつたのがずっと後だが、そのころ、八重山を通じて、台湾と密貿易をしているんだ。台湾から大豆を入れていた。それを仕入れた連中は、いろんなつてを経て、そういう生き残つた昔の豆腐屋をやつていた連中とながりが出来ているんでしょうね。人間が最低の環境で生き抜いて行くというところは、壮烈なものだなあと感動しました。

眞板 じゃあ、糸満の近くだったんですか？

上原 糸満、糸満。いま考えてみると、糸満の近くだよ。なにしろ、石川から那覇の近くを通つて、南の方の最後の決戦場まで私は行くつていました。何日から前に通つたところは、私が宮古から密航で来て、那覇の近くの与那原まで行くのにトラックに乗つて通つたところなんだ。見覚えがあるようなところだなあ、と思つて通つていった。だから、糸満近くまで行つていようよ。糸満とその近くで一日くらい時間、住民の幾人かと随分、長話をした覚えがある。それから、南下して行つたつもりが、どうも方が随分、西にはずれて、道を間違えたようだ。

眞板 もつぱら、歩いてですか？

上原 もちろん。そうです。

眞板 そうですか。

上原 とにかく、食堂などというものは何もなかつたからね。そのあと、元氣を出して歩いてくると、昔の部落跡があつて、トマト、そうだとトマトが自生しているんですね。焼かれたあとの屋敷跡で、ほとんど人がいないところだね。きつと、爆弾で吹っ飛ばされて、自然に発芽したものなんだろうね。四五年から、四六年ですからね。戦場を生き残つた種が、二回くらい結果を繰り返しているんだろうね。生物の生命力は強い。とても可愛いものだと思つて感動したが、天の恵みだと思つてね、食べたよ。生でかじつて。付近にはイモらしいものもある。掘つてみたらね、あるんだよ。土のついたまま、

そのままかじって食べたね。余った分は、PWのどぶだぶの服だから、そのポケットに入れて、持って歩いた。あの平和公園というのは、当時まだなかったね。そこへ行くまでに、米軍に何回も捕まっただよ。そのときは、その精神障害者のまねをしたり、目の不自由な人のまねをしたりしながらだね、ずーっと。それで、最後に捕まったのはどこだったんだらうね。

時々、部落の人たちとも会い、できるだけ話し合いをした。相手によってはだけでも、随分、長い話をした覚えがあるね。何でもいいから、限られた現状の下で、それに合わせて、余分なエネルギーを消耗しないようにと、木陰で休んだりしながら、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、日本の中国侵略、そして、今度の第二次世界大戦と、深刻に考え、思いを巡らせていた。日本の大砲陣地だったところもあった。ここでは何人も兵士が死んだんだなあと、周囲を見ると、骨がある。比較的行バラバラでない人骨もまとまってある。民間人らしいものも少なくない。服や着物の切れっぱしみたいなもので、雨に濡れ、風に吹かれているから、もう二、三年くらい経っているでしょ。そういう近くで、何か生えて食べられる物があれば、私は、それを取って食べる。もし、私に仏教とか宗教心があれば、どう対応したのだらうか。そこで、私はここに今晚、宿泊する故人たちに対し、「ごめんささいね、こんなひどい目に遭わせて」、私は泣きながら、沖縄式のお祈り・ウートトトをやったんだよ。そこで、その夜、私は数十人くらいの故人たちと一緒に戦争とはいったい、なんだ？ 誰のためにと語り合い。石原莞爾や加藤完治たちの教えた「大東亜主義」「五族協和」「八紘一宇」などがいかにインチキか、他国や異民族の利益のためになる戦争などなく、すべてはそれぞれの国の帝国主義者と資本家たちが、自分たちのために他国に侵略するのだという結論に心底から分ったような気がした。島の最南端まで行って、それから、東回りか西回りかで、夢遊病者のように歩き

続けたんでしょね。もう、心身共に疲れきっていたんです。

そこから、だんだん那覇に近づいて来たところ、ジープで来たMP四人がピストルを構えながら、私を取り囲み、捕まっってしまったんだ。精神障害者のまねしたって、もう通用しないだらうからね。あとで、友人たちが言うには、「キミは長時間、アメリカの立ち入り禁止地区に入っていた」んだそうだ。囲まれちゃって、「乗れっ！」と言うから、私は「歩き疲れた。乗せてくれ」って言うって。

そしたら、柴野比つていうところね、石川の上の米軍司令部に連れて行かれて、司令部では、私の包帯が気になったようだ。包帯に黒く血がにじみ出ているんだね、そのとき、一、二週間くらい、何も治療をしていないから、膿んでいたかもしれないね。私を裸にして調べて、「この傷はどうした」、「おまえは何だ」、「日本軍の部隊はどこだ」と言うから、「耳が痛いので聞こえない」、「軍隊に俺は行ったことがないよ」と知らぬ存ぜぬを通していたけども、そしたら、素直でないと責め立てる。とうとう立つことも出来なくなつて、だからだらつと尻もちをついた。「よほど、お腹が空いているんだね。「めし食べていない。四日間くらい十分に食べていない」。米軍が携帯食用のパンみたいなのですね、それから、缶詰を切ったやつにね、フォークを持ってきて、「これを食べろ」と。「水はそこ」って。もう一度、目まいみたいなものを起こして、ほとんど答えられない。

しかし、食事をしたら、また、元気になったので、動物が入るような檻、アメリカの部隊の中で暴れるやつを入れるんでしょね。鉄筋の檻になって、アメリカ人でも、立てる高さなんだ。そこに私を入れたんだ。それで、寝よう、めしも食えたいし、ひと晩ここで、寝ることになった。それで、私は「毛布ぐらくれ」って言ったわけ。「おまえはまだ、調べているんだ。おまえはうそを言っているだらう」と構ってくれない。「ここは軍司令部なんだ」

と、そこで、ひと晩寝かせられた。ま、そのころは、何月ごろだったんでしょかね。それでも、疲れきっていたからゆつくり休めた。

翌日起きたらね。同じようなめしを食わせてくれたんだよ。で、今度は脅迫なんだ。「おまえ、正直なこと言わないと銃殺刑だ」と。ま、いろんなやり取りしてだね。

最後にうそ発見器で調べると言って、私の心臓のところを何かをあてたりしたよ。「これはうそ発見器というやつだ。おまえが、うそをついてもすぐ分かるんだぞ」と。そして、診断結果は、やはりうそをついていると言うんだ。私は「本当のことを申し上げているのに、なぜ、日本軍の生き残りだと、決めつけるのか？ それほど、殺したきゃ殺せー」と大声を上げたんだ。二世通訳も「あんた、殺されかねないですよ」と少し心配になって来たように見えた。私は「いいですよ。生まれつきうそをつけない性分なんだから」と言って、「どうぞ勝手にして下さい」と啖呵を切った。続いて、「アメリカは民主主義の国なんだろう、本当のことは本当なんだろう。私は、アメリカについて、一定の知識を持っているが、キミたちは、あまりにも、でたらめだ」と怒鳴った。しかし、「私はアメリカを尊敬している」というようなことを言ったらね、それを今度、通訳がね、ちよつと色をつけたんだろうな、その立会いのアメリカ軍の中尉か大尉の将校に長々と何か言ったんだ。そしたら、彼は「本当のこと言いなさい」と。そして、もう一人が、「おまえは我々の判断では、この傷は相当の戦闘で受けた傷だ。所属していた部隊名をはっきり言いなさい。そうすれば、キミを速やかに釈放する」と。ただし、もし、本当のこと言ったら、宮古の部隊名を言ったら、宮古でね、資料が彼らに渡っているかもしれないから、もしそうだと、米軍のグラマン二機を撃墜したことや、打ち首に反抗して抵抗して逃げたことなど分ったら、もつとひどい目に遭うかもしれない、と思ったもんだか

らね、まだそこで、ひと頑張りして、黙ったんだ。そしたら、この将校は、私をぶん殴った。それから、通訳の二世の少尉がこう言った。「あんた、もうはっきり言った方がいいですよ。その方が罪が軽くなるから」。罪が軽い方を決めている私は、日本軍人で逃げてもだ。それで、とうとう、うそ発見器でうそ発見できないものだから（笑）そこで、もうひと晩、泊められた。

さて、次ぎは、どこへ連れて行かれたかというところ、石川監獄というところだ。そこへ連れて行かれて、それでね、何日くらいいたかな。そこへ、何日間かいて、次ぎは、どこかの監獄へ連れて行かれたの。それは、山城善光が書いたものにも載っている。それが、正解なんだろうね。それによると、上原は日本軍人と間違わられて、石川監獄から那覇監獄に入れられた。だから、那覇監獄から出るまで、外のことは何も分らなかつた。所在地もね。そういうところに、ぶつ込まれてね。石川の監獄では、私は減食処分なんだ。たとえば、缶詰をこう切ったやつをね、一般の囚人たちは、三切れか四切れ、それからカンパンと。こう一人ずつ与える。だが、私はひと切れかふた切れなんだ。パンも半分くらいね。で、いじめられてね。那覇監獄でも、待遇は良くなかつたね。

眞板 うん、そうでしょうね。

上原 逃げよう逃げよう、本当、逃げ出す方法はないか、ということだね。石川で、下が砂地なんです。砂を掘ってね、潜り込んだら逃げられるんじゃないかと。二、三人に相談して、穴掘って、逃げる計画をして、「もし、俺の逃亡が成功したら、おまえを助けに来るから」と約束したんだが、それがばれたんだよ。

それが、ばれて、私は那覇監獄とは知らなかつたけど、別の監獄に移ったんだよ。その後、日にちが経つのも分らない。私はいつも、腹半分なんだもの。監獄の中で、顔合わす連中と話し、調べてみると、彼らは、「食事は少ない」とか、「俺の家はみんな焼かれた」、「兄弟はみんな死んだ」、「一人ぼっちなんだ」、「戦果

で何かをちよつと盗ったために、入れられたんだ」というからね。私はそれを聞いて、「けしからん、アメリカ野郎、けしからん、みんな待遇改善しよう」と話すと、みんな急に私の周りに集まるでしょ。そうすると、監獄の連中は、こんな野郎を置いといたら大変なことになると思ったから、私は動けないようにしてやろうと、ここでも、減食処分にされたんだね。その後、何か月か経ったあとのふた月かみ月か経ったあとで、ある日に警察の偉い人たちが、視察に来たんだ。

眞板 これは、那覇監獄ですか？

上原 そうです。視察に来た人たちが、ずうつと、みんなを見てね。何か、要求はないかとか言っていたのを覚えている。

眞板 えっ？ 米軍の？

上原 米軍将校みたいな者が、連中を連れて来たんだよ。いわゆる、アメリカの民主主義を見せてやろうと思ったんだろう。何か月か一回の視察というのが、あったんだろうね。きつと点検とか。そしたらね、連中の中どこかで見たような人がいるんだ。そしたらね、彼も、私をじつと見てね。こんなところで、知り合いだと言ったら、彼の地位が大変だと思っただろうね。ひと言も何も言わないで帰ったよ。それから、何週間かあとで、国頭村の村長に会ったようですよ。その時に、村長に信夫が監獄にいたと知らせた。そうしたら、みんなびつくりしてね。心配したようだ。村長や辺土名警察署長などが、間違いなく奥の上原信夫であると、保証したんでしょね。そしたらね、米軍もね仕方がないから、「おまえ、沖縄人か？」「そうだ」と言ったらね。「家へ帰れ」って言った。俺はね、「なんだおれを何か月間もぶつ込んで、お詫びもしないで」と言ったらね、そのときに、彼はね、何をくれたのかな？ ちよつと、忘れたけど、医務室でね、手の傷口を消毒して手当てしてくれて、包帯をね何巻かくれたよ。そのアメリカの民主主義の恩恵を（笑） 忘れないようにしようと思ったよ。

私が行方不明になったので、奥の人たちは、上原は捕まってね、アメリカに殺されたんじゃないか、と心配してたんだそうだ。

眞板 これは意見書を出したあとの話ですか？

上原 あとなんだ。

眞板 というと、夏場くらい？

上原 夏場くらいですね。だから、夏場だっというのはね、アメリカの服が暑くてね。私ね、アメリカの服を切つてね、短く切つて、短パンみたいにしたのね。それをはいて、半袖みたいなものになってね。それを着ていたんだ。

眞板 流れとしては、意見書出したあとに、沖縄一周なされた？

上原 そうだよ。沖縄におけるアメリカの政策というのは、民主主義の国だと、アメリカはどんなことをしているかと。少なくとも、国頭地方を見て、そして石川まで行つて、そして那覇の近くまで行つて、二、三回くらいは往復しているんですね。それだけでも、よく分からない。南部一帯は、もつと激戦地だったから、もつとひどいだろうということ、とにかく状況が分からなければ、調査をしなければ、自信をもつてね。俺の言っていることを自分でも、信頼できないと。そこで、自信を持って、みんなに訴えること、できないじゃないかと。そういうことで、私はまず納得できたけれども、これが、とんでもない災難になって（笑）

眞板 でも、まあ、無謀ですよ。当時、通行の自由はあんまりなかった時代でしょ。

上原 そんなもん、ぜんぜん、ないんですよ。

眞板 その程度で済んで良かったですよ。

上原 それで、たとえ、交通の自由がなくてもですよ。二本足ならいいですよ（笑）

私にはそれには、満州国というところで、植民地政策のもと、中国人や朝鮮人がどういう生活をしていたか、ということを実際に見ている。で、彼らの悩み、彼らの訴え、彼らの反日の叫びを



聞いている。その体験が、私を駆り立てて、当時の沖縄戦後の混乱の時期に、こんなにひどい目に遭わされている沖縄の人民は、いったい本当にどんな生活をしているのか。どんな意見をもっていいのか。激戦地でなかったヤンバルは、まだいくらかましとしても、南部は現在まだ、立ち入り禁止区域となつたまま、ああいう状態じゃないかと。自分たちの努力だけじゃ、とても解決できない。それを軍政府っていうのは、現実を無視した軍令のために、沖縄人がどんなにひどい目に遭っているかと。

それは沖縄に帰って間もなく、ヤンバルの方で、実際、調査し、体験して、そして、公衆衛生部長に対して、ヤンバルの農民の名において、意見書を出している。抗議をしている。それでも、少しは良くなりつつある。時間はかかるけど、そういう実体験をしていたから、まず沖縄の実態状況を知る必要があった。だから山城善光と会ったときには私は、彼にもあまりひどい目に遭ったとは言わなかった。だけれども、彼は私が刑務所に入っていたっていうことをここに書いてありますね。

その後、私も彼と共に普天間の作業隊のトラックに乗って、走り回って、大変便利になつたけどもね。時間の関係でね、山城は私のように、住民の中に入り込んで、体験して実際に、最低のどん底にある人たちの生活を見聞きしたのは、ある意味では、私の方が、より豊富な沖縄の事情を知っていた。

## ■南部で出会った人の思い出

眞板 上原さんがそのまま、沖縄に残られていたら、もしかしたら、本当に「土着の人」と言われるかもしれないですね。

上原 えっ？

眞板 実は、平良幸市さんが「土着の人」って言われているんですよ。あの西原のね。

上原 あ、平良幸市さん。

眞板 で、そのあと、社会大衆党、社大党の委員長になっていくんですけど、それで、知事にもなっているんです。復帰後なんですよ。

上原 その人、私、知っているんですよ。思い出があるのね。民主同盟は四八年かな？ 各群島で市町村長と議会議員選挙があつたのち、私たちは、民政府の知事と議会議員の公選を要求して、運動を始めたの。そのときに、何月だったかな？ 私は南部地方の工作を受け持ったんですよ。なぜかと言うと、私は捕まって那覇監獄に入った後に、「俺、一人で二週間くらい南部を歩いたことある」と言ったもんだから、石川の事務局会議で、山城善光が北部、桑江が中部を担当とした。山城と桑江は南部に行ったことがないから、桑江も「中部だけしか知らない」と言う。そしたら、山城が「南部知っているのは、おまえだけだ。おまえを担当にするか」。それで私が南部担当者として、南部へ行くことになった。では、南部での協力者は、誰にするかということになった。まず、挙がったのが、平良幸市だ。どっかの小学校か何とかの校長などをやったよね。

眞板 そうです。

上原 そうだ、若いときに、教職員の左翼運動にも参加しているんですよ。で、私は民主同盟を代表して彼の家を訪ねて行ったもんだ。彼の村の名前、忘れたけれども、東風平だったか？ 西原村だったか？ そして、平良幸市さんのところへ行つて、こういうような役目で、私は民主同盟の代表として来ましたということで行った。それで、意気投合して、いろいろ沖縄の諸問題を話した。「沖縄の現状はどうなんだろうか、特に、沖縄南部は激戦地だった。あんたたちは、大変苦労したことだろう」と、当時の思い出話をどんどん聞いてだね。「我々は沖縄の民主的恒久平和建設のために、こういう計画をしております。ひとつ、先生が

南部でのまとめ役として、先生にお願いしたい。そして、私はその任を受けてきたから、これは文書にしたものはないけれども、ひとつお願いします」と。で、そこで、ご馳走になって、泊めてもらったよ。小さな草葺の臨時住宅みたいなものでしたよ。私は今後の進め方について、目下、その段取りを進めているから、ひと休みしてくれというので、家族に迷惑をかけないように気を遣った。住民と会うために、部落内を見て回った。絵描きのマネをしてね。東風平村だったんだらうな。ひと回りして、平良家に向かっていると、奥さんが途中まで迎えに来てくれてさ、「家に入ったらダメです」と。「警察が、訪ねてきて、ここに二十四、二十五歳くらいのね、メガネをかけた者が、こちらに来ていないか、ということ調べているから、それで、もう家に寄らないで、申し訳ないけど、他の次のところへ行ってください」と。それで、あとで、分かったんだけど、「だれだれのところへ来て、二十何歳くらい」って警察が言っているんだけど、「四十代くらいの人なら、私の村に来たことありますけれどもね、そんなに若い人は来たことありませんね」と。私、当時、ひげをはやしていたからね。誰が見ても、四十代ぐらいの人に見えるような格好をしていたわけですよ。そしたら、「四十代、五十代くらいの方が何日前に来たことがあります」と言った。そうしたら、「ああそうか、では、別のところへ行っているんだなあ」っていうことで、警察は帰って行ったという。三名ほどで（笑）もう、平良先生の機転の効いた対応がなければね、危なかったよ。彼らはその近くで、まだ見張っていたそうだから、今度お会いする機会があったら、お礼を申し上げるべきですね。そのときの沖繩県知事は誰だったかな。復帰第一回目の

眞板 復帰？ 最初は屋良さんですよ。

上原 えっ？

眞板 復帰は屋良さんです。

上原 屋良さん。屋良さんが知事のときに、この平良幸市さんは、那覇市長やったんですか？

眞板 いえ、いえ、那覇市長は平良良松さん。

上原 平良リヨウシヨウ？

眞板 リヨウシヨウ

上原 平良良松。

眞板 やっぱり、社大党ですけど。

上原 平良良松？ 幸市ではない。

眞板 幸市はですね、屋良さんが県知事を辞めたあとに、幸市さんがなるんです。例の交通法規の交通区分の改正、右左が変わったときに「ナナサンマル（七・三〇）」で、倒れちゃうんですよ。

上原 ああそうか、小学校長をやっていたという人？ 幸市という人は？

眞板 幸市さんはね、確か教員ですよ。私の記憶では西原から出ていなかったように、思うんですよ。

上原 西原かな？ どっか、島尻なんですよ。平良幸市じゃない。

眞板 良松さんは那覇出身ですね。

上原 那覇市長した人は誰ですか。

眞板 那覇市長は平良良松ですね。

上原 えっ？

眞板 平良良松で、その前が西銘順治、その前が当間重剛

※復帰前の歴代那覇市長は、当間重剛、瀬長亀次郎、兼次佐一、西銘順治、平良良松

上原 じゃあ、復帰ごろの那覇市長は？

眞板 復帰ごろは、良松さんだと思いますよ。

上原 良松か、やっぱりそうだわ。その人は、島尻かどっかの田

舎の出身ですよ。

眞板 すいません、ちよつと調べます。

上原 というのは、私が帰国してしばらくしてから、当時の新聞の切り抜きをもらったことがあるんですよ。それは、山城が那覇市長か知事に対して、私が帰国できるように、陳情書を提出している場面だったと思いますよ。先ほど言ったように、私が、中国にいるらしいことが分つて、山城善光に伝わったという話をさつきしましたね。それが、沖縄県からね、当時友好交流団を中国に派遣することになり、那覇市長の平良良松が、団長になることが決定したので、山城善光がね、「上原信夫は戦後沖縄に大きな功勞、功績のある人間であるから、どうぞ中国にいるならば、捜せたら、沖縄のために、返してください」という意味の陳情をするんですよ。そのときの写真を山城善光は、新聞の切抜きをとつておいて、私が帰ってきたらだね、私に見せて、こういうことをしたと言つた。そのとき、平良さんはね、「キミ（注・上原氏）が民主同盟の代表になつてね、私を説得に来た」ということをそのとき、山城善光は本人から聞いたと記憶しているから、知事の幸市さんでなく、市長の良松さんだったのでしょね。私が帰国して間もなく、山城が東京に来たときに、私は中国研究所の事務局長をしているときにね。ひと晩中、思い出を話し合つたときにね。そういう資料をかばんに入れて持つて来てだね、一番最初に見せてくれた。それで、知事か平良良松さんか、どつちか知らないけれど、団長で中国へ行かれて、周恩来総理かだれかに会つたときにね、沖縄県のお願いとしてね、「もし、その中国で、上原信夫がいるなら、ひとつ本人の意見にもよりますけれども、沖縄にお返し下さい」という嘆願書を出したんだそうだよ。

眞板 それは、国交回復してからですか？

上原 国交回復？ してないときでしょうかな。

眞板 七二年ですよ。

上原 国交回復はね。

眞板 日中共同宣言

上原 その沖縄代表団が行つたのは、私、わからない。中国の新聞に出てなかつたからな。しかし、国交が回復してなければ、代表団派遣はないからな。

眞板 してなかつたら、外務省、すごく嫌がると思うんですけど。上原 そうだね。だったら、国交回復してすぐだったのかな。沖縄と中国の関係は、昔から密接なつながりがあるということで、それを待望してて、少々無理でも、すぐにやっただよ。そこで、沖縄県内では、上原健在ということが、その後、新聞にも出たらしいんだ。そして、私が帰国して久しぶりに沖縄に行つたら、民主同盟の同志たち、宮里榮輝、山城善光、桑江朝幸や兼次佐一等ほか三十人くらいが、集まつて、歓迎会をしてくれた。（上原氏注・仲曾根源はそのころ、すでに病床にあつた）私が那覇空港から出てくるところをね、那覇におばさんが、私の手を取つて、出てきたのね。それを写真に撮られて、母に手を取られてなんて、大きく報道されたよ。残念ながら、うちの父母は、私が逃げたあと、沖縄におれなくなつて、やまとにやつと逃げてきたわけだからね。そのおばさんは、自分の息子を士官学校出たのと、海兵学校出たのと、二人とも戦死させているのです。

上原 沖縄には三日か四日くらいしかいなかったかな。沖縄はよくできたもんで、宮里榮輝さんがね、「これは内密だが、信夫くん、沖縄に長居しない方がいいよ」と忠告なされたので、私は早めに帰つてきちゃつたの。なぜかというのと、アメリカは、私に関する問題は、まだ、時効にしていらないのか。私が五〇年初め、沖縄から逃げて、いなくなつたら、私と関係のあつた人たちを長い間、調査したり、尋問したり、するんですよ。その私に関する犯罪というのは、私が反米であつたということと、志喜屋孝信暗殺計画にも関与していたとなつていたそう。今度帰国して初め

て分ったのだが。だから、山城善光のこの新聞連載の初期のころは、私の生存がね、明らかに前後だから、私のことを書くのに気を遣ったんだらうね。なにしろ、私のことで、彼はひどい目に遭ったそうだから、言わないけど。それで、彼が病気になるって亡くなる、七年ほど前ですか、私と会ったときに、「信夫、本当のことを全部書いていいか」と言うからね。私は「どうぞ、本当のことしっかり書いてください。いま、どんな昔のこと持ち出して、日本政府もアメリカ政府も赤恥をかくだけでしょう。私を消してしまおうという人もいたでしょうがね」と言ったらね、彼は「よし俺、書くから」ってね。私と約束したが、急に病気になるって、入院してしまった。彼は入院しているときに、浦添のなんとか、療養所みたいなのがあってね、なんとか荘

眞板 浦添荘じゃないですか？

上原 浦添の高台で静かなところだった。

眞板 大平のところですよ。

上原 よく覚えてないな。

眞板 バイパス沿いのちよつとした高台のところにある。

上原 ということですかね。なんか高松宮か皇族の誰かが来た写真が貼ってあった。そこへ、入院したときに、私はひと晩だけでもということだね、飛んで行って、看病したんですよ。そのとき、彼は「信夫、めしを食べろって、看護婦に私の食事も持って来い」とせがみ、療養所の職員を困らせたりしたね。病床にある山城の頭の中には、昔のことが思い浮かんだのだらう。「次に、来るときは、知事と相談してね、那覇で大演説会をやらう」と。だが、それ以降はだんだん弱っていったね。亡くなるときは私も忙しくて、葬式に参加できなかったけど。そういう山城善光との同志的なつながりは不滅である。

※山城善光は、二〇〇〇年三月三十一日没。八十九歳。

眞板 そろそろ、今回は七番目、八番目の民主同盟成立までの活動状況についてから、お願いしたいと思います。それまで、私もちよつと、これで勉強させていただきます。

上原 八番目。

眞板 そうです。八番目から

上原 次ぎ、ちゃんとうち帰って検討してくださいね。

眞板 分かりました、またご連絡させていただきます。

(了)

△備考▽

(NOTE1) 沖縄民主同盟? 桑江朝幸、山城善光、平良助次郎、上原信夫↑仲宗根源和(沖縄民政府社会事業部長)

賛同者 宮里栄輝、平良辰雄(当時・農連会長)、当間重剛、仲宗根源和、富山徳潤、牧志興雄(興南高教師)、遠山謙

(NOTE2) 桑江と山城との間で、今後の活動方針の合意点

① 民政府は、捕虜観念にとらわれている。そして、この捕虜観念を住民に押しつけることは、沖縄再建のために遺憾であり、この姿勢は是正しなければならぬ。これは完全な言論弾圧である。われわれは、これらに屈することなく立ち上がり、言論の自由の獲得運動を展開する。

② 沖縄を振興させるためには、まず住民一人一人が立ち上がらなければならぬ。住民に自覚を促すために、民主主義の啓蒙運動をわれわれが先頭に立って行動を起こし、その責任は一切われわれで持つ。

(NOTE3) 運動の目的

① 言論の自由の獲得

② 道義の高揚

③ 生活の安定

(NOTE 4) 「普天間会谈」(四七年四月二十一日於普天間初等  
学校) 世話人・牧志興雄

山城、桑江、宮里栄輝は全島的な大会の開催を決意↓沖繩建設懇  
談会

(NOTE 5) 「沖繩建設懇談会」(四七年五月五日於知念高校)

↑反沖繩民政府?

大会発起人 桃原茂太、当間重剛、平良辰雄、与儀喜宣、平良助  
次郎、富山徳潤、伊仲皓、南風原朝保、当山寛光、仲宗根源和、  
仲里朝章、真栄城守行、宮里栄輝、嘉数昇、具志堅興雄、山城善  
光、桑江朝幸、瀬長亀次郎、金城田助、真栄城守仁、宮城友信、  
比嘉信光など

議題

①道義の高揚

②食糧物資配給の適正化

③民意を代表する機関の設置

議論の内容 大宜味朝徳、平良辰雄、仲宗根源和らが民政府批判  
民政府への要請決議

①デモクラシーの推進

②米軍政府に責任をとる民政府であれ

③主要施策は民意代表機関に諮れ

④沖繩議会にかわる議決機関の設置

⑤知事の民選

(NOTE 6) 沖繩民政府志喜屋知事訪問・山城、桑江、上原

信夫(四七年五月七日) ↑伊江男爵の紹介状

(NOTE 7) 七滝会

主宰・山城善光、高原久男、大山一雄、平良真順、金城嘉助

(NOTE 8) 政党結成への“謀議”於石川旅館(四七年五月  
中旬)

仲宗根源和、照屋喜太郎(医師)、吉元栄真、幸地新蔵、嘉数昇、  
中山一、宮城百百、添石良恒

(NOTE 9) 「沖繩民主同盟結党大会」於石川市宮森初等学  
校(四七年六月十五日午後二時)特徴 反民政府派の寄り合い所  
帯↓民族党

目的 沖繩の政治、経済、社会、文化、教育などの民主化を促進  
し、その確立発展を期す事業 目的達成のため、必要な一切の事  
業をなす建前なるも、目下、全島的な組織確立の過程にあり、定  
期的ないし恒常的な事業なく、今のところ随所において啓蒙的な  
演説会、文化講座、選挙促進運動をなしつつある

復帰論者(平良辰雄)、琉球独立論者(仲宗根源和)、信託統治論  
者(山城善光)

人事 事務局長・仲宗根源和(のちに委員長)

党首・平良辰雄↑山城の要請を断る

総務部長・桑江朝幸

組織部長・山城善光

青年部長・上原信夫

資金部長・添石良恒

結果 言論、結社の自由を獲得

↓四八年三月市町村長、同議会選実施で党活動停滞。

↓五〇年十月の群島知事選で松岡政保を支持し敗退↓自然解党

出所・『政治の舞台裏』(当山正喜著・あき書房)

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第2回

---

開催日 2003年11月1日  
開始時刻 13:00  
終了時刻 14:00  
開催場所 政策研究院  
虎ノ門プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## ■南部戦跡調査で感じたこと

上原 ……私の兄・直彦は、四つくらい年長で、当時まだ東京の大学で在学中だった。戦時で父からのますます少なくなる仕送りを補うために、品川あたりに「空手道場」開いていた。兄が理工に進んだのも、なるべく兵役を逃れるつもりだったためである。彼も私同様、天皇への忠誠心はなかったため、学業の継続を希望していたが許されず、終戦の二年くらい前にとうとう関東軍の機動部隊に、放り込まれた(笑) 戦車部隊にね。しかも、私の学校から比較的近い同じ吉林省に。もし、私が自由な身ならすぐにも会える距離だ。そして、近く小隊長になるって言うていたから、兄は「一回会いたいけれども、お前が外に出られないのだったら、しょうがないから」ということで、手紙で、だいたいこう言えば通じるだろうというような表現で、「命を粗末にはならない」という意味の内容だった。兄は私が「紀元二千六百年史」に反対して、全面外出禁止の刑に処せられているのを知っているということで、手紙が来てね。本人の名前を書かないで、別の人の名前だね(笑) 何十年ぶりにまたお会いして、お別れして、どうのこうのという言葉前置きしてだね、あなたも大変だねという手紙を一回もらったつきり。そのうち、ソ連軍の戦車にびしゃつとやられて、ひき殺されちゃったんじゃないか、と思ってだね、兄貴のことを私は大変心配していたんだけどね(笑) それで、兄貴が健在だったと知ったのも、沖繩から一路やまとに来てから、初めて分かったの。無事に生きているってことを。福岡に家があるということもね。

それで、結局、自分でも、沖繩からやまとへ密航し、それから、また中国へ亡命するという。なぜそういう道順をね、選んだのかね。逃げる場所をね、求めてたって感じなのかな? 結局、中国

大陸に行こうと思ってね。沖繩の南部をさまよい歩きながらね、そんなことも考えていたのかな。

眞板 でも、体力に自信がないとおっしゃって、あれは、全部、ほとんど歩きでしょ。よっぽど、脚の強い人でも難儀だったと思いますよ。

上原 いや、沖繩のあの現状に実際にぶち当たると、真に沖繩を愛する男なら、いや女もだ、必ず元気が出るんだ。だから、一日一回くらい、二回くらいめしを食わなくても、暗くなる前にあの高台まで行って、あそこからならまだ海が見えないだろうか。高いところだと海が見える。はっ、あの海岸まで行ってみようじゃないか、そうすれば方向が判明するだろうというような形だね。ふとへたばって歩けなくなってしまうと、そこへ寝てしまおう、真昼間であろうと、空腹にも耐えず、疲れて歩けなくなると、眠くなったら、そのまま寝ちゃおう。お月さんが明るいとね、涼しくなったから、あそこまで歩いてみようよと、あの山を登ってみようよ。そういうような形で、昼も夜もない、とにかく、動ける条件のものでならぬ。それが結局、今度は自分の命がある限り、沖繩の人たちのために、何かしなきゃいけないんだとね、勇気が出てきた。「そうだ沖繩のために戦うべし」とね。今思うとね。小高い丘の上から何回か大声で叫んだと思う。その決意が、私を世界に向かつて行かせたのだろう。

おそらく、私が放浪をしていたころは、南部の村落にも禁止地区外の旧住民の生き残った人たちが、米軍が認可するしないにかかわらず、自主的に帰るようになり、だいたい部落には、小さな部落なら、何人かがね家の屋根らしいものを助け合いで作り、近くの使える物は何でも利用して、残った石垣をだんだんと修復して、あり合わせの材料を骨組みにして、その上に草をかぶせてだね、雨風だけをしのげるような、寝る場所をまず確保する。焼け残ったもので、使えるものは、何でも宝物みたいに見えた。それ

をつなぎ合わせ、作ったら根気良く修理して完成させる。そこに、生き残った人たちの生命力ということをね、生きている、生き抜いてやる、生きていこう、そういうことを私は大変感じましたね。でも、その人たちと会って、話をする、もう戦闘のどうのこうのことなんていう思い出話ではなく、いまのこんにち、どうやって生きていくのか、明日からどうするのだ、という話から始まり、今後の食料はどうだ。食料は軍の配給がある。どこどこへ行けば、配給があり、そこまでは何里も歩かなきゃいけないと。行っても、良いやつは前に来た人たちに、配給されてだね、残ってなかったとかね。そのような不公平な、しかも少量の配給制度に、不満な人たちは、自分たちの力に頼ってしか生きていけないんだということで、頭はいっぱいのようなうだ。

私はそのときね、戦果を上げるといふことは、ある先輩が言われるには、「もう沖繩人はこんなに墮落した」と悲憤慷慨してね。昔、沖繩には泥棒という言葉はなかったとかね。誰がこんなふしだらなことをした。私はその人の話を聞いてね。ごもつともと思つたが、しかし、今、今日、人間が沖繩の人たちが食えなくなつて、強く訴え、沖繩の人たちを飢え死にさせるような状態にしたのは、いったい誰だということをよく分かつたよ。そこで、「とつてきたよ」、「とつてきましたよ」と言うなよ。「当たり前ですよ。大いにやってく下さい」。私はやつと生き残つた人たちが、生きることが大事なんだと。生きていたら、あとどうするか、そのとき、ゆつくりでいいから、あなたたち、自分で良く考えてくださいよ。もしたら、「あんたみたいな話をするのは、ああ、初めてだ」とか言つてね。部落の人々を呼び集めてきてだね、あの、偉い人よりか、違った考えを持った人もいます、とか言つて（笑）すぐに十数人くらいの座談会になつた。

それで、それから、「この部落は何ていう名前ですか。何村ですか」。「あれ？ あんた、ウチナンチュじゃないの？」（笑）

知らないからな。そうだ。ここは大里村って言ったのかな？ 玉城村あたりだったのか？ ということが分かつてだね。

眞板 大里のどの辺でしたか。

上原 大里はね、西原とか行つて、与那原はしばらく滞在してた。知念村、もうほとんど。南部の最後の戦線っていうのは、まだ人が入つていなかったですな。禁止区域になつておつたんでしようかね。だけでも、人が少ないというのは、それだけ、犠牲者が多かつたつていうことでしょうね。

眞板 南部のほうは、一家全滅はけっこう多かつたみたいです。

上原 ちよつとした、山のなんと言うの？ 砲撃で撃たれて形が崩れた。ちよつとこらあたりは、風当たりの少ない、極めて穏やかなところだつたらうなというところへ行つて、きょうは風があるから、吹く風にゆだねて、そこで寝ようかつてしていると、死体のね、ここに、ものすごく。私が、通つたあと、一、二年してから、遺骨収集始まつたんだそうですね。いや、私は寝て、寝ているそばでもつて、こうちよつと、草の中、探つていくと人骨なんだね。頭蓋骨だつたりする。それを私、頭をなでながら、寝たりして。

この話の中に、ちゃんと入っている。つていうことは、日本のアジア政策、八紘一宇の精神、五族協和を基礎としてだね、それで、大日本帝国主義のスメラミコト。スメラミコトつてわかりますか。天皇陛下を一番敬つた言葉なんです（笑） 天皇を指導者つていうんじゃないで、その上に神として崇め奉つてだね、それで、アジアを平定し、世界を平定するというわけでしょ。そのとき、上官たちの中には、あの時代ですから、いわゆる左翼的な考え方を持った人が、例えば、少数でもいたにしても、絶対表に出さなかつたね。

眞板 先生の場合、そうすると、満州にいた頃に、中国語で別の情報にアクセスできて、客観的に自分がやられされている教育に



対して、見る事ができた、という事です。

上原 それは、そういうことは、結局、私の人生観、世界観を変えていく、それを促進することになってるのは、私が満州に行つて、二年目の冬、初めて反満抗日軍に会つて、日本の中国侵略という現実を理解するようになってからだ。それは、非常に危険であつたが、私は日本の侵略というものを知りたいという欲求に駆り立てられていたのだと思う。その結果、少しずつ、真実を知り、だんだんと、実際に教えられていることの偽りあることが分るようになり、具体的な政策そのものが、日本はよくもこんなことやれるなあ、ね。あとのしつぺ返しが、あるぞと。抗日戦争で闘っている中国人民の胸の内がだんだんと自分のものとなつていった。

眞板 そういう、ヒューマニズムっていうのは、どこで培われたんですか？

## ■子ども時代

上原 おそらく、いま、考えてみると、私は小さいときに、確かに偏屈であつたわけです。あの、いろいろと、人の話をよく聞いてね、暴れん坊じゃなかつたんですがね。

眞板 じゃあ、ウーマクっていうわけでもなかつた？

上原 ウーマクだつたっていうのは、俺たちの同級生では戦後、技師長つて言われていた、上原力三。我々の分家なんだよ。私たちの家の次男坊だつたけど、彼は私より少し強いところがあつた。もうひとり、私のおばさんところの五男で仲吉というのがいて、これは身体が、がちりちりして、柔道が強くてね。将来、柔道家になつて、世界を漫遊する、なんてね。小さいときから、そんなことを夢見ていたんです。

私は意外とね、小学校の一年、二年生くらいるときから、上の大

きいやつらが、小さいなやつをいじめたりすると、俺はね、そいつらをぶん殴つた。そういうことをやつただね。平気で。そして、あいつらが、二人、三人かかつてきてね、そのときは、俺がやつつけて。そういうことに、上の大きい子たちが、何人かで私をやつつけようとして、私は案の定やられてね。今度は手じゃ負けるから、石を持って投げたんだね。そういう抵抗精神は極めて旺盛だつた。幼少時の懐かしい思い出の一つですがね。

眞板 (笑)

上原 その石がね、校長室のガラスを割っちゃつてね。校長の平良仁一先生がすぐに出てきてだね。「誰だ壊したのは！」って。そうすると、上級生たちから「信夫がやつたんだ、信夫がやつたんだ」って訴えられ、校長にね、私は耳を引つ張られてね、それで、ビンタをいくつかはられてだね、「お前は誰から、こんなこと教わつたんだ」って。お説教されました(笑) その後、耳を引つ張られて校長室に入れられ、「これを弁償しなくちゃいけない。キミの親父に報告する」ってね。だけど、親父は厳しかったから、「悪うございました」って、謝ることになつた。そういうふうにして、私たち二年ぐらい、平良仁一先生の教導を受けてだね、意外と手に負えない、その暴れん坊の一人くらいに思つたんでしような(笑)

戦後だね、私が山城善光たちと仲良く民主同盟の活動していたころ、十数年ぶりに平良仁一先生にお会いした。那覇だつたか、喜如嘉だつたか忘れたが、私が会つたときには、すっかり好々爺になつてしまつてね。私が小さいときは、信夫だから、信、信ちゃんと呼ばれていた。「あの上原の信ちゃんか」、そのあと、愛想が良くなった(笑) よく昔のことを覚えておられて、思い出を話された。私は素直に「はいそうです」ってね、よく聞いてた。それで、そのころは、民主同盟の政治活動し始めたころですよ。そしたらね、「僕はね、キミはね、将来ね、大物になると思つて

いた」。本当かうそかは知らないけれどね。そういうことを言っただね、いろいろ励ましてくれてだね、「うちの善光——山城善光のことだけれども——と一緒に協力してね、まだ彼も若いんだけれども」ということで、励ましてくれた。

それから、那覇の教育長になられた後、私が全島を走り回って、活動しているときに、那覇で何回か会ってね。一回は奥さんのヒサ先生が作ってくれた料理をご馳走してもらったりしてね、なにしろ私は、めしを食うや食わずで生活しているから、「めしを食べたか」って何回も聞かれたことがあります。そういうことがありました。

眞板 小学校は奥ですか、辺土名ですか？

上原 奥です。

眞板 奥に尋常小学校がある？

上原 そう、そう。そのときはね、二〇〇、三〇〇人くらいの、我々の同級生は、三〇何名くらいしかいなかった。

眞板 あれ、尋常小学校って、四年まででしたか？

上原 尋常小学校っていうのはね。

眞板 その上に、高等科が二年ですよ？

上原 尋常小学校っていうのはね、昔のね、制度で四年までであった。私たちのころは、小学校の六年までが尋常小学校。

眞板 あつ、六年までですか？

上原 七、八とこれが高等科と言っただね。その一年後くらいに、国民高等学校制度というのが、布かれたんだそうだね。

眞板 あれっ？ 国民学校じゃ

上原 あつ、国民学校か、

眞板 それが、前の尋常小学校ですよ。

上原 そう、そう。

眞板 (眞板が作成した上原氏の経歴書を見ながら) じゃあ、ちょっと、ここの経歴が違うんだ。これ、四年で計算しちゃったんで

すよ。

上原 あれっ？

眞板 これ、この部分。四年で計算してしまつて、上原 六年だな。これは戦時中そうか、「はな、はと、まめ、ます」から始まつたから。

眞板 これは奥尋常小学校で、よろしいんですか？

上原 奥尋常高等小学校。

眞板 「高等」ついていましたか？

上原 「高等」ついている。

眞板 入学は二九年六歳のときでいいですか？

上原 えっ？

## ■生年月日にまつわるエピソード

眞板 生年月日は二三年でしたよね？

上原 だから、私は今で言えば、満の六歳から学校に入っているはずですよ。

眞板 ですよ。というと、二九年ぐらい？

上原 十二月の生まれでしょ、だから、この連中は、私より、少なくともひと月以上、年上ということになるわけなんだね。

眞板 お誕生日、十二月の何日でしたか？

上原 十二月五日。

眞板 五日ですか。

上原 本当は知らなかった。知らなかったっていうのは、歳なんか考えなかったから。何十年も前から。それがね、聞いたときに、「お母さんに孝行してくれたね」って話をね、沖縄で民主同盟の活動をしていたときに、母が話をしてくれたのを覚えているんだ。おばあさん、大おばさん、大おばあさん、姑や小姑が二人いたんだな。家族が多いから、十二月に生まれたから、正月はすぐに、

やってきたっていうか。

眞板 (笑)

上原 のんびりとね、私は次男だから、兄貴のときは、その長男を産んでくれて、なんてことで、もてはやしてくれた。おばあさんたちが、大事にしてくれた。また、次男で、また男の子が生まれたんだから、どうかしらと心配したけど、とにかく、大事に、そのおばあさんたちは、家に集まってくれてね、祝ってくれた。「あれは、楽しかったよ」ってね。というように話を話していたわけなんだよ。十二月何日だったかな。十月かな。お前の年月日は、何月だ何年だって、誰も聞かないからさ、気にしてなかった。

眞板 そういうものかな。

上原 中国から帰らなさいいけないときがあったでしょ。で、中国の方では、国交も回復したんだから、平良良松さんが、那覇市長していたときに、山城善光たちが、良松さんと、知事は何と言ったかな？ 一番最初の復帰の知事は？

眞板 復帰後は、一番最初が屋良さんで、そのあとが平良幸市さん。

上原 山城さんが屋良さんたちに、上原が中国で生きているらしいという情報を得たもんだから申請したわけだ。その申請の中で、「上原は、沖縄民主同盟でこうこう活動して、占領初期沖縄の民主解放、運動の功労者であると、大げさに吹聴して、早く返してください」と。それで、中国側は「沖縄からのね、要求があるんだけれども。あんた帰る気はないか。帰っても大丈夫か、どうか」と。そういうことになったので、「一度、帰って見るか」ということになった。

しかし、帰るということはだね、ビザなし、パスポートなしで、私は中国に入り込んでいたんですからね。いまでも、よその国に無断で入国すると、重罪になると思うんだよね。但し、出国する

のはなお難しいんだよね。出国するということは、出入国それぞれが政府が保証しなさいいけないわけですよ。その国におりましてから。滞在していた中国は、それを証明してくれて、そして、相手先の日本国籍はあるのかどうか。その書類を作らなさいいけないのだね。中国の担当者は大変苦労したと思うよ。そもそも私自身が自分の戸籍がどこにあるのか知らないからね。確かに私が沖縄を脱出するときまでは、沖縄・国頭の奥だった。しかし、その後、父母は沖縄に居れなくなって、どこかへ引越したであろうことは十分に想像できるが、それがどこか？ 私は何も知らないから。

だが、さて、俺はいつたい、どうやって生まれたかっていうんで、ぱっと思い出したのがだね。母親がね、「お前が正月前に生まれたことを。それは私がまだ沖縄民主同盟で活躍していた時代ですね。それで、「ひよつとしたら、十二月生まれかもしれない」ということだね、思い出したんだよ。

眞板 奥に戸籍、残ってなかったんですか？

上原 ない。

眞板 あそこは、焼けてないんですか？

上原 私が帰ったときにはないね。役場が焼けているからね。

眞板 役場、焼けちゃったんですか。そうなんですか。

上原 ぜんぜん、ないんだよ。あなたに聞かれて思い出したのが、戦時中の国頭村の戸籍係という人が、大変に用心深い人で、あれだけ戸籍関係の公文書をね、大事なものはぜんぶ、別に梱包して、油紙で。そして、山の中に持って行ってね。埋めちゃった。それが、その人は、いわゆる公文書を、役場の誰かに相談したと思うけども、その人、私、会いました。そしたら、最初は怖がっていた。いわゆる公文書を勝手にだね、村長、あるいは誰か、上役に手続きがあるだろうが、しかし、事態があまりにも急進展

し、空襲も始まったので、それをやらないでね、埋めてしまった。「なにしろ、非常事態に則しての緊急措置だったんだから、犯罪行為になんか、なるもんですか」と、その人に話をしておいた。しかし、その人、「分った」ということになったがね。

戦後も一年も経っているのにね、私は奥の書記（注・帰って一ヵ月以内に就任）になって、部落のそういう制度を調べていたんですよ。じゃあ、戸籍台帳みたいなのが、あるはずだ。村役場に行つたらないって言うんだ、そして、村長に会って、焼失したり紛失したりした必要書類の再整理などを具申した。村長は誠実な人だったから、いろいろ私の参考になるような指導意見も出た。その時期は、沖繩全体としては、戸籍簿とか、そういうものについて、やっと整理し始めたようだね。そういう段階でしかなかつたんですよ。

後日、彼が私に会ったときに、実はこうこうだったのですと、戦争中に命がけて公文書を保存した一件を村長に詳しく報告したらね、村長は「いいことをやった、キミは功労者だよ」って、褒められたんだそう。しかし、掘り出した書類は、地下水のため、大部分がだめだったらしいことを後日、聞かされました。

眞板 その村長さんって、平良吉盛さんですか？

上原 あつ、吉盛！ あんなか（※、上原氏から眞板に渡した資料）に載っていた？

眞板 そのあと、調べました。

上原 えっ？

眞板 調べました。

上原 あ、そう

眞板 四八年二月まで、任命村長で、

上原 ああ、任命村長。

眞板 戦中からずっと、村長を務め

上原 明るくて、いい人でね（笑）

そういうことがあって、私自身が奥の先輩たちの戸籍簿の状況を調べ始めたことが、きっかけとなって、今のうちに作っておかないと分らなくなるから、村で作ることに決まった。用紙も村でまともに印刷してくれることになった。だが、私はこのころになると、民主同盟のことで忙しくなつてだね、それには絡むことができなくてだね。私の次の書記の人が、中心になって、作つたらいいんだけど、そういうのを持ち寄って初めて、国頭村の戸籍簿本ができたんだそう。だから、原本があるだろう。間違いない、私の誕生日は十二月五日生まれでまきれもなく、間違いないはず（笑）

眞板 お生まれは奥でいいんですか？

上原 奥です。

眞板 ご兄弟は何男何女なんですか？

上原 兄弟は、それは男は四名、女は四名。

眞板 多いですね。

上原 内緒話だけど、これは書いちゃいけないけどね。男の子二人できて、女の子二人できたの。二人の妹がだね。兄貴はさきに東京の大学に送つたの、そして、すぐの妹がね、戦前、品川でね。おばさんがいたもんだから、おばさんを頼りにして、兄貴も東京で勉強していたから、看護学校を受けたんです。どこかの病院で看護をしていた。いや、看護婦になることになつていたんだ。それしたら、看護婦免状をもらつたらね。それらを父母に見せて喜ばせようと、休暇を取って沖繩に帰つてきたら、戦争で、出られなくなつた。戻れなくなつてだね、そのまま沖繩にずっと。その妹ともう一人の妹は、この妹は戦後の高校を出た。その下に第二人、妹二人いるが、彼らとの生活は短く、ほとんど知らない。未の妹にいたつては、出生したことすら知らなかった。

（中絶）

上原 私の生年月日がね(笑) 私自身が、よく分からなかった(笑) その後、中国の関係もあり、すなわち、日本大使館を通さなければ、帰れないわけだね。で、日本大使館を通すには、間違いないこの人は日本人であるという証明が必要なんだね。だけど、何もないんだ。戸籍謄本をそのときの私は持っていないからね。中国の関係部門としては、本人が日本に帰ると言うのだから、何とかしようやということになってね。いろいろと最善の協力してくれて、日本の日中関係のね、友人に頼んで、彼らは一所懸命探して、大阪にいた私の父母を発見したんだ。もちろん、戦後作った戸籍謄本があったんだろうね。そういうのを送ってもらって、それを参考にして、日本大使館が、臨時パスポートみたいな帰国証明書を発行してもらって、渡されてね。中国は、急いで帰った方が良いと勧めてくれた。そのとき、私は母が病床にあることを知らせる手紙ももらっていたので、すぐ飛んで帰ることにした。香港には滞在したこともあったので、香港に着いたら、友人がすぐに朝一番で手配してくれてだね、日本航空で、帰国したら、なんと、飛行場に着的いたら、「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへいらっしやってください」と知らない人たちから歓迎されてしまったんだよ。まあ、それは当たり前のことだな。そこまでは私の戸籍に(笑)

眞板 ちなみに、兵隊で、途中で逃げちゃうじゃないですか。ということは、軍籍はどうなっちゃったんですか。あの軍人恩給とかもらっていないってことは、……

上原 もらっていない。何も。  
眞板 では、扱いとしては逃亡兵か何かになっちゃっているんですか？

上原 それは、逃亡兵か戦病死扱いにしたのか、その後の処理はわかっている。ただし、終戦までの私の部隊における一切の重要記録は入隊以来、細かく軍の人事書類として作られているはず

だ。いわゆる、一般社会で言う経歴書。軍隊でもそうなんです。細かく記されています。それは打ち首の刑があるだろ。だから、その書類は、まだ、その書類などを見ている人・将校が何人も生きているんだ。お前、じたばたしたって、お前の関係書類は、いまだって、担当将校が証拠を持って帰っているんですからね。その件については、同年兵で私の親しい元将校が証言している。だから、簡単にね、戦後は終わっていないんですよ。私を処理しようと思えば、今でもその書類は、彼らは使えるんです。いまでも使おうと思つたら。

だから、おそらく私が、帰ってきたということを、あれする前にすでに、しかるべきところに出されているかもしれない。なぜ、私が、飛行場を降りたら、「お待ちしておりました」ってね、二、三名が、私をどうぞと案内するという説明がつかないでしょう。そして、あと、私は、中国研究所で務めていたころ、一九七九年から大量の中国留学生の来日に伴い、「日本中国留学生研修生援護会」を設立して、事務所を作ったら、東京を離れて地方に行くとか、とりわけ中国へ行くと、数時間内に「上原先生はどこへ行つたんですか。中国ですか。何日にお帰りですか」とご親切に問い合わせが来るんだ。公安関係部門は私のことを大変心配してくださる。中国研究所のときは、あまり、公然とした「ご配慮」はなかったのだがね。それは、私が全く無視していたこともあり、中国研究所はもとも共産党が作ったものだからね。私をそこへ入れたのは、満鉄の上海調査部長をした伊藤武雄というのよね、読売新聞の駐支派遣の代表の岩村三千夫たちが、中心だった。

留学生問題扱うようになってからというもの、中国や日本の地方に行ったりする機会や、中国関係者と会う機会が、多いわけだ。それで、中国研究所はそれができないわけだ。中国研究所の主な指導者っていうのは、だいたい監獄、二回、三回くらい入った連中が多かったから、私とは思想的に比較的近い学者たちだった。

私の事務所から、東京を離れると、事務所に「上原先生は今日はどこかへお出かけですか。いつお帰りですか」。そして、今度は中国へ行くと、その何時間後には、電話がかかってきて、「今回はどちらの方ですか、お帰りなったらお話を聞きたいですねと、お伝え下さい」と。そして、私が、関東公安局ですか、東京にある。その何とか主任というやつからの電話なんだ。名刺もちゃんともりました。

※伊藤武雄は、一八九五年三月愛知県生まれ、東大法学部政治学科卒業後、満鉄に入社し、調査課（調査部の前身）などに勤務。戦後は、四六年に中国研究所を設立。八四年九月没。

岩村三千夫は、一九〇八年六月新潟県生まれ、早稲田大学政経学部卒。三七年に読売新聞社に入社し、上海特派員や香港支局長などを歴任し、四六年に退社。同年中国研究所設立に参加。七七年五月没。

眞板 公安調査庁じゃないんですか。

上原 ああ、法務省関東公安調査局ですな。そういうことで、彼

らは、いろいろとね、私の安全を守ってくれた（笑） 注意してくれて、今度は暑いとね、「今日は暑いですけども、先生大丈夫ですか」とか言ってるね。

ときには、「小平が具合悪いというニュースがありますか？いかがでしょうか？」など、もつともらしく、先生、「一分間でもいいです」ってね。電話かかってくる。「時間ないって断言うと、「私、下におりますよ」って、「どこにいるんだ」って言うと、下だって。「じゃあいいよ、一分間、はい、いいよ」。「小平、亡くなつたそうですけど、本当ですか？」。ま、そういうことまで含めてね、いかにも、その中国の指導者の健康を心配しているよ。うなね、私は日本政府が、そんなに中国指導者のことを心配していることを知り、「日中友好の発展のため、ありがとうございませ」とお礼を申し上げたことがあった。

また、後のことにして、この話はこれで、終わりね（笑）

※公安調査庁は、法務省の外局で、全国に八カ所の公安調査局をもつ。

（了）

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第3回

---

開催日	2003年11月14日
開始時刻	13:30
終了時刻	17:30
開催場所	政策研究院 虎ノ門プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## ■山城善光主宰の「七滝会」

眞板 どの辺からいきますか。前々回、普天間会談の雰囲気はちよつと伺ったような感じですけど。

上原 その前の段階でね、山城主宰の「七滝会」。これはね、山城善光を中心とした喜如嘉出身の文化人といいますが、年配者のね。いわゆる昔物語を語り合うね、親睦会みたいなもんなんですよ。別にこれは政治的な性格を持っていない。だけれども、過去（一九二二年の大宜味村政改革同盟闘争時代）の敵味方に分かれて戦った、その人たち、すべて、おそらく、一緒になつていらっしゃるんですね。平良仁一さんのこと、話しましたね。これに載っている。

眞板 こっちに出ていますか？ 平良仁一さんは、お名前だけではどこかで聞いたことがあります。平良仁一さんって、そのあと、議員さんになつていますよね。

上原 えーとね、那覇市の教育長かな、なんかやっていますな。こんな方たちも含めて、喜如嘉、あるいはその周辺の文化人の集まりみたいなもんですね。七滝というのは、喜如嘉の山の奥に入つて行くと、その七滝っていう、小さな滝があつて、その名前からとつたらしいんですね。私はね、沖繩脱出以前はなんかの会合で、そういう喜如嘉の人たちの集まりには、よく山城善光に連れて行かれたもんです。その村の人たちからね、私は喜如嘉の人と間違えられてだね（笑）

眞板 そうですか。当山正喜さんのあれ（注・『政治の舞台裏』に「七滝会」っていうのが、あつたもんですから、てつきり、上原さんはそのメンバーで、それで、山城善光さんと行動を共になさつたのかなあ、なんて思つたんで、で、ご存知ですかっていうことを含めて、

上原 それ知っているんですよ。あのころ、あなたがたの知って

いる方たち、思い出して見ると、何回も会つて、顔を知っている人たちなんだ。

眞板 これ、何名ぐらいいたんですか？

上原 集まりの多い時でも十人前後だったんじゃないでしょうか。

## ■郷里・国頭郡での暮らし

上原 ちようど、いまの普天間のそのアメリカの、アメリカの何とかのキャンパーっていうのがあつて、いわゆる沖繩の基地を作るといふアメリカの土建業だね。

眞板 はい、はい、「A・J」工作隊

上原 「A・J」、あつ、そう。で、金城田助さんが、棟梁つていうか（笑） 現代的に言えば社長さんでね。あとほかの、やつぱり、大宜味・喜如嘉の人たちが、ほとんど中心なんですよ。

眞板 喜如嘉つていうのは、大工が多い土地柄なんですか？

上原 多い。沖繩は昔から、現金収入が少ない、経済的に落ち込んでいた、落ちこぼれの沖繩で、現金収入つていうのは、警察官か、学校の先生、それが一番、確実な職業だったんですよ。あとは、現金収入では、商人、小さな店を持つて、商売をやつていた。

眞板 これ、いわゆるマチャー（注・よろずや）ですか。

上原 マチャー小（グウワー）ですね。やつぱり、ヤンバルでは、農業だけをやってるっていうのは、部落の中で何分の一か。

眞板 あえて、兼業しているんですか？

上原 というのは、たとえば、喜如嘉あたりの場合も、部落の三分の一くらいは、大工さん、またはいわゆる大工の棟梁や、それとやらんらかの関係を持つてる建築労働者等が主力だったと思うね。棟梁が一人出ると、その下には下働きの者が、必ず、何百名かおりますからね。大工としてあちこち、沖繩中に展開していた。我々、国



頭村の場合も、第一の成功者と言ったら、國場幸太郎ですね。

眞板 はい、はい、辺土名ですね。

上原 それから、大城鎌吉。

眞板 あっそうか、あの人もそうだ。

上原 そうなんだよ。みんな、やつぱり、大工の棟梁なんだよ。

眞板 大城組ですものね。

上原 で、國場は東京まで来て、いわゆる東京の本場で、大手のその土木会社の現場監督で、鍛えられて、それで、ああいうような大型の経営が可能になったケースですね。しかし、大城鎌吉さんも、それこそ、辺土名の小学校の用務員さんから大工の棟梁になられた。

眞板 では、山の木を伐つて、山原船で那覇に運んで、いわゆる材木商は、その前の時代ですか？

上原 いわゆる建築材料、建築材料と薪、薪もの、燃料の、この二つに分けられるわけですね。薪っていうのは、小さな木を割って、束ねたやつ、これくらいの束にして、束ねたやつ。この作業は畑の少ない家の婦人たちの仕事でした。これを国頭村の場合は、各部落ごとにだいたい共同店というのがあって、それは奥の共同店の経営方法が、村内に普及して行つたんですね。たとえば、薪を共同店で買い集める。そして、その共同店が山原船を持っているか、あるいはポンポン船の貨物船を持っているということは、自分たちで、那覇まで運んで行つて、那覇の卸商にそれを売り渡す。奥などの場合は、那覇に共同店の事務所があつて、そこへ積んでおいて、市場の流れを見て売ることになつていたわけですね。あとは、いわゆる山工。山の木工の工ですね。

眞板 山に。あ、山工。

上原 まず、オノかノコで、木を伐り倒したあと、その場所で角材に仕上げる。

眞板 製材するわけですね。

上原 そう、オノで四角に荒削りにする。そうすると、木材の重さが軽くなるでしょ。運び出しに便利になりますね。山の中でやるのに。それを山の中から担ぎ出した後、大八車で運びだし、その大八車を買えない人は、自分でよちゃよちゃ、担いでだね、共同店まで持つて行つて売るわけです。共同店でこの値段いくらと、これは木が立派だとか、加工技術がうまいからつていうことで値段が違う。それを売ったら、今度は自分で浜の船着場まで持つて行つて、そこに積んでおいて一定の量がまとまったら、那覇に向けて船を出す。あるいは、沖から船が来て運ぶと。そういう、いわゆる山林労働者。その大の男で、身体が丈夫で山工の技術のいいのが、材木を削ることができる。角材にするとか。あとは、いわゆる農業をするほど、土地のない、婦女子ですね。その婦女子が、薪を山から背負つてきて、売りに行くと。奥の場合も、だいたい十数軒の家庭が山工專業に依拠していた生活ですね。生活は大変だったと思う。

眞板 じゃあ、野良仕事とかは、本当に片手間ですか？

上原 畑と田んぼね。私のところは、どのくらい持つていたんでしようかね。奥では比較的広い土地を持つていたという記憶があるんだけどね。

眞板 何反歩くらいあつたんですか？ 一町歩はないですよ。

上原 一町歩はないですね。田んぼだけだね、三、四反かな。

眞板 三、四反でもあの辺なら、広い方じゃないですか？

上原 ま、奥では多い方だったけどね。あとは、畑ですね。

眞板 ちなみに、当時つて、畑で何を植えていたんですか？

上原 まず、サツマイモ、サトイモ、小麦、アワ、コーリヤン、ヒエだったかな？

眞板 えつ、タムム（注・田芋）じゃなくてですか？

上原 タ、タムムは

眞板 あ、でもタムムは水田をやつていれば、タムムですよ。

上原 タームは田んぼだから、また別ですね。畑はサトイモです。あと、馬鈴薯ね。ヤマイモね。皮むくと紫色になるんだな。

眞板 あ、ウベですね。

上原 えっ？

眞板 ウベですか？

上原 そういう丸っこい、ようなね。そういうこの、人の足みたいな、そういうヤマイモもあったね。

眞板 いわゆる自然薯ですね。

上原 そうそう、自然薯だ。

眞板 やっぱり、イモ類が多いですね。

上原 多いですよ。ということは保存が効くということなんです。

イネは一期(注・一期作)、おコメはね、一期という。その後、技術が発達して、二期(注・二期作)とつたんですかね。一期とつたあととはね、その田んぼは、今度は干して、あぜを作るんですよ。そして、そこへイモを植えるんですよ。

眞板 そうやって、輪作みたいに

上原 すると、そのイモがね。とつたら、そのまま食べないで、できの良い物を選んで、しばらく貯蔵する。半地下造りの豚小屋の上の二階が蔵になっていた。掘ったそのイモを干してね。何日かすると、泥もきれいに落ちますね。それを俵に入れて、蔵に積んでおくんですよ。何ヵ月か、ふた月かみ月くらい経つとね、軟らかくなる。それをねタイモって言ったと思う。それがおいしくてね。収穫してすぐに食べると味はおいしくなくてね、時間が経つと、でんぷんが糖化しちゃうわけですね。これをね、子どものときの思い出のなかに、なぜか忘れられない思い出の一つなんだ。実は(注・中国から)帰ってきてから、私たちの子どものころのことをよく知っている同郷人の誰かに聞いてみたらね。そしてね。あれはね、各家庭ともね、一番大事なものだ。子どものおやつにね、普通の掘りたてのイモを煮るときにね、それいくつか

乗っけておいてね、それを子どもにくれたんだそうですよ。特に掘りたてのイモというのは、あまりおいしくありませんよ。甘いから。戦前は豊作のときに、大量のでんぷんを作ったりしちゃうわけですよ。うちのおばさんは、大正時代から東京に生活していたが、何年ぐら前に亡くなったのかなあ。七、八年前に亡くなる、少し前の話です。私が沖繩について思い出話を聞くと、私がか子どものときに見たことをおぼも、おぼるげに覚えていて、知っている限りの思い出を話して下さった。それを私は一所懸命聞いたわけよ。そして、そのときに、「昭和天皇さまも、これを召し上がった、大変、おいしい、おいしいって食べたんだ」ですよ。「エヘッ」て、びっくりしたんだけれども。ということ

眞板 寄っていますね。

上原 立ち寄っている。そのときに、沖繩県庁あたりがどこかの

農民たちに、供出させたんだね(笑)

眞板 献上したわけですか？

上原 献上した。そんなかに、羽地村かどつかのね、タイモをね、何ヵ月かたつたタイモを出したんだ。(注・皇太子は)「これは何だ」って言うから、イネを刈り取ったあとの二期作として

眞板 裏作？

上原 そうそう、稲作の裏作として作ったサツマイモだと知事か誰かが説明したんだ。おつてね、誰か皮むいてくれたんだらうね。それをこうおいしいって(笑) 「朕はうまいぞ」と召し上がって、大変褒められた。これが新聞に載つてね、そのタイモが大変有名になった。私は知らなかったけれども、お蔭で沖繩の知識が一つ増えたよ(笑)

眞板 当時、当然、ふかして食べたんですか？ 生じゃないですよ。

上原 生じゃない。イモは必ずふかして食べた。(注・上原氏が

かかえるような仕草をして) こんな大きな釜があつてね、その釜の中にいっぱい入れて、それで、一定の水を入れて、煮るんだけど、蒸かし煮つていうんですかね。ウム(注・イモ)は、ちゃんと蒸籠に入れて蒸すのが一番おいしいんだけど、その手間隙かかるから、面倒臭いから、忙しいときには、いいイモを乗せて、下に小さいイモを入れて、ぜんぶ一緒に炊いちゃうわけだ。そうすると、蒸し煮をしますからね、上のほうは、食べるきにとつちやう、あと、残つた小さなこのイモは、いろんな野菜やイモの葉っぱ等を混ぜてだね、もう一回煮るわけ。ゴトゴトと。豚のエサにしちゃうわけよ。豚を一頭くらいなら、たいしたことはないと思うが、四、五頭以上も飼っている家だと、そういう能率的なやり方をするんですよ。昔の人は、いま考えてみると、やつぱりそれなりの労働力の合理的な配置つていうのをちゃんと念頭においてね、やつていたなあと思うよ。

眞板 というと、上原さんのご実家というのは、ハルサー(注・農家)でいいんですか？

上原 んっ？

眞板 ハルサーですか？

上原 で、ハルサーつて言うのは、結局、農業をやっているということだよ。大正の飢饉(注・ソテツ地獄)の前なんか、家は何人か雇う製材所もやつていたという。

眞板 実業家のご家庭ということでもないんですか？

上原 (笑) 話はややくしくなるけどもね。明治四年ですか、沖縄・琉球王国が潰されたのは？

眞板 どの時点をいうかによりますけど、いわゆる沖縄県でやまとの版図に入るのは、明治十二年です。

上原 十二年か。

眞板 その前に、琉球藩を設置したりとかあるんですけど。

上原 あ、そのときがそうか。そのころでしようかね。きつとも

う少し早いと思うな。

眞板 これは、明治の頭ごろです。四年とか五年です。

※琉球藩の設置は一八七二(明治五)年。

上原 四年ね。熊本鎮台からね、何千人か何百人かの部隊が行つて、

眞板 あ、処分は十二年ですね。

上原 えっ？

眞板 それは琉球処分で、松田処分官が、熊本の部隊の連中を引き連れて。ま、正確に言うと警察官ですけど。

上原 そのときね、私たちのおじいさんたちは、やまとに侵略されたときに、怒つて抵抗したわけだ。

眞板 頑固党だったんですね。

上原 頑固党か、まあ、どうか知らないけれど。琉球王国の中心部・首里か那覇から、いわゆるヤンバルに逃げたわけです。まだ三十歳前後、二十歳代じゃないですかね。

眞板 それは、上原さんのおじいさんが？

上原 おじいさんが。兄弟二人が逃げてだね、ヤンバルに来ているわけなんです。兄弟二人のうち、家のいわゆる直系になるおじいさんは次男でね。あ、いや、弟なんだ。兄貴が国頭村の浜つて部落でね。浜のミージ(新地)つていう家なんだけど、国頭間切のね、役所の役人だったの。その人が、うちのおじいさんの兄貴を「シミ学問」(注・読み書き)ができるからということだね。その仕事やらせてみたんだね、気に入って、それで、役場で働いている間に、その気に入って、自分の一人娘の婿にしちゃった。それが、浜のほうで、落ち着いて、姓を宮城と名乗ったんです。うちのおじいさんは、奥の「クンジャンミンタマ」つて言つたけど、国頭村で(笑) 奥の顔役と言うのかな、その娘をも

らってだね、奥に落ち着いたんだそうさ。だから、二人してね、ヤンバルまで一緒に来たけれども、それぞれ、一人は奥で、一人は浜で、独立したんです。親戚付き合いを、私は、子どものときに、やっていたのを知っているんだよ。だが、浜のおじいさんの長男は、村役場の職員をしながら、宮城旅館というのを迎土名でやっていた。

眞板 お宅はカワラヤ（注・瓦葺の家）だったんですか？

上原 かわり

眞板 じゃあ、やっぱり、裕福だったんですね。

上原（笑） そして、うちのおじいさんが、私からすると、大じいさんだな。おじいさんは奥で、学校の先生をやっていた。代用教員だな。あのころは、師範学校ないだろうから、まだできない前の話だから、おそらく那覇か首里あたりで、いわゆる少しくらい教育を受けたんでしょうね。だから、そろばんを教えたり、お習字を教えたりしたっていうんだから、少しはいわゆる昔の小知識人だったかもしれないな。その次のおじいさんも、やっぱり、学校の先生をしておられる。そして、おじいさんたちは、ブラジルに行つて、ブラジルで負け組のね、ちようど、敗戦直後の負け組の日本人会の会長をやっていた。上原直勝。うちのおじいさんたちは、ブラジルに行つたのは、いわゆる国費移民じゃなしに、自費で行っているわけなんです。沖縄で中学校は出ているから、

眞板 中学？ すごいですね。

上原 昔の沖縄・嘉手納の農林学校に行っている。そして、うちの親父も、弟がひとりいたけどね。その弟も、ブラジルへ行った。それで、男が残ったのは、うちの親父だけなんだよ。

眞板 あ、やっぱり、トートローメー（注・仏壇位牌の継承者）だからですか？

上原 それもあるだろうと、思うんだけどね。あと分家がね、一つ、二つあったかな。で、その人たちは、一番の分家のおじ

いさんはね、私の子どものときに、お元氣だった。顔覚えていますね。こういうこと言うと、その家族の人たちが、あまりいい気持ちはないと思うんだけど。とにかく、奥の部落のことと言つたほうがいいんだろうな。奥の部落の大正年間で、中学校か農林学校あたりを出たのは、何人があるんだが、中には中途退学させられたりした人もいるんだよ。いわゆる左翼・学生運動で。

眞板 そのころ、そんなテーマありましたっけ？

上原 えっ？

眞板 学生運動やるようなテーマってあったんですか？

上原 えー、ありますね。どういう。年代的に、

眞板 もう、謝花昇の時代は終わっていますよ。

上原 その段階を終わって、いわゆる沖縄はソテツ地獄に入る前の段階のころですね。直勝おじいさんなんかも、おそらく国費で移民できなかったのも、それだろうと思うんだけどね。

眞板 奥出身でどなたか先に行かれていたんですか？

上原 うーん、兄弟のうち誰かが先にひとり出かけて、後から呼び寄せている。

眞板 特にブラジルに知り合いがいらつしやるわけでもなく？

上原 それはなしに。

眞板 それはご苦労なさつたでしょうね。

上原 だから、そういうことから考えると、沖縄つてところは、よっぽど住みにくいところだと思つた。だいたい、兵役でね、九州のどっか。

眞板 熊本が多いんじゃない。

上原 熊本かどこかは知らないけれども、一、二年くらい兵役を済ましているんだ。兵役を済まさないで、移民を許さなかった。それで、このおじいさんたちと、私の関係は、どういう関係になるかというところ、親父はその人たちのブラジルへ行く渡航費用を作らなさいいけないわけです（笑） ま、トートローメーを守っている

んだからね。それで、土地も売ったりもしたんでしよう。きつとね。おじいさんは苦勞して、そのヤンバルに来たが、奥つていう部落は他の部落と違いヤードウイ（寄留民）扱いでないんです。沖繩の南から来る人、北の奄美から来るよそ者はぜんぶ、無条件で受入れちゃう。絶対に差別しないでこれは日本全国で唯一の面白い部落だと思う。

うちのおじいさんはヤードウイに関係なく奥に来るなり部落のなかで、分け隔てなく生活していたようだね。私たちが子どものときに、戦争終わって帰ってきたときじゃなくて、そのとき、まだあのおじいさん、生きていたのかなあ。そのとき、聞いたのか、それとも、私が十くらいのおきに、十二、十三歳のときに聞いたのか、ちよつと、忘れたけれども、知花つていう、おじいさん、私の家からそう遠くないところに住んでおりましたがね。そのおじいさんが言うのに、おまえたちの家はだね、大おじいさんが、自分たちの子どもに対してね、敬い言葉を使っていたつて言うんだね（笑）。そういうことだった。「なんで、子どもに敬い言葉を使わなきゃいけないですか」つて、笑い飛ばしたわけだ。私はまだ子どもだったからね。それが印象に残っているんだけど。いま考えてみるとね、おそらく、大じいさんは、首里か那覇の言葉で話していたんだ。ヤンバル・奥の言葉が使えなかつたはずなんだよ。その遠い南の方から来たわけだね。だから、おじいさんも、奥の言葉ができず、苦勞したんだろうと思う。だから、子どもに対して、ややこしい首里か那覇あたりの言葉を使っていたんだね。

ヤンバルの友人が言うには、奥の言葉つていうのは奄美大島の言葉によく似ているんだそうだ。私はよく知らないけれどもね。沖繩の中でも特殊な言葉だそうだ。ということは、おそらく、昔の古い時代の交通機関というのは南北いずれに行くにしても、船しかないわけでしょう。そうすると、沖繩の人も、大島の人も、奥

が泊り港になるんですからね。そういう面でもやはり、国際的だったんです。ということはね、私が子どものときからね、郵便ですね。やまとからの郵便はね、あるいは沖繩からの郵便はね、ふたつの路線がある。一つは、那覇から大阪商船を使つてね、大阪、神戸か、あるいは鹿児島かどっか知らないけれど、持つていくわけですよ。もう一つは、奥を経由して、与論島へ持つて行く。

眞板 ああ、島伝いに上つていく

上原 島伝い。そして、上から今度は島伝いに、与論から奥へ持つてくる。このね、一週間に二回かな。わからん。時々、一週間に何回も、大型のクリ舟でね。乗員は三名か五名か、乗つていた覚えがある。しかも、その奥の郵便船の船主は、うちのおばさんが嫁入りしている、玉城仲太郎おじいさんだ。その玉城おじいさんが、親方になつてだね、四名か五名を乗つて、その舟で与論島と奥の間を往復していたんですよ。

眞板 舟、持つていたんですか？

上原 舟つて、そのクリ舟。

眞板 それ、船主つていうことですか？

上原 船主でしたな。

眞板 ああ、じゃあ、すごいなあ。

上原（笑）で、船主で、郵便なんかというやつだった。特別な政府のあれが、少しはあつたんでしような。そこなどは、農業しなくても、食つていけるような家だね。今度の戦争で、男の子四人も、殺されちゃつたね。一人が海軍の士官学校、あとは：陸軍だったか？

みな丈夫な人たちだった。子どものときの思い出として、郵便屋さんと言つていた（笑）。郵便屋のおじいさんと言つて。で、与論の方から来るといふと、この与論から来た人は、おじいさんの家に泊まるわけだね。そこは、ちゃんと、宿泊料の支払いをするわけだ。こつちから行くと、そこでも同じようにやったというわけ

だ。与論から人が来るといって、おばさんの家だから、遊びに行くわけだね。

そういうことで、奥という部落は、大島にも近い特殊な言葉遣いがある。それに長い歴史の中で大島との交流があつてですね。そういう関係もあつて、貧しい国頭村の中で、なんか特殊な……

眞板 ちょっと、開かれたところみたいですね。他のところと比べると。

上原 そういう点も確かに言えますね。だから、東大のなんつて言つたかな。田村浩？ 大正何年かに、いわゆる「琉球共産村落之研究」(一九二七年)や佐渡和子の「沖繩村落の社会構造と変動」には、奥の共同店のことが書いてあるんですよ。そういう点で、研究活動の対象になつたらいいね。大正年間、大正の初めの頃。特に、共産主義つていう、まだ日本の中でも、一定の社会的な地位を確立していない。共産主義とか社会主義というのはね。そういう中で、日本の社会学者の中には、共産主義を語らないと進歩的な学者でないような気がして、その中の一人が奥の問題を共産主義だと書いたんだそうだが、実際の内容と世に言われていることは、随分、違つていたようですがね。

眞板 そうですね。奥の部落は原始共産主義的などころがあるというの、聞いたことがあります、そのイメージだとすごく閉ざされた社会なのかなあと思つていたんですよ。

上原 いや、そんなことはない。逆に開放されていたんです。それは、先ほども、山林労働者がだね、雨が降ると、天気が悪いと、山に行けない。そうすると、日銭が入っているならば、今晚、少しイモが足りないんだが、おコメが足りないんだが、そうめんでも買に行こうか、またはお酒を一杯飲みたいなあつてなつた場合は、問題ないが、収入のない日はそうはいかない。では、現金がないときは、どうしたかといつて、つう、つう、……

眞板 通帳？

上原 昔の宿屋かなんかにある、なんだか、やまとだね。

眞板 大黒帳みたいなやつですか？

上原 そう。そういうのが、あつてね。

眞板 それを帳面に書いて、

上原 これね、ミシンつて言つたな。ミシンつて「未進」のことかな？ 沖繩の方言かな？ よくわからないな。ミシン通帳つて言つていたなあ。ミシンつていうのは、掛け売りのことなんだ。では、お酒一合買いたいと思うが現金がない。現金は払えないから、何月何日誰それ、各自の帳簿があるんだ。私のに、何月何日、お酒一合、何銭、未払いと。それを今度は、これが一週間くらい、仮に続いたとする。天気の関係で働きに出られなくてね。それは、今度、月末になると、今月分の働きのそれをもって、支払いができるかどうか。支払いができるのなら、支払ってもらおう。支払いができないのであれば、支払いは来月にそれを持ち越す。こういうようなことを共同店でやつたんだ。それを一番最初に、やつたのが奥なんだ。だから、どんな貧しい家庭でも、子どもを学校に出すためにも、今度はそのためのを借りるとかね(笑)しかし、小学校だから、義務教育だからカネいらないけど、学用品や日用品、食料を買うのに、いくらか足りないこともある。鉛筆買うのにいくら足りない。と、こう帳付けをして買えちゃう。もし、かりに病気治療の場合は、さてどうだったか知りませぬね。

眞板 四、五年前に伊平屋島へ行ったときに、それとそっくりそのまま、残つていましたよ。

上原 沖繩のその共同店制度というのは、奥のそれから発展したらしいんだ。先ほど言つたように、ブラジルへ行った上原直勝おじさんなどは、兵役が終つてから、しばらくして、移民で奥を離れるまでは、奥の共同店の組織作りや業務の近代化にね、それなりの貢献をしたらしいんだ。おじさんたちは、兵役から沖繩に帰

つてきて、沖縄に働く場所がなければ、代用教員にでもなれそうなのだが、それもやらないでね。協同化、消費組合化運動の指導していたらいいんだ。だから、そのときに、すでに初歩的な社会主義的な思想を持っていながら、やまに行つて、働いても良かったじゃないかと思うんだけど、それはやらなかった。ということは、兵役の一年か二年の間にだね、やまの実態や人民大衆の生活の状況を知るにしたがい、肌合わない、だから、広いところへ行つて、ブラジルで理想郷でも作ろうと夢見たかもしれないね。それで、兄弟や親戚たち何人かが、相前後して、ブラジルへ移民しているわけなんだ。

考えてみると、人間苦しいときとか貧しいときに、その貧しさの中で、無意識のうちに自然と埋もれてしまう弱さが出てくるが、一方で、困っているのは、俺だけじゃないんだ、みんな苦しいんだ。でも、それに負けずに、本も買つて読みたい、広い世界を知りたいと願うのが人情だろうな。そもそも、俺の苦しいのは、その原因は何だ。おれが怠け者か。馬鹿だからそうだったのか。いや、制度上の問題じゃないかと。政治はどうなっているんだと。こういうことにだんだん目が向くようになるわけなんです。一九三六年ころになると、もう日本と中国との戦争も勃発している段階で、沖縄の教員の連中は初歩的ながら社会主義運動をして逮捕されたりしていますね。そういうことを考えると、やっぱり、貧しさゆえに、苦しさをゆえに、人々はずっと、もう少しマシな、豊かな。そうして、政治的に社会的に抑圧される差別されると、そんなにいると、自ずから、もつとマシな社会は、国は、というような要求に向いていく。

## ■ 沖縄の社会主義運動

眞板 自然ですよ。

上原 これは必然ですよ。だから、これが日本における本格的な社会主義運動の始まる前の段階なんだね。だから貧困労働者の支援活動をしてきたキリスト教徒の社会運動家の賀川豊彦みたいな指導者なんか、お祈りだけで満足しない労働者とともに街頭へ踏み出すんです。

眞板 労働運動から来ていないっていうのは、面白いですね。

上原 何が？

眞板 労働運動から来ていない。本土の方は、労働運動の方から来ているんですよ。いわゆるブルジョアとプロレタリアートの上原 沖縄のヤンバルの場合は、山林労働者ということになると、限られた分野。たとえば、先ほどの山林労働者のね、山林労働、これは、いわゆる自然経済のね。いわゆる労働者個人の自分の力で、自分の体力で、自分の持っている技術で。だから、初期手工業者の段階の前の段階くらい、なんです。自分の財産とは私の力ですね。私の売れるものは何か、体力しかないわけですね。屈強な身体だけを持っていても、ヤンバルのほうでは、その労働力を雇ってくれる資本家がないのだ。土木工事にしても、日雇いがやつとだろう。それも、土木工事が無い限り、不可能なんだよね。いわゆる自分の労働力でもって、自分の体力をもつて、稼ぐとなったりすると、今度は山林労働者も、オノを持って、あるいはノコを持って、木を切り倒して原木を運び出して、商品として認められない。そこで、角材に加工すると、ちゃんと商品として、値段も高くなる。それから、船のあばら骨、し字型肋骨と言ふんです。いわゆるそういう木を見つけてきて、切つて加工する。その原木の持っている利用価値をうまく活かして、立派に加工をすることによつてより高い価値、良い商品となる。これを担いで行つて共同店に売る。売ったのは私の生産した商品であつて、労働力ではない。

このように木を伐るのも、削るのも、運び出すのも、すべて私

一人なの。私を雇ってくれる人は、誰もいない。だから、私の体力を売るとかでは、労働力を売るとは言えないね。労働力というのは被雇用の対象であって、はじめて労働力となるわけですから、だから、ほとんど素っ裸の自然労働、自然経済ですね。それで、結局、稼いでいたわけなんです。すなわち、自らの技術で使用価値の高い商品を作り上げることによって、交換価格も高め、収入も多くなるが、これは個人の自由意志による自然労働の果実でしょうな。

だから、沖縄の場合は、その人たちがストライキを起こすということになる、一つは、大宜味の喜如嘉で起きた「村政新運動」などの例から見ても、そういうものへ発展していく過程の中で、俺たち、困っているのは、村行政の指導者たち、村の村長や議会の議長たち（笑） 欲張りの村会議員のあのやつらだと。目標がはつきり分かかっていく段階でもって、あいつらが、俺たちから巻き上げているんだ。俺らのわずかな収入から、税金を少しでも多く納めさせることによって、納税額が良好であると、県から褒められる（笑） それに乗って、県議員、あるいは多額納税者になって国会議員になれると。

だが、最初の初期の日本の場合には、労働者がいわゆる手工業の段階から脱して大規模な工業生産制度となっていくと大量の労働力が必要となっていきます。ブルジョアは労働力の必要に応じ、随時、労働者を募集する。まず、資本が目をつけるところは人は多いけど、仕事が少ない。東北地方、九州、沖縄等。そういうところへ、募集人っていうのを派遣するわけですよ。で、募集人が行って、「給料、月これだけになるぞ」。すると、その額っていうのは、自分の体力だけで、自然経済の中で、やっとこさ呼吸をしていた人にとってはですね。何、俺の一年分、稼いでも稼げないようなやつをだね、ひと月でもらえるなんて、本当なのか、うそじゃないのかと。そうすると、そういうことを募集しているやつ

は、だいたいそれぞれが地元出身者で、しかも彼らは資本家の手先なんだね。沖縄での募集人は、沖縄出身のやつが多い。彼らもうまく安い賃金でごまかしてだね、自分の懐に入れちゃうんだ。すると、最初の段階では、沖縄の労働者っていうのは、その人を募集人をこの野郎、ちよるまかしやがってと、ぶん殴るわけだ。そうすると、吐き出して、これだけで勘弁してくれということまで返す、というようなことだったのが、だんだんこの俺たちを求人したのは、あいつじゃなくて、あいつの上司である工場の社長とか、資本家たちだというふうになつてくる。そういうことが、沖縄でもだんだん判るようになってくる。そういうことが、沖縄では表面化し、実際に、制度的、社会的に問題として顕在化するようになるのは、大正初期以降ですね。時代的にはウチナーもやまともほぼ同じだと思う。

沖縄の製糖業っていうのは、最初は小さな家庭工業から始まり、後に、沖縄製糖とか南部製糖とかできますね。それでも、交通の不便な沖縄では、運搬も大変だったから、農家は少しでも収入を増やそうと、やはり、家族で、あるいは数家族で、やがては村落共同体で組合を作り、協同の製糖工場を作り、サトウキビを搾る機械を使おうとか、砂糖を作る鍋釜も順番でみな話し合いで合理的に処理してしまう。できた製品は、それぞれが自分で売る。生産の過程の中では、みんなが、親戚や友人同士から共同体まで。だから、みんなお互い手伝ってくれる。そういう形の作業は、やっぱり、労働者と雇用と被雇用の関係というものではないのだ。農村では、先ほど言ったようにだんだん現代的な。製糖工場ができるわけなんだ。そして、カツオ節を作るのにも、家庭工業を脱して工場生産の会社組織になる。そういう中で、沖縄では、はじめて、いわゆる那覇の港のだね、棧橋労働者を除く部分でも、新たな近代資本主義的工場労働者が、生まれてくる。これは沖縄経済の新しい脱皮ということになると思う。



仲宗根源和や徳田球一たちの時代になってくるつていうと、もうやまとでも、労働組合運動は、産声を上げている。そのとき、恵まれない貧民労働者とともに、賀川豊彦たちは、教会においての「アーメン」のお祈りでもつてね。救われようとやっていたのが、救われない。神の教えを説き、祈りをささげて、貧民階級を救い出そうと思つていた宗教者たちも、時代の新たな認識とともに、街頭に出るようになる。それが、いわゆる社会運動の始まりであり、日本の社会主義の萌芽状態を促進していくきっかけにもなつたのでしょね。そういう点で、遅れたけれども、今度は沖繩の人たちは、沖繩自体の中には、まだ雇用と被雇用の関係というのは、自分たちも明確に意識しない。やまとに来てはじめて、「契約書」の中に、そんなことが書き込まれていることを知るわけです。そして、なるほど、資本家は、俺たちを絞れるだけ絞っているんだ。俺たちをだましているんだと意識するように成長していった。

安価な労働力を必要としていたのは、関西地方では、大阪やその近郊の新興工業地帯、尼崎、神戸に、沖繩から来た人が多かった。紡績工場に勤める女工は、岡山、和歌山、関東地方では川崎や横浜など範囲は広がった。第一次世界大戦を経て、日本の国力が強化され、だんだんと生産力も発展し、経済力も急速に発展した。日本は、国際的な大国になるにしたがつて、その反面、労働運動も幅広く発展してきたわけですよ。その中で一番下働きをさせられて、苦しみながら成長したのが、沖繩出身の労働者だつたということでしょうね。

だから、日本共産党の運動の初期の段階において、すでに、徳田や仲宗根がいた。そのほかにも、若い出稼ぎ労働者の中から、優れた活動家も多数輩出している。そういうことを知つた支配者たちは、どうして、この沖繩の野郎どもがと思つたらしいんだねどね。沖繩出身の活動家たちは、ここへ来て働いている、同郷の

労働者、とりわけ女工は、紡績工場の非衛生的な労働条件の下で、肺病にかつた人も多くいる。死んでいるのも、何十、何百人といる。こういう奴隷労働の現実を見ると、少しでも男だてのある男なら、当然、それを保護しなきゃいけないということを男なら考えるはずですよ。

私たち、子どものときに、数えられたんだけれども、だいたい私の兄貴と同じ年頃の娘たちなんですよ。小学校卒業するなり、やまとの紡績工場に来た人たち七、八名くらい死んでいる。しかも、沖繩から出てくるときは、小学校卒といつたら、奥尋常高等小学校卒業。その程度の教養だけでした。奥小学校では一学級といつても三十名前後しかいないからね。そんなの仮に、半分くらいが女だつたとする。だとすると、十五名の同級生の大半が、紡績工場の出稼ぎに行つていて。その中から肺病などで、七、八人が死んでいるんです。なぜ、それを知っているかというと、私が少年時代に沖繩を離れるときには、私の兄貴と同じ年頃の姉さんたちは紡績に来ていたわけですよ。その人が死んで帰つて来るんですからね。あるいは、帰つてきてから長い間保養していたが、結局のところ、死んでしまつたね。まじめな子で、一所懸命働いて、しかも、いい嫁さんになろうと願ひ、せめて、帰るときには自分の稼いだカネで、嫁入り道具でもね、タンスとかそういうものよ。買つて帰ろうとかね、帰るカネを作ろうとかいうことで、無理な努力をしたらしいんだな。そこで、人一倍働く。すると、肺を完全にやられるわけですよ。

そういうことを考えるとね。関西地方では、沖繩出身の井ノ口政雄とか、松本三益とか、そういう活動家たちが、「女工新聞」、「木材新聞」、「球陽新聞」とかね、小さなわら半紙の新聞だね。そういうのを発行始めた。彼らは日本共産党の指導の下で沖繩出身の労働者を励ましたり、生活や健康管理上の教養程度を促したり、そういう具体的な指導と支援活動をして、それが、だんだん

と浸透して労働組合運動へと発展し、社会活動へ参加していくというふうになっていくんですね。また、話が横道にそれましたな。

## ■ 普天間会談

眞板 どうでしょうか。普天間会談あたりから、伺いましょうか。

上原 これはね、先ほど言ったように、金城田助さんとか、この人たちのこれはね、一番最初に山城善光と私が会ったのは……そうさ。石川まで行って、石川から二人でコザに行って、コザで桑江朝幸の家を訪ねたんですよ。それがはじめてですね。そして、それから、別れたのか、別れないで、そのまま、また石川に戻ったんです。そこらあたりは、詳しく覚えていないけれどもね。(注・奥から) 出たら、可能な限り集中的に活動するというのが山城と私の暗黙の了承事項だったんですよ。国頭村からの足がないからね。石川から越来は近いけれども、それでも、軍作業の車というの利用するとなお近いけれども、ぜんぜん違う方向に行くやつに飛び乗って、とんでもない目に遭ったりしているから。二人で石川に泊まって、桑江の家に行って、桑江の家でお昼を食べ、意気投合して、いまの宜野湾に行ったんじゃないかなあと思うんですよ。

眞板 三人でですか？

上原 三人。それで、三人で行った。そこは山城善光が例の説得力で金城田助さんの協力で築き上げた秘密の根拠地だ。私にとつては、まさに敵陣地内の根拠地と思ってたね、あそこはね。一番安全な。だから、あそこを根拠地として、いろんな活動をするために、やっぱり、あ、そうか。そこから、桑江朝幸とふた班に分かれて、

眞板 善光さんと

上原 善光と私とだけ行って、そこで、泊まったのかな？

眞板 桑江さんのお宅に泊まったんですか？

上原 いや、桑江さんの家は泊まらなかったなあ(笑) 彼はまだ小さな TENT 張りだね。小さな店もやっていたからね。夜はそこを片付けて家族が寝るような場所にしていたから。可能な限り、彼の家には泊まらないようにしていた。ただし、めしは(笑) そうだ、最初は二人で行って、第一回は二人で行って、そして、その側道でね、アメリカ式？ 沖繩式かなんかは知らないけれども、肉もあるようなね、缶詰肉だったと思うんだけど、そういうのをパンだったかな？ いっぱいご馳走になって、沖繩にもこんなにおいしいものがあるところがあるんだなあ(笑) と感謝しながら食べたんだ。そこで、泊まって、そして、それから二人揃って、宮里栄輝さんの家に行ったのかもしれないなあ。

眞板 善光さんの『荒野の火』を拝見すると、手分けして、普天間会談に参加するメンバーを口説くというか、呼びかけに行っているようですよ。

上原 呼びかけに行ったのは、そのとき、宮里栄輝さんのところへ行って、その宮里栄輝さんの家で、また、ご馳走の話だけでも(笑) いかにも飢えていたということだからね。すっかり奥さんにご馳走になって、……

## ■ 記憶に残る食べ物について

眞板 ご馳走になったときに、こりゃあうまかったというご記憶の一品はございますか？

上原 ご馳走？

眞板 どのお宅でも結構です。

上原 (笑) まず、第一に思い出に残るのは、桑江のおばあさんが、おかあさんがね、あそこは軍作業のあれから、分け前がもら

えるんですな。安く買えるのかどうか知らないけれど、そう  
のがあって。桑江朝幸のおじいさんとおばあさんは、優しい人だ  
ったからね、私に「信夫、信夫」「食べる、食べる」ってね（笑）  
どのくらい食べたかわからないけれども。最初はこれだけだろう  
など思ってたね、また持つてくる。それをもう一回繰り返  
されてね。

眞板 チャンプルーですか？

上原 チャンプルーみたいなね。こう油をしいて、焼くのね。

眞板 ポーポーですか？

上原 加工したうどんとかそばも食べた。その油で揚げた、てん  
ぶらのね（笑）

眞板 それ、食用油でした？

上原 あ、食用油。

眞板 当時、モービルでんぶらつてあつたらしいんですけど。

上原 あつた。俺も何回か食べた思い出があるよね。

眞板 あれ食べると、すごいらしいですね。女性はちよつと、気  
の毒で。

上原（笑）

眞板 そのまま、お尻から、モーターオイルが出ちゃうらしいで  
すね。

上原（笑） 一回くらい食べたつて、出ないよ（笑） いや、私  
は出なかった。いかに、飢えていたのか実験をしたみたいだが、  
私の胃袋の中は、すっかりからからになっていて機械油まで有効  
に作用したんだ（笑） いまでは想像もできないことです。

眞板 おいしかったですか？

上原 おいしかったですというかね、おいしい、おいしくないで食べ  
てたわけじゃないんだ。

そしたらね、てんぶらがさき、みんな揚げて、こうもうもうと、  
あの歯ごたえはね。「はっ、こんなおいしいものが、何十年か食

べたことがない」なんて思うようなね。

桑江朝幸の家のは豚肉。食用油ですよきつと。食べると、カス  
も残さないくらい全部、吸収されてね（笑） 二、三日うんこも  
出ないというようなね（笑）

ある日、ヤンバルから仲泊経由で、石川に入ろうとするときに、  
本当は途中で何かを食べてきたら良かったんだけど、食べる  
場所も、時間もなかったんだね。空腹で飢えたまま仲泊を通ると、  
そこで、何かのお祝いみたいでお料理をやっている。お料理つて、  
十名くらい集まって、なんかご馳走を作っているんだな。ちよう  
ど、そこに知り合いの人がいて、「一杯飲んで行け！」と言う。  
仲泊には当山さんという方がいて、その人は南洋に出稼ぎで行つ  
て、南洋で労働組合の幹部をやっている、監獄に何年か入れられ  
ていたが、米軍が来て、解放してくれたんだ。沖繩に帰ってきて、  
われわれ民主同盟を熱心に支持してくれて、仲泊を通るときは、  
「必ず家に寄れと、何もなかったら、水でも飲んで行け」と言つ  
てだね。「ここを通つて、石川に行くのに、私の家に寄らなかつ  
たら、承知しないから」（笑） これは、実にありがたかつたか  
ら、行けば、必ず何か作つてくれた。その日、当山さんは、「今  
日は私の友だちの家にお祝い事があるから、もし、時間があれば、  
一緒に行こう」というわけで、彼の友人の家に行ったんだ。する  
と、その家で、昔食べたことのあるてんぶらが出たんだ。揚げ物  
が出たんだ。色もそっくりで、大麥見栄えのしたてんぶらだった。  
考えてみるとね、女の子たちは、整髪する油がないからね、機械  
油を、何ていうかな？ クリームみたいになった。機械の何か。

眞板 グリースですか？

上原 あ、グリース。そういうのに香りのある草木の何かを混ぜ  
て、整髪に使っていたんだ。さすが、女の子なんだなあと感じし  
たことを思い出しますよ。そういう時代ですからね。あれ変な臭  
いがするなと思つただけだね。

そのときの揚げ物の色艶にほれ込んで、おいしいとご馳走になった。当山のおじさんがね、「信夫これ飲むといいことある」と。沖繩に帰ってはじめての洋酒も飲まされてね。日が暮れてそうになつたら、当山さんが、どこかの軍作業の車が来たら、それで、石川に行けと言うんだ。歩いて一時間くらいかれば行ける距離だが、そこで、私たちは、その車を待つて、彼が停めるんだ（笑） 顔役の感じさ。しばらくしたら、車を停めてくれて、「この人、石川まで連れて行け」って。

そして、石川に行つて、何月ごろだったかな？ いわゆる石川ホテルへ行つて、そこで、山城善光や桑江たちと落ち合つて、はじめて新垣金造とか大宜味朝徳たちと会つたね。山城善光の記録にもあるように、その奥田巖というのが、中国語で怒鳴り散らしてね。

眞板 ええ、一喝したつて

上原 一喝してね。私より背が高くてね、私より二十数歳年上だった。その人たちと、もう何回か顔を合せているから、そういう打ち合わせで、この石川ホテルを使つていた。宮里栄輝先生もそこで会つているけれども、もう一回か二回くらい会つているね。それから、桃原モモタとかね。あんた、書いてあるのは何？

眞板 桃原茂太です。

上原 茂太。代議士だね。衆議院を何回もやつたね。

眞板 何か思い出ございますか？

上原 やつぱり、そうだね。思い出になるといつたら、非常に態度がおう揚でね。ほかのその、石川ホテルで会うようなね、新垣金造とか奥田巖とか、その他の、それから、大宜味朝徳さんとか、とは違つたね、いつも服装もきちんとして、まるで戦争被害など受けていないような格好をしていた（笑） だが、いろいろな具体的話になるとね、やつぱり、時代に素直でね。このね、彼はね、もう四六年の、四七年の春ですか、養鶏のね、あ、養鶏じゃ

ない、闘鶏。喧嘩する。それなんか、もう飼つていたね。三羽か四羽ぐらい。

考えてみると、四五年の六、七月ごろ、もう、沖繩の戦闘終わつていますね。すると、もうその頃から、大島の人たちは、沖繩の軍作業に来ているんですね。早い時期に。早い時期にはもう、四六年代の春ごろから、おそらく、沖繩の労働力が足りないから、米軍が軍作業のあれを、これを見れば分かんと思うのだけれども、確かに宜野湾のね、米軍のそこには、まだ、大島の人、入つていなかつたけれども。どっかの砂利、石、碎石場か、粉碎している。そこには、大島の人たちが来ているということが、そのころから分かりましたからね。四七年ごろになると、もう相当数入つていきますね。何万人か。

国頭村の村会議員になつたのは、四七年、四八年ですな。一回、国頭村の村会議員のいわゆる那覇視察団かな、那覇まで行つた。ヤンバルのほうから、まとまつて行動するのは大変なんですな。で、國場組の國場幸太郎が国頭村の出身だから、國場幸太郎が、われわれ国頭村の村会議員の人たちを那覇のみなど村に招いて歓迎するといふのでね。歓迎宴をやつてくれたんだ。そのときに、お酒が少し出た。泊まる場所はどこかのね、軍作業員のもの泊まる場所にだね（笑） 泊めてもらつたんだ。そこで、宴会をやつた。そのときに、大島の労働者たちの代表が来ていましたね。なぜ、私がそれを覚えてるかという、四八年の何月ごろ、年明けだつたかなあ。

眞板 確かに。四八年の二月に、戦後、最初の公選があるんです。

上原 あ、二月ですか？

眞板 それまでは、米軍からの任命村長とか村会議員だったんです。

上原 それから、何か月かあと、

眞板 というと、國場幸太郎さんはみなと村の村長をやっていたところですか？

上原 そう、村長をやっていた。だから、行政面でも、村対村の交流、友好交流になるわけなんです。そこで、そこに働いていた、その労働者の中の代表も参加したんでしょう。

眞板 みなと村って、そもそも港湾労働者の村ですよ。

上原 いわゆる那覇港のね。軍作業員の。そうだ、大島の基地労働者の顔役みたいな人が、なんか私に挨拶しているみたいなんだけど、それに気付かず、私は国頭村の村会議員を代表して挨拶していたんだ(笑)。そしたらね、杯を私にぱつと投げたんだよ。それで、「私の顔をかすめたんだけれども」って、私はその人の前まで行ってね。で、二人が取っ組みかと思つて、周りの人たちはみな心配したらしいんだ(笑)。で、私が「ありがとう、あなたの杯、受け損なつたから、もう一杯くれ」ってやった。そして、酒をなみなみとついでくれてね。で、「あんたも飲むか、乾杯しようよ」って言つて、そして、「あんたどっから来たんだよ」ってね。「俺は大島の何とか島だ」(笑)。その後二、三回も会つてね、いざれ仲良くなつたという覚えがある(笑)。

## ■ 普天間会談の位置づけ

眞板 普天間会談では、先生はどんな役回りをなさつたんですか？

上原 結局、そのとき私は、沖縄のこと、まったく知らないからね。ずつと、先ほども言つたように、いろんな人を一緒に手をつなげながら、すべて、山城が私を「親友の信夫です」「こいつはヤンバルです」「こいつは満州育ちでね」こういう形でね、私を多くの人たちに紹介してくれた。

眞板 では、紹介して回つていたということですか？

上原 紹介してもらつたあととは、行動は何日も一緒にする、私と一まわりも年が違うから、彼の身の回りの世話はできないけれども、一緒になつて、行動する中でいろんなことを山城から学ばせてもらった。そして、必ず彼は、民主同盟の設立については、「私とこれから一緒にやりますんで、ひとつ信夫をかわいがつてくたさい」とか。「こいつなかなかしつかりしていますから」とか、時々過大評価したりしてさ。そういうように、多くの人たちに紹介する。そういう中で、七、八歳年上の桑江朝幸とも、兄弟のようになつていく。こうして、まず、三人と宮里さんたちの話がまとまつて、いよいよ「懇談会」の前の準備段階が、いわゆるその「普天間会談」なんです、大げさすぎると思うけど(笑)。

眞板 懇談ですか？

上原 あ、会談つて何の本に載っていました。それ？

眞板 いろんな当時のものを見ると、結構、会談つてなつていますよ。

上原 あつそう。会談にもなるんだろうな。

眞板 善光さんの(注・『荒野の火』)、会談になつています。

上原 そうか。なにしろ焼け残つた木造の民家が石川中央ホテルつて呼ばれていたんだからね。そういう時代だから、みんな普天間に集まるというのは、きつとね、普天間は基地のど真ん中だからね、石川には入れるけど、普天間に入るのは、なかなかできない。それは、普天間に入るのをいま、考えてみると、歩いていった覚えはないですね。必ず、ジープとかね、営繕のジープとかね、誰かがどつかで、迎えに来て、ということですね。それから、一般民間人が通れるようなところのどつかに、待っていてですね、営繕の彼らが車で、その車を山城が金城田助さんに頼んで借りていたんだと思う。営繕のマークがついていたのだと思う。そして、私など、着ているのは、米軍が払い下げをしたよれよれの軍服を着ていたからね(笑)。ならず者と間違えられなくて、やっ

と乗ったんだよ。だから、どつかで待つて、はあつと手を上げると、また停まる、なんてことは絶対しなかったよね。だから、どこそこ何時ごろ通るといふことを、山城善光は聞いていてだね、作業員から。だいたいあの彼らの車を通る、どこそこ通るから、どこその十字路に待つておれつて、すると、彼ら、連絡取つとくと、石川から誰かの車があつて、その近くに行くといふような形です。事務連絡場所が中心的には石川なんだ。すなわち石川中央ホテルだけれど、そこはまた、仕事を進める拠点でもあつた。初めの段階は。まず、めしを食わなきゃいけない。寝る場所がなきゃいけない。石川に行つても、めし食うところない(笑) 石川ホテルはベッドもないので、大の大人たちがですよ。八畳間か十畳間に、十名か二十名くらい寝ているんですよ。互い違いに、みな頭が、こう(注・互い違い)なつていふ。足を向け合わせると、押してきたなあつて。そういうところで、奥田さんみたいな人がね、どつかで酒を飲んできてさ、クダをまくと、もう眠れないから、そういう状況だから、初期の段階はその「A・J」を中心。そこで、確かに、桑江さんの、今度は桑江さんの家に行つていれたいの。夜になると、仕事できないから、そこで、仕事して、連絡して、そして、その頃私、まだ一人歩きできないからね。

中頭、島尻を歩いて、二週間くらいは回つたけれど、それは、村の名前もそこへ行つてはじめてね、はつ、沖繩にこんな村の名前があつた。あ、東風平、玉城、西原、なんていふかな? この敗戦直後、はじめて行つたところ。私が一人で島尻各地を見て回つたことは、前にもお話ししましたね。実はその冒険視察が、私を沖繩南部理解者といふことになり、四八年に入つて、知事、議員の選挙のね。第一回目その運動ですよ。

眞板 逮捕される、MPに捕まっちゃう後ですね。  
上原 えっ? そうそう。捕まつてから、

眞板 山城さんに会う前に、一回捕まっていますよね。  
上原 そのとき、捕まっている。山城が捕まるずっと前だ。一九四六年の夏ごろか。

眞板 そのあとの話ですね。

上原 あとの話は、『自由沖繩』の問題では私は捕まっていない。あとは全部、警察やCIC(注・米軍防諜部隊)の呼び出しに対しても、目の前で、警官五、六名に囲まれても、わたしは大衆に守られて逃げて行くから。

眞板 でも、あれですね、住所不定の村会議員つて珍しいですね。

上原 (笑) 住所は国頭村奥になつていふ。おかしいところで、ただ、住民票はそこにおいてあるから。奥にまゝつていたつていふのは、例のいわゆる島尻の立ち入り禁止地区の視察に出かけるまでだな。とにかく、その前に、私は大宜味朝徳あたりの、あ、朝計にね、家畜の屋敷内飼育の認可を申請したり、

眞板 それは、先生は山城善光さんに会われる前?

上原 前だ。

眞板 だから、四七年。四七年の春くらいに、奥に戻つて来られた、という話ではなかつたでしょうか。

上原 えー、これにある。

眞板 あ、四六年ですね。

上原 四六年ですね。

眞板 すみません。

## ■ 部落内での家畜飼育問題で民政府に請願

上原 奥に帰るなり、私は村内の生き残つた指導者的役割を果たしている先輩たちを可能な限り訪ね、彼らの意見・現状分析を調査した。

まず、ぶつかつたのは、農民たちはいかに、その自分たちの自給体制を組むために、苦勞しているか、それを阻害する大きな原因は、農村の家畜も全滅していることだ。家畜っていうのは、どつからか、移入できないものだろうか、戦災の少ない離島から闇で持ってきてだね、部落内で飼えないかなあと。こういう農民の本音をぶつけられたものだから、私は農民が積極的に自分たちの力で自給自足で生きていこうという、その積極性をダメにしちゃいけないと。私は立ち上がったんだ。彼ら村民は死の中から立ち上がって、廃墟じゃない、死の中から立ち上がった人たちがだね、自分の身体の血をぬぐってだね、さて、俺たちどうして生きるんだと。そうだ、俺たち、自分で作ったものを食べなきゃ生きていけないんだと。こんな高い配給品とか、あるいは自分が育てた家畜、特に好きな豚肉だと。豚の油さえあればと。どうにかなるのに、米軍も沖繩民政府も現状を全くお知りじゃないことを言う。

そういう、農民のごもつともな要求に対して、まず、村民たちのどんなに低い要求であつても、これを一つ一つ解決し、要求を満たせることができるなら、私はこれが彼らを奮い立たせる力となり、山積する生活難を切り拓く大きな突破口になるんだと確信し、俺たちはアメリカに頼らなくてもやっていけるんだぞということ、実際に知らしめることが大事だと。だのに、軍政府や民政府の政策は、私はひどくナンセンスだと思つた。で、その大宜味朝計が、そこで言つたのは、まだ、(注・沖繩民政府が) 知念に移っていないときだから、

眞板 その年の十一月に民政府はね、知念に移ちやいますからね。上原 そう。その何ヵ月後つて、そこに引越す前なんです。とにかく私が公衆衛生部に到達するまでに不愉快な話だけどもね、門前払いを何回も食つた。その後、私は作戦を考え直して、「緊急なね、非常に大事なことをね、大宜味先生のところへお伝えしなきゃいけないことがある」。「なんだ?」。言葉が通じないから、わ

からないから通訳を見つけてきてね。で、そこを通つてから、今度は一定の地位のありそうな、実直そうなね、ウチナンチュを捕まえた。「何の用件だ」。「大宜味朝計先生から、話があるから来いって言われて来ました」。向こうが来いと言っているんだからさ、追いつけなくてもいいかな。こんな格好してね。それで、私はどつと入つていってだね。

眞板 あれ? 二、三回追ひ返されたつていうのは、二、三日通つたつていうことなんですか?

上原 いや、そんなのんびりした交渉はしません。同じ民政府の中の公衆衛生部に行く間にさ。着ているものも米軍の払い下げで、しかもほりだらけになつていたからさ(笑) そのときは、石川に石川ホテルあるの知らないから。しかも、その石川に行くのには、その前に関所があるから、そこ通らにやいかん。逃げたら撃たれるからね。それで、恩納岳の……

眞板 山越えなざるんですよ。

上原 山の中に入り込んで行つて、それから、石川に抜け出るんだ。それから、石川を経由してから、あの軍政府か民政府の車はあるはずだからという予想なんですがね。それは宮里辺土名地区公衆衛生部長にね。聞いておいた。「どこに、あんなたちの一番偉い人が、どこにいるか」つて。「米軍の次に偉いのは、公衆衛生部長・大宜味朝計つていう者だ」つていうことで、彼が教えてくれたんだよ。で、「そこに、行つたことがあるか」つて聞くと、「一回会議があつて行つたことがある。その後、何回か行つたことがある」と言うから、彼に簡単な地図を書いてもらった。ところが、現地に着いてみたら、さっぱり、わからない。そこは何という名前のところかさえも。宮里さんは「そこへ行つたら、十字路があつて、そこに立つてると、沖繩民政府へ行く人たちが、朝、そこからトラックに乗つていくから、あなたもそこへ立つていたらいいよ」ということだったので、私は安心して石川で野宿して夜明

け前に起きて服のほこりも払って身づくろいをして、宮里さんの指示通りの場所へ行つたが良く分らない。それで、一回失敗してだね。民政府と軍政府とどっちなんだろうか、ということ。迷った末、あ、そうか民政府なんだろうということだね(笑) いろいろ聞いたんだほかのことも。沖繩の人たちにね。公衆衛生部ってどこにあるのか。それは軍政府です。彼らは。はい、軍政府、はい。おかしい?(笑) で、そのあとは民政府へ。それで、このトラックに乗って、向こうまで行ったら、そこで、降りて尋ねてみればいいだろうと。それで、早く降りすぎたんで、民政府はもつと遠いと。私はあまり、上等な格好をしていなかったから、ウチナンチュが見ても、アメリカ軍が見ても、胡散臭いよねやっぱり。それで、やつと、この：：あの頃はね、カマボコみたいな兵舎だったんじゃないか。あとでみたら、そこから、そう遠くないところに、軍政府と軍司令部があると言ったことがわかった。彼らはカマボコ兵舎のこうこついやつがいくつも並んで建ってたね。

眞板 東恩納ですか？

上原 東恩納と言ったかな？ それとも、栄野比と言ったのかな？

眞板 どういう行き方にもよりますが、いまの石川の中心部からだと坂を登っていく感じに。高台が東恩納です。

上原 そう、そう。

眞板 結構な勾配ですよ。

上原 そう、勾配がね。

そのときは、その宮里さんが、「あなたの意見に賛成なんだけれども、行ったらやられますからね。行きますか。大変ですよ」(笑) いま、考えてみるとね、よくあんなこと言ったなあと思って、だけど、彼がまだ元気なうちにね、「そういうこともありましたな」って言って、「わっはっは」と笑って言ってね。仲良くして可愛が

ってもらったんだけどね。その奥さんにも、「上原さん、ちゃんとはごはんは食べていますか、なんて言われて」心配して下さった。その人が、後に婦人会長になったそうすね。あ、主婦連合会か。私は民政府に行く直前、宮里部長をお訪ねして次ぎのようなお願いをした。「じゃあ、私と一緒に行って下さい。もしもの場合、あなたは私に脅されて止む無く来たんだということにすれば、銃殺されるのは私一人だけだから大丈夫だよ」と言ったが、それもダメだと。それで、私が意地を張ったのは、それほど、軍政府と民政府は怖ろしいところなのか、それではひとつ乗り込んでみようと(笑) 馬鹿な冒険野郎だったわけすな。

眞板 確かに怖いもの知らずですね。

上原 そして、それから、民政府の大宜味朝計部長の努力で、村や屋敷内で豚や家畜を飼えるようになって、奥の有志が、伊江島に豚を買いに行ったとありますね。これはね、そのとき、軍はまだ認可していないはず。いわゆる大宜味朝計のね、努力の結果。当初は村や屋敷内であまり目立たないように、ということをして内部連絡みために、宮里さんは、国頭や辺土名地区の農民へ「達し」を出したんだと思う。

眞板 ようは政府は黙認するよと。

上原 そうそう。なるべく、この、あまり大げさに目立たないような方法でということだね。農民たちは部落内で豚が飼えるとなると、行動は早かったね。山から木を伐ってきたりしてだね。隠していた豚小屋を家に近い場所に移すというような方法を取れるようになったから。それで、奥の区長はじめね、部落の主だった幹部たちは、今度は緩和されたんだから、早速、奥にも豚を入れようということになった。そして、七、八名くらいでね、いわゆる奥の部落の主だった先輩たちです。この人たちは沖繩で、茶業をね、開発して、農林大臣から表彰状をもらった宮城親栄っていうかた。この人は那覇で、宮城紙工という箱を作る会社を経営



していた。その息子は親雄（注・宮城親雄・ちかお・一九二八年生まれ）さんっていうんだけど、私たちより二、三歳くらい下ですかね。で、この人が積極的に、やつぱり、私を支持してくれて、まず、奥に豚を入れようやいうことで、私に言ってきた。さて、どこから、：：：そうだ、先ほど言った、電気関係の知識があったっていう上原力三という仲間がね。舟艇ね。だいたい、十二名か十三名乗れるような舟艇をね、借りてきたんだな。軍からかどこからか。で、彼が運転して、機械関係は詳しいから、彼に任せとおけばまず安心ですからね。伊是名に買い付けに行ったんですよ。

眞板 あ、伊是名ですか？

上原 伊是名か伊平屋か、私、それも忘れた。ふたつ島があつて、そのうちの一つに行つたんですよ。二つの島どつちだったかな？

眞板 あそこは、国頭の近くですと、伊平屋があつて、その下に丸い伊是名があつて。

上原 王様が出たのは？

眞板 王様は伊是名です。

上原 王様は伊是名か。そこへ、ひと晩泊まりでね、行つて。その翌日、それぞれ、豚を一頭から二頭くらい買つてね、子豚をね。買つて帰ってきたんだけど。

眞板 あ、それぞれ一、二頭ということですか？

上原 当時の軍・民両政府の關係法によると豚等家畜類を外部から購入したり輸送するときは、申請しないといけないんだ。認可を得ないといけない。それこそ、密輸入だから。

眞板 ちゃんと、申請したんですか？

上原 えっ？ してない、しない。

眞板 そうですよ。

上原 申請したらダメだということになつちゃう。どこで買うん

だ。買う場所も知られたら困るから。

眞板 都合十四頭くらい持つて帰つてきたんですか？

上原 いや、二十頭くらい買ったんでしような。十七、十八名くらいで行つたからね。だからね一頭、二頭ずつ。私も一頭ね（笑）行くんだつたら買つて来いって、うちの母親からね。豚のね、どいう格好をした豚がいいとかね、メスを買いなさいと、子豚を産むから。で、背中がこうなつたら、子どもをたくさん作るとかね、ということを教えてくれてね（笑） 貴重品ですからね。

眞板 増やさんといかんですからね。

上原 それで、行つたんだけど、

眞板 これ、時期的には六月に談判して、すぐ買い付けに行つていけるような感じですけど。

上原 六月に談判して、そして、次のことは、おそらく、よく事情はわからないけど、大宜味さんからね、宮里さんに対して、こういう変な男が来たぞという連絡がいつたと思うよ。「上原という男が、来たのだが、辺土名地区でも検討しなさい」といろいろ話し合つたんでしょう。確認の電話か何かもあつたんでしょうな。帰りは、軍作業のトラックを幸運にも捕まえて、寄り道してね、辺土名まで帰つて来て、すぐ報告したんだからさ。大宜味部長は、「キミは間違ひなく、辺土名地区だな、宮里を知っているんだな」と言うから、「知っていますよ。彼があんたのおられる場所をお教えてくださった。信夫、行つて相談したら部長は大人物だからきつと聞いてくれるはずだから、行きなさいと言われた（笑）」そんなもつて、俺は来たんだ」と言うかね。うなずいたんだよ。相手はああいう連中だ、はつたりが必要だと思つてね。

一応、重大任務を果たしたので、大宜味村の帰りに大兼久に寄つて、辺土名地区の公衆衛生部長のところへ行つた。彼の事務所です約一時間くらい二、三人くらいの人に陳情結果を報告した。宮

里さんたちはね、最初は私がうそついていると思っただんなあ。しかし本当に会ってきたことが分かると、大変喜んで、何名かで一緒に、どっかの家に連れて行ってだね。彼の事務所は、大宜味の大兼久ついでいうところかな？うちの母方は向こうの出身なんだよ。だから、その人たちの名前や屋号は何かと彼らは知っていたから、なんかご馳走してくれましたよ（笑）名前とか忘れてたけれどもね。おーおー、私はすっかり興奮してだね。軍政府の命令だといって、いちいち脅しているけれども、今度はそうはいかないんだと。やつぱり、民政府はちゃんとしっかりしておれば、そんなことはないと思うんだ（笑）私を山城善光に紹介した、いとこの金城秀一というのを彼らはみんな知っている、よく知っているからね。それで、私はそこで泊まってしまったのかな？さらに辺土名では、今度は村長に会ってだね（笑）その報告をしたんだよ。村長は喜んでね。聞いてくれたよ。

それから、しばらくしたら、それとなく、口伝てにあまり目立たないように、ちゃんとやればね、部落内で飼ってもいいようだという、うわさが広がった。これは、効果的だったね。それが、結局、しかも奥では、もう、すぐにその宮城親栄さんなどが、「信夫一緒に行く」と。しかし、面白いものですね、乗った十何名近くの中で、本当にいいのだろうか、もし、それを実行してね、豚を買ってきて、飼えないと、誰が責任をとるか議論になって。どこの時代でもどんな場所でもね、必ずそういう正直者というか、消極派がいるんですよ。お上を怖れて、その議論が出たもんだからね。議論をしながら、舟はずうと沖へ進み、だんだんと伊是名島に近づいていくわけだね。それでも、心配になってきたんだらうね。もし買って帰ったら、カネを借りて、来ているからね。一部の人は、カネが少ないから。買って帰った後で、アメリカが来てだね、「密輸入品だから、捨てろ！」ということになったら、大変だ、と心配したので、宮城親栄さんが、最終審判を下したん

だ。そのときは、「信夫くん、責任、持てよな」って言って、そして、「私、責任とります。もしも、アメリカが鉄砲持って来て、撃ち殺すんだったらね。俺がアメリカ人をぶつ殺してやる」と言ってるね。啖呵を切ったら、その人が、立ち上がってだね、「そんな口先だけで責任が取れますか。取れるものか。おまえは、なんだ子どものくせに」って（笑）とうとう私も、「それほど心配ならね、じゃあ、この舟で予定通り、豚を買って帰ってきてだね、豚は奥まで持つて行く」と。「そして、あとこの舟を私と力三と一緒に沖へ出してね、豚を積んで帰るときに、舟が壊れて、溺れてしまつてね、豚は一匹も持つてきませんでしたと言ふことにしようじゃないか」というようなことを建議したんだ。そして、「あ、そうさ、その手もある」（笑）ということ、全員同意して堂々と行つてさ、伊是名から、国頭の方へ種豚二十頭も運んだんですよ。

上原 そう、そう

眞板 いま、奥にいる豚は、そのときの眞板 子孫なんですか？

上原 それで、奥がやつたらね、今度はそれを辺土名の人聞いて、宜真名の人聞いて、安田の人が聞いて、みんなこれを知っちゃった。その頃から、私は、ふた月に一回くらい、そういうところで、講演していたからね、青年運動も含めて。だから、これは国頭の産業復興のために、非常に大きな突破口をね、開いた。やつぱり、奥の部落の人たちが、民政府の役人の言うことだけを聞いていたんじゃ、俺たちも凍え死んでしまうということ。これはひとつの大きな成果でしたね。そういうことからやって、今度は村内各部落を歩いて回って、いろんな部落の人たちと会って話して、そんな中で沖繩人が望んでいるのは何だと。とにかくいまを生きることであると。生きるとは、まず農業の復活だ。復興だ。だから、民主同盟のなんか政策綱領の話し合いの中で、家畜の村内飼育とか、そういう条項があるでしょ。あれは、みんな

私が提案したものだと思いますよ。そんなときは、もうすでに私が成果を上げていた。こういう実績を我々は戦いの成果だと公表していたと思う。そして、それは農民たちがいかに、苦しんでいるか、それを待ち望んでいるかということを引きと私は、強調していると思うんだな。

眞板 では、ゆつくりと読まさせていただきます。

(中絶)

## ■民主同盟設立前の活動状況

眞板 普天間会談についてですが、ちよつと、大げさすぎるというお話がございましたが、実際はどんな感じだったんですか？

上原 思い出してみると、急遽、集まったのは、桑江、山城、平良助次郎、私とそれから、なに、大山じゃなかった？ 牧志、学校の先生だった。

眞板 そうですね。牧志さんが世話人みたいな形になっていますね。

上原 それから、宮里栄輝さんに、それとね、金城田助さんも参加していたな。それと、もう二人。

眞板 八名くらいですね。

上原 そう、そう、でね、大山一雄さん、あの、タイムスのね、編集長をやったことがある。あ、大山一雄。参加したと思うんだね。載っていないかな？ 山城善光のあれには載っていないな。大山一雄さん、彼はその頃、具体的な内容はわからないが、「A・J」にいたんですよ。私はあそこで、何回も会っているからね。

眞板 (注・山城善光『荒野の火』を見ながら、大山一雄さんは)

います。こここのところに。平良辰雄さんもいます。

上原 こ、これは？

眞板 これ、違いますか？

上原 これに、載っている、もつと前の段階で、

眞板 これの前ですか？

上原 前です。これは、いわゆる「普天間会談」となっていますか？

眞板 これ、そうなはずですけど。そうですね。

上原 そうですか。

眞板 野高警察に集会届けを出して、つて書いてあります。

上原 忘れちゃったな。これを普天間会談と呼ぶんじゃないかな。

眞板 普天間小学校の教室なんですかね。それね。

上原 掘っ立て小屋ですね。

眞板 掘っ立て小屋だったんですか(笑)

上原 真栄城守行さん、平良辰雄、伊仲さん、伊仲浩。四月の十八日ですな。

眞板 はい。

上原 そうか、これには、もつと前の段階だ。あの、大山さんが参加しているのは。

眞板 あ、そうですね。これを集める前の

上原 まだ、その話し合いをする前の段階で、彼らの宿舎でね、何名か集まって、話し合ったことありますね。そのときに、喜如嘉の、これには金城田助さんが載っていないですな。

眞板 そうですね。

上原 じゃあ、打ち合わせする前の段階ですわ。

眞板 普天間のキャンプに集まった？

上原 集まって、そこを一つの拠点として、山城善光がそこを、私は根拠地ということで、あとで、私は言ったんだけど。彼は、

ひとつの拠点としてという言葉を使っていたはずなんだよ。そして、彼もここを利用することによって、若いときからの知り合いがいつばいいいでしょ、そして、ご飯はその食堂で、堂々と食べられるしね(笑) 彼は、「今日は特別なお客様を連れてきたからおいしいものを作ってください」とか言ってます、「お客さんどこですか」って言われると、「この人がいるじゃないか」って、私を指すんだ(笑)

眞板 そうですか。この運動って、基本的に将来的に政党を作るんだ、っていうことが前提だったんですか。

上原 いや、まず、一番最初からの私の観測としては、山城善光さんもやまとから帰ってきた人だし、あるいは大意味関係の方で、平良さんのおじさんのお陰で、宮城さんというね。

眞板 宮城仁四郎ですか？

上原 仁四郎さんとか、戦前から沖繩の経済界や政界で、相当な影響力のある人を良く知っていたという関係で、彼は帰ってきてから、だいたい主な人たちに対してですね、何らかの方法で連絡を取ったり、会ったりして、いま、どういう人が生き残っているかの確認が、彼の調査の第一段階ですね。その中で、彼、個人のこれまで沖繩での生い立ちから、人とのつながりを使って最大限に人脈を利用してだね、やるわけなんだけど、その空白があるわけですよ。そういう中で、今度は彼がその関係ある人たちを通じていろいろな人たちに連絡をつける。そのひとつのまず、最初の組織活動発信基地として、ここを拠点として、宮里栄輝に会ったり、それから、桃原さんとか、その他のいろいろな先輩たち。少なくとも石川を中心として、会える範囲内の人たちに対して、一応、基本的には、誰々が生き残っていますと、この人たちに対しては、年齢的にお元気だから、つながりをつけようじゃないかというところが、具体的な段階のまず、第一歩だったと思いますね。だから、私がどういう役割を果たしたかという、当時、私はま

だ、二十二、三歳くらいの若造で、彼らから見るとね。私は弟子みたいなものだったんだよ。十二、十三歳も年の差があるからね。だけれども、いろいろな面で、私は使い走りとして、大変利便な道具であると思っていた。私がこのヤンバルから出てきたら、可能な限り、最大限度に一緒に行動するということは、あらゆる面で能率的で効率的であった。これはもう二人の暗黙の了解事項であり、未来の沖繩解放のために、合作することを誓いあったわけです。で、私はそれに対してすべてを捧げる。だって、私は、天皇の命によって、何回も死に損なったんだから、もうこれ以上、大事にしなければならぬものは何もないのだから。山城にもし、何かあった場合は、私はちゃんとやるから、ということ、山城の護衛隊長を自認していたこともあったという覚えがある。

眞板 そのときのテーマっていうのは、普天間会談のように、在野に残っている有力者を集めて、沖繩建設について相談していた。

上原 そう。まず、生存者の確認、その人たちが、現在、どこにいるか、そして、健康状態はどうなんだろうか、山城も集まった人たちのほとんどは、東京の沖繩人連盟の時代から知っていたし、彼が沖繩に帰る間に、元の首里市長の仲吉さんが東京に帰ってきている。仲吉さんを通じて敗戦後、彼が、沖繩でお会いした先輩や友人たちで、誰々が生きていくことを聞いていくから、その人たちの名前は、山城善光も知っていたわけだ。特に、東京の人たちについては。そこへ今度、山城善光に続いて、九州にいた宮里栄輝さんが引き揚げてきているでしょ。そこで、宮里さんは宮里さんを中心とした、それができているわけです。私と桑江は、先輩たちのネットワークは作れないわけです。それでも、桑江さんは私より七つ、八つ上だから、少なくとも、先輩たちのことは知っていた、あーあの人だとすぐ分かるわけ。私は何にも知らないんだから。で、そこへ、平良助次郎、こん中に入ってい

るか？

眞板 入っています。

上原 平良助次郎も山城善光と同じく、戦前から関西地方における活動家なんだ。私は、こういう知名人と一緒に名前を並べるような年頃じゃないし、具体的な活動の中で、私をみんなが認めてくれるように、山城はしてくれたわけなんだ。だから、何か会議を開く時など、たとえば、場所を作ったり、どっかに水を飲めるようなところはないかと、そういうような本当の下働きのなね、それを私は精一杯やりました。山城と私の間には、歴史観や現状分析、とりわけ米軍占領下の沖縄に対する見方などについては、総体的な点でも共通点があった。というけれども、人生経験からすると、「沖縄の社会は日本の社会や中国とは一緒じゃないぞ」なんて、先輩ぶったお説教をすることもあった。

私ができることと言ったら、「あ、おい、信夫、要点いいか、私が指示するから。要点だけ覚えておけ、メモしろ」(笑) というような先輩らしい指導をやることもあったんですね。それから、まとまった頃かな、点検して褒めておだててさ。そして、今度はガリを切るとなると、桑江朝幸と二人が協力してガリを切って印刷するとかね。そういう、いまで言えば、まだ半人前いうことだった。私も謙虚にだね、先輩たちの意見を聞いたり、私がそうすることによって、俺の役割はいつたい、なんだろうかということも、真剣に考える。もし、アメリカが襲ってきたらどうするんだ(笑) というようなことも考えただろうな。彼らが一を言えば、私は、十を考えるとかね。電話がないから最善の方法で連絡を取るとかね、そういうことです。なにしろ、十四、十五歳から強制的に鉄砲撃つ、拳銃撃つのを訓練されたんだからさ(笑) こちらとら、一般の日本の兵隊さんよりか、よっぽど勇敢なはずだから(笑) ひとつは、そういうことをね、やつぱり、命がけで沖縄人を立ち上げようと努力している先輩たちの安全を守るため

には、私は必要な行動もするということですね。その必要を十分に感じていました。

しかし、そういうことは、いつの間にか、志喜屋知事暗殺事件の首謀者として、私が(注・沖縄を)離れたあとでね、CICはそういううわさまで立てたというのだから(笑) 今日的に考えるのだが、アメリカは私を極悪人に仕立て上げることによって、民主同盟を葬ろうと画策したのだろう。

眞板 普天間会談で、どういう話し合いがなされたのか、ということでご記憶にございますか。

上原 結局ね、もうすでにその頃は、山城善光は生き残った主要な人たちと会って、一応の意見交換をしているからね。改めて、みんなの意見も参考にしながらみんなの前でそれを総括した。さて、沖縄は、いつたい、誰がこんなことを悲憤慷慨してね、語り合った。ならば、われわれはいま、どうすべきか。先輩方が、沖縄を愛する赤心が本当に分ったね。アメリカはね、下手をする、弾圧するかもしれないし、それに対して、どう対応するか？特に、仲宗根はそれに対して、民政府の出兵を激しく批判したと思う。副知事の又吉康和とは戦時中は、同じ本部半島の山の中を一緒に逃げ回っているんですね。あの、仲宗根源和と助け合っ。それなのに、二人は左右両派に分かれて、だんだんと犬猿の仲になっていくわけですね。そういうことも、そこでも、語られたと思います。そのとき、誰言うとなく、数人が、だから、沖縄人(ウチナンチュ)は、もつと自覚して立ち上がるべきだと言っただね。俺たちの沖縄は、俺たちウチナンチュが、治めるべきだと。まずは、人民大衆を啓蒙して、立ち上がらすべきである。そのためにも、大衆を組織化しようじゃないかと。そして、それと同時に、われわれのこの話し合いの場をもつと、広げてね、全沖縄的に広げて、大討論会を催す場所を作ろうじゃないかと。

眞板 それが、建設懇話会に。

上原 建設懇話会になっていくんですね。さて、この会談は関係の警察署に届出をしようと、しなかったはずですよ。しかし、宮里さんは大変注意深い方だからね。

眞板 これはね、普天間のやつは、ぎりぎり直前にしています。

上原 直前にしている？ 直前に行つてね

眞板 山城さんのこれ(注・『荒野の火』)には、

上原 だと思ふんですよ。

眞板 野嵩署に、集会届け出しています。

上原 いやあ、そういう状態です、なんかあったときは、大変だ、という心配。私の豚買いのときのそれではないけれどもね。いざとなつたら、それって、そういう人が一人や二人は必ずいるんだ。そこも見ているんだよ。

そしたら、今度、中にはね、誰々は大日本帝国なんかの沖縄県の何々長であつたとかね(笑) というような。沖縄のいわゆるやまとから帰つた、やまとの方では、元軍人、軍閥の手先だな、特別官僚の人は、いわゆる、何令だつたかな？ 軍司令部から出た、レッドパージは？ 共産党のなんではなんだけれど。

眞板 財閥解体？ あ、公職追放ですか？

上原 あ、公職追放だ。公職追放は、やるかどうか。すると、政界追放はお願いして出てもらうというふうな方はね、ダメ、いや、最初から、反対されるんじゃないかと。そういう話も出ましたね。

眞板 実際、沖縄では公職追放、行われてないです。

上原 ない？

眞板 唯一、引つ掛かったのは、当重剛さんだけですよね。

上原 だから、平良(注・辰雄)さんもそれなんです。

眞板 平良さんは、本当はアウトなんですけど、大政翼賛会の青年部長をやつていて、彼は戦前から農漁民関係の世話役のような

ことをなさつていたんですよ。それで、人望が厚いつていうことで、彼はぎりぎりセーフになつたんですよ。

上原 そういう話も出ましたよ。そんなに複雑ではないけれどこういう意見もあつた。我々、沖縄人は、結局、沖縄人のためになることをするには、どうすれば、いいんだ、ということ考えた。あのとき、もし、軍部に反対したらひどい目に遭んじやないかと。当時、多くの沖縄人がひどい目に遭わされている。だったら、適当にやつぱり、沖縄人のためには、なんといいかね、政府と沖縄の中間に居てだね、調和するんとか役というんだ。日本語では。日本の軍閥と、あるいは沖縄にいる日本の軍司令部と、大衆とのつながりをその中間に居て。仲介役じゃない、何て言うかね？

眞板 媒介ですか？

上原 媒介と言うのかね？ それとも緩衝装置、あるいは緩和作用と言うのかね、そのために、止むを得ずしてそういう立場に追い込まれた人が平良辰雄だと語る人がいたね。確か、保険会社の嘉数昇さんか。

眞板 この時点では帰属問題とかは？

上原 えっ？

眞板 帰属問題は出なかつた？

上原 まだ話にならなかつた。

眞板 平良さんは、当然、復帰論ですよ。

上原 そのときは、まだ、公言してませんよ。

眞板 まだ、言っていないんですか。

上原 まだ、言っていない。結局、彼の「復帰論」っていうのは、おそらく彼が民主同盟に入つて、民主同盟の討論会の中で、独立したら経済的に成り立たないじゃないかということについて、彼自身の疑問点を戦前の経験を基に、いくらかの具体例を挙げて説明したのが、はじまりだつたと思う。したがって、まだ復帰論になつていなかった。

眞板 五〇年の群馬知事選挙のときに、こつそりと、もう復帰論を言っていたんですが。

上原 それは抜けてて、当然ですよ。これはまだ、四七年のときですから。まだ、具体的に復帰論っていうのは。どこに復帰するの、必ず出たはずなんだけど。これは、平良さんが知事になったあとでしょ。はつきりと、その打ち出したのは。昔も今もそうだが、政治家は当選するためには何でもありですよ。

眞板 それで、全島一周して署名集めて、復帰運動を始めるんですね。結局、米軍政府に生まれちゃうんですけど。

上原 だから、その前の段階ですから、その二年ほど前のことですからね。

眞板 基本線は民政府批判ですよ。

上原 民政府、民政府だ。まだ、軍政府の批判までは行かない。だが、すでに不信の一端が出ていたと思う。まず、民政府の又吉康和を主体とする批判が、中心的な主張です。そして、将来は人民による自治政治を目指すということだったと思う。

眞板 又吉康和の何がいけなかつたんですか？

上原 又吉康和はね、結局、彼を私は二、三回くらいしか、顔を見ていない。直接、会って話していないんだ。彼の話は、なんかのついでに、聞いたくらいで、志喜屋孝信のところ、山城善光と一緒に会ったことがあるんだろうな、きつと。で、志喜屋孝信に会いに行ったときに、山城善光、私の名前出しているから、彼は、比嘉良徳さんの紹介状を持って、来ているはずなんだ。それで、行つたと思うんだ。

このときの時間の流れは、実に早かつた。とにかく、山城善光、ヤンバル、出てくる。私も辺土名あたりを中心に、無休の態勢で、組織活動していたが、一週間に一回くらいは、喜如嘉に行つて会っているのだから、それで、いついつこうしよう、どこで会おうと、こういう打ち合わせをした。電話がないからね。役場

にはありますよ。だけど、役場は使えないからね。

眞板 これ見ても、この当時、交通事情も悪いし、郵便事情も悪いのに、すごい動き方をしているなと。

上原 いかにも、体力を有効に使うかと、で、時間も有効に使うかと。だから、いったん出たら、石川なら石川行く、二、三日は四、五日は帰らない。カネもなく動いている。

眞板 なんか、ついでに回られているみたいですが。

上原 行つたら、今晚どこに泊まるかとか、私と一緒に動いている山城善光は、よっぽどのことがない限り、どっかに泊まる場所を、先に見つけているわけなんだな。なにしろ、彼は文化人で、年も年だし、野宿はあまり、健康にも良くないのでね。たとえば、宮里栄輝さんの家に行くなら、そこで、いっぱいご馳走してもらつて、山城は宮里宅に泊まる。しかし、私は寝る場所を要求しないから、私の休む場所はいっぱいあるから。でも、空いた部屋があるときは、泊まらせてもらい、非常に幸せな夢を見たこともあつた。そういうことが、極めて簡単にできたっていうのも、彼にとつて野宿が苦にならない私は、貴重な存在だったんでしょね(笑)

眞板 こういうの参加なさつて、上原さんなりに、国頭での農村の生活改善運動みたいなものを実践なさつたわけです。そういう実績があるにしても、もつと、ひとまわり以上上上の在野の有力者たちの話を聞いて、一番影響を受けた人はどういう人なんですか？

上原 結局、まず、第一にですね、かつて軍国主義に何らかの形で協力した人でも、本音は、やつぱり沖繩を愛しているんですね。止むを得ずして支配者に抵抗できず、引き受けたんだという人だね。権力に弱いのは、ウチナンチュだけではないんだからね。

私が、十四、十五のときに、「琉球の兄弟たちよ！」と、反満抗日軍からこう呼ばれたとき、「あつ、俺たちを兄弟と呼んでくれる仲間がいるんだ」と非常に感動したことを今も、昨日のこと

のように覚えているんだよ。そこには、人民っていうのは、民族の如何にかかわらず、やっぱり、支配者と被支配者の関係というのは、いずこも同じなのかと。これらの人たちの話を聞ききながらね、思ったよ。

さて、敗戦直後の沖縄で幸運にも生き残った人たちの中にも弱いものはこういう抵抗しかなれないのかと悲しかった。だけれども、彼らの本当の本心を聞いてみると、彼らも胸を引き裂けるほどの反省をしているのだと分った。彼らは、これ以上の抵抗ができないから止むを得ず、言いなりになったんだということが分かってだね、私は周りに同情すると同時にね、やっぱり、そういうことに、小さいときから、運良く、時の権力に対して、もろに真正面からぶつかって、抵抗してきた私は、馬鹿だったんだらうかな、それとも、幸せだったんだらうか、と思ったりしたね。

やっぱり、若さゆえに、ということと、私が育った日本の植民地という環境はそうだったんだらう、ということが、分かり、それ以降は、沖縄で生き残った、この先輩たちに対して、もつと理解のある、おらかな気持ちで、兄弟として、先輩として、お付き合いをすべきだと反省した。それは、上原つとやつは、大変おだやかでおとなしい、青年だと。こういう印象を先輩たちに与えたと思いますな。しかし、それまで、私の見てきた日本人の大人とというのは、天皇のために、というのと、こういう抵抗しかなかったんだからね。この人たちに対しては、やっぱり、前向きに励ますことよって、人民大衆と共に立ち上がってくれらるだろうというのを期待するよう努力すべきだということを学んだ。そういう勉強の機会もあってか、私を自分の年よりか、八つも九つも十もだね、年上に思った人もいたようです。なにしろ、考えてみると、当時の私はひげを伸び放題、服装は米軍払い下げのだぶだぶの軍服だったから、なおそう見えただらう。日本共産党の一番最初の沖縄県委員の亀次郎さん（注・瀬長亀次郎）と一緒にや

った人で、国場幸太郎さんという……  
眞板 いま、宮崎で先生をやっている。

上原 彼は、去年、たまたま会合があつて、講演に来ていたんだけど、そのとき、彼は講演の中で、沖縄民主同盟の問題を取り上げて、「その当時の先輩がここに座っております」ってね。彼は私を指してね、「上原信夫さんって方です」。そして、私、立って、頭を下げて、私、しょうがないから、「上原です」って、頭下げたんですけれど。そして、座った。あとで、彼は、「上原さん、あんた、沖縄で運動していたときは、三十三歳前後でしたか」と言うからね。「いえ、私はそのころ、そうですね、二十二、二十三歳だったと思います」って言ったらね、みんな大笑いしたな。そして、瀬長や彼らも私を三十代だと思っていたのだなと、自分の年を改めて、数えてみたくなつたよ。私の言っていること、やっていること、当時の常識からすると、大人のような人食つたようなことも平気でやつたからだと思っただけだね。つい最近のことですよ（笑） 会場にいた、私を知っている連中は、「上原さん、あんたずいぶん若いですね。三十三歳には見えません」と。あとで、冗談で冷やかされたんだけどね。そういうことだから、おそらく、当時、沖縄の先輩たちで、私の本当の年を知っていたのは、山城善光と桑江さんくらいだったと思うんですよ。

さて、普天間会談後は、「沖縄建設懇談会」の準備に向つて全力投球した。もうその頃になると、桑江朝幸の本でも書かれていますように、懇談会参加の呼びかけの手紙を届ける作業をしていた。当時は、郵便はあつても、郵便屋さんなんて信用できない時代ですからね。とにかく、桑江と二人で、手分けして、手紙を届けた。きつと、山城善光の口頭の文言をまず桑江朝幸が整理してだね（笑） それを私がガリを切つて文章印刷する。何日間か、寝る時間になつたんじゃないですか。そういうことをやって、あとは、この石川を出てから、知念に移つたんですよ。



眞板 そうです。四六年の十一月に移っています。

上原 私は、知念まではね、下見に二、三回行っているはずですよ。山城善光と二人は。思い出すと、私は、「南部視察旅行」でも知念を通っているんだよ。

眞板 普天間会談のあとですよ。

上原 会談のあとです。会談何日にありましたか？

眞板 これはですね。四月の二十一日です。で、沖縄建設懇談会が五月の五日です。

上原 もう、十何日間ですか。普天間会談のあと、山城と二人は、民政府まで行っています。そのときに、沖縄民政府の宮城友信さんか、などにお会いしているはずですよ。そして、ものすごく忙しくて、資金もだんだんなくなってきました。あんだ、給料はいくらあったかっていうけど、給料は一銭もなしだからね。

眞板 (笑) そうですか。やっぱりな。いや、そうかなとは思ってたんですけど。

上原 親父からね、当時は軍票ですか？ 軍票の金額は忘れたんですけど。

眞板 実は軍票から新円に変わっているんです。

上原 軍票だったと思うのね。それとも、日本円だったのかな？とにかく、親父に、小遣い、旅費下さいって、貰ったのだが(笑)それが、今度はなくなるのが早すぎるでしょ。もう、少しでなくなりそうだと思うたら、都合をつけて、一応、ヤンバルに一週間か二週間に一回は帰って、少し仕入れてきたんだ。親父としては、私がまだ手に包帯を巻いていたので、大変心配して特別の配慮をしてくれたんだ。大変、理解のある親父だね。「少し多めにくれよ」と言ったらね、「いまはこれだけしかやりくりできないんだ」とか言ってるね。それを押し頂いてだね。「大事に使いますから」とか言って、それで、「一年くらい食える」とか言って(笑)そしたら、ひと月も経たないで終わってしまった(笑)

眞板 いくらぐらい？

上原 当時、そうだね。正確な金額はもう思い出せないが、十五円とかの大金だったと思いますね。これ、日本円だったのかドルだったのかも、忘れましたがね。

眞板 まだ、当時は、一般的にはドルは流通していないですね。一部は……

## ■当時の食料事情

上原 軍票。軍票だったような。なにしろ、生まれつきカネに縁がない人間だから、カネのことは忘れたね。

その頃は、まだ、ほとんど物流経済は機能停止状態なんだから、市場では売るものも買うものも、みな、闇物資か「戦士」たちの戦果くらいのものでしたでしょ。たとえ、私がどこかで何かを食べても、カネとってこれないからね(笑) 本当はとられたら、困るんだがね。それから、知り合いのところへ行ったら必ず、「信夫、めしを食べていますか」って心配してくれるんだ。

中国ではどこに行ってもだね、「チイラファン・メイユー」って言うんだ。ご飯食べましたかっていう、挨拶なのだ。そしてね、「メイユー」って言うと、「ライライ」ってすぐ(笑)食べさせてくれるんだ。しかし、沖縄は昔はどうだったか、知らんけど、なにしろ、戦後の私の生活した沖縄ではね、みんな、腹いっぱい食べてないじゃないですか。だから、一般市民は、何かと他人の食事についても、気を遣ってくれたね。知人に会うと必ず「信夫くん、めし食べたか」と言ったね。「食べてない」と言うのと、「じゃあ、来なさいよ」と呼んで、どっからか、何かを引っ張り出してね。食べさせてくれたもんですな。有難かったですね。

そういう点では、「いちやればみな兄弟」の昔から、とりわけ

敗戦直後の廃墟の中から、立ち上がるうとする沖縄人の強い、同胞愛の表現だったろうと思う。同じように、腹いっぱいめしを食えない大衆がね、いっぱい、いたんだ。だから、戦後は、とにかくどこへ行っても、私の顔を見ると、「おい、上原、キミ、まだめし食っていないだろう」（笑）　と申すので、最初は、格好つけて「めし食べたよ」なんて言ったかもしれないけれど。私が覚えているのは、「おまえ、めし食っていないだろう」と、顔見たらわかるんだな（笑）　ほとんど、そう思ってた、「あ、食べないんです」。すると、「上れ」と。そういうことで、実際には、ほとんどカネを使わないだろう。まず、ヤンバルの辺土名から出て、名護一帯までもそうです。名護では、岸本さんっていう人が、簡易宿屋をね、昔からの宿屋だったんだろうけど、戦争で焼けてなくなっただが、同じ場所、急ごしらえの小屋を再建してね。岸本旅館の看板が出てたので（笑）　名護を通る時には、いつも遅くなって泊まる場所もないから、そこへ行つてね。「おじさん、泊めてください」って言うよね。「いくら、払えるんだ」と聞くので、「実は少し足りないですよ」と言え、「じゃあ、泊まりなさい。キミは特別だから」と、常時ただで泊めていたのだ。岸本旅館に泊まると、一晩中、いろんな私の情報や南部の視察談義をね（笑）　聞いて、もう、「これが宿賃だつて」言つてね。めし代も、それから取ってもらつてさ。

名護には照屋規太郎（注・民主同盟名護町支部長）さんが経営する照屋病院というのがあって、その方は、民主同盟の中央委員だったから、私が名護を通過するごとに、南部の活動報告をしなきゃいけないので、お宅に報告に行くと、何時に行こうと、夕方まで待たせるんだ。あーだこうだと言つてね。そして、夕めしをご馳走してくれて、時にお酒はねちよつと、私は、そのころまでは、お酒はほとんど飲む機会も、その習慣もなかったし、また、お酒は戦後少なかったからね、お酒はね。私が行ったときにね、

一杯やろうと、銚子一本持つてきてさ、二人で飲みながら大いに語る。照屋さんの家では、そういうご馳走をさせてもらつてね。やっぱ、病院でしょ、病院だから、カネがあまり流通してないときだから、「これで診てください」とか、「これを召し上がってください」って、持つて来るんでしようからね。あそこへ、行くとき奥さんの手料理をいつもご馳走になれたね（笑）　そうだと、照屋病院での出来事、いつか話しましたね。CICが乗り込んできて、危機一髪のところ、私は救われた。そういうこともありました。だから、名護から国頭までの山原路の方では、カネ一銭も使わなかったね（笑）　その他に、小学校のときの先生で、日高清喜先生もおりましたから、「ここを通るときは、必ず寄れ」って命令されてね。何か月間か寄らなかつたら、「また刑務所かと心配していたぞ」と怒られたりして、それで、たまに挨拶に行くとき、「入れっ、めしを食べろっ」と。まず、そういう師弟愛だったね。

だから、ヤンバルから石川。石川に入るとね、石川は政府の直轄下だからね。首都になつていんだな（笑）　すると、そういうことはできない。何かもう完全に、いわゆる軍作業の根拠地の一つだから、軍政府、民政府の職員たちの天幕の「高級住宅街」だからね。

カネを出さないとね、メリケン粉にお湯をかけて、溶かして、のりみたいなやつね、それに塩味をつけたようなやつをね。これもなかなか私たちには、手に入らない「高級品」だったね。あれでも、二銭？　くらいは取られたんじゃないか（笑）　で、いつの間にかね、石川では、どうやって調べたんだっけな。国頭村安田の人でね。金城秀一が、国有林の技師をやっていた頃、彼にいろいろと若い頃に、世話になつたという人がいたんだ。そうだ。比嘉さんっていう人。石川ビーチの入口あたりに比嘉散髪屋っていうのがあらずだと教えてもらったので、後日、看板が上つてい

るかどうかと調べたら、なんとまあ、石川ビーチの入口付近に小さな散髪屋が、掘っ立て小屋でね、テントで作った、散髪屋らしいところが、あつたので、そこ行つて見たらね、どうも、比嘉さんとかつていう人らしい。それで、「奥のヤンバルの金城秀一さんご存知ですか」って聞いたたら、飛び上がってびっくりしてね。

「あなたは、どなたさんですか」と言うので、私が「奥の秀一のいとこで、上原と言います」。「奥はこの屋号だ。家の名前を言ってくれ」。「新門（ミージョー）」って言ったらね。「直榮さんの子どもか」ってね。うちの親父知つていたんだよ。それで、早速散髪してあげようって、すぐ、次のお客さんがいなくなつたら、散髪をしてくれてね。ひげはぼうぼうに伸ばしていた時だつたですけどね、ヒゲは剃れない。傷が残っているからね。で、「これから石川にいるときは、必ずこつちに来い、散髪してあげるから」、そして、「ここにいる間、キミ、めしはどういうふうに着ていくんだ」と言うから私が、「いやあ、あつたら食べるし、なかつたら食べません」って言ったらね。「こつち来い」ということだね。「キミ、ひとり分くらいならなんとかなる」、軍作業員らはね、食品を持って来て、散髪代にしている。だから、「食べに来い」って言うってね。それから、石川でもカネなしで、食べるようになった（笑）。そういうところを何か所か見つけていくわけですよ。それで、今度、那覇に拠点が移つて、知念に移つたことは、やっぱり、那覇も開放されて、那覇の住民が入ってくるし……

眞板 では、知念はあまり行かれていないんですか？

上原 えっ？ 知念は懇談会の前に、二、三回くらい、行つたわけですよ。その後の問題については、民政府はそこにあるんだから、否応なしに、行つたんですよ。知念から那覇に引き揚げるのは何年ですか？ 民政府が。

眞板 いや、そのときは群府（注・群島政府）ですわね。

上原 えっ？

眞板 群島知事政府になっていきます。

上原 群島知事政府になって、那覇に

眞板 そのときは、だぶん、上原さん、沖縄離れられていると思います。

## ■党解体のきっかけになった「自由沖縄」出版事件

上原 あ、そうか。まだ、民主同盟になつたときは、政党関係の事務報告などで何回か知念に行つているんですよ。

それから、山城と桑江の二人が、米軍の監獄にぶち込まれて、高等軍事裁判やるときに、高等軍事裁判の党の証人ということで、出席しているんだよ。それは、民主同盟の責任者が、どうしても一人出席しなきゃいけないということで、仲宗根源和と相談したらだね、「情勢が微妙な時代だから」と言つて、引つ込んでだね。彼は「出ない」となつたので、軍事裁判には、沖縄民主同盟代表として私が出ることになつたからね。それに、出席したときには、知念部落で、軍政府の通訳の大城ツルさん。それで、後に沖縄婦連の会長もやつたという方なんです。婦連については、私は、帰国後に聞いたのでよく分らないんですけどね。その人の家にも何回か泊まつている。沖縄にもこういう女傑がいるんだと知つて、心から尊敬した方がね。

実は、この人のお陰で、山城善光と桑江朝幸は、罰金刑でね（笑） 監獄に入らないで済んだんですからね。山城と桑江さんが捕まつたんだから、「次はキミだ」と、多くの人が、私を守つてくれたのです。しばらく、防衛態勢を強化していたので、具体的な問題の細部については、あまりはつきりしないけれど、高等軍事裁判があるということで、軍政府の通訳の大城ツルさんが、人を遣つて、民主同盟に連絡があつたので、私たちは、臨時幹部

会議を開いて至急、仲宗根委員長に高等軍事裁判にどうしても、出席しないと、山城と桑江は、極めて不利になるんだから、必ず組織の責任者が出席すべきだってね。そこで、何とか人っていうんだ。アメリカ式の裁判は、保証人かな。証人かな。法律的な名前はちよつと忘れたけれども、そういうことで、至急なんか人選すべきであると、それを党で決定してくれということ、私は大城善英さん等と一緒に仲宗根源和を訪ねて、再度、ご決意の程お願いしたのだが、彼は、「上原くん、極めて情勢は、深刻で微妙だから」と、なかなか「うん」と言わない。これまでの会合では、何十回も激しく、又吉康和を批判し、非難していたのに、いざとなつたときに、彼はだね、やっぱり、自分の命が惜しくなつたんだ。彼は、もし、私が行って、私まで捕まったらどうするんだということなんだ。それで、「申し訳ないがキミ、上原くん、もう一度、検討してくれないか」とこういう言い逃れをしたんだ。それで、私は、そこで啖呵を切つた。「あんたは最高責任者だ。あんたの指揮に従って、われわれは、今日まで闘ってやって来たのに、同志の桑江と山城がだね、沖繩始まって以来の高等軍事裁判で、銃殺刑にされるかもしれないっていう瀬戸際に、どうして、委員長は断固と立たないんですか」って、私は食って掛かつたんだ。そしたら、彼はね、あーだこーだもぐもぐしていた。そして、私が最後に「絶対だめですか、委員長！」と言うと、彼は、何分間か経つてから、「勘弁してくれ」と頭を下げたので、もう期待するもしないもなかったのだ、委員長から党の全権を「私に任命することです。そうすれば、私は全責任を持って、沖繩民主同盟の名誉のために闘うから」と言うかね。仲宗根は、「頼む、上原くん。頼む」って言っているんですよ。ああ、この人は死ぬことが怖いんだと分かつたので、「じゃあ、同志山城と桑江を、助けるために、私は同盟を代表して、できるだけのことをする。しかし、アメリカに言うべきことは、ちゃんと抗議した後、私

はじゃあ、二人と一緒に銃殺刑にされるから、あんた、ご安心しなさい」とさよならした。

わが民主同盟は、この事件を境界線として、急速に内部分裂に向かつて行つた。ここで、説明しておかなければならないのは、運動初期、私たちは、仲宗根に対する大きな期待があった。かつて、日共が弾圧を受け、九〇%以上の党幹部が、転向した際、仲宗根もその最後に転向した一人だったが、沖繩戦の洗礼を受けた彼は、運動の初期はまるで、人が生まれ変わったような言動が多かつたので、私たち、青年は、ひそかに、仲宗根のマルクス・レーニン主義への復活を期待していただけに、私のシヨックは非常に大きかつた。それが、沖繩民主同盟をして、予想より、早く瓦解させたのである。

そして、知念の大城ツルさんの官舎に報告に行つた。天幕葺きの大きな家。夕方しか帰つてこないで、それを待つて、大城先生に対して、「仲宗根源和先生は、情勢が極めて微妙であるから、出席できないので、私が委員長の任命によって、民主同盟の全権代表として、高等軍事裁判に立ち会います」って報告したら、大城さんは「それはだめだ。あなたはね、桑江朝幸と山城善光と一緒に本当は捕まつて、当然、監獄に入つていなければいけない人間ですよ」と。「CICは、ひと月くらいね、何度となく追いかけていたことを、知っているでしょう、あなた。もし、あなたが出て行つたら、向こうは喜んでね。あんたをそこで捕まえてしまいますよ。捕まつたら、山城善光と桑江朝幸と同じように、裁判を受け、二人よりも重い処罰を受けますよ。逃げていたんだから、よしなさい。あなたはまだ、お若いんだから。もう一回、仲宗根さんとお話し合いをしてみなさい」って言った。「いや、私は、仲宗根さんのね、気持ちは腹の中はもうすつかり、承知していますから、これ以上、お願いする必要はありません。もし、軍事裁判に行つて捕まらうと、私は民主同盟を代表して、高等軍事裁判に

参加して、全沖繩人を代表して、私の意見を発言します。そこで、即刻銃殺されても、構わない。そう決めてきたんですよ。だから、裁判の日程に合わせて、私は出席するんだから、そのときの注意事項を、大城先生ご指導下さい」って言ったからね。先生は、こんな馬鹿な男の子もいるのかと思つて、開いた口がふさがらない、というような格好をしてだね。「あんた、食事はとりましたか」って言うので、「とっていいない」って言ったからね。「私がこれから、夕食を作るから、一緒に晩飯を食べましょう、あるいは米軍は、もうあんたが私の家に来たことも、分かっているかもしれないから、ここで今晚泊まりなさい。もし、下手をして逮捕されると、軍事裁判はダメになりますからね。山城さんと桑江さんが苦しむんだよ」と説教されて、後は、アメリカ軍のおいしいご馳走をいっぱいしてくれたね。そして、そこには、新しい客用のベッドが一つあった。真っ白い新しいシーツを敷いてくれた。そこに、今度は寝巻きまでね、出してきてくれたね。で、お風呂、そこにあるから、あんた入つて、自分で休んでください。食事の時分だったのだが、大城先生は二人の子どもがいた。一人は、女の子でね、十七、十八くらい。上は男の子で二十歳くらいのがいましたよ。私よりか、二つ、三つ下くらいのがね。さて、大城先生のお家が、あまりにも高級すぎてさ、私は日中、飲む飲み水さえ、自由に飲めないのね。シャワーもシャワーと、あふれ出てくるんだ。私はこのもてなしで、すっかり、興奮してね、ひと晩中、眠れなかつたなあ。これならもう、数日後の軍事裁判に、出廷したら、アメリカの奴らに沖繩人の誇りある態度で、言うべきことはちゃんと云つた後で、即銃殺されてもいいと思つたよ(笑)

眞板 ずいぶん、志が低いですね(笑)

上原 大城先生の旦那さんは、お医者さんだったんですね。二人はアメリカに留学か何かしているんですね。それで、英語は米軍の普通の通訳よりも、上品で立派な通訳だって皆から誉められて

いたからね。で、その人が、いろいろと私たちの運動を聞いてね、「あんたのような青年も沖繩にいるんですか」ってね。喜んでいましたよ。私からすると、自分の母親くらいだね、年頃だったんだけれども、感動しましたね。そして、先生が「軍事裁判に出廷した場合の注意事項を与えるから、あと二、三日経ったら、もう一度、今日と同じ時間帯で、目立たないように、ここに来てください」と。そして、「当日は私の家に泊まって、私の車で軍政府へ行こう。でないと、あんた、米軍に捕まったら、せつかくの私の計画が、すっかりダメになるから」ということを厳しく言われた。

眞板 大城ツルさんが、弁護士みたいなことも、やってくれたということですか？

上原 いや、米軍側の通訳で、弁護士でなく相当高い地位の通訳。たとえば、知念忠太郎とかね、その他、三名くらいの弁護士の通訳を一人でやってた。その全通訳を彼女が引き受けたんだよ。軍部の通訳として、裁判のあとで、高等軍事裁判を無事終了し、しばらくしてからの話なんだがね。山城善光と笑つたのはね、俺はよくわからなかったが、山城が言うには、他の通訳が緊張し過ぎてね、不完全に通訳すると、大城さんが、代つてくれたんだそう。しかし、大城さんの通訳は、他の人の一倍半くらい長かつたって言うんだ。だから、弁護士の言い足りない分も含めてだね、大城先生がね、補足説明していったんだそう。

私は裁判の前日は大城さんの官舎に泊まったとき、私に次のような命令が出された。「一つ、私の指揮にしたがつて、私がそこで、とまれと言つたら、そこで待つていなさい」。そして、次は裁判長からね、陪審委員かな、ちよつと、名前は忘れてしまったが、日本のその裁判でもあるはずですよ。日本にないのもアメリカにはあるのかな？「裁判長から、おまえに、発言を要求されたら、簡単にひと言ふた言だけ言いなさい。私(注・大城ツル女

史)が訳をちゃんとするから」と出発前に注意されて、「発言は必要以上の言葉を絶対と言いな」と再度厳重な注意をされた。

裁判が後段になったところ、大城先生が裁判長の通訳として私に向かって、「船越(注・尚武、民政情報部長)さんの認可を得た上で『自由沖繩』を発行したのか」と聞かれたので、私は、「山城さんと一緒に行つて、認可許可を申請して、オーケーをもらいました」。私が、はつきりと言った。そしたら、大城さんが、にこっと笑うように見えたんだ。私にもにこっとしたと思う。なにしろ、今回の高等軍事裁判の決め手は、この一点にあったからだ。私は、あ、これで合格だと思つた。その次は、「『自由沖繩』印刷した用紙は、どこからもらつたんですか」と言うので、印刷用紙は桑江朝幸と二人で行つて、どこそこの琉球なんとか、なんか、その軍政府かどこかの印刷所、いや民政府の新聞社だつたと思う。

※山城、桑江両氏の弁護人は、富山徳潤、山田政功、知念朝功の各氏。(『荒野の火』山城善光著)

眞板 ああ、『ウルマ新報』

上原 あ、『ウルマ新報』の使い残したものをただで分けて、貰つてきたんです」と答えたら、裁判長は了解したようだった。

ホツとした私は、最後にひと言、何か言うべしと思ひ。「あんたち、アメリカは、キリスト教の国じゃないのか、だつたら、沖繩の人たちがね、キリスト教の教えに基づいて、自由と民主を求めて指導をお願いしているのに、なんで、あんたちは、飢えくたびれている沖繩人の最低の政治要望まで弾圧するんだ。人民がパンを求めているのに、なんで石を与えるのだ。まったく、山上の垂訓に反するじゃないか」とやつたんだ。それが、いけなかつたね。そしたらね、裁判長、立ち上がつてね、この野郎っていうような形相でこちらをにらみつけたんだ。すると、すぐ大城さん

は、裁判長に対して、優しい顔でね、私のための通訳を始めたんだ。そうしたらね、裁判長は「ああ、そうか」という納得したような顔になつて、座つてしまった(笑)。それで、大城さん、走つてきてね、「信夫さん、私が言ったこと、忘れてはいけません。せっかく、山城善光と桑江たちはね、二、三ヶ月くらいね、監獄ですみそうなのに、ぶつ壊してはいけません」って小声でお叱りを受けたんだ。あー、私は大変なことをしてしまつたんだとわかつた。大城さんは、「黙つて、座りなさい」と命令して、その裁判長に何か話していた。それは私のための補足説明をしたらしい。それから、何分間かして、一服したのかな、休憩かしてだね。最後に判決を言い渡した。で、その判決が、これに山城善光が書いてある通りだね(笑)。罰金刑、五十ドル? の判決が出たのだ。山城善光と桑江朝幸は、そのまま、憲兵隊に連れて行かれてしまった。

さて、私はどうするかなあと、思つていたら、大城さんから、ここに座つて動くなつて言われていたことを思い出して、じーっとしていたらね、大城さんの指図で、米軍の二世通訳が来てだね、ここに来なさいと手招きするので、それについて行くと、二世の人は私の背中叩いてね、おとなしくね、サンキュ、大丈夫だと、別室に連れて行き、私は、そこに座つて待つことにした。大城さんが、仕事を片付けたあとで、彼女の車で、知念の家まで連れて行つて、またその晩もご馳走になつて一泊した。

※この裁判での罰金は千円。(『荒野の火』山城善光著)

眞板 あの、大城ツルさんのお宅は知念なんですか?

上原 えっ? 知念。自宅っていうか、民政府の

眞板 官舎ですか?

上原 官舎ですね。天幕でも普通の個人住宅などは、比較になら

ないほど高級です。当時の軍政府職員・大城さんたちの高級住宅は、おそらく、志喜屋知事の住宅よりも立派な構えじゃなかったかなと思います。

眞板 あ、天幕なんですか？

上原 そう、天幕、天幕

眞板 規格住宅にはまだなっていないんですか？ ツー・バイ・フォーの

上原 あ、ツー・バイ・フォー。

眞板 テントでしたか？

上原 テントだったと思うな。テントだったと思うね。柱などは鉄パイプだったと思うね。壁もせんぶ、テントだったと思うな。で、床だけはちゃんと、びしっと、木の板だったと思うね。なにしろ、半世紀も昔のことだから、細かいことはハッキリしないな。お風呂がついていて、やっぱり、ツー・バイ・フォーだったかもしれない。あの、天井なんかはないですよ。そのまま、むき出しの天幕だったんだ。天幕はせんぶ、新しいまっさらのものでね。そして、その晩は、「あんた、やんちゃだね」という意味のね、あまりにも命知らずだということ、お説教されたので、おとなしく静かに黙って聞いていたと思う。その後、何回か会ったけれども、もうその頃、私はCICの追及は、いつそう厳しくなつて、動けなくなつてだね、その家には行ったことがなかった。

(中断)

## ■民主同盟結党大会——宮森小学校

眞板 ……宮森小学校っていうと、戦闘機が墜ちるちましてですね、大惨事が起きたんですよ。宮森小学校っていうのは、このあ

との沖縄の人にとつては、忘れてくない場所ではあるわけなんです。軍と隣り合わせにいるがゆえに、そういう大惨事になった。パイロットはね、途中で、パラシュートで降りて、助かっているんです。それで、余計に腹が立っているわけなんです。確か、児童は五十、六十名ほど死傷して……

※宮森小学校事件：一九五九年六月三十日に米空軍機F-100ジェット戦闘機が、宮森小学校に墜落・炎上。同校児童を十一名を含む十七名が死亡し、児童百五十六名を含む二百十二名が負傷した。

上原 何年ぐらいですか。

眞板 五〇年代だったと思います。

上原 そういうことを聞くと、あの頃の小学校っていうのを思い出すね。本当につつかい棒を入れ萱葺きだった。あるいは、アメリカ軍の使い古したテント。それをこうかぶせて、子ども背丈くらいまでは壁も萱葺きですよ。その上の桁まではいわゆる「明り取り」の空間となつていて、実際には窓がない。雨が降ったら吹き込む。そういう状況の下での演説会ですから、当日の演説の内容は、自然と学校建設と教育問題に触れるようになる。そんな中、アメリカは沖縄にこれと一方的に厳しい要求をしているにもかかわらず、学校の子供たちの学用品、文房具、日用品など、誰が持ち込んできたのか、米軍・民政府から犯罪者扱いされている密航者じゃないかと。その勇敢な密航者を称える演説を私も何回もやっていたんだ。

そのころ、子どもたちは勉強しようと思つても、鉛筆がない、紙がない。そういう時代だから、とりわけ、私はあの頃の演説の中で、よく取り上げていた。そこまで行く間に、私は奥に帰るときに、石川、那覇あたりから、必ず鉛筆や紙があるところ、どこ

の闇市に行けばそういうのがあるとか調べた上で、必ず鉛筆、消しゴム、それから、クレヨンなど、とにかく有り金すべてをはたいて、買って帰ったものだ。それを、子供たちに無料で配った。

眞板 それは、奥の子どもたちに対してですか？

上原 そう、奥の子どもたちに。当時は、現金収入が少ない家庭も多かったから、奥の子どもたちに、一人一本の鉛筆を配る予定だが、あまりもう人が多いと、一本を二つに切つてあげた。紙も貴重品でなかなか手に入らないので、一人一枚ずつ渡すと子供たちは喜んだね。

この教学用品の極端な不足を乗り切つて、やつと、沖繩人が自分たちの手によつて、自分たちの子どもを教育しようと、考えるようになった。あの頃、私の「講演速記録」(注・沖繩県公文書館所蔵)の中では触れているように戦争ですっかり、焼け野原となつた沖繩の大地で、やつとこさ、若い草木の芽が伸びてきた。その復活した若い命に花を咲かそう、実を結ばせようと人民が最大の努力しているときに、強大な軍事力を持つて、それを潰すようなことをアメリカはやってるんだ。何たることだ。当時の軍政府の教育担当部長は、恥知らずにも、自国の教育問題を他国にゆだねるようなことをした歴史的事実はどこの国にもないんだというのを公然と発表したんだ。

私たち民主同盟は、これを取り上げて、軍・民両政府の非民主・非人道的責任を追及して、講演会を各地でやつたんだ。すなわち、誰が勝手に沖繩を占領したのか、沖繩民族が最低の生活と自由な教育の権利を求めているのに、米国は民主主義と自由をまったく無視して、勝手に強制的にやりたい放題のことをやっていくのだ。なぜ日米両帝国の覇権争いの戦争の結果、沖繩は占領され、なぜこんなひどい目に遭わなければならぬのかというの、当然、後世のために歴史家はこのことを糾すべきである(笑)私のそういう具体的な話し方というのは、その四六、四七、四八

年から始まっていますね。とくに、日本帝国主義と財閥、アメリカの帝国主義と資本家たち相互の利権争奪戦争であつたといううな見方をするようになったんだね。歴史を振り返つてみると、古代以来、力の強い国家が、力の弱い他国のために、自分の国を犠牲にしたつていうことはないはずだという思いが私にはあつた。だから、アメリカも、日本も、あくまでも自分の国益のために戦争をしたんだということ。したがつて、アメリカが、この沖繩に、世界最強の軍事基地を作るといふのも、沖繩のためではないし、日本のためでもなくて、アメリカ自体の世界制覇を目指した覇権政策ではないか、というのが、私、青年上原のあの頃の疑問だつた。

眞板 ああ、卓見ですね。

上原 そういうアメリカの軍事的経済的世界支配戦略に思いを致しつつ私は沖繩の教育問題については、私は人一倍関心を持つていた。その宮森小学校つていふのを行つてみると、一回その前に、演説会をやつたのかなあ、あそこ使つたことあつたかなあ。そうでありました。

眞板 校庭でやつたんですか？

上原 校庭だね。そうだ、数が多いから、教室に入らなかつたんだ。講堂がないから、そうだったと思う。石川市としては、はじめてのああいう大集会だったからね。物珍しさに、物見遊山のつもりで来た人もいたかもしれないけれど。しかし、戦後初めての政党的結成式つていう看板だから、物珍しさと目ごろ我々が、どこかで公然と民政府批判をしている時、大衆の中には我々に共鳴するものも多かったから。大衆の期待も大きかつたからね。その期待のためにも、私は準備の下働きに全力を尽くして、走り回つてね。

眞板 準備状況つてどうでしたか？

上原 準備状況といつても、青空会場だし特になが、青年の方



は、私たちが対応し、年配の方たちへの対応は、山城善光、桑江朝幸たちがやるのね。これまでの対談も懇談会も含めて、それは、年配者の人たちの集まりだったから、その人たちを呼ぶっていうのは簡単でしたね。ただ、問題は若い人たちが、集まるかどうか、それと、いわゆる有名でない、無名の大衆がどれくらい集まるか、ということになると、たとえば、私の場合は、ヤンバルのどっかの小学校を借りて、校庭か教室かどっかを借りてだね、いろいろな形の小演説会をやったね、「何日何時から、沖縄民主同盟の結党大会を開催しますから、当日は必ず参加してください」とお願いした。同時に、その時点で具体的に人数をおさえた。

眞板 やっぱ、割り当てみたいなのをかなりやっただんですか？

上原 そう。でないと、交通手段はないでしょ、押しかけてくると思っても、いざとなると、その日になって、車がないとダメだと。しかし、頼まれると、前日にその近くに来て泊まっていたとかね。とにかく、今の人では想像できないような情熱があったね。だから、あれだけの人数が集まった。どのくらい集まるかは、山城善光も、誰も彼も予想つかなかったと思う。

眞板 二〇〇〇、三〇〇〇人くらい集まった？

上原 そうだな。

眞板 確か、あれは、本当は五日早くやる予定だった。あ、(注・六月)十日か。準備状況を考えたら、ちょっと、やりきれないだろうということだ。

上原 私は、あの頃は、国頭から名護までは、車に乗らないで、歩いてね。各村の役場、学校、そこへ行けば、そこでもって、いつも通り一席ぶってね(笑) それで、何日に…

眞板 予定は六月十日にしていたみたいですけど、間に合わなくて、十五日にしたって、山城善光さんは書いていましたね。

(注・当日の)人数は書いていないですね。

上原 人数書いていない？

眞板 ええ。ただ、結構な数は、これは黨員らしいんですけど、一番遠くは久米島から来ていますね。佐敷からも。あ、佐敷ですよ、大城ツルさん。

上原 ああ、ツルさんね。

眞板 これ見ると、ヤンバルが多いですね。

上原 ヤンバル多い。私と山城善光の地元だからね。まだ、那覇一帯はね、大部分が立ち入り禁止地区だったですからね。那覇地区への住民の移動は限られていたから、引越しができないので、他町村での仮住まいがまだ多かったですからね。

眞板 那覇での演説会はどういうところ？

上原 那覇はね、市役所の前とかね。それから、辺鄙でも、軍政府から居住を許可されて、人が住んでいるところ。やっぱ、あのときは、学校の運動場ですな(笑) 一番迷ったのはね、人が二百、三百名でも入りそうなどころなら、どこでもいいんですけど(笑) 若さっていうのはね。いま、生き残ったものの責任っていうかね。そういうのをひしひしと感じましたね。

眞板 結党大会のときに、先生はどこにいらっしやっただんですか？

上原 やっぱ、会場整理の班長みたいな役割を担っていたんだろうけれどね(笑) ただし、必要に応じて、二役三役も引き受けていたかも知れないね。

## ■沖縄警察とCCC

眞板 米軍とか入ってくるのを、当然、警戒なさっていた？

上原 もちろん、そうですよ。そういう状態は警戒していた。しかし、初めてのことから、石川警察も協力してくれましたね。そういう意味ではね、当時の沖縄の警察というのは、われわれと

直接、面と向かって話し合うとね。やはり、同胞、兄弟ですからね。しかし、C I Cからの命令で警察が動いている場合は別です。C I Cの捜査官が離れるっていうと沖繩の警察官は、「いや、僕ら命令ですから分かってくださいよ」と言ってるね（笑）。私はよく演説会でも言っていたの、「上原の心も沖繩の警察官もこういう段階になるとね、やはり、ウチナンチュでしょ」と。彼らはね、「おおそうだ」と応えてね（笑）。警察官について、山城善光が浦崎って書いてありますね。実は彼は私と非常に仲の良い関係があった。山城も知らない話ですよ（笑）

眞板 はい？

上原 私と特別な関係があつたんですよ。

眞板 あれ？ 確か、辺土名かどつかのウルマ新報の支局長をやっていますよね。

上原 いや、あれは人民党の浦崎康華。私はね、その浦崎（注・直二）はね、その後、沖繩警察学校の校長になつたんだそうだね。あとでね。だけど、ちょうど、山城善光が逮捕されるときに、彼は喜如嘉の駐在だつたんだよ。それで、山城善光、病気で寝て、うわごとみたいなのを言っているときに、名護警察署の連中が来て、

眞板 それは、マラリアが出ちゃったときですよ。

上原 そう、そう。そのとき、私が責任を持って、連れて行きますから、と言って何日か猶予してもらうんだね。そういうことがあつた。その前に、私の面白い話がありますけどね。彼はまさに、「愛郷的」というかまさに沖繩人のための警察官だつた。彼の私に対する協力は、勇気いることだと思っんですよ。

眞板 そのあとの顛末で、降格されたんではなかったですか？

上原 彼は大丈夫。彼は地区の巡査部長だつたからね。降格されたというのは、彼の上のいた宮城っていう人なんだよ。だから、私が逃げたことを知っていたのではないかと疑われて、「おまえ

が逃がしたんだろう」と。随分、責められたらしいんだ。私のためにひどい目に遭つたそうだからね。宮城久安さんっていうんだ。この人は、いわゆる台湾総督府のね、警視か何かなんです。台湾の南の方に島があるでしょ。澎湖島。この澎湖島警察署の署長をやっていた。警視なんだよ。で、警視だつたのが、沖繩に引き揚げてきて、警視の下は何ていいですか？

眞板 警部か？

上原 警部か？

その一段降ろされた、向こうは植民地だからということで、沖繩は、敗戦でアメリカの支配下にありながら、前帝国憲法が生かされていたからね。それに従ってね、外地と内地という分け方をしたんでしょね。つまり、一段こう引き下げされた。先ほども言った、辺土名地区警察署の署長をやっていた。彼は奥の出身だから、なにかと私をかばってくれていたんだよ。精一杯。だけれども、面と向かって、私たちに対しては、知らんぷりをしていたが、何かあつたときに、最近、見たことないとかと、私を直接、間接に擁護していたそう。

奥へ通じる道路は、あの頃はまだ、昔のまま、いまのような道はできていないから。山から下りてくる人は、部落の中いると、ほとんど見える。私がしばらく、奥に滞在しているとね、奥の若い人たちは、誰も頼んでいないのに、自主的に、「どのくらい前に、何人の人が、山を下りてきた」と伝言するので、私が奥にいる間、みなで守ってくれた。このように、奥の人たちは、私に協力してくれました。しかし、奥まで行く山の中を通るときね、武装も必要だつたんだね。山の中で襲われたら、それはおしまいでしょからね。私が、抜け道を通つたにしてもね。もう、一九四九年五月からは、私は車で南部から帰る時は、名護の近くになつたら、途中で私は車を降りて山登つてね、桑江朝幸、山城善光とも指定した場所で会つたりしていたのだ。

眞板 それはいつぐらいですか？

上原 四九年の半ばごろになると、警官とCICの手先が、バス停に公然と待っていたので、もう名護には入らないようにしていた。そして、最後に照屋病院で、最後の危機突破をやったのは、四八年？ あ、四九年だ。四八年に入ってから、公然と警官がつけている。四九年の後半になったら、もう名護の町には、車に乗っては入れない状態であった。

最後の危機突破は、きつと四九年の秋だったんだろうか？ ある日、照屋病院でひと休みして、照屋先生に情況報告をしていると、家族の報告で、どうも、近隣の様子がおかしいと分かったので、照屋先生の即断で、病院の救急室で救急入院して、重体患者、危篤患者だということになった（笑） そこで、CICが何人かで、名護警察の警官を連れて、踏み込んだ。それはもう、最後だと思っただね。しかし、照屋先生の毅然たる対応によって、難関は無事に突破することができた。

眞板 逮捕容疑は、反軍的な思想ということになるのですか？

上原 反米反軍ですかね。これは彼らのご都合によって、なんとも決められることですからね。

眞板 反米ですか？

上原 とにかく、私たちは沖縄の民主主義と自由を目指して平和な政治活動を展開しているのだから、アメリカに対して危険はないはずですよ。反米だと言うこと自体、道理に合いませんね。

眞板 危険分子になつていてる？

上原 危険分子でしょうかね。私が沖縄を脱出後に、米軍が、最後にでつち上げたという、いわゆる「志喜屋孝信の暗殺計画の具体的な計画」なるものがあつたということは、私が脱出して、関西地方で活動している時で、それまでは、志喜屋暗殺なるものは、私はまったく、聞いていなかったよ。だから、その暗殺計画なるものが、世に出たのは、何年何月だったのかは、私は何も知らない。

い。

眞板 四九年の末ですか？

上原 これは、何時誰がこのようなインチキデマを発信したのか、これはCICが意図的に内々に流した陰謀だったと考える。公になつてやるのは、私が脱出した、やつぱり、五〇年の二月あたりでしょうね。結局、反米的であるというだけじゃ逮捕懲罰でまきせんよ。だから、志喜屋孝信暗殺計画を持ち出したのでしょね。

眞板 この時期にはすでに、群馬知事選挙を公選でやるとか、議会議員選挙を公選でやるとか、軍政府から出たころですよ。

上原 出た。そのときにもう、

眞板 四九年の八月くらいに言っているんじゃないんですか？

上原 そう、そう。そのときから、我々は群馬知事選挙、群馬議員選挙を目指しての運動の一環として、署名運動をやっていたんだね。そのときはもう、私の担当は、島尻郡全域を受け持った。だから、ヤンバルには、しばらく、顔を出す機会が少なくなつてくるんだ。で、どうも私はヤンバルに顔を出さないから、彼らは怪しんだらうね。それが、平良良松さんかなあ？

眞板 平良幸市さんでは。

上原 幸市さんの家に行つて、地元で彼の協力の下で署名運動をしているときに、「上原信夫が、この一帯にいるらしい」ということで、（注・CICが）来ているんだ。このときは、奥さんの勇気ある機転でね、私は逃れたんだよ。

実際の半地下活動的なものは、四九年の五、六月ごろくらいから、でしょうね。私、先ほど言ったように、車に幌をつけた、軍用トラックを改造したバスを、それはそのまま、終点まで行かないで、名護の手前で降りて、あとは山の中を通っていく。本部行き車だと本部の終点まで車で移動して、夜、歩いて名護へ出ているんですよ。そのときに、私を一泊泊めてくれた同志が、

夜遅くわれわれに、雑炊を食べさせてくれて、元気をつけてくれた。その人は、まだ元気でいるんですよ（笑） 読谷で、彼とは二年ほど前に何十年か振りで会いましたかな。そのとき、私はよほど空腹だったらしく、「あんたのおいしそうな食べ方は、いまでも忘れませんって」（笑） 夫婦二人が、懐かしそうに思い出を話してくれた。

眞板 そういうふうに、運動が先鋭化していくと、

上原 えっ？

眞板 C I C に生まれ、活動が先鋭化すると、それまで、民主同盟に賛同していた在野の有力者たちが、離れていくのではないですか？

上原 まさに、民主同盟ぶつ潰しの陰謀ですよ。アメリカは民主同盟の山城、桑江の高等軍事裁判で審判を受けた。そこへ、志喜屋孝信の暗殺も企んでいるという、デタラメなうわさを持ち出すことよって、大衆を民主同盟から切り離そうとする政治陰謀工作ですよ。あんなおとなしい知事の暗殺を計画しているなんて、けしからんつということになりますからね。だから、それは、これまで、こんな凶悪な政治謀略を経験したこのない沖縄の警察では、考えられないことだ。アメリカ軍政府とC I C が、民主同盟つぶしに、バラ撒いた謀略戦術だったんだと思うね。しかし、この謀略は、後日、知事選挙に向けて、相当な具体的悪効果が発揮されているが、このような陰謀デマ事件のあったことは数十年ぶりに沖縄に帰ったときに、宮里栄輝さんと山城たちから初めて知らされた。

## ■ 沖縄政党の特質

眞板 後に社大党ができるわけですけども、その顔ぶれを見ると、民主同盟で名を連ねていた有力者が、そのまま移行している

ように見えるんですけど。

上原 そうなんですか。私はその頃、国外にいて知らないけれども。

眞板 活動が先鋭化した、その大宜味朝徳さんとかは、当然、はずれていくわけです。それで、いわゆる民主同盟の勢力図がどうなっているのか。おそらく穏健的な考え方で、急進派ではなく、漸進派の人たちを中心に来たのが、社大党ではないだろうか、と見当つけているんですよ。

上原 仲宗根の奥さん（注・仲宗根みさを）が書いた、『仲宗根源和伝』を見ると、だいたい、出るくる名前を見るとそうですね。たとえば、三羽ガラスと言われた、山城善光と私と桑江朝幸。桑江朝幸はその時点で、仲宗根源和についていくという形で、社大党には入ってないでしょ。その後、さらに、桑江さんは、だんだんより体制側に寄っていくわけですね。彼自身も言っているように、まったく社会主義とか社会主義運動っていうものに対して、戦前を含めて、まったく関係を持たなかったからね。しかし、沖縄を戦禍から立ち上がらせて、復興させようという情熱と実践的民主主義精神と人道主義は誰よりも素晴らしいものを持っていたと思う。

眞板 確かに、沖縄の政党を研究するとですね。いわゆる名望家政党なんですね。大衆と関係ないんですよ。政党支部もほとんどないんです。社大党が典型なんですけども、あれは、地域の有力者が寄り集まって、できた政党であって、いわゆる大衆政党になりきれていない部分があるんですよ。それが意味で沖縄の不幸といえば、不幸でもあるし、では、やまとも大衆政党ができたかという点、そうでもないですね。

上原 そういう点では、いわゆる農村、部落、部落体制、部落の伝統、部落の顔役、いわゆる、政治的な顔役も含めて、これは日本の農村部でもどこでもそうなんです。沖縄の場合は、そのひ

と回りか、ふた回り、小さくした形で表われているということな  
んですね。しかも、もつと濃縮された型で少なくとも、やまとで  
は、競争相手となる、他の県がある。沖繩の場合は、競争相手の  
対象物が少ない、あるいは小さい。島という絶対の枠の中に、結  
局、部落対部落、郡対郡、村対村、これしかないわけですよ。し  
かも、行政、通信、交通、情報のすべてが、やまとと断絶されて  
いた状況の下ではね。しかし、やまとではいくつか具体的対象が  
並べられる中で、比較、分類、選別することも可能なので、社会  
に波及する何かが出てくる。しかも、それが、思想政党の如何に  
かわらず、その他、広い外部からの刺激は、また別の面である。  
そういうところの違いがあるのかもね。

**眞板** 僕はスケールの違いじゃないかなあと思っているんです  
けれども、構図としては、そんなに違うとは思わないなああってい  
う。それと、先生たちがなさっていた頃と、時代背景が変わって  
きちゃった部分もあると思うんですよ。社大党が出来たころって  
いうのは、概ね、そのアメリカ軍が沖繩をどういうふうな統治し  
ていこうかという方針が決まり始めた頃。で、先生たちが活動な  
さっていた頃は、決まっていなかったんですよ。その違いがものすご  
く、大きいと思うんですよ。

**上原** 結局、その時代の米軍の占領政策の安定度、沖繩自身の内  
的政治、経済、社会等の具体的な環境がね、そのときの時代背景  
になっっているわけですよ。だから、その時代の歴史の全般的な流  
れを把握することなしには、この問題は論じられないでしょうね。  
四五年は終戦、四六年から復興が始まり、四九年になると、我々  
周辺の世界も大きく変わりつつあるのに、沖繩だけが相変わらず  
世界から隔絶された状況にあった。しかし、沖繩人民の民主化要  
求の闘いは、ついに五〇年になって群馬知事選挙の運動が始まる  
ことで少し動きつつあった。

**眞板** しかし、それでも、公選による群馬政府が存在したのは二

年間だけですよ。五二年から社大党にいた比嘉秀平が、社大党に  
いながら、琉球政府の準備委員会の座長になるわけです。それに  
よって、群馬知事制を廃止して、琉球政府になっていく中で、彼  
は初代の任命主席になっていくんです。

## ■米軍の沖繩統治とその世界戦略

**上原** アメリカの初期占領時代の軍政府、その人たちは、最初は  
陸軍でしたかな、海軍でしたかな？

**眞板** 一番最初は海軍です。

**上原** 海軍ですね。

**上原** われわれはかねてから、アメリカのいわゆる民主主義的独  
立精神を心から尊敬し、それが、必ずや沖繩の占領政策に反映す  
るだろうと期待していた。海軍はどうか、陸軍かどうか、という  
ことよりも、かつて、アメリカは奴隷制度の中から抜け出して、  
新しい国家を發展させ、政治、経済、軍事的にも世界に一定の影  
響力と発言権を持つようになった新しい国家だったのだから、沖  
繩の軍事占領政策についても、その軍司令官の思想というか哲学  
というのか、それぞれの司令官のね、対沖政策や戦略は、アメリ  
カ合衆国の統一された世界戦略の一環として、実施されて来たは  
ずだ。したがって、国際情勢のいかなる変化にも、即対応できる  
ような沖繩基地の機能は、アメリカの世界戦略にとって、極めて  
重要な位置づけをされるだろうと、当時、判断した。山城と嘉手  
納飛行場とその周辺基地を一日がかりで見回ったことがあつ  
た。そのとき、アメリカは世界支配の野望を捨てないかぎり、沖  
繩、すなわち、沖繩基地は、永遠に手放さないだろう。との見方  
で完全に一致したことを今も鮮やかに思い出す。だから、私はス  
トックホルムの世界平和擁護大会と北京アジア太平洋平和会議に  
出席して、全世界に向かって、アメリカによる沖繩の軍事基地化

を暴露すべく、命がけの冒険旅行に旅立ったのである。したがって、一九五〇年初頭以後の沖縄の実際的情況については、ほとんど知らないが、米ソの冷戦体制の下で、世界情勢は、飛躍的に変化する。それについて、アメリカは、沖縄をどう統治しようとしたのか、あらゆる面で、重要な分岐点に立たされていただろう。これに伴い、沖縄人の政治的社会的思考や観点も大きく変化発展していくことも、当然だったろう。将来、アメリカは世界を制覇しようという野望は、当時すでによく知られていた。その反面、アメリカは日本を含む友好国を多様なアメリカ的世界に育て上げることについても、相当な意欲がありましたからね。

※アジア太平洋地域平和会議は、一九五二年三月、宋慶齡などの呼びかけで、同年十月に北京で開かれた。参加国は、中国、ソ連、インド、日本、朝鮮など。

**眞板** そうですね。チャーチルの鉄のカーテン発言が出てきますよね。敗戦後すぐですからね。

**上原** だから、そういう時代が連合軍の名のもとで描いていた、アメリカ中心の「世界地図」だったのですね。そういう過程を経ながら、じゃあ、アメリカは沖縄をどのように見てきて、どのように世界的に位置づけするのか、すでに単なる沖縄問題だけではなくなりつつあった。そこに、私が感じたのは、アメリカとソ連との関係というのはなんだろう。私は沖縄南部を一人でさ迷い、回っている間にね、いったい、第二次世界大戦とは何だったのだろうか。なぜ、アメリカはわざわざ、沖縄に来て、こんなことしないといけないのか。なぜ、彼らは日本の中の日本の天皇、これに対して、こういう停戦の仕方をしたのだろうか。いま、また別の見方がありますけれども。そういうことを考えながら、なぜ、広島に原子爆弾を落とされたのか、しかも、落とされた場所は、

なぜ、朝鮮半島と日本の連結点だったのか、なぜ北海道でないのか、なぜ沖縄でないのか、ということを考えてみると、少しでも、軍事的な、軍事戦略的な知識のある人なら、アメリカはソ連の南下阻止に先手を打った戦略戦術だったことに気付いたのではなかったか。

**眞板** 海軍の拠点ではありましたがね。しかも、意図的に空襲しなかったところでもあるから。実験の成果も見やすいし。

**上原** そういうことを、考えながら、私は沖縄と世界の触れ合いとかつながりというものね、見ているときに、もうすでに、一九四六年、私が宮古から沖縄に帰ってきて間もなく、南部地区を回っているときにだね、泡瀬にも行ったんですよ。その泡瀬に行ったときに、米軍の大量の戦争時代の物資ですね、いらなくなつた物資を大量に捨ててある。山のようにね。そこにね、あれ？ おかしいな。米軍でない軍服を着た人がある。ジープ二つくらいで来てだな、そのゴミ捨て場でいろんな武器の部品等を探していた。

**眞板** 野積みだったそうですね。

**上原** それをあさっているんですよ。それで、持ち帰っていくんですよ。なんと、国民党軍の徽章をつけた、軍服を着た、将校らしい、ちゃんとびしっとした新しい軍服を着て。そうか、蒋介石はもう台湾に逃げてきているんだということね。そして、いわゆる、米軍のゴミ捨て場に来てだね、ゴミをあさって、なあんだ、戦果上げるのは、ウチナンチュだけじゃなくて、国民党も戦果上げにきたな（笑） と思い、何か世界が大きく変わるような予感がしましたね。

**眞板** 中共と国民党との戦争で、レアメタル、葉きょうなど銅とかの需要がものすごくあったわけですよ。糸満漁民の密貿易船も、戦場に落ちていた葉きょう拾い、戦車のスクラップなど、全部、集めてきて、それを台湾だ、香港だ、に持って行って、帰ってくる

ると家が一軒建ったという話ですから。

上原 それは沖繩の密航船ね。

眞板 国民党の人が来ていたっていうのは、連合国つながりからなんですか。

上原 まったく、そうなんでしょう。そして、そのときは、もうすでに蒋介石の先遣部隊が台湾に来ていたはずだ。台湾の武器は十分でなかった、その補給が効かないから、兵器のたりない部品などをもらいにきていたんでしょね。そのとき、私、考えたのは、沖繩はもうすでに、米軍の基地だけでなく、国民党と共に中国へ侵略する基地になったんだと感じたね。すなわち、蒋介石軍の大後方になりつつあるんだとね。

それくらい、その年代のことを私は、実際の肉眼で、沖繩のアジアの位置づけというものを何なのだろうと。だから、米軍をこのまま沖繩に置いておくと、結局、中国を支配する基地にもなるだろうと、そういうことを考えるんだよね。

眞板 そうですか。その頃にお感じになったなんて。

## ■ 関西での活動

上原 それが、沖繩を五〇年春に出て、関西地方で、婦人団体の講演の中でね。私、そのころ、大阪・関西地区に行つて、向こうの沖繩県人会や労働組合、婦人、文化人団体で、講演会を毎日やつた。

眞板 そのときの記録は残っていますか？

上原 私はそのころ、関西一帯では、また地下活動だった。ただしね、私の活動も、間接的に知っている人はいるんだよ。その人たちは、いま、沖繩に帰っている。

眞板 大阪で日共に入っているんですか？

上原 そうです。なにしろ、平良助次郎等沖繩での同志もいたか

ら。大阪で入つて、まず、大阪の日共の方で、いわゆる大阪南地区委員会ついでいうところ。

眞板 平良助次郎さんも、密航船で来たんですか？

上原 あれは、密航ではない。あれは正式だ。あれは、日本人だったんだよ。

眞板 本籍がそうだと、おっしゃっていましたね。

上原 その関係で、まず、彼のところへ連絡を取つてだね、いろいろ協力してもらつた。

眞板 助次郎さんの方が先ですか？

上原 さき。四七年の暮れまではいたんじゃないか。

眞板 じゃあ、結党して半年後くらいですね。

上原 そうですね。

眞板 じゃあ、大阪行かれたつて言うのは、助次郎さんを頼つて行かれたということなんですか？

上原 いや、たまたま、密航船が関西の某地近くに着いたから便利だった(笑)。そして、私を証明したりする文書も物件は、何も持っていないので、それを証明し得るのは、平良助次郎と比嘉良明たちの同志たちだろうから、何かもし沖繩に照会する。時間の関係上、関西が便利だったから。

眞板 沖繩の現状を一番最初に伝えたのは、先生ということになりますか？

上原 公式にね、本土の組織や民主団体に対して、日本共産党の黨員として、確かに一番最初ということになるでしょうな。しかし、有名人としては、沖繩の元首里市長さんがいた。

眞板 はい、仲吉さん。

上原 仲吉さんですな。仲吉さんなんかは、彼の立場から東京で、沖繩県人会や日本政府の関係部門には報告したんでしょね。それで、山城善光たちは沖繩に引き揚げるずっと前に、東京で仲吉さんの話を聞いているが、しかし、実際に自分が沖繩に帰つてき

てみたら、沖縄は仲吉さんから聞いていた通りではなかったという事で、腹を立てて。日本の政府に正しい情報を報告すべしと、主張していたときもあった。

**眞板** 政府レベルでいきますとね、稲嶺一郎が、いまの知事さんのお父さんですけども、彼が四六年ごろ、視察のため沖縄に行っているんですよ。彼は東京にあった沖縄人連盟の副理事長で、英語がしゃべれるものだから、米軍との折衝役を担当し、事実上、米軍のスパイとして沖縄を見に行ったんじゃないかと言われているんです。それをリポートとして上げています。ただ、それは、一般国民は知る由もなく、そういう意味で、先生が一般国民向けに、沖縄の現状を伝えたというのは、もしかしたら、一番最初じゃないかなと。

**上原** だと思えます。

**眞板** それ以降、実は、やまとの記者が沖縄は入れるのは、六〇年代近くになってからなんです。それはもう、USCAR体制になつてからのことです。

(中絶)

**眞板** 地下活動とおっしゃっていましたが、そのころ、共産党は合法化されていますよね。

**上原** そう、戦後の日本における日本共産党の政治活動は原則として、合法化されているけれども、私は密航で渡ってきているんですよ。日本には国籍はないですよ。国籍がない(笑) 住民票もないんです。だから、私が沖縄を出たあとは、CICは、私がどこへ行ったんだらうということを当然、追求しています。そして、山城善光さんたちをはじめ、多くの私の知人が、いろんな尋問をされていますからね。私が沖縄からやまとへ行けば、CICは、私がいま、行くところは、沖縄の人たちが多く集まっているところ。

る。関西では大阪、兵庫だとか、関東では横浜、川崎だろうというふうには、調べることはできません。しかも、日本は米軍占領下ですからね。警察は、実質的にアメリカの指導下にあるからね。私が大阪に入って、大手を振って歩けると思ったのは、ひと月も経たなかったと思うな。おかしいという感じは、意外と早く分かった。友人と小さな飲み屋に行くと、たまにしか行かない私に対して、その女将さんが、「警察がこれこれっていう人が、ここに飲みに来ないかと、聞きに来たよ」とかね。そういうことが、耳に入ったので、それを組織に報告したら、もう、そろそろ、ということ、彼らはそれなりの手配する必要になったのだろう。

**眞板** そのときの沖縄の位置づけは、すごく微妙だとは思いますが、すけども、そこで、仮にですね、日本の司法に捕まったとして、どういう刑法が適用されるんですか。

**上原** それは、今の知識で言えば、①沖縄からの密出国、②日本国への密入国、または志喜屋孝信暗殺未遂事件、その他に反米思想なり、何なり、アメリカのご都合の良いように、どんな刑法でも適用されたでしょう。しかも、日本の警察は沖縄の警察のように、私を扱わないだろうから、厳罰に処しただろう。日本もアメリカの占領下で半独立国でしたからね。

**眞板** 確かに、日本はまだ、その当時、独立していませんので：

**上原** だから、これはCIC

**眞板** 極東軍の支配下ですよ。

**上原** だから、根拠はすべてCICなんです。沖縄においては沖縄警察が私を捕まえることができるのは、CICの直接指揮下においてのみです。なぜなら、私は全身全霊を尽くして、沖縄人のために、働いているのだから、それを承知している沖縄の警察官は私を捕らえることに消極的だったんだ。彼らにとっては、私を逮捕しなければならぬ理由は何もないから。だが、日本におい



てはCICの指揮の下に日本の警察も一致して、私を逮捕するであろうことは至極当然だと思えますよ。

眞板 それは、日本の刑法を超越した、存在なんですか？

上原 もちろん、私は、国籍もないし、戸籍もないんだから、日本には。

眞板 そのときの考え方として、沖繩に対して、日本は潜在主権があるっていう考え方ですよ。というと、国籍的には日本人なわけですよ。

上原 ぜんぜんそれは。自分がたとえ日本人であると思っただって、実際に国籍があるかどうか。

眞板 沖繩に本籍があるわけですよ。その人間が本土に来たっていうことは、国内の移動のわけですよ。

上原 そう(笑) なぜ、平良助次郎が沖繩から退去を命じられた。

眞板 それは、確かにね、そのときのライカムの考え方がね、沖繩国籍というか、沖繩に本籍がない人間は、ぜんぶ、追い出しちゃう、みたいな政策をとっていた時期がありますね。

上原 しかも、平良助次郎は、我々と一緒に運動を始めていたから。しかも、年配も山城善光と同じくらい。ということ、いなほうがいろいろということ、追放処分的重要理由だったんだと思うね。彼は、「俺、もともと沖繩人だから、なぜ、ここにいないのが悪いんだ」ということで、抵抗するんだ。しかし、とうとうダメだった。平良の退去命令は、いったい、何の法律に基づいたのか、全然不明であった。今も。

アメリカがやりたい放題にやれた、時代だと思っただけでもね。しかし、考えてみると、私は四五年の六月頃、宮古の部隊で死刑を宣告され、反抗した脱走兵である。確かその時点で私に関する国籍等を含む生活権が抹殺されているのではないかと疑っているのですよ。

眞板 そうですか。

上原 だから、平良助次郎たちが、心配したのは、私もし、CICに捕まって、どこかに連れて行かれたあと、殺されても、誰もわからないと。そういう措置を、アメリカがやる可能性があるんだ。だから、おまえ、注意しないとけないぞ、ということ、彼らは、私にいろいろ協力してくれた。

眞板 それは、かなりリアルティのある話ですね。

上原 ということは、たとえば、大阪の小さな工場あたりでも、いわゆる講演会、座談会、報告会っていうのをやりますけれど、それをこなすには、相手が集まるのは十名か二十名くらいだから、主催がだいたい、沖繩か奄美大島出身者というような中には、日本の労働者の比較的先進的な連中が集まったりする。ただ、たとえば、大阪には、中之島公会堂っていうのが、あるんですよ。その公会堂で報告会があったときは、お互い苦労しました。報告を終わって、一分一秒も時間を無駄にしないで、地下の作業員が入りする通用口を出て、ある一定の場所まで私を送ったら、終わり。それはもう、迅速なる行動を彼らはとらせた。そうすると、私は、そこを離れると今晚は堺一帯に行くという手配をしてある。次に堺一帯に行っただね、その友人の家で泊まれるんだ。彼の家も小さいから玄関の下駄箱を片付けてだね、そこへ寝るとか。そういうことを大阪で、活動している約何カ月間の間に、何回もお世話になりました。そういう協力者は玉城義雄さん他多数。中でも忘れられないのは、沖繩の自由民権運動の先駆者・謝花昇先生の妹さんの家(長男・野原栄太郎)で、何日間も匿ってもらったことがある。ずいぶん、お世話になりました。

眞板 それじゃ、身体は休まらんですよ。

上原 あるいは、いっぱい、飲もうと。友人が安全だという飲み屋に連れて行ってもらったことがあります。ところが、見慣れないお客さんがいたので、私を連れてきた友人がおかみさんに、

「誰のつながりできたんですか」って言ったら、「そうでない」という。あれはね、振り出しに戻っているよというような、私には意味不明なやりとりをおかみさんと友人は小声でやった後、すぐ外に出た。それで、その晩は慰労のいっばいは、先延ばしとなったということもあった。

それから、こんな出来事もあった、中山マサコさんっていうのは、今の……

※中山マサ 元厚生大臣 四七年第二回総選挙大阪第二選挙区初当選 長男は中山太郎元外相、五男は中山正暉元衆院議員、孫は中山泰秀

眞板 中山太郎さんのお母さん。

上原 その中山マサ先生の主宰するのは、関西なんか婦人会とあったと思うが、ちよつと度忘れしました。

一方、比嘉正子さんが会長をしている今の関西主婦連合会だっただと思う。私の報告会は、まず、関西主婦連合会からやった。会場は倉庫みたいところだった。おばさんたちは、物珍しそうに私の顔を見ながら、何か囁いていた。きっと、私の顔や手の火傷の

ことだったようだ。報告に入ったら、意外とみな静かで、話が進むにしたがつて、私の話に感動して涙を流してね、一所懸命に聞いてくれました。中には、「アメリカさんひどいよ、沖繩の人たちが可愛そうにね」と私の手を握ってくださる方も何人がいて大変励まされました。やはり、労働者や貧乏人の味方だと自任しているだけあるわいと思ったね。

さて、それから何日後かに、党機関は、次ぎの婦人団体での報告会を指示した。その団体が中山マサ先生の婦人なんか会だった。これまでの全ての会合では、私は一般工場労働者並みの服装で誰からも文句を言われなかったのに、今回はちゃんとした服装で行けと指示され、同志の誰かの古い背広か学生服に着替えて、一人前の文明人らしく指定の会場に行った。行きながら道々考えた。党もいろいろな階級と付き合うのに苦勞もあるんだなあ。時間は予定より早いと思ったのに、会場に入ってビックリ。美しい奥さんはみな立派な服を着てだね、畏まっておられたので、私もこれまでの報告会では体験したことのない一種の緊張感を覚えましたね。

眞板 長時間どうもありがとうございました。

(了)

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第4回

---

開催日 2003年11月29日  
開始時刻 13:00  
終了時刻 17:00  
開催場所 政策研究大学院大学  
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**江上 能義** (早稲田大学大学院公共経営研究科 教授)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## 中国留学生問題への関わり

上原 ……一九七五年、中国から帰って、中国研究所に入って、事務局長と常務理事をやったんですよ。四年間くらいね。一九七九年になると、私は、日本と中国の学術交流についてですね、「日本中国社会科学者交流協会」を作ろうと思ってですね、その設立を進めていたんですよ。

江上 当時、安藤彦太郎先生は、著名な中国研究者でしたから。

上原 そうですね。そういうこともあって、私が中国研究所にいるときに、だいたい全国の中国問題の先生方としょっちゅう交流がありましたね。それで、年間何回かのシンポジウムを開催していた。それから、『中国研究月報』ですね、それから『週報』、それから『年鑑』、本を一緒に出していました。ちょうど、七九年になって、先ほど言った私が、日本中国社会科学者交流協会を作ろうという準備をして、発起人の名前をあげて、その名前の中には、もちろん、先ほどの二人の先生もおりますけれども。

当時、私は留学生のために、もう本当に地を這うように歩いてですね、三百何十名かの宿舎を探す。なぜそうなったかと言いますと、新中国では大学は、ご存知のように全寮制なんです。北京市の子どもが北京大学や精華大学に入るときも、やっぱり、学校の宿舎に泊まるんですよ。当時の中国大使館の連中は、しばらく留学生の専門担当者がいなくて、文化部が差し当たりの対応をやっていた。彼らは留学生が来日する二、三週間くらい前に東大の教養学部（駒場）に行つて、「中国の留学生が来たら、どこで宿泊するんでしょうか、彼らの生活する場所を見学させてください」と、お願いした。そしたらね、東大の連中は、「教学に関する問題は、すでに解決済みです」と。「文部大臣の指示に従つて、我々は全部、もう用意万端努めて待つております」と。「明日か

らでも、どうぞ、いらつしやってください。ただし、生活については、日本は外国留学生について、面倒を見るという習慣がないし、そもそもその予算がありません」と。そういうことを初めて知った中国大使館の担当者は驚いて、日中友好協会、文化交流協会、日中経済協会、国貿促（日本国際貿易促進協会）とか、そういうところへ、走り回つて、各友好団体にご協力をとお願ひしたんです。もししたら、どこへ行つても同じだ。理由は「言葉が分からない、生活習慣が違う、留学生対応の予算がない、もし何かあったならば、責任を取れません」と。

大使館の友人たちは、私を呼んで、「問題はこうだから、もう一回、あんた改めて日本人の立場からお願いしてください」ということなんだ。それで、各日中団体を回つたけど、同じことなんだよ。最後に会つた、日中友好協会ではね、「人手もないんだから、予算もないんだから、あんた、協力してくれよ、俺たちはできるだけの支援をするから」ということで、致し方なく私のはじめたのが、中国留学生問題なんです。

私が、取り組みはじめるのが七九年の三月ですから、そのときに、日中社会科学者交流協会を作つて、いろいろ勉強会を持つことによつて、日本と中国、あるいは朝鮮半島・台湾を含む東アジアとのつながりつていうのは、うまくいくんじゃないか、ということ、その計画を始めたのです。

そして、そのとき、私の頭の中にあつたのは、当時、中国の学者先生たちと話しても、日本の学者の先生方や朝鮮半島の先生と話し合つても、必ず歴史問題がばあつと出てくるんですね。それで、これは大事な問題だと、ほおつておくと日中友好の妨げになるような、問題じゃないかと思つて、それに取り組もうとしてたんだけれども。私は先ほども言ったように、突然、大量の中国留学生の来日によつて、大変忙しくて、寝る時間もないような状態の中で、安藤彦太郎先生が、「先生、あなた、もう、忙しいんだ

から、私がやるよ」ということで、あとを引き受けてくれたんですよ。私とは関係なしに、彼らがやったわけなんです。だけれども、やっぱり、変な言い方になるけれども、日本の学者先生方っていうのは、頭の中で絵を描くことはできるんですね。確かに、立派な絵は描けるんですけども、実際、組織と行動力となるとやっぱり弱いですね。したがって、期待された成果を上げることができずにつしつ解散しました。なにしろ、ご存知の通り、いくつかの国や地域にわたる学术交流は確かに難しいですよ、こういう運動を通じてね。その代わり、私は、日本の学者っていうのは、こういうものかと。日本の学問っていうのは、こういうものなのかということをよく勉強できました。

だけど、その間にですね、中国の社会科学学院の友人たちがね、日本と中国の問題を話し合うのに、まず、歴史問題を鑑としなくてはいけない。にもかかわらず、日本の学者の中には、それに対して、やはり、自分が進歩的だという学者も含めてだね、この問題の取り扱い如何によつては、国会の政治家に負けず、歴史問題についての科学的な判断が、どうだろうかという人もおられるから、それじゃ、話にならないから、どうしようかという、私は中国の友人らと話し合いながら考えたことは、まず「一緒になつて、歴史を順序良くね、古代から下ろしてくる、下から上げていくんじゃないかね。現代史から始まるんじゃないかね、古代史からはじめよう。昔のアジア問題、そこで、お互い親戚同士か、血のつながりが、どこかで見出せばいいじゃないかと。それから、ずうっと、下りてきて、近代、現代とつなげていけばいいじゃないか」ということで、私の提案に基づいてね、彼らは非常に喜んで、「それじゃあ、どういうふうに、人を集めようか」ということになったから、私はね、「とにかく、朝鮮半島と台湾は、私が責任を持って連絡を取ります。ただし、中国問題については、科学院を動かすのか、あるいはそうではなくて、もっと自由な立場

で、発言できるような大学連合体みたいなものを作るのかね。それは、あんなたちで検討してください」ということで、双方が分業してですね、手分けして私は中国研究所の先輩たちのご協力の下に、直ちに行動を開始しました。

私の計画は、北朝鮮と韓国からそれぞれ数名招こう、韓国で説明すると、喜んで数週間以内に韓国は三人の学者を派遣すると、連絡が入ったので、私は自信をもって、北朝鮮にも、お願いすると、北朝鮮の方も、喜んで国の代表を二、三人派遣すると正式な応答があった。次は、台湾の方ですね、台湾人の学者で……

佐道 戴国輝さんですか？

上原 あ、戴国輝さん。先生とご相談したらね、李登輝は協力しないと率直に教え、先生本人は、大変関心を示されて、協力することになり、彼はしばらくして、「研究したから」と、呼ばれて行ってみたらね、「台湾の現職の連中は、台湾から引っ張り出せない。アメリカにいる台湾出身の学者を私が推薦するから、それでいいか」「それで、よろしゅうございます」ということになったんだが、私はこの問題について、友人の推薦した邪馬台国の文献に関心を持って研究している人。朝日新聞や朝日放送に関係ある人なんだが、その人が、定年になって、ヒマになったから、これは日本の学界のまとめ役は、「私に任せてくれ。あなたは、日本の学界のことをあまり知らないだろうから」ということだね。「では、お願いします」となったのだが、なんと、私が中国と北朝鮮、南朝鮮、台湾の話し合いも、まとめてしまつて、もうひと月たつてもふた月たつても、日本の学会をまとめきれない。なかには、その頃、慶応の石川先生が、日中友好学术交流の顧問だったので、あの人を担ぎ出したらいじゃないか、というんだけれども、しかし、やっぱり、東大のね、しかるべき、大学者を引っ張り出さないと（笑） こういうことで、失敗した例もあるんですよ。だから、日本の学界というのは難しいものだなとつくづく

思いました(笑)

しかし、その頃になると、私は留学生のことで、寝る時間もなくなつたので、とうとうあきらめざるを得なかった。そういう、苦い思い出もあります。

江上 東大だとその当時は、衛藤藩吉さんが(笑)

佐道 系統がわかりますね。

江上 学閥は確かにありますからね(笑)

上原 それで、私はびっくりして、日本との交流を深めるには、中国の留学生をたくさん教育して返そうということ、だいたい十八年間、毎年三百人前後受入れていました国家教育委員会派遣の留学生と中国中央機関派遣の研修生を、合計で約五千人くらいになりましたかな。

江上 一九七九年に一番最初に中国の留学生たちの住むところを探されたときに、全部、確保できましたか？

上原 死ぬほど努力して、全員屋根の下で寝かせました。

江上 死ぬほど努力して確保されたんですか。何名くらいですか？

上原 三百何十名。

江上 その数では、大変だったんでしょうね。

上原 中国留学生の宿泊をお願いすると、大家さんは、まさか、中国・北京からくるとは思っていないから、「台北大学からおいでになるのですか」とかね、「台南ですか」とかね。「大陸の中国からです」と申し上げると、「なんだ共産主義の中国から来るんですか」と驚いていましたよ。大家さんが心配していたのは、「まず一番に、共産主義の教育を受けた中国の留学生を世話することは、大変だろうと。二番に日本食を食べないだろうし、かといって中国料理は作れない(笑) 三番に私は中国が好きだから、私が世話をする。できるだけ、責任を持ってやりますけれども、もし、逃亡した場合は、誰が責任をとりますか」と言うので、

「もし、亡命したら。私・上原が責任をとります。必要なら、大使も一緒に頭を下げに連れてきます。それで、大使が責任をとらないのであれば、私が責任をとって、中国の総理に連絡を取るというのではどうですか」って言ったたら、「それほど責任の所在が明確だったら、よし、引き受けた」ということもありました。あの困難なときに、朝日、読売、毎日などとNHKが、中国留学生受け入れて、宿泊所問題で、私が苦労していることを報道してくれてですね、何回か私のあとについてくれてね。NHKでも、テレビで放映してくれたんですよ。それで降ね、マスコミの力って大きいんですね。そして、埼玉から栃木から、茨城や千葉、神奈川県からも、毎日のようにね、「娘が嫁入りしてひと部屋空いている、どうぞ見に来てください」(笑)

江上 そうですか、それは良かったですね。一時はどうなるかと(笑) ご苦労なさったんですね。

上原 その頃、私はまだ日本も、いや東京の西も東も知らないときでした。だから、外務省や入国管理局に行つて、文部省の留学生課に行つても、よく大声で怒鳴っていたようです。

佐道 その後も、留学生の支援活動をずっとやっておられるわけですか？

上原 もう、日本経済が落ち込んでしまつて、やっぱり、いくら日中友好のためと言つてみても、運動の原動力は、経済力、すなわち、ガソリンですからね。補給しないと、動かなくなつてしまふ。私が、いかに地を這うように頑張つてみても、ダメです。多くの中小企業が、関西から関東まで協力してくれていたのがね。その協力者の大多数が、倒産または廃業した。日本経済の現状では、協会の経営は不可能なので、協会を解散して仕事を辞めようと思つていたら、私の仕事に好意を持っていた、日本国際協力事業団は、私たちの協会を国際ボランティア活動団体と見ていたので、NPOができると、申請したらどうかと、助言してく

れたので、NPOが早い時期に認可されんですよ。だから、看板だけは下ろさないで、ほんのわずかですけれども、大学院生だけの世話をしています。もう、彼らは、自分でアルバイトをしなから、めし代は稼げるし、中国の家族からの支援もあるので、私たちは、側面から協力していくということですよ。

江上 側面からというのは、学費とかですか。

上原 いやー、その一部分です。今では。その他、アルバイト先を世話してあげるとかね、住む場所を世話してあげるとか、江上 そういうお世話をいまでもやっていらっしやるんですか？

上原 先ほど申し上げた少人数で、ここ数年は自費留学生です。江上 じゃあ、結構、長い間やってらっしやるんですね。

上原 一九七九年から、一九九六年までは、合せて五千名前後ですね。中国の留学生の派遣元は、国家教育委員会、研修生は、中国鉄道部、石油天然ガス総工司、軽工業部、郵電工業部、国家電算機総局、建築材料部……

江上 それは本当に日中の懸け橋にね。なられたんですね。

上原 あの当時、私はそんなことまったく念頭にないし、考えもしない。

佐道 実質的に、そういう役割を果たしてこられたんですね。

上原 そういうことがあってですね、沖縄の問題も、日本の問題も少しは研究しようと考えながら、いまだに、その時間も作れず、何の知識も取り込めず、とにかく恥を掻きながら、生きてきた。さて、これからどうなるのかなあと思ったりしてね。かえって、眠れなくなったりしてね。一生を考えていると。

## ■ 帰国までの経緯

江上 中国に長い間おられたときに、中国でもお忙しかったんで

しょうけども、沖縄のことはやはり、思い出されたんですね。

上原 それはやっぱり、思い出しましたよ。

江上 故郷をですね。東京に戻られてからは、何回か沖縄には戻られたんですね。

上原 そうです。戻ってきてからですね。みんな、会いたいというところで、そのころはまだ、山城善光あたりも、みんな元気でしたから……

江上 ああ、そうですね。まだ、山城善光さんはお元気でしたか。山城善光さんにお会いになったのは、何年ごろですか。

上原 うーん、ちょっとわかりませんね。そうだ、私が帰って、中国研究所に入って、比較的早い時期に、彼が、わざわざ東京にきて、二十何年ぶりで、語り合うことがありました。

江上 山城善光さんは戦後の沖縄政治史の中で、登場してきますものね。大物の政治家としてですね。

上原 まあ、戦前からの左がかったね。

佐道 日本に戻られて、沖縄に行かれたときには、もう、日本復帰をしたあとの沖縄になるんですね。

江上 ずいぶん、変わっていたのではないですか。

上原 帰国してから沖縄に帰った、その日の夕方ですか、山城善光とか兼次佐一たちがね、段取りして、そのときは、まだ、宮里栄輝さんも、お元気でしたから。その連中が、何十名か集まって、山城善光が二十名とか五十名って書いていますね。

江上 宮里栄輝さんって、共産党の議員だった方ですか。

上原 いや、あの宮里は、國場幸昌の娘婿の宮里弁護士。で、自民党だったのではないですか。

眞板 それは松正さんです。

江上 宮里松正さんですか。

上原 松正。宮里栄輝というのは、沖縄の戦前ですね、県立図書館が美術館の責任者だった。昔ですけれどもね。ずっと、民主

同盟のときに、私たちと一緒に、一番最初からやったのだ。そういう人たちが約五十人が、一緒に歓迎会をしてくれて、大変お世話になったんですよ。正確な人数は山城の記事に載っています。

江上 復帰したあとの沖縄に帰られたのは、何年ごろですか。七九年ぐらいですか。

上原 四六年

江上 四六年？

佐道 昭和四六年？

江上 昭和四六年？

上原 昭和じゃない。一九〇〇（注・西暦）

眞板 それは、復帰した年が四六年ですよ。で、奥に戻られて。

中国からお帰りになって、

江上 中国から戻られて？

上原 （注・中国から戻ってきたのは）七五年。（注・沖縄へは）

七九年？ 七六年か。

江上 七六年。その頃に戻られたんですね。

上原 たぶん。

江上 中国から戻られたのは七五年ですね。

上原 はい。

江上 じゃあ、すぐ、沖縄に戻られた。

眞板 平良良松さんが、中国に陳情書を出したそうですね。

江上 えっ？

眞板 沖縄にとつて、有益な人材だから、上原信夫を返してくれ

と。

江上 平良良松さんが？

佐道 どこに出したんですね？

眞板 中国政府っておっしゃってましたよね。

上原 中国の総理か主席か知らないけれども、申請したらしい。

江上 平良良松さんが？ それで、帰って来られるようになった

んですか（笑）

上原 私のことらしいことが、中国語放送で、放送されていることが……米軍・憲兵隊か、読谷の情報関係に勤務している、沖縄の人が、そのラジオを聞いていて、「どうも、上原が生ききているらしい、という情報ではないか」と直感したんだそうだ。「ジャンエン」という中国語、漢字では尚家の「尚」ですね。その音と上原の「上」の音とほとんど同じで、しかもラジオ放送の内容の前後からすると、それはどうも対外国人の呼称で使っている名前ではないかと。きつと、日本人じゃないし、東南アジア人でもない。きつと、沖縄の「尚」か「上」だろうと。彼は、疑問を抱きながら、ラジオを聞いたんで彼は、すぐに那覇に住んでいる沖縄農事試験場長の私の友人・金城宏くんに連絡とつた。報告を聞いた彼は、すぐに山城善光さんのところへ行こうと言ってね、連れて行かれてですね。そして、山城善光に報告したんですね。それで、山城善光は、国交回復の話がやっと、まとまったばかりなのに、どうだろうかと言いいながら、時の知事、何ていう名前でしたっけ？ その時の知事は？

佐道 屋良さんでしょう。

上原 屋良知事のところと、それから、那覇市長のところへ行つた。山城善光にとっては、彼らは親しい人たちだから、どうもこういうラジオを聞いていたら、軍の作業の人が言うには、上原はどうやら、生きているらしい。

中国国内放送を盗聴した人は、もともと、私も、よく知っていた人だが、彼は、米憲兵隊が、中国語できるものを軍作業で、募集したので、応募したら、第一次テストは通って合格した。第二次の面接試験で、経歴とかいろいろ調べられるときにですね、いろいろの問題を出されたとき、「年齢からして、上原信夫という者とキミらと同じくらいのものが、沖縄にいたことがあるが、キミは、上原信夫を知らないか」と言ったんだ。彼はそのときに、



「どっかで聞いたような名前ですよ」と言ったら、だめになった。それから、ひと月くらい、やっぱり、人材がいなかったんでしょ。もう一回申請を出して、「テストに来い」って言われた。今度は、万全を期して、「上原という人は、会ったこともありません、上原とは関係がないんだ」と、「頑張る」と採用され、早速、中国国内放送を盗聴する任務についた。

上原が生きているらしい、との情報を手にした山城は、全力をあげて、私の帰国促進運動を展開した。たまたま、その頃、沖縄県は、復帰後はじめての沖縄中国友好代表団を派遣することになったんですね。そして、平良さんが団長で、訪中した平良団長は、國務院を訪ねて、関係者にこうこうですよと申請したんだそうです。これが、日本に私が帰るきっかけになったんですね。

江上 先生も沖縄に帰りましたか。中国は長い間住んでおられたんでしょうし。

佐道 祖国復帰したということは、ご存知だったわけですか？日本に復帰したっていうことは？

上原 そういふのは、中国の新聞には、日本の主なニュースや話題を読むことができましたからね。

江上 日本とか沖縄の状況はだいたい分かっていたんですか？

上原 だいたい分かかっておりました。分かっていたけれども、さて、沖縄に帰れるかどうか、ということとは不可能だろうとしか思っていないから、あまり関心がなかった。

江上 そんなに厳しかった？

上原 帰ったら、またCIC（注・米軍防諜部隊）がどっかで捕まえるだろうと。

江上 ああ、そういうのですね。

上原 しかし、もし、私が、帰国することを希望すれば、きっと、中国の方では、協力してくれて、私は帰れると思っていたんです。がね。だけど、私自身も、中国の関係者も心配なんです、本当

に帰れるかどうかとね。しかし、今回は沖縄県の当事者から申請が出ているんだから沖縄に帰れば、これからは自由ではないか、沖縄の県知事や市長名で、「帰国させてください」と書いたものを（笑） 中国政府に渡したんだから、では、「帰るか」と、決心したんです。

江上 インパクトがあつたんですね。

上原 それで、さて、早く帰ろうと思つていても、帰るには、国籍の確認やパスポート等、文明国家の国民が必要とする法的手続きや書類も必要なので、大変面倒なことに驚きながら、もうやめようかと思つたんだよ。私の帰国実現のために、いろいろ手伝いをした人もおりますけれども、その具体的な内容は知らない。これは沖縄に帰ったときに、聞いたのだが、私のおばさんの家に知らない人が、二人現れ、「上原信夫さんのこと知っているか」と聞いたりすることもあるそう（笑） その人たちは、虚無僧姿で来たのでおばさんの一人は、私が化けて帰ってきたんじゃないかと、（笑） びっくりしたそう。

江上 いやあ、びっくりですね。

上原 帰ってきたらね、香港にもひと晩くらいしか、泊まらなかつたね。大阪の空港に着陸して、出てきたら、「よくいらつしゃいました。お元気でございましたか」って挨拶する人たちがいて、その人たちに、案内されて貴賓室に連れて行かれてね、「しばらくここに休んでいてください。今日は、東京の方からの指示があるまで、ここから出られません」って、軟禁されてしまつて、まさか、日本では私の帰国は、知られていないと思つていたんですが、俺が帰つて来たら、入国手続きの時から、パシツパシツと写真を撮られたりしているからね。そういうことで、面白いやりとりも、ありましたけれど。

眞板 それは、七五年の何月くらいですか？

上原 そうだ、七五年の何月ごろだったかな？

江上 季節はいつごろでしたか？

上原 秋だな。

江上 そうですか。空港で、バチバチ写真を撮られて、そのあと、解放されたんですか。

上原 いや、東京の命令が出るまで、

江上 しばらく、待機していた？

上原 しばらく。何時間かな？ 何時間たつたか？ いや、あとで、「上からのご指示がありしたい、ご相談いたしますよ」って。

佐道 写真撮られたりして、具体的に新聞に載ったりしたんですか？

上原 いや、おそらく、新聞には載せていないでしょう。わからない、それは。

江上 政府の周辺に、そういう記録を残すために。そこへ何日も拘束されたんですか。

上原 いや、ひと晩だけ。

江上 ひと晩だけ拘束された。それで、あとは解放された？

上原 解放された（笑） まだ、母親が元気だったからね、元氣だと言っても、重病だった。しかし、危篤状態にあった人がね、息子が生きて帰ったと、また、元気を盛り返して、九十九までおられました。

眞板 お母様は奥から出られていたんですよね。

上原 私が沖繩を脱出してから、C I Cがいろんな部落の人たちにね、主だった人たちに、「上原信夫はどこへ行った、おまえたちが逃がしたんだろう」といろいろと調べ上げたり、「彼は帰ったら死刑にされるんだ」等とデマを流したりしたんだね。それだけでは、埒が明かないから、今度は夜中に遠くから石をぶつけて、戸を壊すとかだね。そういうふうにして、その後、親たちは生命の安全についての不安を感じていた。それで、沖繩には頼めるような子どもたちは誰もいないし、長男が福岡にいるから、長男の

ところへ行くんだということ、引き揚げていく形でやつと帰ってきたんですね。そういうことが、あったことも知ったもんだから、私は、沖繩に最初に帰ったときに、先ほどの宮里さんがね、「信夫くんは早く沖繩から出たほうがいいよ。長居するとね、いろいろ面倒臭い問題が出ますから」ということを言われたんでね。それじゃすぐ、

眞板 宮里さんは、宮里栄輝さんですか？

上原 栄輝さん。

眞板 沖繩、離れるのは五〇年の二月くらいですか？ そのときに、宮里さんから、離れた方がいいよと言われたのですか。

お話が前後していますが、経歴年表の二番目のものを作りました。これ、黒星がついているのは、山城善光さんの『荒野の火』という（注・琉球）新報の連載があるんですが、その中に日記が出ているんですよ、その日記の部分を加えてですね、項目を増やしてみました。これをご覧になって、別の意味で、思い出されたこともございましたら。

江上 大宜味村の平良敏子さんはご存知ですか。芭蕉布の

上原 昔、思い出があるんですけども、その家に行つて、機織しているのを見たことがある。だけれどもその後、私、帰ってきてから会ってないけれども、三、四年前にね、あの人の何か……

江上 芭蕉布。

上原 芭蕉布の何とかの会があつて、

江上 人間国宝になりましたからね。

上原 それで、私は、ひよっとしたら、喜如嘉の人たちが来ているんじゃないかと思つて、その会場に行つて、おばあさんに挨拶した。だけど、お客さんもいっぱいいたから、

江上 平良敏子さんにも挨拶されたんですね。

上原 挨拶した。そして、名刺をあげてね、「私は山城善光と活動していた上原です」って言ったら、私の顔見てね、（注・覗き

込むような仕事をしながら) こうやっていたけれども、次の人が、番つていうから、質問をおいてそのまんまに。

江上 では、その場で知っている方と会うことはできなかった?

上原 はい。私自身が次の仕事があったから、それ以上、待たなかったはずですよ。

## ■『自由沖繩』 廃刊後の党活動

眞板 前回のお話は、出版法違反で、高等軍事裁判のお話をちょっと伺いましたけど、その関連ですわね、いくつかお尋ねしたいんですが、これの原因になったのは『自由沖繩』ですよ。これは創刊号だけで、それ以降は出ていないんですか?

上原 ずうっと継続して、少なくとも旬刊か、一番いいのは月刊でいこうということで、計画はしたんだけど、捕まっちゃって、いろいろな政治的な社会的なというよりも、まず経済的な打撃ですね。罰金を食らわされているでしょ、その罰金を納める、その罰金の金額などが、民主同盟の三年分くらいの活動費と相当しますからね。

江上 相当な金額だったんだ。

上原 (笑) だから、動こうにも動けなくなっちゃって、それと、二人が、二人つていうのは、山城さんと桑江さんね。二人が、まず、実際にはカネをいくら納めたのか、私は分かりませんけれども、その経済的社会的影響は非常に大きな打撃でした。山城善光氏は、まず、自分の家族を食わせなきゃ、いかにわけてしょ。しばらくの間は、カンパでね、できたにしても、長くは続かない。で、桑江さんは、桑江さんで子どももおりますし、おじいさん、おばあさんもいて、お店も大変厳しい状態だった。

でも、その事件があつて一番根本的な打撃を受けたのは、仲宗根源和だね。この問題で彼は私たちとの精神的思想的等多くの面

で非常に苦しい立場に追い込まれたと思う。とりわけ精神的にですね。かつての同志的信頼もほとんど失われたということですよ。最初、彼はまさかアメリカ軍政府が民主同盟などに弾圧はしないと思つていたんですね。だから、ある意味では、彼は、アメリカの手先みたいな保守の代表的な又吉康和との闘争を通じてだね、沖繩における新しい政治の突破口はできないものかと考えていたのかも知れないが、実際は、仲宗根個人対又吉康和の政治闘争という形で、表われることが多かったのではないかと。その結果、こういう具体的な軍政府対民主同盟の政党弾圧の絡む問題にぶつかつてみると、民主同盟を代表する、その責任者が直接、高等軍事裁判に出なければならぬときに、「いざ、鎌倉」という決定的なときに、大城(ツル) 女史の要求を私が伝えたときに、彼は「いま、時期的に非常に微妙な段階だからなあ」ということを言つて逃げてしまったのだ。仲宗根が逃亡したので、私は「先生が行かないんだつたら、では、俺が山城と桑江の銃殺の前に立つて、俺が先に撃たれちゃうかなあ」と言つて(笑) 啖呵を切つて。

眞板 実はですね、やつぱり、山城善光さんの『荒野の火』の中で、裁判は六月十日くらいですかね。六月五日に民主同盟の中央委員会を開いてですね、その中で山城善光がやったことつていうのは、党とは関係ない、善光と桑江が勝手にやったんだつていうことを軍に対してアピールするんですよ。

上原 仲宗根が?

眞板 仲宗根が。その中央委員会にお出になられていますか? 民主同盟で、そういうの決めていっているんですよ。桑江たちがやったことと、党は関係ないみたいなことを。山城さんもそれに対して、憤慨したと書いていましたけど。

上原 それは参加者の名前、ありますか?

眞板 いえ。中央委員会の参加者の名前、出ていないんですよ。流れから行きますと、先生はお出になられると思うんですよ。

けど。

上原 おそらく、私と仲宗根が激論してだね、その後のことだと思ふ。あるいは、私を除く、何名か集めてやったのかもしれない。

眞板 このあたりの部分でいくつか確認したいんですけど。山城さんの『荒野の火』で行くとですね、四月の末くらいに、どうもMPに一回捕まっているみたいなんです。で、五月五日に石川ホテルで中央委員会開いているみたいです。そのあとに、米軍の公安部に召喚されて、スキューズ保安部長の尋問を受けているようなんです。

上原 ちよつと、よく分からないけど、捕まったあと？

眞板 どうも一週間くらい放り込まれたらしいんです。

上原 もっと、長いでしょ。いや、『自由沖繩』発行直前の出来事ではないか。そのときは、たしか、『自由沖繩』原稿の一部をカバンに入れたまま間違えて、MPのジープに乗せられたときのことだと思ふが……

眞板 もっと長い？ この時期二回捕まっているんですよ。

上原 憲兵隊に捕まったのは、長くても、一日くらいで釈放されたから。誤解であつたということだね。この『自由沖繩』の発行前は……

眞板 これ『自由沖繩』ので捕まっているわけですよね。

上原 『自由沖繩』で一回。

眞板 先生のいまのお話は、その前の普天間で遭難しているのと、一緒になっていると思うんですよ。これは新聞を出す前ですね。この四八年の四月六日。ヒッチハイクして停めたら、MP車でそのまま司令部連れて行かれちゃって、ひと晩留め置かれて、解放されたんですよ。

上原 山城が？ そう思い出してみるとそうです。その前後は、私と桑江は、ガリ印刷で、数日、寝る時間もないので、山城は一

人で外を走り回らなければならぬときだと思ふ。

眞板 本当はこのときに、桑江さんと先生が同行して、民政府に行く予定だったと山城さんは書き残されています。一人で行動することになって、たまたまヒッチハイクした車が車だったんで、捕まっちゃって、これが一泊で留め置かされて帰ってくる。で、こちらはその後なんです。機関紙を出してから四月の末に捕まる。で、善光さんの『荒野の火』によると、一週間拘留されたんです。そうすると、だいたい五月の上旬、おそらく、石川ホテルの中央委員会には出ているんでしょうから、その前くらいに解放されているのかなど。

上原 石川ホテルの中央委員会。会合をひとつふたつ、もっているはずですよ。そこで、何名か集まって、山城、桑江の問題をどう対応するのかということはおりますよ。そのときは、私は、これは何年の四月ですか。

眞板 これは四八年ですね。だから、新聞を出したすぐあとですよ。

上原 山城は Deng 熱と、じゃなくて

眞板 マラリアですね。

上原 マラリア。マラリアで病床にある時、逮捕されて連れて行かれますね。何月になっていますか？

眞板 それですね、このあとなんです。二十六日のあとくらいに「マラリア発熱」とあるので、たぶん、出版の一連の作業で疲れが出たんだと思うんです。で、寝込んだと本人は言っています。その病み上がりの頃くらいのタイピングで、捕まっちゃった。

上原 そう、その頃。

眞板 っていうふうには『荒野の火』では善光さん書いています。

佐道 そのとき、ずうつと山城さんと行動を一緒にしておられた

んですか？

上原 そうですね、だいたい一週間のうちの三日以上は、ほとんど一緒でした。

佐道 ああ、そうですか。この問題が起きたときには、先生はどこでそれをお聞きになりましたか？

上原 彼が捕まったということは……

佐道 捕まったときは一緒にいなかった？

上原 そのときは一緒にいない。私は、そのときは辺土名の仮住まいかその周辺でした。いわゆる下宿宿があつたんですが、怪しくなつてくると、そこで寝ないで、別に移るんだけど、情報がそこへだいたい集まつてくるし、国頭村のあの頃では、多くの若い人たちがついでというのは、私の何ていうのか、連絡係みたいに協力していた。

佐道 やつてくれていたわけですか。

上原 いや、自然といつの間にか、やつてくれましたよ。善光が捕まったということを知らせたのは、喜如嘉に私と同行して山城に会わせた大城感一が、それから辺土名周辺の平良宏、山田義福（村議）、外間伊光（村議）は、すぐ連絡がとれた。電話がないから、あらゆる人を通じての口伝えで。考えてみると、非常に便利で正確で迅速であった。

大城感一さんが、直接、私の下宿のおばさんのところへ連絡を入れてくれたんですよ。自転車で十何分かかけて、このとき、私は、まだ帰っていないで、どこ行つたか分からない。ということだったので、そのおばさんが役場職員で、「私たちにしょっちゅう、協力してもらっている友人を通じて、善光さんが捕まったらしいから、早く家を離れなさい」という警報を發していたわけです。その他に、そのマチヤグウワの山之端商店でね、おばさんたちが、「あい信夫、大変なことになつたぞ」と、みんな、声をかけてくれたので、もうすぐに情報が伝わつたわけです。それ

で、私はどうしようかというところで、しばらくここにいないほうがいい。あるいは山道を変えて、奥に逃げて、奥でしばらくいたら、奥の若い人たちが、今度は、防衛隊並みの協力で、奥の山道から下へ降りてくるよそ者を発見すると、何時ごろ、何名の人が、山道を降りて来たぞ、というような、いろんな伝言を寄越して、そこで、三日くらいいたと思う。あと、十分な準備をして、私は、辺土名に行つて、それから山城善光さんの家を訪ねに行つて、奥さんに会つて、状況を見てこようつてことで、石川に。そして、桑江朝幸さんの家へ行つて、そのまま、石川にいる大城善英のところへ行つて、あと連絡、通信の方法を研究したあと、仲宗根源和と連絡を取つた。そのときに、石川ホテルで会合をもつたんでしょね。

佐道 なぜ、捕まったということも、すぐに分かつたのですか？

上原 理由は、いわゆる「懇談会」ですね。沖繩懇談会で、軍のこけおどしだ、それをさらに、輪をかけてだね、アメリカの言うことを聞かないと、ひどい目に遭うぞということを振りまいていたのは、又吉康和だと。だから、そういう段階を経ながら、結局、『自由沖繩』を發行する場合も、いかにアメリカが民主的であるといつても、占領地である沖繩にとつていつか、なんらかのきっかけで、彼らが不利だと思ふものについては、断固やるだろうということを我々は常日頃から覚悟しておりましたからね。だから、しかるべきときととらえ、船越（尚武情報課長）に認可申請したときも、いろいろと必要以上に、山城善光は、念を押して言っていましたね。彼は十何回も捕まつているから、それは警戒心は高いからね。私みたいなものが、野生のイノシシみたいに、わっと走り回つている（笑）

さて、『自由沖繩』発刊の許可については、裁判長に対して、船越は、「私、認可を与えなかつた」ということで、逃げ回つたが、それを大城……

眞板 ツルさん。

上原 ツル女史が、その件については、「私が直接通訳をしたんですよ」と、落ち着いてはつきりと、裁判長の前で言ったんですよ。裁判長は、意外な顔をしていたように思う。

## 『自由沖繩』発行までの思ひ出

眞板 『自由沖繩』は原稿はどなたがお書きになったんですか？

上原 原稿は主に山城善光が書いて、桑江と私が、その山城善光が一句一句読んでだね、「これは、あれは、どう表現したらいいじゃないか」という話し合いをして、正確に言えば、三人の合作ということになるだろうね。私の役割りは、一つ、二つくらいね。原稿が最終的に決定したあと、今度は私と桑江朝幸が、ガリを切って印刷をするんだが、印刷用紙の切断は工具がなくて、大変苦労していたが、「英会話帳」の印刷で協力した青山さんの参加で、予定より早く終わった。

眞板 編集作業していたのはコザですよ。

上原 コザ。

眞板 コザでやってたんですよ。

上原 編集会議は石川でもって、仲宗根も入ってきていますよ。

眞板 石川市で編集会議をやって、四月十日に新聞を出そうと、手続きがうまくいかないわけですよ。で、遅れちゃって、

上原 私たちは、認可は取れていると思っていたんですよ。だったから、印刷はどうするんだという具体的な段取りになったとき、印刷は桑江朝幸のところにある謄写版で印刷すると決まり、まず、一安心。ただし、肝心の日本式原紙がない。ロウをひいた原紙ですね。桑江さんがやまとから持ち返っていた貴重品。じゃあどうするんだと、みな、困ってしまった。じゃあ、原紙はどこそこ行ってもらったことじゃないかと。沖繩？ 瀬長亀次郎たちがやっていた新聞

社か軍政府の印刷所の余りものはないのかとか。

眞板 『ウルマ新報』。

上原 そこ行つて、「何枚かもらってきたら、いいじゃないか」という話になったと思うんだ。それじゃ、誰が行くんだということ、謄写版印刷に詳しいからと、桑江さんになったのか、桑江さんと二人で行つた。なにしろ、貴重品だから、一人では危ないということ。さあ、印刷だ。しかし、今度は紙がない。どうすんだ、こうすんだって、結局、紙を貰いに行つたのは、三名じゃなくて、やはり、桑江と私の二人だったなあ。

佐道 二人ですか？

上原 二人です。そして、新聞社の輪転印刷機では、小さくなったら使わないんですね。有るところには、有るものだ。「権力とは物力ですか？」と変なことを言うと、桑江さんから、「信夫、有り難く頂戴するんだ」と叱られた。それを確か、五、六本。一本一〇キロくらいののを担いで持ってきたんです。四、五時間かかった。とにかく、三時間以上はかかったはずですよ。なにしろ、私は身体も大きく、若いから、身体の弱い桑江さんの分まで、私が担いで帰った覚えがあります。それを担いで帰つたのは、きつと桑江さんの家だと。石川ホテルじゃ場所がないからね。彼の子どもたちの寝る場所を占領して、置いたんだらうな。原紙が、何式なのかなあ、日本式のガリ版用原紙っていうのは、切りやすいですよ。しかし、桑江さんが、やまとから持ち帰ってきた、日本式の原紙は、子どもたちのために作つた、「英語帳」などの出版でぜんぶ使つたから、一枚も残っていません。

さて、アメリカ式原紙の使用方法を知らない。印刷知識のある人に聞いても、見たこともないというので、アメリカ式一枚を使うには、「もったいないから」と四分の一に小さく切つて、薄いアメリカ式の原紙を、鉄板の上で、鉄筆で書くとすぐに、簡単に破れちゃうので、次は、破れないように書くと、今度は、印刷すると写らな

い。どうしようかということ、二晩か三晩一睡もしなかった。散々苦勞した挙句、破れないで書き終わったやつを見せると、桑江さんは大きい声で「バンザイ、これでできるぞ」と、すぐに印刷したらね、まあまあのができた。

だけれども、沖繩時代には、それ以上の技術は思い浮かばなかったですね。私が、ガラス箱の下に電灯をつけて、そのガラス板の上で、硬めの鉛筆で書くっていうのは、私は中国行って、中国の科学院のある研究所で、仕事の必要から、思い出して、『発明』したんだけれどもね(笑)

佐道 最初、どのくらい作るおつもりだったのですか？

上原 刷るのがね、うまく行けば、五千部くらい刷る予定だったんですよ。

佐道 予定では？

上原 計画では。

佐道 実際は？

上原 実際は二千部しか刷れなかった。

江上 二千部ね。

上原 二千部刷ったあと、実際に使えるのは、千何百枚か(笑) 原紙がボロボロになつて…

※『荒野の火』掲載の山城善光氏の日記によると、刷り部数は一千部で、そのうち、百二十七部が損紙になり、八百七十三部だけ配布。佐道 どういうふうに配布するおつもりだったんですか？

上原 配布はですね、『自由沖繩』が出版されたということが、口コミでパツと広がると、みんな喜んでね。手分けして、差し当たり、その周辺にですね、同志の家に「これ見ろ、見てくれ、これでいけるかどうか」、「こんなすごいやつ作ったのか」って喜んでくれてね。そして、今度はあとは、それじゃ国頭、中部、南部は、いくつかの地区に分け、国頭は、私が配布しに行き、中頭一帯は桑江さんと添

石さんとか、今帰仁に行つたら、大城さんを通じて、喜納くんとか、南の方は若いのが少ないから、那覇や壺屋に行つたついでに、南部の拠点にも私が運んだ。壺屋などでは、街頭演説を兼ねて、大城、神里、平良らの協力で、配ったのは私だったかも。それで、配るときも、露天市場の人たちに、『自由沖繩』、機関紙をやつと確保しましたつてね、わつと集まってきたからね。そして、たちまちなくなりました。

佐道 ああ、そうですか。

上原 それで、なくなつたら、じゃあ、もう一回やり直そうということをやっていたら、逮捕で終わりになつてしまった(笑)

佐道 だいたい最初にお配りになったところが、民主同盟のだったメンバーといえますか、賛同してくれる方々の範囲ということになるわけですか？

上原 僕は中部では、石川や仲泊とか、乗れる車があれば、それに飛び乗って行き、車が止まった所で降りて、すぐに、時局講演会をやりますつていうと、わつと集まりますね。集まつて、こういうのがあります。「目の悪くない人は読めますから」つて。私がこうやつたら、より近く、より近くへつて、たちまちなくなつた。群集の要望があり、「第二号は間もなく出版します」と約束をしたのだが… 眞板 定価を決めていましたが、おカネはもらつたんですか？

上原 あ、のね、一部一部決めた値段で、おカネをとることになつていたんだよ。これがね、宣伝を兼ねてということだね、また、みんなおカネ持つていかなかったよ。カネで買う…

江上 カネで買うだけの余裕がなかった？

上原 余裕がなかったからね。しかし、軍票か何かを下さつた人も何人かいたことを思い出す。

佐道 民主同盟の活動費自体はどうやっておられたんですか？

上原 民主同盟の活動費つていうのはね、ほとんどもう、自前。

佐道 自前？

江上 持ち出し？

上原 持ち出し。講演会やるっていうと、有志の人たちがね、大変だろう、昼飯代くらいにはなるかもしれないだろうって、ほんのわずかな、いまで言えば、十円玉の一つ、二つくらいをね。そういうのをひとつの運営資金にしていた。寄付、会計報告の中でも、寄付なんてありますよね、何十円とかね。

佐道 たとえば、一律党費をこういくらで考えるところではなくて、もう寄付かカンパ……

江上 その都度のカンパとか寄付ですね。

上原 政党を組織し、政治活動を開始したのだから、常識として、会費を納めることは、当然だと考える。しかし、あのかきは、会費、党費なんて実際に出せる人は、百名いたら、何名もいなかったでしょうな。なにしろ、配給物資をタダでもらっていた。配給が足りない分は、「戦果」をあげるしかないですね。私、なんぞの場合には、普通の生活で必要とする交通費ですね。これはいらぬ、二本足が交通手段だったから、言い方が悪いが、いわゆる活動家ほど、「戦果」もあげきれぬ普通の人だったのかも。

佐道 脚が交通手段ということですね。

上原 すると、めし屋とかそういうところは、まず、公式なめし屋は思い出せないね。食べ物のある友人が、向こうから逆にね、「腹減っただろう」、「めし食ってないだろう」、「いつから食べてないのか」、「朝から食べておりません」、「上れ、上れ」と言っていて、「いまのこんな小さなやつをこれしかないんだ」、「これじゃあ食べられないから」、表に行つてね、「これ食べとけ」って、海に行けば、「これでもいいから、食べろ」と言つて、食べさせられた。おコメのことは、特別な家庭しか、食べることができなかった。医者をしてる先生とか、そういう人たちの家に行ったときだけしか、食べられなかったですね。

佐道 それは、民主同盟のシンパの方々のお家ということですか？

上原 そうそう。だから、私は北の方から、一番北の方から、石川、那覇まで、道順はだいたい同じようにしか通らないですからね。だいたいどこそこで、泊まるということになると、そこで、私の下宿みたいなのができちゃうんですよ。同志の家がね。

佐道 その道に沿って、

上原 それが、「信夫の街道宿屋」となって、口コミで、人々に伝わっていつて、次は、「俺んちに來い」、来ないと今度は怒られる。

佐道 「おまえ、こないだ来なかつたなあ」、みたいな(笑)

上原 生きた移動する情報源になつていたわけです。

佐道 ああ、なるほど。

上原 そういう宿泊の機会を利用して、そこで、宿の主と議論して、これでもつてこういう組織を作ろうと。すると、最初はその親父と一緒に二人でしか話し合えなかつたが、明日は同じ場所、あるいは、どこのかしこのつて。そして、私が行くと今度は、すぐに連絡をとつて、みんな集合して、何名か集めてやることもありました。そこも政治集会ですよ。私は二十四時間、休憩時間はなかつた。これが私の普通の生活でした(笑) そういうところまで、考えていませんよね。

ただ、私が少しカネを使ったのは、密貿易者が運んでくる子どもたちに必要なノートや紙とかね、鉛筆、クレヨンとか、値段はちよつと高いけれども、奥の子どもたちが、欲しがっているものを私は求めた。こういうのはどこそこの誰が持っている、情報の提供があるから、その情報をもとに、そこへ行つてだね、「安く分けてくれよ」って頼んで貰つて帰つてね。奥の子どもに配つたもんですよ。カネを使うところはそれしかないからなんですよ。あとは石川ホテル。二銭か三銭でしたかね。なにしろ、我々しか泊まらないのに、宿泊料だけはきちんと取つていたんだ。石川ホテルときたら(笑)

佐道 新聞を出そうとかですね、こういうときにはある程度まとま



ったおカネが必要になりますよな。

上原 それはね、いまの人たちとしては、当たり前、いや、正常な考え方だと思っんですね。あの時代は、われわれの考え方は、逆さまだった。金銭の前に、まず、モノがないから、印刷機があれば、紙があれば、インクがあるかどうか、それさえあれば、党の機関紙や子どもたちが必要とする学習資料が、すぐに、印刷してあげられるんだと思っった。私たちは、印刷機を武器と呼称するほど、近代人がありきたりの道具としていた、印刷用の道具を手に入れようと、こんな心血を注がざるを得ないほどの、二十世紀外の環境の中に棄てられていたのだ。

佐道 だけど、紙代は必要なんじゃ

上原 だから、紙を売ってくれるところがない。インクを売るところがないから、軍や民政府の方の印刷所では、余った紙を捨てるほどある。沖縄人民には、使えなくなつた紙をお分け下さいって、お願いしに行く。これは、今の時代の人たちには、マンガにもならないだろう。

佐道 それを貰つたわけですか？

上原 それを貰いに行つて、

佐道 桑江さんと二人で、担いできたんですか。

上原 桑江さんと私の二人は、先ほども述べたように、軍・民政府の「不用ごみ」を再生させた功があるはずだつたのに、逆に軍から、紙を盗んできて、闇に流したんだと、デマを流し、また彼は引っぱられて、調べられた。いらぬものを頂戴してきたのですね。二人で紙を貰いに行つたとき、「何に使うんだ」と言うから、「われわれは政党の機関紙を作る。政治運動の啓蒙のため、いろいろな宣伝をしたり、軍の正しい政策を伝えるために必要です」というふうに言つた。そのとき、担当者は、「そうか、文化活動にも使うのか」と言うから、「はい、そうです」と答え、紙をいただく、目的、利用内容も詳しく説明の上で、「これを持ってけ」つて、同意の上で、

二人で担いで帰つた。だのに、後日、この問題で、桑江夫人も警察で何日間か調べられている。

眞板 『自由沖縄』の大きさはどのくらいだったんですか。(A4のコピー用紙を示して) もうちよつと大きいですか？

上原 いまちよつと考えてみると、

佐道 B4サイズくらいじゃないですか。

上原 このくらいじゃないですか。

眞板 じゃあ、B4くらいですね。

上原 桑江さんが持つて帰つた頃、印刷機(謄写版)のローラーの大きさを、作つたんです。

眞板 その大ききの紙がうまいこと、手に入りましたね。

上原 いや、あのね、謄写版の最大面積に合わせて紙を切つたんだらうな。しかし、一枚だつて、無駄にできない貴重品(当時われわれにとつては)だつたから、青山さんの力も借りたのだと思う。

佐道 切つてサイズを合せて、

上原 その裁断は、私は不器用だから、桑江の奥さんが、昔、女学校を出ていて、大変器用で、洋裁などでもできる人だつた。英語の学習本なども、奥さん、青山さんが、二人でやつた。

佐道 そもそもこういうものを出そうというのは、どなたの？

上原 えっ？

佐道 こういう新聞を出そうということは誰が言つたんですか？

上原 こういう運動の経験があるのは、仲宗根源和という人と、それから山城善光。この二人は、数十年來は、日本の東京でも、沖縄でも、社会運動の合法、非合法含めての具体的な活動をやっていて、そういう政治宣伝活動をやる必要がある、機関紙は宣伝や組織活動の武器であることを彼らの頭の中には、ちゃんとあつた。われわれは機関紙を出さないといけないというの、民主同盟を作る前の話し合いの始まる段階で、もう何度も話し合いされた問題だつた。したがつて、自分たちのしなければならぬことは、組織作りについ

ては、まず、呼びかけ人を誰々にするかとか、どういう段階を経て持っていくか、というようなことを練りに練って、はじめて具体的な活動を開始する。ただし、アメリカの民主主義は、見かけだけでも足りないから、彼らが気に食わないときには、沖縄の民主化運動も潰すかもしれない。その場合どうするか。そういうような話し合いをずうっとやってきて、いよいよ民主同盟ができたから、それじゃあ、正式に党としての宣伝活動をはじめるとやっぱり、常識として（新聞が）必要になる。そして、やがて、幻灯が欲しいと言いつ出したのだ。演説会で、それを使って、宣伝活動を展開すれば、効果てき面だと意見一致した。将来それを使って、いろんなその軍配給物資がね、どのようにインチキされているか、どのように我々がだまされているか、いわゆる占領者であるが、我々をただで食わしていると言っているが、実際には、アメリカはその義務を果たしていないのだ。というようなことは、いくら口で言ってもね、効果ない。しかし、やり方如何によっては、前途は明るいなあと思つたわけですよ。

このように、党づくりの段階は、より高い綱領を目指して、結構、順調に進んで行ったんですよ。そこで、思わぬこの高等軍事裁判でね。最初は銃殺というのがね。

佐道 あ、そうですね。これは逮捕されてすぐに、こういううわさが出てきたんですか？

上原 そう。これは、彼らが、待ち受けていたワナに私たちが、引っかかったようだ。アメリカはこの機会をとらえて、これほど怖ろしいことをこの民主同盟は、やっているんだぞと。だから、山城や上原、仲宗根、桑江たちと一緒にやっている、大変なことになるぞと。アメリカに囚われて、殺されるぞと、銃殺にされるぞと。こういうことを意図的に、CICも流したのであろうし、CIAも来たであろうし、それが沖縄の警察を通じて、広くデマを流したと思うんだけど。しかし沖縄の警察は、意外と彼らはそういう面では積極的

に動かないところがありました。浦添……

眞板 浦崎（直二）じゃないですか？

上原 浦崎です。逆に私たちをかばってだね。それで、私は、わが沖縄の警察官は、愛国心があると、愛国者でなければ、愛郷者であると。本格的に反人民的立場に立つような、ウチナンチュの警察官は、当時いなかったと思いますよ（笑）あの速記録の中で、私の講演の速記など、読めないところがいっぱいあってだね。仲宗根や山城、桑江とか兼次、瀬長亀次郎とか浦崎康華とかの話は、実にきれいに書かれているでしょ。で、私のは前後が通じないとか、いろいろあるんです。

眞板 あ、そうですね。

上原 実はね、私にその講演会の速記録を持ってきた人が沖縄県公文書館に行つて、「おまえのことを調べてみたらね、他の人たちは、四枚も五枚も六枚もねえ、チャーンと速記録に載っている。おまえのは一枚しかない。で、二枚目ね、わざわざ演説三〇分と大きく書いてる」。一分か二分で読めるような字数しかないんですよ。「それはきみの演説内容を正確に伝えると、きつと米軍から弾圧があるから手抜きしたんだ」と。

その中には、米軍は我々にその衛生状況がどうのこうのとか、文化とか教育をどうのこうの言っているけれども、アメリカの教育担当者は、占領された土地の人民が、他国の援助を受けて、教育をやつてもらつたという事例は、世界の歴史上ないなんていうことを言つたのを私が批判している。それから、闇船だよ。闇交易船が沖縄にも、人々が必要とする物資を持ってきた。「子どもは鉛筆が欲しい、消しゴムが欲しい、クレヨンが欲しいと言っているのに、アメリカが紙一枚でも文房具の一個でも、輸入してくれたことがあるか、ないじゃないか」と。それから、「女の子はね、衛生必需品とか口紅が欲しいとか、そういうことを訴えているのに、人民大衆の求めている、日常生活の必需品もアメリカは、我々に対して、一度

も配給したことはない。これを解決してくれたのは、勇敢なる闇買易船である」と、速記録にはちゃんと書いてあるんですよ。そういうのは、「あまりはつきり書くというと、今度は、軍政府、民政府に問題にされるから、おまえの安全をちゃんと配慮してだね、その警察官はおまえの話は、分からないようにしているんだよということも隠されている(笑)」と説明するから、なるほどと当時のことを考えたんです。

佐道 先ほどの『自由沖繩』を作るときにですね、先生とか桑江さんとかですね、いろいろ紙を調達されたりとかいう話はいま伺ったんですけれども、仲宗根さんも編集会議に出て、意見を言っていたというお話だったんですが、仲宗根さんはこの『自由沖繩』にどういう、どの程度かかわったんでしょうか？

上原 彼は、この『自由沖繩』を出すということについて、全面的に賛成でした。はつきりとね、意見を出しました。だが、どうしてこれを創刊するか、どう出版するか、それに必要な道具や資材はあるか、などの具体的な問題については、彼は知らないんですよ。出版に必要な道具がある程度、知っていたのは桑江だけである。彼は少量の事務用品を持ち帰ってきているが、もうほとんど、日本式原紙も使い果たしてしまっているで、東京の友人から送ってもらったことも不可能であるので、それはどうするか、というときになり、まず、民主同盟機関紙の発行の認可申請を軍政府に申し込んでみようと、一回やってみようじゃないかというのが、山城と私と桑江の三人の知恵です。

佐道 じゃあ、現実化するためには、あまり仲宗根さんは、あまり動かれなかったみたいなの。

上原 そうですね、具体的な彼の意見は、山城善光の解説の中でね、含まれていると思うので、そういうふうにして、彼はまったく関係ないということではなくて、とにかく、彼自身は、年のせいもありますから、また、わが党の委員長さんですから、「若いのに任せる

ぞ」という配慮があったと思う。

佐道 じゃあ、言うほどあまり動くことは？

上原 そういう行動は、ありません。

佐道 編集会議ではどんなことを言っておられたか、ご記憶ですか？

上原 党の政策として、沖繩問題は沖繩自身で解決すべきだ、その原則に立ってですね、まず、創刊号でもって、そういう問題を語るような状態だったかどうか。運動の短い時間の、我々の薄い短い実践経験からするとね。だから差し当たり、その第一目標は、これ(新聞)を出すこと。あとは、将来は一年ぐらいたったら、幻灯をつくること、みたいなことを役員会ですでに決定していました。

けれども、これは将来の課題で、当面、差し当たりの問題は、せめて、講演会開催のときの広告ビラが、書けるくらいの紙ぐらい欲しいし、ビラの字がハッキリ分かる紙、ビラを貼って、雨が降っても、字が消えないような紙とか、せめて、各地の演説会では、場所と日にちと時間を書いたやつを、せめてひとつの村に、あるいは部落に二枚か三枚くらい貼りたいと、そのために必要な紙は、どうするんだということに、『自由沖繩』の発行と同じように、紙の必要は最大の要望事項の一つであった。じゃあ、どっかの新聞社の使い古した、裏の使える紙はないかということですね。それから、軍のいらなくなった新聞用紙について、廃品処理されるものはないだろうか。それには、まず、行ってみようじゃないかということで、桑江と私が、軍と民政府の印刷所の関係方面を回った。

このように、すべてはもう、何もないところから、我々は、一步一步、歩き出したということですね、いかに大衆に対して、広く宣伝工作をしたくても、そんな大量の部数でなくても良いから、夢はまず、五千部だが、将来は一万部を。差し当たりは、せめてわれわれの周りの人に、いや、最少でも五百部でも良いのだ。この一部でも良いから、早く機関紙を発行したい。市販したいと考えたが、実際

は難しかったですね。なにしろ、われわれ専従員は、食事代くらいは、保証しなければ、と語り合いながら、本当に腹を空かせたまま、明日を迎える。とにかく時代が、こういうときだから、自力更生、とにかくぶつかれと。闘えと。そして、誰かが、与えてくれるものではないんだと。自分たちで勝利は、勝ち取れということ。そういう非常に原始的な日本の初期の労働運動そのものではなかったかと思うんだね。実はその何倍も、もつともつと下辺ですね。

佐道 で、出されて、成功して、みなさん、大変喜ばれて、やったと思ったところで、逮捕という。

上原 (笑)

佐道 ちょっと、身を隠しておられて、戻って来られて、で、連絡を取られたんですよ。

上原 そのとき、一応、疲れたから、三晩、四晩くらい、寝ていないんですよ。印刷のことで。それじゃあ、せめて四日、五日くらいね、一服しようよ。桑江さんは自分の家があるから、テント小屋だけれども、そこに住まいがある。そうすると、山城さんは実家に帰れば、奥さんが待っているから、疲れが癒せる。そして、私は辺土名まで帰って、辺土名の下宿で一日、二日ゆっくり寝ようと思ったり、その翌日、何日目だったか分からないけれども、先ほど言った、大城感一から、「桑江と山城が捕まったぞ、気をつける」という連絡があったことを聞いた私は、迅速に必要な行動をとった。

次の日だろうな、私は山城善光の家に、奥さんの話を聞きに行ったり。それから、桑江の家はどうなっているんだろうかと思ったり。同じ日かな？ 二、三日経ってからか、桑江の奥さんも、留置場にひと晩か、ふた晩入れられているんですよ。紙を盗んだのは、桑江をおまえがそのかして、どうのこうのと言いながらね。私は、二人が捕まった翌日か、翌々日には、仲宗根源和を訪ねている。

そして、石川の大城の家で連絡のできる中央委員の人たちを何名か非常召集して、集まってもらって、どうするかということ。次

に、仲宗根源和と、そのときは石川に集まってもらって、そこで、どう対応するか、相談した。だが、外部からの連絡がくれば、もう受けるのは私しかないから、で、私が、「対応をどうすべきか」ということで、それに対する仲宗根は先輩としてだね、「絶対無茶しちやいけないこと、まず、重点はふたつを救出することであつてね、三人が捕まることではないから」(笑) というようなね。

一応、証言の資料はちゃんとしていた。ただ、彼が高等軍事裁判に出るようになると、党の責任者が出ないと、非常にまずい結果になるというようなことになると、今度は仲宗根は、何とか逃げ出す理由を見つけようとしているので、私が大きな声を出して、議論したんですよ。

眞板 ちなみに、『自由沖繩』っていうのは、いまでも残っているんでしょか？

上原 私は知らない。おそらく、桑江か山城善光さんの家には、あったかもしれないけれどね。貴重な記念碑として残しておいただろうと思うんだけど。私はそういうのを保管するような場所がないから(笑)

眞板 結局、『自由沖繩』は創刊号しか、出し切れなかったということですか？

上原 そういうことですね。これこれについては、次の号で出そうという計画はあったんですよ。

江上 じゃあ、もし『自由沖繩』が出てきたら懐かしいでしょうね。一同(笑)

## ■高等軍事裁判の対応

眞板 このあと、どういうふうな活動になっていくんですか？

実は山城善光さんの日記というか『荒野の火』でもこのあとの話は、飛び飛びになっていくんですよ。あ、前後しますけど、高等

裁判所で、判決が出ますよね。すぐ出るんですよ。

上原 あかね、もうすでに、高等軍事裁判所でもって、大城ツルさんがいうように、仲宗根源和が党の責任者として出席して、偽りでもよいから、「こういう不始末をしました」。「申し訳ありません」って、ひと言、言っていたらね、もつと早く解決したはずなんですよ。その大城さんが、高等軍事裁判で言っているように、あのとときの米軍の担当責任者は、少将？ 大佐ですか？ とにかく形だけでも、本人が行けばいいとしてくれたから。ということは大城さんは私に対して、知念に呼んだときにね、伝えた。それを私は、またその日に首里に走って、仲宗根源和にそれを報告して、そして、翌日の朝、じゃあ、石川の大城善英宅に、何名か集まって、相談することになるんですね。大城宅が石川の事務所みたいになつていたので。

眞板 それが六月五日の中央委員会ですか？

上原 かもしれませんがね。それで、議論でどうするか、ということとで、ふたりを救わないと、結局、民主同盟は自分たちで軍の顔を立てるといふのは何だと。大衆は聞いたらね。そういうことで、仲宗根と私は、首里の彼の家でだね、石川のホテルでね、大城さんとという方、なに一だつたかな？ 事務局長やつた人。

眞板 事務局長って仲宗根源和

上原 その次に、仲宗根源和は今度は委員長になりますね。なんとか一だと思ふんだが、六十年も経つちゃうと（笑） 会計報告で名前を出しているはずだよ。

眞板 どこかに役員名簿がありました。

上原 なんとかはじめですって字を書いて。

眞板 中山一ですか。

上原 中山一 中山一。確か、五、六名集まっただけですよ。緊急中央委ということで（笑） そこで、私は散々、仲宗根を追及した（笑）

眞板 それで、結局、そのとき、上原、私が行きますよって話になつたんですか？

上原 それだつたら、誰か、行けって、やっぱり、こういう問題についてはね、山里さんっていう方も、そのとき集まっているよ。彼らは、すぐに弁護士を組織しようということと動いたのは事実ですよ。そのときに、やはり、私はまだ、あの方は二十四ですか、二十三ですか、

眞板 二十四です。

上原 二十四くらいですか。ですから、こんな若造が出て、軍事裁判は民主同盟代表とは認めないだろうから、やっぱり、年配の人が出たほうがいいじゃないかということだつたけれども、みんな、怖いんですよ。せつかく沖縄戦で生き残った命ですからね。拘束されて、もし、山城、桑江たちと一緒にね、軍刑務所に押し込められて銃殺される、という可能性はあったから、それくらい広く銃殺刑の噂は広がっていましたからね。ちまたでは。年配の方は、みな、遠慮されていたので、「もし、私で間に合ふんであれば、私が、行つてきます」。彼ら二人と一緒に処刑されても良いと覚悟した。しかし、こんなことで、アメリカに殺されるなんて、私はまったく、納得がいかなかった。

そのぐらい、アメリカの脅しは、効果的でしたね。それで、我々が、そのまま、引き込んでしまつたら、民主同盟はそのまま潰れていたはずなんです。少なくとも五〇年のその知事選挙の中で、（民主同盟は）解散をね、やつたというんだけれども、そこまでもたなかつただろうな。それこそアメリカの思い通りとなり、又吉康和などの保守派を喜ばすところだつたらうね。

眞板 裁判は結局、何回くらいやつたんですか？ 一回だけですか？

上原 私が参加したのは、一回だけです。その前に何人か個別に尋問をしていますね。民主同盟に組織的に連絡なしに個人的に呼

び出して。

佐道 山城さんと桑江さんの関係者ですか？ 山城さんと桑江さんご本人ですか？

上原 そうです。二、三人の民主同盟役員が。その後、この人たちは会議にも顔を見せなくなった人もいます。山城、桑江の二人は、軍の知念監獄に入れられている間に何回も、米軍から個別に尋問を受けている。それに対して彼らは、問題が沖繩初めての高等軍事裁判ということに発展するとは考えてなかったらしい。アメリカはきつと早めに帰してくれるはずだ。少なくとも表看板は世界の民主主義の国じゃないかと思っていたんだそう。なのに、民主同盟の機関紙を民政府・船越尚武情報課長の認可の下で合法的に発行したというのに、CICと警察は故意に裁判前から、卑劣にも大衆をわれわれから引き離すために、銃殺刑のデマを流すということまでするとは、想像してなかった。私は事態の発生とその進行状況から考えると、帝国主義者は必要に応じ、何でもやるだろうと覚悟していた。このような、まるで沖繩人を未開の奴隷並みに取り扱うような取り締まり方法でやっているくらいなら、アメリカはエセ民主主義の国家だと思つたね。だから、俺が立ち入り禁止の沖繩南部を何日かさ迷いながら、考えた帝国主義の本質とは何なのだ。第二次世界大戦とは何だったのか、ということを深刻に——死んだ人たちの遺骸がそこらじゅうに散らばっている中で、彼らと語り、——寝ながら考えた。

それで、私ははつきりと、私も捕まったら、明日から会えなくなるだろうから、ということ、ちゃんと、お別れの挨拶をして、私は、栄養つけて元気出さなきゃいけないと思ひ、そのまま、山城善光の奥さんのところへ走って行ったら、桑江朝幸の奥さんまでが、警察に呼び出されていることを知らされました。桑江の奥さんは『自由沖繩』の印刷用紙の件で、二回か三回ぐらい、留置されているんですよ。

佐道 奥さんがですか。

上原 はい、桑江の奥さんは、(留置された)経験があるんだけど、山城善光の奥さんは、経験がないから、高等軍事裁判って聞いて、もう病気になるっているんです。高等軍事裁判にかけられたら、大変なことになる。銃殺されかもしれない、といううわさもあるんだから、奥さんは心配していたが、喜如嘉の人たちが、「山城は昔からそうしてやってきたんだから、本人は、平気だよ」と奥さんを励ましていたので、心強かった。

眞板 結局、山城さんと桑江さんが、釈放されたのはいつぐらいになるんですか？

上原 釈放されたのは、裁判の翌日くらいですか。それとも数日後だったかな。拡大中央委員会が石川にまた集まってね、経過報告をして。

佐道 結構、長く留置されていたんですか？

上原 ひと月だったのか、三週間だったのか。そのぐらいだったと思うんですね。だから、山城善光にとっては慣れてるから、(マリア)熱が冷めたあとは、同じ大宜味出身の軍政府に勤めている人たちが、ちゃんと、メリケン粉で焼いたポーポーとか、ああいうものを作って差し入れているんですね。すると、山城は、外にいるより良い食事を毎晩毎晩ご馳走になって、平気であるが、桑江さんははじめてですからね、しかも、品性優良青年として、農林学校で表彰されているほどで、沖繩の近衛兵に選抜されたという人ですからね。大変な打撃だったでしょうね。

佐道 出られて、すぐにお会いになったんですか？

上原 もちろん、その日、裁判がやっと終わった後ですね。山城、桑江にひと言でも思ったが、憲兵は私を近づけなかった。

私はその少し前に、裁判長に抗議して、余計なこと口走ったんですよ。「われわれ沖繩の人民は、アメリカは、民主主義の国だと信じているから、大衆の求めることは、きつと軍政府にも通ず

るんだと考えていたのに、なんていう仕打ちをするんだ。われわれはパンを求めているんだ。なんで石を与えるんだ」なんてね。私は断固として、それを言いました。大きな声で怒鳴った。そして、その大城という女史が、手を振りながら走ってきて、「もういい」って大きい声で。

あとで、大城さんは、ひと息ついて、一人の通訳を担当する二世の米軍将校を紹介したんです。大城さんはその二世の将校に、「私は、すぐに仕事を置いては帰れないから、しばらく、あなたの部屋で待たしておきなさい」と言っていて、私に向っては「おとなしくして、言うことを聞くんですよ」と命じて通訳に案内してもらった。そして、大城さんは、その仕事を終えて、私を連れて、彼女のジープで知念の官舎に、——官舎っていうか、天幕だったと思うな——ひと晩泊めてもらい、朝早く起きたら、「疲れは取れましたか」と言うので、私は「このとおりです」と申し上げると、「山城さんや桑江さんの奥さんたちに早く言っていてね、大丈夫だからご安心しなさい」と伝えなさいということだったので、さっそく山城と桑江の二人のところへ、飛んで行って状況を説明してきました。この二人は、それから、二日も経たないで、無事釈放されたんじゃないですかね。

佐道 ああ、そうですね。  
上原 だと思えますね。もう、裁判の結果が出て、そして、あとは、弁護士と軍の協議か何かで、罰金刑にするのか、実刑にするのか、ということになり、大城さんたちのお陰で、罰金刑で、済むことになるのだが、罰金額は、だいたい五〇ドルか、六〇ドルだったと思う。これは我々の五、六年分の運動費だったのでないか。それで、家に帰ってから、いま、記憶ははつきりしないが、沖繩市はコザと言ったんですね。このコザの同志有志が、署名運動で桑江のための罰金刑のその「罰金を取るな」との運動をすぐに始めた。一方、山城善光も、大宜味でそれをやって、それをま

とめて、軍政府にだしたり、したらあと、罰金は実は納付なしで済んだんだ。良かったなあと思うんですよ。だから、そうになったら、大丈夫っていうことで、また安心して、活動をはじめた。それは、おそらく、あるいは原稿によると、四、五日以内に一回集まったはずだな。あの、石川ホテルに。

## ■仲宗根源和の独立論

眞板 釈放されてからですか？

上原 ええ。

佐道 それは主だった方々が、みなさんですか？

上原 だいたいそう。確か十三名か、もうちょつといましたよ。大城善英さんか誰か忘れたけれど、どつからか、お酒を、一升瓶なんてないから。泡盛も始めていたが、あるいは洋酒だったのかもしれないが、量は五合くらいだったかな（笑） それでも賑やかに乾杯してね。缶詰なども、差し入れがあったと記憶している。ただし、コップもないから、乾杯はなかったと思う。皆から、「苦勞様でした」の声がかかる。

だけでも、その時点で、すでに、山城、桑江、私と仲宗根源和との距離は大きな溝ができていたので、会議は盛り上がりがないような。

そんな状態になっていたんで、せつかくの出獄慰労と勝利の大会であるのに、同志たちを意気消沈から、鼓舞しようと考えた、ある同志（名は忘れた）が、緊急動議で、継続議論中の独立論問題の討論会に移った。沖繩独立論はかねてから、少しずつ、機会あるごとに、いろいろな方法で、討議されてきたが、いつも、問題になるのは、独立は、琉球民族のかねてからの要望であるが、では、独立したら、経済的な問題は大変で、仲宗根は提唱したのは、かねてからの彼の持論の移民問題というのがありましてね。

それに対して、私はそれに噛み付いたの。「日本時代の移民はいつたいつただったんだ。沖縄からのフィリピン、南洋諸島、東アジアへの漁民を含む、大量の移民及び、満州への農業移民等は、なぜ、あのような悲惨な目に遭わなければ、ならなかったのだ。こんにち、この問題について、どうなっているのか。とにかく、沖縄は独立するというんだったら、沖縄は独自の力でもって、経済的にも生きていける、若い人たちを育てていける、働く場所を沖縄に作ることもできるのか。いくら最低の要求でも、沖縄は自主的に継続的に経済的な基礎を確立できるような産業は、いったい何だと。この具体的な提案が、出されない限り、あなたの独立論は、聞くことができるか」って、私はそのときから、非常に横柄な態度で、仲宗根に接していたようだ。

※上原信夫氏注、よく考えてみると、当日、独立について、こんな多くの問題について、討論していかないような気がする。内容から考えると、仲宗根との論争の何回かの内容が、前後して、交錯しているのではないかと思う。独立については、一定の相当の間で継続して、議論した思い出があるから。

佐道 でも、おっしゃる通りですよ。基盤がないところに……

上原 山城が終わりになってだね、提案したのが、講演会でもやる段階の前だね、沖縄は独立すべきだ、沖縄はこうこういうふううに、独立が可能であると、国際問題や経済問題をどうすべきだということ、何回か討論を重ねてね。具体的に、じゃあ、各人それぞれの立場から、調査研究の課題としてね、独立するにはどうすればいいのか、まず、何から手をつけるべきであるのか、奄美大島、宮古・八重山との連合のことも、必ず問題となるであろう。アメリカは今度は、全島の統一をするのかしないのか、台湾も含めてね。しかし、国際的にそういう微妙な問題については、

あんたら、情報が少ないから、難しいよな。他に、特にアメリカか、国連の信託統治みたいなものも含めて、ぜんぶ、やろうということで、一、二週間くらい時間を作ったと思います。それから、また集まって。そこで、具体的な問題が議論された。私は、近代工業化なども考えるべきだが、それには資金がない。しかし、日米の間で、両者の力を逆利用することはできないかという意味の問題を私が発言しました。

しかし、理論的には、考えるべきだが、現実的には難しく、すぐに経済的に成り立つとは、困難だから、まず差し当たり、すぐに実行可能なのは、移民問題と漁業問題だね。沖縄の糸満のウミンチュはね、東南アジアやフィリピンまで、南洋諸島まで行っていた。それは、確かにそうですね。西銘順治のお父さんは、そのウミンチュでね。南洋まで行ってカツオ漁をやっていたという。

仲宗根の提案する漁業問題は、広い海域にわたる漁業のね、おそらく遠く国境線を越えた広い地域になるけれども、では、沖縄の位置づけをどうするか。広い海域の漁業問題なんですね。漁民は、いまは、南洋に行つてもいけない、東南アジアにも行けない、そしたら、沖縄周辺を越えて、もし上へ上つたら、鹿児島や宮崎、四国のね、漁師と競合する。それを避けるには、沖縄周辺だけでは、資源が足りない。

というところへ、仲宗根が、尖閣列島問題を出してきた。そのとき私は、尖閣列島というのは、——なんかの機会に、おじいちゃんたちのお話の内容は、よく分らないけれども——沖縄と唐の国、中国との交易をする人の道しるべなんです。で、それは昔、船を持っていた人たちが、ちゃんと分かっていた。ただ、昔の人たちは、その島が、沖縄か唐のものなどとは、言っていないんだ。それは、唐の国の古書にも、あそこを過ぎれば、右に下りて、右に舵を向けて、ちよつと行くと、黒い海、海流の色が違います。黒潮は。それを行くと、琉球の久米の山が見える。それが、久米



島と言つて。あれが、昔からの中国と琉球の灯台の役割を果たしていたんだと言ふ。

江上 昔から言い伝えられていた？

上原 あるんだ。だから、仲宗根説によると、尖閣諸島は、カツオの大産地だということ。あそこを根拠地にして、カツオ節工場作る。その製品は、関東と関西地方へ売り込もうというのだ。そういう具体的な経済的な貿易問題について、彼はよく知っていたんだよ。いっぱい、問題提起をしたよ。そして、次ぎに出したのが、沖縄は温暖の地だから、農業だつてね、もともと急な斜面だつて、くふうすれば、大丈夫。各種果物も、ひと通り栽培可能だということまで、調べてきてくれましたね。たとえば、従来の栽培品種の他に、バンシルつていうものなども。

江上、眞板 グアバですね。

上原 仲宗根源和は、そういう具体的な政策をちゃんと提出できるといふ意味で、戦前からの活動の中で、蓄積された豊富な知識を持つているんだと感心したことを思い出します。もう一つ、彼がこだわったのは、那覇のなんとかの湖。那覇の

眞板 漫湖ですね。

上原 あ、漫湖。漫湖は、仲宗根説によると、私はまだ見たことがないが、あそこは何百町歩かの非常に質の良い干拓可能なところだそうですね。干拓したら、優良な菜園ができるどころだと、大変熱心だった。考えると、彼は彼なりに、相当博学であった。これには、私は感動しましたね。私は彼の提案にすぐ賛成して、「沖縄独立運動の突破口として、まず、漫湖開拓を軍・民政府に申請して、その運動を展開すべし」と発言した。

考えてみると、彼はやはり、本来、心から、沖縄を愛する革命家だったこともあったんだ。だから、長い活動の中で、沖縄の「自給自食」の可能性について、追求し続けていたのだろうと、仲宗根源和の再評価を考えながら、徳田球一の「利根川流域の大

関東平原改造計画」を思い出す。やはり、革命を志す者は、常に人民大衆と共にあり、その生きた生活と常に密着しているんだ、ということをおい出す。他に、参加者がいろいろの問題を、非常にたくさん、発言があったんだけど、それについては、山城善光の記録に、あまりまとめてないね。

佐道 仲宗根さんはそうやって、独立論をおっしゃるわけですよね。で、先生はその独立をするには、ちゃんとした裏づけが必要だ、ということ、意見がぶつかっていたわけですよね。で、仲宗根さんが、先生がおっしゃっていたようなことを言ってきたと思いますけども、山城さんや桑江さんは、仲宗根さんが言っている独立論にはどういう意見をお持ちだったのですか？

上原 山城善光は、当分の間は、信託統治でもいいんじゃないかと、そして、国連の信託統治になって、独立した国もあるんだから、手の内を考慮しておこう。すぐ、独立できなければ、段階を経てだね、結局は少々回り道をして時間を経ていいじゃないかと。で、桑江朝幸さんは、大変な有能な事務屋でね、講演会の時には、どっからか、わら半紙みたいなものを持ってきて、厚紙というのですか、今のダンボール箱みたいな、それに、何枚かの紙を貼って、グラフを作つて、初期段階の配給物資は、これはこれだけに なった、油はこれだけ足りない、全部でこんなに上つていっているんだつてグラフを作つて見せるんだね。効果的だったね。それから、ヒントを得て、私の幻灯利用が出てくるわけですね。

佐道 仲宗根さんの意見に、桑江さんがどうこうというそういうあまり議論は、されていなかった？

上原 桑江さんは、独立論問題については、とにかく仲宗根さんの意見を聞こうと、こういう態度でしたね。だから、社会大衆党ができて、山城善光はすぐ離れたけれども、仲宗根と袂をわかつて、なかつたようで、桑江朝幸はそのまま、長い間、仲宗根源和にくっついていきますね。

眞板 桑江さんですか？

上原 桑江さん。土地問題が具体化する前の段階。

眞板 ああ、四原則までの。

上原 それで、土地問題が出てくると、地主の利益を守るための組織を作るのもいいけど、結局、カネが入ればいいじゃないかと。タダでは、使わせたくないが、少しでも対価のカネが入る。ということ、彼はいわゆる軍用地主の利益を守ることが、沖縄の人民の利益を守ることになるのだと、だんだん、保守派の代言人になり、最後は自民党に近づく、そして、自民党の中、沖縄県の人か責任者になるんですか。

眞板 最終的には保守系の沖縄市長になります。

佐道 先生や山城善光さんは、そもそも仲宗根さんと意見が完全に一致していたんではなく、最初のころは、若干、意見の違いがあったということですね。

上原 やっぱ、沖縄は独立すべきであるという仲宗根の意見に対して、その点については、無条件でした。ただ、どういう方法、それで、私はまだ知識が浅く、若いから、いろいろ経験がないのだから、ただ、私はその頃の仲宗根の結論に対して、素直に共鳴を持っていた。沖縄が独立すればだね。基地から解放される。まず、それが前提でしたね。基地から解放されて、沖縄が平和的な、独立国になるということですね。

そうすると、私がここで考えたのは、かつて、沖縄出身の社会主義者というのは、いわゆる伊波普猷さんたちみたいな善良なる学者連中でさえですね。結局、沖縄は独立すべきであるという考えをもっていた。そして、ここに戦前からの活動家、徳田や仲宗根などを含めて、沖縄問題を独立論の立場から、理解した場合、同じアメリカの占領下にあっても、日本本土と沖縄っていうものは、完全に異なる。戦前における、日本の支配下における、沖縄ってというのは、地政学的にも何ら変わらないのは、言うまでも

ないだろう。

私は、小さなときから、日本の植民地である満州国に対して、非常に大きな疑問を持って見ていた。日本に反抗するものは、匪賊だ馬賊だと言われたが、それでも私は、その人たちに共鳴していた。それは、私を兄弟と呼ぶ、中国人が解放されなければ、俺も解放されないと考えていた。

だが、生活環境がまったく違っても、日本にいた沖縄人の革命家、たとえば、山城善光、仲宗根源和、徳田球一、その他の沖縄出身の活動家は、日本人民が解放されてこそ、沖縄人も解放されるんだ。だから、まず、沖縄の同志は、日本の労働者、革命活動家と一緒にあって、日本人民と共に解放を勝ち取ろう。それが、成功して初めて、沖縄人も解放されるんだと確信していた。日本人民とは言うが、お互い平等な対等な立場で、結ばれているのではない。言うまでもなく、異なる階級の集団であるのだ。だから、日本人を階級的に区別して考えていた。戦争で生き残ったこの人たちはね。

そうすると、終戦後、まさに、沖縄どうする、俺たち、明日の沖縄をどうするかという問題が、出てきたときに、いわゆる軍国主義に共鳴してだね、戦中に、一定の役割を果たしていた人たち、その人たちの多くは、いわゆる日本復帰派なんです。平良辰雄とか若い人たちとは、西銘（注・順治）さんも入るね。西銘さんだって、結局、最初は独立論者ですよ。彼はね。西銘さんだって、彼はそう思ったんだろう。事実、おそらく、日本にはそう簡単に返さないだろう。だから、独立すべきではないかという。いま、考えてみると、そういう考えの人は、西銘だけじゃなくて、船越とか、ちよつと思ひ出せないけど、民政府の若手の幹部役員で、私の付き合った人は、極めて限られた人たちも、なんかのついでに話をしたときに、彼らの多数は、やっぱり、沖縄は沖縄人として、自分たちで自分の力で立つべきであるというような感じを、

最初は持っていたんじゃないかと思うんですよ。西銘さんだって、「沖繩人の日本人になろうとして、日本人になれない心」という言葉があります。そういうところから、見るとね、結局、日本に復帰すれば、また、天皇制下に組み込まれて、また元に返るのだとこういう考えを持っている人が、多数いたと思う。だから、初期の段階においては、瀬長亀次郎の人民党、我々の民主同盟、それから、大宜味朝徳の社会党。みな、日本復帰なんて、唱えていないんですよ。沖繩人独自の立場で、政治問題を経済問題を考えるべきだというような考え方が、初期の段階であったと思う。私は人民党が成立する直前まで、彼らの研究会でもよく出ていたもんですから。

佐道 もう、党を超えて、そういう。

上原 最初から一緒にやって、だから、講演会も各地で、一緒にやって、共同演説会は随分もった。この三つの政党がですね。何十回でしょうな。私なんか、弁士として、あるいは最終段階で、私は自分でもって、講演会の司会者になったりしています。が、日本復帰問題について、持ち出した人は、一人もいなかったと思う。四九年ごろから、その具体的にね、四九年の春ごろぐらいだろうな。先ほど、仲宗根源和と私が、こんな議論しあったのは、四八年ごろから、何かのついでに話し合ったことは、覚えていますが、本格的に議論しあったというのは。確か、山城善光たちが、監獄から出てきたあとのことですね。そして、戦後のその時代の沖繩における一定の有識者っていうのは、そういう考え方だった。終戦後東京で設立された沖繩人連盟や沖繩人青年同盟なども、結局、沖繩問題については自立すべきであると主張していました。徳田球一もそうなんですね。徳球さんからは仲宗根源和宛に三通の手紙が届き、その中に沖繩の自立問題について触れていました。いま、考えますと、米軍は沖繩を半永久的に返さないであろうと。まるで植民地じゃないかと。だったら、自分たちで独立する

能力はあるんだから、独立を目指して独立運動を展開すべきである。これが沖繩民族の絶対多数の立場だということをちゃんと、アメリカに意思表示すべきである。すなわち、民主同盟の最終目標は、琉球民主共和国の建国であるということを発表した方が、政治的駆け引きとして良いのではないか、ということを当時は考えたと思うんですよ。

だから、私は仲宗根源和に独立論に対して、沖繩独立をして、この問題について、信託統治を唱えている大宜味朝徳さんと、私が石川ホテルで、何回だったか忘れましたが、私と二人で、長時間にわたって、いろんな話をやったことがある。ただ、アメリカの信託統治でしょ、それは私反対だよと。そして、彼は、日本の植民地的経験は、南洋群島で経験している。南洋群島で何と何という新聞を出している。だから、彼は中国における、日本の植民地政策やその実態はどうだったか、現地人民の対応は、どうだったのかというようなことを。俺と話し合うと、彼は、「上原くん、一緒にやろうや」って。私を、何回か誘った。どっかで二人は、結びつくところがあるんじゃないか。

## ■大宜味朝徳の思い出

江上 そうですか。大宜味朝徳さんと。

上原 大宜味朝徳。

江上 大宜味朝徳さんと議論なさったんですか？

上原 そうですね。議論というか、彼が私の話を聞きたいからというところで、何回も会った。少なくとも彼は、いわゆる世にいう積極的な民族主義者であるんですよ。ある意味での、民族独立という面で、遠大なる希望を持っていたけれども、差し当たり不可能であると。史実ははっきりわかる通り、南洋群島における植民地支配、あれも国連（国際連盟）信託統治地域ですよ。で、そ

この経験しているもんだから、彼の体験談は非常に印象的に残っている部分もありますからね。あの人は私みたいな若い人の話をよく聞きました。なにしろ、石川ホテルの夜は何もすることがなかったからだと思います。外に出ても食堂も飲み屋もない時代でしたからね。

佐道 大宜味さんとはいつごろ、お知り合いになつたんですか？

上原 民主同盟の初期の運動の段階から、石川ホテルというのがありまして、石川ホテルというのが我々のねぐらというか、根拠地だったんですよ。そうすると、政治活動する人や、いわゆる経済活動している人たちも泊まります。石川ホテルっていつてね、いま、思い出すとね、当時としては珍しく屋根瓦等空襲で壊れていないんですよ。

佐道 戦争なんかで、

上原 そう爆弾を受けていない。その代わり、壁板とかね、戸板とか、そういうのは全部、米軍が持つて行ったと言っていたんだけれども、生き残った民間人にとっても、これらのものは貴重品だったんですよ。たとえば、戸板は雨露をしのぐ屋根となり、ベツドになりますからね。そういうえば、この石川ホテルには床もなかったところを社長さんが、付近の戦災で壊された、床板等を集めて自分で修理したのだ、という自慢話を社長本人から聞いた思い出があります。このホテルは、昔の農民の家屋だったそうで、一番大きい広間がね、十畳か十二畳ぐらいだったんですよ。それで、表部分だけに廊下みたいなのがついていて、あと、五、六畳ほどぐらいの部屋が二つか三つしかない。そこが、戦後沖縄にできた第一号のホテルなんだよ。

佐道 ホテルとして機能していたんですか。それは戦前は？

上原 それはね、泊まる場所がないから、泊まる人たちが、俺は石川ホテルに泊まっている、なんて話が、広がって、いつの間にか、石川ホテルになっちゃったんだね。戦前の農家では比較的

裕福な方だったんではないかな。

眞板 そこは、石川さんっていう方が、なさっていたんですか？

上原 石川市にあるけれども、その家主さんはね、石川市のね大姓だな。石川市のなかでも、一番多い姓のひとつだね。

江上 石川でも多い姓？

上原 石川市内に、先ほど言ったのは、ホテルというから、どういふホテルか説明しようと思うんですけどもね。

江上 多い姓ってなんですか。

上原 石川でもって、有力な家柄の家はなんていいましたか？

江上 伊波、じゃないですか。

上原 伊波っ！ 伊波だ、そうだ。この家主さんは伊波一門の人。その頃は、まだ五十代とか四十代だった。その頃、ほかに泊まる場所がないから、石川に来た旅人はどうしても、そこへ泊まる。宿泊料は、カネを払わなければいけなかったが、しかし、カネを払った覚えはなかったね。時々、顔を会わせると、「また、あなた泊まっているんですか」って。「家賃はいくらですか」って、言わなかったから、めしを食べるときは、どこかで食べた。そのときに、ここで、大宜味朝徳さんとはよく同宿し話し合う機会が多かった。ちよつと、私がヒマそうにしていると、寄ってきてね、「何しているの？」と、非常に積極的だった。その人はやつぱり、どうしてか、彼は若いものを捕まえられなくて、一人ぼっちだったと言われていますね。

江上 大宜味朝徳さん？

上原 大宜味朝徳は

江上 そうそう。

上原 一人一党と言われて、

江上 そうそう、選挙に出ても票が集まらなくてね。

上原 こういうことなんだけれども、私に対しては、非常に優しく、接してくれてね。

彼とは、独立論や彼の信託統治論を含めて、二人で議論しあつたし、特に彼は私に、「一緒にやろう上原くん、一緒にやろうよ」と。

私が帰ってきて、沖繩で軍は家畜を村で飼つてはいけないといふとき、反対した一番最初の私の政治運動や社会運動など、そのことを彼は知っていてね、どういうように、その活動をしたんだと。そのときに、村民はどんな反応をしましたかと。あと、種豚を買いに行つたそうだけれども、そのときはどういうふうな誰に頼んでやつたんだとかね。ずいぶん、細かく記録しててね。彼は泡瀬の人ですよ、泡瀬に帰つたら、おそらく私から、聞いた話を地元の人に知らせて、まとめようとしたけれども、知り合いの泡瀬の後輩の中から中核分子を育てていくのは難しかったもんだから、ご本人が疲れて続かなかつたかもしれないね。だから、結局、人民大衆が離れた一人の社会党となつていったんですね。

佐道 先生をスカウトしたかつたかもしれないですね。  
江上 先生を引つ張り込んで、自分とこの味方につけたかつたのかもしれないね。

上原 いや、大宜味さんは民主同盟の党結成初期の常任中央委員で、積極的な発言をしていたが、間もなく人民党が結成されると、色めきたつて、いつのまにか社会党を結成したのです。

一同（笑）

上原 少々時間的にずれるが、大宜味さんが民主同盟を離れようとしていたことを知つた私は、彼に植民地政策の生き証人として啓蒙運動に協力を仰いだのだが、願ひは聞き入れられなかつたね。結局、立場があるからね。根本問題は、イデオロギーの問題だつたんでしょね。

眞板 沖繩建設懇話会ときは、同じね、世話人で名前を連ねてましたけどね。

## ■石川市の思い出

上原 石川つて、すぐ思い出すが、この人ですね、新垣金造という人。

眞板 あの床屋さんですか？

上原 その人は比嘉さんで、新垣金造という人は、元県議員でね。この人。もう一人ね、

眞板 ああ、中国語で叱つた人ですね。

上原 奥田巖ね。この二人は、やつぱり、私と気が合う。私がそこへ行けば、必ず泊まっている。私が行つたとき、この二人がいないと、翌日は必ず来たもんだね。

佐道 この新垣金造さんと奥田巖さんも、この石川ホテルの常連だつた？

上原 そうです。そして、彼らは、私に政治問題を吹っかけてよく語り合つた。奥田はね、商売や取引問題にも関与しているようだった。だから、政商だからね、半分商売、半分政界と両刀を使つていたから、結構、豊かに生活しているみたいでした。

佐道 新垣さんは元県議員。この当時は、政治活動しておられたんですか？

上原 いや、仲宗根源和と一緒に戦前は県会議員をしていた。同じく沖繩民政府時代は「沖繩議会」の議員もしている人です。民主同盟結成初期の党中央常任委員にも名を連ねていましたね。石川における会議には欠かさず参加して、自分なりの意見をよく述べて大変議論好きのように思えたが、党の日常活動は吉元栄真さん同様、ほとんど参加していないと思う。

佐道 ああ、そうですか。

上原 そのためかこの人の党内における思い出は、あまり残っていませんね。

金造さんは、他にも宿泊場所があったらしく、石川ホテルに宿泊することは少なかったが、ある日、石川ホテルの宿泊者同士が、何かの話し合いをしている時、彼は、「仲宗根源和は共産主義だし、山城善光も共産主義で捕まって、何回かぶつ込まれているからな」って言って。俺たちには、マネのできない別世界の人種だと、誉めたり、くさしたりしていたが、一方においては、彼は、いわゆる大日本帝国時代は、一応、沖縄のためになると思うことを精一杯やったと自慢していた。もう一人はね、吉元栄真。

※吉元栄真は、民主同盟の屋部村支部長、のちに沖縄自民党副総裁。

眞板 本部かどこかですね。

上原 こういう人たちは、戦前の天皇制に従順だった人たちだ。民主同盟に入党して、私が沖縄に滞在している間は黨員としておりました。

新垣金造っていうのは、戦前に「沖縄の一銭金造」って言ったんだそうですよ。沖縄の航路は、戦前は大阪商船が独占的にやっていたんですね。「大阪商船は運賃が高いから、やまに行きたくても、沖縄の若者は、銭がないので行けない。安くしろとね」、運賃値下げ運動を展開したのだそう。一人で旗を振ったんですよ。港でやり、街に来ては人を集めてやる。それが成功してね、一銭安くしてもらったそう。これは仲宗根源和から聞いた話です。

江上 いまだったら、いくらぐらいですか。

上原 そうですね、百円ですか、十円ですか。よく分からないですね。

江上 百分の一？ 百分の一安くなった。というと、十万円のが千円安くなったわけですか（笑）

上原 それから、みんなの信用を得てね。新垣金造というのは、長期間県会議員の議席を得たわけです。

佐道 一銭というのと、安い感じがしますけど、これは褒め言葉なんですね。

上原 彼の友人の奥田巖さんが、冗談でよく、くさしていたな。「一銭金造も県議員に立候補したんだぞ」って。この人も、旅館でよく会いました。

佐道 この当時、先生とご議論なさった頃は、おいくつくらいだったのですか。

上原 もう、五十、六十くらいですよ。うちの親父くらいと同じくらいの年であったと思っていましたからね。

その頃、山城善光がよく冷やかして、「おまえ、あのときいくつだったんだ？」「まだ、数えていないから分からない」と答えると、「おまえ、村会議員になったのは、まだ、戸籍上は満で二十三になってなかったはずだ」っていうんだ。計算するとどうなるか分からないけれどもね、とにかく、二十五歳が被選挙権なんですよ。私はその被選挙権の二年前に村会議員になったんです。

一同 (笑)

眞板 これ、勘定しますと二十四ですね。

上原 それで、この奥田という人は、商売人で、商取引の関係で、石川にいたら、酒いっぱい飲んで、クダ巻いてね、ゆっくり寝られなかった。それが、なにか山城善光のあれ（注・『荒野の火』）に私が大きな声で怒鳴ったと書いてあるとね。

眞板 中国語でね。

佐道 先生も中国語で怒鳴ったんですか。

上原 そう、そういうふう書いてあるものな。

眞板 はい。

上原 あの人は、戦時中に中国に滞在していたので中国語ができ

た。いつだったか、「俺は大陸浪人だぞ」と中国語でクダ巻いてね、私が中国語で怒鳴ったってね。その後は、いつのまにか仲良くなったね。

その吉元というのは、名護のね。名護の近くのなんという村だったかな？

眞板 屋部村ですか？

上原 屋部！「屋部のウニグウワ」と言われて。建て前は物凄く頑固で、しかし、大日本帝国の精神に大変即応しててね。最初から、彼は独立論ではなくて、本音は日本復帰論者だった。で、この人たちとも、復帰のことで議論しているものね。喜んで聞いてね、議論した思い出があります。

眞板 吉元栄真さんって、このころ、おいくつくらいでしたか？

上原 栄真さんはもう、民主同盟に入っていた。

眞板 年はおいくつでしたか？

上原 おそらく、学校が昔の県立の中学校で、仲宗根源和と同じくらいだったらしいんだけどね。だから、ほぼ同じ年じゃないかね。六十代くらいかな。

佐道 その吉元さんも、民主同盟に入られた？

上原 はい。

佐道 そうすると、仲宗根さんが先生の独立論とは合わないわけですよ。

上原 どうして？ 最初から、仲宗根は、堂々と独立論を唱えていた。彼はまだ、その当時この問題を正式に中央委員会にかけてなかったでしたね。少人数で話し合ったり、初歩的なことは議論したのだが、当時の政治情勢は、まだまだ本格的に独立問題を討論するまでに機はまだ熟していなかった。

民主同盟は、徳田球一等の励ましもあり、結成以来沖縄の独立は既成の大方向であった。ただし、独立運動をどのような方法で進めるか、その内容はどのようなものであるべきか等についての

理論的な具体的諸問題については、まだ極めて初歩的な討論にも入れない過渡期時代であった。したがって「日本寄り」だと自ら認めていた平良辰雄、吉元栄真、新垣金造たちも、まだ公然と日本復帰を言えない状況だった時代だったことを思い起こします。

佐道 じゃあ、民主同盟はもう完全に独立論で一体化していたわけではなかったんですね。

上原 最初はまず、民主同盟の民族、民主、解放闘争の第一歩は、そうですね。初期段階の民主同盟には、五〇年代以降に日本復帰論者となる平良、吉元、新垣さんなども常任中央委員としていたのですからね。このような厳しい過渡期の発展途上の民主同盟の初期の活動は、なによりもまず、戦災の中から生き残った人たちの生きるための最低の政治的、経済的、要求を勝ち取るために大衆の力を組織化することでした。そのための演説会などで、われわれは大々的に沖縄独立論を宣伝すると、集まった聴衆は「そうだ、そうだ」と相槌は打つが、さて、自分の死活問題とはすぐには結びつけられない。日本復帰とか独立とか、そういうことには、まだ思い及ばない人の方が多数で、私たちに合せて議論を展開する人は、極少数でした。しかし、間もなくすると、演説会場の聴衆は沖縄独立に共鳴する人で埋まるようになってきましたね。まだ、廢墟の中からやっと立ち上がってきた人たちの中でも、一部の若い人たちはやけくそになっている。特に戦争で負傷して、どうにか生き残ったのに、何かあると「いつ死んでもいい、おまえ、やるか」、なんて、やけっぱちになってですね、一杯アルコールでも入ると、そういうようなのが結構おりましたね。だから、まず、そういう異常な心理状態にある人たちを、まず戦争中の過去の強迫概念から、解放して立ち上がらせようと努力した。

すると、一方においては米軍占領下で、沖縄はもうすでに、琉球のかつての歴史も伝統文化も人権の自由もすべて抹殺されてしまつて、アメリカの植民地になるんだから抵抗しても無意味であ

る。将来沖縄は否応なしに米軍の永久軍事基地になるというデマがどこからともなく流されていた。このデマは軍政府・民政府の関係部門が意図的に流したものだというふう言われていたけれども。われわれは、万難を排して沖縄民族の立ち上がり促進する民族解放闘争に向って啓蒙運動を展開することが必要だと考え、機会のあるごとに議論を大衆の中に持ち込んでいきました。

一九四七年に民主同盟ができた直後、アメリカの土建会社、

「J・A」?

眞板「A・J」

上原「A・J」に、山城善光と二人で数日宿泊したときに、明確な目的意識をもって軍作業員の格好で、通れるところの工事現場などをですね、見て回ったんですよ。で、そのときに、山城善光曰く、「もう、アメリカは永久に沖縄を放さないね」、こういうことを彼は言った。私も、そのとき、「そうだろう」と相槌を打った覚えが昨今のように思い浮かぶ。

そのときに、おそらく、山城善光の頭の中には、戦前の運動を考えていた。沖縄出身の党員幹部たちが、議論していた点は、日本人が解放されない限り、沖縄人民は解放されない。それが、彼らの信念であり、自らに課せられた重い使命感だったと思うんだ。だから、一応、永遠に帰さないとする、われわれは沖縄だけの闘いに止めず、日本共産党の指導の下に日本の労働者と人民大衆に呼びかけ、全日本民族の統一戦線を立ち上げ民族解放闘争として、日本人とともに戦うしかないじゃないかというのが、その時点での彼の考えだったと思う。基本的に。これは二人だけの話ですね。ある意味においては、非常に現実的な、その厳しい現状に連携した、したたかな分かりやすい現実の答えだったと思いますね。私はだからこそ、われわれは、沖縄現地で闘わなければいけないのだと。逆に、沖縄人民が先頭になって、自らの解放闘争を展開することによって、日本人大衆の民族解放闘争をも励

ますことになる。だが、おそらく、その点で山城は腹の底では、彼はそういう考えをもっているなあと、私は勝手にそう思ったんです。だから、それであるがゆえに、そのような付き合いをしてきたんだらうということですね。

もう少し具体的に説明すると、沖縄の民族解放闘争を沖縄という小さな島に限定しないで、全日本の平和運動に拡大することですな。それから約二年経つと、私はその戦略を全世界の平和運動に連携させることを決意するようになる。そして沖縄を離れる。脱出までに、私が計画を打ち明けたのは、沖縄では仲宗根、山城、桑江、瀬長の四人だけでした。

眞板 いくつか前後しますけど、裁判の年（注・四八年）、善光さんの日記（『荒野の火』）を見てもですね、高等軍事裁判以降の党活動が記載されていないんですよ。もうすぐに、四九年になつてしまってます。一年ぐらいブランクがある。というのと、裁判で、罰金の問題もありまして、事実上、民主同盟の活動は休眠状態になつたということなんでしょうか？

上原 ぜんぜん、止まっていけないけれども、山城善光と桑江朝幸の両氏が、罰金刑を受けたと、それによって、それぞれの家の家族の生活などについて、また、米軍政府に対する対抗方法で、みんな、考えなければならぬ。山城、桑江の家は、われわれの根拠地なんだから、みなでここを命がけで支えなければならぬのに、米軍の直接、間接の謀略と弾圧によって、大衆の団結は、だんだん弱ってきているということ。なんかすると、今度は奥さんたちに対しても、今度、逮捕されたら、今度こそは本当に銃殺されるかもしれない、とデマを流すので、各町村の協力者の方の中でも一時的には、「やっぱり、ちよつと、厳しい運動はよさなきゃいけないな」という心理状態になつたのは、おそらく事実でしょうね。しかし、私たちは、一致団結して、ますます勇気をもって、闘争した。実質的に運動が停滞したのは、裁判後の



二カ月くらいだったと思います。

眞板 四九年に入ると、三党合同で演説会とかいろいろやるようになるんです。

上原 これは四九年ですね。その頃になると、われわれはより明確にアメリカの招待を見極めることができたので、人民、社会、民主同盟の「民族民主統一戦線」の強化と連携により、三党共同演説会を各地で開催しました。

眞板 四八年の半分くらい、半年くらいは何をやっていたのかな、と思ひまして。

(休憩)

上原 ……自分が精一杯に、それなりに、それぞれの立場から、地元の各市町村議会などにおいて、足元の踏み固めに、努力していたと思ひますね。

江上 そういう意味ではいいですね。

上原 先ほどの大宜味朝徳さんの、一人一党でくさす、いまでも何かに書いてありますけれども、やっぱり、彼は精一杯ね、やっぱり、彼なりにいろいろやったと思うしね。だから、それなりの歴史的評価はしなければならぬと思ひますね。

(中断)

## ■上原氏への弾圧

眞板 善光さんのいきますと、四九年の五月に「三党民族戦線演説会」つてあるんですよ。このあたりから、先生からいただいた資料の中でも、三党合同の発言・速記録というものが出ているんですよ。資料として裏付けられているんですよ。四九年の十

二月三十一日にシート長官と会談して、このときの参加メンバーが、仲宗根源和さんとか、山城善光さんとか、瀬長亀次郎さんとか、出ているんですよ。

※シート長官と三党合同の会談は、四九年十二月三十日

上原 上地(注・栄)くんと波平(注・徳八)くんは参加しているかな？

眞板 今日は『荒野の火』を持って来なかつたんですが、そこには参加者のメンバーが全部書いてあります。

※参加メンバーは、民主同盟から、仲宗根源和、山城善光、桑江朝幸、人民党から、瀬長亀次郎、上地栄。『荒野の火』山城善光著)

上原 そのころから、私は、たとえ、沖縄にいたにしても、表に出られないような状態になっていた。

眞板 ところがですね、五〇年一月二十九日に、人民党と民主同盟主催のですね、「警察官暴行事件に関する演説会」で先生は、那覇市役所の前でお話なさっているんですよ。

上原 そのときも、ほとんど、半地下(活動)状態で、これ出ていたわけです。

佐道 地下に潜らなければならぬ事件というのは、いったい、何ですか？

上原 問題はですね、民主同盟を、かりにですよ、そのとき、感じたのは、具体的にそのCICが追っかける度合いがどうなっていたかということは、その前の年くらいから四九年からですね。

眞板 前の年ですか、四八年ですね。  
上原 四八年。

眞板 やっぱり、裁判のあとですか？

上原 裁判のあとは、結局、当然、山城善光と桑江朝幸と一緒に、私は捕まっていなければいけない人間が、そこで捕まらなかった。これに対する、軍の考え方というのは、大城ツル先生が言ったように、「アメリカはキミを一所懸命探したんだと、だけど探せなかったと。だから、そういう人物なんだから、おまえ自分で考えて見てごらん。待ってましたとばかりに、すぐ、おまえ、捕まってしまうよと。で、一緒にぶつ込むよと。だから、監獄に行くよなものだから、裁判にキミが出るのは、よしなさい」と。こういうことを言っていたから、具体的にCICが、裏でいろいろ邪魔をしたにせよ、何かのきっかけで私を捕らえようとしていたということは、そのとき、私自身、CICと警察の行動を見て、よく分かりました。

かりに、糸満市で講演会があったとします。糸満市のほうの警察からですね、二、三名で、「大変ご面倒ですけども、署長がちょっとお会いしたいと言っていますから。来てください」と。警察署のあの連中は、必ずそれをやりましたね。今度は、最初は警察署長がお会いしたいと言っているからと、私はそのとき、「それほど、署長が私に会いたいということだな、そちらがジープを持っているでしょ。迎えに来なさいと。そう伝えなさい」というと、「はいっ」と言って、また彼らは帰っていく。その間に私は逃げちゃう。そういうのは沖繩の警察官っていうのは、やっぱり、我々の話が、分かったわけですね。証明しているわけ、なにしろ、だから、愛国的、愛郷的って褒め称えるから。その頻度がありますひどくなっていくわけですね。そして、その次に変わったのがっていうと、今度は警察署長ではなくて、CICの方が、「担当の方がお待ちしていますと。ひと言でもいいから、お話しただけませんか、と言っておりまますから、ぜひとも」。私の方では、最後にはだいたい四八年ですか？

眞板 はい。

上原 四八年から四九年ごろになると、バス等で私は那覇方面からヤンバルに向う時は、なんといったかな、名護の手前の世富慶かその前で降りて、山道を歩いて、名護の講演会に出るんですね。那覇では、知り合いかどつかの家に隠れてだね、会場準備ができたら、おまえの番が来たぞと、走ってってだね、そうやっておりましたが、四九年ごろになるというと、もっと、厳しくなっています。兼次佐一も参加した三党連合の最後の会場は、おそらく、本部だったんじゃないかな。書かれてないですか？

眞板 ちょっと、調べてみます。

上原 とにかく、私がいなくなつて、たとえば、名護の警察署長とか、辺土名地区警察署長とか、それから、私と関係がある国頭村長とか、助役とか、そういう人たちっていうのは、ずいぶん、うるさくCICから調べられたらしいですね。特に、奥の出身者で、那覇で事業をやっている宮城紙工があるんですよ、紙の箱を作るね、いま、親父が亡くなつて、息子が、何と言ったかな、シン何とかと言ったな。そういう方たちは、うちの母親と同じ年代なんだけれども、関係部門からものすごく、何十回となく、調べられたらしいですよ。これは私が帰国後、ご本人がまだお元気な時に直接聞かされ、大変恐縮した思い出があります。

CICと警察の動きそのものから、私の安全な場所というのがだんだん狭くなくなってきた。だから、私にとつて、最後の講演会となつたのは、四九年か五〇年か知らないけれど、本部だったと思うんですね。具体的な時間等はすっかり忘れていますが。

さて、話が進んで私は思い出したんだけど、その本部における講演会が最後でした。当日、仲宗根源和、山城善光、桑江朝幸と私、それと、人民党の方は瀬長亀次郎、浦崎康華だったかな。

眞板 はい。

上原 それに鳥袋くんだったかな、上江州くんだったかが、参加していないですか。

眞板 上江州さんついています。

上原 みんな私より十歳近く上の年代の活動家で、社大党は大宜味朝徳さん一人だったかな。

眞板 この方ですか？

上原 上江州？ 一史じゃなくて、

眞板 違いますか？

上原 あ、そうかな？ いや、上地栄だ。

佐道 これは名護出身の？

上原 いや、当時は脱出準備中だったので、どうやら上地一史と上地栄をごっちゃになっていたようです、ごめんなさい。まあ、その時代の行動は複雑だったので、細かいことは定かでないですね。

これは、山城善光さんから聞いた話だけれども。私が日本に帰って来れそうだと分かったので、山城善光の一杯飲み屋に兼次佐一はじめ、昔の友人が何人が集まったそう。その集まりで、兼次さんが「上原は俺のうちから逃がしたのだ」ということをね、証言したんだそう。しかし、山城曰く、「おまえが中国で生きていると分かったので彼は、安心して言い出したんだ。でも公に証言したのは、確かに兼次佐一なんだ」というのは、なぜかという、本部で合同講演会があつて、確か五〇年一月の初めか、そのとき、私が司会をしたのだと思う。講演会が終わって、瀬長亀次郎らは、近代兵器のジープを持っていますから、ジープでさあつと帰っていった。そうすると、民主同盟と社会党は、帰る足も泊まる場所もないから、私と何名かは、兼次佐一の家泊まった。兼次宅で、私は夜中に起きてだね、強行軍で夜通し歩いて、今帰仁から羽地経由で、翌朝早く、名護に着いていた。で、兼次佐一は、それ以降、上原が公に私たちの前からいなくなったのは、俺の家からだろうと信じていたんだそう。私が那覇に行った時

もその自慢話をしてね。それで、みんな大笑いになって、みんなが「本当か、信夫、そうか、そうだよな」って。みんなで和気あいあいと少年のごとく議論して、兼次老人の話に合わせていた。これら、八十、九十の大先輩たちの童顔を眺めながら、何十年経っても、同志愛は、続いているんだと、私は幸せ一杯の思いで、そうかもしれないよなあ。私は当日、夜中に兼次さんの家を無断で出て、二本足で歩いて夜明け前に、近づいたのが、今帰仁のね、羽地に近いところの部落だったんですよ。

俺はお腹すいていたから、どこかで一服できるところはないかと物色していると、そう遠くないところに掘っ立て小屋みたいなところがあるので、訪ねてみると、なんと、そこに、知り合いの古我地という人の家が。そして、家に入れてくれて、夜が明けるまで、世話してくれました。私が帰国して沖繩に帰った時、何十年ぶりで会ったときに、聞いたんだけど、彼らの残り全部のおコメでね、雑炊を作った。しかし、コメが少ないので水をじゃぶじゃぶ入れて、ずいぶん、水っぽい雑炊だったんだけど、それを実によくうまそうに、世の中にこんなにおいしいご馳走があるのかというような食べ方をした。そういうことを手紙に書いて、教えてくれた（笑）。そこで、おそらく、昼間まで、二人で過ごしたんでしようかね。確かな時間はほとんど覚えていないけれども。そして、その後、何時かに名護か那覇に行く、バスの時間帯を調べてもらつて、名護経由で那覇へ行ったのだと思う。こういうように、とにかく、ヤンバルに戻ってき、私は、非常に不自由だった。

佐道 だんだん、居場所がなくなってきたという。

上原 そうそう、そういうことです。

眞板 四九年の十二月にシートツ長官と各政党の代表者の方が群馬知事選挙の公選について会われて、陳情扱いという形になったそうなんですけれども、翌年の五月にその回答がでるわけですよ。と、いうことは、情況として考えたときに、政党と軍政府との関係は、

険悪になるというよりは、良い関係に向かうという方向にあったのか、と感じたんですが。

上原 とにかく、『自由沖繩』事件の結果として、人民大衆に与えた影響は主に二つのことが言えると思う。①判決のあった段階で、やっぱり、アメリカは民主同盟の桑江と山城の処理は、有罪にしたけれども、それなりに、うわさで流れたように銃殺刑にするとか、あるいは何年間か監獄にぶち込むということはしなかったから、そういう点では、やっぱり日本の軍国時代よりは少しはいいんだと。ま、アメリカの方が民主的だということでしょうね。これが一方においては民主同盟の『自由沖繩』問題で、一般大衆のアメリカの認識が違ってきた一面ですがね。②だが、たとえ、罰金刑で済んだといいながらだね、本来、機関紙発行の権利の自由は、当然、我々に与えられるべきものであるはずなのに、その自由さえも与えられていない。政党活動に対する基本的な自由さえも。最低の民主主義も人権さえも我々に与えられていないのだというところで、大衆はやっぱり、下手をすると、あまり厳しく米軍に刃向かうと、民主同盟は解散だなあとこの噂がだんだん広がって生きました。われわれは初めのうちは、あまり気にしていませんでしたが、アメリカの計画的な陰謀は着実に功を奏した。最初それほどでもなかったが、だんだん、一部の大衆は怖気づいて民主同盟を離れるという傾向が出てきたと思うんだな。これが、やっぱり、一番大きな原因だったと思いますよ。結局、武装したアメリカ民主主義の勝利と言うことか。

眞板 当時、世話人会とか名前を連ねていた、桃原茂太さんとか、平良辰雄さん、当間重剛さん、お歴々の方々、あと、宮里栄輝さんもそうですね、こういう方も、やっぱり、潮が引くように離れていったんですか？

上原 いま拳がった人たちもいろいろで、特に平良さんは非常に早くから仲宗根さん同様、又吉さんの「自治尚早論」を厳しく批

判し、民主同盟だけでなく、当時の各界に与える影響は大きなものがありました。しかし、桃原、当間さんは急速に体制寄りになるが、宮里は最後まで行動を共にしました。とにかく、戦前から地位や名誉にこだわってきた人たちは、身の危険に対する敏感度はわれわれの想像以上だったね。そういう複雑な情勢の中で平良さんと仲宗根源和との関係にも、微妙な変化がはじまり、お互いの基本的な認識の問題でも、大きなずれが出てくるのを感じあっているわけですね。

そして、懇談会にも出て、山城と二人で何回か、あそこ（農連）を通るたびごとに、「いやあ、先生、お元気ですか」って行くと、いろいろ雑談をやった覚えがある。桃原さんでさえも。あの人（桃原茂太）なりに家庭生活の安定のために、貿易会社を作っていたでしょ、だから、商売が忙しくなってきたということ、自然と民主同盟と関係が薄くなっていきました。それぞれの一定の地位にあった人々は、一般大衆と違って、いわゆる戦後期がそろそろ終わりつつあるのかなと思つたね。

それから、沖繩はかつて日本軍国主義時代の東京からの指令によって動いていたと。そういうことで、沖繩における追放令の適用などという問題も持ち上がってくるわけですよ。この運動の初期の段階においては、それぞれ座談会を開いて、われわれはいわゆる沖繩における、大日本帝国政府の代理人として戦中における軍国主義に直接間接に協力した者の除名、ないしは公職に就任することの拒否、そういうものが、人民党の綱領の中にあるけれども、われわれ民主同盟にはなかった、ということ、なによりもまず、生き残った者が、力を合わせて沖繩の復興に立ち上がらなくてはいけない。したがって、杓子定規に階級闘争の一般論的階級区分は、いかなものか、もう少し情況の発展を見ながら、なるべく多くの大衆をゆとりを持って啓蒙しながら、現実的な歩みをするようにすべきでないか、というのが仲宗根、山城の強い

主張だったので、多くの同志も異議なかった。民主同盟としては、沖繩人は戦争中に人口の約三分の一が戦死しており、ほとんどの人が家、財産を失って、素っ裸同然である。たとえ、軍国主義の下部組織で、天皇の名によって、一定の役職についていた者でも、現在の本人の意識を尊重すべきである。したがって、沖繩の人民大衆をいかに、立ち上がらせるのが、当面の最重点であるから、一日も早く天皇制によって、強制された束縛から解放し、沖繩の自由な市民の立場から、農民は農民として労働者は労働者として人民大衆がそれぞれの立場から、意見を広く集約して、近い将来、民主的民族政党としての新しい綱領を前提にした政党を作るべきであると。これは、いわゆる戦後初期の啓蒙運動の第一段階から徐々に脱皮して、次ぎの時代へ移るといふ段階だったんですよ。

桑江と山城も、短期間とはいえない家庭生活や経済的にも、大きな打撃と負担を感じるようになり、動けば動くほど、今度は奥さんにまで大変な目を遭わせると。こういう厳しい時代でもあったものだから、なにしろ具体的に問題をどういうふうに総括して結論を下すとすると、大変難しい問題です。やはり、当時のアメリカと沖繩人民の実質的な力関係をね、どのように認識し、どのように評価するかに関わっていると思います。

結局、それは民主同盟の幹部の中にも動揺する者もいたのは事実です。いつの時代でもそうだと思いますが、当時の人たちは意外と強かったと思うね。沖繩には「物を食わしてくれるのが我が御主」ということわざがある。これは中国の歴史物語と関連があることですが、すなわち、国民が安心して生活することを保証できないような支配者は打倒して、能力のある新しい指導者を選び出せということ。この史実は中国だけでなく琉球にもあったことを引き合いに、無能な民政府は知事および議員の公選運動を民主同盟、人民党、社会党の三党が、民主統一戦線を組んで軍政府と民政府に対し、正面から民族民主闘争を展開することになった、

主な原因だったのです。そのような時代背景の下で、われわれ三党は一致団結して、全島各地で合同講演会をやった。だが、今度はそれに対して、アメリカはどのような手を打ってくるのか。その推移を見ながらやってみよう、となった。

一九四九年夏ごろになると、民主同盟、人民党、社会党の統一戦線による知事・議員選挙に向けた運動は着実に進展し、一定の成果をあげていた。しかし、その反面、民主同盟とりわけ私に對するC I Cの追及は厳しくなり、いよいよ沖繩からの脱出も早急に検討しなければならなくなってきた。そのころ、私はもうすでに、何回かC I Cと警察と相對峙し、大衆の協力で難を脱してきました。

当時の沖繩人民は、アメリカが本当に沖繩を平和にし、われわれを幸せにしてくれるだろうと思っている人は極少数であつたろう。いや、いなかったかもしれないと思う。沖繩人は戦火の中で、戦後、廃墟から立ち上がる時に、アメリカは何をしてくれたか、みな身をもつて体験しているから、そう簡単にだまされたい。私はいかなる時も人民大衆はわれわれと共にあることを信じて疑わなかった。

米軍の追及は厳しくなり、少なくとも、私が公に活動できないような段階になってくると、私に對する大衆の支持は、むしろ、盛り上がってきたんです。みなさんが、「信夫はどうしていますか」と心配してくれました。私に對し、「心を改めてアメリカの言うことを聞いたらどうだ」とは言わない。そういう説教をする人は誰もいなかったけれども。これからどうするか、「しばらく、ヤンバルにこもってね、ひと休みしたほうがいいんじゃないですか」という助言は数人の先輩からありました。ただし、これらの人たちは、私の沖繩脱出後、みなひどい目に遭ったようです。

佐道 ほとほりを冷ますと。

上原 そう。ほとほりを冷ますと。そしたら、また出てきて、や

ればいいんじゃないかと。だから、アメリカの私に対する弾圧は、アメリカが意図的に作り上げた陰謀で民主主義に対する、ひとつの弾圧行為だったと。

佐道 民主同盟にとつて、それが思いのほか、そんな問題だったと。その思惑が、効いてしまったと。

上原 その段階において、少なくとも、四七年から四九年までの間ですね、講演会のそれを見ても分かるとおり、人民党よりも民主同盟が左翼的だったんですよ。人民党は米軍の言うことを聞くわけですよ。瀬長が発行する『ウルマ新報』は、アメリカのお墨付きをもらっているし、報道の手段であるジープを乗り回しているし、そして、そういう恩恵があるから。アメリカ軍は我々の「解放軍」である認識をもって、それを党の成立でも、党代表の浦崎（注・康華）も、それから、瀬長もはつきりと認識し、人民党は米軍に対する「感謝決議」をしているんですよ。だから、米軍は戦略的に沖繩における当時の三党のどれを叩けば、一番効果的かという点、人民党よりも、民主同盟を叩いた方が有効であるという点をアメリカはよく知っていた。

佐道 人民党より、左にあったということを理解しておかないと、一つ、分かんないですね。

眞板 当時、人民党はウルマ新報が母体だったものですから、ウルマ新報はご承知の通り、軍政府のPR紙ですから、その関係ですね。

上原 私が脱出した後ですね、私と何らかの関係のあった人、とりわけ私の諸活動を直接間接に支持し支援してくれた人たちに對してですね。軍政府と民政府は、妖言、デマを意図的に流した。それは、上原は軍に反対して、沖繩におれなくなつて、逃げたんだと。しかし、これだけでは罪が小さいと思つたのか、私が脱出した一、二ヵ月後には、上原は志喜屋孝信の暗殺が失敗したので逃げたのであるとのデマを流したそう。そういうのなんか書いてあつたでしょ。ようするに、私がアメリカに反対したからだ

けでなく、志喜屋孝信の暗殺まで計画していたから、逮捕しようとしたんだと。したがって、上原の脱出に協力した人たちは、何ヵ月間にわたり、当面の厳しい追及を受けていたそうです。だから、私が帰国してから、沖繩に帰つたときの歓迎会で、宮里（注・栄輝）さんが、「信夫くん、沖繩に長居しない方がいいですよと、こういううわさもあつたんですよ。米軍が判定したキミの罪状は、志喜屋孝信暗殺計画未遂事件だ」と。そういうふうにつち上げられていたんだからね。いつ何が起きるか分かんないから、なるべく沖繩滞在は短い方が良くと指導されたわけです。

佐道 沖繩を離れる前までは、そんな話は、先生、ぜんぜん、お聞きになつていないんですか？

上原 もちろん、その当時は、同志たちの助言もあり、なるべく多くの人たちに会う機会も少なかったものだから、そんな風聞は知らなかった。だから、そうなるというと、アメリカの弾圧というのは、あの『自由沖繩』を出版するようなやつらは弾圧するけど、米軍を解放者と歓迎している人民党に対しては、人道的に民主主義的に対応しているんだという意思表示をするんです。今度沖繩人同士の中でも知らず知らず人道的に對立感情を煽るわけですね。すなわち、何党は米軍寄りであるとか、何党はアメリカ寄りでないとか、あるいは、あいつらは、排他的だとか、こういう区分けを故意に作り上げて、レッテルを張つたようなんです。

佐道 さも、過激分子であるかのようにね。

上原 そうです。過激分子に仕立てあげてね、大衆は、あいつらは当初から勇敢にアメリカ軍に反対していたので尊敬していたのに、なんだ。日本時代の沖繩教育の中心にいた志喜屋先生みたいな大先輩を暗殺する計画をしていた（笑）。だから、上原は沖繩におれなくなつて、逃亡したのだ。昔から沖繩では、殺人事件など聞いたことがないところだから、アメリカのデマ宣伝は、一部

の大衆へは一定の効果があつただろうと思う。

だから、先ほどの話に戻ると、人民党の書記長や後の沖縄社会党・委員長をした兼次佐一も、私の脱出を知った初期は上原ごときは知らないと思つて「関係ありません」としていたそうです。しかし、時代が去り私の生存を確認した後は、兼次さんは「俺が逃がしてやったんだ」と、そういうことをみなに自慢したそうです。だから、山城たちは、「じゃあ、兼次さんは上原を亡命させた恩人じゃないですか」と(笑) 芝居というのは、いろいろ面白く書けるみたいですね(笑)

## ■本土への密航

眞板 では、結局、沖縄を離れられるのは、いつぐらいになるんですか？

上原 一九五〇年の初めごろだと思えますね。一回離れたのは。

佐道 このままだと、いけないと、沖縄を離れようと思われたのは、いつですか？

上原 離れようと思つたのは、おそらく四九年の半ばごろからだろうね。もう、少なくとも何回かある日突然、体調が急に思わしくなることがあり、もうこれ以上は公の活動をやり続ける体力は、なくなつていのではないかと思うようになったので、しばらくどこかで、身を隠して休養しなきゃいけないと思つたが、私の活動条件が満たされずに、私は心の葛藤をしていますよ。そのときは、傷から血は出なくなつたけれどもね。

こんな、いまの生活状況の下で、捕まつたら、今度は監獄に入つたら、前回よりもっとひどい目に遭わされる。減食でやりますからね。そうしたら、身体はもたないだろうし、だつたら、沖縄で殺されるよりも広い世界もあるじゃないか。日本に行つて内外の現状を調査研究する必要があるんじゃないかということ、

大きく心が動いた。しかし、沖縄で得られる情報は少ないけれども、すでに中国では、中華人民共和国の誕生が近くなつてきて、台湾に逃げ込んだ国民党の連中は、アメリカ軍のいわゆる廃品集積場へ、国民党の軍隊は、正規の軍服を着たままですね、そのアメリカ軍のゴミの中から、使える武器を複数のトラックを乗りつけて拾っている。そういうのを見て、アジアは大きく変わつてきているんだよと。変わつてきたんだと。実際の目で確認できるような段階になつてきたわけですね。

そうすると、一応、やまとにでも行つて見てみるかと、沖縄で知つている世界よりか、もつと広がるはずだという考えは、四九年の何月だったか忘れたけれど、その時、一番感じたのは、国民党軍が廃物回収に来ているのを見てからですね。中国人民は、勝利したんだ。これは私に、図り知れない勇気と力を与えました。

佐道 中華人民共和国が成立しているのは、一九四九年の十月ですけれども。その前ぐらいから、もう、それは？

上原 もう、蒋介石は追い出されたと、台湾に逃げてきていることは、分かっていますからね。

佐道 そういう情報は入つてきているんですか？

上原 そういう情報はですね、軍作業に行つていて連中の中にも、そういう面に関心を持っている人たちもいましたからね。彼らの案内で泡瀬の集積場に行つてみたら、国民党のあの晴天白日旗の徽章をつけていたんで、話してみたら、われらは台湾に退去してきたということを言っているのだが、国民党はもう負けたんだなあと。そういうようなことが分かつたので、こうした情報は民主同盟の中央委員会でも報告しました。

そうすると、中国が大きく変わると、日本も大きく変わるだろうという期待ですよ。日本の解放なくして、沖縄の解放はないんだつていう、かつての先輩運動家のそれに。やっぱり、一億の大衆と共に戦うのがいいんじゃないかと。世界に訴えるにしても、その方が

有効だ。万国飛躍の波に乗ってね、何かすべきだ。そういうことで、四九年の何月か。そのときに、だんだん、この胸の中のイライラにやっとかすかに絵になる形が作られてきた。なにしろ、密航って言っても、密航船を使うのは、公式のなんかの船を使う方法はないのか、いろいろ研究活動しなきゃいけませんからね。そこで、この合同演説会の段階では、私の腹は決まった。決行するからには、ちゃんと家族にやっつかいかけないようにですね。

佐道 夏にうまく出られれば

上原 夏にというか、

眞板 出られたのは奥ですか？

上原 いや、奥から行くとなったら難しいね。奥はあんな不便なところだけれども、CICと警察が厳しく追及していた時ですから。とにかく、身内の者、先輩たちは可能な限り協力して下さいました。しかし、いざ出発となるとやまとまで行ける船が必要ですからね。

佐道 本土に行かれるときには、どこから出発されたんですか？

上原 あるところ。

佐道 あるところ？

上原 やっぱり、まだお元気でおられる人もおられるだろうし、私、あんまり覚えていないけれども。ひよつとしたら、私がCICから追跡されている人物であったということを知り、私がCICの正義感から協力してくれた人もいるかもしれない。だから、私の短い話の中で、どっかへ逃亡しなければならぬ人物だと理解した上で、いついっどこで待つことを指示してくれたと思うから。

佐道 じゃあ、あえてそこは、伏せておいて、

上原 私はその頃、大阪の日本共産党大阪市委員会です、南地区委員会に所属していました。関西地区委員会と大阪市委員会から、「おまえの任務は、アメリカの占領下にある沖縄の現状を、

とりわけアメリカの占領政策を労働者や市民、沖縄県人会等に、その実態を報告せよ」という指示を受けたので、毎日のように報告会をやりました(笑)

眞板 その密航船は、大阪に着く密航船だったのですか？

上原 この船は大阪には直接着かなかったでしょうね。

眞板 やっぱり、鹿児島の方からですか？

上原 うん。一番近いところで、鹿児島か宮崎とかね、長崎とか佐世保とか、熊本もありますよね。それは、さつき言ったように、学校の子どもたちの文房具類ですね、こういうのを運んできた人は、長崎か知らないけれども、貨物船だったと思うんです。なぜかっていうと、大量にその文房具を仕入れるとなつてくると、相手の島、島の近いところで長崎か、佐賀か、熊本かということになるだろう。そういうところの特産物、沖縄がノドから手が出るほど欲しいもの。すなわち、日用品や建築資材等。特に建材類は、宮崎や和歌山あたりですかね。あるいは、その他の地域からのものもあつたようですね。

眞板 逆のパターンで、本土から沖縄へ密航で、ウチナンチュの方が、戻ってこられるのは、比較的、鹿児島とか宮崎あたりから、出ていた船に乗られて帰還なさつていたようですよ。

上原 そうですね、その人たちは、主に戦中の疎開者や戦前からの出稼ぎ者で一定の経済力のある人たちの「非合法」帰還者で、なるべく沖縄に近いところから、安全第一とした階層のお帰りで、船主さんは物を運ぶより儲かったようですよ。そういう船や民政府専用船、いわゆる公の正式のルートを利用することもできたかもしれないけれども。それは難しかったですよね。なぜかという、船の中で身元調査とかするんですよ。どこその港につけるとい、そういうのではなかったらどうか。私はそういうのを選ばなかった。もつと、気楽に楽しい旅をしようと考えて(笑)

佐道 そういう調べがないものを



上原 そうですね。

## ■体験的に共産主義を学ぶ

眞板 大阪で、共産党に入ることになりますけれども、沖縄にいらつしやつたところから、共産党の精神というか、考え方というものに共感をもつていらつしやつたんですか？

上原 そうですね。遡つてね、それがある日突然、こうなったんじゃないなくて、満州の少年時代のころの日本の中国に対する侵略というか、植民地政策というものが、どういうものであつたかというのを直に見て、子どもながらになぜ？ という疑問を持つたわけですね。で、それに対して抵抗して闘つている中国人や、朝鮮の人たちがどういう考え方を持っていたかということも、少なくとも十四歳の正月休みくらいで、否応なしに聞いたり見たりせざるを得ない機会が数回くらいありました。貴重な体験でしたね。そういうことが、その反面、たとえば、関東軍や日本人役人が言つてあるあれこれの問題、五族協和の問題、いずれは日本帝国が世界の主人公になって世界をリードしなければいけないと。これには、石原莞爾とかね、加藤完治とかという関東軍やニセ満州国の実質的支配者である植民地官僚。たとえば、岸信介などが代表する、その連中と、イニシアチブ握つてやつている満鉄や満州拓殖公司、いろいろなインチキ五族協和の会などの組織がいっぱいあり、日本建国の神話伝説で、いっぱい着飾つた。いかに天皇を尊敬しないとイケないか、天皇陛下とは現人神で日本が世界を平定したら、地球上の最高位の精神的な統治者になられるお方。したがつて、義勇軍の初期教育では、日本帝国の神話伝説等を朝夕暗記・暗唱することを強要されました。私たちが渡満して数年経つと、紀元二六〇〇年という祭典がありました。それは何年だつたでしょう。

佐田 昭和十五年ですね。

上原 昭和十五年つて何年だろうな。

眞板 一九四〇年です。

上原 「わが国は紀元二六〇〇年を迎えた。皇威は益々無窮であり、やがて天皇陛下は世界の盟主になられる」のだという、そんなことを石原先生の教えだと、どこからともなく伝わってきた。紀元二六〇〇年を慶賀する新聞・雑誌の宣伝は我々少年の目から見ても異常だつたことを思い出します。そういうことをもつともらしく毎日、強制的に聞かされると、畏まつて聞いているのがアホかと思いました。だんだん疑問が出て来ちゃうんですね。日本は、満州を支配している、満州の農民の土地を公然と奪つているのに、奪つていないと言う。それに対して天皇のご名代として、わざわざ来満した高松宮殿下は、「農民の既耕地は、取り上げてはいけない。既耕地でないところも、地代を支払うようにと、天皇陛下のお言葉があり、ちゃんと、八紘一宇の大御心で、満州国の建国を進めている」。そういうような訓話をされている。だが、実際には、農民たちに土地代は払われていないし、日本人が土地を奪つたから、食えなくなった農民が匪賊や馬賊になつたんだというのはよく語られていました。殿下の話を開けば聞くほど怪しくなつてだね、信じなくなる。それで親しい友人と何人かで実際に農村に行つて農民の話を知りたりして、調べたものです。さらに私たちの決定的な疑問になつてゐるのは、紀元二六〇〇年とは、中国の周代の簡王の時代ではないか、それを少し下ると、すでに秦の始皇帝がですね、全国を統一して度量衡を決めてゐるんだね。物を買つたり買つたりするね、重量計算で一斤は、いくらと売る。土地の面積においての国家管理ができる。そのとき、なぜ、日本は、まだ、神代天皇の時代なのか、不思議でならなかつた。聞けば、聞くほど、納得ができないから、逆に、偉い人が書いたものを入れて読む。それに感動して、やつぱり、私の

根性は、比較的素直な人道主義的な純粋な少年だったと思う。

そのような気持ちを持っていたというのは、結局、物心ついて以来の感受性の強さと環境だね。その実際に満州における日本人の高慢な態度を見ていて、これで日本人はいいのだろうか。という疑問が常にあるので、訓練所の誰かが、中国人に対して、人権を無視した横暴なことがあると、よく議論したものだ。そういう行動の積み重ねが、いつのまにか、身体に沈殿して、私の血や肉となって、非常に幼稚だが、いつの間にか、自分を皇国精神と違う人道主義的な社会化志向の方向に持っていく、反天皇的な土台を構築していったのだと思う。

それは、結局、私をして、逆に、そういうような方向に、志向させた原動力は、強制的に入れられた関東砲兵学校の一年あまりの在学中に学校の野外演習以外、外出処分を受けて一歩も外出させない。だって、全校生徒が休日に出外して、私一人だけが衛兵に守られて、一日中学校にいた。上官から声をかけられると、本居宣長の「古事記伝」や山鹿素行を見せて、「目下、神国日本史の勉強中です」と報告をしてごまかしていた。当時、私は「よし、社会に出たら、徳球たち、共産主義者の本を読んで真剣に勉強しよう」という願望を自覚していた。こんな大日本帝国の軍人なんていたんですね。こうやって、未来の夢を楽しく考えていました。私は、その頃、徳田球一という人は、奥のおじさんたちから聞いた話ぐらいと、徳球の弟・徳田正次からは、直接聞いたぐらいである。正次さんは、私が満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所したのと、前後して、彼は、河田の幹部訓練所にいた。彼は私より、二十くらい年上だったが、彼が言うには、徳田の弟だということ、どこも雇ってくれないから、満州にでも行ってみるかと当時の世情を嘆いていたが、私が中国から帰ってくると、当時、日中友好協会にいた彼は大変喜んで迎えてくれて、私を多磨霊園の徳田球一のお墓参りに一緒に連れて行き、帰国報告をさせた思

い出は懐かしい。

その次に、私が逆境下に置かれるたびに、思い出したのは、日本人から馬賊だ匪賊だと呼ばれていた、反満抗日軍のおじさんたちから「琉球の兄弟たちもわれわれ、中国人民と団結して、日本侵略者を叩き出そう」という呼びかけに、私は共感し、中国人、朝鮮人を「兄弟」と考えるようになったことです。したがって、日本帝国軍隊は、ぜんぜん、我々の兄弟ではないと思つた。

そのほか、今度は実際に、戦闘で自分が焼けただけで、宮古の人たちの協力で、救出されたあと、天皇の命によって、私を打ち首にしようというのだ。連隊司令部か、軍団司令部か知らないけれども。この戦闘で私が、グラマンを二機撃墜したことで二階級特進、そして、金鶏勲章、第何つていったかな、それを与えるつてことを決定しておきながら、自分たちでそれを反故にして、そのあげく、今度は打ち首だという。その罪状は、反軍・反日・任務放棄であった。それに加えて、輸送船団が撃沈された責任まで負わされたのです。グラマンが五十余りも襲来したのですから、誰の責任でもない。これは日本帝国天皇とその政府の責任ですよ。

そういう過去があつたからこそ、私は沖繩の南部を二週間くらい、さ迷い歩いているときに、いったい、今度の戦争の本質とは、何だったのかと。激戦で散った亡き人々の遺骸と共に、幾晩も考え続け、彼らにも問うた。ここで、私が悟つたのは、日米両帝国は、おのが自国の世界支配の野望達成のために、それぞれの国の資本家たちの欲求を満たすための戦争だったのだ。これからの戦争もそうだろう。そして、多くの無この国民が、犠牲にされるのだ、ということだった。だから、戦争に反対することは、生き残った私の使命だとの信念にいたつた。私は自分の余命を世界の平和のために、捧げようと決意し、そのためには、日本に渡って、共産党に参加すべしと決意し実行したのだ、ということですね。

私は旧日本軍人としての経験から、当然、私はもう、世界の平

和と革命運動の発展過程の中においては、沖繩であろうとやまとであろうと、可能ならどこの国の共産党にでも加入することによって、初めて、俺が考えている理想的な思想が生かせるんだと考えるようになっていました。大阪に着いたらすぐ、私は入党した。そして、入党のときの、すでに私は民主同盟で青年部長もやってね、沖繩の新しい民主運動の、それなりに貢献したんだから、入党日は、私が入党を申し込んだ日にちではなくて、一、二年くらい早めになっているはずですよ。入党時に、古い黨員たちが、そのように議論していたから。

※中国の周代は、紀元前一〇五〇年ごろから七七一年。紀元前二六〇〇年ごろは、三皇五帝の時代で、中国でも神話の時代になっている。

※秦の時代は、紀元前二二一年から二〇七年。

※皇紀二六〇〇年は、西暦に直すと、紀元前六六〇年。中国では春秋時代に相当する。

## ■日本共産党へ入党

佐道 共産黨員として、認められた時期が？

上原 何月だったか、忘れたが、入党即活動開始でした。だから、私は大阪の各区の集会場や公会堂あたりで、報告会や講演会をやったんですね。私は沖繩の真実をありのまま、大阪の人たちに分かりやすいように報告した。

佐道 桑江朝幸さんの回想録に、桑江さんはいろいろそういう活動をやっていて、その横ですね、山城さんと先生がですね、いろいろ議論をしていて、その話の中にですね、マルクスだレーニンだという話が出ていて、桑江さんについてはいけなかった。

上原 そうですか。

佐道 そういう共産党に入党することは、共産主義とは何かということを勉強されたつていうか、沖繩で山城さんとの議論とかで、共産主義とは何だつていうことを学ばれたんですか？

上原 その前から、先ほど言ったようにですね、日本における植民地政策のなかから、しかも、いわゆる匪賊とか馬賊が襲撃してくる一九三九年春ごろから、その馬賊たちのピラを受け取った。私は彼らが琉球の兄弟つていうと、「おおっと、よー兄弟」というような形でね、そういうこと、実際に体験できるような環境にあったということですね。

だから、特に、関東軍学校の砲兵に入学の際は、無理な、本当に無理な、ぶん殴られて、(学校に)入れられて、そこで、この人たち(同級生)と一緒に、当時の現時点での日本の政治の話もし合っているしね。彼らも興味を持って、「おお、そうだ、そうだが、そうだね、おかしいね」と言っている。そこまで、何週間かかったか、知らないけれども、いつのまにか、仲間のうちの一人が、教官に報告して、木刀や木銃でぶん殴られて、いま、私、脚が不自由なのは、そのときの後遺症である。だから、決して、自然発生的に、ある日突然、思いついたんではなくて、自分の血で、自分の肉体で、それをだんだん、学びとったという。

だから、独立のことを桑江朝幸と山城善光と私が、議論しているときには、マルクス・レーニンの話もした。われわれには満州時代の共産主義に対する知識とは、きわめて初歩的な幼稚な常識的な知識だった。

しかも、当時はまさに、日本帝国の支配下にある偽満州国が、実際に国造りの最中でした。その建国の目的はソ連に対する戦略基地でもあったというようなことについての一つの穏やかでない興味を抱えて、見ていた。

たとえば、張家峰でも事件がありますね、最後のあれは、ノモンハン事件ですね。すると、勇ましい戦果話の伝わる中で、実質

は大々的な敗北とか、その敗北の原因は何だと、蔭で関東軍とソ連軍の力関係についても、関心のあるものが、語り合う機会が多いということになってくると、戦車の大きさが三分の一もないとかね、鋼板の厚さが、三ミリ、五ミリもないとか、そういうことを実際に見てきた連中が話すもんだから。しかも、当時のハルビン義勇軍訓練所の所長は、河原侃さんってね、予備役陸軍少将だったんですよ。これはノモンハン事件で、散々負けて、その敗戦の罪で、関東軍を退役して来ている。実際の指導を彼がやっていった。だから、いろいろな場面で、いろいろな知り合いと会うと、自然となぜノモンハン事件は負けたのか、なぜ関東軍は敗戦を隠すのか、という疑問が起きたんですね。

結局、その時代の国際情勢や国内情勢が、中国と日本との関係というふうにならね、どんな疑問も私は関心を持ち、で、その疑問に對して、意外と好奇心旺盛で、素直に、日本とソ連との関係を人一倍素直に吸い込んでいました。さらに、私は、この疑問に對して、語り合う相手は、実際、軍隊の部隊の第一線に押し込められている中で、二、三度も招集された年取った下士官や、古年兵がですね、われわれよりも四、五年以上も、早めに軍隊に入隊している。この人たちは、防空壕陣地を掘りながら、あるいは休憩のときになると、寄り集まって話は広がり、将校担当の当番兵、ご飯を運ぶ兵隊が、——最初はよく分からなかったけれども、——「きょうの具合はダメだ」、「あー、よしっ、分かった」、そんな意味不明の話の中で、それで、「ダメなら俺が、かきましょうか」と、ニヤニヤしている。それでもダメだつていう将校のめしに對しては、大砲を曳く馬がいるからね、馬のふけを取ってきて、馬のふけをかける。そして、砂糖でも振っておけば、どうのこうのとね。そういう實際をみて、本当に軍隊っていうのは、どういふものなのか。軍隊内部というのは決して、そんな立派なものではないんだと。

そういうことを見ている、第一線にいる古年兵たちの話を聞いて、やっぱり、外で考えたり、見たりしていると、大日本帝国陸軍の内幕とはこういうものかと思つて感心したり驚いたりしたんですね。第一線に行つたら、死ぬしかない、もし、敵が来て、誰に向かつて撃つかというと、「俺はあいつ（上官）をまず撃つ」、こういう話を平気でやる。その人たちの中に、私の部隊にいる古年兵は、新潟出身者、千葉出身者、それから、東京出身者や神奈川出身者等、比較的都市出身者が多かった。その人たちは、実に私に影響を与えたというのか、彼らはね二・二六事件とかね、そういうものをみんなよく覚えてる。なにしろ、「誰々が首相や財閥の番頭を殺つたんだ」とか、「満鉄や満州国映画会社の監督が社長をした甘粕は、軍法会議で死刑宣告を受けたにもかかわらず、関東軍に匿われて大臣のように威張っている」とか。こうした古年兵には、夜学を出て、何回目かの召集だつていうようなおじさん兵とか、大川周明や北一輝などの論文の一説をそらんじて記憶している人がいました。だから、彼らは、いったい左翼なんだろうか、右翼なんだろうかと迷いましたね。そして、私がごっちゃになつた末に分かつたのは、日本の右翼っていうのは、実はありふれている左翼思想とごっちゃになつていんじゃないかと思ひましたね。

佐道　そうですね。戦前は、

上原　そういうようなことを思うと。そして、これは別の話なんだけれども、頭山満という方ね、日本政界の右翼の元祖みたいな人ですね。この人が、孫文（孫中山）の辛亥革命を支持する。彼は命をかけて、孫文を守つていた。当時、門司港に孫文が上陸したときに、日本の内務省は、それまでは、孫文の滞日中に妨害したり逮捕をしていないんですよ。その孫文を日本の官憲は、神戸で逮捕するという情報が流れたので、頭山らは「孫文に對する妨害は絶対に許さない」と孫文の保護に乗り出したのです。頭山満

は「もしも、内務省が孫文を神戸で捕らえるんだったら、私は、内務省の警官たちと斬り死にすると。俺は一家を率いて、神戸と一緒に上陸する」と公言したそうですね。

そういうことになってくると、いわゆる満清朝を打倒して国民政府樹立を目指している孫文の革命理論と日本の天皇制を否定しなかった頭山の一致点は何だったのか。頭山満という人は、左だったのか右だったのか、よく分からないね。

## ■ストックホルムへ向けて密航

眞板 話変わりますが、大阪に行かれてから、一度、沖縄に戻られていたようですが、いつごろですか？

上原 これはね、五〇年の春からね、大阪や関西各地で、工場労働者や市民団体を相手に沖縄問題の報告会をするたびに、痛切に感じたのは、米国の沖縄占領政策・軍事基地化問題についての実態が、全く知らされていないことでした。米国の沖縄基地の強化は、米国の世界制覇に向けた戦略であることを日本でさえこんなに知らないのだから、世界ではなお知られていないはずだということ、やっぱり、広く世界に訴えなきゃいけない、ということを考えてたんです。まず、私自身が、実践の中で感じたことを党機関にも報告し、関西地方の沖縄出身の先輩たちに相談したら、みんなから励まされたわけね。

眞板 それで、オランダのアムステルダムへ行こうとなさるわけですね。

上原 そう、行こうとしたわけです。あ、ノルウェーのストックホルム。その頃になるというと、時期的に日本共産党でも、五〇年問題でね、いろいろごった返している中でも、情報が入りやすからね。だから、どういう困難があっても、沖縄問題は全世界に訴えて、アメリカの民衆も協力してもらおうと思つて、婦人団体

でね、こないだ話しましたよね。そういうところで感じた。眞板 では、ストックホルムに行く途中で沖縄に寄ったということですか？

上原 やはり、極めて単純なね、しかし大変な冒険なだけだけど、もし、国際会議に出るんだったら、沖縄の基地の状況が実際にどうなっているのか、その後の沖縄の現状はどうなっているか、もうそのときは、数ヶ月たっていますからね。ということ、もう一回、沖縄の現地で確認し、実際に運動をやっている仲間たちと議論しながらね。この調査には数日間、一睡もする間もなくやりまして、何人からか話を聞きました。それで、沖縄人民を代表する報告ができる、自信をもって沖縄を離れたのです。

眞板 という、時期的には夏ごろですか？

上原 蚊に食われて、困った思い出があるようだ。だいたいそんなもんでしょね。

佐道 短期間、お帰りになったんですか？

上原 そう。だから、山城善光の本には、ひよっこり、帰ってきて、何日間か滞在したとありますね。何日間かわからないけれども。一週間くらいいたのかな。その時會ったのは、山城善光と桑江朝幸、瀬長亀次郎と仲宗根源和、この四名を中心に會っている。あと、知らない忘れられたけれども、この人たちは、本人まだ、生きています方もいるかもしれない。

眞板 沖縄から香港に行かれたんですか？ 一度、大阪に戻られたんですか？

上原 そのあたりは、ややこしくてね。実は私が大阪を離れる数日前、大阪市地区委員会、五、六名でさるところで、私の送別会をやってくれた。一升瓶、何本か持ってきて、比嘉（注・良明）が、案内役で建築現場らしいところへ、私は彼と一緒にそこへ行った。その頃はいわゆる、共産党の内部分裂で、非常に動きにくい段階ですよ。五〇年は。そういう時代に、私のために

送別会を開き乾杯してくれた。そして私が、「現地に着いたら、どこでもいいから、すぐ電報を打て、そうすれば日本代表として任命する」と約束したが、電報番号は、持って歩けないからね。もし、電話番号を隠し持って、逮捕されたときに見つかったら、おしまいだからね（笑）

眞板　なんか、今日も四時間を越えてしまいました。すみません。先生、最後に何かございますか。

佐道　いえ、いえ、大変面白いお話でした。眞板さんには速記録

を作っていたり、ことになっていきますので、それを一度先生に、見ていただいて、チェックしていただいて、その原稿をもとに、私どものほうで、報告書の形にさせていただくという作業を進めて行きたいと思しますので、どうぞ、宜しくお願いいたします。

眞板　宜しく願います。

（了）

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第5回

---

開催日	2004年1月31日
開始時刻	14:00
終了時刻	17:30
開催場所	政策研究大学院大学 政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## 第5回インタビュー質問項目

2004年1月31日

1

民主同盟についてお尋ねします。

・民主同盟の事務所の位置についてお尋ねします。

・党の方針はどうやって決めていたのでしょうか？

・仲宗根源和が委員長に選出された経緯について教えてください。

2

国頭村議についてお尋ねします。

・村議会議員としての活動状況について教えてください。

・報酬はいくらぐらいでしたか？

3

仲宗根源和についてお尋ねします。

・仲宗根源和の共産主義批判について、どのようなお話を伺っていますか。

4

本土への密航と日本共産党についてお尋ねします。

・大阪を目指した理由は何ですか。

・共産党にどのようにアクセスしたのでしょうか。

・共産党に入党した時期は、いつになりますか。

5

その他

・お父さんが沖縄を離れたのはいつごろになりますか？



## ■石川中央ホテルの思い出

上原 大宜味朝徳さんと私とは、ずいぶん、長い時間、いろいろな話をしています。石川ホテルという、彼も泡瀬の方から出てくるんですよ。泡瀬の方から出てくると、泊まるころがないから、仲宗根源和とかね、そういう民政府のお役人、彼は部長だった。社会部長だったかな？ あのとときの一般市民の建物は、ツイ・バイ・フォーって言ったのかな？ まだ、ほとんどの住宅が、砂地に杭を立ててですね、屋根も壁も天幕で、寝るところや住むために、そこにちよつとした木のはしつけらを拾ってきて作っていた。一軒のいわゆる生活空間は、十名くらいがやっと座れるようなところでしたね。しかし、仲宗根さん等は、民政府の部長さんだから、一般市民より、上等な天幕小屋だった。彼はそこから通って、私たちは石川ホテルで、当時、沖縄最高のホテルでございました。

※上原信夫氏注、本文中で、私が「石川ホテル」というのは、正式には「石川中央ホテル」だったと思う。それを「石川ホテル」または「中央ホテル」と呼んでいたようだ。

佐道、眞板（笑）

上原 そこで、泊まるんですよ。あの頃、覚えているっていうのは、商売人か、それから何か次の社会的または政治的な地位を狙って動いている野心家とか商売目的で動いている人っていうのは、それなりの戦前から有力者と呼ばれるような連中だから、ちゃんと知人や友人の天幕で泊まれる。民政府の部長クラスでも、仲宗根源和のような人は、又吉康和から排斥された者はあまり良い家ではなかったが、それでも自分の住まいがあるけれども、大宜味朝徳や奥田巖、新垣金造さんとか、などという人たちは、石

川に来たら泊まるころがないから石川ホテルに集まった。大きい部屋でも十〜十二畳ぐらいですかね。頭おまえに出したら、誰か足を蹴飛ばしたりして、そういうのをみんなやる。

佐道、眞板（笑）

上原 そこで、山城善光のあれ（注・『荒野の火』）で言うと、奥田巖が、彼は政商で、そうですね、彼は政治的な面もあった人だから、どこかで酒をアメリカ軍の作業員からか、もらってくるんでしょね。彼は昔の中国にしばらく行っていたような人なんですよ。私より下手な中国語で。とても眠れないから、同宿者たちが大変困って、黙らそうと思っても、「何よ！ この野郎！」と大声でわめくわけです。それで、私は中国語でね怒鳴りつけた。すると、彼はびっくりしちゃってね。「中国語知っている人がいるんですか」って。それから以降、二人は仲良くなった。ゆつくり話し合う機会があり、彼がいうには、戦前那覇の通堂町にあった奥平良樽工場の社長の弟で、彼は中国でひと旗あげようと思っていたのに、敗戦で裸一貫で引き揚げてきたんだそうです。

佐道 そこで、飲んでいるお酒は、どんなお酒だったのですか。アメリカ軍から：

上原 アメリカ軍の作業員から、

佐道 ウイスキーとか、

上原 そう、ウイスキーかなんかでしょう。その頃になるといって、沖縄でも極少量だが密造が始まっているんですよ。だから、山城善光と私が、一番最初に会ったとき、彼はどこへ走って行ったのか、おじさんの家から貰ってきたのか、（三合瓶くらいの大きさを示して）これくらい瓶に。だいたい貴重品だったんでしょね。それで、注いで二人で乾杯。そして、私は冗談でね、昔、中国では酒を飲んで、同志、兄弟の契りを結んだもんだ。どんな地位のある人でも盗人でも、昔は杯にニワトリの首を切って点々と血をたらして、それに酒を入れて飲んだんだそうだ。あ、（眞

板が書いた質問シートを見て) これには書いていないけれどもね。そしたら、「よし、同志に乾杯! 兄弟の乾杯だ」って言ってやったんだらうね。そこで、夜はそこで過ごしてしまった。いいんですか、そういう話をして。

佐道、眞板 えー、えー。

上原 大宜味朝徳さんは、ある時期からあまり民政府の方へ行かなくなつたね。あまり歓迎されていなかった。嫌われていたんだね。民政府職員の食堂で突然、演説をぶつたりするかららしいと、誰かが話していた、と思ひ出します。

佐道 なるほど。それじゃ、営業妨害になりますね(笑)

上原 彼は昼間、私がいると、「上原くん、時間ありませんか」って言うから、「いやー、こうこうです」と。そのときに一時間くらい二人でこうこうとね。それで、人がいないと、大きな声で話せると。

それと、彼と私の共通点っていうのはですね、私が、日本帝国の中国侵略の拠点になつた満州国で、日本の植民地政策っていうのを十三、十四歳ぐらいから見ているんですね。その中で私自身のこの世界観が徐々に変わるような出来事が、次々に起きて、非常に素直に対応して生きてきた。意外とませていた、そういう意味で、「日本人これでいいのだろうか」っていう疑問を抱き、それと反満抗日運動家たちから「朝鮮の兄弟たち、琉球の兄弟たち」と呼ばれると、「はっ」と俺たちを兄弟と呼ぶのか、「いや、ではこの中国人、おまえたちは俺たちの兄弟じゃないのか」って、自然とそういう心境になつてしまふでしょ。そういうことがたびたびありました。確かにそういう体験は、非常に貴重でした。そういう意味では、私は政治的な面ではおませなだつたと思うね。

だが、大宜味朝徳さんは、あれは中学校を出て、もう三十何歳近くまで沖繩で民政党か政友会かどっちか知らないけれども、やまと出身の政治家の下働きをやっているんですね。学校の代用教

員になつたとかいうことも言っていたね。あの人はね。そういう経験があるから、同じいわゆるウチナンチュとしても彼は、大人の沖繩人としての生活経験と社会経験があるんですね。

それでも、彼はね、私の話しに合わせようと気を遣っていたのですね。やまとにおける彼は、栃木かな? どっかにいた。その時の話はね、やつぱり、私は本土の生活経験がないから、その話にはあまり弾まなかつたね。だけれども、こと、南洋群島の植民地政策について、となると、ものすごく情熱をもつてね、やりましたね(笑) 大宜味さんは、何かのきつかけで、ある日、非常に興奮して、二人で「一緒にやろうよ」と言つてね(笑) と言つていたんだけれども、「あんたの言う、アメリカの信託統治下の植民地でいこう」ということは、大衆の支持は得られないでしょう」と言つて、私は先生の歴史認識に対する変革を求めたんです。大宜味さんは意外に寂しそうにうつぶす聞いていたことは忘れられないですね。ということ、そういうことがあつても、私の親父と同じくらいの年配ですからね。私はその後も親父に対して話しているような気持ちになつて、譲り合いながら話し合いました。ただし、こと理論的な原則問題になつてくると、今度は同じ年配に見えたりして話し合いが急に高揚したりしてね。老若共に情熱をぶつけ合つて(笑) やつたことがある。

昔のあの頃のことについて思うのは、まさに私は彼の子どもの年頃だつた。しかし、当時の沖繩の現状分析やこれからの沖繩をどうするんだつていうことになると、私は突然、彼と同じ年配になつてですね、大きな声で話し合つたものですよ。

佐道 前回いろいろとまた伺つていたんですけれども、またちょっと、補足的にですね、いろいろとまだ、伺いたいところがあるんですけれども、眞板さんの方から

上原 まずこれを最初のやつを見ながらですね、あつそうか、こういうことの方が、むしろここよりか、重要な問題じゃないかと

思う問題が、こう、広がっていくんですよ（笑）だから、一応、一回、あんたが整理してみても、っていうことなんだけれども、こういう機会をこう繰り返していけば、いいですね。

## ■民主同盟事務所の変遷

眞板 大きく五点なんですけれども、民主同盟について、基本的なことと申しますか、最初、設立されたのが石川市ですね。

上原 石川市ね。

眞板 その後、那覇の方に移られたというお話が、前回か前々回ございましたが、民主同盟の事務所的位置であるとか、どういうような形で、どういう雰囲気の仕事所だったのか、というようにお話をまず、伺わせていただきたいのですが。

上原 じゃあ、一つずつ、やっていきますか。

眞板 はい。お願いします。

上原 まず、あれですか。最初は、事務所と言ったら、事務所と言えなくもなかったけれども、例の石川ホテルですね。石川ホテルが拠点になって、ほとんど会合はそこでやる。みんなが集まるのは。ただ、個々の問題ですね、特に石川ホテルが、満杯になったりしますと、落ち着いて話ができないっていう場合は、仲宗根源和の家、すなわち、天幕小屋に行つて、そこで、話しましたですね。それから、もう一人、大城善英さんという方がおられてね。この人は、五〇年代の初めごろに、今婦仁村の村長（注・五〇年二月執行『沖繩戦後選挙史』）になったそうですね。この人も、南洋帰りなんです。この人は南洋帰りで、なんか、サイパンかな？ どつかの工場か農場で働いている、ウチナーの青年労働者たちの組織活動と青年教育に携わったこともある進歩人士だと言つておりましたね。この人にはずいぶん、石川で世話になりましたね。大城善英さんは、南洋方面からの引揚者たちと関係が深く、

地方から来た人たちの相談相手になっていました。彼は一貫して理路整然とした沈着な人でした。私がいなくなつて、間もなくして今婦仁に戻り、その村長になったようです。とにかく、彼は南方引揚者の中では一応、名の通つた人物だつたと思うんですよ。仲宗根源和よりももっと、良い広い天幕を持つておりましたよ。距離はちよつと、離れておりましたけれどもね。そこに、自分の子どももだつたかな？ 良く分からないけれども、ま、二、三名の若い人たちと一緒に、住んでおられてね。で、われわれが石川ホテルで会議ができない時には、大城さんは「俺の家でやろうや」と何日も提供してくれました。彼は一時、事務局長代理つていうのをやっていたことがありましたからね。民主同盟の設立当初に。彼の家で会議を開けば、もうそれは、午前中であろうと午後であろうと、会議が終わつたら、ちゃんと、そこで、ご飯が出てきて、

佐道 大城さんの家ですか？

上原 大城さんは、大城善英さんの家ですね。そして、夕方になると、そこでもう、晩飯を当たり前のように、われわれは食べるんですね。向こうは向こうで、一所懸命、振舞うための食料をどつかから手に入れてきて、準備しているわけですから。石川ではまず、公式な根拠地は石川ホテル、ただし、具体的な話し合いとか会議とか、そういうことになる、仲宗根源和さんの家と大城善英さんの家を使った、ということですよ。

眞板 源和さんのお宅は、このときはまだ石川ですか？

上原 えっ？

眞板 首里に移られたんですか？

上原 いや、いや。まだ、首里なんていうのは、そのずっと後のこと。

眞板 ずっと後のことなんですか。

上原 おそらく、いま私が話しているのは、四七年の民主同盟が、

何月でしたかな？

眞板 六月です。

上原 六月ですね。四月、五月ごろ、六月からですね。そして、首里の方に仲宗根源和が移ったというのは、四八年か四九年ごろでしょうかね。

眞板 出版事件は四八年なんですか？

上原 そうだ！ その頃は、彼はもう移っていたかな？ まだ、移っていないか？ どっかに……いや、まだ石川ですか？ だから、民主同盟の初期段階、前期における活動はほとんど石川中心だったわけですね。ただし、山城善光と桑江朝幸と私と三名は、例の『自由沖繩』の出版問題の印刷関係の都合上、結構、コザあたりでの活動が多かったです。もうその頃は食料は少し出回っていますからね。桑江さんの家で、あるいはその近くのどっかの誰かの部屋の大きいところを利用するという形で。だけれども、八〇、九〇％は桑江さんの店舗兼自宅、みんなテントですよ。で、やりましたですね。

眞板 これは『自由沖繩』を刷っていたところですか？

上原 そう。その原紙を切るのに、私は二晩、三晩も切り損なうてやったのもコザですよ。そして、紙を貫いに行つてだね、桑江朝幸と二人で、民政府が瀬長亀次郎たちに出してだね、あ、『うるまタイムス』

佐道、眞板 『うるま新報』です。

上原 (うるま新報) に行つたりね。「民主同盟の機関紙を出すのだが、紙がないので困っているから、ご支援お願いします」と頼むと。「そんな紙はどこにありますか」って言うので、「いや、あんたたちの使い古しので、表を刷って、裏の白いヤツあるか、それでもいいんだ」って言つたら、「待てよ」って言う中に入つて行って、「使い残しのやつで、三、四本あるから、要りますか」って言うんだ。行つてみたら、なんと輪転機にかけて、その使い

残したヤツ(注・直径一五センチくらいの輪を作つて)このくらいの丸さ。これはもう、私たちには、本当に宝物なんですね。「それ、欲しいんだ」って言つたらね。「あんたたちは、輪転機はありますか」「ない」と言つて、「なんだ」「謄写版だ」そしたら、「いくつでも選んで持つて行きなさい」と言つた。それで、冗談で「カネはないから、後払いにしてね。われわれが儲かつたら払いますからね」って私がね言つたら、「いやいや、要りませんよ」って真剣になつてね。そいつをね、六本、大きいやつを私は束ねて、担いで、小さいやつを桑江さんが担いでいく、どのくらい歩いたんですかね。

そうですね当時、石川にあった民政府から桑江さんの家の近くまで、歩いて二時間か三時間くらい。それをね、汗をびっしょりかきながらね、担いで帰つて来た。そして、どっかで桑江さんがコザに行く車を見つけてきて、その紙を彼の家まで持つて行つた。彼の両親や奥さんは、大変なものを見つけてきたと喜ぶと同時に、「おまえたち、おなか空いているのに、よくこんな重いもの担いで来たね」と言つてね(笑) 大変褒められたね(笑)

眞板 目方としては五〇、六〇キロくらいあったんですか？

上原 そうだね。紙ですからね。このくらいの半分ですわ。こんな新聞紙の。あれはねえ、四〇キロ、五〇キロあったかもね。

佐道 昔の軍事教練で鍛えていた人たちだから、できたという(笑)

上原 大砲の砲身を担がされたりして、重たかつたね。罰として、それを担ぐ、そして、「走れっ！」なんて、走らないとね、けつを叩かれたりしてね。

佐道 思わぬところで役に立った。

上原 役に立った。しかし、『自由沖繩』の紙はどこで手に入れたのか、よくよく考えてみると、どうも『うるま新報』ではなく、軍政府の出版所だったのでないかと思う。なぜなら、山城、桑

江が逮捕された後、桑江の奥さんが三回くらい連行され、いく晚か留置されているのだから。きつと、米軍の報復だったのではないかと思えます。

佐道 そんなところで役に立つとは思わないですよ。

上原 そういうところで、沖繩の解放と文化活動のために、私はそういう力仕事に立ったんだと思った(笑) そういうのはまったくそうですよ。そういうことがあっても、やっぱり、結局、連絡場所として便利などと言ったら、石川。具体的な仕事は桑江さんの家を使ってやったということですね。

眞板 『自由沖繩』が出ますよね。

上原 えっ？

眞板 『自由沖繩』が出ますよね。そのときのこう、『自由沖繩』の連絡先はどこになっていたんですか？

上原 そんなときのね、連絡先はね、編集責任者が所在するところ。いわゆる発行責任者の名前をね、山城善光にするか、仲宗根源和にするかっていうことで、討論されたんだけど、山城善光と二人で民政府に行つて、船越さんに相談したら、「責任者の所在と名前を明確にしなきゃいけない」ということを言われたのを覚えてますね。それで、その問題を持ち帰つて、委員長だから仲宗根源和の名前にすべきじゃないか、ということをやつたけれども、あれはね、発行責任者はやっぱり、山城善光になっていたはずですよ。山城が書いていないかなあどつかに、そのことを。

佐道 仲宗根さんはお受けにならなかったということですか？

上原 えっ？

佐道 仲宗根さんが、承諾しなかったということですか？

上原 仲宗根がね、船越さんが言ったのと、それと相通する面はあるわけなんです。だから、発行者の所在をはつきりせよということなんです。その責任者の所在を明確にしなきゃいけないから、発行所をどこにするかどうか、となったときに、私たちは、

その印刷するのは、どこだつて言つたら、まさか、「A・J」とは言えないから、あそこも使つたけれどもね。桑江朝幸の家の名前を出した。だけれども、事務局長は中山一さんのときは、桑江が総務部長だからね。山城善光が一応、組織部長ということだから、その上が仲宗根源和ですよ。二人だつて言つたら、「ぜんぶ、どつちのことも責任の所在がはつきりしないから、軍政府の方で認可しないから」というようなことを話したんだけど、「会つてそういうこと話ませんでした」つて、軍事裁判で船越が言つたんだけど。そのときにきつと、山城善光の名前にしたんだと思うんですよ。住所となると、今度は石川ホテルではダメだから、そうすると、思い出せないですね。すると、今度は仲宗根源和ということになるわけですよ。石川つていうことになるかと、仲宗根源和の名前にしたのかなあ。問題になるのはですね、桑江と山城が捕まつて、一番最初に高等軍事裁判を聞くときに、軍政府の方からは、責任者を出してもらわなければ、困る。そういうこととして、それじゃあ、それを受けたのは私だから。大城ツルさん通じて直接。

それで、私は、仲宗根源和のところへ行つて、「事態はこうこうですので、どうするか」ということを相談しましたけれどもね。彼は前にも言つたように、「いまは非常に微妙な情勢というか微妙な時期である」と。「私が行つたら、アメリカはおそらく俺も捕まえてぶつ込むんだ」ということだから。「やっぱり、ちょっと、私は動かない方がいい」とつて言つて逃げた。

それから、推測すると、もし、仲宗根源和がその機関紙『自由沖繩』の名義人で、責任者が仲宗根源和になっているなら、軍政府の関係部門は仲宗根源和に直接伝える、ということになるはずだがね。それが、名義人である山城善光が捕まつているから。民主同盟でもつて、党の責任者をちゃんと軍政府の高等軍事裁判に参加させなきゃいけないんだと要求してきたわけですね。『自由

沖繩』の名義人は、仲宗根じゃなくて、山城善光だったんじゃないかなあと。この経緯から見てですよ。

※『荒野の火』（三十四回）によると、発行所は首里市寒川町民主同盟本部、発行印刷兼編集人は山城善光との記載がある。

眞板 このあと、前回か前々回に那覇に民主同盟の事務所があったんだよというお話が

上原 そうですね。そういう複雑な経緯を経てですね。『自由沖繩』問題は、一応、ひと段落して、四九年の夏の暑いときでしたと思うんですよ。

話は山城善光が東京から沖繩に帰ってきたことにさかのぼります。郷里の喜如嘉に帰ってきて、彼の住む家がないんです。大宜味の人たちが、山城善光を非常に大事にしていたから、友人みんなが力を出し合って、山に行つて木を伐つたりして、今で言う六畳くらいの部屋を二つ作った。そういうのを作つて、上がこう屋根がありますね。こつから、ここまでは瓦葺なんだよ。それで、瓦がたりないから、また、それを買うカネもないから、下の方（注・庇の部分）が茅葺になつている。あ、上が茅葺なんだ。下の方がこのくらいが瓦なんだよ。その頃、自分の家を作つたと喜んでいたのでね、思い出しますね。

じゃあ、民主同盟の事務所が、那覇に移動すると、活動の拠点は、どこにする？ 那覇には、もうそのころは、元市民がどんどん移っていますから、党活動の中心も、経済の活動の中心も那覇に移り、政治の活動の中心も那覇にどんどん移っていくと。だから、我が方もね（笑） いわゆる沖繩の首都である那覇に移るということになった。しかし、当時、那覇には借りられるような場所も家もない。またそういう貸してくれる家もないですからね。そこで彼は、いろいろ悩んだわけです。母親がまだいたんだ

なあ。母親は別に住んでいるけれども、あの家を建てるときは、将来、母親の老後の安らぎの場所にして、お母さんをそこへ住まわせる。いま、お母さんが住んでいる古い小さな家よりは、いいじゃないかという考えもあった。彼は、非常に母親孝行でしたからね。あとで彼は、「いや、私は必要ならば、我が家をだね、党に献上して」なんてね、挨拶をしたんだけど、実際には、そういうのは、やつぱり、貧乏人の考えていうのですよ。桑江も私も、ほかの人たちが「もういいんだ、いいよ」って言ったんですかね。「キミね那覇に移つて、党の活動の中心を置くところがあるか」って言うからね、「ないんだ」と。

けれども、国頭の人たちの中に、あのころは、那覇では、比較的財産家というか、家をちよつと貸してくれそうなのは、國場幸太郎ね、それから大城鎌吉。この二人とも、国頭の出身なんです。その大城鎌吉さんっていうのは、奥の私の親戚関係である翁長さんとほぼ同年配で、若い頃から二人は仲も良く、大工の棟梁と一緒に国頭から那覇に出てきた人たちなんだがね。それから、國場幸太郎さんっていうのは、おじいさんがまだお元気なときに、私はその家に何回か行つた覚えがあるんですよ。昔の琉球式のこういう髪を結って琉装をしていた。あの、その國場さんたちも、琉球王国に藩を無理やり設置させられたのに、抵抗して首里や那覇あたりから、ヤンバルに逃げてきた人たちだ。私たちの先祖もそういうことなんだがね。そういう面で、この落人同士の結びつきもあつたんでしょね。だけれども、彼らは金儲けに一所懸命になつて成功している。こつちは貧乏人の代表みたいになつている。たまに、彼らが信頼する民政府を頭越しに批判する演説を目の前でやっているんだから（笑） 困るよね彼らだって。

結局、山城さんが家を那覇に移すんだつたら、いいよじゃあ、俺が留守居役になつてあげるから、そこを今後の仮事務所にしよいうやということ、引つ越したんですよ。

眞板 それは那覇のどのへんですか？

上原 那覇のね、もうすっかり変つて分かんないけれど、昔ね軽便鉄道があつたでしょう。沖縄に。一番大きい航空の基地があるところは……。

眞板 嘉手納です。

上原 嘉手納。嘉手納から那覇に、この軽便鉄道がね。四、五名で持ち上げられるような小さな機関車なんだ。子どものとき乗つた覚えがあるんだけど、その汽車のね。この線路の土手のある、ちよつと離れたところにある与儀だね。与儀のね、農業試験場の近く。

眞板 あつ、いま、知事の公舎があるところですね。

上原 よく分からないね。何しろ、農業試験場あたり。農業試験場のその場長というのは、奥の出身だったんですよ。先ほど名前をあげた翁長さんも私の親戚なので、私にとって大変ありがたかつたですよ。めしが食えなくなると、その家に通つていくと、たまに顔を合わすと、「おいおい、信夫、おまえ、めしを食つたか」「いない」って言つたらね。「おいでおいで」と言つて数日分の腹ごしらえをさせて下さつた。配給もあつたんでしようが、なにしろ、建築業者さま様の時代でしたからね。

当時の与儀はほとんど荒れ放題の草原でしたね。山城善光の家を移築した地点から相当な距離まで歩かないと、他の家が、なかつたなあ。

眞板 いま、すごい高級住宅地ですよ。

佐道 周りはずつと、野原というか

上原 野原というか、戦争ですつかり、ぶつ潰された。そのまゝです。まだ、引つ越しても、一般の人が生活できるようなところじゃなかつたのかもしれないね。

彼がいよいよ引つ越すというときには、今度は、「A・J」の作業員のトラックがね、二、三台動員されましたからね。たいし

たもんです。喜如嘉の青年たちの力つていうのは、善光さんの家を分解して持つて来て、いっぺんに持つて来て、萱も瓦もみんな。建築関係の人たちの作業は非常に効率的で、一日できたんだよ。

すると、善光さんが、「俺の高級邸宅が出来たんだから、初泊まりはね、本当は奥さんも呼ばなきゃいけないけれども、布団もない。二人だけで寝よう」なんて言つてね。二人で泊まった。彼は、翌日帰つて、奥さんに、こうこうと引つ越すかどうかも含めてだね、引つ越して来るつていうことは、彼の意見からするつていうと、まず配給品の分配居住地の名義は喜如嘉だし、もし、奥さんが喜如嘉を出たら、配給品だけでは、どうも、食つていけそうにないんだね。配給品の量からするとね、喜如嘉にいと、部落の人たちの手助けもあるつて、何とかなるが、さて、那覇に移つてくるとつて、誰も知らないところで、初めての生活だから何かも最初からの再出発なので、奥さんは引越しに消極的だった。そして、彼が事務所開きをしようつていうことだね。家が建つて、一週間くらいの間はね、ヤギを一匹連れてきたんだよ。おそらくあのヤギを提供できるつていうのは、離島との往来ができる人だらうけれどね。ひよつとしたら、久米島出身の山里政勝（民主同盟調査部長）さんあたりかもしれないね。

佐道 でも、びつくりされたでしょう。

上原 そして、これを潰して肴にしてね。三日後かに、事務所開きをするつて通知を書いて、みんなに送つた、通知書ね。いま、考えてみると、その伝達をするのにも大変なんだね。電話同士で「わーわー」つてやればいいじゃないかとね。電話はあの時はね、お役所と郵便局しかないから、で、「郵便局に電話入つています」つて、その郵便局から電話を私に呼び出しに来るまでに、一時間も二時間もかかるが、電話が唯一の通信手段ですからね。それでも、私の二本足より何百倍も早いので、私は壺屋郵便局に出かけ、知つて限りの限りの町村役場の職員に電話をかけ、誰々さんに至急

伝えるようにとお願いしたんです。この連絡方法は、私も初めて採用した新技術だったが、民主同盟の役員は一応、町村の知名人だから、極めて効果的でした。

あまりにも、急だったもので、それで、三日、四日くらいいって、急だったんですよ。ヤギを連れてきたので。私が、草を刈ってエサをやったね。太らさなきゃいけないってね、飼育してました。そして、集まりましてね。何かに山城善光は書いているはずですよ。三十名か四十名か五十名か知らんけれども集ったと書いてあるよ。うな。当日、山城は、「今日は、おまえが接待委員長だ」と言っているが、さて、ヤギをどうやって潰すのか私は分からない。やっぱり、経験者がいたんだね。「俺がやる」って。ほいで、「包丁を持って来い！」って言うんだ。「包丁ありません」

※『荒野の火』（五十一回）には、事務所建設祝賀会に五十人程度との記載がある。

一同（笑）

上原 誰か近所、走り回って帰って来て、準備をして、みんな集って来た。早めに来た連中も何名かいて。そして、ナベもどつからか、借りてきたのか知れないけれども、みんな揃ったね。

おそらく、宮里栄輝さんの家が近いんだ。あっそうだ、近いんだ。大きなナベなど持って来たのは、宮里栄輝さんの家から持って来たのかしれないな。そこに石を見つけてきて、今度はカマドを作ったね。炊いて、それは、おばさんたちが手伝ってくれた。私に任せると、今度は、どんな味付けになるか……

佐道、眞板（笑）

上原 それをみんな心配していた。

佐道、眞板（笑）

上原 そしてね、その人たちがお酒をね。お酒を何本かね。ビン

はどんなビンだったか忘れちゃったけども、あるいは缶だったか、いろいろなものを含めて、それぞれ自分の家の特産というか、地方の特産というのか、みんな提げてきて、酒も提げてきて相当量はあったと思う。

それ以降、今度は山城善光の奥さんは、戸籍の問題や配給の問題も含めて、そうほいほいとはいかないから、事務所は自分、私一人だけで寝泊りして、山城は引越さなかった。地方から、事務所に来る民主同盟の連中、特に若い人たちは、そこがそのまま、宿泊所にも会議室になるわけですね、勉強会もやる。だが、問題は朝八時から会合だと企画するとする、翌日は誰彼に会うということになると、じゃあいい、ここに泊まっていじやないかということと同志たちの無料宿泊所にもなった。だけれども、一番重要な問題は何かと言うとね。会議が終わって時間になって、会議が始まる時間じゃないですよ、お腹のなかに何か入れなきゃいけない時間になるっていうと、さあ、どこへ行って、何を見つけてこようか。

佐道、眞板（笑）

上原 そして、そうなるよ、その頃になりますとね、壺屋の近くにも、おばさんたちの店ができるんですよ。で、そこへ行きますと、肉、どこから手に入れてくるのか知れないけれどもね。ああいう時代にね。やっぱり人民大衆の庶民の生活力っていうんですか。知恵って言いますかね、魚はもちろん、糸満からね、おばさんたちが、頭に乗せてこう持つてくるわけです。だけれども、それじゃあ、品質が落ちるから、また、軍用トラックをうまく、こりりレーでつないで運んでいますね。で、行けば魚がある。カネがあれば、買えるんですよ。高級魚でもね。どっかにね、時々、食肉を扱う店があった。豚肉なんか売っていたんですよ。どっからか、遠い離島から、もうちょうど、潰す頃になった肥えた豚を船で運んで那覇で潰すんですね。ものすごい、高価なものだった。



「値段いくら」って言ったら、「まあ、内緒だ」と言った。そのおばさんの子どもと遊んでいたら、教えてくれたよ。そしたら、俺も食べたら明日、目が回って死んでしまうから、ダメだよ。

佐道、眞板（笑）

上原 だっただけでもね。だから、そこへ行けば、サツマイモを煮たヤツとかね、それから、少しづつ野菜みたいなものも出回っていましたね。そういうものと、それから、沖繩そば。そういうのを事務所開きのときに借りてきたカマを返さずにまだ置いてあったので（笑） それに、何でもかんでも入れて、炊いて、煮て、食べられるようになったら、それを食べるとかね。そういうこと。

四八年の……山城が書いたものに乗っていると思いますけれど、七月？ 六、七月？ 頃だったんでしょうかね。もう夏の一番暑い盛りの頃だった。もつと前かな？ というのは、私はそこへ二ヵ月くらいそういう生活をやつて、いろんな連絡もやりましたよ。看板もね、「沖繩民主同盟本部」ってね、これくらいの板を私たちは、普天間の方からね、持って来た。それに、こんな大きな字を書いた。それで、それに、山城善光は、どつから、見つけてきたんだらう。墨がないから、黒いペンキをどつからか貰ってきたんでしょうね。それで、「沖繩民主同盟本部」ってね。

佐道 山城さんがお書きになつたんですか？

上原 私が書いたんだ。

佐道 先生が？

上原 その書き物というのは、山城善光はあまり得意でなかったから、私に書かせた。沖繩民主同盟本部と書いたはずだ。それは、私がある間、ずっと、かかっていた。私がおらなくなった後は、誰か留守居役になって、山城が中心になって、管理したと思うが、私はその後ほとんど、公にそこへ立ち寄っていないと思う。

だが、五、六月、七、八月頃からの人民党、民主同盟、社会党

の合同演説会を全島的に二回か三回開催していますね。その頃は、那覇よりもまだ、石川がやつぱり便利なんですよね。友党の人民党、社会党と連絡したりするにも。民主同盟の会議や他党との合同会議を持つにもです。当時、民主同盟の活動の中心は仲宗根源和、山城善光、桑江朝幸、私と四名は幹事役。ほかにあと二、三名出る場合もありますけれども、だいたい四名。人民党は瀬長亀次郎、それから、新垣さん、上地栄とか、それから、波平とか、あと、島袋。何名か？ それから、あれは又吉。こういう連中が三、四名。それから、あとは社会党の大宜味朝徳さんが一人で。ほとんどあの方は、一人だったから。たまに、若いのが一人ついてくる場合もあるけれどもね。会合となると、何かにつけやつぱり、便利なのは石川なんです。もちろん、党内の重要な会議は、石川でやつぱり持つ。仲宗根源和も、初老期の人たちも、そこなら来れるからね。

だけれども、那覇を中心とした活動が始まるというと、そこでは、私が泊まっていた、中心になる。それが、ひと月？ ふた月くらい？ 一応、便利な連絡場所の役割は果たしている。しかし、二ヵ月くらいしか私はそこに居れなかつたですね。石川で会議を持つたら、あと、講演会の場所へ私は、その時間に合わせてポツと出てくるといふような状況が、もうその頃から始まっていますですね。

眞板 もう、C I Cに狙われ始めていますか？

上原 いや、前からC I Cには、狙われているんですけども、彼らは私を何らかの形で、捕まえようとするんですけども、そういうのが、非常にはつきりしているのは、たとえば、那覇に、あの頃はまだ大変な時代でしたが、軍用トラックを改造して幌をかけて、沖繩バスとかね。それに乗って行くというと、どうも怪しいのがあると、もうその頃、その体格や服装で、だいたい分かるからね。私は降りないで、そのまま、車庫に入ってから降りるとか。

あるいは、目的地の一つ手前の停留所で下車する。まあ、安全のためには、一、二里くらい歩いておね。それじゃあ、非常に危険だということもあり、自己防衛をやらなきゃいけないということであるんですよ。

彼らはまず、アメリカ軍のCICは直接、私に顔を出さないんですよ。沖繩の警察が、彼らは警察の服装をしている場合も、または、そうでない場合もある。いわゆる便衣で、私に対しては。最初の段階では、「署長がちょっとご用事があるそうですから」とか、あとには「CICの方がお会いしたいと署長と一緒にお待ちしています」とか。「お供いたします」とか。「おまえは何だつー」ってこうなるから。で、彼らが、ちゃんとした制服を着て、行動している場合は、バスの上からも分かりますよね。それによって、必要な行動に移った。それは、特に一番彼等が私を捕まえやすいところ、それは南から北に上るというのは、名護なんですよね。それから、石川に行くというのと、石川は、人の動きが多いから、ポーツとしているというのと、なかなかわかりにくい。

そうすると、彼らは、那覇の事務所ができたことを知っていたのかな？ あつ、沖繩タイムスか何かに報告したかもしれない。那覇で事務所出来たっていうことを、きつとあの頃、タイムスに発表したのかもしれない。

眞板 これ、四九年の夏ぐらいですか。

上原 えっ？

眞板 これ、四九年の夏ごろですか。

上原 四九年のね、事務所が出来たのはね、そう、夏ごろでしょうな。夏と思うな。あの家で、毛布も何もかもなしで、ムシロもなしの板の上に眠れたからね。しかも、気持ちよく眠れた。だからきつと、もう蚊が出ていたから、真夏以降だろうな。

眞板 事務所の建設費用っていうのは？

上原 えっ？

眞板 事務所の建設費用は特になかったんですか。

上原 それは山城さんが、自分の家を移して寄付すると、そういう名目なんです。それしたら、喜如嘉の若い青年たちは、自分でせっかくみんな苦勞して作った。その家を作った人たちが、壊して持ってきて建てたんだから（笑）。カネはかかっていないということなんだ。計算では、そろばんではね。だけれども、その人たちは、一日、二日、山城善光のためにということ、みんな（注・山城善光氏に）面倒を見てもらったり、世話になっているわけですよ。あるいは、なかには軍作業、あの時は何か休みを利用して、それなりの個人的な犠牲を払って、みなさんが協力しているんだから。

佐道 移築になるわけですよ。

上原 えっ？

佐道 移築、移して建てたということになるのですよね。

上原 そうそう。

佐道 材料費はかからなくても、労働報酬は払わなければいけないのが、無料でやってくれたと。

上原 上は茅葺でしょ。下だけはこれくらいの距離だけが瓦になっているわけですよ。瓦ははずせるけれども、茅は、二、三年経つと、ポロポロになります。新しく今度は、那覇の近くで、あるいは、ヤンバルで刈って、茅を持ってこないといけないでしょ。その仕事は私たちはできないし、山城善光も意地を張ってもできっこないから。これをすべて喜如嘉の青年たちがやってくれた。で、家を作るのは、彼ら専門だから。（注・山城善光は）私に「いつ建てるよ」って言うから、「そうか」って「じゃあ、建てなさいよ」って言って、何日も経っていないのに建ったのだから。トラック何台だったかしら、大きな軍用トラック、あの軍作業の「A・J」のトラックも入っていたんでしょ。どうだったか。

それで、日曜・休日を利用したんでしょ。いっぺんにドオツと持ってきて、そして、彼らがいろいろ手配して建てた。一日か二日かで建てたと思うんですよ。山城善光が「初泊まりしようや」って言ったのは。それは、行ったのは、私は石川から夕方行ったんだと思うんですよ。ほいで、こんなところに家が突然、建つて。その他に、人家らしいものは、なんにもないところで、その夕方、二人で何を食べたのか、ふと、思い出せないんだけど、ちょっと、どっからか、貰ってきて、あのナベで、素敵なものをおね（笑） 私の知っている大城鎌吉さんも、その友人の奥の親父さんの家の、そこから遠いからね、壺屋に泊まって、泊り込みでね。おそらく、何か貰いに行っていたはずだよ。ということは、お腹空かして、行ったんだらうと思います。どっかで、誰かが、あつ、そつから、そつだ。宮里栄輝さんの家近いから、近いと言つても、何十分歩かないとね。どれくらいでしょう？ そこ行って、山城が、「事務所建設終わり」って報告に行くので、それで、連れて行ったのかもしれないな。それで、そこへ行けば、ご馳走になった。眞板 仲宗根源和さんは、何かお祝いか、何か持ってきてくれたのかつたんですか？

上原 仲宗根はね、そのとき、彼も何かお酒、まだその頃は、われわれの委員長だからね。五〇年代になってから、知事選挙。誰を候補者にするかということで、もう、真正面から、その話で、喧嘩をするわけだから。しかし、私たちは、仲宗根を立てると。負けてもいいから。それが入れられなかったら、私は民主同盟を辞めますよ、と。やったんですよ。

眞板 候補にしよう、と言いつつ出るのは、いつごろになるのですか。上原 四九年の七、八月ごろからですな。本格的な知事選挙の運動をするのは。演説会をやるのではありません。いわゆる

眞板 それは、公選要求の演説会ではないですか？

上原 えっ？

眞板 公選要求の演説会ではないですか？

上原 そうですね。その演説会です。公選要求、そうですね。

眞板 署名とか集められますよ。

上原 署名とかはそのとき。そのときはまだ、活動の拠点は石川ですよ。そのあと、四九年の五月、六月頃っていうことになる……誰を知事に立てるっていうことは、誰も名乗りを上げていないですよ。

眞板 確か、四九年の八月くらいに、近い将来に知事選挙をやるとか、公選するみたいな話が、軍政府の方から流れて来るんだと思っただよ。

上原 『沖繩年鑑』の付属年表を見ながら）四六年に（注・沖繩）タイムスが発刊していますね。だから、そのときにタイムスの編集長か。上地一史。一史が、そのとき、編集長ですよ、きつとね。意外とよく会っておりましたからね。那覇の事務所の場合も、彼に一声かけて、そして、何かに載ったかも知れないな。

〔沖繩年鑑〕の付属年表を指さしながら）知事の場合は、知事の選挙運動は、やっぱり、五〇年代に入らないと、ないでしょう。

※沖繩タイムスは一九四八年七月に創刊。

眞板 実際はそうです。六月以降です。

上原 まだ、名乗りを上げてないみたいだから、四九年のやつぱり、……具体的な選挙となると、五〇年だ。

眞板 四九年の十二月の三十日に、各政党が集まって、シートツ長官に対して、公選について、陳情するんですよ。それで、その回答が、五〇年の五月くらいに出る、公選に向けて動き出すっていう。

上原 あ、なるほどね。

※民主同盟の本部事務所について、『荒野の火』（五十一回）には、四九年十二月十五日に、中央ホテルで第三回中央委員会が開催され、その中で、本部暫定事務所について討議された。その結果、山城の提案で、社屋は山城が寄贈。五〇年五月十日には、那覇市安里で、事務所開設祝賀会が行われた。事務所名も民主会館との記載がある。

## ■党内における仲宗根源和の位置づけ

**眞板** お話伺っていると、仲宗根源和さんが、意外と登場してこないで、党の方針とかもむしろ、山城善光さんを中心に行われているようですが。

**上原** 結局、いわゆる「（注・沖繩建設）懇談会」がありますね。懇談会の火をつけたのは、やっぱり、山城善光さんですよ。その準備をしたのも、山城善光。そして、それに協力したのは、桑江朝幸であり、平良助次郎であり、私でした。で、年齢的に言うくと、桑江朝幸さんは私よりか八つ上でした。それから、山城善光さんは、「俺はおまえよりか、ひと回り兄貴だ」って、ときどき、言っていたの。

それから、横道にそれるけど、……仲宗根源和と大宜味朝徳は、きつと、二つ、三つの差しかないはずですよ。仲宗根が二つ、三つ上だ。それで、思い出したのが、徳田球一と仲宗根源和は一つ違いか。あの連中はだいたい、その時代の……だけれども、こと戦後の沖繩問題で、仲宗根源和が、又吉康和を名指しでね、民政府を攻撃すると、志喜屋孝信も。そして、アメリカのそれぞれの担当司令官も名指しでもって、批判したっていうのは、やはり、私たちのあのときの感覚として、仲宗根、やっぱり、日本共産党の初期のね、青年期のね、あの赤い血が、もう一回彼の中に流れ出したんだなあと、期待したんです。私たちのそのね、

憧れの人だといって悔しがった人もおりますけれども。

確か、彼は、「大日本の天皇制度に反対しない」と転向表明をしたので、昭和天皇の即位大典礼ですか？ によって、恩赦されて、沖繩に帰ってきている。そのときに、もう、社会主義運動やりませんと言って、地元で実業家や県議員になっている。その時代の日本共産党の有名な幹部や大学の先生方も含めて、九〇%以上の人が、天皇制を認めますと言ってね。転向しているですからね。そういうことで、私たちは、この時代の流れをあれこれ斟酌しながら、仲宗根源和の敗戦直後の勇気ある行動を高く評価したのだ。彼は民政府と軍政府を批判することについては、非常に勇敢に理路整然と、しかも、民政府の社会部長として、公然とやっていたけれども、いざ、大衆が組織的に動き出すということになると、彼は自分の古傷を回顧し、むしろその痛みを耐えかねたんでしょうか。それをまたそういうような、仲宗根のその痛みを理解してあげての批判と同情双方の見方をしている、沖繩の同年配の連中がいるわけなんです。よ。「なあんだ、かんだか勇ましいことを言っているけれども」って言うのをわれわれは、知っています。当然、本人の耳にも入っていたでしょうね。

それよりもむしろ、山城善光が言っていた「いのししみたいに（笑）自分の考えも、自分の気持ちをぶつけて行け」というその彼のその素直さと、情熱というか、それを彼は東京でも、沖繩人の仲間でも認められていたわけですよ。だから、東京で沖繩人同盟を、連盟を作るときに、その面において、ある意味で彼は決定的な力になったわけですから。彼が帰って来ると。沖繩でどうやら、彼は動きそうだということについての期待が年配者の中にはあったのだ。

山城が、私を桃原茂太のところに連れて行ったんだ。そのとき、話し合いの途中で、桃原は「善光！ おまえたちがやらなきゃ、誰がやるんだ！」って大きな声でね。山城も興奮して、「よし

っ！先輩やりましょう！」ってね。私を指してこういう若い人もいるのだから。

佐道 そうすると、具体的な政治運動をするときのリーダーとしては、山城善光さんと、仲宗根さんは旗頭というか、シンボルというか、そういう形ですか？

上原 そう言われ方でいいでしょうね。ただし、それぞれの組織には、シンボリックな存在はなきやいけない、実際に組織のその活動主体における人間なんですけれども、民主同盟はそうだけれども、人民党の場合は瀬長亀次郎。だけど、瀬長亀次郎では小さいので、彼は浦崎康華を担ぎ出して委員長とした。だが、実際には亀さん自身が主体でやっていた。で、彼は、又吉康和とのつながりの面では、民政府も軍も、非常に信頼関係があった。そこで、彼は「アメリカ軍は解放軍であります」なんて言うとか、アメリカ軍も悪い気持ちはしないですよな（笑）

そういうことで、結局、そうなるってことかというと、じゃあ、一番最初の又吉康和の動きってというのは、軍政府の指示のもとで、そして、沖繩における自治なんっていうものは、時期尚早であるということ公言としてたんだからね。それを今度は、又吉康和としては、やっぱり、昔の「要注意人物」・仲宗根が頭を上げてくるというところ、ややこしくなるぞという心配はありますからね。民政府の一番最初の沖繩議会議員に任命したときに、ほとんどが、元県議会議員をやっていたとか、あるいは一定の政治活動を戦前にやっていた人か、または名声の高い人。教育家で元学校の校長とか、それなりの影響力があった人たちなんです。しかし、一部人材が見当たらず、欠員が何名だったかな？二名か？三名か？そろわないんですね。それで、又吉康和が、自分に近い瀬長亀次郎を推薦するわけですね。すると、反対者は多いのに又吉康和が推薦したというので、そのまま素通りで議員になった。そういうことは公然の秘密でした。このような独善的な行為に対して、仲

宗根が正面から反対していますね。それだから、又吉康和は仲宗根を嫌っていたんですね。民政府と軍政府批判を堂々と鹵切れ良くやつつける。そして、いずれは日本政府批判へと展開し、いずれは沖繩代表も、国際平和会議と講和会議にも参加しよう。大義名分は、はっきりさせようなんていうことだから。民主同盟の最盛期には、民政府の又吉だけでなく、軍政府の担当者も少し困ったんだと思うよ。やっぱり、大局から見た場合、いかに山城善光が、勇ましいことを言っても、いざ、国際舞台に立つということになると、やっぱり、仲宗根源和だね、そういう面では。看板としては最高だということなんだね。

佐道 仲宗根さんを看板にするっていうことについては、そして、あまり異論はもうないということになるわけですね。

上原 ない。彼本人の意見も最初、われわれは考え、段階的に行くことにして、「じゃあ、委員長代理にするか？」。そして、みんな「異議なし！仲宗根源和！」。だけれども、彼ら、「いや、待てよ。立場が、いろいろありましたからね」ということで、委員長としての資格を自分じゃ認めたくないという発言をしたことがあります。それで、じゃあどうするかってなったら、委員長は空席のまま、「私（注・仲宗根源和）は事務局長という形ですら、引き受けてもよろしい」とこういうことを言ったんだ。最初の人事問題でね。それで、先ほど、申し上げたような段取りで、われわれは、やっぱり仲宗根を看板として、大事な看板は、元日本共産党の幹部役員で、その伝統と国際性を堅持している人物を、沖繩におけるその民主同盟の委員長、仲宗根源和ということになると、これは沖繩における政治活動も優位になる。そうすれば、日本国内に対しても、世界に対しても、かつての日本共産党のね（笑） 仲宗根源和ということになると、良いんじゃないかということだった。

眞板 というところ、民主同盟の委員長に、そのあと、仲宗根源和さ

んはおなりになりますよね。ということとは、本人が、「じゃあ、そろそろ委員長でいいか」となった時点から、委員長になったんですか？

上原 本人が、その前にわれわれが、先ほど言った、大城善英は、南洋においていろいろと政治運動した人物なので、その人を差し当たり、彼を事務局長代理という形で、ということを決めたと思うんだ。そうしないと今度は、仲宗根を委員長に担ぎ上げられないから。そういう段取りをいろいろやりながら、そのなかで、人民党も出来てきて、人民党の委員長は浦崎康華と。そして、その後、大宜味さんが社会党を作ると。そうすると、委員長がいないじゃ、困るじゃないかと。民主同盟、人民党、社会党の三党会議を開く段階となつて、委員長がいないじゃダメだよということになつて、そういうことから、われわれは、だんだんとそういう仲宗根さんをね。ご謙遜をね、少しずつ崩しだしていく（笑）という作戦が功を奏していくんだ。彼はやつぱり、それまでの彼は、石川における沖繩の青年のために、開催した民主主義講座に講演会をやる。とうとうと、マルクスやエンゲルス、レーニンを名指して、共産主義理論に論及し、青年たちから、熱烈な歓迎をされた。多くの若者は、「ああ、やつぱり、凄い。彼こそ、われわれの看板として、われわれの旗として、彼を掲げる必要があるんだ」ということを。特に、山城善光と私の間ではそれを。それで、彼は、やつと、「委員長でいいのかわか？」と彼は言うからね、「それでいいんだ。俺らは最初からそのつもりで、覚悟していたのです」ということで、全体一致で推した。

## ■ 国頭村議時代

眞板 次に、国頭村議時代のお話をちょっと伺えたらと思います

上原 どうぞ。

眞板 四八年二月の選挙で、無投票当選だつたと思います。

上原 これは違法だからね。もし、憲法があれば、いわゆる憲法違反ですかね（笑）選挙のあることをね、私は知っていたが、当時は、民主同盟の活動で、一服もできないほど、多忙な時代だつたから、選挙運動は不可能だつた。それが、なぜ、村会議員候補かという、①に、敗戦後、私が帰ってしばらくすると、豚や家畜の部落内、屋敷内飼育闘争で、郷里に貢献したこと。②に、青年団組織の発展に貢献したこと。③に、奥区の区長、すなわち、部落の行政面の処理する人は、昔から、区長つて言つたんですね。その区長つていうのがおられるけれども、区長つていうのは、実際の事務的な面はほとんどやらない。お名前だけつていうか、ずうつと代々ですよ。その下に区の書記というのがあります。ちよつと、才能があつて、部落民をまとめたり、代議委員会を開いたり、その具体的な事務をいろいろやつたりする。戦前も戦時中もずうつと区長任命であつたんですね。それが、ずうつと戦後、空席になつていたので、私にそれをやらせようということを描画したのはね、奥でお茶園などを経営していた、「奥茶」というのを有名にして、何か農林大臣とか、から褒美をもらったらしいんですね。宮城……宮城紙、箱を作るところ。

眞板 ちよつと調べましたけれど、「宮城紙工」という会社です。

上原 宮城紙工！ それを作つた人。その人が、その人ともう一人、上原直帯つて言つてね。私の分家の次男。その先輩たちが、私の家畜飼育の問題についても、非常に共鳴してだね。彼らは私を十代の子どものころしか知らないからね。このものを何をしでかすか分からないから、冷や冷やしてたと思うけど。豚も飼えない、ヤギも飼えない、牛も飼えない、畑仕事にしてもどうするんだと。肥料がない。沖繩の土は、やせておりますからね。そういうことで、逆に私をけしかけたりしてね。で、私をそのためには、奥の

部落で若い青年会の組織化を、もうそのときは始めていますから。私を中心になってやれば、どんなひねくれもんの青年だって、言うことを聞くと分かると、先輩たちには安心感が、広がったんだらうね。

それで、彼らは私を奥区の書記ということに決めた。そういうことになってくると、村役場は行ったり来たり自由になる。したがって、私が便利だから。別に急いで、急いで歩かないで、ゆっくり歩いて。私の健康状態を考えて、ゆっくり歩いて、辺土名まで行って、辺土名で仕事が終わったら、宜真名へ寄ったり、辺土名へ寄ったりしてね。若い人たちと話し合いをしている。で、夕方暮れて帰ってくると。こういうことができたんで、私自身としてもまた、奥の仕事をしながら、この国頭村の家畜飼育の問題についても、青年運動もできるような、こういうことになって、先輩たちの要求をこつから喜んで引き受けました。非常に便利なお役だと思っているからね。こういう公に与えられた好条件を存分に、利用したんですよ。

だけれども、これも長く続かないうちに、その沖縄の全島政治運動が始まって、運動が急進したので、国頭にもなかなか帰れないの。そういう状態になりますね。そのときに、おそらく、忘れましたが、奥ではすでに、村会議員として二人、そこから出ていた。一人はね、玉城（注・玉城仲次郎）。私と近いところに住んでいるけれど。その方は、海軍の何か下士官だったのかな。その人はいろいろと、前に話が出た、奥から与論島への郵便船の船頭さんの弟です。みんなから信頼されていた、一人は彼を立てる。もう一人を誰か候補に立てるといふふうになった。「上原信夫を立てたら、どうか」って言ったり、「ヤンバルの部落内や屋敷内での家畜飼育活動を、あいつがやっているんだから、やっぱり村会ぐらいいまで出して、頑張ってもらおうか」という、いろいろと、私に話があったんですよ。そのころ、国頭村支部の同志た

ちが、石川に民主同盟の会合があつて、国頭村代表が五、六名ぐらいい来た。その時彼等が、「きみ、村会に出ることになってんだよ」って言うから、「出るって言うっても、一人で立候補できません」って言うたらね、「いやもう、そういうことでなしに、奥部落でははつきり決まったんだ」

佐道、眞板（笑）

上原 ということになったんだ。そして、村会議員だつて、決まったということ聞いたのは、そのころまだ、石川の石川ホテルだからね、石川ホテルで、私が山城善光にね、「村会議員はいくつからなるの？」と聞くと、「二十五ぐらいからじゃないか」。「俺はまだ、二年か三年早いですな」。「何のことだ」って言うからね。「国頭村で俺を村会議員にしたんだそうだ」「まだ早いよ」ってね。「どうしますか」って言ったらね、「みんながやれって言ったら、いいじゃないか」。二十いくつか、二十三歳だつたと思うんだ。「いいじゃないか。二十五歳と言えはいいじゃないか」。その翌日か、知らないけれども、山城善光が、彼も立候補して当選しているんだ。仲宗根源和さんに「上原は村会議員になるんだそうですよ」と言つたんだ。「村会議員？ 誰が？」「信夫です」って言うからね。「あ、そうかそうか。これもひとつの民主主義である」と。

佐道、眞板（笑）

上原 それで、決まりになつてね。家の兄貴がね、その年、二十六か二十七歳くらいだから、彼は、東京の大学から、関東軍の機械化部隊に徴兵されて、隊長か何か任命されたが、敗戦が近くなつてから、今度は本土防衛だつて言うんで、所属の戦車部隊が九州に移動して来たんですね。お陰で生き残つて敗戦後は、九州で復員して、そのままいたんだが、当時どこにいるのか分かりませんから、「それじゃあ、兄貴のお年を拝借ということでもいいんじゃないですか」ってことに。

佐道 拝借ですか(笑)

上原 (笑) 「それでいいよ。もし兄貴が帰ってきたら、兄貴がやればいい」、という話になってね。そしたら、仲宗根源和が「キミの村議当選は、新しい民主主義の勝利だよ、沖繩の民主主義はこれで行こうや」ってね。仲宗根源和はね、「われわれが、共和国を作ったら、十八歳で、誰でも選挙権を与えるのだ。われわれは琉球共和国建国の当初からやる」って大きな声で言ったんだ。「沖繩民主主義の始まりだ」ってね。

さて、戦後初の村議会となりました。しかし、命からがらやると生き残った人たちの前には、村財政復興に役立てるような物は皆無で、極めて大変な難題でした。なにしろ、貨幣流通もない原始的な物々交換を主体とする時代でしたから、村議会で一日中話し合っても名案は出てこないのは、無理もないことでした。当時の村民の復旧事業は、やっと雨露しのぐことのできる仮小屋が大部分。しかし、人民大衆の知恵は、想像以上に素晴らしいものがありました。彼らは使えるものは何でも大事に活用して、復旧に生かして行った。たとえば、焼け残った瓦葺きの屋根瓦を十数軒分集めてきて、立派な一軒家を建てたりね。生き残った人たちが、郷里に帰ってくるなり、親戚、友人が組んで、自分たちで順番を決めて復旧に精を出していました。自分たちで手直しをしながらだんだんと。とにかく、雨の漏らない我が家に作り直したんですよ。みんなの協力で。特に沖繩では昔からのユイマールがありましたからね。ユイマールで、作ったその家に対して、課税して良いのか、材料も労力も、持ち寄って、やっとの思いで、立派に作ったのに、もし、立派な家屋に課税するとなると、まず家を作った人は損だとなる。なぜなら、税金の対象になるから。建てられない人たちは、じゃあ、どうするんだといういろんな議論があったりして、まとまらない。それで、結局、根本問題は、いま村行政でどれだけの経費が必要なんだと。まず、総予算案を出し、そ

れを叩き台にして、考えようとなった。

そのころから、民政府は、村議会議員費の負担の問題が出ていたのかな？ そのことは忘れてるな。税金問題で、われわれはおろおろしていたから、そのあたりの細かいことは忘れちゃいけない。もし、議員給与などの項目があったら、全議員無給と決定されていたと思うんだ。税金問題、財政、村復興計画委員などの担当者一人は、私だった。

さて、問題は計算したら、住民が腹いっぱいめし食えないんだからね、腹いっぱいめしが食えるようになるのには、村の財政は村独自でまかなえるかどうか、という計算は難しかったですね。一応、まあ、一切無から出発するのだから、なにもかもゼロを出発点とすることになりました。村財政も一番最低のやり方だが、緊急難措置を取ろうと決め、いずれはね、世の中も行政も落ち着いて来てからだ。民政府側の体制確立にも時間がかかるだろうから、当面、本村、独自の現状から出発点することにして、現状をどう切り抜けるか、という一点に一所懸命理解を求めるということになりました。

当時、村職員の給与が最大の問題であった。まず、この難題の解決がカギであった。では、その人たちは、めしが食えるかどうか？ その人たちの給与は、財政のなから、どの程度出せばいいのかという個人の懐具合をのぞいて回るようなね。

たとえば、実際問題として、職員の応急措置としては役場の仕事を終え、帰宅したあと、業余で自分の畑を耕すとか、イモを植えるとか、ということ、食うにはそんなに困らないなら、その方々に対する給与は、当分(民政府、村行政が安定して機能するまで)安くしてもらえないかと、交渉してもらおうとかね。その代わり、村財政がちゃんとした正常な機能が成り立つまで、お貸しください。まず役場の職員の説得から、役場職員が先頭に立つてね。そういうことがあって、赤字を出さないとやれるという見



通しを立てたあと、今度は税金問題に移った。先ほど言ったね、立派な良い家を作った人が、損をする。でもそれは、國場組と大城組と関係のある親戚が多かったからね。軍作業の車が使えらから、家を建てるのは早いわけなんです。だから、結局、彼らに多くの負担をさせることにしました。

そのころだったと思うのですが、國頭村会議員の連中をね、國場幸太郎さんの招待で、那覇視察に招いてくれました。幸太郎さんの要望は、那覇の復興ぶりを見せて、國頭も元氣を出してもらおうつもりだったようです。國頭村村会議員の那覇視察団を、行きも帰りも、軍用トラックで、団員は、村長はじめ、役場の主な職員も含めてね、那覇に行った。泊まるころはね、港湾、那覇港灣の港湾作業員の何々の宿舎。そこで、ふた晩泊めてもらって、ひと晩はここで、國場さんが、ご馳走を作って、歓待してくれたんです。あんとときの歓待、ご馳走ってというのは、アメリカの……どういふのだったか忘れてしまったが、とにかくヤンバルの配給品より上等だったと思います。そのとき私は、國場幸太郎という人の礼儀正しく正直な人だということをよく分かって、ずっと、お付き合いをしたんだけど。その当時、沖繩では港湾労働者何とかのその、港湾何とか村というがあつて。

眞板 みなと村ですね。

上原 その村長さんなんです。その國場村長さんがね、私たちの前に、タバコ盆を出して、大きなヤカンにお茶を入れ、みなに配っているんです。ちゃんと、家にいるみたいでねえ。國場さんは挨拶で、「私もここで沖繩復興のために、頑張りますよ。是非とも、みなさま方も、國頭の件はよろしくお願いします」って、やった。

幸太郎さんのお父さん、おじいさんをね、私は子どものとき、会っているんだね。非常に元氣の良いおじいさんだった。

佐道、眞板 (笑)

上原 とにかく國場幸太郎さんは人格者ですね。そういう子ども時代や敗戦直後の数々の思い出があります。

だから、そういう関係もあったので、私が中国から帰ってから、たとえば、中国のね、石油工業部の代表団が、日本に来るときは、たまたま、中国のね、石油工業部の代表団が、日本に来るときは、前もって幸太郎さんに相談して沖繩に連れて行った。幸太郎さんが、お元氣な間にですね。その都度、彼は大変喜んだ。私はその他に何組かの中国代表団を沖繩まで連れて行った。沖繩の経済界、政界は、國場が声をかけると、みな集まってる。日中友好を盛り上げてくたさった。立派な方でした。

國場幸太郎の兄弟っていうのは、六、七人おるでしょ。そのうち何番目の方が、ブラジルに行っていたんですね。私のおじさんたちも五人くらいブラジルに移民されているので、沖繩出身の移民では、広く知られていたように、國場さんの弟さんたちとも親しくしていたようです。おじの上原直勝は、終戦当時の日本人会長もしていました。日本は戦争に負けた「負け組」の指導者だったので、ひどい目に遭わされたようです。

とにかく、戦後の國頭村の復興事業には國場さんの力をいろいろとお借りしました。これが、村会議員の(笑) 思い出です。

眞板 議員として、議員活動をしていたのは、いつぐらいまで、なさっていたんですか。

上原 議員は何年か？ 四八年か？

眞板 四八年二月に当選です。

上原 四八年ね。議員活動、四八年になるんだな。四九年の五月、六月、八月？ おそらく、村議会の会議は、月に一回か二回だったんだらうか。村議会後に議会報告を兼ねて、私は時局講演会等で國頭村を必ず回っていました。月一回ぐらい。しかし、議会報告や時局講演会という聞きえが良いが、実はそのたびごとに、みんな集まってもらえる会場ということになると、仮設の小学校

しかありませんでした。私は役場で議会が終わった帰り、事前に日程を確約しておいて、何日どこに行きますよということを、各区の担当者に連絡を取っておいて、月そうですね、一回以上講演会をやった。

佐道 講演会？

上原 講演会。それが意外と、そうですね、当時、いわゆる沖縄全体の政治状況を知っているというのは、村長さんでもなかなか難しい。知花高直さん（元県会議長で、民政府委員をやっていた）と、私のいる間に、その村長になったのは、新里？

眞板 平良なんとかさんじゃなかったですか？

上原 彼は学校の校長もやっている。その後、どっかの教育長もやったことのある人だった。もう一人は戦前の警察出身の人。二人はいとこ同士なんだけれども。元校長先生の方が村長に当選した。忘れちゃったね。

佐道 それは村議として、村会議員として、時局講演をなさるわけですか？

上原 いや。ただし、村会議員とは別に、村会議員の名では、やる必要はないわけです。全村民は民主同盟の「上原！」ということで迎えてくれましたから。民主同盟が出来てからの講演会は、当然、民主同盟の青年部長としてやっているわけです。それで、村民大衆は非常に喜んで聞いてくれてね。だいたい講演会っていうのは、二時間か、長くなっても三時間っていうのは稀だろうけれども、連続三時間以上ですよ（笑）。最後は討論会か座談会で盛り上がりましたね。

講演会の主な内容は、当時、われわれがやっている軍政府・民政府に対する政治・経済政策批判の具体的な問題のほかに、沖縄の将来の姿はどうあるべきかという独立問題等については、もう何回話しても話し終わらない。その次は親たちの最大の関心事は、子どもの教育問題。父兄からは上からは勉強させると、いろいろ

こう言うんだけど、子どもたちの勉強に必要な学用品の紙はない、鉛筆はない、どうするんですかと。私が、沖縄県公文書館から手に入れた警察の速記録によると、三党合同演説会における私の分の速記は五十行くらいなのに、三枚目の空白部分に、「以上三〇分」と明記し、あたかも三〇分間講演した事になっていきます。あんなに、（笑）非常に読みにくいと思うんだけど、私が講演したのをまともに速記していないということが分かります。分かるでしょ。アメリカは、沖縄の教育問題について、たまたまその頃、アメリカ軍政府の教育担当部長がね、世界史の中で、被占領国民からね、教育について、援助要求されたという前例はないんだ。自分たちの子弟の教育は自分たちでやるべきだと。ああだこうだってね、沖縄人民の教育への援助要求を頭から否定する講演をしたわけなんです。私はそれを捕まえてね、ある講演会に、こういう状態に、沖縄を陥れたのはいったい誰の責任ですか。日本帝国とアメリカ帝国主義が覇権を相争って、その争奪戦で、日本帝国はすでに負けてしまったんだから、当然、沖縄を占領したアメリカ軍が、沖縄教育の責任をとるべきであると。私は激しく反撃したのです。で、当時の沖縄はどのような時代だったのか、沖縄県公文書館にあった、私の演舌原稿の意味するところは、何だろうかと、と一所懸命考えた結果、だいたい私の心の中で、そのとき、考えていたのは、きつとアメリカは沖縄をこんなひどい目に遭わせておいて、全島をこんな焼け野原にしておいて、その責任を取るところか、当然、国際的にアメリカが負わなければならない義務を放棄して、しかも外部と自由に往来も交易も不可能な沖縄人民にその責任をなすりつける侵略者の横暴は絶対許されないと抗議したのだと思う。廃墟から、やっとこさ、植物が芽を出した。そして、生き残ったその植物が、自分の生命の全力を尽くして、維持しながら時がいたれば、花を咲かそうと努力をしている様を想像して、その草木が開花するよう水をやらなきゃいけ

い、肥料をやらなきゃいけない。それに吸う空気も良くしてやらなきゃいけない等というたとえ話を通じて、生き残った沖繩人がいま、自分たちの子孫のために、立ち上がって、困難に立ち向かおうとするときに、アメリカ帝国主義者は、重ねて沖繩人がいま自分たちの子どもを育てようという、権利と義務を、父母の愛情を叩き潰すつもりなのか、って、大きな啖呵を切った覚えがありますよ。

当時、父兄からすると、子供たちの教育問題は、切実なものでしたからね。沖繩の父兄たちには、教育問題は、沖繩復興の最大課題の一つだったと思う。

佐道 そういろいろんな、みなさんが、これからどうなるんだろうかと、思っておられたことについて、主に講演をして、回っておられたと。

上原 そして、彼らが、じゃあ、それについてはどういう要求があるかと聞くと。ノートや紙を下さい、教科書を下さい、それから、鉛筆下さい。夜、子どもが勉強したい、けれども、灯りがない。せめて、石油ランプ、カンテラくらい。灯油下さいと。で、そういう要求に対して、私個人が、解決できるのは限られていた。私の懐具合の許す範囲内で、闇市場で手に入るのを少し持ち帰るわけですよ。ただし、奥の分だけは。

佐道 講演を聞いておられる方々は、村会議員としての先生の話を聞くということではなくて、民主同盟の青年部長としての先生の話ということで、聞いておられたわけですか？

上原 そうだと思います。村会議員っていうのは、税金問題で部落を回るときくらいに肩書くらいのもですよ。もともと、私は、沖繩民主同盟を組織して、山城善光や仲宗根源和と一緒にあって、戦後沖繩を一日も早く平和で民主的な社会に復興しようとしてやっていたんだ。こういう位置づけをしているわけなんだ。私は一人の社会運動家として、政治活動家としての位置づけなんです。

佐道 そうすると、ちょっと、悪い言い方かもしれませんが、村会議員としての役割を少し使わせてもらって、いろいろ政治活動もしていた。そういうことになりますか？

上原 そうですね。必要によって両方うまく結合させて使った点もあったでしょうね。

佐道 両方で、やっていたと。

上原 あの時点で、水が足りないと米軍は騒いでいるわけですね。どっかで、ダムを作るんだという計画を進めている。彼らの軍用の、彼らの基地に必要なダムを建設する案がある、ということも、住民も漏れ聞いていた。もし、ここにダムを作ったら、われわれの田んぼはダメになるじゃないかと。田んぼをこれからやろうというのに水がなくなったら、われわれの水はどこから持ってくるのか、という意見もあった。そうすると、私は「反対しよう！ アメリカ軍のためのダムを造らせちゃいけない！」。この人たちが「おし、頑張る！」。「頼みますよ」(笑)。「もし、そうなたとき、あんた来て、指導してくれると助かります」。「一緒に戦いましょう」とこうね(笑)

そういうことから、村会議員としての役割は、そう特に何も果たしていないわけじゃないんだけれど。

佐道 主に税金とかそういうことをやっておられた。先生が講演で回られるのは、上原先生が行くという連絡は、村を通じていくと。

上原 なんてかかって言うのと、少なくとも私は、一週間に一回くらいは、辺土名まで帰れますからね。辺土名に帰ったときには、役場の連中に、もし、何日ごろになったら、私は帰ってくるから、辺土名から西回り、東回りでこう帰るから、奥に帰るから、辺土名から、安波に出るわけですよ。山道を。安波終わって、安田終わって、楚州まで行って、だいたいそのとき、ひと晩ずつ、回っていくわけですから。

佐道 交通手段は？

上原 歩いて。私の大事な二本足ですよ。それ以外、何もありませんよ。そして、そのことをちゃんと、役場にきて、安田から来た人たちに、安波から来た人たちに、日程表を作ったね。日程表を渡しておいて、そうすると、彼ら、自分たちでちゃんと、私の来ること待っているわけですよ（笑）。それで、安波に着いたら、まず安波の小中学校に行く、先生方が二、三人待っているわけですよ。「待っておりまして」。そうすると、今度はもう、生徒を走らせてだね、私がここにいると連絡してくれと。何回も指定宿泊所みたいになっている家へ行つて、夕飯を早めにご馳走になって、すぐまた学校へ行つて、それをやる。ダツと集まっていますからね。あの茅葺の学校、腰掛なんかも足りないくらい。だいたい、そのたびごとに、満杯でした。非常に私の講演は、評判良かったですよ。

佐道 思いもかけず、なられた村会議員の身分は、先生にとつて、結構、役にも立ったということになりますか？

上原 うん。だけれども、その前にもうすでに私は、国頭の各方面を回り演舌していますから。だから、そういうえば、石川で民主同盟の何か会議のときには、意外と国頭村出身は多数参加しているんですよ。それから、国頭村で民主同盟の講演、演説会を持つと、おそらく沖繩本島でも一番数の多い集まりだったという記憶がありますね。それは、私の下働きの成果でしょうね。私は村会議員っていうものは、自分で好き好んでなったのではなく、たまに、そういう機会を与えられた。それを最大限利用したというのが……

佐道 そういう活動が、先ほどの確認ですけども、四九年の六、七月、九月くらいまで、だいたい続いていたと、ということですね。

上原 ほとんど、四六年にはもうすでに帰っていますから、各部落を回って、家畜の問題どうなっているか、調べてますから。そ

のときは、顔見知りはいないから、部落の区長に会って、そして、区長に会って話をすると、区長が、「まだめしを食べてないか。めしを食べてけ」って、一人二人とみんな集まって話をした。そこで、相談を受けると。そうすると、家畜をどうするのかとか、まず、家畜のタネを持つてきて。こういうことを聞いて、やはり、この農民たちの切実な要求。自分たちで自立したい、これはもう当然ですね。人間として。これをどうして、行政面が手伝わぬのか。今の行政面で、村として、何ができるんだらうと、私は、村長のところへ行つて話すと、一緒になって俺とこうこう（笑）興奮して話したもんですよ。

眞板 一方で、議場内での、議会の中でのお仕事っていうのは、どういうことをなさっていたんですか。

上原 国頭村の村会議員をやりますね。私は、議会の具体的な日常業務に関わらないでいました。財政部門の問題に、取り組んで、民政府から村に対して、税金を上から押しつけてくるのはね返すかということ（笑）。そういう問題と、それから、税金でまかなわなきゃいけない人たちの給料をいかに減らすか、その説得役を私が押しつけられたの。

佐道 大変な役ですね。

上原 えっ？

佐道 大変な役ですよ。他の人が引き受けたくないような役ですよ（笑）

上原 そういうのを私は押しつけられた。そして、だいたい、家畜の問題とか、肥料の問題とかになつてくると、今度は私よりか、ずうっと豊富な専門知識のある年配者がいっぱいいるわけですね。専門の人たちがいるわけで、そういう人たちのいわゆる、なんか、軍・民政府の上とケンカになりそうな問題とか、そういう問題に対しては、私を使わないと損だとばかりに、よく引張られていってやるとかね。こういうことが、ま、思い出すと、村

会議員としての活動は、先ほど言ったように、むしろ私のそういう活動の方が、重点で（笑）付け足してみたいなものだったんだろうな。

佐道 まさに、そういう時期でものね。もう、政治運動が活発になっていくというか、いろいろ発展していく時期ですからね。

眞板 でも、収入面では安定したんじゃないですか。

上原 えっ？

眞板 収入は安定したんじゃないですか。

上原 十円か、もらったかしら。それもね、おそらく、他人の給料をですよ、減らして、「お願いします。三度のおまんまが食べられるようになったから、我慢しましょうや」と言っていたくらいだから、私はそのころ、手当て貰っていなかったかもしれない。いや、貰っていないはずですよ。村は赤字財政だから

その後、部落の区長がだね、私が行った部落でもって、腹いっぱいめしを食わせてくれて、寝る場所、家を指定して泊まらせてくれた。

佐道 いまは、たとえば、村会議員とかいうと、たとえば、それだけでも食べていける。その給料で食べていける人ということかもしれません。その当時は、そんなこと、全然、ないんで？

上原 私の場合、全然、考えてなかったですね。だいたい、考えてみると、そうですね、それぞれの部落の中で、もともと比較的裕福な生活をしている人たちが、村会議員の主だった人たちでしたな。だから、もし、村議の手当てを目当てにしていたようなものは、あのと、もし、村議の手当てを半分にしよとか、三分の一にしよとか、と言ったはずだね。それも、覚えがないからね。学校の先生にそう言った覚えはある。役場の収入役にも、「申し訳ないが、あなたの給与と三分の一くらいにしましょうね」というようなことを言った覚えがあるような気がするからね。

佐道 三分の一に減らされたら、困りますけどね（笑）

眞板 村議になってからも、背中にPWの服を着ていたんですか。

上原 結局、着ているのは、みんなアメリカの払い下げですよ。PWはもう書いていないかもしれない。あの写真に、あれは後ろに書いてあったかな？ 書いてなかったかな？ あれ結構、いい格好しているでしょ。

眞板 上原さん、軍服みたいな、払い下げの服じゃなかったですか。他の方はスーツ着ていらつしやる方もいましたけど。

上原 そうかな？ 覚えがないな。いやー、仲宗根源和と桑江朝幸だけが、よれよれしているけど背広を着ているよな。私は上から下まで、ぜんぶ、軍服（笑）の払い下げだ。

## ■仲宗根源和との確執

眞板 あと、仲宗根源和さんについてなんですけれども、確か、山城善光さんの『荒野の火』の中でも、上原さんと源和さんが、関係が悪化していくひとつの原因として、仲宗根源和さんが、産主義とか共産党に対する批判を始めた。それに、対して信夫が憤慨していたというような下りが出てくるんですが、そういった流れの中で、仲宗根源和さんと考え方が明確に変わっていったというのはいったいどうなんでしょうか？

上原 彼の話をもう一回前に戻すと分かりやすいと思う。仲宗根源和が、山から下りて間もないころ。一九四五年の。三月に戦闘（注・沖繩戦）が始まっている？

眞板 そうです。三月の末です。

上原 四月になってから、山から、又吉康和と一緒に山から下ろされている。そして、二人一緒に羽地で捕虜として。その後間もなくしてから、捕虜収容所にいるときに、米軍の若い将校が、どのくらい若いかわからないが、尉官クラスだったと言う。

二名か三名ぐらいか、ま、三名か四名だったのか、突然、彼の前に表れてね、「キミは仲宗根源和か？」と聞くんだな。「そうです」って言ったら、「間違いないな」と。どうして私の名前が分かっているのだろうと考えたら、そのときの仲宗根の話によると、羽地の田井等捕虜収容所の中にね、収容人員の経歴を書かせた名簿があったんだそうだ。どんな仕事をやっていたかなどなど。経歴といっても、簡単なものなんです。学校の先生であるとか、何々の職業とかね。(仲宗根源和は)米軍将校に人のいないところへ連れて行かれたから、「こいつら、俺を人のいないところに連れて行って、銃殺するんじゃないか」と、思ってた内心冷や冷やしたけれども、ついていったそうだ。そうしたらね、その顔がね、あれがすっかり変わって、親しく仲宗根源和に「キミ、徳田球一を知っているか？」って言うわけですね。「本人はよく知っていないけれども、私はこうして何年ごろからか、一切関係がないから。沖繩に帰ってきてから。全く、どうなっているかわからない」と。あまりに熱心に聞くので、つい乗せられて、「あるいは、日本のどこかの刑務所に入れられているけれども、北海道、それとも、東京都内か、あるいはその周辺か。——都内のね。調布に刑務所はあったですか？——その刑務所にいることが、戦前の風聞で分かったのだが、それ以降、どこに収容されているのが分からない」と応えると、米軍は「キミ、徳田球一がどこにいるか、調べられないか」「そんなこと言っても、あんたたちが、われわれをこんな不自由にしてだね、やってるんだから、調べられないよ」と言うよね。「これからまた会おう」ということで、別れた。そのときに、まだ戦闘が続いているのに、なぜ、彼らは徳田球一のことを気にするのか、ということ彼は彼なりに、考えた結果を私たちに話したわけです。あのとき、日本共産党の組織について、そして、なんとか安全に徳田球一を救い出そうという、手を打ちつつあるのかな。それで、彼は「勇気は出ました」とは言わ

なかったけどもね。アメリカ軍の中にも、共産党員がいたのだというので、彼は少し元気がついてきたんだな。

だから、それで、石川の小学校での講演会でね、彼は、誰が聞いてもおそらく青年仲宗根のときの話じゃないけれども、元はそれなりの運動をした人だと誰でも思ったんですよ。いま考えとね、山城も、仲宗根さんが急に変わるのではないかと、一時考えたこともあったことを語ったことがあった。

結局、アメリカは、その後の国際情勢の展開と共に、沖繩における米軍基地の戦略的位置づけの見解が、急変して、新たな冷戦状態へ対応する戦略への切り換えるんですな。出獄した徳田球一からの手紙で、日本、世界の体制について、党内事情についても一定の正確な情報を知らされていたので、当時、仲宗根はもっとも動揺し、悩んでいる時だったのではないかと、山城と語り合った思い出が浮かぶ。なにしろ、日本の終戦後の日本の共産党の中央委員会の八五%ぐらいが、仲宗根同様、元転向した人たちですからね(笑) 仲宗根も、沖繩において、転向の再転向は、可能であったかもしれない。私も那覇の監獄に行き、あのころ、われわれは、やっぱり、大人たちを変えるんだと、変えなきゃいけないという期待をね、夢見ていたから。そして、そういうことで、彼を信頼して、この人なら一緒にやれると思ったから。

私は彼に対して疑問をあれするようになったのは、例の『自由沖繩』事件ですけどね。大城女史はなにもあれ、民主同盟の最高責任者が、出てこなければ、山城、桑江の立場は大変困るといふ。私は大城女史の助言にしたがって、仲宗根に頼みに行つたのに、断つたんですよ。「なんだ、この野郎！」とか思いましたね。日ごろ言っているのと、ぜんぜん、違うじゃないかということ、私はその仲宗根源和に対する見方は、根底から揺るぎだした、はじまりです。そのとき、私は彼に向かって、「じゃあ、あんたが出られないのなら、私が出て行って、桑江と山城と一緒に、

俺は銃殺されるから、その責任は、あんた、もたなきやいけませんよ」と言ったことがあるんですけれども。そして、そのころなんです。何かちよつとしたすれ違いでね、ときどき、やつぱり、大先輩として、非常に、十分な敬語は使えなくても、それなりに、ちゃんと、仲宗根源和に対する態度はやはり、いわゆる先輩ですよ。だんだん、それが失われてきたのも、事実ですけれども。

だから、山城善光が、軍監獄を出てきたあと、ときどき、二人だけでその問題について話し合った。しかし、当時の沖縄の各方面にわたる政治・経済問題は一向に改善せず、たまたま税金問題だったんだろうか、それとも食料問題、配給の量の問題だったのか。その三党の協議会をやるんですね。そのころまでは、お互い補い合うような気を配っているように見えた、仲宗根と瀬長の両者の態度にも何らかの変化が起こりつつあったのかもしれない。なにしろ、民主同盟の内情も、仲宗根は党の死命を決するとき、たとえ、一時的にせよ逃亡したという後ろめたさがある。したがって、十分計算に入れて、仲宗根に対する態度もですね、それなりに変わってきたのだと思うんですよ。

そのころになると、私は脱出したあとだし、その後も数十年消息不明だったのだから、実際の状況はよく分からないけれども、これらの問題については、帰国後、山城善光とかいろいろ、二人じゃないけれども、議論した場面もありましたかね。残念ながら、問題の本質についての分析は、時間的に掘り下げられないで終わってしまいました。

何年か前かな？ 私は多忙な留学生問題が、少しヒマになったときに、ある会合がありました、友人に呼ばれて、そこへ行ったときに、瀬長亀次郎をよく知っている、一緒に活動していたという人がおりましたので、その方に、次ぎのことを尋ねてみました。「なぜ、仲宗根源和と亀次郎さんはね、私がいる間は、結構、仲良しでそれはひどくなかったですね。それが、仲宗根と瀬長亀次

郎二人は、本当に犬猿の仲になって、いがみ合って、公然と罵倒し合うことが演説会であったと言っただけでも、どうしてそういうふうになったのか、ご存じないですか」。彼は「知らない」って言う。その人は瀬長亀次郎と数年間一緒にやっていたそう。そして、私が、「仲宗根源和は自分がかつて、俺は党創立からの黨員で日本共産党の中央の方でね、それなりの活動をしたんだぞ」という自負心があつて、「なんだこの若造がって言う、それがあつたんですかね」。戦後の日本共産党の中央委員には、転向犯の参加者が多く、しかも、いまの党中央は、徳田球一の活動については、明らかに抹殺してしまふような、その状況を見てみると、そういう過去のそれに対する自分の誇りを傷つけられたとか、ということになると、人間というのは、ムキになる場合もあるんだろうかなということをおもうんだけどね。「あるかもしれないですね」ってその人言つたよ。そういうことをいま、私は日本に帰ってきて分かつたんだけれども。その人も、私と同じく、両者が講演会で、二人が面と向かつて罵倒し合っていたかは、実際に知らないらしい。もし、仲宗根と亀次郎がそのような利敵行為のことをやつたら、民主同盟の党の方針に違反しているのだから、私は噛み付いたはずですよ。その覚えがないですものね。

それまで、瀬長亀次郎と仲宗根の諍いらしい問題は、かねてから、仲宗根にはこういうことがあつたのは、事実です。

たとえば、講演会や演説会が、どこかでありませぬ。本部だろうと、那覇であろうと、あるいははずつと、国頭であろうと。瀬長亀次郎たちは、民政府幹部並みにジープで来るんですよ。琉球なんとかの社長だもんね。そして、もちろん、乗れないのもありますけどね。ほとんどは、瀬長亀次郎のジープに。それで、終わつたら、ジープで帰る。それに対して、仲宗根はじめ、私たち、民主同盟や社会党代表は、その場で宿泊して、次の会場へ移動するのが、大変だった。だが、「彼は又吉康和の代理人だから」あらゆ

る面で、特別の優遇を受けていた、ということ、仲宗根は、瀬長をアメリカの手先だと言わんばかりのことを言うこともあったけれども、「それはまあ、いいじゃないですか。役得つてあるじゃないですか。敵の力も可能なら利用すべし」。なんて、山城善光たちがね、笑っていた。

われわれは、もし、知事選挙が実施されたら、党の知事候補は当然、党首の仲宗根である。ということは、すでにかねてから、多数の暗黙の了承事項であったので党議で、「仲宗根立て！自分たちが火をつけた選挙に、その責任者が立たないということは、それでは通らないだろう。大義がないぞ」ということで、われわれが責めたときに、仲宗根は自分を嘲るように、「いや、俺は」とひとと言ったことを思い出すね。しかし、彼が不出馬を最後に決めたというときには、私はもう沖繩にいないからね。これは帰国して山城善光から聞いたのだが、仲宗根は、松岡政保を担ぎ出したそう。で、そのときには、私は、もう脱出していないので、その後のことは、まったく知らない。

私が沖繩滞在中、仲宗根が日本共産党を批判したり、徳田を否定するようなことは、ひと言も聞いたことはなかった。彼は、徳球は徳球の立場があると。そして、われわれはわれわれの立場があると。で、沖繩は独自の立場でもって、新沖繩をつくるべし！ということであつたな？ 彼が、徳球をくさしたことはなかったですね。私が離れたあともそうであつたことは山城も証言していますね。

佐道 先生が、沖繩を離れるまでの間で、仲宗根さんが反共産主義者であるということについては、認識はされていなかった？ 思われなかった？

上原 いや、例の『自由沖繩』問題で、やっぱり、単なる揺れているだけでなく、彼の本質が、結局、そういうもんだということが分かって、私は腹を立てた(笑)

佐道 仲宗根さんの政治的な考え方とかではなくて、いわゆるリーダーとしての仲宗根さん？

上原 そう、運動の初期段階では、最有力なリーダーとしての人望もありますし、若い人の前でだね、日本共産党の歴史を語り、自分がやったことも「俺がこうした」と、奥さんも大変な活動家だったんだそうですね。だから、そういうことを若い人の前で言つて、若い人たちの中には、この人はやっぱり日本共産党の幹部だったと。中央で働いた、中央委員になっただけの人であるわいということ話を聞いた人たちの大半はおそらく、そう思ったんですからね。そして、その話を私たちにね、「いや、仲宗根はやっぱり、あれほどの人物は」つて、委員長にすべきだということに誰からも異議なかったよ。われわれは彼を看板にすべきだということ、各地での座談会などでの報告に基づいて、われわれ若い人たちの中にも根強い人気があつたわけですからね。初期人民党の土地榮あたりや、それから波平(徳八)くんたちも、仲宗根に対して好意的であつたし、仲宗根をそういうふうはまだ、結論付けていなかったと思う。ただし、私はその『自由沖繩』の問題以降は、本当に彼と最後まで一緒にやる気はなくなりつつあった。だが、五〇年一月頃の党議で、最後にもし、選挙になった場合、誰を知事候補にするか、ということになったとき、民主同盟全員一致して仲宗根を推薦した。私もそれに対して「そうだ。当然さうあるべきなんだ」と、ものすごく、大きな声を張り上げて、彼を説得したんだよ。だけど、そのとき、彼は内心、松岡政保を担ぎ出すことを一人で決めていたのだ。松岡、平良、あと他に？

眞板 瀬長亀次郎です。

上原 瀬長亀次郎！ この三名のうち、どなたも意中の人ではなかった。

少なくとも最後の会合まで、何月だったかな？ 五〇年の正月が終わつて、比較的早い時期あたりで、民主同盟の中央委員会総



会があつて、その会合に私は出ているはずですよ。ただ、山城善光の記録には、何月って書いてあつたか？ 三月か？ 四月とかに？ 民主同盟が名護でね、照屋規太郎と喜納政業と私と、あと何名かが集まつて、民主同盟の解散を宣言したということなんです。でも、そこに私は、出た覚えがないんだ。もう、その頃、私は、沖繩にいなかったはずだと思うんだけどね。だから、おそらく山城善光の錯覚だろうと思うんですよ。いつも彼のそばに、私がいるものだと思つているから。彼と私が、民主同盟を解散することも止むを得ないだろうと語り合い、「こういう状態の下では、民主同盟として、知事選を戦えなくなるだろう」と。具体的な情勢判断の下に、しかも私の公然活動が小さな沖繩では最後の限界であることに二人の意見は一致していたので、私は日本に脱出して外部から沖繩の運動を支援して行くということを彼に告げたいですね。だから、彼は「キミがいなくなったら、民主同盟解散しかない」というようなことを言ったことに対して、私は「それは

止むを得ない。私は責任取れませぬよ」つて、「あんたたちで、頑張れるならば、頑張つていただきたい。とにかく、民主同盟が、一番最初に廃墟の中で、呻吟していた沖繩の同胞に世界に向つて立ち上がれる夢を与え、元気づけたのだから、その栄光をぶち壊すような結果にならないようにも、早めに手を打った方がいいです」つて、私は彼に言つておいたんだが……彼は最後の解散宣言をするときには、私の名前を彼の隣に置いてあるのは間違いない。

佐道 今日二時間以上、二時間半ぐらい、お話は結構、伺つていますので、かなりまとまつたお話になつたようです。次回また同じような感じで、

上原 いいですよ。

眞板 よろしくお願ひします。

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第6回

---

開催日	2004年2月25日
開始時刻	14:00
終了時刻	17:30
開催場所	政策研究大学院大学 政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## 第6回インタビュー質問項目

2004年2月25日

1 先生が中国に行かれた経緯についてお願いします。なぜ中国なのか、どのようにして行かれたのでしょうか。

2 先生が行かれた当時の中国の様子についてお願いします。長い内戦のあとようやく四九年十月に建国して、五〇年十月からは朝鮮戦争に参戦します。国民生活の面ではかなり苦しい状況であったと思われませんがいかがでしたか。

3 五〇年一月、コミンフォルムによる野坂参三の「平和革命論」批判に端を発する日本共産党の徳田球一ら主流派と宮本顕治らとの対立・分裂は何か先生に影響を及ぼしましたか。

4 当時、先生をはじめ、日本国内でのレッド・パージを避けて中国に來た共産党メンバーがいました。徳田球一、伊藤律といった方々が有名ですが、中国政府の日本共産党メンバー受け入れに対する態度などについてお願いします。

5 中国では徳田らを中心に「北京機関」が設立されています。先生はこれには関与されたのでしょうか。

6 当時中国では、伊藤律氏が実質的責任者となっていた「自由日本放送」という短波放送で対日情報宣伝活動を行っていました。先生はこれには関与されていたのでしょうか。

7 五二年八月から九月にかけて徳田球一氏の病状は悪化して入退院をくりかえし、翌五三年十月に死亡します。先生は北京における徳田氏とはどのような関係だったのでしょうか。また、徳田氏の北京での様子などお聞かせ下さい。

8 徳田氏は亡くなり、伊藤律氏は投獄、野坂参三氏は帰国して北京機関の関係者はいなくなってしまうわけですが、先生は徳田氏亡き後、中国ではどのような活動をされていたのでしょうか。

9 文化大革命の際、中国国内は大混乱であったと伝えられています。この間、先生はどのように過ごしておられたのでしょうか。

## ■密航(沖縄から大阪へ)

佐道 中国に行かれた経緯ですとか、その後のことについて、質問項目を作ってお送りしたんですけども、その前に、前回の続きと言いますか、沖縄の問題についても、いくつか伺いたい点もあると思いますので、眞板さんの方から。

上原 じゃあ、(佐道助教) 作成の質問表を示し) これは後でいいですね。

佐道 後で。

眞板 前回の続きという部分で行きますと、主に沖縄から本土へ行かれる、大阪でどのような活動をなさっていたのか、という点についてなんですけれど、まず、「本土への密航と日本共産党について」ということですね、結果として大阪に行かれたんだよという話は、以前伺っておりますが、とは申しまして、大阪に誰かしら知り合いがいるとか頼る方がいらつしやらないと、難しいのではないかと思います。まず、結果としてでも結構なんですけど、大阪を指された理由は何だったのか、と。

上原 密航というのは、計画を立てて、予定を組んでみても、なかなかで実行きないんだよね。なにしろ、船がないとダメでございますから、そういうのは、五〇年に入る前の段階。最後の講演会は、おそらく、十二月か一月でしようかね。やっているのは。

眞板 記録に残っているのは(五〇年)一月に、那覇市役所の前で、

上原 これは、ずうっと全島を回ったんですよ。那覇からヤンバルの辺土名あたりまで行つてですね。名護、それから、本部とか、那覇を實際、基点にして、こうひと回りして、本部で締めくくったんだな。

それで、その思い出すのは、前にも話したと思うんですが、兼

次佐一つていうのがおりますね。私が帰国後たまたま、那覇に行つたときに、山城善光の一杯飲み屋で、終戦直後の活動家たち七、八名、くらいが集まりました。そこで、いろいろな思い出話をみんな語り合っている中でね、兼次佐一がみんなにね、「信夫が逃げたね、その根拠地と、それからね時間と場所をね、俺がね、非常によく知っている」とこういうことなんだよ。それでみんな「はっ!?」どこからどういふうにどこからどう逃げたんですか?」

と言つたらね。彼が言うにはね。本部で、民主同盟、人民党、それから社会党の三党連合で講演会をやつた。それで、終わりになつたんで、亀次郎さんたちは、その日のうちに、ジープでね何名か帰つたわけなんだ。あの時、民主同盟から行つたのは、仲宗根源和、山城善光、私だったかな? あと誰か? 本部か、いや今婦仁の人たちの連中が何名か来ていたはずなんだけれども。終つた後で、ちようど、兼次佐一の家が空いたのがあつた。彼はね、新しく家を作つたんだよ。ま、あまり大きい家ではないけれども。そこへ、私たちは連れて行かれ、彼が「ご馳走をしてあげよ」つて言つて、いっぱい飲んで山城善光と私は彼の家に泊まつた。で、他の人たちは、大宜味さんも仲宗根源和も含めて、誰かの家に連れて行かれたのか? 分散して泊まつたんですよ。で、その頃、私は、もしここで、講演会が終わつて、泊まつたつてことが分ければ、まだCIC(注・米軍防諜部隊)から手配されるんじゃないかと。翌日起きたらね、「おはよう」なんて言つたら、「どうぞこつちに来てください」と連れて行かれるんじゃないかという心配があるから、彼の家で寝たふりをしておいて、一時間か二時間ぐらいして、みんながだいたい寝静まったところに、私は名護に向つて夜道を歩き始めたんですよ。そうでないと、翌日、名護で山城善光たちとの連絡が取れないと困るからね。

その明け方ごろに、私はお腹すかしてだね、ひよつと、家を見たら、知っている人の家だつたんですね。前々から来ているので、

そこを叩いたら、向こうはひっくり返るほどにびっくりしちゃって(笑)

「どうしたの?」っていうことで、「実はこうこうなんだと。お腹すいたから、何かありませんか?」って言ったからね(笑)

急いで奥さんと二人で、おじやみたいなもの、何かを作ってくれた。やっぱり、羽地だから、少しおコメがとれますからね。それでその「隠し米」を出したんだと思うんだけど。それを私がね、「ふー、ふー」言いながら、食べたんでしょね。

それを私が中国から帰ってきて、訪ねたときに、「あの時、あんなは、世の中にこんなにおいしいものがあるのかっていうような食べ方をしていたと。そのときの私が食べていた姿がいまでも忘れられません」と、彼と奥さん二人で話してだね。もう十何年前の話なんだけれどもね。「今日もおいしいもの作ってあげましょうか」って言うからね。「どうぞ」と言ったら、ものすごい馳走をしてくれたけどね。

佐道、眞板(笑)

上原 私は講演会のあと、兼次さん宅でしばらく狸寝入りしてから、抜け出したのです。一宿一飯のお礼も申し上げずね。あのときは、大変お世話になったんだけどね。

そういうふうにして、確かに、兼次佐一の家を離れたのは、確かなんですよ。沖縄に帰った時、兼次佐一さんの家を訪れた時、兼次夫妻から直接聞いたのだが、翌朝起きてみたらね、「信夫がいないって!」山城善光をたたき起こして、「さあ、大変だ。どこへ行っただ」と。すると、山城は「あいつのことだから、どっかに行っただろう」と言っただけで眠りしただ。しかし、朝食の時間になっても戻らないので、ご夫婦は大変心配されたそう。なにしろ、CICから追跡されている人物が、自分の家から姿を消して、それ以降は公の場所に姿を表さなかったからね。兼次さんは、関係部門から何回か問い合わせがあったそうだけど

も、私が中国で生存が確認されるまで、このことは内緒にしていたんだそう。だけど、私の元気な顔を見て、馬鹿話ができるようになったものだから、今度は、兼次さんが私の沖縄脱出の恩人になって、私はみんなから、「そうですか?」と聞かれると、「そうです」と素直に答えました。こういうことがありました。

もちろん、その頃は、実際に旅立ちの可能性について調査研究していたのです。とにかく沖縄のどこからでもよかった。やまとに向かう船を見つかることが目的でした。実際、探してみると予想以上に難しかったですね。ある日、偶然に良い知らせが耳に入り、すぐ行動に移しました。

その人たちの中には、亡くなった人もけれども、名前はいまでも思い出せると思うんだけど、まだお元気な方がいるかもしれないので、うつかり、恩人たちのために、ちょっと言えないですね。

そして、たまたま乗ったその船が、やっぱり、彼らも非常に警戒していた。さて、瀬戸内海にはどの海路を通るか。船を着ける便利な場所があれば、そこへ行こうかというような議論をしているような思いがあります。彼らの計画というのは、私はまったく分からない。なにしろ、大変迷惑なお客さんだったから、彼らは気を遣ってくれて「どこに降りるんですか?」って聞くから、私は「あんたたちのご都合のよろしいところなら、どこでもいいですよ」と。「とにかく、ここまで来て、やまとの島でも見られるようになったんだから」。そして、彼らは、じゃあ、われわれは、——ちよっとどっかに、船の名前でも、ひよっとしたら、別の名前をつけていたかもしれないですね。それは分からないですよ。——しばらく、船の手入れをしなければならぬからと。でないと、どこそこの港に入れないからということ、その瀬戸内海の近くのどっかの島に着けたわけなんです。それで、私は降りて、彼らの小舟で、島に渡って、汽車に乗ったりして、その時のこの汽車賃をどうしたかという、彼らが、「そのカネじゃ乗れません

「からね」って言って、とつかえてくれたり、タダでくれたんでしような。何千円か知らないけれど、一万円くらいくれたのかもしいないけれど。

それで、大阪に入って、その大阪に入ったというのは、たまたま、大阪に行けば、沖繩の人は結構いるし、それから、もう一つは、私の親戚のものが、民生係って言うんですか？ 民生委員って言うんですか？ などもやったりしていたから、あの人の前に行って、名前を出すのは、大変迷惑だっただろうから、訪ねなかつた。あの人も私が沖繩で政治活動をしていることを知っていたからね。

佐道 前からご存知だったんですか？

上原 前から知っていると。名前だけは。そういう人たちもいるから、ということと、とにかく、どこでもいいから大阪まで行けば、今度は沖繩県人関係の人に聞けば、平良助次郎の住まいは分かるだろうというのが唯一の頼りだったですね。

佐道 大阪という目的は最初から決めておられて、行くまでのルートはもう成り行きに任せて

上原 とにかく、関西に入って平良助次郎にさえ会えたら、なんとか取っ掛かりができる。彼は兵庫県委員会に属していたから、大阪に入ろうと、私が彼らを通じて、大阪から東京に入ろうと、便利だろうと。で、船がたまたま関西に着いた。もし、船が今度、静岡か神奈川か千葉かどこかに着いたら、今度はまた東京で、別のことを考えていたわけなんです。そういうことで、まず、第一は、大阪に行った。しかし、その理由として面白いことがでさるんじゃないかと思っただけだね。

佐道 お一人で行かれたんですか？

上原 えっ？

佐道 行動はお一人だったんですか？

上原 行動？ もちろん、行動は一人でしたよ。

佐道 同行された人はいない？

上原 いない。危険な密航などは、単独か少数が安全でしょうね。

## ■日本共産党時代

眞板 そうしますと、大阪で共産党に入党されるということですが、藪から棒に共産党どこですかってわけにも行かないと思うんですけれども。

上原 それが、長い党員であった平良助次郎を立てなきゃいけないわけですよ。だから、大阪の場合は彼だと。なにしろ、民主同盟で、一年近くも一緒に活動しているわけですからね。で、東京に行った場合はどうしようということとはちゃんと、それなりに別のまったく、関係の違う線で、自分の頭の中では、あつたわけですね。

佐道 やまとへ行つて、共産党に入ろうと、そういうことはもう決めておられた？

上原 もちろん。やまとに行つたならば、正式な党員として活動することによって、私自身が今度は、社会的な公な活動が可能になつてくるということですよ。だから、それによって、もしも、私がやまとで活動している間に、CICが日本の警察を動かして、捕まえた場合でも、今度は公然と私は、組織を背景にして、全日本に呼びかけることができるというその、私のいろいろな政治活動と言いますか、具体的な地下活動であっても、結局、いざ、そうなつた場合には、大衆の面前で、それは駅なら駅で、大衆の前で逮捕される。そうすれば、たちまちにして、党組織は分かるから、そして、それによって、共産党はしかるべき組織を組んで、私の支援活動に入れると。そうすれば、アメリカは簡単に私の首をちよん切るようなことはできないということも計算済みだったわけですよ。これは、もちろん、いろんな経験者の意見も話もね、聞いていたし、沖繩では、山城善光たちからもだね。こういう場

合のいわゆる地下活動の場合の、いわゆる極秘活動の中における公然活動というのはこういうふうな展開すべきであるという、彼等自身の体験は小さくても、彼が聞いた先輩たちの話っていうのはたくさんありますからね。そういうことで、私は私なりのちゃんとした取り組み方って、言いますか、心の準備をびしびしとやっておりますよ。

佐道 五〇年の二月？

眞板 そうです。

佐道 大阪に来られたのは？

上原 だいたい、とにかく、私は大阪に着いたときには、途中船員からいただいた、着古しのコートのような物を着ていたのか。関西に行ったときには、私たちに会った関西の人たちっていうのは、コートを着たりしたりしていたな。二月か三月でしようかね。まだ寒かったんでしようね。

佐道 五〇年ぐらいと言いますと、共産党の活動自体は、かなり厳しい状況になって、先生も地下活動と非公然活動の公然活動というお話をされましたけれど、まさにかなり締めつけが厳しくなっておりますけれども。

上原 そうですね。その問題になりますと、私が入党して、大阪南地区委員会に入党して、すると、まず、私の任務というのは、できる限り広い範囲内における労働者、婦人団体、それからいろんな民主団体ですね。そういうところで、私が沖縄問題について講演をすると、報告をします。だから、私は、あの頃、着いたばっかりから、やっとこれで解放されて自由になれそうだという高揚した気分もありますからね、ますますはりきって、元気いっぱいだったんだからね。たとえば、西成なら西成のメッキ工場の団地みたいなところがあるわけですね。中小企業の。その労働組合が、彼らが何時に仕事が終わる、そして、それぞれが各工場の風呂で身体を洗って、着替えて、そうすると、腹がすいたヤツは、うど

ん一杯ぐらかき込んで、それで、何時ごろにはどこそこ集まる。もう、そういうのを計算して、「キミは何時までにそこへ行けー」っていうことになる。すると、行くと、今度は待つているわけですよ。私たちが揃って着くと、「こっちは、こっちは」って、連れて行かれて、そこで、四十、五十名くらいずつの報告会をやる。こういうのを一週間、少なくとも三回くらいやっていくね。考えてみると、ずいぶん頑張りましたね。みんな、熱烈に歓迎してだね、今度は一服になると、「キミ、どういふふうにして、渡ってきたんだ？」って言うんだ。「よく、渡ってきたなあ」なんて話から、始まるわけなんです。そうすると、彼らは私を「はっ、俺たちの仲間だ」ということで、腹を割って、話し合えるから。やはり「いちやればみな兄弟」でしたよ。

佐道 入党はすぐに、許されたんですか？

上原 もちろん、こちらに来て、私の仮住まいは、比嘉良明っていう人の家なんです。この人は、学生時代からの黨員ですけれどもね。まず、大阪に行ったならば、彼を、そして、彼を通して、平良助次郎ということ、その手配をちゃんとしていたから。大阪に着いたら、なんと、大正橋の近くにね、彼のお姉さんが、モータープールを経営したりして。で、その旦那がね、労働組合のね、沖縄出身の労働者の兵庫東地域の顔役だったんですね。私は良明に連れられて、そこを訪ねて行ったら、「おい、泊まる場所はるか」って言われたんで、「ない」と答えると、「おい、良明、おまえの家に泊めてやれ」と決まったんです。で、そこへ泊まると、良明が助次郎にすぐ連絡をとってくれました。というところで、待っていたら、翌々日に助次郎と会いました。その日の夕方には、大阪を離れて、二、三日間は、尼崎、宝塚、神戸などでいろいろ先輩と会いました。私が着いた翌日には、その比嘉良明が地区委員会に私が大阪に到着したことを報告していますから。一方、平良助次郎の助言によって、また、当時の日本共産党は、

大変複雑で、いったい、誰を信用して良いのか、わかんないような関係にありましたからね。その時、私としては、一番感激したのは、助次郎が沖繩出身の党役員の方々を紹介してくれて、まずつながりをつけたこと。たとえば、大阪では、山六っていう、山田六左衛門という委員がいてね。彼は中央委員のなんですよ。しかし、彼は鹿児島島の離島出身で沖繩人とは関係が深い。私にも好意を持ってくれました。兵庫県には平良助次郎と井ノ口政雄と。彼は党の代議士だった人だからね。

その後、兵庫県で入党した方がいいのか、大阪で入党した方がいいのか、ということになりますよね。で、平良助次郎は「兵庫県で入れ」と、「そうすれば、俺もお前と一緒にできるから」ってわけなんだな。だが、その晩泊まって翌日か翌々日に大阪へ帰ったら、比嘉良明は、私を見るなり、「信夫、もう連絡とったんだ」と、それは私の入党手続きをする件について、いついつどこで会おうと、こう決まっていると言うんですよ（笑）。そこで、大歓迎され、入党手続きをしたわけなんだ。そのときに、その比嘉良明が、いろいろ言ったのは「お前は、四、五年前から、俺たちより活動しているんだから、いまさらだね、駆け出しの党員なんていうのとは、資格が違う」なんて言ってるね。地区委員会に食ってかかった（笑）。それで、「どうすればいいんだ」っていうことで、民主同盟が設立された一九四七年まで遡ってね。「それも党の党歴の中に加算しようじゃないか」というようなことも言ったんだけど、それも、それは、私、実際にどうなったのか、どのように処理したのか、知りません。あと、すぐいなくなるんだからね。私は気にも留めないで、「それは、どっちでもよろしい」と。「党の必要ないように処理してください」ということになったんだよ。

それで、今度は私は、晴れて「日本共産党党員」ということになって、そして、大阪府南地区委員会の方で、そして、与えられた任務が、まず、沖繩県人会や労働者、民主組織を優先的にだね、

沖繩人の要求する報告会に優先的に出ると。あと、そのほかに、大阪市内の、南地区委員会の、またそこが、労働者の集中している、中小企業の集中地帯だった。そこで、労働組合からの、婦人団体あるいは文化人たちからのそれ（注・講演依頼）があった場合は、すぐにわれわれが、手配すると。少なくとも、その日のうちに動ける、二時間くらい前までには、通告するから、それで、すぐに、飛んで行くことだった（笑）。あの頃はCICも別に警戒せず、解放感の下で生活していたので、元気が良かった。精神的にも階級的使命感みたいな、そういう緊張したね、雰囲気はパアツと広がっていましたからね。

そして、私の話を聞いて、「なんだアメリカ帝国主義っていうのは、そうなのか」と。「じゃあ、アメリカは沖繩に対してまるで植民地奴隷的取り組み方なんだから、日本全国に対して、われわれに對しても、労働組合に對しても、当然、もつと、ひどいね、圧力がかかってくるだろう」ということを彼らは話し合うわけなんです。私は「この報告は私の数年間のささやかな体験談です。それをあなたたちは、実際に現場で戦ってきているわけですから、あなたたちの判断の仕方にお任せします。私としては、素材を提示しただけなんだから、ああだろう、こうだろうということは言いません」って言ってるね。そのときは、私、大変おとなしかったんだよ。新しい現場に来たんだから。そういう面では非常に素直なんだよね。だけれども、やっぱり同じ労働組合員の中でも、「アメリカは民主主義の国である」と。「われわれ労働運動のその五・一メーデーもだってるね、三・八婦人運動だって、アメリカから始まったんだ。日本の労働運動でも、それを見本にしたんだ。あなたの言うことは、ちょっと信じられない。アメリカは民主主義世界の先進国だから」って言ってるね。食ってかかる人もおりましたよ。それに対して、私は「一九四六年から、今年の春まで四年間もアメリカ帝国主義の圧政下にある沖繩で、平和な戦後復興のた



めに命をかけて闘ってきました。その結果、私は皆さんに申し上げたような結論に達しました」と説明するとね、ほかの連中がだね、その人に対して、「じゃあ、キミ、アメリカについて、それほどよく知っているんだっただね、自分は納得できないなら、キミ、勇気があるならば、上原くんと同じように、密航して、沖縄に行つて見てきたらいいじゃないか」と言うので、本人がさんざんやられた（笑） そういう面白いね、労働者らしい素直な現場の雰囲気をもう何回も見ましたですね。

佐道 お住まいは転々とされてたわけですか？

上原 あつ？

佐道 大阪の中で、お住まいは転々とされて？

上原 えつ？

佐道 大阪の中で、住んでおられるところは、転々とされたわけですか？

上原 そう、私は最初は、まさか私が逃げてどこへ行っているっていうことは、CICだつてね、小さな沖繩の島と違い、やまとは広いんだから、分かるまいという半分そういう安心感はあるわけなんです。だけれども、助次郎や、私と一緒にやっている比嘉良明なんていうのが、「キミ、甘えちゃいけないぞ」と警戒心を強めるよう注意されたことが思い出される。だから、彼らが言うには、「一歩でも、こことここ以外、絶対に顔を出しちゃいけない」ということだね。そのときには、「必ず俺がついて行く」「彼がついて行く」というようなことだね。私の単独行動は禁じられていた。

佐道 ようするに、大阪に行かれたのが、五〇年の二月ぐらいということなんですけれども、共産党という組織の歴史から言うんですね。五〇年の一月ごろ、今日、こちらの方の質問にもちよつと、入れてあるんですけれども、コミンフォルムからの、野坂参三さんの平和革命論に対する批判というのが出て、修正派、それから、志賀義雄さんのグループとかですね。で、共産党内部での

対立が、ここで非常に先鋭化していくという時期だというふうになっているんですが、そういうのは、大阪で活動されていて、いろいろ影響はありましたでしょうか？お感じになりましたか？

上原 結局、一般の原則論として、党内における、そういう面のあれは、非常に複雑で、中央委員会の連中自身が、相互不信感があるわけですね。同じように大阪府委員会もそうだし、関西地方委員会もいろいろあるから。

いくつか具体的な例を申し上げますと、ある何かで、大阪府委員会が、私のために、何名が集まって、励ましてくれたんですね。そのときに、比嘉良明と岡というのがおりまして、これは南地区委員会の委員ですけれども。彼と二人が、「キミに会いたい」と言っているから、連れて行かれたところが、天王寺かどこかの建築現場みたいなところ。いま考えてみるとね。そこに、確かに、新しい家の建築中だったから中に入れるわけですね。灯りも何もありませんよ。あのときは、電球だって、街灯もほとんど少ないから。真っ暗な中、彼らに連れて行かれて、そこに、ロウソクをつけて、一升瓶、二、三本あつたと思うんだ。あのときね。そして、何かと、私はひよつとしたら、もう、それは、何月だったかな？ 四月だったのか？ 忘れましたけれども。私はひよつとしたら、もう国外に出るであろうということは、彼らも承知していたんだ。彼らは。大阪を離れて、私は国外に逃げるであろうということを。なぜかという、ノルウエーのストックホルムに国際平和委員会の委員会があるとか、それから、それが終わったら、引き続き、アジア・太平洋地域北京平和会議が開かれるとかという情報が流れていて、私自身も知っているし、それで、それは、指導者の中でも、その情報を知っている者もおりますから、その連中が、何名かいるんですよ。いつ私が飛び出して、外国に向かうか分からないからということ。というのは、彼らが言うのには、送別会かな？ 送別という意味合いでなかったら、歓送会かな？ 何て

いう名前だったか、とにかく、行こうと連れて行かれた。で、行くまでに大変ないろいろな道を通って、どこを通ったか分からないけれども、彼らが連れて行って。そこで、建築工事現場のお茶碗があるから、そのお茶碗だったと思う、コップじゃなかった、そんな上品なものじゃなかった。それにお酒をいっぱい、つくんだね。健康を祝すとかなんとか言ってるね。そして、私を励ましてくれた。そのときに、それで、着くときには、岡と比嘉良明は、府委員会といったな、関西地方委員会と言ったのかな？ そのときには一人の重要な。そのときには、いわゆる徳田派である、(徳田派)の中に山六、山田六左兵衛なんていう人もいたのも、事実なんだ。あと、誰々って、紹介を受けたんだけど、ちょっと覚えていないですね。それは、あとで、考えてみたら、彼ら組織の中に、徳田派として、宮本たちと対立したのが、二、三名いたのを思い出した、ということなんですよ。

佐道 共産党内部ですね、いろいろな路線対立がございましてよ。それは、中央委員会における疑心暗鬼にいろいろなついで、それが、大阪の府委員会でもいろいろされているというお話があって、すると、先生が国外に出られると、国外に出られるという話が、なんか、ちよつといま急に出てきたような話が、気がするんですけども、それは、やつぱり、そういう対立の問題と先生の国外に出られるというのは、これはやつぱり、いろいろと影響があつて、ということですか。その中で、先生も出ざるを得ないという。

上原 いや、いや、そういうんじゃない。私はそのとき、ヒラ黨員ですからね。沖繩じゃ確かに、CICに追っかけ回されて、そして、その頃になると、もうひと月か、いくらか経っていますから、二カ月くらい経っていますから。飲み屋に行くと、その飲み屋っていうのは、比嘉良明とかその黨員のよく使っている、よく知り合いの連中だから、私が行くと、「やあ」っていう合図をす

るとかね(笑)

あとで、良明たちから、聞くというのと、なんか、数日前に、「こんな格好した若いのが来て、沖繩の話をしていなかったか」ということで、警察が何人か来てたらしい。私が隠れている、大正橋の近くには、労働者向けの飲み屋がいっぱいありましたから、良明たちがよく行っている店、私も二、三回ぐらい行ったような店にも、聞いて回っているわけですね。それで、それから私は、何カ月くらいか自由な身で動いたつもりだったのが、もうそうなっているんだつたら、それ以上、無理することはないと。これも、ひとつの情勢の私に対する、大きな変化を認めさせた、動機になるかどうかは分かんないけれどもね。どうせ、やまとにいてさえも、これから、公然たる活動を許さないんだつたら、アメリカはよつぽど、私を憎んでいるという個人的な問題。しかし、それはないだろうと。おそらく、アメリカは、世界に公言できないような、企みをもつて、沖繩を軍事基地化しているんじゃないかという疑問がだんだんと、エスカレートしたわけなんです。アメリカは、私のやまとにおける発言さえ、封じ込めようということは、きつと、私たちの活動が怖い。ならば、日本における私たちのささやかな運動がだね、たとえば、沖繩の現状報告をしているのがそんなに怖ろしいんだつたら、「よし、これを全世界にもつて行って、暴露してやろう」と。おそらく、世界はアメリカの陰謀を知らないんだと。ならば、アメリカに打撃を与えるなら、より大きい方が良くないかという考えが私の脳裏にだんだんと広がりました。これまで私が考えていた世界が、沖繩から日本へ、アジアから世界へと音を立てるように、大きく変化発展していくことを知ったので、仲間内でもつて、世界的な情報収集をして、こういう世界的な平和運動の動きがあることを認識しました。平和運動と民族解放とプロレタリア革命は、切り離せない相互関係にあるのだと、やつと分かりましたので、もう誰彼に寄らず生意気に

も、私はそれを自分で、「やろう！」と心に決心するわけなんですよ。だが、これはアメリカか帝国主義の世界支配に対する反対闘争の一環として、押しつけられたかかっていうとそれはないね。ただそんなに深刻には、考えていなかったかも知れないが、それで今度、私は、そうならば、どうだということ、私の周りの党員たちに対して、委員会の連中に対して、幹部たちに対して言う。「難しいよ。海を渡って行かないか」「私は沖繩から海を渡って来たじゃないか」っていう。あの頃、飛行機はないですからね。

佐道 そうですね。

上原 だから、彼らも「船があれば、なんとかしたいな」ということで、私は早速、その可能性について、当時の私の知識で考えられる調査研究を進めた。

そうしたら、井ノ口さんの話によると、徳球も病気になって、日本におれなくなるかもという話も漏れ聞いていました。そして、彼らに乗る船って、どんな船なんだろうかな？ 俺が先に乗るのかな？ 彼らが先なのかなあ？ こう考えたのさ。天運なのかな？ 比嘉良明に実際、いろいろ呑気なことを言って。「お前、これは笑い話じゃなくて、命がけの問題だぞ」と言って、彼に怒鳴られたりして（笑）

ま、それなりに私よりも心配してくれてね。彼の真剣な気持ちは、すごく有り難かったです。いまここで、私が説明するのは、どの路線で行くのかという調査研究ですよ。ソ連へ向かって行くのか、中国へ渡るとなったら、中国までの海は、マッカーサーと蒋介石の警戒線で捕まってしまう可能性が大きいから、それは不可能であると分かるわけですね。特に朝鮮との関係も怪しくなってきた段階ですから。すると、そのときにはもうすでに、マッカーサーの大軍団が、朝鮮半島とずうつと台湾の海上に控えていたわけなんです。マッカーサー・ラインとか言ったのか分からないけれども、その点、そこを今度は、アメリカ海軍が常時

ずうつと監視しているということも分かった。それで、今度はその路線を通つたらいいか、北海道まで行き、北海道からソ連に入るか、なんていうことも考えた。だけれども、当時、日本の警察予備隊も、それから、アメリカの機動部隊も、北海道を重要拠点にしていたね。大きな拠点だったでしょ。今でもどうか知らないけれど。そうすると、北海道経由で行くっていうことになる、北海道から船をおし立てて、シベリアに入るっていうのは不可能だろうと。では、樺太へ。樺太から入るか。これは季節の問題で、非常に大きな制約を受けるだろうな、ということも、私のそういう、私の私用の調査研究に対して協力してくれた連中もおりますからね。私の知らない知識も、そういう中で分かってきた。そこで、結局、最終的に一番安全なのは、南の経路を通って、フランスまで行くことだと。そうすれば、フランスのフランス総同盟の労働組合の協力で、またはフランス平和委員会の協力で、ストックホルムに行けるはずだということ、線は決まったわけですよ。そういう話し合いをしている中で、上の方も心配して、「本当にパスポートなしで、あいつ行けるのかなあ」なんていうことを心配してくれましたよね。

で、私は「どこの船があるんだろうか」ということで、今度は、これは偵察ですな。九州の八幡製鉄だとか、戦争のときでも貴重な鉄材のね、発信地みたいなものでしたからね。だから、そこへ来る船は、どこどこの船が来ているんだろうかと。ほかの人に聞くわけにもいれないから、直接自分で調査すべしと考え、結局、行ってそこへ何日か滞在してだね。いろいろ調査して、船籍はどこだろうか、フランスなんだろうか？ イギリスなんだろうか？ それに乗っている船員は、ヨーロッパ人、それとも中国人では、コックとして乗っているのは、だいたい香港かシンガポール出身のね、華僑の連中なんか。めし炊きですね。乗っていますから。彼らの食品買い出しに出かける時間帯も、ドオツと調べたの。彼

らは、大きな籠をね、こう肩に引つ掛けて、朝の十時ごろになるという、船を降りてきて、市場に野菜等を買に行くわけですよ。ゆつくりと。それを見ていて、後を追っかけてだね、「重たいでしょう私が持つてあげるよ」とか言つてね。代わつてやると、「お前、親切だなあ」とか言つてさ。それで、片言の中国語でも使つと、安心するわけだね。「さあ、来い！ お茶一杯飲もうよ」と言つて、こう上に行つて、親身になつて話し合つて、中で馬鹿話をしてる中で、いろいろなことを聞くとかさ。そういうふうにして、意外と私の顔に似合わない、緻密な調査研究をしてね。そういう非常に、確かなね、情報を整理しながら、計算したりしたんですよ。

佐道 どのくらいの時間をかけておやりになつたんですか？

上原 えっ？

佐道 その調査はどのくらいの時間をかけておやりになつたんですか？

上原 えー、その調査ではそうですね。大阪の方から、関西から、九州一帯までかけての、一回行つて、ぐるっと回ってくるのに、だいたい三、四日くらいかかったと思いますね。しかし、逆に、当時の状況から、考えますと、もし、東京周辺に上陸する機会があつたら、今度は、中央との関係で、また、もつと別のね、展開があつたかもしれない。そのまま、日本に留まつてだね、そうすると、今度は内部闘争に巻き込まれて、どうなつていたかつていう問題もありますけれどもね。だから、過ぎ去つたものもろの出来事を考えて見るといふと、意外と大阪に上つたのが、私の国際的な広い範囲にわたつて客観的に、各分野にわたつての活動が可能になつたつていうことには、まぐれ当たりといふのか、幸運だつたのかもしれないとも思う。その代わり、苦勞もしたけれどもね（笑） それは別として。

眞板 上原先生が目指されたのはストックホルムという

上原 えっ？

眞板 スtockホルムを目指されたわけですよ。

上原 そう。

眞板 世界平和会議に参加される？

上原 平和委員会。いや、世界平和会議だと思つた。

眞板 委員会。えーと、五〇年三月一日にですね、「ストックホルム・アピール」というのが出ていますが、これに間に合わせようとしたんですか？

上原 そう。最初はね。だけれど、先ほど言つたように、どう行くのか。しかし、終わつていても、仮にですよ、終わつていてもいいぞ。委員会の組織が残つていふのだから、そこへ行つて、「こういう遅れました」ということで、私の報告を世界に訴えることもできるわけですから。こういうのを計算していたわけなんですよ。そして、もし可能ならば、そこまで行けば、今度はソ連、ソビエト経由で中国にも入れるという、計算もしていた。今度は冒険をしないで、シベリア鉄道を汽車に乗つて、のんびりで行けるんじゃないかっていう（笑） 大変贅沢な計画もしていたという（笑）

眞板 私の方で、ちよつと確認を含めて、そうしますと、南地区委員会に比嘉良明さんと行かれて、黨員証を発行していただいた日というのは、ご記憶にございますか？

上原 とにかく、大阪に着いて、先ほども言つたように、平良助次郎が私を、翌日かしら、迎えに来て、私は兵庫県に行つたわけですね。兵庫県で、きつと、一晩か二晩、泊まつて、それから、大阪に帰つてきたんだ。大阪に帰つてきたら、もうその日で、比嘉良明たちは、ちゃんと関係部門に連絡をとつて、「キミは手続きを明日、何時から、やります」つて、こうなつていたんだよ。だから、私はもう、「どつちでもいいじゃないか」ということで、言われるとおりに行つたわけなんだ。とにかく、大阪に着いて、一週間以内

の話ですね。その着いた日が、二月何日だったのか(笑)

佐道 まだ、占領下で、

上原 うん？

佐道 日本自体は、占領下であつたわけですよ。それで、外国に行かれるとなりましたら、まあ非法となるわけで、旅券とかそういういろんなものをぜんぶ、どこかで都合をつけないと、行けないと思うんですが、そういう手配も併せて最後になさるんですか？

上原 だから、そうなると、仮に私が、もう黨員だから、そういう行動は、党のしかるべき関係の認可を得なければいけませんからね。そして、彼らは、「よしっ、それがキミにできるんなら、素晴らしい」ということですね。「これは全世界を驚かさずー」というような言葉で励ましてくれた。当然、党は私が国籍も戸籍もなく、パスポートも準備できないことを承知の上でのことですからね。だから、「沖繩から大阪への密航のようにはいかないぞ」と脅かされたりしました。意外と「奇想天外」な奇跡も起こしうるのではないかと私の詭弁が、功を奏したのか「目的地へ到着したら、電報で知らせよ。そうすれば、日本代表として任命する」と党の幹部は約束してくれました。

佐道 じゃあ、党がそれは支援してくれたということになるわけですか？

上原 そう、支援して、認可してくれた。認可というか、そういうことですね。だから、私、先ほど言ったように、「キミはいつ、逃げるのか、行くのか」と問われたので、私は「機会があれば、いつでも発つんだ」と言ってから、だから、まだ日にちも決まっていらないのに、最終的にどうこう言う、ということとは決定してないのに、私が、何て言いますか、それを前取りしてね。

その五、六名で大阪府委員会か、関西委員会の方たちが、私の名前知っている人五名ぐらい。

そういうことで、整理していきますと。私が世界に対して、沖繩の軍事基地化問題とアメリカの占領政策を、訴えることをやらなきゃいけないと思つたのは、おそらく、私が大阪に入つて、一カ月前後のそれじゃなかったでしょうか。だから、労働者やいろんな団体の報告会に行つていると。さつき言つた、中山マサ先生たちの報告会に行つたときに、参加していた婦人の一人からね、本当に食つてかかるのね。「あんたが報告したのみんなうそです」と。「沖繩はアメリカ民主主義のアジアにおけるショーウィンドーになつていないじゃないですか」つて言つて、食つてかかる。私は「そうでない」と言つても、その人は信じない。そういうことが何回かあつて、いかに、沖繩問題が日本国内で知られていないかと初めて分かつた。日本国内でさえも知られていないんだつたら、世界はもつと知らないだろうと。これ、沖繩からは、敗戦後、一番最初にね、一定の地位のあつた者。平良助次郎じゃなくて、首里市の市長をした人。もう一人、島清(元民社党代議士)

眞板 仲吉良光ですね。

上原 仲吉良光！ 彼が沖繩から引き揚げて来て、東京で相当広い範囲にわたつて、政府関係部門も含めて沖繩の現状を報告しているんですよ。だけれど、山城善光はその報告集会に行つて、何回も仲吉報告を聞いているんだ。彼は沖繩の現状は、まさに、そうであろうと思つて帰つてきてみたら、なんと、沖繩はまったく違う世界だつたということ、彼は彼の書いた物の中にありますよ。ものすごく、腹を立ててたね。大ウソつきだと。この仲吉さんをくさしたこと、私は何回も何回も聞いていますよ。沖繩で。だから、彼、彼自身は「俺、機会があつたら、東京へ行って、東京中駆け回つてね。ひとつ、国会に行つて、沖繩の実情を話してやるんだ」つていうようなことも、彼は言つていたんですよ。だから、私が、「よしー じゃあ、俺が、日本に行くようなことがあつたら、俺が代わつて、やつてやるから、いいよ、安心

しなさい」って、私は何回も言ったんです。

そういう経緯もあつたんだから、私としては、日本国内に広く沖繩問題のありのままを発表することは、私の使命だと思つていたんですね。そのためには、私はアメリカの手先になつて、日本政府の関係部門の組織から、たとえ、捕らえられても、比嘉良明たちが私を脅かしている「危ないぞ」と言う事態になつても、構わないと思つていた。

ところが、世界にはこういう地球規模の平和運動があるんだと。で、戦争に反対している組織がある。しかも、世界組織として行動しているというのが分かつたら、震え上がるくらいの力が湧き上がつてきたわけなんです。「いいじゃないか」と。おそろくここにおいても、アメリカに捕まえられる、やられるくらいだったならば、「俺は命がけでも渡ってみよう」と。こういうふうな勇氣が身体中にみなぎるような思いをした記憶がありますね。これは何の打算もなしに、非常に何と言いますか、さわやかに、その決心もしてね、その計画に踏み出すことができたんです。眞板 私からは以上ですので、佐道先生から。

## ■密航(日本→シンガポール→香港→中国)

佐道 それで、ストックホルムを目指されるわけですよ。で、その途中で、見つかつて、中国に行くことになつた？

上原 うん？

佐道 ストックホルムに行かれる途中で、見つかつて、ということになるわけですよ。

上原 私が香港で「拝借」した船がね、シンガポールに泊まつてしまつたんです。真つ直ぐそのままヨーロッパへ行くとしたら、しばらく「動かない」って言うんですよ。それで、一週間くらいここに滞在してね。船員は、上陸して遊びに行つてるので、留

守番は私一人か、友人のコックさんくらい。さて、この船の国籍は、どこの船だったかな？ そうだコックさんの説明では、一種の軍用輸送船で貨物を運んでいた。フランスの船を香港のイギリス海運会社がチャーターしたものだと言っていました。やっぱり、積荷の検査とかいろいろな手続きがあるのだろうね。船籍がフランスだから、シンガポールでの調べが厳しいのかなとコックさんに聞くと、「よく分からん」とコックさん。とにかくアメリカの船でなかつたはずですよ。

で、私とコックさんとは仲良しなんだが、船内では私はコックさんが指定した範囲内しか行動できなかった。なにしろ、乗船させてくれただけでも「謝天社地」だから、わがままは言えないです。すからね。入港後、一週間くらいしてだと思つたが、ある日突然、英海軍によつて、船内検査がありました。コックさんとトランプをしていたところを見つかつてしまつたのです。それで、捕まっちゃつた(笑)

コックさんと私は、常日頃、二人で話していたのは、万一の場合どうするかということ。彼は、どうも最近、船員たちの動きから見ると、船の予定航路に変化があるかも知れないと。キミも船を離れなきゃいけないかもしれないと。私が「捕まるとどうなるか」と聞くとね、彼は「捕まるよ。これだよ。それで、監獄に入るんだ」と今にも泣き出しそうな顔をしたのは忘れられない。私は彼の友情に感謝し、万一の場合の作戦を練つた。コックさんの提案は、「俺たち二人は香港出身なんだが、キミは私の幼友達で、貧しい暮らしの中、二人は兄弟のように育つた。しかし、俺(コック)が最近、身体があまり丈夫でないから、キミにちよつとシンガポールあたりまで、手伝わせようかなと思つて、お願いして連れて来たんだと。船がまた、すぐ帰るんだから、連れて帰ればいいじゃないかと思つていたつていうことにしよう。そうすれば、俺も罪がなくなるから、そういうことにしよう」と、

二人口裏あわせをしていたんです。

そして英海軍に逮捕されて監獄に入れられてしまいました。裁判は受けなかったから、どういう処分だったか良く分からない。日数は二ヵ月くらいいた感じがしたんだけど、実はもつと長かったかもしれないですね。コックさんの奮闘努力の結果、私は香港行ききの船に乗せられて、香港の港まで連れて行ってくれたんだな。そして、そこらあたりのあれは、私としても、忘れまいと思っていたけれども、時間が経つとね。あのときは、緊張してやっていたのに。

そして、香港に行つてしばらく滞在する期間があつたでしょ。で、今度は香港に滞在しても、今度はちゃんとした香港の新聞社にいるわけだね。名目だけ匿われているから、安全だったわけなんです。いいよ、その新聞社の名前言えつていうんですか。『大公報』いつか話したかなこのこと？ 話しましたか？

眞板 いえ、香港の話は初めてです。  
上原 初めてか？ そうか（笑）

何しろ、港で、二十四歳か前後になつている人が、浮浪者のようにしてね、彷徨っているわけにもいきませんからね。蛋民も、仲間意識と自己防衛上の習慣から、ここに来ると誰が来たかすぐ分かります。口コミですぐ分かるんだ。彼らはね。だから、非常に警戒心が高いから、その中に長くは居られないから。まず、何でもいから、中国にも連絡を取れるような場所はないかということ、いろいろ、あつちこつち調査研究をして、数日後に、たまたま『大公報』という香港では影響力がある新聞社だから、ここに行つて、その記者を見つけてね、話し合ったほうが、効果的かなあ？ 新華社の『文匯報』に行くかなあ？ 台湾に近い、台湾関係、国民党に近い新聞社に行つたんじゃない、これ幸いと捕まってしまうだろうから。国民党の方も連れて行かれたら終わりだからね。

いろいろ検討の結果『大公報』に行つたわけですよ。で、『大公報』に行つて、「責任ある人に話したいことがある」ということで、乗り込んで行つた。そのとき、私は服装はどうかというよね。蛋民の一番下層の労働者が着るようなものより、もつとひどい、これくらいのパンツみたいなやつとね、ランニングを一枚（笑）

タオル一枚もつていたかどうかね。そうしたら、門番にお願いしても、なかなか開けないからね。それで、中と連絡とつてくれないか。私は簡単にこうこうであるということを紙に書いて、門番に渡して、これを必ず責任者に渡せつていうことを言うと、彼はね、私の顔を見ながらね、このルンペン野郎がねと思つたのかどうか、私の顔を見ながら内（注・社屋に向かつて）に走つて行つたんだ。そして、『大公報』のしかるべき人に渡したんだろうね。十分くらい待っていると、中から、なんと、私を迎えに来てくれたのはね。二メートルくらいの背の高い人なんです。それで、彼は「俺は、趙沢隆だ。中にすぐ入りなさい」そして、中に入れて、彼は私をオフィスまで連れて行つて、あんな粗末な格好で、彼らの高級なオフィスを、社長のオフィス、みたいなところへ連れて行つてだね（笑）そこで、いろんな話をしたね。何時間も話した。それで、結局、彼らの決定として、あのとき、彼は編集長かな？ それで、『大公報』の社の関係部門の組織のしかるべき決定として、「私があなたの生活の一切を面倒見ます」と。「今晚から、私の家でお泊まりください」つて、連れて行かれたんだよ（笑）そして、そこで、彼の家は、奥さんとそれから、女中がね、阿姨（アーイ）つて中国語で言うんだけれども、おばさんがいてですね。そこに、今度は、ひと部屋空いていたのがあつたのかな？ 私はそこで、中国行くまでのいわゆる中継ぎをしてね。で、宿泊するというところで、その晩から、いわゆる『香港市民』になつちやつた。

佐道 香港には都合、どのくらいの期間、いらつしやつたんです

か？

上原 香港に帰ってきたのは、何月だったんでしょかねえ。ああいう格好だから、夏か秋だろうね。そうすると、シンガポールの滞在は、二ヶ月間っていうことはなかったかもしれないね。もう少し長かったね。三ヶ月くらいだったのだろうか。趙沢隆さんが私に出してくれた服は、背広ね。考えてみると、このくらい、厚さがあったかもしれないんだ。

佐道 全部その『大公報』の方々が、用意をしてくれた？

上原 そう。もう、『大公報』の人たちが、一切、私の生活を見ると、で、具体的にはその、趙さんっていう方、その人が私の一切合財の世話を焼くということになる。代表世話役っていうことなんでしょうね。そして、彼らの家にいる間、奥さんも二人ともジャーナリストだから、昼はいないから、そのときには、阿姨が、ちゃんとした香港料理を作ってくれて、私をもてなすと。

たとえば、彼らが早めに帰ってきたときには、一緒に、外に出てめしを食べに行く。それで、土曜、日曜、彼らが休みの場合には、朝から外に出て、朝めしを食べる。香港人っていうのは、夜遅くまで起きて、朝、自分の家でめしを食べないから、みんな外食だから。いま、日本で言う飲茶っていうか、そういうものを。

佐道 先生ご自身、香港にいらっしやる間は、具体的には何をやっておられたんですか？

上原 えっ？

佐道 先生ご自身は、香港で『大公報』の世話を受けていらっしやる間はですね、具体的には何をしていたらつしたんですか？

上原 具体的には、結局、私の好きな本を彼らが、『大公報』の図書館から借りてだね、好きな本を読んでいると。その代わり、『大公報』にいる間は、『大公報』で日本関係の記者がおりますから、その人たちと座談会を持つたり、そして、彼ら書いた日本関係の記事があるんですね、そういうのを「ちよつと見てくれよ」と

か、なんか「あれなですか」とか言うと、私が『大公報』の人に聞かれると、編集委員並に扱われたりね(笑)

そういう中で、新中国のいろんな香港で収集できるすべての情報っていうのは、『大公報』の方にあるから、そういうのを調べて、勉強したり、それから、その彼らは彼らにこういう座談会を開いて、日本状態はどうだと、日本の労働組合運動どうとか、日本のいわゆる国民のアメリカに対する見方はどうだとか、ということ。で、沖縄どうだと。結構、そこでもう、よくそういう座談会があつて、そして、今度は夜になるっていうと、もう今晩は趙さんの家で、少し夜食を食べるかかって言つてね、『大公報』の友人に連れて行かれてね。芝居を観に行つたり、ずいぶん、贅沢なね、貴賓待遇されましたよ。

佐道 香港はその当時、結構、平穩でしたか？

上原 平穩？

佐道 平和な

上原 だから、私は、外にいるときは『大公報』の連中と一緒にいる。『大公報』の人たちと一緒にいるから、だいたい、趙さんと一緒にんだけれども、「海水浴行こう」とか。彼らの足をボールでけるのは……

眞板 サッカーですか？

上原 サッカー！ サッカーを観に行くとか、競馬を観に行くとか、そういうのは、一般の香港人、彼らと一緒にいる限り、一般の香港人並ですよ。警察ももちろん怖れることはない。「俺は何とか報の……」

佐道 『大公報』の

上原 『大公報』の(笑) ということなんです。

佐道 いま、海水浴っていうお話があつた

上原 えっ？

佐道 海水浴っていう話がありましたけれども、



上原 うんっ？

佐道 いま、海水浴っていう話がございましたけれども、夏を過ぎて、ずっと、いらっしやっただけですよ。

上原 そう。向こうはね、八、九月ごろまで海水浴できる。香港は：

佐道 ということは、一九五〇年ですから、六月二十五日から、朝鮮戦争が始まるんですけれども、朝鮮戦争のニュースとか、朝鮮戦争が始まって、その後、日本は、警察予備隊がきたりとか、ということがありますが、そういうニュースもどどん入って来た？

上原 そういのはもう、少なくともそういうニュースは、『大公报』の並みの記者たちと同じレベルの知識を持っておりまして。

佐道 で、そういうことについて、先生はコメントをされたりとか、そういうことをしておられた？

上原 それで、問題になったのは、香港に入った、私は何とかして、パスポートを作ったね、やらないと、今度は中国に入るのに、この香港政府のね、認可を得ないと出られないわけですよ（笑）香港に誰の調べもなしに入って、『大公报』の「新聞記者」になったのに、今度は出られない。シンガポールの場合は、止む無くこんなやつを抱えておれるか、じゃあコックのお願いを聞いて、彼の身内なら、送り返した方が、シンガポールの負担もなしに、上の方に報告を上げなくて済むじゃないかという官憲のルーズさもあったんでしょね。だけれども、今度は、私は『大公报』にいるんですから、『大公报』の職員として申請したら、今度は、出るときにちゃんとした書類がないと、出られないわけですね。それで、手間取って。それで、いろいろなことを、『大公报』の連中と検討して、手を打つてみたんだけど、不可能であると。下手をすると、『大公报』のその書類がインキだったと分かれば、大変ですからね。それで、最後の手段はやっぱり、「上原のお好み通

り、ご自由に行ってください」っていうことになったわけなんです。しかし、それには、国境線を突破するまでは、彼らが責任を持つと。そして、突破して、中国のどっかに着いたら、その解放軍がいる近くまでは案内すると。こういうことですね。秋ごろには、中国へ行つたわけなんです。

佐道 海上ルートですか？

上原 あっ、海上しかありませんよ。

佐道 そうですよ。

上原 その海上とかなると、もう、朝鮮戦争も非常に複雑になってきている段階だし、イギリスと中国、香港と中国との国境線っていうのは、ものすごく厳しい厳戒状態に入っているわけなんです。だから、香港からすぐに入れる九竜まで行って、その鉄の網だね、あれを、針のあれ？

眞板 鉄条網ですか？

上原 鉄条網！ 最短距離で鉄条網を突破すればいいじゃないかっていうことになるね、それは、九九%以上不可能なんです。万一警備隊に見つかったら、「ズドン」つとやられるから。あるいは、そこへ行くまでの間に、途中で英兵に逮捕されてしまう可能性もある。だから、どうせ、正式ルートでは、絶対に中国に入れないということが分かったので、香港から中国へ直接行ける船はないかと調べた。しかし、古い交易船の積荷には厳しい制限を課しているだけでなく、人の往来は厳禁でした。しかも、船名とそのトン数、構造もすべて報告されているわけだからね。登録されていない船を使うと、すぐ暴れてしまうことなんだ。

まず、港に行つて、棧橋から船に乗るまでの間っていうのは、ものすごく厳しい冒険をしなきゃいけないこともあるんですよ。そして、当日も幸いにして目的の船に乗り込んだ。それは自分でも感心するくらい迅速に、船員たちの協力もあって成功した。乗船すると、すぐ鮫尾の隠し底？ そこは船の特別な場所、一人

の人間がかがんでやつと入れられるぐらいのところである。表面はピシャッと板張りされて、板張りつて言つても、船の底なんですよ。そこは船長直轄の部屋とかで、大事なものを入れるところなんだ。そうである。船長は私をそこへ密かに入れてね、私の命令があるまで、「じつとしていなさい」と。外から二回コンコンつと叩くのは危険信号であるから、絶対に動くな。「はっ」これは一番厳しい時期だなあと分かる。香港領域を出るまでにそれが二回も三回も。英海軍と香港水上警察の検査があるんですね。それで、香港を離れていよいよ航路に入る前の段階、更に次は、香港、中国との境界線。そこで、最後の検査があるんですね。で、三回ぐらいやっているんだ。最後は英海軍だけの。そして、あとで、その船の人たちが、中国に着いたとき、「われわれは冷や汗をかきました」と。で、その船はね、香港で新造した、香港商社の新造船なんだ。新しい船を空荷のまま、中国へ持つて行つて、中国側に渡すんだ。そうさ。私はその船を利用できたんですね。だから、『大公報』の友人たちも大変、苦労したなあと思うんですね。

さて、香港の国境線を越えて、中国領海に入ると、船員たちは安心して大声で話し合っていた。船底に押し込められていた私も解放され仲間入りを許された。中国大陸も手に取るように見える。明日はいよいよ中国へ上陸なので、どのような方法でやった方が、安全なのか、香港出身の水先案内責任者は、私のことについて、『大公報』の友人たちから十分な情報を提供されていないので、上陸に際しての注意事項をこと細かく次のように説明してくれた。「明日は大陸のある港につきます。下船するときは、私の後を一〇メートルくらい離れて歩くこと。私が先頭になつて棧橋を渡り、真つ直ぐ小坂を下るので、ついて来い。もし、途中で私が危険だと思つたら、ちり紙をポケットから出し、鼻をふく。もし、私はその紙を捨てないで、前に進んでいつたら、あんた、ついてきなさい。もし、私が鼻をとつてちり紙を丸めて捨てたら、これは

危険信号である。危険と分かつたら、あんたはすぐに、後ろに向いて、至急、船に帰りなさい。それで、船で待つていてください」と（笑）。そういうことなんだよね。私はその人の合図を無視してだね、その人の肩を叩いて、「いいよ。謝々」と船員と別れて、解放軍部隊のいる方向に真つ直ぐ向かい。解放軍の守備隊長と握手した。部隊の責任者が出てきたので、説明すると、責任者が「同志！」と歓迎されて固い握手をしてくれた（笑）

そして、それから私は、まさに天下晴れて自由人となつたんだよ。そういうふうにしてね、いつか、あんたに言つたかな？ 入るのは易しかつたけど、出るのは大変難しいっていうのは、そのことなんですよ。

佐道 この港に入ったって、名前はご本人は、先生ご自身は？

上原 えっ？

佐道 香港から中国のどこに着いたんですか？

上原 えー、中国のどこに着いたっていうのはね、中国の比較的香港を離れた、広東省のある港。

佐道 ある港？

上原 あつ、福建省に近いですな。

佐道 そこで、上陸をされて、そのまますぐに、北京に行かれるわけですか？

上原 いや、それからね、その私が行った解放軍も、私がどんな人間か分からない。だから、身分証明をするものは何もないから、もちろん、『大公報』が「私のところへしばらくおりました」ということも、一筆も書いていない。書かない。書類として一文字も何もないわけなんです。それを持つて、ばれたら、すぐに捕まつてしまいますから。何もない。もし、暴露されたならば、私はこの船に勝手に潜り込んでいたんだという個人の責任にするわけです。そういうことはそれでも、打ち合わせ事項としてね、それで、入つて行つた。入つて行つたら、中国の昔の、あの頃の中

国ってというのは、交通不便だからね。福建と広東との省界ですね、日本語で何ていうのかな？ サントウ？

佐道 汕頭（スワトウ）

上原 スワトウ！ 日本ではそうだ。スワトウって言うんだ。汕頭に着いたんですよ。そこは、香港から遠いから安全だからね。

そこで、汕頭に着いて、解放軍部隊の連隊長と話し合った。もうここまで来たのだから、私はもう何も隠すことはないからね、自分の身分をね、全部さらけ出して、こういう目的で香港経由でここに来たんだと。香港では、一応、『大公報』の支援を受けたと。解放軍は私の報告を「広東省人民政府と解放軍司令部に報告するから、しばらく休んでいなさい」と言うことになった。簡単に連絡も取れないみだからね、彼らは伝令を遣って、——当時は自動車道や鉄道もないから、馬を使う以外に便利なものがないから、——報告をしてくれた。数日後、「広州まで案内してくれる」ということで、解放軍の将校二人で広州まで行ったんです。それは、汕頭の方にはいろいろ連絡がいったことから、四、五日くらい、そこで休憩して、解放軍に案内されて、約三百キロを徒歩で、二百キロくらいを馬車などで、広州に行った。広州の方で、解放軍、広東省委員会と広州市委員会の管轄下に置かれたわけですよ。

佐道 汕頭にお着きになったのは、何月くらいですか？

上原 なんです？

佐道 汕頭に着かれたのは、何月くらいですか？

上原 これはね、もう相当、涼しくなっている、寒くなっていたと思うんです。

佐道 そうですか。十月とか十一月とか？

上原 もうそんなものかもしれませんな。どうでしょう。あのとき私は、背広を着ていますからね。背広っていうか、ネクタイというふうにして。それは、結構、船底でこうして、境界線まで出る間の船底で、結構、暑くてね。恥ずかしながら、着ているも

のほとんどは脱いでいたはずですからね。そして、上って、したら、非常に新鮮な空気だということも、もうそのとき、もう、なんか思い出にあるみたいですからね。

## ■ 広州での暮らし

佐道 そして、しばらくして広州に行かれたわけなんです。広州にまた、しばらくいらつしやつたわけなんですか？

上原 そうです。広州にしばらくいました。広州では大手を振って、結局、お客さんになって、ま、そこらあたりから、いろいろな新しい中国というもののね、そんな中で、私は吸い込まれていくわけですね。

佐道 打ち合わせの前に、先ほどもお話がありました、満州の方にいらつしやつたわけですよ。で、戻ってこられて、また、中国へ行かれると。北と南で、中国はぜんぜん違うと思うんですけれども、四九年十月に中華人民共和国ができて、あとの中国をご覧になって、そのとき、どういう感想をお持ちでしたか？ どういうご印象だったですか？

上原 まず、あれですね。一九三八、三九年ごろの中国人の生活っていうのは、私は具体的に非常に記憶に残っているのは、ハルピンのね、あれですけども。いかに貧しい生活をしていたかと。労働者、貧乏人がね。その当時の思い出の一つとして、非常に基本的なあれを言いますと、私はまだ、あのころ、十四、十五歳ぐらいの好奇心旺盛なときですから。早朝、ヒマがあると、友人二人、三人でどっか見に行こうと思うと走っていくわけだね。すると、必ず、その見に行くっていうのは、人間がね、死ぬと、零下二〇度から三〇度で、ビーンと凍りついてた、それをいっばい、馬車に積んで、行くのを誰か見たって言うんだよ。「はあ、俺たちも見てみよう」と行った。本当に四、五台くらい続く馬車なんだ。

馬車の上には四肢をばつと伸ばした死体を積んでいる。真冬です。零下二〇度か三〇度ありますからね。しかも、裸なんですよ。

それが、非常に疑問で、いろいろな人に聞いてみたんだ。中国人に聞いてみた。日本人の年配の教官にも聞いてみた。すると、飢えて、凍え死んだんだ。で、死んだら、その周囲のものが、奪い合つて、その着物、自分の物にしちゃうと。だから、死体は素っ裸にされてしまうんだと。その馬車の後について行つてみたら、共同墓地みたいところがあつて、大きな穴が掘られているんです。これを何十人運んで来ようと、何十人でもぶつ込むつていうわけです。で、そこが、いつばいになつたら、その隣に新しい墓穴を掘つて、また、埋めるわけです。そういうのを実際に見てみて、いわゆる反満抗日運動の人たちが、私に、ピラで伝えてくれる。こんな怖ろしいことを日本人はやっているのかということが分かつたんですね。だから、私は中国人に対する理解とか同情とかいうのは、そういう實際を、目の前にしながら、こう自分の身体にね、少しずつ刻んでいったわけなんです。そういうことを、まず第一のその印象として、それから、反満抗日運動家やあるいは、いろいろな活動している人たちに会つて、もちろん、いろいろ便衣の人たちね、それは街に出るときであつて、そうでなければ、それは大変な粗末な生活をしてたと思うんですよ。これは満州でのことですね。

だから、今度、私は平和運動家の一人として、場所は南の広州ですが、そういうことを比較検討しながらだね、きちんと比較したわけじゃないんだけど、見たら。まず、私が泊まる場所、最初は、当時、広州で一番いいホテルがまだ残つておりましたね。そのホテルに案内されて、そこで、大きな部屋を私、あてがわれてね。「ここで、疲れを休めなさい」つて。それで、三日後くらいかな、「とにかく、しつかり疲れをとってください」つていうことで、休ませてもらった。それから、今度は、その間、二名、三名くら

いの同年輩の連中が来て、いろいろ話をしたりね。私の世話してくれるつて言うんですね。

それから、今度は広州市委員会の宿舍があつてね、その宿舍つていうのはね、非常にいい経験をしたと思うのは、中山公園つていうのがある。その中山公園つていうのは、広州で一番いい公園。その近くに、昔、小さな地主か商人の別荘みたいなもんですよ。それが、解放時に香港に逃げて、空き家になっていたのを広州市委員会が接収してだね。職員の宿舍にあてていたわけです。ちよと、斜面になつていてるんですよ。斜面の下が中学校になつていて、そこから、見るといふと、四階建てに見えるわけですね。上の道路から見ると三階建てなんです。一戸建て、今の日本で言う、だいたい、一階ごとに二部屋あるくらいの相当広かつたですね。それで、建物はレンガ造りだから、そこで、夕方になるといふと、屋上に上つて、涼めるとかね。というような設備があるところだつた。ほとんどがもう、そう遠くないところにある中山公園が見えて、当時、付近では比較的立派な家なんです。そこがこれからの私の住まいということ、そこへ引越しをして、しばらく滞在していました。それで、私が行く前に、そこに一人、先客が、——四階建てだけれど、道から見ると、三階建てなんだよ。——その、二階と四階は人が住んでいる。それで、一階と半地下みたいのね、みんな窓がついているから、上から見ると、別になつていふように見える。そこは、今度は、その二つは、一階、二階は、私の部屋ということになつていふ。で、「こんなに広いところに、俺一人住んだから、ダメだよ」つてね。「俺、寂しくて眠れない」(笑) その若い連中がね、一緒に話してあげる、案内してあげる。いろいろ説明したりするから、ということ、一緒に住むからと。

で、夕方になるまでは、その三、四階に住んでいる、おばあさんが、小さな孫をね、遊ばしているんだ。そこを通つて行かないと

屋上に、上れないから、いつもそこを通っていた。そしたら、夕方になって、勤務が終わってくると、その主たちは、広東省か広州委員会の食堂で食事してから帰ってくる。で、おばあさんは、おばあさんで、自分たちだけの食事を作って、孫と一緒に食べている。時々、行き来したんだけど、河南省出身の人だったからね。「焼餅を作ったから、来なさい」、「こっちで食べなさい」って、おばあさんが、私を招待したことも何回もあった。息子夫婦は、なかなか、八時か九時ごろしか帰ってこないから、どういう仕事をしているか、よく分からないんだけど。次ぎの日曜日のときに、私たちが、屋上に上って、若い人たちと一緒に、蓄音機をかけて、音楽を聞いたりして楽しんでいると、そこへ、帰ってきた夫婦がね、上ってきて、「歓迎します」っていうことで、話し合ってから。彼らが今度は、私の一緒にいる、二、三名、あのときは、四、五名ぐらい集まっていたかな？ 話をしてくれて。一緒にいろんな話をしている。私はこうこうして、中国に来たんだという話を聞いて、それで、彼らは、自己紹介をして、「私たちは、解放軍に何年ごろ入って、何年ごろに党に参加して、そして、そのいわゆる南下部隊の中の軍の連隊長か政治委員をやった」と。連長（レンチャン）って言うんだな。連隊長の連隊長ね。日本の日本軍で言いますと、やっぱり、日本の軍でも連隊長って言うのかな？

佐道 連隊長ね。大佐くらいの階級になりますね。

上原 そう、佐官クラスだね。先ほど言いました、もともとは、劉少奇、亡くなる前の華国鋒（ファ・グウォホン）って言うのが、主席をやった、国家主席をやった。

佐道 華国鋒（カ・コクホウ）

上原 あつ、華国鋒（カ・コクホウ）か。「ホウ」はどんな「ほう」だったかな？

佐道 「峰」っていう感じの。調べれば、すぐ出てくると思いますが。

上原 彼も連長だったんですね。後日の話になるが、彼は湖南

省でね、ある県の県知事をやった。県長（シエンチャン）をやった。そのときに、彼が、自力更生で三つの県を貫いてね、農業用水路を作ったんですね。国から一銭もカネをもらわないで。物凄く素晴らしい、農業・水利工事をやって、全国的に有名になった。これを毛沢東が非常に褒めたんだ。表彰したんですね。毛沢東が最初に、彼の才能を認めただけで、その華国鋒も、連長だった。それで、私は機会があつて湖南に行つて、彼と会つたことあるんですね。素晴らしい仕事をした人だからっていうんですね。いわゆる参観団、ある見学団の中に入つてね。行つてね。彼と握手して、話をしたことがあるんだけど。

私と住んでいた方も、ある連長だった。それで、「それじゃあ、相当な階級じゃないか」ということで、私はね「じゃあ、俺らの部屋はずっと、分配間違ったんじゃないか。俺は連長級じゃないから」と言つてね、やつたんだ。「これは、上部機関が決めたことですから、一緒に生活しましょう」ということになった。それから、元連長も日曜日になると、なるべく一緒に外に行こうと声をかけるとかね。突然、早めに帰ってきたときなど、「上つてこいよ、一緒にめし食べましょう」と何回も誘われたね。その頃になると、私の若い仲間が、だんだん数が増えて、彼らが私を中山大学に連れて行つたり、あちこちの機関を見学に連れて行つたりしてね。中国の青年たちとの交流で多忙になってきた。それから、中国語のもっと高めるための再訓練だとか言つてね、特訓をやつたりして。大変、愉快な生活をしていただけた。

佐道 どのくらいの期間、広州へ。

上原 広州にはそうですね。広州では、半年以上でしようかね。そこは、もう、生活があんまり楽しくて、自由だから、恵まれた開放感のものでね、逆に何年だったか、本当、ど忘れしてしまつたくらいですね。そして、その間に広州を中心とするその周辺のね、県あたりに見学に行つてですね。見学か遊びか知らないけれど

ど、そういうこと、私と一緒に生活している若い四、五名くらいの連中は、なるべく私を遠くに一緒に行けばいいわけなんです。なにしろ、私の中国知識を早く、広くする手伝いをする任務もあるからね。あの頃の広州は、車もほとんどない時代ですから、どっかに行くトラックは、「あるか？」と彼らは調べて、そのトラックがあれば、そのトラックに乗るとか。広州の場合は、馬は少ないから、今度は珠江を渡る船でね、渡って行くとか、彼らが日ごろ行けない、遊ぶ面積を広げてだね、私をうまく利用してだね、一緒に遊びに行くというようなことで、大変賑やかだったです。彼らは、共青团員か共産党員の青年たちであった。

佐道 五〇年六月に朝鮮戦争が始まって、十月には、人民解放軍が義勇軍という形で、朝鮮戦争に参加するわけです。実質的に、アメリカと中国が武力衝突をしている時期なんですけれども、そういう、北の方ではそういうことが行われているわけですが、そういうものの陰が、なんかあるとかですね。そういう話が出るとか、そういうことが……

上原 そうですね、毎日、新聞を読むとか、政治、時局に対する報告会が、その都度、広州市委員会の中にありますからね。大きな講堂に集まって、何かあるっていうと、何々機関の全員座れるような、何百名と入れるような会場ですから。それから、重要問題については、何々級まで、課長クラスまでとか、課長クラス以上とか、それ以下は、そうですね、その伝達の内容によって、この区分けをして、責任者が報告をやりますから。だから、少なくとも、私がそこへ行ってから、合計、ひと月くらい休んで、いろいろと体調も非常に好調になってきたので、指示にしたがって私も、そういうのに参加していますからね。だから、そのときの朝鮮問題は、初期の動きから、私たちの方としては、直接聞いている。そして、部隊の動きなどについても、だいたい分かるわけですよ。

で、私が行った頃までは、もうすでに、海南島は解放されましたからね。で、海南島の解放の戦争経験に基づいて、海南島の近くにあるのは、何半島ですか？（注・雷州半島）華南のところありますね。海南島へ向かって、解放軍の大部隊は、国民党軍の警戒線を突破してですね、船で直接行ったのは、主力部隊だけですね、後続部隊はですね、泳いで行っていた。深いところがありまされど、だいたい歩いて、このくらいまでだったら、相当な距離まで行けるわけなんだ。遠浅になっっているから。でも、ところによつては、相当深くなっているから、荷物を持って渡れない部分だけを、今度は船に押し上げてつて、こっだけ、運んで、また下ろして。というようなピストン輸送という形でもつてですね、驚くような迅速な行動でもつて、占領しちゃった。こんな戦闘方法は蒋介石軍では、まったく、考えられない、そんなやり方だったんだ。この戦術で、海南島占領に成功しているもんだから、人民解放軍は、次の戦略目標である台湾解放に向かって、全力を集中すべく全軍の再配置をしていた。台湾攻撃を早くしなきゃいけない。で、私が上陸した汕頭のすぐ、そこから、約八〇キロも行くつていうと福建省ですからね。だから、福建省にはせんぶ、部隊が、大部隊が配置、さらに後続部隊の配置まで終わっているんだ。それには、一番近い島々を一つ一つやろうという作戦。そこへ、もつてきて、ほぼ部隊の配置は、全戦線にわたつて配置したつていう段階で、朝鮮問題がややくこしくなつてきて、で、当然、中央委員会では、朝鮮戦争、北朝鮮を支援すべきか、支援すべきでないか、真つ二つに対立した闘争があった。物凄い厳しい闘争があるんですね。で、最後に毛沢東が決心して、まだ国内が安定していない、朝鮮が今度はアメリカに攻められて、そこで、アメリカの大部隊が、配置されることでもつて、中国国内の安定つていうのが、極めて危険な状態に置かれるつていう、彼の言ういわゆる戦略的判断のもとで、たとえ、経緯がどうだったであろうと、

参加すべしということでは彼は、決断して、部隊の移動を今度は命令してだね、台湾方面に配置していた主力部隊を朝鮮戦線に移したんですよ。

**佐道** そうしますと、先生は、広州でいたい半年か、これはちよつとはつきりしないですけども、朝鮮戦争までいらつしやつて、そういうお話とか、情報とかをお聞きになったりして、で、それから、北京に入られることになるんですか？

**上原** その前にすでに、先ほど、あなたの刷ったもの（注・質問表）。北京の中央では、朝鮮戦争にいかに対応するか、その議論がある。そして、それによって、急遽、朝鮮の旗色が悪くなったので、部隊の大移動になるわけですね。で、北京も大変、混乱状態になるということ。そういう中で、私はすぐに北京には移れないということ、いくつかの場所に変わりながら移っていくわけですね。だから、たとえば、広州のさらに北の方の大都市に移るとか、それから、朝鮮戦争の進行状態如何によつては、東北の一部が米軍によって侵攻されるんじゃないかというような態勢なんです。中国はそのとき、そうすると、北京に行っていたならば、北京にいきなり連れて行ったわけでは、具合悪いわけですね。だから、逆に今度は、北京にいる人たちの配置をどうするか、そういうことになるわけですよ。

## ■ 徳田球一への思慕

**佐道** そうしますとですね、先生は、シンガポールから香港へ行って、香港から広州の方に入って行って、南の方からこう上って行くわけですけども、一方で、日本共産党ですね、内部の分裂とかいろいろあつて、徳田球一さんですとか、それから、それを後を追うようにして、伊藤律さんですとかですね、野坂参三さんなどを合めて、北京に行かれるわけですよ。で、「北京機関」、「徳田機

関」をお作りになって、対日宣伝とか、やろうということ、やっておられる。まさにその、始めようとするのと、朝鮮戦争の時期は、ほとんど、だいたい重なるような時期になるわけですけども、そういうことも、先生のお耳には入っていたんですか？

**上原** 入っていた。もう、私が広州についていたら、日本の主な新聞、それから、日本共産党の機関紙が、ちゃんと届いていましたから。北京経由でね。

**佐道** 実際、日本国内での活動ができないので、中国を拠点でやろうという形で、やっていたという部分は、あつたということですよ。

**上原** そう、日本じゃできないから、今度は世界を舞台に、それのあれとして、ストックホルムと北京を選んだわけですね。だから、日本国内の状況、情報っていうのは、具体的な情報っていうのは、私自身が実際、実践の中で体験する期間は極めて短かった、ということですよ。だから、中国に渡って、まず広州を第一段階として、そこにいる間にね、私の必要とする日本情報の提供は、十分可能だったということ。それと、今度は、併せて、中国の情報、それは目の前で、実際に活動して、それを直接関係のある人たちと話をすることができたということ、非常に私は、中国対日本問題と同時に、中国対朝鮮問題等については、日本にいる人よりか、より全般的に、

**佐道** 大局的ということですか？

**上原** 大局的に、その観察し、判断する機会があつたということですね。当然、日常生活にすべてに、それは跳ね返ってきているというわけです。

**佐道** それで、先生が日本から亡命のような話で来られた、日本共産党の方々とお会いになったのは、少し朝鮮戦争の戦線が、膠着状況に入った、そのくらいの時期ですか？

**上原** ま、会ったか、それは人伝いか、間接的か、それは別とし

てだね、それが結局、彼らが北京に来ていると、北京でどういうような状態にあるっていうと、ほぼおほろげなことは、私は分かるわけなんです。というと、名前ご存知かどうか、知らないけれども、横川次郎ですね、元は南部藩の出身で、うーん、彼の経歴はちよつと忘れましたが、東北大学か、東京大学か、それはちよつと忘れちゃったけども、昔、マルクスボーイだったんだそうですよ。非常に優秀なね。それで、満鉄調査部っていうところには、そういう方が結構おられましたからね。私、知っている人たちの中にも。彼もその日本で就職できない、「もし、社会活動を続けるならば、監獄にブツ込む」と、「ただし、条件がある」と、「キミ、満鉄へ行って、調査部でも行って、働くならば、行きなさい」と。「はい、そうですか」って、行った一人なんだそうだが、けれどもね、彼は仲間が、戦後引き揚げて帰っても、ずっと残って、中国の経済建設のために、協力してくれた方なんですけれども。こういう人たちもおりますから、で、こういう人たちも本人が、自由には会いに行けなくて、必要な時に、奥さんと共に、たまに徳球さんに会えるわけなんですよね。中国側としても徳球の健康状態に対してね、食べ物の問題とか、いろいろと気を遣っているから。

笑い話みたいな思い出だけれど、この徳球を世話した人たちの中国の人たちの中には、まだ、現在も、北京で元気で、日本に来て、私が帰る前に、在日中国大使館で何年間か働いたりして、帰国しておりますけれども。その人たちの中には、徳球の最後のね、連絡係として、死に水を取ったというのかな、日本的に言えばね、そういう人たちもまだ、お元気ですけれども。そういう人たちは、限られた一部の人たちでなければ、日本から来た、徳球たちとの関係は持てなかつたわけですね。そして、今度は中国にいるいわゆる日本人。日本名を名乗り日本人として、日本人の資格のある人たちの中では、横川次郎さんたちくらいじゃないですか。本当はそのとき、こういうことは言わないですよ。南って言ってい

たですけれどもね。そういう中で、お話が漏れ伝わるわけですよ。

徳球がある日、「ウナギを食べたい。ウナギの蒲焼は中国にないのか」ということを言ったんだね。そしたら、中国の日本語のできる徳球の世話している人たちも、「ウナギって食べたことないな」。中国にもウナギはいるんですよ。でも、中国のウナギっていうのは、揚子江あたりのウナギっていうのは、水害で死んだ人がその流れてきたら、死人を開けてみるというと、ウナギが出てくるんですよ。水死体の中からですね、それで、中国人はウナギを食べないんですね。そういうことは、見たことがなくても、伝え話であるわけなんです。ウナギっていうのは、死体の中に入り込んで、何か食べるやつだと。汚らわしいやつだと。怖ろしいやつだということでは食べないの。そういう伝説があるから。ただ、ウナギに似たものですね。沖縄ではタウナギって言うんですよ。えーとね、中国ではサンユイ（山魚）って言うんだけれどもね。これはね、ちょうどウナギの格好をしている。ウナギの格好をしている、いわゆる沖縄のタウナギで、泥の中にもぐり込んで、泥の中で生活するんですよ。なんて言ったかな？ ドジョウみたいなの。

※横川次郎は、一九〇一年福島県生まれ。東京帝大卒。三六年に満鉄調査部に入り、戦後も中国に残った。新中国成立後は、外国人顧問の中でも「老専家」と呼ばれ、厚遇されていた。一九八九年四月北京にて没。八十八歳。

佐道 ドジョウとも違うわけですか？

上原 太さはウナギの約三分の一くらいで肉がしまっているんです。泥の中にもぐり込みますからね。そいつの料理の仕方っていうのは、ウナギと同じように、こうさばいてですね、そいつを上海では、蒸し煮にするわけですよ。いろんなその香料を入れてね。蒸したやつを。それを食べる。だが、それを四川省あたりに行き



ますと、油の中に入れて、「ダァーッ」と、ものすごい高熱で揚げます。それで、揚げたやつの中に、唐辛子をいっぱいほうり込んでですね。からーく味付けするんですよ。それがものすごくおいしいんですね。初めて食べる人は、ダメかもしれないけれど。そういうのはあるんだけど、それを聞いたね、中国の連中が、「こいつはサンユイだね。サンユイだそうじゃないか」と言っただけけれどもね。料理人は、「そんな辛いやつを、四川料理を出したんじゃない、大変だ」と。「よしなさい」ということになった。そして、いろいろ検討した結果ね、横川さんの奥さんが呼ばれてね、行ったらね、徳球がね「奥さん、蒲焼作ってくださいよ」とこうなっただ（笑）「さあ？ ウナギはおりません、捕まえられません」ってね、何日か延ばしたんですよ。いろいろと研究した結果ね。奥さんの発明でね、川魚を利用して、うまく、ウナギの格好を作って、誰からもらったノリがあっただんですね。そういうのをはりつけたりして、ウナギの格好をつけて、蒲焼の味付けをして、「徳球さん、これが中国のウナギの蒲焼ですよ」と持って行ったんだそうだよ。そうしたら、「おいしい、おいしい」って、食べてだね。「いいよ。言い訳しなくても」って言って、ぜんぶ、食べたっていうんだよ。やつぱり、さすが徳球だと思っただけどもね。そして、「あれはおいしかった」と。「中国のウナギと日本のウナギはあまり変わらないなあ」と言っただけだよ（笑） その話を私は奥さんから聞いてね。やつぱり、中国の料理だけじゃ、満足してなかったんだなあということが分かったんだけどね。

佐道 そうすると、徳球さんなんていうのは、もう、やつぱり、ごく一部の人が、もう。

上原 そう。隠し場っていうと、彼は日本共産党の日本人で、日本の国籍を持つ、日本共産党員であると。だから、彼に会えるのは、日本国籍を持ち、パスポートも持って、そして、その日本共産党の正式な証明書を持った者。それ以外は、絶対、会わせない

わけだ。これは、かりにですよ、徳球が「いいよ」と言っても、中国は「あんたの防衛上」ここで、文句言ったわけですよ。そういう関係になっています。

眞板 先生はお会いになっていないんですか？

上原 いや、私はどっかで、話を聞いたぐらいですよ。

## ■当時、中国にいた日本人

佐道 徳田さんだけではなくて、伊藤律さんとかですね、質問にも書いていますが、「自由日本放送」とか、そういうことで、対日宣伝放送とか、いろいろのことやっておられたわけですよ。そういうものには

上原 そういいういわゆる放送関係の人たち、そういう人たちについていうのは、若い人たちが多いから、そんな彼らのそんな中国の絶対の責任を持つての保護人材ではないからね。ちよろちよろ歩いている人のね、どっかで話を聞くとか、ある程度機会はあったかもしれないけれど。徳球というのは、中国にとっては最高級の国賓なんですからね（笑） ただし、何か私が書いたものは、送ったものを見てはいるはずですよ。

佐道 そうすると、中国に亡命してきた日本共産党の幹部の人たちと、先生の方が接点を持つていうことはあんまり少なかった？

上原 そう。っていうのは、私は日本人としてのパスポート等もないから。名前も中国名になっているから。

佐道 もう、そのときには、中国名になっているんですか？

上原 中国名っていうか、だから、しかも、中国の研究機関の中国人並の研究工作人員だから、科学院の幹部ということだから、これは党中央委員会関係機関の認可を得ない限り、できないわけですよ。身分がそういう身分に私はなっちゃったわけなんです。

佐道 それはもう、広州に入られた時点で、

上原 入って、一年くらい経ってからです。

佐道 そうすると、中国の中国共産党の党中央委員会の一番上は、それこそ指示を受けて、先生はいろんな仕事をされたということになるわけですか？

上原 その関係でね。日本人と言っても、この横川次郎さんなども、彼もパスポートを取ってなかったでしょう。まだね。昔、戦前の学校出て間もない頃、（※上原信夫氏注・横川次郎さんたちは、日本人としての資格を保持していた。私の思い違いであった。私とは全く違う立場になったので訂正する。〓傍線部）来ているわけですからね。彼は、私よりか、十いくつか、もう生きていたら、九十いくつかで亡くなりましたけれども、——息子たちは元気ですけれどもね。その人たちとは、会うというつながりだから。——彼から話は聞くことはできるわけですよ。そうね、彼は七二年の、あつ、国交回復する前だから、あるいは、ああいうくらの年配で、そうか。国交回復するまで、私は南次郎としか知らなかったからね。やっぱり、彼も私のようなね、身分になつていないと思ふですよ。奥さんと住むとき、あつ、パスポートには期限があるからね。あつそうか（笑） じゃあ、そうか。彼が国交回復して、死ぬ間際になつて、一回だけ、ある日本の団体の招待か何かで行くときは、やっぱりそうだ。臨時の入国証明書ついているのを、出国証明証ついているのをもらつていたのかな。忘れられない思い出の一つは、彼が九十歳になつたときに、私、そのとき、帰つてきて、日本で、留学生問題の……あつ、八九年の天安門事件から、さらに、五、六年くらいして、あのと、五、六年か、七、八年でしようね。もう彼は最後の段階だけれども、北京で二人で話し合ったときに、「上原くん、俺は一回はね、顔出すよ。キミ、その手配してくれないか」と、で、「一緒に行って、東京でね、日本人々に告げるシンポジウムを開こうじゃないか」という約束をしたんですよ。それから、一年半くらいしたら、身体がだん

だん弱つてきて、会つたときにはもうダメだと、奥さんが、「そんな話は絶対してくれるな」と拜むように言つてね。それからしばらくして、亡くなったんだから、そうだ、彼もパスポートを手に入れていなかつたはずですよ。（※上原信夫氏注・日本人であつた）彼も、中国の幹部待遇で、やつていたからね。

佐道 横川さんご自身も、党員でいらつしやつたんですか？

上原 えっ？

佐道 もともと党員でいらつしやつたんですか？

上原 そうです。おそらく、彼は学校のと、学生のと、あるいは、学生を終わつてから、入つたのかもしれないが、日本の特高警察からは、先ほど言つたように、日本で同じことを続けるならば、日本で職業を与えないぞと。監獄に入れるぞと国賊と言つたんだから、おそらく、比較的早い時期から、彼は参加していませんよ。そして、満鉄に行つて、満鉄でずうつと終戦まで、満鉄の仕事をして、そして、日本人が、どんどん、引き揚げていく、満鉄の連中はですね。そのときに、彼は、経済学者だから、「中国のためにお手伝いすることがあるならば、手伝いたい」ということで、彼は残つたんですから。

佐道 先生が、横川さんに最初にお目にかかつたのは、お会いになつたのはいつぐらいですか？

上原 これは

佐道 かなり早くですか？

上原 かなり早くですね。えー、私が中国に行つてから、比較的、朝鮮戦争も、もうその頃、朝鮮戦争も、朝鮮戦争は、五〇年何月からか？ 始まるのは？

佐道 五〇年六月に始まつて、五三年まで。

上原 で、三八度線が決まつてから、いわゆる停戦協定ができたのは、五〇？

佐道 五三年です。

上原 三年ですな。もう、その前からですね。

佐道 徳田さんが亡くなったあとですか？

上原 えっ？

佐道 徳田球一さんが亡くなったあと？

上原 えー、その前後ですね。

佐道 前後ですか。徳田さんが亡くなったのは五三年ですよ。

眞板 そうですね。十月の十四日ですね。

佐道 徳田さんの周辺の方がいますよね。先ほどお話が出たように、伊藤律さんとか、野坂参三さんとか、こういう方とはお会いになったわけですか？

上原 いや、野坂参三とか伊藤律には会っていないですな。

佐道 会っていないですね。

上原 私が会いたいと思ったのは、徳球しかいない。それから、連絡も、彼宛にしか出してない。

佐道 徳田さんが、もう五二年くらいから、相当悪くなられて、それと同時に、日本国内での共産党の分裂・対立が北京にも持ち込まれて、北京機関というものも、非常に混乱をしますよね。伊藤律さんが逮捕されるとか、そういう状況っていうのは、つぶさにご覧になっていた？

上原 それはもう、時々刻々と私も関心を持ってですね。

佐道 関心を持たざるを得ませんものね。

上原 そうですね。最初、国際郵便でと届く、日本の新聞は朝日と読売くらいだったでしょうか。それと、これは主な中国の図書館に入りますからね。それと、「赤旗」、これは入りますから。おそらく、半月くらいは遅れて、読んでいるはずですから、だが、中国の新聞は、当日、全部、見るから、当日のニュースはだいたい、分かっているわけですね。

佐道 そうすると、日本関係の情報などは、主に新聞などが中心で？

上原 新聞とそれから、深夜放送がありましたよ。NHKのね。

NHKだったと思うね。何とか放送という国際放送がありましたね。だいたい、夜半の十二時以降だったと思うんですよ。これは本を読んで、もう私、疲れちゃったから、寝ようかなと思ったから、ふと、ラジオを入れるとね、短波に入れますな。「こんばんわ、何々と云々ございます」って、はじめたもんなんですよ。そうすると、今度は、寝るのはもつたないと、それを聞いて、その聞きながら寝てしまうというのが多かったですけれどもね。重要問題、興味を持つ問題については、ずうっと聞き終わるとかね。そういうふうにして、情報を入手しておりましたね。

佐道 先生はそうすると、中国共産党の所属になられて、

上原 中国共産党という、中国の規定は、(社会)科学院なら科学院のある研究所だの、その研究員とか、そういうような形になっていくわけですね。で、中国では、工作証っていうこのくらいの小さな手帳があります。日本で言うと、身分証明書、就職証明というのですね。ちゃんと写真が載って、名前があつて、この何々っていう。たとえば、技術者であるとか、何々とかという、それは、中国人と同じものを私はもらって、ポケットに入れて、何かあると、「工作証(クンツウオチエン)」「あつ、そうか」って言うことで、終わりになっちゃうわけなんだ。

佐道 中国人として扱われた？

上原 扱われた。

## ■中国での仕事

佐道 主な仕事としては、主にどんなことをされていた？

上原 仕事としては、まず、私自身が勉強しなきゃいけない。新しい中国の問題をですね。で、中国の経済を。そういうことで、ただ飯を食わせてもらって、宿舍もあてがわれて、申し訳ないで

すものね。私ができる仕事は、何だろうかということ、私のできる仕事を、もしも、彼らが要望するのであれば、それを聞いて、お手伝いしてあげるとか。で、私自身が、「こういう問題はどうかなんだ」ということで、彼らに対して、意見を具申するとか。というものがあれば、そうやるのか。お互い与えたり与えられたり、という形で、ただ飯は食わないという形だね(笑)

佐道 特定の仕事というよりは、その状況とかに応じて、いろいろ仕事をおやりになる。

上原 そう。ある場合はそれによって、どこその研究で、こういう問題があるが、行つて見ないかとか、たとえば、最後の土地改革問題でこれらの部分で、改善すべき部分があると、土地改革というものは、どういうものなのか、「見ないか」っていうと、「行きましょう」で、行つたりして、とにかく、中国の新しい社会主義建設に、どういう問題があるかということ、農村ではどうだと、先ほど言った華国鋒の業績については、彼の県知事時代の県の経営を見に行つたりとかね。というようなことは、中国人としては、身分的にね、ちょっと無理だけれども、私が希望するというと、「お行きなさい」って言って、一言で。

佐道 では、中国に滞在中は、日本関係の仕事をしてきたのかなあと思っていたんですけども、そういうものでもないわけなんです。

上原 そうでもない。あれは、日本関係の仕事を知るようなね、あやふやな面があるならば、どうなんだろうかな? こうこうこうなんだろうなっていう問題。そういうことも含めてですよ。だから、今度は、私ができる中国の新しい国造りに、彼らがいろいろと計画して、精一杯努力している。そういう中に、私はそのまま、飛び込んで、一緒にやろうと。そうすると、こうやったらどうかとか、「大批判」をやるとか、批判運動をやるとか、「大躍進」のそれをやるとか、というような場合には、今度は、私、その運

動の中に、入り込んで行つて、そこで、一緒になつて、やるわけですよ。だから、中国人なら優待してもらえないようなものを、俺、半分日本人みたいなものだぞと言えば、こんな(笑) そういうことで、意外と普通の外国人なら、体験できないようなことを、私は別に特別だとは思わないで、「おお、あそこ行つて、一緒にやろう」と言つて、「いいよ、行きなさい」って、というような形でやつた。

佐道 周囲の、先生の周囲の方々は、先生のこと日本人だということを知っている人は?

上原 機関の幹部たちは知っている。それもある研究機関の、ある研究機関には、必ず門番(受付)がいる。手続きは日本と同じ。すると、仮に、別の機関の中国人が日本関係の問題に必要な時に、日本人らしい人が、「あそこの研究院にいるらしい。彼に頼んでみようや。行つてみないか」ということで、訪ねてみたら、「いや、そんな人間一人もおりません」って、追い返される(笑) そういうようなこともある。だから、いわゆる街で、一般市民は分からない。ただ、つてのある研究のある大学の方へ、私はある資料の問題か何かで、その大学の方へ行つた。そうすると、仮にですよ、そうすると、迎えに出た人が、その伝えた人が、連絡をとつた人が、「あれっ?」日本人なんていうことを言つたかどうか、知らないけれど、きつと、優遇してくるようになるとを言う場合があるんですよ。すると、私が、行くと、若い教授がね、「よくいらつしゃいました」なんてやる。あれっ? この人は日本語で俺に挨拶している。日本語なんだから、俺、日本語で挨拶しないと失礼かな? と思つて、しばらく、考えるんですよ。ぱつと出ないんですよ。「いや、いやあ、あつ、どうもありがとうございます」とか言つたら、「日本語思い出しますか?」と片言で言うからさ、「思い出しませんよ」と言つと、それを今度は中国人が「わしゃわしゃ」そういうことも、たまにあつたんだから、

だから、私はどつかのなんかの用事で行く場合でも、公用で行く場合でも、ほとんど私は、中国人並みの待遇だったと思いますね。

佐道 じゃあ、どつか特定の機関にずうつといらつしやったわけではなくて、少しこう変化を？

上原 えー、そうですね、やっぱり、いくつかのところをこうずつと、移動したわけですね。

佐道 本拠は北京？

上原 えっ？

佐道 北京自体に？

上原 そうですね。やっぱり、科学院の中心は北京ですからね。北京にはいろいろな研究所がありますからね。

そして、たとえば、先ほど言った朝鮮戦争が、極めて難しい状態に入っていると、そうすると、東北とか北京、あの一帯は前線、あれを第一線って言うんですよね。安全上第一線にはなるべく、立ち寄らせないとか、それから、中米関係の悪化と共に、さらに、朝鮮戦争が終わって、ソ連との関係がますます悪くなりますね。朝鮮戦争の後に、それは、朝鮮戦争に対するスターリンのやり方にも問題がありますけれども、で、そういう場合も今度は、米国とソ連が原子爆弾で脅すということになってくると、まず、重点都市はまず、危険（前線）地域になりますね。そういう場合は、そうでないような地域にね、公用で行って、しばらく生活するとか、研究活動を一緒にやるとか、そういうようなことを中国人であれば、普通、田舎。

ただ、遺憾ながら、文化革命で、騒動になったときに、江青たちの奪権によって、私は、中国人同等扱いの名譽を剥奪されるわけですよ。そして、外国人だということになり、中国人と同じ「工作証」も外国人としての「工作証」に変わり、私は大変腹を立てたんだけどね（笑） そういう変わり方はありましたですね。

## ■文化大革命を経験

佐道 実際、文革は大変な時期だったんじゃないのかなあと思っていたんですが、やっぱり、相当、迫害というか、厳しい状況だったんでしょうか？

上原 いやあ、私の中国滞在中、いかなる形での迫害は受けていないですね。いわゆる政治待遇の面で、いわゆる極左分子たちのやり過ぎがあった時代でも、私は何ら拘束も受けていない。中国では中国人待遇だから、別に何も言わない。たとえば、研究者としてのものは、その関連する研究機関の、工作証に、漢民族とか、ウイグル族とか、朝鮮族とか、五十六の民族のいずれかがの族名が、書かれるんですよ。だけれども、そういうことを別に表示しなくてもという理由は何も書いていない。だから、私のものは、何も表示されないものをずっと持っていたわけです。それで、どこへ行ってもそれが通ったわけです。文句言えば、それにある発行機関に連絡をとれば、いいわけだから。それが、文化大革命のときに、「奪権闘争」、すなわち、権力奪い合いのその闘争で、四人組が権力を手に入れた段階で、外籍（外国籍）の者は、改めて審査するということだね、「古い工作証を出してくれっ」って言うから、古いの出してあげたんだ。今度はひと月か、ふた月ぐらいして、新しいのが来たわけなんだ。格好は、前のよりか小さくなって、格好も良くなって、出来ただけけれども、そんな中に私は、籍は日本とこうなっていたんだ。「こんないらないよ」と、「返す」と、すると、また持ってきてくれて。「これは革命委員会の決定である」と。「革命委員会、誰が、責任者だ」と。「江青同志であります」ということなんだ。

佐道 それで、身分証が変わることによって、具体的な不利益っていうのはあったんですか？

上原 いや、ないけど、そのそれぞれ、私の属する機関での私の生活とか、活動っていうのは、私にはそういう団体活動は、人から好かれる方なのか、どうなのかは分からないけれども、私の周囲にはいつもたくさん友だちができてだね。すると、私が機関で決めた私のそれなりの協力者っていう者、仮に二十名か三十名いたとしますと、それ以上の輪が広がっていくわけですね。私の友だちは。

そういう関係で、私は機関から恨まれたっていうのは、一つだけある。まず、そうですね。五反闘争のときだと思います。

そのときに、学習の好機会なのでもちろん積極的に私は参加したが、肝心の批判する相手の経歴とか、立場とか、そういうのは分からないから、批判大会等で、私は批判できないわけですよ。なにしろ、中国での生活が短いからね。したがって、批判大会に出ている、私は彼らの発表する批判を聞いて、「はあ、そうか、そういう良くない経歴もあつたのか」とかね。それから、批判対象になっている彼の発表した論文を見たりして、本人が非常に研究活動に熱心であることを知って、「はあ、もったいないな」って思っ、彼に同情して応援してやろうと思っ、声かけたりするとかね。本人は大変元氣になつて、積極的に自己批判をして、自分の欠点を克服してみながら、高く評価されたね。そういうことをやっただけでも。大字報（壁新聞）を書くにしても、たとえば、この研究機関の中に仮に、数百名くらいいるとしますと、その中の誰かを批判するときに、ちゃんとした文章の達者なやつが何人かいる、彼らが中心になつて文案を作るわけなんですね。いくつかの組に分かれてですね、誰かが代表になつてだね。そうして、名文ができたけれども、今度はね、これを書く人が、必要なんだ。筆でちゃんとピシヤピシヤと書かなきゃいけないから、間に合わないんですよ。すると、私のところへ来てね、「キミ、毛筆うま

いんだから、書いてくれよ」とこう（笑） 私は「俺、責任持たないよ。内容については責任持たないぞ。キミの書いた文章をそのまま書き写すだけだよ、責任の所在は明確にしておいてくれよ」。さて、実際の作業ということ、こんな大きな大字報用の大きな紙、新聞紙よりも大型のやつ。数枚も連続で書くと、相当な時間がかかりますけれどもね。あまり、崩して書くと、今度は、若い人は読めないと言うから、出来るだけ正確に書くと。それがいつの間にか、人気が出てね。「頼む上原、頼むから」とか言つて持つてくるので。与えられた任務以外のね、仕事で大変多忙になりました。しかし、集まった友人たちと一緒になつて、議論しながら、筆を進めるので、実は楽しい時間でもありました。その中で、大批判をもつと有意義に、しかも、文化的に楽しくするためにどの意見や声援してくれる仲間もいるから、だんだん調子に乗つて、「俺、手伝つてあげるよ」と言つて、大変気前良く次から次へと注文を受けました。さらに、ときどきこの大字報を作るときに、簡単な漫画を挿入したりした。たとえば、日本で言う、「頭隠して尻隠さず」とかね、そういうような言葉に適當するような批判文があれば、そういう絵を描いてね、これは、私から「お前たちにブレゼント」だと渡すと、その絵は、私の作品となるので、作者の名前を書かなきゃいけない。あと、責任問題もありますから。私の名前書いたわけですよ。

そういうことをやつてい中でね、ある「極左分子」の一人が、私を恨んで、「彼は外籍でありながら、中国人幹部を批判している」と騒ぎ出した。この論文は私が書いたものではないと、作者は別人であると、ちゃんと書いてあるにもかかわらず、そういうことを二、三回やつて、とうとう口論になつて、二人が、結局そこで、「キミがそう思うのはひがみだ」と、「俺は頼まれたものを清書しただけじゃないか」と。「このマンガはね、俺の贈り物だよ」と言つた。それが二人の中をいざれ悪くしてだね、彼は私宛の批判の

ね、「大字報」をね、彼は毎日毎日書いたんだよ。それで、そいつは、私を悪者にする事だね、大衆の注意を私に集中させて、批判すべき人物を大衆の批判から目をそらせようとしたわけなんだ。彼のその醜い根性は、どうやら、何か政治目的があるようだったので、私は、「私をこの批判運動から排除したいのならば、どうぞ関係機関に対して断固問い合わせろ！」何て言うことを言つて(笑) それはできないから、逆恨みつて言うんですか。「なんだ、この野郎、なんとか叩き出してやろう」と思ったかもしれないが、運動は、みんなが私を支持して。大衆との仲はますます、仲良くなつていったというわけなんだ。

そして、それが、後日談になるが、その「極左分子」は、文化革命になつたら、文化革命の初期の段階で自殺をしちゃった。ということ、彼の仲間は、そのかつて、大批判運動のときの批判をした、その手伝いをした私をいかに恨んでいたか、それを暴露されたら大変だつていう怖れもあったんですよ。彼は批判運動が盛り上がる前夜に可愛そうに自殺をした。彼は日頃の要領が良いから、中級幹部の地位に上つていたんですよ。これも忘れられない思い出です。

だけれども、文化革命初期になつてくるといふと、たとえば、どこの機関(行政、教育、研究、向生産工場等生産単位)でも、まず主に二つの派に分かれるわけですよ。いわゆる毛沢東派とか、やれ劉少奇や鄧小平派だつていう、左派と右派という両派に分かれる。そして、大学生も、左右両派に分かれる。すると、社会人も幹部も労働者も、すべて、二つに分かれて、議論し合うわけなんですね。その時も、私も自然とその闘争に最初から、巻き込まれて参加しているわけなんです。文化革命の批判大会は、誰々のこの、たとえば、ある学術研究機関の専門家の中には、いわゆる学術権威者つていうのがある。それは、封建的な頑固者もいれば、進歩的な新型学者もいる。たとえば、反動的学術権威者

の批判大会とかになると、「彼はこういう論文を過去において発表して、国家と人民にこれこれの損失をもたらした」とか。「革命以前においては、国民党の下でこういうことをやってきたが、戦後、われわれの戦線の中に戻ってきたけれども、こういう、過ちを今もやってる」というようなことで、批判されたりする人もいるわけですから。同じ機関でも立場、思想、見解の異なる者が当然いる。そういう中で、仮にあなたが、ある研究機関にいたとしますという、あなたが左派組織の方の中心になつて「〇〇思想戦闘隊」の組織責任者の一人になつたとする。もう一人の派閥が右派の方の組織だつたとすると。それなりに右派らしい「何々幹部戦闘隊」とかを組織して、組織の旗を揚げてその旗の下に団結する。それから、各大学の方では、何々大学、紅衛兵何々学生何々戦闘団とか、というのを結成する。そういうときに、私に「参加して励ましてください」と招待されるような場合もあったんだ。

その頃は、各大学・機関には、少人数の丸腰になつた解放軍の宣伝隊が、駐屯してますですね。武闘があつたら、いけないということ。じゃあ、そういうときに、解放軍の宣伝隊の幹部たちが、「じゃあ、学生たちが参加しているから、一緒にいきましょか」つて言つて誘うので、「一緒に行こう」と言つて、近くの大学の学生たちの結成大会に何回か参加したこともあつた。学生たちの結成大会には、「来賓にご挨拶してもらおうじゃないか」ということになる、今度は、解放軍の代表だとか、次は私に「ひと言お願いします」と彼らが言うから、ひと言挨拶するとかね。というようなことで、相互の革命的戦闘友誼は深まったが、文革後期になると、武闘になつてくるから、あとは交流がないから、分からなくなつてしまいますけれども、その初期の段階においては、たとえば、どっかの機関の関係委員会の責任者に対して、意見提出に行くとかいうときには、何とか革命何とか団つていうのは、それぞれ団体旗があるんですよ。そういう旗を先頭に押し立てた

いわゆる「革命行動」をする時には、「一緒に行こうよ」と引つ張り込まれてね。それで、行ったりするとか、ということでも、結構楽しく、このように文化革命を経験し、大変勉強になりました。そして、その文化革命の中で、私の親しくしているある幹部について「キミも彼と一緒に仕事をやったことがあるんだから、内部事情を知っているだろう。革命批判のためにぜひ暴露してくれよ」とか言われたこともあったけれども、私は「彼の批判されているその点は、間違っていると思うが、それにしても、彼は彼なりに精一杯、革命のため努力したんだから」と、私はあまりしゃべりたくなかったが、少しでも擁護してやったために、彼に対する大衆の攻撃の矛先が、緩んだりしたこともあったね。

さて、私、帰ってきてから、意外と多くの方から尋ねられたのは、「文化大革命では日本人はひどい目に遭ったそうですね」という挨拶から始まるわけですね。「いや、ちっとも、遭っていないですよ」ということを言うとき……

佐道 普通、結構、文革のさなかで、もともと日本人でいらつしやるということになると、「きつとひどい目に遭ったんじゃないか」というふうに、普通、そう思ってしまうすよね。

上原 そうでしょうかね。だけれども、まず、その文化革命の最終段階の権力闘争でもって、江青たちが権力を握ってしまう段階まで、私は、機関では、そういう点、保護されているわけですからね。誰が来ても、「外国人はおりません」って、「日本人なんておりませんよ」って、こうやって追い返してくれたから。

佐道 五〇年代くらいから、正式な国交がないわけですから、国貿促（注・日本国際貿易促進協会）などを中心に中国と経済関係で、つながっていたわけですよ。六〇年代には廖承志さんとその高崎達之助さんとLT貿易が始まって、北京にはLT貿易事務所があるので、これは、早い話が大使館の代わりみたいな形でいて、それで、経済的な関係は、広がりますから、国交はないものの、

若干、いわゆる日本人も少し、こう北京に入ってくるようになってきたと思うんですが、共産党か共産党でないかは別として、そういう日本人の方と先生が、接触されるということは、あまりなかったんですか？

上原 なかったですね。LT貿易が結ばれたのは、五三年？

佐道 いや、六三年です。  
※日中間のLT貿易は、一九六二年十一月に「日中総合貿易に関する覚書」の調印で始まった。

上原 ああ、六三年。それから、間もなくして、七二年の国交正常化。だから、とにかく、私のことで、日本人が中国と直接話し合ったっていうのは、七三年ごろでしょうか。そのきっかけは沖縄代表団の団長の平良那覇市長ですかね。何て言ったかな。彼らが訪中した時、私の名前を出して、上原信雄が中国に滞在しているようですが、彼の帰国にご協力下さいと「請願書」を中国政府に提出しています。これで私の中国滞在が公になりました。私自身は沖縄の訪中団が来たことを後で知ったのですが、日本へ帰る手続きを中国で、終わるまで、直接日本人とは誰とも会っていないですね。

## ■帰国するまでの経緯

佐道 単純な疑問として、先生が北京で中国でお元気にされているということ、日本では、沖縄の代表団の方にはどこから伝わったんですか？

上原 これはね、こういうことなんだそう。いわゆる米軍の憲兵隊か、じゃない、アメリカの情報機関ですかね。軍作業員で中国語のできる人たちを募集したんだそう。(\*上原信夫氏注・本



人の話)そのときに、私が前から知っていた中国に滞在したこと  
もあって、中国語を片言くらいは話せる古我知さんがいたんです。  
彼は那作業員募集を知って、難しいかもしれないけれど、試して  
みようじゃないかと。受けに行ったら、片言の中国語で、話しか  
けたりしてやり取りがあつて、始めたんだそう。そして、何か  
中国文を書けとか、そして、彼らが録音したやつを聞かせたり、  
どの程度理解できるか、いろいろ試されて、これはいけると思っ  
たんでしょうね。そして、「この中で、上原信雄というのを知って  
いるのはいないのか」とか、「キミは中国語はどこで学んだんだ」  
ということ聞いたんです。そのとき、みな「知らない、知ら  
ない」と言っただけだ。彼はうっかり「どっかで、聞いたみ  
たいな名前ですが、よく分かりません」って言った。そしたら、  
彼は落とされたんだそう。それで、次ぎの面接っていうか、そ  
のときはダメだろうとあきらめていたら、どうやら適当な者がい  
なかつたらしく、「来なさい」ということで、行ったら、改めて  
「キミはどこで聞いたんだ。その上原の名前を」そしたら、「いや  
あ、なんか新聞か何かで、載ったようなのを見たような気がした  
んです。分かりません、この人は」っていうやりとりがあつて、  
採用されたつて言うんです。で、採用されたら、読谷かどっか  
の、何とか象のオリとか、そこで、毎日、中国国内のラジオ放送  
の盗聴、盗み聞きをさせられた。それが彼らの任務だった。彼は  
その中国の国内放送の、盗聴訓練を経て、中国の国内放送の内容  
がだんだん分かってきたんだそうです。その中で記録すべきもの  
は記録をして、資料を整理している中で、どうも、人名らしいつ  
づりの中で、「シヤン」と「シヤンエン」という人の名前だろうと、  
それがどうのこうのということをやっている。彼はそれを控えて  
ですね。前後のそれをつなげて、思い出して見るといって、なん  
か、この上原が、中国に生きていて、その国内のラジオ放送で、  
彼のことを触れたことが、放送されたんじゃないかと。それだけ

の話しなんです。だけでも、彼がはつと気が付いたときには、  
隊長が前に来たんだそうです。そうすると、彼はがたがた震え  
て、大変だと思ったそうです。私のことよく知っていたから、沖  
縄を脱出する前に私におじやを食べさせた男なんです。それで、  
「どうした? キミ、身体の具合が悪いのか?」「はい、ちょっと  
具合が悪い。胃が痛くて」どうのこうのと説明したら、「すぐに救  
護室へ行って帰れ」ということで帰されたんだそうです。で、部  
隊を出ると彼は家にも帰らず、そのまんま、沖縄農事試験場の場  
長をしていた平良宏つていうのが、彼の名前は、あとで金城に変  
わっているんですが。

この出来事の経過は、実は帰国後十年くらいして、分かつたん  
だけでも。古我知が平良のところへ走り込んでですね、「信夫がど  
うやら、生きていますよ」今日の中国の国内放送を整理してみ  
るとね、「きつと、中国のラジオで言ったのはね、上原信雄のこと  
だよ。間違いないよ」と古我知が言ったら、今度は、平良くんが  
びつくりしてですね。「だったら、すぐに、山城善光のところへ一  
緒に行こうや」というわけで、今度は二人で山城善光の家に行つ  
て。山城に報告したんだそうです。山城善光は、「よしやつた  
ー! やつ生きているんだ」と手を振つてですね、「間違いないじ  
ゃない。あいつのことだったらきつと生きています」と。戦友の生  
存を喜んで、まず那覇市長を訪ね、その足で、屋良知事のところ  
へ頼みに行き、沖縄著名人の署名運動を展開しようということ、  
何百人か知らんけども、署名を集めたんだそうです。そしたら、  
偶然にも、沖縄県から初めての友好訪中代表団を派遣する段取り  
をしていたんですね。その那覇市長か誰かが団長になって。それ  
で、「上原信雄の帰国促進の請願書」と集めた署名簿を中国に提出  
することにしようです。その中国政府に提出した請願書は、山  
城善光の要望に依じて、もし、彼が帰国可能であるならば、われ  
われ沖縄の人たちは、彼の帰国を歓迎しますと。是非ご協力下さ

いという内容だったそうです。それを持って行って、中国に、そのときの友好団体は、それを扱っているのは、おそらく廖承志さんの関係部門の機関だと思っただけども。

※上原信夫氏注（補足） ほぼその頃だったと思うが、国貿促の誰かを通じて、沖縄の山城善光宛に手紙を託したことがあったことを思い出した。

それがきっかけとなって歴史が動いて行ったんです。それで、中国の関係部門の担当者もいったい、その沖縄人訪中団の人たちが言っている上原っていうのはいるのかどうか。それで、彼らの知っている私と、これは話が一致するのかどうかということ、調べて、「こうこうなんだが、帰りたいんだったら、いい帰る機会だと思っただが、試してみるか」と。ただし、それには、パスポートを取らなきゃいけない。大使館の手続きが終わって、大使館の承認を得て、さらに日本の外務省の認可を得なければ、帰れないんだぞと。そういうことを説明やって、いいのかわかぬということ、私が（笑）もし大使館に行って捕まった場合も含めて、私と相談したんですよ。それで、私、考えてみようということ、私と相談したんですよ。いろいろと最近の関係情報を暫く調べて、ある程度の予備知識をもって、最終的に決定したわけだ。それで、今度はパスポートを作らなきゃいけない。まず、日本人居留民としての申請をまず、大使館にしなきゃいけないとか、いろいろなこととか知らないけれど、複雑な手続きがあるんですよ。そして、間違いなく私が、日本人であるということを今度は中国側は、証明しなきゃいけないとか。本人がそういう事情であるから、ひとつご協力をくださいと、今度は逆に日本大使館や日本政府に關係部門を通じて、連絡しなきゃいけない。

だから、一番面倒臭い問題になったのは、そういうことは、お

そらく日本大使館、日本のしきたりとして、本人が出なければ、必要書類は発行しないという慣例があるんだそうですね。そして、私、出て行かなきゃいけないんですよ。出たら間違いなく、日本の政府が、どこへ行つたんだろうと一所懸命探している上原信雄だったということになると、帰る前に日本大使館に捕らえられるかもしれない。という危険性があるわけなんです。それで、私は別の遠いところに行つて、継続研究する課題があつて、目下、研究中であるから、本人は残念ながら、時間の都合で、彼は中国のために、一つの仕事を終わりたいと言っているんだから、本人が出るのができないそうですが、われわれのこうこういう機関に免じて、手続きだけは進めて、できるんだしたら、進めてくれないだろうかという意味のことを、お願いしたんでしようね。そして、これは私の想像ですよ。そして、私に対して、「いや、キミは特に顔を出す必要はないんだ」と。「待っていなさい」というので、待つてたらね、それから、何か月か経つたあとで、そのときまでは、本人自身が大使館に、顔を出さなきゃいけないようなところへ、顔を出さないうで進めている手続きだから、どうせ、五〇%以上はダメだろうと、腹をくくっていたわけなんです。そして、そこへ、「認可された」という連絡があつた。どういう認可をされたのか、私はずうつと、分からない。中国關係部門の外交交渉の努力の結果だと、分かり感謝した。

じゃあ、私は間違いなく、沖縄生まれなんだ。日本国籍はなくても。その沖縄の籍には、両親がいるかどうか、生きているのかどうか、これを調べなきゃいけないわけですね。それは、中国では調べることができない。

だから、なんとかしようと、中国の關係部門や、日本の日中友好人士も含めてですね、日本の日中友好協会とか、いろんな組織がありますね。そういうところの人たちに、お願いして、まず私の本籍はどこだろうかということになると、まず、沖縄に行つて

調査しないと分からない。しかし、沖繩に行ってみたら、私の父母は沖繩にはいないわけですね。沖繩に調査に行った人たちは、多くの奥部落の人たちに聞いて調べてみたら、「あの人たちは九州に行っただろうな」と言われたので、調査を依頼された方は、福岡に行ってみました。兄貴も家にいない。その頃に、兄・直彦は、もう死んでいますからね、殺されていますから。そして、きつと大阪だろうということで大阪行って、大阪でやっと見つけた。沖繩県人会だとか行って、調べたんでしょうね。そのように、みな協力で、私が日本人だという戸籍謄本を新しく作ったのか、何したのか、それを中国側に送って、うちの母も生存していると、ただし、いま、重病で危篤状態の病人であると、息子は、所在不明なので、心労もあって、親父はもう、十何年前に亡くなっているが、母親は幸いにまだ生存しているという。母親は自分が生きていた間に信雄が帰ってくるならば、大変うれいという意味の口添えがあったことも、含めて、それを私の家族の近況を調査した人たちからの報告という形で、中国関係部門から私に伝えて来ているわけなんです。そこで、中国は、「必要書類が揃ったから、じゃあ、手続きしていいな」と。「その手続きについては、一切、中国の関係部門が責任をもって進めるから、キミ顔出さなくていいから安心せよ」ということで、それなら、「お願いします」と任せましたよ。

佐道 で、無事に

上原 それで、帰ってきたんですよ。で、その余談だけでも、私が帰国して、初めて沖繩を訪問した時、聞いたんですが、戸籍を沖繩に調べに行った人たちはですね、二人の“虚無僧”だったようです。国頭のあたりをあっちこち、尺八を吹きながらね、調べていたそう。そして、私と関係があるという、家庭を前もって、どっかで聞いたんでしょうね、役場あたりの。そして、私のおばさんの家がまだ、二つあったから、そこなんかに行って、

その尺八を吹いてから、おばさんが「坊さんが、家に来て、音楽をしてくれて、私を慰めようとしている」そのときは、八十、九十近い人だからね。そのいつか話したことがある、例の郵便船を持っていて、奥と与論との郵便物の渡し役をしていたという、その郵便船の玉城のおじさんの家のおばさんは、もう、九十以上で私の大おばさんの一人なんだ。それに、もう一つは母の姉の家に住んでいるんですよ。その郵便船の船頭さんをしていたという家のおばさんは、白いコテを見て、「あつ、手を隠している。信雄である。信雄が忍び姿で来ているんだ」と、そのおばさんは、その虚無僧の手を握ってだね、掴まえてだね、それを引き剥がしたんだ。そして、傷がないなど。そのころ、おばさんの思い出の中に、血が出たりしていたのが、思い出の中にあつたのか、コテをはがして見たんだけど傷がない。それでおかしいと思つたつていう。そういう話を私は、沖繩へ帰ってきた時に、その家族から聞いたんだけど。私の戸籍を作るために、沖繩の人も、九州の人も、大阪の親戚関係も、含めて苦労したけれども、それよりも、大変苦労したのは、その手伝い役を引き受けた人たちなんだ。だから、その人たちがいまだに、自分の名前を名乗り出ない。ある人だけが、暗にそういう可能性を暗示するようなね、ことを言ったことがありますが。その人はよく分かっている。その人たちは、私のために大変危険な仕事をしたんだという使命感を持っていたようだ。

佐道 無事に帰れるといいですか、という状況になったときに、どういふふうにも思われましたか？

上原 えー、結局

佐道 中国に骨を埋めるおつもりだったわけですか？

上原 結局、国交が回復しましたからね。それまでは、日本人を見るなんて、全く奇跡みたいなものでしたね。当時は、広州の交易会

つてというのがあって、日本の大中小企業の貿易業の人たちも来ている。そんなかには、国貿促の人たちってというのは、中国の貿易で一番最初の貿易の開拓者だから、この国貿促の連中の中には、帰ってきてから、結構、みんな知り合いになりましたね。親しくなつたんですけれども。そのころになると、もう、多くの人たちが行き来している。それから日本の友好貿易会社っていうのもたくさんできています。あの友好貿易会社っていうのは、図書関係からいろいろな鉄鋼関係にいたるまでですね、国貿促の関係で交易物資を分配して、それぞれが、特別な優遇を受けて、特別な権利として、彼らは、ずうっと、ある段階まで、その貿易ができたわけですね。だから、そういう人たちも、中には中国との関係をうまく利用して、儲かっている人たちもおりましたけれども、そういう状態をこう見てくると、日本もずいぶん、変わりつつあるんだなあ。たまたまに、そういう人たちと、知り合いになって、日本語のできる中国人として、一人、二人ぐらいの人たちになんかの機会で、会って話してみると、うっばり、日本人のものの考え方っていうのは、大きく変わらないんだなあ、だったら、つまらないから、あまり、健康状態もあれだし、年も年なんだから、もうあきらめて中国で、ゆつくり生活した方がいいんじゃないかと思ったりもしたんだけどね。でも、母親が病気であると、しかも重病であると、重体であると、で、母親はもし、本当に私が帰って来れるんだしたら、生きている間に、帰ってきてもらいたいという口添えがあつたっていうことだからね。そんな何十年間かね、親不孝したんだから、親父ももういないんだから、せめて、母親の死に水だけは取りたいと思つてね。それで、決心したんですよ。

佐道 ちよつと、戻りますけれども、そもそも先生が生きてらっしゃるのじゃないかと、きつかけになった、その例の放送ですよ。

上原 えっ？

佐道 放送

上原 ラジオなんか。

佐道 ラジオ放送。これは先生ご自身は、心当たりはあるわけですか？ 先生の名前が出るという。

上原 そのね、きつとね、そのころはいわゆる文革の中で、相当、先ほど言ったね、左右両派に分かれての混乱状態ですからね。国内放送でも、あの人も俺たちの仲間だぞっていうことを誇示したい、いわゆる宣伝合戦があつたのは、事実であつたと知つていまずからね。一方においては、林彪の影響力の大きかった地域などは、野戦軍団が組織されて、速射砲まで使いましたからね。そういう時期ですから、少しでも、彼ら他の一般中国人よりも、少し毛色の変つた者が、俺たちの仲間に理解を示したとか、俺たちの設立大会に参加して、演壇に立つて挨拶したんだ、ということになると、もつと、たくさん、人が集まるということもあつたのは、事実かもしれせんね。

たとえば、それを思い出すと、文化革命のその当時の初期の段階の武闘に移行する、撃ち合いを始める前の段階を考えると、ううと、毛沢東が紅衛兵の代表を集めて、文化革命とは武闘ではなく、文闘であると、だからね、こん棒を持ったり、武力を持ったり、相手を脅したり、やつつたりするのは、これは一切許さない。文化革命の目的と進め方を紅衛兵たちにも、よく理解できるように講演をした。どこでだったかな？ ちよつと忘れましてけれど、天安門広場なんかでの全国紅衛兵の代表者会議かなんかのときに言つたんですよ。それはその日のうちに、ダアッと広まつてね。それを速記したものが、全国に、その紅衛兵の代表者がみな持ち帰つたわけなんだよ。それからね、文化大革命とは、武闘を絶対排除し、文闘を進めるべきだとの方針が、工、農、兵、紅衛兵にも徹底したところ、何週間も経つていないときに、今度は江青の名で、その天安門の広場にね、全国各地の紅衛兵の代

表者の大会を開くわけなんです。そこで、江青は毛沢東の名をかたつて、次のような発言をしたわけなんだ。その発言の中にね、「相手が頬を叩くならば、相手の頬を叩き返せ！ 相手がこん棒で殴りつけてきたら、こん棒を持って殴り返せ！ 相手が銃を持って、向かって来たら、キミたちも、銃を持って撃ち返せ！」と、これが革命だと、こういう毛沢東の意思とはまったく、相反する演説をしたんです。それは、数週間くらい前に毛沢東が、「要文闘」、絶対に武闘は許さないぞと厳しく論じ、その後周恩来も、絶対に、文闘を堅持するのだ。武闘でなく文闘で行くんですと改めて、説得し注意したにもかかわらずだ。

さて、毛主席の教えとは全く反する、江青の武闘開始への扇動は、毛沢東の講話よりもっと速い速度で全国に伝わり広がった。江青の武闘支持指令に基づいて、早速具体的な行動が始まった。まず、一番最初にやり出したのは各大学での、実弾射撃の軍事訓練の復活要求ですよ。普通どこの大学でも、文革以前は、月一回くらいの実弾射撃訓練をやっていたのですが、もうそのころ、ほとんどなくなって、数ヶ月に一回か、または全く実弾射撃訓練はやらなくなっていた。本来、この訓練は、所属部隊、関係地域の駐屯部隊、北京なら北京の関係部隊の司令部の指導計画に従って、行われていたのです。それを今度は、文化革命の段階になってくるっていうと、いわゆる、文闘の段階で、それをぜんぶ、禁止しちゃった。そして、毛沢東は、各部隊の指揮官と優秀な兵士たちを武装しないで丸腰で各大学や主な機関に対してですね、いわゆる政治工作隊として、派遣するんですよ。だから、その表れとして、文化革命では、絶対、武闘は許さないというのが毛沢東の意思であると。全国民はこのことをよく承知なんだよ。それを何週間かあとで、ぶっ壊して、江青、この江青はそのときに毛沢東の病状の悪化を利用して、もう周辺の極左分子どもと共に手を組んで、毛沢東を排除した権力を自分を中心に立ち上げる夢を持っていた。もうすでにその頃は、江青は、国

家の権力は私の手に握られているんだという錯覚に陥っていて、あの伝説を故意に流した。それは、満清朝の政府の最後は、慈禧皇太后（注・西太后）が、権力を握ったじゃないかと、そうすると、少なくとも、毛沢東が死んだら、たとえ、臨時政府であろうと、臨時中央委員会であろうと、私を次ぎの主席として支持するのは当然である。これはもう、彼女の周囲の実権派、張春橋、王洪文、姚文元等を含めての一致した意見だったんですよ。そこで、そのような妄想の下、彼女はね、毛沢東の文革精神を根底から叩き壊して、直接、武闘を唱えて、武器を持って立てという指令を発するような構図になったわけなんです。だから、それ以来、江青は少なくとも、毛沢東になり代わったつもりで、発言していたんだと言っているわけなんです。それから、数日以内にだよ。まず、一番最初に北京における、いくつかの大学が、もう何ヶ月間も、軍事訓練で、実弾射撃をしていないから、腕が鈍ってきたので、ぜひ、実弾射撃訓練を復活してくれということを解放軍司令部に、抗議に行くわけなんです。そして、そうだな、軍事訓練くらいして、引き締めてやろうかというのは、当時の担当者の考え方だったんでしょうね。それで、よろしい、ということ、二つか三つの大学で比較的早く軍事訓練の実施命令が出たので、関係部隊の教官たちは学生を演習場に連れて行った。それで、それぞれ各自に、従来通り、実弾も配った。それで、さあ、実弾射撃の位置につけていうことになったわけ。そして、位置につけてという命令を出したらだね、そのときはまだ、各学校駐在の解放軍の工作隊は、丸腰の指揮官だからね。そして、学生たちはね、銃を持ったまま、ワァーと集まって、それ行けっ！ 帰ろうっ！ て、サァッと引き上げて行ったっていうんだ。それで、学校に帰って、しばらくしてから、ボンボンって撃ってね、景気づけが始まるわけなんです。それが、江青講話後の二日か三日の間に、起きているんです。労働者の中でも、労働組合の中の右派や左派の連中は、どういうことをやり出したかというね、各県や各市

民兵の武器庫があるんですよ。その武器庫に夜中に行つてですね。

武器庫の番人を縛り上げて、カギをぶつ壊して、中にあつた民兵の武器を、銃や機関銃も含めて、弾薬はもちろん、みんな持つて帰つた。そして、数日以内にそれぞれが、それこそ、大隊単位か中隊単位か、小隊単位くらいでもつて、武装集団ができるわけなんですよ。

だから、そういうようないわゆる指揮系統も混乱で、しかも下手にそれに反対するとやられてしまうという、今度は命がけなんだよ。そういう中で、先ほど言つたように、ある私を設立大会に呼んだ、ある大学の紅衛兵の団体は、そういうことを誰かがね、もまして、これを放送で流せば、つていうことで、やつたんじゃないかなあとも思うんです。これはむしろ、上級の権限を持つている人から、絶対、拒否されますけれども、なにしろ、放送局までも、彼らの配下に入つてゐるわけですからね。そのときに、おそらく、全国に対して、こういう名前を「シヤン」つて言つたのかどうかは知らないけれど、当時、私は音がそれに似たような音の名前、中国名になつていたはずだからね。それは、ほかのなんかの中国の紅衛兵あたりの新聞ですか、などには、載つたのを私に、持つて来てね。「先生、どうもありがとうございます」つて、来てくれたから。それで、そうじゃないかなあという感じです。

※上原信夫氏注・(補足) 佐道先生のご指摘について、もう一度、記憶をたどつてみると、沖繩の古我知さんが、聴いたという「中国情報」というのは、どうやら、以下のことではないかと思われまふ。それは、文化大革命もまだ平常に発展しつつかつた時だったか、私が短い文章を一、二書いたものが、全国紙に載つたことがあつた。それがラジオでも放送されたと思う。その時の私についての紹介は、「国際友人」か、なんかになつていたと思う。それが再放送されたと思うから、沖繩でも聴き取れたのではないか。その時、名前は「尚」だったと思うが、文章の内容については、

何だったか、覚えていません。

佐道 とにかく、そうした混乱状況だったので、具体的な内容ではよく分からないということではあるわけなんです。

上原 大筋、実際にはよく分からないわけです。ただ、それを実際に聞いた人は、先ほど言つたように、「キミの名前に間違いないと思つた」つていうんだよ。それは、彼も上原なら生きてゐるだろうなと思ひながら、「シヤン」つて言つたら、「おかしいな？」いくつかの中国の漢字でもつて、「シヤン」という音を並べてみたんでしようね。ではどういふ放送なのか、何か国際問題の中で日本にも関係あるようなことを言つていたのかなあつていうことで、彼は、ひよつとしたら、私(上原氏)のことを言つたんじゃないのか、と言ふんだけれども、彼が、それくらい、私のこと忘れずに、頭にこびれつていたんでしようかね。

## ■二十数年ぶりの沖繩の印象

佐道 かなり時間も、あれなんですけれども、だいたい先生の中で、どういふことをされていたのか、だいたい分かりましたが、最後にと申しますかですね。二十数年ぶりに、沖繩に戻られてですね、祖国復帰を果たした、祖国復帰と言いますかですね。日本に。米国の占領の終わつたあとの沖繩に戻られたわけですから、それをご覧になつた感想を、印象は？

上原 うん？

佐道 二十数年ぶりの沖繩をご覧になつた印象はどうだったでしょうか？

上原 そうですね。初めて、飛行機で行つたからね。沖繩つていふのを上から見たわけなんです。飛行機はどの方向を飛ばか、分からないから、だいたい飛行機に乗る前に、飛行機の女の子に

ね、「沖繩の上空を飛ぶのに、(奄美) 大島の上空を飛んで、どう行くか、そして、沖繩の上空を飛行機で行くのは、右海岸側を通るのか、左海岸側を通るのか、これは大島の場合からそうです。とにかく、鹿児島を過ぎたらね、どうなんだ」と、言ったらね、彼女はね、「ずうっと、鹿児島近くまでは、沖の方かな?」ほとんど海の上を飛ぶと、そして、大島を通過する時は、ずっと大島を右に見ながら飛ぶはずです。沖繩に行く場合は、気候条件によって、左に沖繩を見ながら、こう行って回っていく場合もあるはず、だから、今日はどっちかは、分からない」って言う。そのときどきの気候でないと分からないと言うから、「なるべく、じゃあ、お天道さまに右側を飛ぶように、お願いしましょう」って言ったから、「どうしてですか」って言うからね。「いや、俺、何十年ぶりにね、故郷の海、見たいんだよ」って言ってね。そして、乗務員と笑ったんだけど。それくらい、恋しかったわけですよ。

そして、飛行場に降りてみたら、私が沖繩を離れるときの沖繩っていうのは、いったい、どこへいったんだらうかという感じですね。それで、飛行場には、山城善光と桑江朝幸、私たちの大おじさんの奥さん、私たちの父よりも、何歳か年上のおばさんが。そのおばさんの息子は、一人は陸軍士官学校、幼年学校か士官学校、これは長男で、次男が、海軍兵学校、一人とも今度の戦争で、死んでいるんですよ。だから、私が帰って来るといふことで、どうしても、飛行場まで迎えに行くと、そんな無理するなど、子供たちから言われたけれど、きつと、戦死した二人の子供の顔とわたくしがダブって、見えたのだらうね。私は子供の頃、死んだ二人とは、兄弟のように育ったのだから。おばさんは、飛行場の中まで入ってきて、私を迎えてくれたわけです。山城や桑江たちは外の出口で待っていて、飛行場から外に出るときに、おばさんが私を抱えてだね、出てきた。すると、沖繩の新聞社はみんなね、それを撮ってだね。大々的に、上原が母親に抱かれて、出てきたっ

て、報道したんですよ。そしたら、おばさん家では子どもや孫たちから、「おばさんが信夫のお母さんと報道されているよ」と伝えるところ、そのおばさん、大変喜んでね。早速、その大阪の私の母のところへ電話してだね、私が一晩だけど、母親代わりをさせてくれということ、許可を得たということ、私は離さない。そのおばさんの戦死した長男が、たまたまうちの兄貴よりか一つ下で、それから、海兵学校に行った正夫君っていうのは、私とほぼ同じ年なんです。だから、もし、私が、うちの親父が、小学校の五年か六年のときから始まった、ブラジルへね、おじさんたちのところへ送ろうというその計画がなければ、私は正夫君と同じような目に遭っていたね。しかし、私は、軍に行くより、なんとなく「満州」という新天地に異常な興味を持っていたんだ。だから、父に対して、私が、義勇軍に行くつもり、「カネ一銭もいらないそうだよ。国費で教育してくれるんだそうだよ」って言ったから、「キミが行きたいなら、行けよ」っていうことになったんだけど。もね。そしたら、海軍兵学校だつて、国費だよ。親父はカネの負担力がないから、私が行くよと言ったら、そうか、お前、勝手にしろって言ったかもしれない。親父は当時の国際情勢からして、もうブラジル移民はだめだと知っていたが、自分の力で私を日本の大学に行かせられないが、ブラジルのおじさんたちが、ブラジルの大学に入れてやるという約束は最後の最後まで捨てたくなかったようだ。そういうこともあるから、そのおばさんは、生きて帰ってきた私と会って感無量だったのではないかと思いました。おばさんは、私に対する思い出が、戦死した自分の二人の子どもとそれとダブってだね、うれしかったし、辛かったと思うんですよ。で、その晩は、各新聞社が上原信夫の母として報道したんですよ。新聞でそれを見た私を知っている人たちは、そのまんまね、そのように思ったそうです。それで、あとで、山城か桑江か誰か知らんが、「キミの母親じゃなかったんじゃないの」って言うから、

「いや、いいです。それで、いいんですよ。おばさんがそれで、満足すれば、いいですよ」。私は二人母親がいてもいいんだからって、笑ったんだけどね。おそらく、いまでも、その写真を私の母親だと思っている人いるんじゃないですか。

だから、そういうふうにして、その日は、そのまんま、私は山城善光、桑江朝幸、それから、宮里栄輝さんたちもね、何十名集まったのか？ 山城さんの記録だと、何十名か四十名くらいか、五十名か知らないけれども、おそらくそのくらいだったと思います。もっと、来たのか、知らないけれども。とにかく、敗戦直後の私のことを良く知っている人だけだったと思います。そして、何人かの先輩たちが、よく生きて帰って来たと、熱烈な歓迎の挨拶があったあとは、沖縄の労働組合の委員長が、政党なんかという報告があつて。そうですね、その人たちもいたんで、それを思い出すっていうと、その人たちも、沖縄の労働者を代表してって、中国訪問もしているんですよ。それで、私のその帰国を歓迎するっていう挨拶をしたんだ。そして、「われわれ、沖縄の労働組合に対し、沖縄建設について、特に、経済問題について、一つ何かありましたら、是非ご指導下さい」と言ったもんだから、私は、「沖縄はまだ主要産業っていうのは、サトウキビですか」と聞くと、「そうだ」と言うんだ。私は「戦後の日本は、経済的にこれだけ高度に成長したんだから、沖縄経済もそのおすそ分けで、まったく違った経済構造の下で、基地経済ではなく、自立した経済基盤が確立され、新沖縄経済は、面目を一新していると思つたのに。そうですか？」と言つたらね。「そう、これを何とかしなきゃいけない」って彼は言つたもんだから、私は調子に乗つてだね、「そもそも単一植物をその地域やその国のね、主要農作物にするという事は、その経済発展の中心にすえて言うことは、これは、植民地農業だよ、植民地政策の継続だよ、戦前と同じ植民地経済政策なんですよ」と言つたら、その人は、「ああっ」って口開け

てだね。「いや、サトウキビ農業、これがなければ、沖縄は、生きていけないんですよ」とやつた。それで、私は「そういう問題については、私が時間があつたときに、みなさまとゆっくりお話をする機会があつたら、幸いです。私が沖縄にいる間に、そういう機会があつたら、いいですがね」って言つて。だけでも、みんなが、「これで終わりにしないでさう」って言った（笑）私も同意した。その組合長のお名前を覚えて、名刺をもらつて、年賀状をもらつたりしたんだけど、その人、今どうなっているか分からない。これが、沖縄に帰つての最初の政治活動かなあ。それから、その会合で、山城善光が、物凄く、全身で感情を表現してだね。いかに待つていたかと、そして、「貴様、俺にひと言もなく、行方不明になつたから、俺たちはどんなに心配したか、一所懸命探したんだ」という話を含めてだね、しかし、「確かに生きているんだな」、そして、私が、「生きてるよ！」と言うと、彼は私のどつかをひねつてね、「痛い、痛いつて言つたら、間違はなく本物です」って。彼がね、大げさな表現をしたことも、忘れられないんですよ。

そして、ま、いろいろあつたけど、そのときに、仲宗根はひと言も言わなかつたのかね。そして、挨拶、私がこういふふうには挨拶しても、ご苦労さんも無視したのかね。苦労しましたねって言つたのかな。来ていたのかな？ ちよつと、覚えがない。それは、別の人だったかもしれない。来ていないんです。参加していません。もし、書いたものにあるとすれば、それは間違いないです。参加者の名前。山城善光の記録には、書いてあるかな？ もし、書いてあつたら、来ていたかもしれない。だけれども、私に対して、表向き挨拶をしなかつたのかと思つたが、これは私の思い違いだ。実は、沖縄を離れる日の午前中に、山城、桑江と三人で、本部町の仲宗根宅を訪問したのだ。彼は病に伏していたのだ。だから、彼は参加できなかったのだ。



とにかく、老青年たちは、私の生還を心から喜び、無数の乾杯が続く、私も十分に飲んで、相当ご機嫌になったときに、私のそばに、宮里栄輝さんが座ってだね、「今度は、止むを得ないから、なるべく早めに引き揚げてな」というのは東京に帰ってくれと。

「実はね、キミが逃げたらね、キミは危なく殺人者として、引つくられるところだったんだと。キミが出て、何ヶ月とか、ひと月か、何ヶ月か知らないけれどもね、民主同盟は志喜屋孝信の暗殺を計画していたんだと。そして、その中心人物は、上原であるということが、当時の占領軍関係から、流されていたんだと。だから、まだ、アメリカは沖繩にいるんだから、早く帰りなさいと。とにかく、一応、せつかく帰ってきたんだから、おばさんたちと奥まで一緒に行こうと、自分の生まれ故郷に行つて、顔ぐらい見せて帰れ」ということを言われてたから、「申し訳ない、あさつて帰ります」と。明日、そこへ行つて、ということだね。宮里栄輝さんと相談をして、帰ることにしたんだ。

翌日那覇から、ヤンバルに行く道で見たのは、あの嘉手納基地は、昔のように大きい規模だ。嘉手納基地の横を通つて行くとね、米軍の大きな病院があつたんですよ。その病院もね、今はきれいになつたけれども、だいたい同じ場所をね、覚えてるね。そして、燃料タンクを土手で囲つていて、私は出る前までは、あそこに大きな燃料タンクがあつた。その付近も含めてだね、多数の高射砲陣地もあつたんですよ。それが今はなかったね。それを見てね。あ、米軍基地の戦時体制は解除されたのかと思つたが、しかし、それは大変な思い違いだ。高射砲はロケットに代わつていたのだ。沖繩も少しは平和になつたんだなあという思いを抱きながらね。当時は那覇からヤンバルまで行くんだつたら、まず喜如嘉に寄つて、山城善光が待つていて。と、それから、コザでは桑江朝幸が待つていてということだったけれども、今回は山城善光が喜如嘉で待つていてから、ということだったが、時間の関係で、

山原路を喜如嘉に入らないで、そのまま那覇に来て、そのおばさんの家で一泊して、翌朝の一番で、東京に帰ってきたんだと思ひますよ。

いや、ちょっと違いますね。那覇へ着くなり、山城さんに電話したら、明日、桑江と三人で本部に仲宗根さんのお見舞いに行くことになったから、車で迎えに行くからということになり、翌日、朝一番の飛行機を夕方に変更したのだと思う。

那覇へ帰つてくると、一九四九年頃、壺屋が開放されてから、壺屋の近くに、民主同盟本部の事務所を作つたんですよ。それは山城善光が自分が、やまとから帰郷して、間もなくして、喜如嘉に建てた、小さな家をね、それを移して建てた。そのときに、たまたま、私のことをいろいろ面倒見てくれた、遠い親戚のおじさん、おばさんが、来ておられた。その方たちは大工の棟梁だから、大城組の大城鎌吉さんの若い時代の仲間が親友だつた。壺屋へ引越すの早かつたんですよ、大城組と一緒に。早く移つていたので、生活面でもゆとりがあつた。だから、私が、何も食べてないと分かつたときなんか、来いつて人を遣つて、私を呼んでめしを食べさせて、「少し、人間らしく一晩くらいここへ泊まれ」とか言つてね。泊まらせてくれた。ちゃんとした家だつたからね。だから、そのおばさんたちが、もう私が帰つてきたつていうことを新聞で見ているから、私の泊まつてるところに来て、どつかに連れて行つて、いっぱい飲ませようと、思つていたんですよ。だけれども、そんな時間もないから、その家で、大勢で賑やかに、晩飯を一緒にとつて、お酒もたっぷり飲んだ。誰がそう言つたのか知らないけれど、「今の沖繩は賑やかになつたと。うるさくなつたと。キミがいた、時代のように誰もが食えない、飲めない時代じゃないぞ」と。そしたら、誰かが、中央市場つて言うんですか？ 中央市場くらい一回、のぞいてみて帰つたらどうか、ということ、その息子か？ 誰かが、私を車に乗つけて、連れて行つてくれたんですよ。ほんの何分間だと

思うけど。そこをずうっと通って、彼は、二、三メートルかな？ここを通って、外へ出ると、そのどこそこに、私は車の中で待っていますという事で、市場の中を通って、そこから車で連れて帰ったんだけどね。その後、那覇に行くたびに、何回か行ってみるが、その通った道は、分かったんだけど、どこで車に乗ったかは分からない。

そういうふうにして、戦後沖縄の何もなかった時代とは違って、表面上の状況は、いかにも大きく変化したけれども、市民の実際生活は、いったいどうなんだ、ということいろいろ聞いてみると、結局、依然として、戦後沖縄の米軍占領当時と本質的にはそう大きな違いはなく、ただ、表面だけは確かに変わった、沖縄経済の本質は、実質的に、今も半植民地的な実態の中で、もがいているのじゃないかというような感じでしたですね。で、しかも、日本に復帰したと、何て言いますか？ その復帰の条件としては、いわゆる本土と同一ですか？ 復帰スローガンの「本土並み」とはほど遠いものですね。

佐道 そうですね。  
上原 われわれ民主同盟は、沖縄の経済の自立について、大いに当時は、議論しあった。沖縄民主同盟の理想は、それはどうなったのか。思い出してみると、これも山城か？ あつ、山城から聞いた。桑江から聞いた。土地代も払わない、タダで、沖縄の基地を使っているんだって言って、桑江が腹を立てたのを覚えていま

す。そういうことで、じゃあ、結局、復帰したと言いながら、日本政府は、沖縄を本当に自分の領土として、沖縄を本土並みに復帰させたんじゃないんだなあ。名目だけですなあっていう感じをそのとき抱いた。そして、私はこんにちも同じ考えです（笑）  
佐道 分かりました。だいたい、一応、それで、話もまとまったような感じで。長時間ありがとうございました。

眞板 ありがとうございます。

上原 私もさきほど、こうお話ししたようにお陰さまでこういう形で、あなたたちと話をしてみるとですね、私がこんなつまらないことまで思っていたことについても、私個人、あるいは一人では思い出さなかつたような問題も含めて、話し合いの中で思い出されて来てね。新たに思い出す面がいろいろあった。そして、これを読み直しながら、やあ、ここはこうした方が、こう言った方が良かったかなあ、これはもつと、もつとみんなが興味を持つだろうなと思うことが、あるんですよ。だけれども、これはやっぱり、手間隙時間がかかるからね。あなた、これを手入れする中で、この補足すべきところをね、というような面がありましたら、また、ご相談して、どうぞ、あなたたちが、一応、満足するまで、こういう機会をもって、結構であります。

(了)

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第7回

---

開催日 2004年3月15日  
開始時刻 14:00  
終了時刻 16:00  
開催場所 政策研究大学院大学  
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (政策研究大学院大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## ■ 國場幸太郎の思い出

眞板 國場幸太郎さんの話からお願いします。

上原 終戦間もない頃の國場幸太郎さんについては、彼がみなと村に国頭村会議員を招待したというお話をしましたね。それが一番印象に残っている思い出です。一九七四年に私が中国から帰ってきて、まだ、中国研究所にいたころだけでも、

眞板 七五年から七九年までの間ですね。

上原 その間にね、七六年か七七年の頃だったと思います。沖縄の若手経済界の人たちから、一回沖縄に来てくれないかという要求があったわけなんです。中心になったのはね、國場幸一郎なんだね。

眞板 いま、(注・國場組の)相談役でいると思います。

上原 そう、幸一郎、それから、いまの稲嶺知事。

眞板 恵一さんですか。

上原 なにか、儀問商店のね

眞板 いま、ジーマっていう社名になっています。

上原 なにしる、十二、十三名だったと思うんですよ。十名前後だったかな? その人たちが新中国の現状について話を聞きたいということ、私に一日でいいから、来てくれと頼まれて行ったことがあるんですよ。そのときに、飛行場に幸一郎か誰かが迎えに来て、車で國場ビルに連れて行った。幸一郎は「社長に挨拶しますか」って言うから、「じゃあ、せっかく、何十年ぶりだから」と言つて、幸一郎さんの社長室に行つて、挨拶した。向こうは、「奥の信夫ですか」つてね、喜んでくれてね。その時、彼が、こういう挨拶をしたんだ。「信夫くんね、私は、ずうつと一貫して、中国と友好交流をしています」つてね。その中国とは、台湾のことなんだよ。

眞板 台湾?

上原 台湾国民党の張さんという教育部長かなんかが、沖縄の國場さんたちと親しい関係があったらしいんだね。沖縄と台湾との橋渡し役をその人がやってくれたっていうんで、そういう人たちの名前が、そこで、出てね。まあ、私も前後の事情よく知らないから、「ああ、そうですか。台湾だつて中国なんだから」と申し上げると、幸太郎さんは「キミは中国で何十年間長い間勉強したんだから」つていう話になって、「これから中国と沖縄のために役に立ってくれよ」というような励ましを受けた。私が子どもの頃、おじいさんがお元気なときに、「あんたの家に遊びに行つたことがあります」なんて遠い昔の思い出話をね。少しやつてね。

それが、終わつてから、幸一郎がどこだったか知らんけど、集まりの場所に連れて行つてくれたんだが、それまでに幸太郎さんとは、長い時間話し合つたね。そんな中で、沖縄と台湾は非常に密接な友好関係にあると、で、彼らは国民党のいろんな有名人の名前を上げてだね、長年、友好交流を続けていると詳しく説明なさつた。

あつ、そうだ。行つたらね。幸太郎の事務所の正面には、蒋介石と幸太郎さんが一緒に並んだ大きな写真が、飾られているんですよ。「蔣總統はご存知か」十月十日の双十節。二つの十の節には、「毎年、呼ばれている」と。なんかあつたときには、国のその大きな……。十月十日は国民党の建国記念日だからね。そういうような「重要な行事のときには、必ず、沖縄の代表はご招待があります」つて言うんだ。で、「蔣總統とは何回もお会いしたことがあります」つてことを言っていた。

眞板 心中複雑ですね。

上原 えっ?

眞板 心中複雑ですね。

上原 そう。それで、いや、そうじゃない、「私は結構です」と

にかく、中国と沖縄との関係は、昔からこうこうだったんですが、ご存知のように現在は、台湾と大陸は別々の制度になっています。

いま、台湾は国民党の支配下にあるけれども、やっぱり、沖縄との関係は大事にすべきですよ」って言ったたら、「はっ、これから、一つ、キミ、そういう点も、指導してくれっ」というようなことも言っていた。だから、幸一郎さんたちは、沖縄の若い経済界の人たちがね、それで、「私と話したい、会いたいということでも来てくださいから」って言うと、非常に喜んでくれてね。「一つ、幸一郎たちのことを頼むよ」ということを言って、私を励まして下さった。その後、幸一郎と彼らの集まりに行つてさ、十名前後の人、ちよつと忘れましたがね。いまでも、名前を覚えてるのが、幸一郎、稲嶺恵一、あと誰だったかな？あ、儀間、あとは忘れた。

眞板 その招いたのは幸太郎さんでよろしいんですか？

上原 いや、幸一郎。

眞板 あ、幸一郎さんですか。

上原 そのお陰で、私は（注・中国から）帰つてきてから、幸太郎さんと意外と早めに会うことができた。

眞板 それは最初に（注・沖縄に）帰られて、山城善光さんとか歓迎された？

上原 その翌年か、一年、二年あとです。それが、新聞とかにいろいろ出たものだから、幸一郎は是非、中国問題はいつたかどうか、なんだということ、若い人たちを集めたんだろうね。そこで、新中国に関する座談会みたいなものを長時間やっただけです。いまも記憶にあるのは、中国の国民党と共産党はどう違うのか。台湾問題と大陸問題っていうのは、どうなんだっていうような、しかし、十何億の大陸とたった何千万の台湾ということ。われわれは当然、台湾だけに限らず、中国大陸との取り組みも考えていると。で、一緒に沖縄の建設のために、こうこうということ、みんなの確認と要望事項を汲み取って、いろいろ聞いて、で、私が

協力できる範囲内において、どういうやり方がありますか、というところで、ま、その日の話は、大変楽しく終わって、

眞板 そういうテーマですと、先生のお立場から行きますと、中台問題だと、どうしても、中国・大陸よりの立場になっちゃうんじゃないですか？

上原 そうです。だけれども、私は、台湾問題も大陸問題も、沖縄の立場からするというと、やはり、中国問題の範疇だ。それは、幸太郎さんたちが言っていたみたいに、われわれは長いこと、中国との付き合いをしておりますから、台湾の国民党総統からも、こうこうしておりますと。あの人の頭の中には、「中国というのは、当時はまず、台湾なんだ」っていうことなんです。だから、私もそういうことで、あつそうか、その前に、山城善光たちが私を呼んで、講演会をやっているんだ。

眞板 では、その頃は、毎年のように沖縄に帰られていた、ということになるんですか？

上原 いや、やっていない。あとのことです。

山城善光たちが、国交回復したんだから、徳田球一を世話してくれた中国に対して、表敬訪問しなきゃいけないということがあつたんです。で、私が帰ってくる前から、それを計画していたんだそうです。で、名簿もできてね。そのときの連中はね、名護のね、岸本？

眞板 岸本建夫ですか？

上原 いや、いや

眞板 比嘉鉄也ですか？

上原 渡具知（注・裕徳）、渡具知がね、団長で、それから、秘書がね、名桜大学の教授をしている…

眞板 東江…

上原 あんたが知っている、あんたが知っていた。

眞板 あつ、中村誠司さん。

上原 中村くんだったね。二十何名か、十何名かね。

眞板 それは、徳田球一の記念碑のときにできた、記念誌に出て  
いるあれですか？

※「記念誌 徳田球一」(徳田球一顕彰記念事業期成会・二〇〇〇  
年十二月)

上原 それに出ているかもしれないな。あれいまないんだろう。

眞板 あれ、結構最近に出版されましたよ。

上原 あっそう。

眞板 年代、正確なのを忘れましたけど、八〇年代の後半から九  
〇年代ですよ。

※「感謝表敬・徳田球一先生郷党訪中団」(団長・渡具知裕徳名護  
市長)は、一九八一年五月、参加者二十名で出発。

上原 ああ、そうかな？ じゃあ、ずうつとあとだな。おそらく、  
そうだね、まだ、中国研究所の事務局長やっていたときだからね。  
で、まあ、そういう國場幸一郎たちと、話し合いをしたら、翌日  
に帰ったんでしょうね。次ぎの機会に、沖繩に是非来てくれとい  
う話があったんで、國場組に私は行ったわけなんです。で、そ  
こで、そうか、それも、ずうつとあとだな(笑)

眞板 というと、もう留学生問題と

上原 そうだ、留学生問題をとくに取り組んでいるときだ。そ  
れまでは、そんなに東京、離れられなかったものね。

眞板 お忙しかったって、おっしゃってましたものね。

上原 うーん。そうだね。うーん、その頃の話でした。幸一郎た  
ちと話し合ったっていうのも、じゃあ、留学生問題に、すると、  
七九年以降か？ いや、違う。俺が(注・日本に)帰ってきたのは、

は、七五年か？

眞板 七四年です。

上原 (笑) 七四年。そうか。そうすると、八〇年代に幸一郎た  
ちと会っていることになるんですかね。

眞板 そうですね。

上原 八〇年代の初めになってからだ。

眞板 留学生問題でお忙しい中をぬって、行かれたということな  
んですか？

上原 そう、それはね、沖繩の有志の要望もあって、沖繩からも  
留学生を送ろうという運動があった。そのときに、それと組み合  
わせてやったんでしょね。

眞板 沖繩から留学生を？

上原 沖繩から中国に留学生を。二百何十名か送っているはずで  
すよ。主な重点大学には、私が推薦すれば、入学できたから。無  
条件で。だから、沖繩から最初、そういう留学生を二、三回です  
ね、合計二百何十名か、送っているでしょうね。主な重点大学、  
北京大学を含めて。

眞板 それは一年でじゃないですよ。

上原 うん？

眞板 それは一年でじゃないですよ。

上原 一年ではない。四、五年以上の正規の留学生だ。

眞板 ああ、そうでしょうね。

上原 ただし、残念ながら、中国の大学を卒業して沖繩に帰って  
きたら、職場がないということになり、それじゃダメじゃないか  
ということ、私は、あまり先行きの見通しが立たなければ、ど  
うしようかと悩んでいたその頃だ。そうすると、幸一郎たちとの  
座談会っていうのは、その前だよな。

眞板 やっぱ、七〇年代ですか？

上原 七〇年代ですね。その後、國場幸太郎の親父に会ったのは、

その年か、あるいはその翌年かだね。「いつか帰って来て、中国のことをお話しなさい」と言つて助言してくれた。そして、中国のもし、偉い人を、いや、その前にそうだ。大使館のね、参事官や公使クラスの連中が、「上原さん、あなたの郷里行つてみようや」つていうことだね、二、三組一緒に行ったことがあるんです。そのときに、「こうこうして、中国の大使館の連中がいきます。一つ、ご協力できませんか」つて言つたらね。まず、山城善光が待ち受けていて、講演会をやるわけですよ。すると、一、二回くらい、國場さんたちが接待してくれてね。沖繩料理をご馳走してくれたんだ。そういう組み合わせをやつていくんだ。そういう中で、「沖繩に中国の偉い人が、日本に来たときに、沖繩に連れて来れないか」と言うからね。「いいですよ」それまでは彼は遠慮していたんだ。あの、国民党との関係があるからね。

眞板 遠慮していたのは、幸太郎さんが遠慮していたということですね。

上原 幸太郎さんが遠慮していた。幸一郎たちは平気だよ。若いからさ。それで、「あんたたちの仕事と関係ありそうな連中が来たらね。私が連れて行きますよ」ということだね。一回ね、連れて行ったのはね、中国の石油工業部のね、責任者の一人を団長とする代表团が、米国防問後に（二行十数人）、日本の石油公団の招きで来日することになっていた。そのときに、私が、事前に「じゃあ、少なくとも一週間くらい余分にね、（予定を）組んでくれないか」ということで、中国に連絡やつたら、「じゃあ、いいよ、キミの言うとおりのよ」ということで、東京での予定が終つたら、そのまま沖繩に行つて、数日滞在したあとは、沖繩から香港経由で帰るということにした。

眞板 その当時、もう国際便はありましたか？

上原 ありました。

大使館の連中だつて、飛行機で沖繩に入ってきたからね。一回

目は、アメリカの国際会議に参加した中国の代表团が、先ほど話した中国石油工業部の代表团ね。東京で、四、五日くらい、日本政府関係部門と会合なんかもあつたりして。数日後に、沖繩に入つた。國場さんには、今度は台湾と違つた中国人で、大陸の連中なんだから、つていうことは、前もつて話してあるからね。それならね、「キミの顔つぶさないようにね、盛大な歓迎会をやつてあげるよ」と保証したので、私も一緒に喜んで、行つた。そのときの知事はね、西銘。そうだな。で、幸太郎は、「俺が出るから、西銘も出るだろう」と思つたんだよな。そしたら、西銘は台湾の人たちに気兼ねして出ないで、副知事が出てきた。

眞板 では、比嘉幹郎さんですか？

上原 だつたかな？ よく分からないけれども。かもしれないな。比嘉幹郎つて、國場の婿じゃないですか？

眞板 そうですよ。

上原 そうか。そうなんだ。で、場所がね、ムーンビーチつていうのか？

眞板 幸一郎さんがやっているホテルです。

上原 そう。料理師はね、豚の二、三頭（大きい豚だった）ぐらいを丸焼きにする。國場の職員の説明によると、その人たちはね、そのとき、米軍のね、そういう方面の専門のね、コックさんを引っ張ってきたんだつて言つてね自慢していた。

眞板 幸一郎さん、米軍、大好きですから。

上原 あ、そうか。そして、そのとき集まつたね。沖繩の政界、財界ね、おそらく、國場幸太郎にね、反対しない方は、みな集めた。龜次郎なんかは、来ていなかったけどね。山城善光たち、みな、私の関係の人は、呼ばれていったからね。物凄い盛大な歓迎会をやつてもらつた。そして、それから、その沖繩と中国・大陸の関係部門とのね、沖繩の労働組合も含めた沖繩政財界の人たちとの新たな友好交流のつながりができるようになつたと思う。そ

して、その後、そうですね、中国のいくつかの代表团もね、私は、沖繩に連れて行きましたよ。そのたびごとに、國場幸太郎は、ちやあんと、自分で出てね、協力してくださいました。

眞板 そのころ、幸太郎さんはいくつくらいでしたか？

上原 いくつくらいだったかな？ 八十幾つかくらいでしょうね。で、遠いところは行かないけれど、たとえば、沖繩のその國場組のやった工事の現場とか、自慢できるようなそれがあるならば、そこに行くよ。幸一郎がね、連れて行くと。それから、石油関係だから、あの沖繩の……

※上原信夫氏注・①幸太郎さんは、宴会に出ていたが、高齢のため外部への案内などには出ていない。現場への案内は、幸一郎や他の技術関係者がやっていた。私の思い違いだった。②宴会はホテルの中ではなく、野外でやった。私はその宴会の祝辞で「台湾も含めた沖繩と中国の新しい歴史はこれから始まるだろう」と訴えたことを思い出す。

眞板 与勝の方ですよ。

上原 与勝の方だ。

眞板 あそこのCTSへ連れて行ったんですか？

上原 あそこへ。そして、稲嶺一郎の社長をしている……

眞板 「りゅうせき」ですか？

上原 りゅうせき。りゅうせきへ行つて案内してもらつてね。そこで、接待してもらつたりしたと思う。

眞板 そのころまだ、稲嶺一郎さんは、ご存命でしたか？

上原 いや、いや、そうじゃないかも知れない。はっきりした記憶がない。

眞板 恵一さんになっていましたか？

上原 恵一さん。うん。その前に、会合をもつて、会っているか

ら、喜んで案内してくれてさ。そういう形で、中国の、特に石油工業部関係、建設関係っていうのは、そういう関係で、國場を中心として、沖繩とのつながりが結構、広がってききましたよ。國場組あたりも、中国石油関係部門あたりと、合同で、中近東でも、なんか仕事をしたことがあるんじゃないですか。

眞板 言っていました。

上原 言っていますか。そういうのは、ぜんぶ、私が火をつけた、そのつながりだからね。

眞板 あつ、そうなんですか。てっきり、米軍関係で行っていたのかなと思いましたが。

上原 いや、いや。だから、中国・石油工業部（現・中国石油天然ガス総公司）。

眞板 あつ、そうなんですか。

上原 そういう形で、新しい中国とみなさんのつながりも、出来上がったんだと思う。

## ■福建・沖繩友好会館

眞板 実は、そのあと、一九九〇年の県知事選で、革新共闘の大田昌秀さんが、知事になるんですよ。その方は、「国際都市形成構想」と申しまして、中国、大陸の方です、大陸とのつながりを密接にしようということで、蓬萊経済圏とか提唱なさつてですね。具体的に言えば、福建に沖繩県事務所をお作りになるんですよ。

上原 沖繩会館

眞板 はい。それにも、関わられているんですか？

上原 いや、それは、沖繩県の問題だから

眞板 つなぎとか？

上原 いや、それは、沖繩県と福建省っていうのは、昔から特殊な関係があるでしょ。それでつながっているんだよ。



眞板 上原さんが、その間に立つて、その福建省の担当者を紹介してあげたりとか、

上原 福建省の、たとえば、省長や青年連合会の主席とか、福建省や福州市の責任者を紹介したり、または、福建省を含むいくつかの省の対外貿易関係機関、香港・華閩公司の責任者を紹介したり、直接那覇に連れて行ったりしたことは。そういう、側面からの協力はやりましたですよ。そういうことで、新しい大陸・中国と沖縄との新しい文化交流、特に経済交流の発展には、微力ながら一定の促進剤になったかも知れない。そういう点では、國場幸太郎・親父の非常に積極的な協力があつたと、こういうことは事実ですね。

※上原信夫氏補足・香港・華閩公司は、中国が対外貿易で、まず十分に機能しない時代、福建省を中心にいくつかの省を福建が「代理」して対外的に、国際的経済活動を公然と合法的に推進するために作られた公司であつた。したがつて、その總經理は、大きく対外的役割を果たしていた。

眞板 では、直接的に福建省の担当者を大田知事に引き合わせるとか、というようなことはなさっていない？

上原 そう。福建省の当時の知事は、省長ね。一人の省長は、姓が陳、陳つて言うんだけれどもね。彼が、若いときから、私はよく知っている。そういうのが、省長や香港・華閩公司の責任者になつたから、なんかあるという、沖縄の人が用があるよと言つて行くよ。もしも、かりに、私が前もつて知っていたらね、声をかけておくと、彼らは、便宜を図ってくれることもあつただろうな。それから、王兆国とかね、彼も福建の省長をやつたことがあるけれども、彼は、いま、中国の憲法委員会の副委員長をやっているよね。こういう、もちろん、沖縄から、また、具体的

に大田さんが動くずっと前に、國場幸一郎たちが、「中国に行きたい」と、「北京でもどこでもいいから、待っていてくれないか」と。

「時間少し作ってくれよ」ということで、沖縄のそういう代表团や何人かの人たちを、中国にワタリをつけて、紹介したことがあるんです。で、幸一郎たちが一回目かに行つときか、北京の人民大会堂の中には、福建庁（廳・ティン）つて言うのが、あるんです。

※上原信夫氏注・人民公会堂の中における各省専用の会議室で、宴会場にもなる。

※王兆国は、全国人民代表會議の副委員長。

眞板 ティン（庁）つて言うんですか。

上原 ティン（庁）つて言うのは、

眞板 福建省庁？ 福建庁舎だ。

上原 人民大会堂には全国の、北は黒龍江省から、ずうっと、南海南島省までね、各省専門の部屋があるんですよ。國場幸一郎たちはその福建省庁でね、中国の関係部門から、ご馳走してもらつたことがある。一回ね。そういうような形で、沖縄県が動く前に、私が、國場幸太郎の力を借りて、もちろん、幸一郎が非常に積極的だから、彼らと一緒に、何回かな？ 四、五回ぐらい、中国で会っているんですよ。一緒に。で、福建省にも、二、三回くらい、一緒に行つた。福建省で福建省及び福州市の責任者とか、そういうのを紹介してくれないか、ということ、一緒に、福建省まで行つたこともある。そういうことが、本当は、大田さんの功績につながつていったんだと思うのですが、その裏方をした私のことは、大田知事は知らなかつたようですね。

※上原信夫氏補足・福州市における「沖縄会館」建設について、私は当時、幸一郎さんたちに、次のような提案をしていたことを

思い出す。それは、①福州市に建てるのは、琉・中の古代からの友好交流史の象徴的な記念館的なものに限る。②なぜなら、時代は大きく変化した。沖縄と中国との交流は、質的にも全く異質なものに転化した。とりわけ文化的にも、経済的な面では、沖縄対全中国、沖縄対全アジア、とりわけ台湾と中国大陸とのあらゆる面での「橋渡し」的な助力が可能となるから、沖縄のアジア経済に及ぼす影響は、急速に増大するから、政治・経済的に沖縄会館は、北京で建てるべきだと提案してきた。しかし、数十年ぶりに帰って来た私の声は、余りにも小さかったようだ。それとも、小さな沖縄から中国を理解するには、中国は余りにも大きく、発展も予想よりも早すぎたのか、知らない。とにかく、中国を知るには、やはり時間が必要であったが、台湾と大陸の橋渡し役がでさなかつたのは、くれぐれも遺憾であった。

**眞板** のちに、大田県政末期に、批判されましたね。あそこをビジネスセンター化して、沖縄の会社を福建の友好会館に入れて、ということだったんですけど、水の手配がきちんとできていない、家賃が高い、情報もうまく入って来ない、ということですね。現地では非常にトラブルになっていて。結局、入居したのは、数社だけで、ほとんど、空き家だらけで、実効性が上らなかつたんじゃないか、と県内で批判されましたよ。

**上原** そうですか、まあ万能の人はいませんからね。結局、そういう問題処理の方法や結果から見ると、大田さんっていう人は、優れた学者先生であったがゆえに、政治家になつたら、それなりの世間の期待は大きかつたものだから、大田さんの精神的な負担は大きかつたのではないかと思いますね。

**眞板** ま、学校の先生ですから。

**上原** 学校の先生ね。だからだろうな。つい一、二年前、東京のある講演会場で、知事を辞めて参院議員になつてから約一年くら

いしてからだと思ふが、久しぶりにお会いした。そのとき、突然、思い出したように、「上原さん、私はね、福建に琉球会館を作りましたよ」とこう自慢話をしたことが、あるどっかの会合で、顔を合わせたときにね。突然ですよ、そういうことがありました。後で考えてみると、よっぽど、前から気にしておられたのかな？と大変恐縮したことがあります。

**眞板** では、ご面識はおありなんですか？

## ■米軍基地の返還策を提言

**上原** うん。これは、書かなくていいですよ。まだ現役だから、書かなくていいですよ。彼が知事になつて間もなくだったと思うが、彼が沖縄からおいでになつて、沖縄の基地問題について、沖縄県人会か何かの新年会の集まりがあつて、そこで、基地反対闘争について、説明がありました。休憩時間になり、私と二人だけで話し合えるようになったので、その時、私が大田さんに、「沖縄のそれぞれの基地は、返還されたら、いついつまでにどういうように平和目的に利用するんだというような案を、知事は、お考えになつておられますか」と尋ねると「あります」って言うんですね。それじゃ、だいたい期限をいつまで、日米平和条約じゃないな、何条約ですか？

**眞板** 日米安保条約

**上原** 日米安保条約。「安保条約に基づいて各基地ごとの平和利用目的を明確に示した上で、返還期限を決定し、米日両国政府に要求した方が良い」と私はお願ひ申し上げた。たとえば、沖縄・中部の普天間基地ですか。その基地は「いついつまでに私たちは、アメリカのしかるべき大学と組んでね、第一級の国際大学を作りますとか、というような案をお持ちですか」って言ったたら、「あ」と言われた。だったら、そういう形で、「どうして、アメリ

カに對して、そこはわれわれのこうこういうような都市建設計画がある。あるいは大学・文化研究所、あるいは経済研究所、たとえば、嘉手納飛行場のね、ハブ飛行場。アジアにおけるね。というような、いわゆる軍民共用できるような、そういうようなことも含めて、ちゃんと計画をピシヤツと提示してだね、はっきりと期限をきってそれまでに、是非、お返し下さいというようなやり方で、具体的な提案した方がいいですよ」と申し上げた。

眞板 それ、いつごろの話ですか？

上原 これはね、彼は知事、二回やっただんですか。

眞板 二期八年やつています。

上原 じゃあ、一期の比較的前期のころでしょうな。何年だ？ 終わりがらうって言うよ。

眞板 実は構想の提出時期は、私はいま、失念してはいますが、「基地返還アクションプログラム」を出しているんですよ。

※「基地返還アクションプログラム」は、沖縄県が九六年一月に策定。当時、二〇一五年までの二十年間で「基地ゼロ」を目指した計画だった。

上原 私が言ったのはその前です。そのときに私は、宜野座？ 宜野湾？ 市ですか？

眞板 宜野湾は市です。宜野座は村です。

上原 じゃあ、宜野湾市か。飛行場あるところ。

眞板 はい。

上原 そうか。桃原という市長がおられてね。彼との付き合いと、いうのは、私が、ちょうど中国の教育担当部門の大使館の公使、参事官等と、一緒沖縄へ行ったときに、海洋博へ行く途中で、たまたま宜野湾市に寄ったんだ。挨拶にといいことね。誰の案内だったかな？ あつ、そうだ新垣吉明という方が、中国への留学

生派遣に関係している世話をしてくれた協力者の一人。その人が、案内してくれたんだがね。そうしたらさ、桃原市長は普天間飛行場は「市の発展について、危険であり、大きな障害である」という話をその桃原市長は情熱的に語りだした。

※桃原正賢は、宜野湾市長に一九八五年七月から一九九七年七月までの三期十二年在任した。

眞板 歴代市長は、そう言いますよ。

上原 それで、私が、桃原つて、名前だから、桃原茂太さんの息子かと思つて聞いてみたんだよ。そうじゃない。親戚は親戚なんだな。遠い親戚だそうだ。

眞板 確か、保守系の人じゃなかったでしたっけ？

※桃原正賢は、革新系の統一候補。

上原 だから、それが面白いんだ。そういうことを言ったもんですからね。「じゃあ、現地を見に行こうよ」つて言つて、見に行つたんだ。それで、市役所に帰つてきて、ヤンバルに行くときにすけれども、話し合いの中でね。彼が、「人を集めるのが、都市計画の第一目標です」つて、言うからね。

あつ、彼の同級生でね、奥のヤンバルに宮城つていうのが、いるんですよ。それが、私のことを聞いてよく知っていると。沖縄から逃げたことも知っていると話が大きく展開してしまつたので、私もついその雰囲気に乗つてしまつてね。

では先ほど見学した基地を「そこをもし利用するんだつたら、一番、人集めにいい方法として、市長が計画しているのは、どんなことですか」つて聞いたらね、「マンションをいっぱい建ててね、人を集めて新しい街を造るんだ」とおっしゃるので、私は

ね、「それじゃ、アメリカはどうぞお使いくださいって、返還し  
ませんよ。あんたが、主（ぬし）でも主（あるじ）でも」、「じゃあ、どうすればいい」のだって言うから、私がね、「そこに世界をびつくりさせるような立派な国際大学を建てたらどうですか。この時代は一九八六年代ころですからね、アメリカのどこか、たとえば、ハーバードでもどこでもいいから、主な大学に呼びかけてね、分校を作れと。まず、これをアメリカに言ったら、あるいは計画を十分立てる前に、お願いしたら、日本政府はやらせないから、これは、できるならば、知事と相談した上に、知事も乗らない場合はですね、あんた、ご自身で専門委員会を組織して計画を立てて、そのアメリカに乗り込んで行って、アメリカを騒がせろ」って言ったことがある。「そうすれば、アメリカは、世界で例を見ない、世界の学術文化の発展のために、この重要基地の返還も止むを得ない、じゃあ、われわれは、世界の平和と文化の発展のためにね、基地を譲りますと。花道を作ってあげなさい」と言ったんだよ。そうしたら、大変喜んでね。で、私が沖繩へ行ったら、「必ず寄ってくれ」っていうので、数回お会いしている。そういう経験があったから、私は、大田さんにね、「花道を作ってあげなさい」と。「アメリカに、沖繩のために、世界の平和と文化学術の発展のために、われわれは、普天間基地を譲りますと。見栄を切ってもらったらいんです。ただし、明確な期限を切ることでですよ」と。その後、何か月か知らないけれど、彼はそれなりの努力があったはずですよ。さて、時間ですが、最初、桃園市長に提案した後、そう時間が経っていないはずだから、一九八六年頃だったと思う。

眞板 現在では、基地内大学に留学できるようになりましたし、UCLAかどこかの分校もあります。

上原 ああ、そう。そういうようなことも、その当時、私はやりました。

眞板 それは、いつぐらいですか？

上原 それはね、一九八六年〜八八年ころだと思います。中国留  
学生援護協会は一九七九年には設立されていますから。沖繩から  
の留学生派遣は、遅くとも八〇年代から始まっていますからね。  
眞板 九〇年代ですか？

## ■西銘順治の思い出

上原 うーん。もうちょっと、話したあとでね。実は私は敗戦後、  
数年沖繩滞在中に西銘さんを知っていたんですよ。

西銘さんに、中国への留学生問題について、私が中国から帰国  
して、山城善光に連れられて彼のところへ訪問したんだ。「上原  
は、沖繩と中国のために、留学生をね、彼が推薦すれば、中国の  
どこの大学でも、入れるから、ということ、人材育成に対して、  
協力する」ということを言った。それはすぐに、人材育成費つて  
いうのがありますね、沖繩に。財団が。あの時誰だったかな？  
彼が理事長なんだな。知事が。

※現在の「財団法人沖繩県国際交流・人材育成財団」

眞板 県の外郭みたいなので、作りましたから。

上原 そうですか。そして、その担当の何か、会長が知事か？

眞板 ま、名誉職、常勤ではなくて、

上原 そして、理事長っていうのは、誰だったかな？ ちよつと  
忘れたな。どっかの中学かどっかの高校の校長先生をやった先生  
だと思ふ。で、すぐにそこに紹介してだね、明日でも会ってくれ  
という話になったんですよ。それで、じゃあ、知事の認可を得た  
からということ、私はそれを進めましょうということになった  
んだ。その理事長っていうのが、その人材育成財団の方たちは、

私がまだ、目黒の碑文谷に事務所を持っていたころ、最後にお出でになったのは、大島出身の何て言ったかな？ 彼もなんか、中学校か高等学校の校長をしていたんでしょね。その間、一、二人の事務員が、だいたい一年に一回くらい来ておりました。

そういうことで、私はこの、知事を動かしてね、もつと確実な学術・文化交流をやるうとしたんだけど、知事はそれ以上は乗ってこない。「台湾との関係がありますから」

眞板 西銘さんは台湾派ですから。

上原 私が西銘さんに会ったとき、私は、「知事は台湾の国民党で、誰が一番、あなたに対して、近いんですか」と聞いたら、彼は「台湾と言ってもね、現在中国・国民党の統治下で、そして、孫文が、作った中華民国の後継ぎなんだ。だから、孫文と日本のつながりという問題については、私はよく詳しい」と応えたので、では「しいて言えば台湾の現政府ではどなたと親しいのですか」って聞くと、「知人は多いがその中でも教育部長のチョウ（張）先生だ」と言いました。沖繩にはその方の銅像があるんだそうです。中国大陸側に向けて、銅像を立てているそうです。

眞板 へえー、知らなかったです。

上原 そしてね、その話をして、なかなか乗ってこないもんだからね。そのとき、知事のなんかをやっている人が、県のなんかの役員をやっている、知事に近い人がね、「いや、知事は台湾に足を向けては、眠れませんよと。そういうお応えですから、先生のよう、共産中国におられた方じゃあね、残念だが」と言われたが、私はやっぱり、これからも知事に働きかけようと思いました。これは、本当に内緒話なんだけど、当日は他の職員もいるからね。話はそれ以上やらなかった。彼は息子がいますね。

眞板 二人も国会議員になりましたからね。

上原 あの息子とは、議員になってから、東京の沖繩人の集まりで会って、少しだが父親の思い出話をしたことがあります。

西銘さんに近いという方が、私に相談したのはね、「知事を中国に近づけたいんだが、何かお力をお借しください」って、こう言ってきたんだ。それで、その人が、ま、いろいろと話し合いをしたあとでだね。「後日、沖繩に来たときに、私が案内しますから、時間をちゃんと取らせますから、一緒に会ってくれ」というので、私は沖繩に行ったとき、西銘さんに近い人の案内で、知事に会ったんです。そのとき、私は「単刀直入に申し上げますが」ということで、「一回、おヒマなときに、遊びに中国に行きませんか」と。「ご身分は個人の資格でもよろしい、内密でもよろしい、あるいは、知事という名前も、公表しなくてよろしいし、どんな方法でもいいですよと。私が責任をもって、中国のしかるべきところを、ちゃんとご案内し、お会いしたい方がおられるならご紹介申し上げますから」と言ったけど、えらいビックリしてね。

眞板 それは、県庁で会われたんですか？

上原 うん。でね、「私はいろいろと台湾の関係もありますから」っていうことで、非常にね、堅いお話をされて、だが、次また、彼は国会議員になりましたね。

眞板 知事を辞めてから。

上原 辞めてからね。その第一回目だと思っただけど、東京で沖繩の県人会のなんかがあつて、そうだ新年会だったと思う。彼がいるもんだから、お辞めになって、何か月か、何年か知らんけど、経ったあとですよ。「今からでも遅くないですよ。一回中国へ一緒に行きましょう」と言ったら、「ありがとうございます」って、丁寧に断った。そういうことを私は、直接、知事に対して働きかけただけでなく、周囲の連中を動かして、特に、大田の場合は、彼を動かせるっていうのは、國場幸一郎を、彼の大きなあれになつていたんでしょ。大田の。

眞板 あ、そうなんですか。

上原 うん。というのは、幸一郎は早稲田の後輩だ。

眞板 あ、そうですね。

上原 やはり、小さな台湾のそれだけじゃ、沖縄の経済に大きな影響力はないから、國場幸太郎さんたちも、中国に対して、思い切り向いたのは、正面から向いてきたのは、その違いですね。時代の要求と歴史の発展ですね。で、それから、私は火遊びをしたというのは、何ですけれどもね。そういうことなんだよ。悪いことがありますから。

※上原信夫氏補足・当時、台湾は大陸に対する「三不政策」下にあり、台湾、香港、大陸間の人、物流を台湾、沖縄、大陸へと切り替えられる現実的な可能性が、実際にあった。具体的には、台湾からの密航船は、八重山を中間基地として、福建へ相当数行き来していた。福建の関係業者も大きな期待をもって、密航船まで出した。しかし、沖縄県の取り組みが立ち遅れて、これを大きな交流に発展させ得なかった。

## ■松岡政保の思い出

眞板 先ほどテープで取りそびれましたので、簡潔で結構なんですけど、松岡政保さんのお話をもう一度お願いできたら。

上原 松岡のところへ一番最初に行ったのは、民主同盟ができてね、おそらく、仲宗根源和の紹介もあつたと思うんだが、山城善光と二人だけじゃなしに、誰かも一緒に行っているような気がするんですよ。第一回目はね。桑江も一緒だったかも知れない。それで、行ってみたら、なるほど、民政府はこのほうが大きいっていう(笑)

眞板 やはり、大典寺に行かれたんですか？

上原 えー、ちよつとね、道から下りるようなところに入ったみたいなき感じがあります。そこは、天幕じゃないですよ。あれでもな

かったね。

眞板 コンクリリになっていましたか？

上原 いや、いや、まだ、鉄板葺きだったんでしょね。「はあー、沖縄にもこんなところもあるのか」と思ったね。で、先ほど言ったように、そういうところで、コーヒーを出されてね。こんなものを飲めるところかと、ビックリしてね。そして、松岡はピシツとこうネクタイを締めてね。その後、二回くらい山城善光と、あるいは、私一人で一回か、用事で行っているはずなんです、それはそれで、ぜんぶ、民主同盟のあれで、行っていると思うんですよ。

眞板 先ほど、山城善光さんが、沖縄独立の問題を絡めて、移民問題について、意見交換をしようとしていたということなんですけれども……

上原 それはね、何の話から、そうなったかという、忘れたんだけど、民主同盟がおそらく、独立の問題を取り上げて話し合うようなことになって、仲宗根が移民問題をまず、さきに取り上げたわけですよ。これは、仲宗根が取り上げたのか、誰か、分からないけれども、もうそのころには、大宜味朝徳さんと、私との話し合いの中でも、彼は移民問題を何回も取り上げていますからね。おそらく、松岡さんのところで出た、その移民問題についてのは、たまたま、私が、彼が、金武の方だということを知っていて、当山先生のね、業績は大変、沖縄にとつては大きな問題である。それが、沖縄人の海外移民のきっかけになった、ということだね、やった。彼は、私も移民で行って、アメリカかな？

眞板 ハワイに

上原 ハワイに行った？ あ、そうか、やつぱり同じだ。それで、「あんたも行かれたのか」って、私が聞いたのかもしれない。それから、移民問題の話をこういろいろやってきてだね。仲宗根源和初め、沖縄の独立問題についてのそういう話もあります……

眞板 ちなみに、松岡政保さんは、善光さんのおっしゃる独立論に対して、どういう反応をお示しになっていたか、ご記憶にございますか？

上原 あのね、そんなとき、話し合いに出たかどうかは分かんないけれども、おそらく、われわれの中の独立論と信託統治的な、その問題になってくるといって、仲宗根源和は一貫して独立論を主張した。彼が、日本共産党をかざし、瀬長と犬猿の仲になっていく場合でも、彼は沖繩は独立すべきであるという、そういうような考えは変わらなかったと思いますね。おそらく。だが、山城善光は、何かのついで、その話の中で、「こうなってくると、アメリカは沖繩を手放さないとしょうね」というようなことを言ったと思うんだよ。これは山城の持論だからだけれども、その前には、山城善光と私と、普天間も含めて、長期計画だとね。しかし、その長期計画というのは、五十年、百年かかるか、分らないけれども、しかし、世界史の中で、そういう大きな国際問題になったという場合というのは、少なくとも、五十年か、百年単位の計算をしないと、あれだから。だから、手放さないとだろうという、彼のそれの中には、「ああ、独立しても、しようと思っても、させないだろう」。結局、信託統治みたいなものを得てみると、アメリカにすると、国際……。えー、大宜味さんは、アメリカの信託統治論者だったんですよ。

眞板 そうですか。

上原 うん、信託統治だな。山城善光は、アメリカじゃなしに、国連の信託統治だったんだけど。だから、それに対して、私は、少しはさめて見ていたんだ。

眞板 それ、結局、同じなんじゃないんですか？

上原 えっ？

眞板 国連で信託統治を持ち出して、事実上、誰が、そこを管理するか、というと、それはアメリカであると。だから、国際社会

でそれが、認知されて、アメリカが、ある意味で正当な統治者になれるというような気もするんですけどね。結果的に見ると。

上原 いやいや、違うんだ。国連から委託されて、かりに日本が統治するにしても、アメリカが、国連から、委託があるわけですよ。

眞板 だから、委託先がアメリカであることは、ほぼ間違いないわけです。

上原 そうなった場合でも、ですよ。直接管理権はアメリカにあるけれども、そこを支配するところの背景についてのそれは、やっぱり、国連を通さなきゃいけないわけですから、間接的に、直じゃないですよ。それが、これがね、私が思い出す。おほろげなそれは、ちよつとピンときたんですけどね。大宜味朝徳がね、何を信託？

眞板 信託統治論

上原 統治論。そのとき、あれは、ドイツから日本は奪ったんですよ。

眞板 ああ、南洋群島の

上原 南洋群島ですね。ドイツから奪った。そして、その場合は、第一次世界大戦でもって、国連を通過してはいないはずですよ。

眞板 あれは、国際連盟を通じてじゃなくて？

上原 国際連盟になっていたのかな？

眞板 あの当時は、国際連盟です。

上原 国際連盟だね。国際連盟からの日本への委託だったのか、もうすでに、日本が奪い取っていたのか、どっちかだと思うんですよ。

眞板 あの当時は、まだ、日英同盟も辛うじて残っていた頃ですから、一応、国際連盟を通じて、日本の委任統治になったと思いますけど。

上原 まだ、松岡洋右が脱退していないからね。かもしれない(笑) そういうことが、あったんで、アメリカの本心からすると、自分の思いのままに、勝手に処理してしまうだろうと、私の頭の中にあつたね。だから、山城善光の場合もそうだろうと思います。彼は、国連の信託統治って言ったあと、必ずしもアメリカとは限らないわけですね。ということ、移民問題の話になったときにも、沖繩の将来には、自治体制、あるいは、独立心があれば、国家体制はどうであろうと、きつとそうだったと思うんだよ。そのときに、独立すべきであると言うけれども、もし独立しても、日本に頼らない、日本に頼ってもダメだつていうようなことを、松岡は強調したと思うんだ。

眞板 そもそも何ですけれども、善光さんと松岡政保さんのところに、どういうようなご用向きで行かれたんでしょうか？

上原 一回行ったのは、民主同盟のわれわれの状況をね、民主同盟の設立とそれについての現状。われわれは、沖繩で一番最初にこういうような計画をもっておりましてということを押捺に行つた。あるいは、報告に行つたんだな。一回は。

眞板 それは、石川市で結党大会をやつたあとの話ですか？

上原 あとの話だ。ずうつとあとの話だ。まだ、那覇にわれわれが入れない時代ですからね。だから、民主同盟の説明をした。松岡も同じ民政府だけれども、彼は又吉などと違って、開明的で比較的良心的に沖繩の復興問題をいろいろと対応している。いわゆる民衆の、人民の立場に立っている、ということ、まず、挨拶に行つて、われわれの立場を十分説明して、理解を得て、協力してもらおうと。そういうこと。

その次はね、何のあれだったか知らないけれど、山城さんだったか、誰だったか、一番最初は山城と行った。あと、二名か三名かで、つていう、気がかりなのはね、ヤンバルのね、誰かな？一緒に行ったのは？ というのはね、その木材。私が村会議員で

やつた仕事の中にね、国頭村の。その村営木材会社つていうのがあつたんですよ。これはもう、私が村会議員になる前からあつたんでしょね、きつと。というのは、ヤンバルの山から伐り出して、その……

眞板 それは、戦後できたものですか？

上原 えっ？

眞板 戦後にできたものなんですか？

上原 戦後にできたものじゃないかな。その戦後ヤンバルの換金できる唯一の商品つていうのは、都市への、戦後復興に必要な建築材ですね。それから、その次は、弱い労働力の婦女子の……

眞板 薪ですか？

上原 薪です！ それをね、そう。私、村会議員になつた頃はね、国頭村木材協同組合つて言つたか、木材なんとか共同店つていうのが、あつたんですよ。村営なんです。それで、その財政困難な時代にだね、財政面で、非常に大きな赤字を出していた。そういう財源の中でね、国頭村の主な部落から、一、二人ずつかな？ 担当者を出してね、その経営をやっているわけですね。で、那覇に売るには、今度は、那覇での事務所を作つてやるとか、そういう形でね、この木材組合、国頭村木材組合つて言つたのかな？ 協同何とかがつていったのかな？ 村営なんです。公営だな(笑) 私はそれをね、「解散すべきである」と提案した。「自分たちの事務費さえもね、賄えないようなものはね、これはね、民主主義に反すると。それぞれの地域の木材をね、たとえば、奥なら奥共同店が、楚州なら〇〇さん、安田なら〇〇さんたちが、それぞれ昔からね、個人経営でちゃんとやっていて、それで、経済的に成り立ってきたのに、どうして、新しい世の中になつてから、逆に民主的でないような経営によつて赤字を出して、その負担を村民におつかぶせるんだ」つて言つてやつたことがあるんですよ。そこで、私は「これは民営にすべきである」と担当者と議



論し、村会議会でも、やったことがある。これをね、私が聞いたのはね、大城という人なんだけれども、国頭出身なんだよ。材木店の社長がね、私、新しい家を作りました。木材店だから、沖縄的な家を作ったということで、一回、彼の家に私を招待したわけなんです。沖縄に帰ったときに。その社長がね、自分の自慢の家をね、二階建ての大きな家でね、床も壁も、見ただけで、非常に涼しい感じがするようなね、「さすが、専門家ですね」と褒めたんだけど。そこで、ご馳走になって、一杯、飲まされて、ホテルまで送ってもらったんだけど。そのときに、彼が言ったんだけどね、この私が村会議員のときの木材何とか組合の解散を私が提案してだね、間もなくしてか、その日でか、知らないけど、討論の結果、通ったっていうんだよ。

眞板 通ったっていうと、解散しちゃったんですか？

上原 解散してね。各自それぞれの得意とする専門分野によって、過去戦前の経営経験の蓄積を生かして、各地方には昔からのお得意さんだつて生き残った方が多くいますからね。村の財政活動を食い潰すようなね、材木会社は民営化にすべきだということを言ったら、みんなが賛成したんだそう。ちょうどその翌日くらいに、また、全体会議をもつたんでしような、おそらくね。そこで、みんなが拍手してだね、決定したと。「われわれがこうして、いま、現在やられてるのは、あなたのお陰です」って言うんだ。思い出せなくてね、私は「うーん、そういうこともありましたが」というのは、裏を返せばね、あなた、共産主義者なんだから、みんな公営でなければ、いけないと思っていたのに、全然、違うことを言っている。われわれは助かりましたと。それで、国頭村も助かりましたと。だから、子どもたちにもそう言っているんだ。忘れないでと。なんか、ずいぶん、かしこまって、座り直して頭を下げていましたものね(笑)

眞板 なんかその見返りは何かあったんですか(笑)

上原 家は、こんな丸太があった。それだけ、国頭村の赤字が、だんだん黒字に変わっていった。だから、いい経営だった。

眞板 そのあと、上原さんの奥のご実家が、立派になったというお話はないんですか？

上原 ああそういうふうになっていないよなあ。もう、私がいなくなったら、CICの手先が、父母の住んでいる家に夜間石を投げられているんだから。それで、この問題についてね、いま、元国頭村の村長にね、そういうことをどつかで会ったとき、話したんだね。大城さんっていったかな？ 社長から、そういつて、言われたんだけど、私は思い出そうと思つて、一所懸命考えているんだけど、思い出せないんだが、いつ頃のことなんだろうか、つて言ったらね、彼、曰くね、「上原さん、私はまだ、小学校の何年生だった」って言うんだ。それで、もし、時間があつたら、国頭村の村会議会のね、村議会のね、議事録でも、もし、あればね、一回、時間があつたときに、その人、村長もやっているから、大城っていうのは……

※大城久利は、国頭村長に一九九六年三月から二〇〇〇年三月までの一期四年在任した。

眞板 材木店の社長さんですか？

上原 いや、違う。大城は村長やつて、何年か前に辞めたばっかしだけだね。彼は徳田球一感謝の会の訪中団で、中国行ったとき、彼も入っていたんだね。彼は北部振興なんとか会の事務局長をやっていた。小学校の四年か三年だったっていうんだから(笑)

眞板 じゃあ、いま、六十代くらいですか？

上原 そういうことをね、考えるところへ行つたつて言うのはね、そのそれと関係があるんだよ。ヤンバルでもね、いい家を建てたい、ということになると、ヤンバル材だけで

は、間に合わない建築物の場合がある。だから、おそらく、アメリカ材の配給についての地区区分があつたんでしような。どつか、名護から下とか、何々村から恩納までとか、もつと下から、あるいはアメリカの木材が入ってきたら、配給するという制度があつたんですよ。きつと、そのころ。だから、ヤンバルはヤンバル材があるから、山には木があるんだから、自分たちで伐つて、間に合わせると言うことではなかつたかと思う。それをね、そういう関係部門の人が、私のところへ言ってきたのか、山城善光のところへ言ってきたのか、ちよつと忘れた。ど忘れしたんだけれども。その話を聞いて山城が、「おしつ、じゃあ、松岡さんにヤンバルをその差別しないで、平等にね、それを配分するように」って言いに行つたはずなんだよ。その三、四名で行つた記憶はあるな。おそらく、国頭と大宜味あたりの村の誰か、担当役人も一緒に行つたのかも知れないな。

眞板 金武村も行ったんですかね。

上原 誰が？

眞板 金武村からも？

上原 いや、金武村は行ってない。私は辺土名地区です。そのときは、私は、民主同盟としてではなく、辺土名地区の国頭村会議員としての立場での政治的なその地元代表者の一人としての陳情なんです。

眞板 先ほど、仲宗根源和さんが、松岡政保さんを利用して、沖繩復興を計るべし、つていうようなお話があつたと思うんですが、その党内の反応はどうだったんでしょうか？

上原 党内はね、彼は結局、軍政府から任命されたね、あれなんです、軍の命令に従つてやっています。というの、彼がね、たとえば、沖繩の代表として、やっています。その軍の指図に従つて、彼はその優れた英語力と、それから、アメリカ人を知っているというところ。知事よりも、軍政府からは、軍からは信頼されていると

言われていた。だから、そういうことは、確かにそれはあるけれども、沖繩の建設のために、そういうのは利用すべきであるけれども、沖繩の政治を任せられるような面は、いまだにわれわれは見えてこない段階なんですよ。ということですから、仲宗根さんもその頃まではまだ、本格的に松岡でなければ、というのはなかつたと思うんですね。だから、とにかく、いまの民政府関係では、有能な人物をあげるとすると、彼しかいないんじゃないのかというような意味のことを言つたと思うんだが、知事としての話はまだなかつた。

眞板 それは、出版事件の前ですか？ 後ですか？

## ■文教部長・山城篤男の思い出

上原 その話は、前からあつたかもしれないですね。これはつてもしも、われわれが味方に引つ張り込めるとか、というようになことになるという。たとえば、教育家で山城、教育担当の…

眞板 教育担当の部長は、山城篤男というのが

上原 あつ、篤男だね。彼と仲宗根は、親しかつたんです。だけど、あの人は、仲宗根の旗振りに乗つてこなかつたですよ。非常に好意的だったけど。沖繩で初めての英語学校ができたの。

眞板 はい。文教学校ですね。

上原 文教学校。そのアメリカや日本へ、留学生を派遣するということ、

眞板 最初は、基地内の労働者が、英語が使えないものだから、取りあえず、

上原 留学生を？

眞板 英語を勉強させよう。それが始まりです。

上原 そうか。それじゃあね、留学生派遣のは？

眞板 これはずうっと、あとじゃないですか。

上原 あとですか。そうだろうな。

眞板 琉大ができるのが、一九五〇年ですから、

上原 いや、その前だった。

眞板 あっ、五年かな？

上原 とにかく、その沖繩でも大学ができるのか、あるいは留学もできるんじゃないかという。じゃあ、留学も違うか？琉大の：

眞板 琉大ができてからじゃないかと思うんですが。

上原 動きが始まったのは、いつからですか。こういうことがあったんですよ。とにかく、大学のね、留学生だったかどうかは、ちよつと、忘れましたが。それが始まるというので、これを、その情報を伝えたのは、何かの話で仲宗根源和が山城さんの話を引っぱり出してだね。私が教育問題に対して、非常に関心を持っていたということなんだけど、そのときに、仲宗根がその情報をね、聞いてきたんだ。まだ、始まる前ですよ。諮詢委員会か、何かでその話があると、で、責任者はね、山城、何でしたかね？

※琉球大学の設立準備は、一九四八年十二月に、同大設置場所・首里城址の視察から始まっている。琉大の開学は、五〇年五月。

眞板 篤男。篤志家の「篤」に、男、女の「男」と書きます。

上原 篤志家の「篤」とですね。その話になったんだ。そしたら、私かね、沖繩で大学ができる、留学だったか、それは忘れたけれども、「俺もそこで勉強できないか」ってこう言ったんだよ。そしたらね、仲宗根がね「いいな。やっぱり、機会があったら、キミもちゃんとした教育を受けた方がいいよ」ということになって、「先生、ひとつ、じゃあ頼みますよ」って、「よしっ、これの担当は山城くんだから、俺が話をつけてやるよ」ということでね引き受けてくれた。一週間くらいしたらね、まだ、学校は準備段階で多忙だが、山城さんには、仲宗根が話したんだよ。ということ、

覚えているのが、こうこうだということ、熱心だと、彼（注・上原氏）は満州時代に医科大学入学を希望していたので、軍隊には行かないようにしようと思っただけで、非情にも軍隊に回されたそうだというようなことを話し合っつて、「よしっ、それなら一つ考えようか」と。それで、何日か経ったあと、動き出すんだ。「お前、身体大丈夫か。ただし、学校の授業は日中だけらしいんだ」と（笑）それで、「日中やるんだったらね、キミは党の活動業務はどうするんだ」と。「夜、私は寝ないでやりますよ」なんて言っつて。「土曜、日曜も私やりますから、重要問題については、私、学校さぼつて、やりますから」なんて言っつて、彼に駄々をこねてたわけなんだ。「そうか」って言っつて、「それぐらいのやる気が、あつたほうがいいな」と言っつて、おだてられた。それから、一週間くらいしたらね、ダメだった。「山城くんがね、軍政府の担当者のところへ行つてね、何回もお願いしたそうさ。ダメだと。軍指導部の担当官は、民主同盟の青年部長をしている彼のような男だったらね、ダメですよ。彼をどうしても、ということだったらね、仲宗根委員長がどう言おうと、もし、どうしてもと言うんだしたら、これ、止めにします」。学校計画を取りやめにするということ言っつたつていうんですよ。

眞板 ずいぶん、強硬ですね。

上原 うん。そんなことを言われたら、仲宗根は「もうダメだよ。

上原くん、諦めなさい」と。

眞板 もし、これ通つていたら、先ほど、お名前が出ていました、大田昌秀さんと同窓生ですね。

上原 同窓生？ そういうことになるな。もし、米軍が私を異端者扱いにしていなかったら、そういうこともあつたよな。

眞板 そうですか。

上原 じゃあ、私はそれが、逆恨みして、アメリカを憎んだんじやなくて、その前からだからね、私は。もう、沖繩南部を放浪し

た二週間で、私は、私の根性と進むべき方向っていうのは、もう、ちゃんと、できていたんだからね(笑) もし学校に入れられていたら、学校で騒げば、大変だと思っただろうな(笑) それで、まかり間違つて、大田と一緒に同じように、日本に来て、日本からアメリカへ行つて、留学していたら、今ごろ、何をやっていただろうね(笑) 沖繩を独立させていたかもしれないよ(笑) これはまじめな話なんだよ。

眞板 それで、話をちよつと、もとに戻しますけれども、仲宗根源和さん自身もまだ、出版事件の前の段階だと、松岡さんに対して、懐疑的でありながらも、彼のようにアメリカに可愛がられている人間を利用した方が、いいんじゃないかというお話があったとき、出版事件前ですから、上原さんもまだ、仲宗根源和さんのこうしたお考えには、そんなに違和感をお感じになつていなかったと思いますけど、そう言われたときに、どんな感じを受けとめていらしゃいましたでしょうか？

### ■ 沖繩民主同盟に党綱領がなかった理由

上原 そのときは、知事選とか、そういうものは、頭の中になくときなんだから、私もそうだし、おそらく、山城も、桑江もそうだと思う。すなわち、利用すべきもの、沖繩人で連合できるすべての力、人物は、すべて連帯すべきである、こういう考えだったからね。隠し事を言わないで、もしも、仲宗根のような立場の人だつて、あんたみたいな戦前の転向者だつて、俺はあんたに、もう一度逆転向してもらいたいものだ、期待しているんだという、そういう気持ちがあつただよ。当時はまだ言わなかつたけどね。それだから、沖繩人の中で、連合できる人、利用できる力はすべて掘り起こして活用すべきである。その根本的な目的は明確だ。それは一番最初からの目的というのは、座談会からですね。

あつ、懇談会ですか。懇談会のあつた初期の段階から、戦犯問題をどうするか、軍国主義に協力した人たちをどうするんだつていう話し合いが出た。その中でわれわれは、沖繩はいま、人材が不足しているんだ。だから、それは、自分で好き好んで日本帝国主義や天皇に協力した人とそうではなかつた人、上からの命令でどうしようもなく、じゃあ、俺がやらなきゃ、沖繩でやる人がいないんだから、よしつ、俺が立てば、一つの中和作用もあるんじゃないかということ、たとえ、話半分としても、実際、そうなつた人もいたわけなんだから、それで、致し方なく、そのお役目を引き受けた人もいるんだと、証言した人も何人かいた。彼本人を含めて。だから、やまとと同じ手法で、われわれは、そういう人たちを一律に打倒すべきでないことは明らかである。そのときは、もうすでに人民党ができていたが、私たちは正面から沖繩は二段革命をたどるべきだろうと主張したんだ。

なぜ、党綱領を最初から考えなかつたかだね。それは史上まれに見る残酷な戦争で、生き残つた人たちは、やつと命からがら、生き延びることが精一杯で、多くの者が肉親を失い、家屋敷、財産も、政治的社会的地位も全て失つた。その精神的な苦痛から、住民が立ち上がるには、まだまだ相当な時間が必要であつた。したがつて、当時の沖繩の現実から考えるとき、平常な社会条件下でいう階級区分も成り立たない。こうした過渡的状态でしたから、階級政党の存在は理論的にも成り立たないと考えていました。歴史的発展の段階から判断すれば、沖繩はまさに民族、民主、解放運動の初期段階にあるのだから、政党運動の中心は、民族の総立ち上がりを目指した啓蒙運動を出発点としたあと、党綱領は次の段階で決定すべきであると考えていたのです。

その頃になるといふと、やまとの情報というものは、少し入りますからね。で、しかも、占領も三年間も、経っているか？ あつ二年間くらいだ。その中でも、もうすでに一年以上は山城善光と

一緒にいろいろ体験している。桑江朝幸といろいろな体験しているから、敗戦後におけるやまととウチナーの置かれた根本的な違いを深刻に考え、われわれは、全く異なる立場からの再出発点から発足しなければならないことを確認しあつた。機会あるごとに何度も。

さて、そのころの、いわゆる軍国主義者、何て言いますか？ 何て言つたかな？ なんだその……いわゆる、日本帝国のそれに対して、侵略に対して加担した連中は、公職に就けないとか、

※上原信夫氏補足・沖縄民主同盟は、なぜ最初から党綱領と階級区分を打ち出さなかつたのか。それは、次の理由による。まず、第一に、戦前の沖縄は日本帝国の植民地であつた。したがつて、沖縄の政治・経済・文化教育・法制的にもやまととは、根本的な違いがあつた。個人の民主的自由や諸権利についても、一般日本人に比べようもないほど、小さなものであつた。同じ労働者でも、やまとにおける沖縄人労働者は、敗戦まで一等低い地位にあつた。沖縄の農民も日本一の最低のどん底にあえていた。沖縄戦により、一般沖縄人は、社会的階級区分の如何にかかわらず、絶対多数の住民は、すべての物を失つてしまつたので、敗戦後の沖縄では、理論的にも、実際的にも、一般論としての資本家階級、労働者、農民の階級区分は当分できない状態にあつた。これは本土における天皇制・軍国主義者の人民大衆に押し付けた侵略戦争の責任逃避のための「一億総懺悔」とは、根本的に違つたものであつた。以上のように、沖縄とやまとのおかれた立場は、歴史的にも、現在も根本的に違ふのだから、自ずから違つた道をたどるべきだろう、という考え方だつた。

眞板 ああ、公職追放です。

上原 ああ、公職追放です。そういうことが、やまとではやつて

いることが、分かるから。沖縄でも、それを最初から適用すべきであると言つたのは、人民党だからね。これは、瀬長さんや上地くんとか、それから、波平くんたちが、やまとのまねをして、それをそのまま、持ち込んできているから、われわれは、沖縄はただその段階じゃないというのが、私たちの主張だつた。私の場合は、あの南部をさまよい歩きながら、遺骨と共に考えた。なぜ、こんなひどい目に遭わされたのか。沖縄は自分で好き好んでやつたんじゃないんじゃないかと。日本帝国主義が、アメリカに戦争を仕掛けたためにこうなつたんじゃないかということで、私としては、結党の初期から、沖縄県公文書館に所蔵されている講演や演説の速記録でもね、その一端がのぞけるような形の素朴な歴史認識を、世界的帝国主義者の本質というものを、私なりに、ちやんと、自分なりに昇華して、非常に初歩的な理論的な体系立てを持つていたからね。だから、松岡だつて、協力するならいいじゃないかと。先ほどの山城篤男先生だつたか？ なども含めた多くの知識人たちが。

眞板 はい。

上原 優れた教育者ならば、沖縄を愛する人なら誰でも一緒にやつていいじゃないか。というのが、われわれの民主同盟結成初期の立党の精神としての考え方だつたんだね。

眞板 いま、民主同盟のお話が出ましたんで、ちよつと、確認の意味も含めまして、お伺いしますけど、在野に残っている知識人を含めた、有能な人材を総結集してできたのが、民主同盟だつたと。当然、思想信条はみなバラバラですから、それはまた、第一段階で、いずれ、次に発展的解消をして、つていうようなことは、当初からあつたんでしょうか？

上原 もちろんそうですよ。ただし、当時の状況下では、それについてになるか、具体的に予想することは極めて難しい課題でした。われわれは最初から、やはり、啓蒙運動の段階を経ていくという

ことですね。みんな最初から、沖繩では、戦前から厳しい官憲の支配下で、まとまった左翼組織の組織化や系統的に、その理論体系が確立されたとは思っていない。だから、戦前、たとえ、軍国主義者のお先棒を担いだ連中でも、ということとは、たとえばだね、新垣金造とかさ、吉元栄真とかね。私はその奥田巖まで、民主同盟の中に入りなさいと、引つ張り込んだのだから。そういうような人たちを入れることによって、直接じゃない、間接的にその人たちの影響を受けていた人たちが、われわれを支持し、成長していくということでしょう。そういう前提だから、いわゆる民族解放統一戦線みたいなね、民族民主統一戦線みたいなものをまず、最初に頭の中で考えている。それをもって第一歩は啓蒙運動で集中的にやろうと。

眞板 ただ、その三羽ガラスと言われていた人たちは、イデオロギー的には、共産主義的な志向を持っていたということなんですか？

上原 そのことは、まず私であり、山城であるが、二人は少なくとも、共産主義か、それになろうと、命を賭けて努力していると自任していた。桑江さんは非常に良心的なね、現実的であり人道主義者なんだ、一面彼は。また実に素直な民主主義者なんだ。彼は、彼の経歴からみると、彼は、近衛兵だったんだ。近衛兵になるということは、小学校くらいから、もう、非常に善良なその模範的な「臣民」じゃなきゃいけないのだと思う。だから、少年時代から、その物凄く真面目な親孝行者で……

眞板 天皇制についてはオーケーだったんですか？

上原 もちろん。戦前は天皇制はオーケーどころか、彼は近衛兵に選抜されたんです。当時、各県から年間何十名ずつか、指定があったんだそうですね。その中の一人として、近衛兵に入隊して、彼は近衛兵の下士官までなったんだからね。だから、物凄く真面目だったと思いますよ。で、彼に天皇を見たことあるのかって、

われわれとお酒を飲んだときに、いっぱい飲んだときに、冷やかしたらね。彼に誰かが聞いたことがあった。そのとき、彼曰く、「天皇は遠くからね、何回も見た。こんな格好やって、馬に乗って、こんなことやって威張っているの見たよ」。だけでもね、身近に見たのは、いまの天皇だ。

眞板 お父さんですね。いまの天皇の。

上原 いまの天皇のお父さんは、ああいう白馬に乗って、うーんしてやって格好つけてだ（笑）。天皇はなんかどっかのお人形みたいにお胸にいっぱい勲章をつけて、こんな格好をして出ている。お坊ちゃんね、結局、いまの天皇な。「お坊ちゃんね、いつもお付きの係りが何名かついてきて、僕（桑江が）が門に立っているね、ほおっと、なんてね、ちよっとね、お茶目なね、格好で、われわれにこういうのをやったことがあったよ」って言う。「そのくらい、憎くなかった、人間の子どもだからさ。別に僕ら、可愛かった」とかって言うてね（笑）。というような話をしていた。あまり褒めなかつたけれどもね。そういう点では、彼は、われわれとは、育ちが、育った環境が違うということになったんだろうね。

眞板 いずれは、思想的には袂を分かっていくなあというのは、

上原 いや、私はね、少なくとも山城善光とは、視点はだいたい、意見も同一だったと思うんだけど、ただ、むしろ、山城善光は私が突つ走るんじゃないかと、危険視をして心配していた、ということはいつか話したかな？ 彼が死ぬ二年くらい前かな？ 沖繩に行ったときにね、そのとき、桑江朝幸が亡くなったとき、私は、彼の葬儀に参加できなかったから、私が何かの用で沖繩に行ったときに、彼が私を連れてね、桑江朝幸の家に行つて、お線香をあげに行こうやって、彼と一緒にいったんだ。彼の友人の車でいった。で、そこで、何時間か、桑江の奥さんと思ひ出話をしたりして、帰ってきて、彼、首里の彼の、じゃなかった、ガープ

川か？

※上原信夫氏補足・前に語ったように、桑江は近衛兵にもなったいわゆる善良なる「臣民」であった時代もあった。これは、当時の日本人では、いわゆる一般的常識的な認識であり、道徳概念だったんだから、彼をして、「天皇制支持者」というレッテルは適当ではない。私が沖繩を脱出するまでの間、彼と一緒に戦った数年間の言行の記憶をたどってみると、彼は党に誠実勇敢な闘士であり、組織者であった。とりわけ、米軍に対する反物価、税金等の闘争の中で、発揮された彼の合理的企画性は、今も忘れられない。以上の事実から、判断すると、もし、私が沖繩を脱出しなくても良かったならば、山城、桑江と私たちは、長期にわたって、民間の『三羽鳥』として相互研鑽し合いながら、沖繩の自立に向かつて、共に戦い続けただろうと思う。したがって、私は、沖繩を離れるまで、桑江と思想的に袂を分かつてであろうなどは、考えたことがなかった。

眞板 ガーブ川。はい。

上原 上の三階にある、山城の奥さんが経営している一杯屋。そこへ行った。そのときに、何名かの人が集まることになっていたけれども、ま、みんなが集まる前に、二人、一杯飲みながら話して、「信夫、一つ、今日は相談があるんだが」なんとか言っていて、かしまって「何ですか」って私が言う。「お前のことをね、全部、ばらしてやろうと思うんだが」と言うからね。「ばらすものが、あつたら、どうぞ何でもばらしてくださいよ」とこう答えた。それから、三年か四年目に彼は、亡くなったんだけどね。それを言ってから、二年ぐらいに、私が行って、彼はちよつと健康状態がすぐれないというから、私は一晩泊まりで行って、彼を見舞って、それを三回か四回繰り返した。彼は浦添のどこです

か？ 浦添の何ていう高台にあつた老人専用の：

眞板 そこ、病院でしたか？

上原 いや、

眞板 老人ホームみたいな

上原 老人ホームみたいな。そのね、理事長か何かは、大山一雄が、なつていたはずですよ。

眞板 大山一雄って、確か、タイムスの記者の？ 活動中、非常に仲の良かった記者ですか？

上原 そうそう。で、あそこに高松宮か誰か、沖繩に来たときに、そこへわざわざお訪ねになつたって写真が貼つてあつて、

眞板 三笠宮が行つたところでは？

上原 あつ、三笠宮かな？ よく分からないけど。

眞板 特別養護老人ホーム？

上原 あつそうか、あんどとき、山の上です。海が一望できるところでね。そこに行つて、彼を見舞つた。時間の都合で彼の葬式にも間に合わなかつたけれども、休みのときに、何回か亡くなる二週間くらい前に、一晩行って帰つてきた。そういうふうにして、私も最後の彼に対する友情をね、最善友好に尽くしたつもりでいるんだけど。彼が私にそういうことを言つてから、身体の具合が悪くなつて行つたときに、彼を励ますつもりで、「信夫のすべてをばらすつて言つて、あんた、ばらし始めたのか」ってね。聞くと「始めた」って言うんだよ。「だけれども、健康がすぐれないから、いま、筆が進まないんだ」とこういうことを言っていた。だから、その中には彼が、私のことを書かなきゃいけないものを相当あつたんだと思うんだけど。で、そういう中で、いわゆる民主同盟が、将来新時代の展開にどうつなげるか、という問題に対しては、思わぬあの災難が、例の『自由沖繩』問題でもつて、まだこれから、本腰を入れてね、やろうというときに、委員長の仲宗根と私の仲は悪くなって、ということだけれども、私は

それでも、仲宗根に自分の過去の転向を裏切るほどの、ものがあるのじゃないかっていうね、ある……

眞板 期待感はまだ残っていたわけですね。

上原 残っていた。最後の最後まで、私は、それを彼に、二人だけのときに、はっきりと私の思いのたけを彼に言ったことがある。そのときに彼は「いや、もう、私がもう一度元氣を取り戻すようなことがあったとしても、年齢がいうことを聞いてくれない」こういうことを言った。それが、どういう考えかかっていうと、彼は彼なりにね、過去の歴史にほのかなる誇りをね、通常抱いていたんじゃないかということ。私が帰国して初めて、沖繩に帰ったとき、仲宗根源和をお見舞いに本部へ、山城善光と桑江と三人で行ったときの、いまにも泣き出しそうなね、あの顔を見たとき、やっぱり、彼の良心はまだ、わずかながら、あったんだということ。私は信じたんだよ。だから、その『仲宗根源和伝』で、その、おそらく書いたと思うんだけど、自分のイデオロギーと政治的立場っていうのは、別としてだ。個人的な友情っていうのは、私は捨てたわけじゃないんだ。これが、あの小さな沖繩においてですよ、人材を育てるっていうのは大変なことだと。そんななかで、少しでも役立つならば、故人でないかぎり、われわれは、切り捨てない。もし、かりにそういう不幸なことが、起こらなくて、ということになってくると、われわれは、人民党とぜんぜん違った立場でもってね、党は党としての政治思想を断固たる立場に立って、そして、党の周囲には、沖繩を愛し、沖繩の自立と繁栄を求め、あらゆる階層の多くの沖繩人を抱え込んだ、人民戦線をね、統一戦線を構成できたと今でも思っています。

これは、人民党にはできない仕事であったと思うんです。だから、こういう人民の統一戦線的な言うのは、私はもう十四歳くらいの段階で、中国の満州で実際に反満抗日軍ついでこのを見てると、一人の農民だって、仲間内は、皆同志、兄弟じゃない

かと呼んでいた。日本に反対し、そして、沖繩社会に対して、いろんなその恨みつらみのある人たちついでいうのは、われわれの兄弟だと、仲間じゃないかという初歩的な階級的民族意識が、私の中で、知らず知らず育つていたわけですよ。そうなつてくると、意識する、しないにかかわらず、私の中で育つていっているのは、いわゆる国際主義というものだろう。それは侵略され、差別されてやつと生きてきた中国の労働者、農民もみな兄弟だという民族を越えた基本概念だったのだ。それは、中国人だろうと、朝鮮人だろうと、日本人やウチナーンチュも、あるいは、蒙古人であるとか、すべては、われわれに対して、われわれと共に、平和でよりましな社会を、世の中を求めて、共に進もうとするものは、皆、兄弟だ。これが私の根本的思想概念になっていたんです。それが、沖繩という戦災で廃墟の中から立ち上がるうと、這い出そうとしていいる人たちが、必死になつて闘おうついでいうときに、私はそれを座視することができなかった。おそらく、その思いが、私を実践行動へと駆り立てたのだと思う。当時、人民大衆は絶対多数が、めしが食えない、食いたい、では、どうするんだと。すると、農民は、家畜を昔のように飼えないか、そうすれば、荒れた田畑だつて、耕す気になる。田んぼをやるにも、人手が足りない牛がいるんじゃないかと。牛で耕せばいいじゃないかと。極めて簡単な明瞭な道理だ。これはもう、理論的な問題として難しく考えなくても、皆が力を合わせて、具体的な行動を開始する。生きるという明確な目的の下で、身体を張つてやれば、こういうふうに行かないかということの結果として教えてくれるんだ。それでいて、それを否定するものもある。忘れたけれど、こういう新聞あつたよ、それでも、向かつて戦えばいいじゃないかと。俺たち少数人で、できなけりゃ、農民大衆を、立ち上がらせばいいじゃないかっていうね。農民への信頼だ。これが、自然と、私のその過去の生活環境の中で作り上げられたついでいうことなんだ。



ま、そこに至るまでに、何回か死に目に遭わないといけなかったんだけどね。そういうことを経験することによって、少しくらいは、利口になれば良いのだが、どうか知らんけど。

さて、宮古では、ほっとけば、危うく埋葬されてしまうところを宮古の若い防衛隊が、私を救助して生かしてくれた。今回五十八年ぶりに宮古に行つて、一九四五年三月一日の米軍機動部隊との戦闘のときの状況を少し知っている人に聞いてみたらね、私たちが乗船して護衛していたその輸送船が沈んで、私が救助されたのは、何時間か、少なくとも、四時間から五時間以上経っているはずだと、助けられた場所は、平良市にある発電所の下の浜にあげられたんだよつて、そこへ、連れて行つてくれた。救助された私は意識不明だった。まあ、まぐれ当りで、宮古ついでに地に、助けられたと。再生ですな。これついでに財産も知識もない者が、生き返つたんだから、復活なんて言葉は、畏れ多くて使えないからね。まぐれ当たりの再生なんだと。宮古の人たちは、「生まれ変わったんですよ、あなたほど運の良い人はおりません」とおぼさんが。そのおぼさんついでにはね、その当時、十五、十六だつたんだそう。それで、私の部落に行こうと言つて、飛行場から、今度は時間がないから、次にしますつて、そしたら、あなたのことを今でもみな話しておりますと。で、私を匿つた、その外間ついでに人も、みんな喜んでくれてね。

**眞板** 上原さんと同世代の、海軍に行かれた方は、まだご存命ですか。

**上原** まだ、とても元気。孫ができてね。家族いっぱいだった(笑) 飛行場でね、彼をしつかり抱きしめて、生きていることを再確認したね。彼もああ、生きていて良かったね、と言つていた。着いた晩は、外間さん宅で、歓迎会があつてね、平良市長(注・伊志嶺亮市長)も来てね。

あつ、そうか。新聞に向こうの新聞に宮古毎日となんとかつて

というのがあるんですか。タイムスかな。それに、写真もデカデカと載つてね。こないだ、沖繩県人会のね、「沖繩の声」ついでいうのを出している金城さんつて方がいるんだな。その方、宮古へ行つたんだそう。なんか用事でね。そしたらね、宮古の人たちが、新聞を持つてきてね、あんた、東京にいるんなら知つていないか、知つていないつて言つてね。その写真を見て、上原さんじゃないかつていうことで、飛び上がつてビックリして。そして、帰つてきつてから、実は今日、宮古から帰つてきてね、本当にビックリしましたと。なんで、宮古の人に、この人、知つているか、つて聞いたらね、宮古に来たんですよ。新聞で報道して、テレビでも放送した。五十八年ぶりつていう見出しでね。デカデカと、市役所で市長と一緒にいるところを載つていてるから。

**眞板** じゃあ、宮古じゃ、有名人ですね。

**上原** どうもそうならつたらしいな(笑)

## ■ 離沖の状況

**眞板** では、あと、素朴な疑問で、もう一点質問させて、補足の質問は終わらせていただきたいと思うんですが、沖繩を離れられるときにですね、ずうつとこれまで、一緒に行動なさつていた、山城善光さんに、なぜひと言おっしゃつて、発たれなかつたのですか？

**上原** いや、これは、「沖繩におれなくなつたよ」と言つたらね、彼は、「じゃあ、気をつけて」ということだね。彼はCICに追つかけてまわされていることを、私より彼の方が、情報を多く持つていたから。ま、そういうことで、民主同盟の解散の問題について、彼は私が参加していると言つていふんだそうだが、私は思ひ出せないんだよな。彼は名護でつて言うんだけど、もちろん、当時の状況では、私は名護から南へは、ちよつと行けないよな

状態だったと思うから、おそらく、彼らは、何か重要問題があったときには、必ず、彼のそばには私がいたという一つの錯覚がね、そういうことになったんじゃないかと、私は書いたんだけどね。一つも思い出せない。

眞板 いくら、密航船とはいえですね。

上原 えっ？

眞板 密航船で行かれるとしても、いまから行くぞというわけではなくて、明日の明け方に出ますとか、というようなことは、前の日の遅くぐらいに分かると思うんですけど、そのときに、おそらく、善光さんも近くにいらつしやるでしょうから、明日発つよ、ぐらいのひと言をかけていっても、良かったんじゃないのかなあと思うんですけど。

上原 そこらあたりが、あの当時のね、沖縄の現実をよく理解していない。電話かけられない、ないんだもの。

眞板 では、そのときは、善光さんと離れたところにいらつしやったんですか？

上原 それは、おそらくね、兼次佐一が言うように、本部の講演会で、彼の家に泊まってから、私は消息不明になる。それから、私を知っている人と誰にも会っていないはずなんですよ。そうだな。だから、兼次佐一さん、ずうっと、私が元気だったことが分かってから、俺が逃がしてやったんだぞ、ということ、今でいうエスケープしたんです。それで、山城善光が、だったら、早めに兼次が逃がしたっていうことも、「あんた、顔見に行つたぞ」って、言つたらね、いや、そうではなかったよって啖呵を切つていたって、バカ話になつただけでもね。

もし、仮に、沖縄に一つか二つ知らないけれども、密航船が入っていると、しかし、その密航船は、ある港に、今晚、夕方までいたら、次ぎの朝、別に行っているかもしれない。そうすると、その港を重点的に、監視している人たちは、あ、やつぱり、帰っ

たんだと。密航船がね。その密航船っていうのは、主に、建築材を持って来た、

眞板 建築資材ですね。

上原 建築資材。なにしろ、もう、終戦から何年か経つても、台風があつたら、天幕をぜんぶ、巻き上げてすつ飛ばされて、寝る場所もなくなるというのが、一番の災難だったので、沖縄の人たちが、血眼になって、求めたのが、どんなお粗末でも建材が欲しかったのです。台風に耐えられるぐらいの家を作れないかというのが最大の要求でした。だからね、私が知っている、密航船はだいたい建築用資材の密輸活動をしていた、たとえば、建築用木材いっぱい積んで来るのはね、宮崎。鹿児島かどつかで、全国からの荷物を積むのか分からないけれども、鹿児島か熊本ですよ。えーとね、和歌山。でも、和歌山の船と限らないですから。九州の人と沖縄の人と組んで、船をそこで、借りる。来たら、建築資材はどつかの港の浜で、ダツと降ろすわけですよ。下ろしたら今度は、さつといなくなつてしまふ、っていうことですから。名護あたりですと、二、三日もいたら、確実に捕まってしまうだろうからね。船いっぱい、全財産を賭けてですよ、船いっぱい、積んできた資材が、押さえられて、これこそ、松岡のところの、そこへ持つていかれちゃう。

眞板 (笑)

上原 密輸物資はいろいろあるが、建築資材のほかに、ナベ・カマ類、日用品って言いますか。包丁とか、ちよつとしたあれなどは、戦争の廃品でね、生き残つたかじ屋さんが、作つてくれるけども、ちゃんとしたもののは、ご飯を炊くとか、ということになつてくると、やつぱり、ナベ・カマは必要だ。そういうものって、物凄く高い値段で売るとかさ。

そういう沖縄のあの何も無いところで、人間が生きて行くために、差し当たつて最低必要なものっていうと、ナベ・カマであり、

あるいは、お皿とかお茶碗が必要でしょうね。そうすると、お茶を入れたくも、入れる物が無い。缶詰にお茶を入れて、これを飲んで、お茶の味もしなかったと文句を言っている、おぼさんの話を聞いたことがあるんだけどね。そういう、日常生活に最低必要なものですね。建築資材と同時に、こういうのを運んで来たんですね。だから、中には、衛生用品から薬品、カネになるもの何でも運んでくる、軽いちよつとしたものね、学用品とか、鉛筆とか、帳面とか、それから、一番お粗末なものは、わら半紙みたいな安い紙ね。そういうものを、そんなに膨大な量ではないけれども、おそらく、知り合いに配るつもりで、これはカネにならないものだという形で、彼らは扱っている。そういうのを私は、どこかで、聞くとね。その闇屋たちに、少しくらい、百枚くらい譲ってくれよとかね。鉛筆を二十、三十本くらい譲ってくれよとか、ということでも、もらいに行つたものだからね。それで、これどうするんだ、って言うからね、いや、学校に行つても、先生の話を書きする文房具すら何もないんだと。そういう状況。その点では、中部、南の方の交通の便利なところは、どこからか、闇の商品があるってなるんだけど。ヤンバルあたりの奥なんて、そういうのぜんぜん入らないからね。だから、私は、小遣いが余つたら、村の子どもたちの必要な学用品などを買い込んで、自分で担いで持つて行ったもんなんですよ。一番最初の話に出てくる、友人の上原力三なんていうのはね、軍のいろいろな払い下げとか、いろいろそういうやつをうまく手に入れるけれども、今度はそういう細かい、子どもたちの学用品とかは、あまり、気の向かない性質の人間だったからね。大きなやつは手に入れるけど、小さなやつはぜんぜん(笑)

眞板 軍には学用品ないですからね。ま、事務用品はあるのかな？

上原 鉛筆ね。鉛筆を何十本か持つて行くと、私にも下さい、な

んて言われてね。よしつ半分に切ろう、三分の一に切ろう、というように切つて、それをやつたと思います。

そうだ、思い出すのは、そしてこの、夜のランプがない、灯りが無いでしょ。その力三つというやつが、その彼の近くにね、昔のブリキ屋さんつていうんですか、それがいて、彼が設計をしてね、こんな大きなブリキ板か缶詰が空いたのを利用してね、灯油を燃やせるように、ランプを作つたんだよ。それを各戸にあげられないから、部落の比較的かたまったような、奥では昔、五つの組があつて、一番組、二番組、三番組、四番組、五番組とかつて言つてね。その喜如嘉ではパールつて言いますけどね。

眞板 パール？

上原 この組というのは、日常のお互い助け合う活動も含めての基礎組織の一つの単位で、運動会になると、それが一つのチームになつて競い合うんですね。それを〇番組つて言うんです。班とか組とかいうやつでしょうね。そこを単位として、子どもたちが、自然と寄り合つて、自分たちの勉強会場を作るように、われわれが指導したんです。しかし、夜も勉強したいという子どもたちの願いがあつたが、肝心の灯りが無いから、その力三つというのが、「俺が作らしてやるよ」つて言つて。ランプを作つた。今度は灯りの油がない。でね、なんか、民政府なんか知らないけれど、奥の港に船が入りまして。彼が行つて、掛け合つてね、ドラム缶一缶くらいもらつて来たことがある。一番多いときは、なんか二、三缶くらいドラム缶をもらつて来て、浜にあげてね。おいとけなから、それ持つていけつて言つて、自分たちで、持つて来て分配する。それで、彼は、はつ、奥には電灯がなければダメだつて、そんなことを言つて、電灯を。

眞板 それで、その後に、発電機とかを作つて、電灯を

上原 そうだよ。

眞板 その電灯は、各戸についたんですか？

上原 いや。半分か三分の一くらいじゃないですか。

眞板 それでも、立派なもんですね。

上原 馬力が足りないから。そのかわり、えー、何て言いますか。拡声器とかそういうのは、二つくらいあったからね。一つは共同店の上と、神社の高台のね、お陰で、部落のどこにいても、どこかという面では彼の功績は大きかったね。

眞板 あと、一点なんですけれど、六回目のお話の中で出てきます。徳田球一さんとの関係のお話なんですけど、「私が書いた論文は、徳田球一宛に送ったよ」というお話がありましたけれども、返事とかございましたか？

上原 えっ？

眞板 返事ございましたか？

上原 それは、返事いらぬ。そういう問題についてはね、これこれであると、そういう言質をもらう必要のない手紙ですからね。とりわけ、当時は徳球さんの健康状態はますます悪化しつつありましたからね。返事を書いて寄せ、なんていうことは、言うこと自体が、情勢を知らないということになる。

眞板 何か、反応があったのかなあ、と思ってます。

上原 いや、そういうことは期待しなかった。

眞板 分かりました。ありがとうございました。

(了)

# 上原 信夫

## C・O・E オーラルヒストリー

### 第8回

---

開催日	2004年5月10日
開始時刻	14:00
終了時刻	16:30
開催場所	政策研究大学院大学 政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】(肩書きはインタビューの時点)

**佐道 明広** (中京大学 助教授)

**眞板 恵夫** (沖縄問題記者、元政策研究院・政策情報プロジェクト共同研究員)

---

録音・記録作成 眞板恵夫

## ■「福建・沖縄友好会館」建設に1100万の補足

眞板 では、先週、お電話でお話を伺いました。「福建・沖縄友好会館」についてですね、補足をお願いできたらと思います。「福建・沖縄友好会館」は、九四年十月に着工しまして、九八年七月に出来上がっています。このお電話の中で、その前の段階としてですね、福建省の関係者の方を國場幸一郎さんにご紹介したりとか、あるいは、福建省に造るのではなく、北京の方に造った方がいいよ、というようなお話を、お電話で伺ったわけなんですけれども、そのあたりを、補足お願いできたらと思います。

上原 福建省で、友好会館か？ あの琉球会館か？ 知らないけれども、それを造るといふ話、私が日本に帰って二回目くらいの沖縄に帰ったときから、聞いておりますですね。そういう希望があると。あ、そうだ。西銘さんの時代からあったんじゃないですか？ それまでに、沖縄から、福建へ行く人たちが、当時、そうですね、直接、北京には飛べないから、香港に行つて、香港から福建に入つて。

そして、福建の琉球館と琉球人墓地のあった場所っていうのは、福州市なんです。福建師範大学っていうのがあって、その裏側には、琉球人墓地っていうのがあるんですよ。そして、そこにはちゃんと、墓碑に、琉球國の何の誰兵衛って中国名で、書いてある人もいるし、ウチナンチュの名前で書いてあるものもある。それで、自分の官職を彫り込んだような人もあります。結構広い面積にわたつて、昔の福建の高台で一定の面積にわたつてあつたけれども、都市計画とか、それからいろんな理由で、たとえば、新都市計画等で残念ながら、一部の墓は壊さなければいけないっていうことになった。しかし、その墓碑は、ちゃんと、福州市で、もう昔からのも含めて、大事に保管してくれていますよ。八〇年

代のはじめ頃になりますという、まだ五十、六十基くらいの墓碑が残っていて、——それぞれ、自分たちの階級や財産によって、墓の作り方が少しくらい形が違いますけれども。——それを福州の人たちは、昔から、琉球墓地ということと呼んでいたんですよ。

そこから、ずうっと下がっていくというと、町の中に入りますと、距離にして……正確な距離は分からないんですけども、いわゆる閩江、福建省を流れている、「ピン」は門構えの中に虫を入れて「閩」ですね。「コウ」は揚子江の「江」ですね。福州市の中心は閩江の北岸で、こんにちでは、南岸にも新市街地が広がる大都市になっています。

琉球会館は閩江北岸の小川のほとりあたりにあつたと思います。その、昔の琉球会館があつたところを私は何回か訪ねたことがあります。昔のことですから、何代も経っていますからね。しかし、古老の話によると、清朝政府が打倒されたあとも、琉球館の名残は残っていたそうです。ただし、そこはすでに早くから工場の敷地になっているんですよ。工場になっていて、琉球会館の跡というね、ちよつとした小さい立て札が、立っているくらい状況でしたから。

そこが、西銘さんに関わることについて、西銘さんの選挙運動の民間団体とのつながり役みたいなのをやっている、ある人。名前はちよつと忘れましたがね。その方を私の知っているある人が紹介した。この人は、西銘につながりをつけるようなことがあつたときに、「われわれは、この人を使っております」という形で、大変親しいつながりがある。ということ、その方も一回、まず、中国に行く機会があつたから、訪中したいと希望されていたので、その人を沖縄のある人と一緒に、中国に連れて行ったことあるんです。その人たちは「西銘知事をぜひ一度、福建に連れて行つてくれませんか？」ということだったんですよ。

留学生の援護協会を作つたのは、七九年ですからね。それから、

三年は経っていないと思います。私が西銘さんの友人たちを中国に案内したのは、その人たちに北京に来てもらって、北京から一緒に福建へ下りていったと思うんですよ。

そして、福建に行つて、まず彼が、言い出したのは、「琉球人墓地と琉球会館の跡地があるそうだが、誰が行つても、どこにあるのか、分からないそうです。先生、一つ福州の人と相談して、探し出してください」ということだった。実はその人は、昔の福州と関係のある、沖繩の人たちとのつながりは持っていないから。だから、その前に、すでに、戦後福州に行くような機会のある、沖繩の福州と関係のある人たちは、そこに行っているんですよ。連れて行きましたら、ちゃんと福州市ですね、墓守みたいなのが、きれいに雑草を刈り取っていますから。「誰がやつたんだ」と聞いていたら、「このいわれを歴史を知っている福建師範大学の学生たちが、勤労奉仕みたいに、草を刈って、きれいにしましたよ。で、これからもそういうように、われわれがちゃんと管理します。ということ」を市の方からも言われております」ということだった。私たちは琉球人墓地を参拝したあとで、その方を私は、琉球会館の跡へ連れて行つたら、もうすでに十数年以上も稼働している工場の中だから、どのくらいの規模で、どのような建造物があったのか、その工場の若い総経理だつて、何も知らないわけなんです。「間違いなく琉球会館がここにありました、ということ聞いております」と。それだけのことなんだ。

それで、そこに琉球会館ができるということになってくるといふと、工場の生産を停止しなきゃいけない、工場を移動しなきゃいけない。そういうことじゃ、せつかく苦勞して作った人たちがね、同意するしないの問題じゃなくて、福州市の生産計画に不利な面が生じるじゃないか、ということ、そのあとで、私は彼らを市役所に案内し、支庁にも挨拶したあと、墓碑などを保管しているところへ、その人たちと一緒に行った。福州市が保管して

いる墓石がですね、百〜二百枚近くくらいあったと思いますね。市の責任者は申し訳なきような顔で「これはずつと、最初から大事にわれわれは保管しております」ということを説明した。

琉球館の建設については、「もし、将来必要ならば、それをまた、建てるかどうかは、それは、むしろ沖繩の担当者が、実際に来て見てもらつて、便利で風景の良い場所を決めることにしましょうや」というような話になったんですよ。そのとき、その方も、「じゃあ、別の場所でも考えてもいいんじゃないかな」なんて言うから、「じゃあ、お帰りになつたら、西銘氏には、実情は、こうゆうであるということをお伝えして、別の場所でも、記念碑的な物をひとつの建築物としてならば、別の場所でもいいじゃないですか。で、市のほうでは、適当ないい風景のいいところへ、結構ですよ」ということだったんだ。

だが、その後、おそらく、西銘さんのときには、正規の代表団は派遣していないはずですよ。ただし、大田さんの段階になると、西銘さんの時にも私と共に福州を訪ねたこともある有志の人たちも、個人または公人として何回か行っているかもしれないですね。お墓参りを兼ねて。

それから、私は八〇年代の初めには、沖繩から中国へ留学生を派遣しました。人数は何名だったか忘れましたが、八三、八四年ごろに、三年間くらいで約三百人近く。北京大学を始めとする当時の重点大学へ。

佐道 中国に派遣を？

上原 中国全国の各大学に派遣しました。それはそのときに、初めて、留学生問題をやるからということ、沖繩に帰つたときに、山城善光が、「信夫、キミ、そういう計画があるんだつたら、知事のところへ一緒に行つて、話そうじゃないか」ということで、西銘知事を訪ねた。これはおそらく、八二、八三年じゃないですかね。そのときに、会つて、彼もビックリしている。私が（沖繩か

ら)逃げる前に、彼はまだ、青年時代(?)、何回も会っているんですよ。「お互い年取らないなあ」と言っていて、冗談言ったり、笑ったりしたんだけど。

そのときに、初めて、沖縄から留学生を派遣することについて、いま、沖縄では人材育成協会ですか? そこから、一年間に一人くらい派遣するような計画をしているんだと言うから、それはどこへやるのか、清華大学がいいのか、北京大学がいいのか、どちらでもいいですよ。私が生をかけますからということ。そして、その翌日、人材育成協会に行ったら、当時の理事長、名前忘れましたけど。その人と会って、二、三人職員がいて、その人と話し合いをして、どういう進め方をするかということ、「あなたたちが希望する学校、特にここじゃなきゃいけないという、そういう要求あるならば、私、協力します」というようなことを言っています。

そのときは、なんかのついでに、西銘さんとは、「琉球人墓地」というのが、あるそうですね。私は「ありますよ」と言ったら、まあ、大変、彼も関心を示してですね。将来の中国とのつながりの問題、いろいろ思い起こす点があったと思うんですが、その時は、はっきりとそのような具体的な話までいかない。そこでも彼は、沖縄問題について教育問題は非常に大事だということ、それから、なんと、偶然のあれだと思えますけれども、国民党の、台湾国民党政府の文教部長なんかです。「チョウ」というのが、弓張りの「張」ですか。その方が、沖縄と非常に関係が親しいと。で、年に何回も沖縄に来ているということ、そのときに、西銘さんから初めて国民党の張さんの話を聞いたと思う。その後、先ほど言った彼に近い人が、一回、私が、まず先に見てきますと。新中国の現況を見たあと、彼の考えとしては、「知事は台湾だけに向いていないで、あなたが言うとおり、沖縄と中国との関係についても検討すべきだ」と私に熱く説いたことがあるんですよ。

実は、国民党は党の経済活動の事業として、対外貿易もやっているんですよ。たとえば、当時、世界で流通している漢方薬の八〇パーセント以上は台湾製なんですよ。この台湾製の漢方薬の八〇〇パーセントの原料は、直接中国大陸から輸入していたんです。いや、正確には一〇〇パーセント近いですね。だが、蒋介石は「三不政策」を掲げているもんですから、直接自分で貿易できない。やりたくても、できないから、台湾、国民党の貿易部門は、香港の中国大陸とつながりがある商人たちと組んで、合弁会社を作って、そこを通じて、台湾に漢方薬の原料を入れたんです。だが、漢方薬輸入に国民党の会社と合作した、香港の商社はね、大変な利口な人だったものですから、国民党に落ちるカネが少な

いんだ。さて、なぜ、私が、国民党の内部情報を知っているかというところ、「フアミンゴンス」(華閩公司)の友人から情報を得ていたからなんです。当時、中国はまだ、対外貿易などもあまりできないような時代ですから、広州の方で、「広州交易会」の中でやっていたんですが、まだ国際的な外交関係もない各国との取引は難しい時期でしたので、そこで、東南アジアの華僑財閥の有力者となつながらある省ということになりますと、まず福建、広東省です。この両省は、大きな影響力を持っていますから、中国政府は一方で福建省を利用し、他方で香港に華閩会社を作らせたんですよ。そうすると、たとえば、日本からある機械設備を入れたい、という場合に、日本にいる華僑を利用することもできますけれども、残念ながら日本にいる華僑資本では、大きな対外貿易などを切り盛りできるほどの大企業はありません。そうすると、香港を利用せざるを得ないということになってくるんですね。じゃあ、香港の貿易関係企業家につながる太い線は、どこかというところ、やっぱり、広東省と福建省出身者です。それで、福建省対外貿易公司・華公司を作らした。そしたら、非常に効果的なんですよ。ま、当時



としては、唯一の中国の国際的な経済交流と対外貿易関係を、冷戦下で取引内容は制約されていたものの正々堂々とやっていた。そして、すると、福建がうまくやっているから、そういうのは台湾の連中だつて、大陸とのつながりをつけるにはこういう機会を利用しないわけはないですね。情報も得られるし。

そういう対外経済交流の進展の中で、今度は福建に近い浙江、江蘇とか湖南とか、そういう、当時、私の記憶では、四つか五つの省のですね、対外的代理店みたいな役割も華閩公司はやっていましたよ。そういうことで、大変、中国の国際的経済と友好交流について、一定役割を果たしたわけなんです。この華閩公司の総経理などは、若いころから私の知り合いなんです。それで、国民党と中国大陸との貿易関係の動きというのを知っていたんですね。台湾は香港を通じてやるより、逆に沖繩を通じて福建と直接に結びつけるというの方が、むしろいいんじゃないかということをですね。沖繩では私が行くたびごとに、ちよつと少しでも、影響力がありそうな沖繩の友人に対しては、盛んにけしかけたんですよ。そういう中で、その西銘さんの知り合いの方も、行ってみたいということで、福建まで行って、福建の方とは何が取り引きできるのか、調べて帰ったと思うんですが、そのときのその人の私に対しての要求は、一回西銘さんを中国に連れて行かないかと。一回。次ぎ来たときには、私が彼にどんなに忙しくても、暇を作ってもらつて、お会いするようなお膳立てをしておきますということ、彼が秘密の手配をしてですね、で、会った。これにちよつと、書いてありますか？ 前の？

※「三不政策」は、一九七九年四月蔣経国が表明。

※「広州交易会」は、正式名称を中国出口商品交易会と言ひ、一九五七年以降春と秋の一年に二回広州で開催される中国最大の見本市。

眞板 前回伺いました。

上原 ね。ま、そういうことが結局、歴代知事がですね、福建とのつながりつていうのを大事に、現時代にあつたような結びつきを、発展させようということを考えたまきつけにもなつたと思うし。特にそれに対して、國場幸一郎がですね。(國場幸一郎) たちが、働いているという、それぞれの立場、商売の立場があるから、そういう立場からありますけれども、私とは何回か、中国へ行ってらるんですよ。彼らも、國場幸一郎も二、三回くらい福建に、福州まで行って、琉球人墓地やそれから琉球会館の跡地も見に行つてらる。彼らは専門家だから、「やっぱり、ここでは造らせないだろう、別に造りましょうや。あんたたちの方で、そういう担当者の方へ話してくれ」ということで、私は行ったときに、省長に会つた、それから、福州市の市長もね。彼らのために、歓迎会を開いてくれたんですから。

眞板 その省長は、賀国強ですか？

上原 えっ？

眞板 賀国強さん。この方でよろしいですか？

上原 これは、大田知事のとときですね。あとのことですね。

その前は、王？ 王さんか？ 王兆国。市長はもう名前を忘れてたね。その前後して、陳というのが市長、省長。陳彬藩などの時代ですね。

國場幸一郎たちは、その大田さんが友好会館を作るといふ、その何年も前から、行つて状況をよく知つてらる。

眞板 先生は、この沖繩・福建友好会館つていうのは、九八年七月にできるわけなんです、これは一種のビジネスセンターなんです。沖繩の県内の会社が福建省に出ると。そこで、商売をするというビジネスセンターなんですけれども。この場所というのは、人民政府の斜め向かいぐらいの非常に良い土地柄だったんだ

ようですが、こういった場所の選定とかです。ね、そういうようなところで、先生が事前に、國場幸一郎さんと一緒にでも結構なんですが、サジェスションをしたりとか、向こうの省庁に働きかけるといふようなことは、あつたんですか？

上原 それは、もう、その彼らが、こういうしてきましたと、福建と沖縄は昔からつながりがある土地ですから、こういうことで、彼らは関心を持っていて、将来は友好会館の跡地か、あるいは別の適当なところでですね、あんたたちが、選定してくれる最適の場所でもって、記念館みたいなものを造る計画があると。それは、沖縄の多くの人たちが、かねてから、要望していることなんだが、私は具体的な内容については分からないが、そのときは、「いいところを推薦してくれ、協力してくださいよ」というなんてことは、当然、何回もお願いしているわけですね。

眞板 この友好会館とは、ビジネスセンターとは別にその記念館みたいなものを造る計画があつたということですか？

上原 造られたのは、ビジネスセンターですか。

眞板 そうです。

上原 友好会館って言わないの？

眞板 いや、友好会館です。

上原 ああ。

いや、私は、そのころ、國場幸一郎や他に前後して私が同行した人たちに話したのは、いま福建という土地は、そのときは、香港に行つて、香港から今でいうその汽車に乗つて、北京に行かなきゃいけないわけですね。香港まで行つて、福建に入るのは、大変なんです。不便で。ということ、福建まで行つて、福建から北京に上がるのが、大変なのね。汽車も遅いからね。だから、いま、中国の経済建設の速度からすると、福建には私なりに、単なる記念碑的な建物。そのぐらいのものを造つて、十分であるという。このことは、福建を通じて沖縄が、中国との経済的なつながり

をできるとか、詰めるとかいうことが、あるいは、福建を通じてしか沖縄は、それ（注・経済交流）ができないっていうことは、時代遅れである。だから、沖縄が中国と取り組んで、正面から取り組んで、経済的にも発展しようと思うならば、北京に事務所を作るべきである。北京を通じて、北京から沖縄への発信。沖縄から北京への発信。そして、福州へと。これは、いわゆる昔からの親戚としての福州とのつながりが、それで、記念碑的な意味を持つものということが、私の要求だったの。

なぜかという、まず貿易をするのに、当時の状況からしますと、広州に交易会がある。交易会では、今度は話し合いをして、実際には具体的ななつてくると、もう一回沖縄の商人たちは、福州に乗り込んで行つて、ということ、二重に手間がかかるから、そんなことはしないほうが良い。そういうことを考えるよりも、むしろ、先ほど言ったように、いま、台湾は、本当は近い距離で、もつと身軽に、中国大陸と結びつきたいんだ。その結びつきの役割を、なんて言いますか、つながり役のね、それを手伝った方が沖縄のためになる、ということを私の周辺の中国に関心を持っている友人たちに強調した。

眞板 それはどなたに、伝えられたんですか？

## ■ 沖縄と中国のつなぎ役

上原 これは、國場幸一郎たち。國場幸一郎たちがやっている経済問題に対しては、よく話は通じるから。それで、彼と西銘とは、特別に親しい間柄であるということです。その他に、台湾、沖縄、中国との関係に現に動いた人たちですね。

それで、彼らにそういうことを私は言つて、特に、國場……まだ、そのときは、あれですよ。西銘さんが知事のときでした。これは前の段階では、先ほど言ったように、台湾が中国との貿易

を間接的にしかやれない、それをうまく利用して、その主導権を沖繩で取ってしまえと。そして、たとえば、先ほどの漢方薬の原材料ですね。これも、台湾と沖繩の人たちが、あんなたちが、合併会社を作れと。台湾、沖繩を拠点として、福建なら福建、北京なら北京につながる。これをやれということをお私にだけかけたんです。一所懸命。

眞板 それは、中国側の受け入れは可能だったのですか？

上原 えっ？

眞板 中国の受け入れは可能だったのですか？

上原 そういうやり方ね。

眞板 はい。

上原 可能だった。私は十分に自信があった。

眞板 いえ、当時はおそらく深圳あたりしか、経済特区になっていなかったと思いますけど。

上原 だから、そこなんだよ。その可能性があったかどうかという問題より、実際の例を挙げますとですね、西銘さんの最後の時代、最後の任期のですね。もう、はじめくらいからでしょうね。だいたい、七八年、七九年ごろから、もう少し（前）から始まるのかな？ もう少し先があるかもしれない。

眞板 西銘県政は七八年からです。

上原 えっ？

眞板 西銘県政は七八年からです。

上原 八年から知事？

眞板 はい。それで、九〇年の十一月で大田さんに敗れて、三期十二年やっています。

上原 じゃあ、彼の第一期くらいからですよ。そのころから、台湾の商人たちは、八重山の石垣港まで、密航船で来るんです。それで、八重山の石垣港についた密航船は、入港手続きを取る。そして、入港手続きを取った後、そのまま、福州や他の港に行っ

ちゃうんです。中には、福州に行かないで、もつと近いところで、荷物を降ろす。その役割を果たしていたのが税関で、そこでちゃんとハンコを押す。そして、福建の帰りにもう一回、ここに寄って、今度は出航届けを出してハンコを押してもらおう。

とにかく、あつそうか。沖繩の石垣島へ行つて、石垣港に入港したら、入港のハンコを押してくれる。そして、出るときは、そのまま福建まで行つて、福建の帰りにもう一回、石垣港に立ち寄つて、それで、今度は出航のハンコを押してもらつて帰るわけなんです。それで、相当数の船舶ですね、台湾の密航船が、回遊していたわけなんですよ。

そのころに、なるという、蒋介石と一緒に（台湾に）逃げてきた年取つた老兵たちが、大陸にある自分の故郷に里帰りしたいという要求が出てくるんですね。それを香港経由で帰すということになると、旅費の負担だけでなく、香港での手続きも大変面倒臭い。実際に、一部ですでに始まっていたんです。台湾側からは、里帰り用の船舶を福建から直接迎えに寄越してくれないかという要求があり、福建側も可能だと答えました。では、実際にその船がどういう航路を取るかというと、福建を出航した船は、沖繩の石垣港に入港し、そこで、台湾から来ていた里帰りの老兵を乗せて、再び福建に向えばいいじゃないかと考えたわけです。華閩公司の連中も含めて、実際には、そういう水面下の活動もやっています。福建から、それは「快速客船」って言ったんだけど、約千何百トンくらいの客船が、那覇港と福州の馬尾港の間を何回か往復しました。実際に、沖繩経由でもって、人も送ったんですよ。それが……

※「老兵の里帰り問題」は、一九八七年戒嚴令の解除と共に許可されるようになった。

眞板 そういうことも、先生は携われたんですか？

上原 いや、いや、そういうことをけしかけたんですよ。沖繩の経済発展に努力している若い人たちに。

さて、福建からの快速客船の初便が成功したので、第二便が好都合にも私が沖繩に行ったときに入港したので、その船まで行って、船員たちと話をさせてもらったんだけど。

しかし、沖繩での燃料代が高くてね。福建で積んだ満杯にしてきた油が、沖繩まで来ると、今度は帰りの燃料がたりなくなるので、沖繩でその燃料を購入したいですね。そうすると、沖繩の燃料代はあまりにも高いため、航海するたびに赤字がかさんでしまふというわけです。結局、その船は、一年足らずで、止めたと思ふんですが。

実は、そういう事態になる前に、私は沖繩の関係者にその船の燃料代を沖繩が負担できないだろうか、ということをお話を私に意見を出した。その関係している沖繩の人たちは、県にその意見を具申してはまずいですよ。きっと、それを県が補償してくれなかったから、快速客船は大きな赤字で撤退したんだと言ふことなんだよ。

眞板 直接先生が、県に何か関わりがあったわけではないんですか？

上原 いや、全くはない。ないけど、私はちょうどそのころ、台湾の国民党と沖繩を通じて、中国とのつながりについて非常に関心をもっている段階だから。そこで、もし台湾、大陸関係の問題、とりわけ人の交流が沖繩を通じてやれることによって、沖繩独自の立場から中国と台湾との友好交流への新しい道が開けるんじゃないかという、一つの政治的な私なりの判断でそれをけしかけたり、励ましたりしたわけなんですよ。

眞板 どなたに対してですか？

上原 それは台湾と貿易しているね、八重山出身の台湾との繋がり深い人たち。米城じゃなかったかな？ その他、そういう人

たちの名前、変えているかもしれない(笑) そういうのが、國場たちも組んでいたのか、詳しくは知らない。それを、県自体がどの程度、黙認していたか、ということもあるんだけど、それを堂々とやっていたという点も、大変面白いですね。そういうところに、台湾国民党の差し迫った需要があった。連絡関係部門で、大陸とのつながりをいかにすること、香港を経由するということ、一つの線とほかに沖繩を経由するという第二の路線ですな。だから、結局、日本政府が、それをだんだん分かつてきて、現にその圧力がかかったのかどうか、それは分かんないけど。それもあつたかもしれない。

そういうことが、今度は、この華閩公司の連中、あの頃は、だいたい香港経由で行くんですから、中国へ行くのはね。だから、ちよつと、立ち寄って、「情報どうなんだ」って聞いて、誰かにいろいろな情報を聞いて。沖繩には、こういう点で、けしかけてやらせてみようということになったんですよ。

佐道 ちよつと、確認ですが、それは、七〇年代の終わりごろ？

上原 終わりから、八〇年代の始めごろ。

佐道 八〇年代の始まりか、そのぐらいか？ 先生がその留学生のお仕事をされて、もうそのすぐぐらいの状況？

上原 そうですね。

佐道 その沖繩の方では、一年くらい、そういうことをやっていた、ということになりますか？

上原 私としては、一九七九年春からの私の本業は、中国からの留学生の受け入れと、沖繩などから中国へ留学生を送り出すことです。ただ、そのときに、沖繩の友人たちが「台湾の人が石垣に来て、こういうことを言ってきたが、本当にできるんだろうか、どうだろうか」と尋ねてきたんで、私は「やったらいじやないですか。じゃあ、今度、香港に行つたときに、調べてみますよ」ということをそういう情報を、私はほとんど提供して、「沖繩も独

自でやれど。県にもけしかけて、人の往来、物の往来だけでなく、人の流れまでを沖繩を通じてやればだね、沖繩は、沖繩で台湾と合併会社を作るとか、逆に台湾で沖繩との合併会社を作るとか、ということは、台湾自身のためにもなりますよと。で、あなたたちは、しかし、国民党の方たちにもね、そういうことをどんどんけしかけたら、いいんですよ」ということを私は言っていたんですよ。いずれは沖繩経済は復活するであろうという願望を持ってですね、やった。

佐道 そのときは、先生は東京で、メーンは東京で、その留学生のお世話をなさっていたんですか？

上原 もちろん、その頃は、私、沖繩にふた月かみ月に一回帰るかどうかですね。滞在は一晚か二晩くらいだが。

佐道 でも、ふた月かみ月に一度くらいは、沖繩に来られていた？ そうしますと、年に三、四回は？

上原 三回くらいは行っていたんじゃないかと思えます。

佐道 ああ、そうですね。

上原 そのときは、山城善光も桑江朝幸も、まだ元気ですからね。だから、そういう問題についても、山城善光たちにもさんざんけしかけた。

佐道 いろんな方に、そういうお話をされていた？

上原 そう、なぜかというところ、こういう仕事は門外漢だから私にはできない。私にはその才能がない。そういう経験も財産もない。だから、あっちこちにけしかけるけれども、私自身が直接やるということ、絶対しない。ただし、私は、関心を持つ人に対して、助言するだけです。しかし、この情報は正確なものであることを伝えるために、私の招待した人たちが、香港に着いた晩あたりは、必ず華閩会社の担当と一緒に、だいたい情報交換やっています。そこで、私が言っていたことを、彼らが確認するわけだ。「はあ、やっぱり、やれるんだ」と。

おそらく、八〇年代……八七年、八八年ごろ、國場組が中近東へ行ったというのは、いつごろの話でしたっけ？

※國場組は、一九七九年十一月、サウジアラビア・ダマン市に現地法人コクバ・ラビコ(株)を設立して中東に進出する。(ラシイデイ・パロウシ会社と合併／資本金七百万リアル＝五億円)(同社ホームページより)

眞板 いや、時期まではちょっと。

上原 まだ、九〇年代に入っていないころでしょうか。

眞板 いえ、もちろん、そうですね。

上原 だと思えますよ。だから、それまでに、いわゆる國場幸一郎自身とつながりがある人たちの代表団は、私は香港で落ち合うとか、中国のどこかで落ち合ったことが……おそらく、中国のどこかで沖繩の連中とは、会っているんですよ。そのときに、私は商売もできない、カネの計算もできない。だけれども、あなたたちはちゃんと、ピシャツとそれをそろばんを弾いて、引き合うかどうか、あなたたちで判断してくださいよ。これこれ可能です。ということになって、彼らは、大変喜んで、精一杯やったと思うんだ。けれど、結局、沖繩には、政商と言えるような人や国際的に経済活動ができるような人材は育っていなかった。あの小さな土地では、やはりその土地の大きさの人材しか育たないんじゃないかな。

そこは非常に、結果論として、私がけしかけた問題は、いったいどの程度、実現しただろうかという問題を考えてみると、これというものがない。残っていない。

その最後は、もちろん、大田さんの段階になって、終わりになってしまうだけどもね。土地の人が動かなければ、実際に商売やる人たちが動かなければ、それ以上の要求をしてもダメだと

ということが分かったからね。

その西銘さんを是非中国に連れて行こうっていうことで、私に對して、協力してくれた。けしかけた人たちの、そういうことであつて、西銘さんの力を利用することによって、台湾とのつながりができるということは結構、計算済みだったんですね。

だから、西銘さんとなりがりがあるその人など、福建に行ったら、福建には漆器工業っていうのがありますね。漆器技術が大変盛んだから。ふた抱えぐらいあるような大きな花瓶ですね。高さが二メートルぐらいの。こういうのも、北京の展示会と北京のしかるべき機関に、献上するために、二つ作つてあつた。私と一緒にいった、その人は「上原さん、これはね、もう一つ作るとしたら、いつごろまでかかりますか」っていうから、それは「どうなのか？ ジャア、聞いてみよう」と担当者呼んで、「これをもう一そろい、二つある。対ですから、どれぐらいの時間がかかるんですか」と聞いたたら、「いや、あんたが必要な時間さえ、決めてくれたら、われわれは、夜眠らないでもやります」ということで。しかし、「それも、三ヵ月ほど、乾かさなきゃいけないから、六ヵ月くらいはかかるだろう」って言ったんだらうかな。そして、その人、曰くだね。「それはもう大丈夫です。そのときまでに、必ず西銘を連れてきてだね、これを西銘さんに私から寄付する」と。こんな大きなやつだった。それを「県庁のど真ん中に、目のつくところに、飾らせます」ということまで言つていた。

だから、沖繩のその当時の人たちっていうのは、本心から真剣にやろうと思つたんだらうね。私は、「道はあなたたちが歩かなければ、できて来ない。できないんですよ。そうすると、あなたたちは、こういうことをすることによって、沖繩は自主独立できるような経済建設は可能であると、公然とアメリカに隠す必要はないじゃないですかということ、また日本政府にも当然要求すべきことはちゃんとやりなさいよ」と言つた。彼らも「これでいけ

るんだ」とこういうことを一応確信していた。

そういう元氣の良い考え方をしていたもんだから、私はその人たちから、何か言われるという。「こういう可能性がありますよ。検討してみてくださいよ」ということで、香港に私が行くときに、そこで落ち合うとか、というようこともしたのも事実だ。

佐道 香港には、主にどういう仕事で行かれていたんですか？

上原 北京に、北京に行くのに。

佐道 北京に行くのに、香港に入られた？

上原 あの当時はまだ、直行便がないから。

佐道 別にこの仕事メインであるわけではないんですね。

上原 全然、関係ない。そのときに、彼らが、「近く香港に行くような機会はありませんか」「いついつ通りますよ」「ジャア、どこで落ち合いますよ」と。こういうようなこと。それから、たとえば、琉球・中国文化交流協会なども、その新垣さんっていう人が作つたりしたことがあるんですよ。

佐道 琉球・中国文化交流協会？

上原 これに旅行社などの沖繩ツーリストの東さんか？ そういう人たちが、旅行社関係も含めて、沖繩と中国との旅行、貿易、そういういろいろのつながりが持つていて、それぞれの立場の人たちは、私が沖繩に行ったときには、中国とこういうことはできないだらうか、と問い合わせがあると、私はその人たちの意見を良く聞いて、協力したんですよ。

たとえば、極端な例ですけども、沖繩県の、沖繩県自体を動かさなきゃ、いけないような問題については、私は、第三者を通じてけしかけるだけで、いわゆる、何十年間も沖繩にいなかった者が、大きな顔してだね。そういうような、表に出て、なんかやるといふことは、良くないということも、私はよく知つていたから。しかし、興味を持って私に對して、何か要求してくる、話してくる人たちに對しては、「これこれどうですか」ということ。こ

それは可能な範囲内において、私が時間をとって、まあ、帰っても一晩か二晩か、それくらいしか、いないですけど、その間の時間を最大限に利用してやってきました。

そのことは、ある意味においては、法律に関わる問題にもなりませんよ。だから、私は、助言をして、情報を提供したけれども、私がこれをやれあれをやれと言ったわけじゃないんだから。

ただでさえ、国法を犯して外国に行ったものが、帰ってきてから、さらにまた、国法を犯すようなことを。

しかし、これはあくまでも、沖縄の、地元の人たちの、要求によつて、私は、中国の現状を説明してあげて、中国と、だから、琉球会館の問題についても、そういう意味で、沖縄が中国と組んでやる、台湾の国民党と組んでやる場合だつて、福建というのは、もう遠い田舎のあれなんだから、北京とのつながりをするにことによつて、それは可能であると。

たとえば、その当時、私が言っておいたのは、彼ら台湾の国民党が一番欲しがったのは、漢方薬の原材料だ。しかも、国民党直系産業で重点産業ですからね。すると、中国から、国民党の必要とする原材料となると、大部分は北京を通さなきゃいけない。だから、福建なんて関係ないですよということ。それは、当然、一番いいのは、沖縄で台湾の企業が、それは国民党のそれと、合弁会社を作りなさいと。そうしたら、合法的なんだから、合法的な商行為だから、ものを運ぶことだつて、台湾の方で、密貿易といつて、台湾に帰ったら捕まってしまうということではなくて済むんだから。沖縄で中国と貿易をするいくつかの会社と組んで、琉台の合弁会社を作る。本社は沖縄に置く。そうすると、日本における台湾との合弁会社として申請すれば良い。沖縄でも、もし、沖縄の人たちが、立ち上げれば、国民党の担当部門は喜んで参加しただろうから、合弁会社の本拠は台湾、沖縄のどこへ置こうと構わないじゃないかと。そういうことで、実際に、動き出した人が

いたんだが、残念ながら、そこまで大きく発展しなかったのは事実ですな。

佐道 台湾と福建を中心に、八〇年代から九〇年代に物凄く経済交流が進んで、台湾と中国の福建を含めた地域が、経済的にだいぶ一体化をするという状況になりましたから、このお話はそれを前提に考えると、非常によく分かるお話だと思っただけでも。それはそれとして、先生は沖縄に年に三、四回帰られていたというの、主な目的はどういう目的で、お帰りになつていたんですか？

上原 そうですね、ひと言で言えば、主に三点ありまして、一つ目は、沖縄から中国への留学生を組織的に派遣すること、二つ目は、沖縄と中国との文化や経済の交流を促進すること、三つ目は、沖縄と台湾の関係を特に、経済と貿易方面で可能な限り広い分野にわたつて、協力関係を築くことで、沖縄の東アジアにおける平和的な発展に貢献することです。

佐道 はい。中国に？

上原 中国に派遣するのですね。これと、それから山城さんたちが、「誰か中国の人を連れてきて、講演会でもやろうや」ということになれば、その時の大使館の公使や参事官クラスの連中で、特に文化・教育問題や農業、経済問題等の専門の大使館の友人たちに休日を利用して講演会を兼ねて、「沖縄に遊びに行かないか」と誘うという、まず、その晩は一泊して、翌日、講演会をやるのか、ま、ほとんど那覇と海洋博記念公園くらいですけれどもね。日程は二日ぐらいで、戦跡や沖縄歴史名所をぐるっと廻つて帰つて来た。

佐道 そのアレンジを先生がされていたということですか？

上原 えっ？

佐道 たとえば、その、いま、大使館の方とおっしゃいましたけども、大使館の人に講演を頼んだりする、その仲介役を先生が

されていたという。

上原 うーん。誰かに頼まれたわけじゃないんだけど、山城善光たちが、ひとつ、中国の人たちが来たなら、講演会をやるうや、いつごろがいいか、いつごろだと。そうすると、私はこの教育参事官など、ひとつ、ちょうど、留学生問題のそれもあるから、一緒に沖縄まで行こうやと。そのついでに、私の友人連中が、中国問題を私の口から聞くよりも、中国人から直接聞いた方が確かだと言つて、俺を信用しないからと冗談を言つてだね。いいよ。じゃあ、あんたの計画通りでやろうということで行つて、ふた晩くらい泊まつて帰ってくる。そのときに、たとえば、一定の地位のあるものだったら、私は自分ではご馳走することできないから、少し裕福な友人たちに頼んでだね。中国の友人に沖縄料理を琉球料理をご馳走させてくださいと。山城たちの知人に頼むついでと、彼らは喜んで、協力してくれた。そういうことは、結構やりましたね。

佐道 先ほど、たとえば香港で沖縄の方と落ち合われたりされたときに、先生が提供された情報とかですね、先生の助言とかがですね、正しいと、そういうので香港に行ったり、それを現地で分かる、ということになっていたということでしたけれども、先生ご自身の情報源は、たとえば、中国ルートといいますが、先ほど出ていました華閩会社ですね。ここは、先生も直接ルートを把握しているいろいろなやつておられたというわけですか？

上原 えっ？

佐道 この華閩会社なんかとも、先生は直接のルートをもつて、いろいろと話をされたりとか、いろいろしていたわけですか？

上原 この華閩会社の中には、私のずいぶん前から知っていた人たちも、いるわけですから。実は公私混同になるかも知れないが、長年の友情に甘えて、彼らも、私を利用しないと、当時まだ日本とのつながりができないとかいう面がありますよね。対外貿易関

係を含めて、彼らは非常に不便だったから。そういう意味では、日本と中国の友好交流の発展に貢献した面も少なからずあったかも知れないと思います。

一つの例を、福建なら、華閩会社は福建だから、ウーロン茶っていうのが、ありますな。そのウーロン茶っていうのは、日本に一番最初に来たのはですね。華閩会社の総経理が、日本市場の開拓のため、来たんですよ。それは、もちろん、香港経由で、飛行機の直行便がないから香港経由で日本に。

話しているかどうか分からないけれども、まあ、昔のことですから、八一年頃か？ 何月かは忘れたが、ある日ずいぶん、夜遅くですね。電話かかってきたの。誰だろうか、いまごろ、夜中にかけてきて。そしたら、大使館からかかってきたんですよ。大使館のある知っているものから、電話があつて、「陳〇〇っていうのは、上原先生は知っていますか？」っていうから、あまり突然なんで、私は「どこの機関の誰だ」って聞いたんだ。「華閩会社の責任者の一人だ。キミのことをよく知っている、だから、大使に對してね、上原信夫のいるところ、あんたで分かるはずだから、調べろつて要求して。それで、大使とも相談してあんたのところ、電話しているんです。その人は時間がないから、明日の朝でもお会いできますか」つて言うから、「いま、どこにいるんですか」「ここにおります」というから、電話を代わつて。彼なんだよ。「何だお前、何しに来たんだ」つて言ったらね、「明日、大使館に八時までに来てくれ」つて、それで、行ったら、どうということかという、福建のウーロン茶を日本に売りたいと。日本にあるウーロン茶は、台湾産なんですよ。で、生産量が少ないから、そんなに大量に提供できないと。そういうことを彼らは、香港の情報で手に入れたわけなんです。

さあ、日本の誰に話を持って行こうか、となつたときに、彼が、俺の若いときに知っている人がいるんだと。今どこにいるんだつ



て言ったら、北京だと。いや、あいつは、帰ったと。そうしたら、どこにいるんだろうかっていうことで、彼らは調べたんだよ。分らない。日本に帰っているのは間違いないということ、大使館に行ったわけなんです。よく調べてみたら、これこれこううだと。「お前いま、今、何やっているんだ」と聞いたたら、「俺、いまは華閩公司の責任者だと。そして、彼は冗談で「上原、お前はそろばん弾けないからね、もし弾けるんだしたら、金儲けもできるぞ」、なんてね。「日本でいい仕事をやろうと思ったら、学術・文化活動や中国との友好交流関係の仕事をやろうと思ったら、資金もなけりやダメじゃないか、キミ」なんて言うからね。「それはそうだよ、俺は商売人じゃないんだから、できない」ということで、「具体的にどうだ」と言ったら、彼は、関係幹部を三、四人、連れて来ていて、ウーロン茶のサンプルをものすごい量を持って来ていて、「もし、キミがやるなら、日本の総代理店をキミに、俺たちは任せる」ということをいうからね、「俺に商売せいで、キミは大損するぞ。俺がやっていることをキミは知らなかったか」ということでね、二人は何年ぶりの再会を喜びながら、言いたい放題のことを言って、大笑いして、「それじゃ、信頼できる人、誰か紹介してくれ」ということになった。「いいよ、話は大使館が持つて来たんだから、大使館の担当者とも会って話してみようじゃないか」ということで、行ったら、彼らも日本の商売人は分らないと。それで、いろいろと、彼らは何日間か滞在したんだろうかね。そうしたら、「委託するから、このサンプル全部ここに置いて、連れて来た三名、四名を残していくから、キミの方で、処理してくれ」というんだよ。「俺、嫌だと。俺は商売して儲ける人間じゃないんだから。しかし、一応、調べてみようか」ということで、そのときも、私が考えたのは、いま、台湾との沖縄との関係、台湾と香港との関係、中国との関係からするとね、「それを沖縄に持って行ったらどうか」と言ったら、「キミ、沖縄に知った

人がいるか」というから、「いるんだと、俺の故郷なんだから」ということで、そのときも沖縄の商売しそうな人に、すぐその日に電話してですね。「これこれこうなんだが、その可能性あるか」と聞いたら、向こうは、すでに台湾から入れているわけなんです。「どのくらい量の」と言うから、「一年間何十トンでも、いくらでも、日本が必要とするだけ入れられるんだ」と。向こうはビツクリして、「そんな量は、私たちにはできません。そんな力ありません」ってこうなって。で、結局、じゃあ、しょうがないから、これ、止めようや、ということ、彼ら自分たちで、その連れて来た四、五名があつちこつちにね、日本のお茶業者に会って、話しかけてみるという形で、あなたたちでやりなさいということ、私は陳くんたちの期待にそえなかった。

その時代っていうのは、まさに中国が新しく海外的に国際的に展開しようと、その前の段階。しかし、いろいろな試行錯誤をしながら、限られた情報を集めながら、手を打ちつつあった。だが、成功よりも失敗の方が多かった。そういう時代だった。

佐道 いろいろ可能性を探っていた時代だったということですね。  
上原 そういうこと。

## ■西銘訪中を企図

佐道 そういう、活動をされて、その過程の中で、福建と沖縄と台湾とをつないでというお話があつて、で、それが、西銘さんの時代であったと。それから、このメーソンの福建会館の話ですね。大田さんのころの。で、その大田さんのころに、その会館を造るという話というのは、先生のところに、最初、具体的にどういふふうな形で伝わったんですか？

上原 沖縄の友人たちは、私と一緒に西銘さんの時代から、もうすでに福建には、何組も行っておりますから。私自身香港経由で。

さて、中国と沖縄の関係は、おそらく、古代はさて置いて、もっとも、近代史の中における中国との親密なつながりと言えば、沖縄にとつては、いろいろな意味で、やはり福建なんだ。福州なんですね。そうすると、私の知っている家族の大じいさんが、唐旅に行つて、唐で亡くなつたつていうような話を、われわれは子どもころから聞いておりますからね。だけど、どこで亡くなつて、どうしたんだ、というのは分からない。そういう家庭の子孫たちは、中国へ行つてみたいなああと、福建に行つて、その系図からたどつてだね、どこそこにつながりがないのか、行つてみたいというわけなんだ。おそらく、戦後、いつから始まったのか知らないけれど、結構、行っているんですね。中国に入るには、密航者はダメだから、まず、間違いなく、香港経由で行つて、先祖の墓参だということになると、ま、そこは弱いところですね。中国もね(笑) いろいろと案内したり世話したりしたと思うんですけども。そのときに、清の終わりごろまでは、琉球会館があつたんですから、現存したんですからね。そうすると、琉球人墓地を訪ねて、福州まで行けば、福州の昔を知っている人たちを尋ねると、琉球会館の位置が分かる。そういう民間の相互交流の中で、誰が、最初に言い出したか知らないけれど、いつの間にか、この琉球会館跡地を見てきた人たちから、誰言うもなく先祖の作ったその跡地に琉球館を何とか再建しようやと。生活が豊かになるにしたがつて、思い及んだんでしょね。

その話が一番最初に出たのは、いつごろか、私は分からないですね。少なくとも、西銘さんと関係が深いと言われた、その方と中国・福建に行ったときにも、その話が出たんだから。だから、西銘さん自身も、そういう、願望があつたんでしょね。きっと。だから、その人は、そういうことを私に対して、伝えて、それを福州に造るためにも、一回西銘さんを連れて行つて、そして、つながりをつけたさせた方がいいんじゃないかと。で、彼が中国か

ら帰つた、何か月かあと、先ほど言ったように、県庁で彼の知事室だ。お人払いをして、そこで、会つたんですからね。

佐道 そのときには、西銘さん以外には、県庁の方ではお会いにならなかつたんですか。いま、人払いとおっしゃいましたけど。

上原 だから、その、私と一緒に中国行つた人と同行した人だけ。

佐道 その人だけ。じゃあ、三人で。

上原 えっ？

佐道 その紹介された方と西銘さんと上原先生と三人で、お会いになつたと。こういうことですね。

上原 誰か、もうお一人いたかもしれませんな。

佐道 その前に、先生、沖縄から中国に行く留学生のお世話とかされているわけですよ。同時に。それは、でも、県も関与するわけですよ。

上原 えっ？

佐道 そういうお仕事でしたら、県庁もやっぱり何か関与はしているわけですよ。そうすると、そういうお仕事では、県の窓口というのはあつて、そこ先生は、接点はあるわけなんですよね。県庁とは？

上原 いわゆる留学生問題に限ってはですね、人材育成協会。そのことの行き来はあつた。

佐道 じゃあ、県庁直接ではないわけですか。

上原 県庁直接ではないですね。で、西銘さんと最初に会つたというのには、その方ではなく、その前に留学生問題と中国問題についての挨拶つていうことで、山城善光と一緒にいったんだよ。そのときは、何名か一緒に、知事室だったか、応接室だったか、そこで話し合つたんだ。

佐道 西銘さんとお会いになつたのは、そのときに、知事室で三人でお会いになつたときが、最後なんですか？ この後も、お会いになりましたか？

上原 そのあとはね、もう西銘さんが、大変恐れ入って、中国はあんた、公然と知事として、大歓迎すると言っていますと。それから、もし、ご都合が悪ければ、内緒で、一切、秘密はその中国の方で守るから、どうぞご安心してくださいと。訪中の名目は、半公けであろうと、ご自由に決めて結構ですと。中国のどこそこの山水が見たいとか、あるいは昔から、中国の歴史や漢詩に対して興味を持っていたとか、そういううちよつと、覗いてみたいなあという気持ちがあるから来ました、というのでもいいですよ。それを公けに発表するかどうかは、あんた知事ご自身のお考えによつて、どうでもよろしいということです。そういうことを言つたらね、非常に熱心に目を輝かせて聞いてくれたんだけど、  
「私は台湾の国民党との関係がありますからね」、「どういふような関係なんですか」つて聞いたら、「張さんつていう教育部長つていふ方が、こうこうで」と。そして、ほとんど毎年の双十節つて、ありますね。国民党の。これには、ほとんど毎年のように、沖縄から、十何名か二十名かなんか知らないけれども、呼ばれているんですね。その中に、もちろん、知事もおりますし、それから、國場幸太郎おじいさんもおられますし、そういう関係があるから、彼らは台湾といつたら中国。それで、國場幸太郎おやじが、「信夫さん、われわれはね、ずうつと、日中友好の運動をしているんですよ」(笑) そのくらい中国と言つたら、ま、国民党が代表していたんだから、なにしろ中華民国の総統・蒋介石は台湾にいたんだから、それは、ずうつと先祖代々からの中国との伝統的なつながりと同じような認識でいたんですからね。

だが、私がいふ中国は、台湾の中国ではなくて、北京の中国だったといふことで、こんな話から、今度は大陸中国とのつながりつていふのが、できてくるんですけれども。私は最初は、台湾とのつながりは大事だと。台湾とのつながりを大事にしながら、台湾が困っているのだから、その代役を香港がやって、台湾の人た

ちは失敗して、金儲けできなくなっているんだから、その分をあんたたちが代わつてやったらどうか、ということを彼らに私は要求していた。

佐道 結局、西銘さんは中国へは行かれなかつたわけですよ。

上原 西銘さんは行かなかつた。

佐道 それで、結局、西銘さんの時代は終わりになって、今度は大田さんの時代に、実際、福建会館が着工されるということになるわけですよ。それで、最初からの質問になりますけれども、これはいつぐらいから、先生はなんか。

上原 うん？

佐道 大田県知事の時代の福建会館を実際に造るといふ、これに関与されたのは、具体的にはいつぐらいですか？

上原 おそらく、まず、西銘さんの最後の中国問題のつながりつていふのは、彼が参議院ですか、国会議員ですか。

眞板 衆院議員です。

上原 えっ？

眞板 衆院議員

上原 衆議院議員になつて、衆議院になつて間もなくだと思つて、沖縄県人会の新年会があつたんですよ。そのときに、たまたま行つたら、彼がおられたのでね、挨拶したんだよ。二人。「あのときは、大変残念でございましたけれども、その後、私があんたのことを話した中国の人に会つたときにね、残念でしたねえと。だけれども、知事辞められたんだから、今度は自由な身になつたんだから、いつでもいいから、どうぞ難しくお考えにならなくてもいいから、お出てくださいと。上原、連れて来いよと言つておりますから」と言つたらね、大変、畏まつて、「やっぱり、知事という立場は役目は終わったけれども、国会にもおりますし」といふことで、「しかし、どうぞ、そんなに堅く考えないでね、季節の良いときに、私と一緒に訪中して、あなたの訪中を期待していた人た

ちに、ひと言声かけてくださいよと。彼に案内させますから」と言っただけでも、その後、それでお付き合いは、切れてしまいましたですね。そういう形で、西銘さんとは、お付き合いが終わりになって、私は彼にけしかけて、彼にそれなりの新しい沖縄の時代を切り拓く、それを、突破口を彼に作らせようと思ったんだけど、それはできなかつた。非常に残念です。

で、大田さんのあれですけども、先ほど、申し上げた、いつごろか、琉球会館の問題の話が、出たのかね、それを大田さんがいつごろから取り上げて、その問題が始まったんだらうか。だから、おそらく、私の推測では、すでに、西銘さんの時代から、その話は、結構取り上げられていたんじゃないかということですね。これは、先ほど言ったように、私と一緒に行った人は、福州も見たし、そのときに、なるべく、早めに知事を中国に連れてきて、台湾と中国、沖縄のつながりの新しいひとつの出発点にして、西銘さんが先頭に立って、やるんじゃないかっていう夢を彼らは描いていたっていうのは、先ほど言ったお土産の話ね。その大きなこんな。漆の、鉢の、本人も夢に描いて、しかも、現場でそれを話しているんだから。

だから、当時の沖縄のそういう問題に取り組もうとしていた、彼もまだ、そのころ、五十代……こういうこと言っていましたな。彼の娘二人は、東京の大学に行っていましたな。もう間もなく、卒業しますから、なんていうこと言っているから、五十代？ ぐらいになっているんですかね。そのぐらいだ。ひよっとしたら、調べるなら、名前、ちょっと調べて見ましようかな。しかし迷惑かけますな。その人たちに

眞板 西銘さんですか？

上原 いや。

佐道 西銘さんの親しい人。

上原 西銘さんと中国とのそのつながりをつけようとしたその

人。いつからその話が出たかというのは、先ほど言ったような私を知っている理解しているのは、その程度です。ただ、國場幸一郎たちと一緒に一番最初に中国に行ったのは、八〇……第一回日の沖縄からの留学生を派遣したあとだと思っから、八〇年代の初めくらいでしょうかね。確か、八一年か八二年くらいでしょうかね。

佐道 その後の沖縄からの留学生の派遣なんかには、先生はずっと関与されているんですか？

上原 そう。先ほど言った琉球・中国文化交流協会っていうのが、あつたんですね。その新垣さんっていう人なんか。それから、琉球大学の砂川っていう経済学の……恵一っていうんですか。もう、昔の話なんで（笑）。そういう人たちも関係していたんじゃないかなあと思うんですよ。それから、国会議員の喜屋武さんですか。なども関係していたんじゃないか。そういう人たちのあれで、一番最初は、五、六名か七、八名か、そこらあたりだったと思うんですけどね。一、二年したら、休暇で戻ってくる。七九年から中国の留学生は、私、受け入れていますから。七九年は、私、手に負えないから、八〇年から、日本からの留学生を少数送っていますから。ほほ、その一年前後の話だと思いますけれど。

えー、先ほど言ったように、大田さんについては、非常に……一番最初に大田さんに会ったっていうのは、大田さんが知事になったのは何年ですか？

眞板 九〇年です。

上原 九〇年ですか。天安門事件直後ですね。その頃、私は体調を崩すほど、多忙な時代でしたね。

大田さんが知事になって、間もなくだと、思うんだけどな。一回東京に来たんですよ。やっぱり沖縄県人会なんかの会合があつて、そのとき、私は、彼と初めて会ったかもしれないですね。初めて会ったときは、八〇年代の初めごろで、私が留学生・研修生間

題の初期段階における困難を乗り越きつて、やっと一息つけたあとだと思えます。さらに、当時は中国の経済建設の需要から、さらなる研修生の盛り上がりがあった、年間、留学生・研修生を三百数十名くらいに増加しています。中国の国家経済委員会直轄下の鉄道部、石油工業部、郵電工業部、電算機総公司、軽工業部等、そういう機関から派遣されてくる研修生つて言うのは、相当な数字に達していますからね。だから、おそらく西銘さんの最後ころと、大田さんが知事になったころは、沖縄に帰る時間が作れず、ほとんど沖縄に帰っていないんですね。だから、東京で会ったのは知事就任もなくだったと思うが、その時が、彼に初めて会ったのではないかと思うんです。

そのときに、彼は沖縄の基地反対問題についての説明を始めました。お話が一段落したあとで、彼のそばへ座る機会があったものですから、休憩時間かなんかだったと思う。幸いにも二人だけで話す機会があったので、まず「あなたの基地反対闘争に対して、敬意を表します」という挨拶から話を始め、「たとえば、基地反対闘争を進めるにあたって、沖縄基地の返還スケジュール計画は、具体的にどのような進め方になっているかについて、どうして、今日の説明では聞けなかったんですか」ということで、たとえば、沖縄の重要な軍事基地、普天間とか、……大きな飛行場ですな。

## ■大田知事に意見具申

佐道 嘉手納

上原 あ、嘉手納。嘉手納飛行場。「そういうような主な軍事基地をいつどのような方法で返還してもらおうのか。ただ、軍事基地反対だから土地を返せと要求しても、アメリカは簡単には応じないだろう。だから、基地返還闘争を進めるに当たっては、反戦・平和・県民の生命の安全の立場からの基地反対も必要だが、長期的

な展望に立った場合、沖縄が基地から脱出した後、われわれにはこのような経済的、文化的に自立した沖縄建設計画があるのだから、各基地、それぞれの返還後の具体的な活用目的、返還時間等を決めてアメリカに迫るべきだと思います」と私は彼に強く要望した。彼は「いろいろ考えていますよ」と言うので、私は「頑張つて下さい」と当日の話は終わったが、「最後に一言」ということで、これに関連する普天間基地については、「私はすでに、宜野湾市長に協力している」と伝えた。

桃原市長(笑) その桃原市長と一緒に会ったというのは、中国大使館の教育担当参事官の誰だったか、忘れたけれど、彼ら連中と一緒に宜野湾市に行ったときに、あつ、留学生問題のあれで、新垣さんたちと一緒に رفتんです。これは八一年か八二年ごろですね。そのときに、桃原さんは「人を集めなければ、街の発展はない」というお話になって、「どのような集め方をしますか」つて聞いたたら、「市内には米軍の普天間飛行場があつて危険でたまたま早く、そのアメリカに早く解放してくれという要求をしているんだ。なかなか了解してくれない」と答えた。「じゃあ、期限をきっていますか」つて聞いたたら、市長曰く、「いや、そこまではやっていない」。「あなた、先ほど都市づくりはまず、人を集めることからということ、具体的にどのような方法で、人集めをするんですか」つて、聞いたたら、「普天間を返還させて、いっぱいそこに住宅を作つてだね、街を賑わせてやる」と。「これじゃ、アメリカはおそらく返さないでしょう」と。市長は「なんか返させるいい方法、あなた、わかんないですか?」「私が、どういうところですか?一回見に行きましょうよ」。「いや、すぐ行きましょう」ということで、ジープに乗つけてくれて、見てきたんだ。市長は私に負けないくらい行動派でして、現場を見て帰つて来ての座談会で、地図を見ながら私は、「ここならば、日本の一番大きい大学の何倍

くらいかの面積を確保できるような、広いところじゃないですか、世界最大級の国際大学を作ったら、どうですか」って、言ったら、市長は、ビックリしまして。「しかし、その大学はカネが要るから。カネが要るから」、そして、私は「カネよりも要るのは人材ですよ。人の頭なんです」と。「じゃあ、どうするか教えてくれ」って、言うからね。「いまのアメリカの状況からするっていうと、アメリカの一番良い大学をね、あんたが行って、あるいは知事と一緒に行って」。そんなときはまだ、そうだ、西銘さんだったんだな。「知事とあなたが一緒に、アメリカに行ってその是非、ハーバード大学なんかでも取り込んで、ひとつ、われわれは世界平和と人類の文化、学術の発展と繁栄のため、普天間の跡利用に国際大学を作るこれこれの計画があると、われわれはこういうような素晴らしい土地を持っているにもかかわらず、現在はアメリカの軍事基地として、使用しているので、沖縄の人民から恨まれるようになっていく。これは世界とアメリカの損失である。だから、アメリカに世界の平和のために、世界の学術文化の発展のために、こういうことで、お願いに来たんだ」ということで、話をまず、その話をだね、ハーバード大学に行って話をし、この了解と協力の下で、それから、国務省とかに乗り込みなさい(笑) というような話をしたことがあるんです。そのときに、私は、アメリカとの交渉には、事前に専門家と十分に検討して自分たちの素案を作って、必ず時間をきって話すこと。そして、この学校はいつまでに、作るんだと。

そして、この運動を今度、知事を通じてだね、嘉手納飛行場も含めて、民営化してね、米国と日本の共同経営にもって行くんだってというような形で、話は大きく押ししていけば、アメリカは世界に対して、われわれは世界の平和のために、こういうような貢献をするために、止む得ずこの基地を平和利用に使うんだと。

日本式の歌舞伎座におけるような「花道」を作ってあげ、そこ

で、アメリカ大統領に世界平和の立役者になってもらおうじゃないかと相談した。この「花道返還論」はその時、突然、考えたのではない。山城善光と桑江朝幸の家で何十年かぶりに三人が会った時に、私は嘉手納空港のアジアのハブ空港への転換について二人と検討し、その運動を起こすことを要求したが、当時の「国際情勢からするとあまりにも、突飛過ぎるから、キミ、またアメリカから弾圧されるぞ」と二人から批判されたことがあったが、私は山城、桑江の意見も念頭におきながら、桃原市長には何回かに分けて、具体的に私の考えをお伝えしておいた。

桃原市長はこういうことで、それから、随分、長い間、その実現に向けて努力したらいいんですよ。で、私が沖縄に行くたびに、とに、一時間でいいから、ちょっと顔出しなさい、とか言っていて、継続して何回かその話やっている。市長の友人の話によると、桃原市長は最後の段階では、本格的に担当者を任命してだね、「それを進めつつあります」、なんて言っただけけれども、現実には、規模はそんな大きくなってなかったんでしょね。時代も段々不利な面が、逐次増幅されたから、実質的にはどの程度の具体的な行動を起こしたか、多忙なため沖縄に行く機会がなく、その後の具体的な進行については不明である。

だから、それを大田さんに私は、「そういう例を私は、すでに、桃原市長に話をして、桃原市長も大変興味を持っているのだから、一つの地域の一つの市長が、そういう関心を持つような状態なのだから、あんた、基地反対闘争やりやすいですよ」と。「だから、あんたが先頭に立って、そういういついつまでに返せ、これこれに使うということで、具体的な行動計画で運動を進めたらどうか」と申し上げた。そしたら、大田知事は私も「考えていますよ」と、こういうことを言っておられたので、私は知事の平和沖縄建設をお手伝いするために、具体的に何かしなければならぬと考えた。

それには、まず、沖縄の自然環境が保養地として最適であるか

ら、沖縄は軍事侵攻の基地ではなく、平和な世界人民に開かれた保養と健康の基地に作り変えたらどうか。そのためには世界人民を巻き込んだ支持を得られるだろうから、アメリカも反対できない。米軍基地の撤去促進のために、次ぎの事業を計画してはどうかと提案した。たとえば、西洋医学と東洋医学の結合による、「国際健康センター」や「国連医学研究センター」など、「国際」や「国連」を冠した施設を誘致することなんです。私はあらかじめ、中国の関係部門にこの計画を相談し、協力を取り付けていたんです。

次は「その実現に向かってお互いに業務分担をしよう。まず、沖縄の方の問題は、あんたたち自身が、それを国連への働きかけ、それから、沖縄地元の地ならし、これはみんなあんたたちで、やってくださいよ。中国側の方からは、東洋医学研究所の責任者に協力を依頼して、何百人の医師、漢方医の協力も可能だから、必要な協力はいくらでもやるからということで、話は通してあります。ただし、担当事務官一人くらいは、私と一緒にいかせてください。私はその話と地ならしを始めておりますから」ということをまで言ったのに、あの人、私の考えていたのと違った、計画を立てて、大きなあれをやったんだそうですね。

しかし、まあこの軍事基地を撤去させて、世界の平和と健康のために、医療関係機関設置の計画は、実は一九八〇年代の初めごろ、もう西銘知事の時から提案したことだったが、残念ながら沖縄の事情で実現していないので、大田知事なら別の道も開かれるのではないかと考えたが、結果は何も得られなかった。

#### 佐道 国際都市形成構想

上原 そう。だから、その国際都市センターの計画を彼は進める、前の段階の話なんだけれどもね。ということは、私はその計画を彼らの資料をもらったし、見たら、これは私のよりか、もっと空想的だと。現実的でない。

たとえば、国際健康研究センターということになると、そのときに中国の友人連中の話ではね、何十名くらい医師が必要ですかと。まず、患者を世界的に、各国から集めたり、また日本の各府県の方からね。特に、寒いところの人たちは、冬の間だけでもいから、沖縄に行つて、療養したいという人は、いっぱい、いるそう。それは、私、ある人を通じて、調べてもらったんです。そして、そういうこともあるから、大田さんに言ったのは、固定入院患者が、常時それは約二万から三万人、それから外来は一万人ということになってくると。ちよつと忘れたけれど、医師はどのくらい要るんだろうか、いま、日本の医療関係の諸規定に基いて。それから、看護婦は患者百人に対して何名が必要なのか、ということになると、看護婦だけでも、まず、沖縄だけの看護婦だけではとても間に合わないような状態。日本の方からも、看護学生でも連れてこないといけないんじゃないだろうかということ。

それから、建設費がそんなにも、最初からいっぱいあるわけじゃないから、名目は国連なんだが、経費は実際には、日本から出すというような形でやったにしてもだね、最初は困難だろうから、中国から来てもらう医師は、私は半ば冗談で中国の連中に、中国の現地の給料の倍くらいは、まず与えて、それから、生活費だけは、補償してあげるといふことなれば、日本の方で一人の医師を雇うのに、そのお金があつたら、中国から十名から十五名連れて来られるから。まず、その経済負担は、ずうっと減少する事ができる。そして、中国の人たちも、五年ないし十年後には、みな努力でこんなに給料を増やしていきます、という明確な目標を考えて進めて行けば、それもいいじゃないのかというようなことを言つて、大田知事とその友人にも文書にして出して、けしかけたんだけども。全然ダメでした、うんとすんともないね。

佐道 西銘さんのときに、先生とその西銘さんとなぎ役のようなことをされて方がいらつしやいましたよね。それから、その方

のほかに、さつきから、國場さんの名前が随分出てきてましたけども、大田知事の時代には、そういった方々というのはどうなんですか？ やっぱり、まだずっと、先生とコンタクトをとられておったわけですか？

上原 そう、だから、結局……県知事は代わったから、その人たちの中には、県知事をうまく利用しようとした人たちはいたはずだから、今度は、大田には組みしていないですね。しかし、そのまま続いた人もいるかもしれないけれども、結局、少なくとも現知事に対して、協力していた人たちは、大田になってからは、私に対しても、そのようには関係は続いていないですね。

しかし、具体的な問題では、その担当者が直接協力を求めるとか、たとえば、歴代宝案問題、留学生問題等々。しかし、考えてみると、その頃は、天安門事件の後遺症で、留学生・研修生の管理業務が、多忙を極め、私の沖縄に行くことが数年間、停止状態だったのが主な原因だったと思う。

佐道 ただ、たとえば、実際に、福建会館などが大田さんの時期にできるわけですよ。で、西銘さんのときに、先生にいろいろ協力していただいて、中国側と連絡したいと、頼まれた方がいらつしやつたわけですよ。そのときに、県の方が、あまり大きく動かなかつたということになるわけですけども。今度は、大田知事の時代では、県の方が動くこうと思つていたわけですよ。あの、考え方としては。

上原 あ、琉球会館の？

佐道 琉球会館の問題なども。そうすると、何らかの形で、たとえば、先生に協力を依頼するとかですね、そういったことは、大田さんの時代にはなかつたわけですか？

上原 うーん、ないです。もうすでに、西銘さんの時代に地ならしはできていたこと。世論の動静はすでに、できていたんだと。こういうふうには、私は見ているんですけどもね。それよりも、当

時、私は多忙でしばらく沖縄に帰ってないのも事実ですね。

大田さんの段階になってからですが、宮城なんとか言う人が、沖縄物産の……

※沖縄県物産公社は一九九三年に設立。宮城弘岩は、同公社取締役専務だった。

佐道 弘岩さん。宮城弘岩

上原 弘岩さん。そうそう。その方とは、私の碑文谷の事務所です。二、三回会った覚えがありますね。いつだったかな？ 弘岩さんが、沖縄の物産を持つてきて売ってという計画をね。だから、そのときに私は、何と何が可能性があるかということと言ったんだよ。いま、沖縄から来ているアオサじゃなかったな、糸みたいな茶色のこのあれは？ 海産物？

佐道 モズクですか？

上原 モズク！ モズクなども、あつ、そうか、宮城さんのほかにね、あとで、沖縄通関なんか？ 会社があるんですか？ 沖縄通関会社じゃなかった、何だっけかな？ これは平良っていう人なんだけれども……県で宮城さんと県の仕事の都合で、物産の手伝いをしていたときの同じ仲間かどうかは分からないけども、その人たちが、そのモズクなどをね、中国に売り込むというようなことを。そうか、これは宮城さんでなかったな。別の人だったな。若い。この人が、生のままで持つて行くと大変だろうと。生ものは、乾燥する方法を研究中だと。

そして、彼が曰くだね、中国ではね、「ファーザイ」（発財）という金儲けをすること。（上原氏が「発財」と書く）

※上原信夫氏注・「沖縄通関（株）」平良哲雄、九二年頃



佐道 ああ、発財

上原 中国の髪菜は、陸上の一種の菌類なんですけれどもね。人々が言う「ファーザイ」と、字は「髪菜」音は「発財」と同音。同音だから山海の別なく、面白い考えだと私は励ました。乾燥モズクというのは、このモズクを乾燥したの、彼が試験中だったものを見せたんですよ。それは、陸の「髪菜」に比べると、ちょっと太すぎるんだけど、中国の青海省あたりで採れるやつは、もつと細くて、人の頭髪くらいに細いやつなんだ。キノコ類の一種みたいなもんですよ。それを音がファーザイだから、今日は特別に「発財」料理を出しますって言うことは、あなたのファーザイ（発財）を析ってというような縁起が良いとの意味に繋がるんですよ。そういう意味で使えるんじゃないかと、彼らから聞いたもんですからね、これ、面白い発想だと。凄い、素晴らしい発想だと、私は褒めてあげてですね。その後、乾燥の方法をね、成功した。それは琉球ファーザイということだね、持って行ったら売れますよ、と言ったら、大変喜んで、実際、それ、やったと思うんですけれどもね。その結果については、後日、香港と中国で試食会等で好評だったと聞いた。

佐道 それは、宮城さんではなくて、別の方？

上原 別の人？ いや、同じつながりだったかどうか、知らないけれども。

佐道 若い人ですか？

上原 若い人です。宮城さんも、あのころ、もう五十代だったんですかな。

佐道 もうそれは、大田知事の時代の話ですよ。

上原 えっ？

佐道 そんなに昔の話ではないわけですね。最近……

上原 そうです。おそらく、十数年以内の話じゃないですか。

佐道 沖縄でモズクを一所懸命売っていたというと、県庁にいた

玉那覇さんという人が浮かぶんですけども。まさか、そういう人じゃないんですか？

※玉那覇靖。一九六二年生まれ。沖縄県もずく養殖業振興協議会幹事

上原 いくつぐらいの方でした？

佐道 いまが、三十代の後半

上原 いや、それは。その人たちはなんか……

※上原信夫氏注・香港、広州、上海にも行って調べてみたときに聞いた。中国の料理屋でも実際に料理させてみたこともあると言っていた。

佐道 いやー、でも、一所懸命、あっちこち売り歩いていたのは間違いないですけど。

眞板 香港に売り込みに行っていましたね。

佐道 じゃあ、ひよっとしたら、そうかもしれないですね。

上原 ま、それと関係のある人かもしれないですね。私が会ってきた人は、県の何かをやっていたかもしれないですな。

佐道 じゃあ、そういうふうには、沖縄の物産なんかを、たとえば、中国に売り込もうとか、という人たちから、先生にコンタクトがあったということですか？

上原 そう。それと同じような、ま、類似しますけれども、今度中国の物産を沖縄に入れられないか。これも話があったら、これは随分、古い話だけれども豆腐の原料である大豆とコンニャクの原料のコンニャク粉の消費量は、沖縄は相当高いんだそうですね。

佐道 あ、そうですね。

上原 良く分からないけれども。このコンニャク粉を輸入するということ。それから、泡盛の原料のタイ米を輸入ということなど。なぜ今ごろこういうような話かと思ひ、その由来を聞いてみるといふと、沖縄復帰の段階まで、沖縄の米穀輸入業者は、タイ米を入れる権利をもっていたそうですね。それが復帰と同時にその権利を日本政府に取り上げられたんだそう。だが、泡盛の原料と言つても、碎米っていうんですか。粉米ですな。これはいまでもどうなつたか知らないけれども、そういうものだけでも良いから、直接輸入はできないかと。それは、あんなたち、行政面とのね、働きかけによつて、それを勝ち取らなきゃいけませんよと。やつぱり、永久的に続くような取り引きなんだから。密航船を持つて行つて、はい、持つて来ましたじゃ、一回で終わりですよ、と笑つたんですけれども。ただし、こんにゃくと、大豆とか小豆とかは、話があつたものだから、これには、その、先ほど言つたファーザーが一つのつながりかもしれない。そのときに私は、「だったら、沖縄が必要とするものは、台湾も必要としていますよ」と。だから、「あんなたちの方で、調べてだね、台湾と組んで、沖縄で合弁会社を作つたらいいですよ。そうすると、台湾は、わざわざ香港経由でね、損をしながら、それを入れるより、沖縄であんなたちと、一緒に儲けながら、やれるじゃないですか」。今度は、その人たちが次ぎ行つたときに調べたら、日本のコンニャクを独占的に仕切つてゐるのは、三つのなんとか協会があると。それから小豆なんて、特定の商社しか取り扱えないという報告だったので、私は彼らに対し、「それでもいいから、もしかりに、あんなたちが台湾と合弁会社を作つたらね、私が中国と話をつけて、中国から、台湾の必需とする分も入れて、琉台合弁会社が対応する。そして、沖縄の必要量を残して、台湾に持つて行つたらいいじゃないか」と申し立てたら沖縄の人たちは、「これは、少し面白い」とつて言うもんだから、「あんなたち、合弁会社作る可能性について

研究するか」と聞くと、彼ら曰くね、「本当にそのものが、沖縄に入るのかどうか、日本復帰後、いろいろ日本の商社から、いくら分けますつて、言つたにもかかわらず、小豆もコンニャクも沖縄には回らす量は特に少なかった」と。そういう惨めな経験をしてゐるんですね。だったら、じゃあ、私は、「調べてみよう」と言つて、早速中国各地のそれぞれ産地の実態調査をしたあと、当地の担当者に対し、沖縄と台湾の実情を伝え、日本の商社とは別に、沖縄と台湾の枠をもうけるようよう要求したら、「じゃあ、それぞれ各物産で定められた入札日があると。その日程にあわせて沖縄からも来てくれ」と言つてだね。話はそこまで、とんとん拍子にできたもんですから、私はすぐに……。平良つて言うんですよ。平良お土産店の弟（平良哲雄）。

眞板 あ、ターミナルの、那覇ターミナルの中のみやげ物屋

上原 その弟が、通関関係の貿易を仕切つてゐるのがいたんじゃないですかね。で、その人が仕切つてゐるので、彼のところへ話を持つて行つた。そのとき、私は中国産地でもらつた大豆と小豆及びコンニャクのサンプルを届けた。それから、コンニャクの産地はずうつと西南地方の奥地だから、少量のサンプルだけれど。中国産地の担当者は、どういう形のもので、どういう半製品でも、製品でも構わないと。一万トンでも二万トンでも提供できるつて、約束したんだけどね。そういう形で、私は話を具体的に持つて行き、当事者で研究して話がまとまるようになれば、あんなたちで進めなさいと。あんなたち、中国の問題は、入札であんなたちが、行かれるんなら、私は、仕事のひと段落つけて、一緒に同行してあげるからと。私の任務はそれで終わりだから、あんなたちで、あとはやんなさい。その後、彼らで調べたら、日本政府の関係法規や手続き上の問題等で、いろいろ大変な難しい問題がありますと。いっぱい、ありますということ、実は私にその話を持ちかけてきて、沖縄経済の発展に協力して下さいと、

けしかけた人たちは、びびりだしたようだ。そこで、私は再度、琉台と中国の合弁会社設立を急ぎ、本社は沖縄に置くべきだ。そうすれば、国際貿易会社だから、十分に可能性があるし、中国とのつながりは、私が一切手伝ってあげると、激励したのだが、沖縄地元での動きが、だんだんと尻つぼみになって行つた。日本の大手貿易会社の圧力に沖縄の小商人は屈したのだろう。

佐道 先生は、大田さんの時に出来上がった、福建会館はご覧になつた？

上原 いや、全然見ていない。

佐道 見ていない？

上原 そのころになるって言うのと、私自身が非常に忙しくつて。私としては、県が直接動けば、沖縄の人たちが動き出せばよいということだから、人が動き出して、やっているのをああだこうだと、ケチのつけ方はしないから。ずうつと、そういう形で、あくまでも第三者的な立場から、情報の提供者という形での役割しか果たさなかつた。私は実際に沖縄に居て、そして、具体的なそういう問題に手をつけたりしていたならば、直接中に入り込んで、一緒にやれるけれども、中に入れないようなね、人間が、ああだこうだ言つても、どうしようもないですから。こうなら、こうどうですかと言うことでやつて来た。

佐道 その大田さんとか、あるいは大田さん周辺の方とかは、あんまりもう、九〇年代の先生も、お忙しいし、お会いになつたり、いろいろすることはなかつた？

上原 そうですね。大田さんの場合は、むしろ私の思い出からするとですね。まず、大田の基地反対に対して、私は全面的に賛同でした。ただし、その進め方にどうかかなアと思う点があつたので、それに対して、國場幸一郎たちと会つたとき、彼らは知事を結構、褒めたり、あるいは、土建屋としての立場から批判したりするわけだね。「あなたは知事に近いのか」つて言つたら、「いや、私、

早稲田だから」というような形で対応をするから、じゃあ、結構、気心は通じているのだなと思つた。ただ、ずうつと後のことなんだけれども、大田知事がなんか、基地問題に対する最後の日本政府と縁切りみたいな段階がありますね。

佐道 海上ヘリポート基地のやつですね。県内移設を認めないつて、あれですね。

上原 それはあれですか。海上基地の問題ですか？

佐道 はい、はい。

上原 そのときに、たまたま私は沖縄に行つたときに、誰と一緒にだつたか忘れたけど、極めて短い時間だが、幸一郎や何名かと雑談したのです。そのときに、もとの？ 茨城出身の官房長官は何て言いましたかな？

眞板 梶山静六さん。

上原 梶山さんが、たまたまその日、私が飛行機で朝刊紙上で見たあれだけれども、梶山さんが、大田知事には百年の恋も冷めたつていうね。裏切られたつていったようなことを言っています、といったいどうなんだと聞いたらね。やつぱり、大田さんはがそういう点があるからと言つて、彼らはまともに批判したんですね。

眞板 梶山さんに直接お話をさつたんですか？

上原 いやいや違う。梶山さんの意見が、新聞に載つた。私はたまたまその沖縄に行つたときに、新聞でそれは見たよ。その梶山さんがそう言つたという記事をね。だから、「梶山さんたちからみれば、大田さんに対して、百年の恋も冷めてしまったというようなことをおっしゃるんだけれども、よっぽど、あつあつの恋仲で、これまでは相当うまくいっていたんですか」、つて聞いたたら、「いや、そうじゃない」ということで、彼は大田を批判したんだよと。

佐道 その彼というのは誰ですか？

上原 あの、國場幸一郎とその数人だつたが、誰だつたか思い出せないですね。で、私はそこで、「結局、沖縄の小さな百万そこそ

この人口に満たないようなところで、住民投票とか、というようなことをやって、一握りしかない、その沖縄住民を二つにも三つにも分裂させてだね、相争わさせるといふのは、指導者としての組織能力がないからだ」ってやったらね。「そうだ」とうなずいていました。そのときのあれから、見るというと、大田に対する批判っていうのは、まともにも聞いたら、不遜だけれども、あんたが言うには、大田と國場幸一郎はあまり仲良くなかったということ、こういうときに感じましたね。

眞板 私がですか？ それは利害関係で

上原 なるほど！ 利害関係ね。政治家は政治の立場があり、事業家はそろばん勘定が成り立たないといけませんからね。

眞板 結びついてたんじゃないかと。

上原 あ、そうか。そういうことで、私も帰国して以来、いろいろな形で、三代の知事と関係をいろいろ私も経験しているわけですね（笑） 西銘さんと大田さんと今の稲嶺さんと。私として、一番近親感があったのは西銘さん。ということ、敗戦直後の困難な時代、年齢は、私より、二つか三つ上ですな。彼は？

眞板 そうです。

上原 そのくらいだから、終戦直後、彼も非常に元気に、戦後復興に情熱を持っていた。そのほか、船越さんとかね、あの連中、彼は民政府だったと思ったら、民政府には……

眞板 情報課長ですよ。船越尚武さん。

上原 そうだったかね。でもね、五〇年に私が脱出するまでに何回も会って、そんなに長い時間じゃないけれども、なんか話し合いをやったりした覚えがある。私が帰国して沖縄に行ったら、顔見て、はっと、すぐ思い出したものだ。彼も、おおって挨拶したくらいだから。だから、近親感があるんだけれども、大田さんっていう方は、実際は、私はまったく知らなかった。彼が知事になって初めて会って、そして、非常に熱っぽく、基地反対問題を訴

えたから、私はそれなりに評価して、彼に対して、じゃあ、こういう戦い方を組んだ方がいいですよということを助言した。それで、福建の友好会館か、それを造るときは、もう既に動き出しているんだから、彼に特別に言う必要はないからだったと思うが、彼がなぜか、一年半くらい前、中野で沖縄関係の問題で講演会があったときに、講演終了後、彼にお会いしたら、「上原さん、私は福州で友好会館造りました」ということをなぜ挨拶したか、という問題。それは、おそらく、それについては、県庁の担当者も含めて、あるいはその周辺の國場幸一郎やその他の財界人も含めて、私が、友好会館について、ずいぶん早くから、外部から協力したんだというようなことを言ったのかどうか、そういうあれが、印象がなければ、「私は福建で友好会館を造りましたよ」とわざわざ言わなかったはずだと思っただけだね。私は彼の丁寧な挨拶を聞きながら、「琉球人ですからね」と答えると同時に、その実直さに感動しました。二〇〇三年の春だったと思う。

眞板 福建の沖縄友好会館については、主に吉元政矩さんが、大田県政のころの副知事ですけれども、彼が担当したと県内では言われているんですが、吉元さんから先生に対して、ご助言を仰がれたとか、というようなことはございましたか？

## ■ 沖縄歴代宝案の収集に尽力

上原 ないですね。吉元さんとは。

私は県庁です。大田知事と会ったのは、一回だけかな？ 二回だったかな？ なんかの都合で、あっ、……山城善光さんと一緒に一回会っていますね。ということは、彼が病気で寝ている時に、お見舞いに行ったら、山城は「ウチナンチュの元気を引っ張り出すために、オイッ！ 信夫、明日知事を引っ張り出して、大講演会やるんじゃないか」というようなことを言っていたとこ

ろを見ると、彼はまだ私が帰ってきて、彼が元気な頃だから大田が知事になってしばらくしてだと思ふんだ。一回会っていますね。県庁で。そのときどういふことを話したか、ちょっと思い浮かばないですね。ただし、県の物産関係の方が何組か上京して来られたときは、中国経済の動向や対日関係及び中国政治・社会問題だけでなく、台湾問題にも触れていたから、当然、琉球会館の建設などにも話は及んだでしょうが、当時、私は多くの人々に、中琉貿易では福建は經由地の一部分で、交易の拠点は北京にすべきことを説明していたので、みなさんはもう私の考えがお分かりになっているものと思っていた。

大田さんと二回目か三回目に会ったのはね、『沖繩歴代宝案』。沖繩の歴代宝案についての、…名嘉さんという方が専従者の一人になっていたと思うけど…沖繩と中国との関係のある歴代宝案についてですね。これをやっていたのが、名嘉正八郎っていう。この人が、『琉球歴代宝案』について協力してくれと上京して来られた。沖繩では戦前から『宝案』として大事に保管されていたが、戦争で焼けてなくなつたものですから、それをその沖繩の人たちは、中国に原本があるということを知っていて、ずいぶん、長い間働きかけたらしいんですよ。中国側に。そして、中国の北京の歴史档案馆、その日本で言いますと、国立公文書館みたいなものがあるね、そこに、沖繩の人が行って、いろいろ中国のものを調べたりしているんだけど、なかなか現物を見ることはできないということ、それで、その人を通じて、いろいろな手を打つてもできないからだと思ふんだけど、名嘉さんっていう方が、県の方から、担当者になっているわけですね。それで、聞いたんだけど、何さんだったかな？ 忘れてしまったけれど…琉大の歴史関係者で、ちよつと名前忘れちゃったけれど。そういう人たちも含めて、私が沖繩に行つたときに…いや、そうじゃない。私の事務所に来たんだ。目黒の碑文谷に事務所があったと

きに。「こうこうして沖繩は中国に連絡をして、歴代宝案のそれを手に入れたいと努力しているんだが、とても難しいので、何とか協力して下さい」というので、では、私は現在どのように進めているかということ聞いてみた。「この人は、じゃあ、県から派遣されたのか」、「いや、個人である」と、「国家的重要文物に対する要求を個人がやったんじゃダメですよ」と。「沖繩の県知事から、ちゃんと、琉球の『歴代宝案』が中国北京の国家档案馆にあるということ聞いているんだが、われわれ沖繩に対して、これをマイクロフィルムにプリントできないだろうか、ということ、一応、知事の名において、沖繩の名において、要求を出して下さい」と助言した。で、「責任者は誰がやるかを決めてくれと。それが、決まったら、私から、直ぐに中国大使館に連絡をとって、大使とあんなたち沖繩県の代表を会わせましょう」ということでやったら、彼が知事の名前で書いたお願いっていうのがありますね。歴代宝案を是非われわれが利用できるようにご協力お願いしますと。それで、私は彼から、「じゃあこういうふうに、準備できました」というから、「じゃあ、いつ東京においてになりますかと、大使館の者に聞いてみるから」ということで、翌日、大使館の大使と相談して、「何日の何時にまでに来てくださいと、時間はどうとおきます」ということで、約束をとった。来てもらって、一緒に大使に会わせて、お願いして、中国に協力してもらおうという約束をまず大使を通じて、大使から直接しかるべき中国の機関に対して、その書類を出した。そして、ひと月以内だったと思うんだけど、「どうぞ、じゃあ代表団来て下さい」ということで、非常にとんとん拍子に話は進んで、あのマイクロフィルムっていうんですか？ そういうので、撮ったりして、沖繩が必要とするすべてをぜんぶ、手に入れた。そして、この問題解決したときには、彼は、その北京から帰ってくるときには、日本公文書館の館長、何て言ったかな？ 忘れた。いわゆる豪傑な方なんだ。その方

も含めて、……（※上原信夫氏注・小玉正任氏）

眞板 宮城悦二郎じゃなくてですか。その前ですか。

上原 いや、沖縄でなく東京の

佐道 竹橋にある。公文書館の方ですね。

上原 そうです。国立公文書館の館長さんに、名嘉正八郎さんは、中国から『沖繩歴代宝案』のマイクロフィルムをいただけるようになった旨を国立公文書館の館長さんに報告に行くというので、私も名嘉さんに誘われて、ご一緒したことがあった。そのときの館長の面白い話は、大変参考になった。その後、時間は忘れたが、中国国家檔案室館長を団長とする代表团数人が、『沖繩歴代宝案』のマイクロフィルムを持参した。代表团の東京滞在中に国立公文館館長の盛大な歓迎があつて明日代表团は沖縄に向つた。名嘉さんはかねてから、「中国代表团が来日したら、先生（上原氏）を是非沖縄に迎えて、知事に先生のお陰で、こうこうであつたと、私、報告しますから」ということだったんでね。私はそのとき、ただ、中国の人たちは言葉の問題もあるから、不便であるならば、代表团が来たら、じゃあ、飛行場へ一緒に迎えに行くから、一緒に行きましようということ、私も最大限協力したら、そのように、彼も努力してくれてね。その航空券がうまくいかなかったということで、「代表团と一緒に飛行機には乗れないが、次の飛行機で来て下さい」ということで、私は遅れて行つて、県庁で、大田県知事と会つた。そのときは、大田さんと中国の代表团を交えての挨拶といひますか、初めてやつた。で、そういうこともあつて、あとは、沖縄にたとえば、福建省の代表团が来たとか、というときには、一回くらいですかね、あの青年連合会の会長が来日した時には、連合会長から沖縄まで一緒に行つてくれという要求もあつたもんだから、一緒に沖縄に行つたら、県知事は、そのときは、大田さんはいなくて、女の副知事、何て言つたかな？

眞板 東門さん？

上原 東門さん。その方と会つて、一緒に写真を撮つたりしたこともありますけれど。そういうぐらいのものかな？

※東門美津子は、一九四二年十一月生まれ。大田県政下で、九四年から九八年まで副知事。二〇〇〇年の衆院選で初当選。

佐道 吉元さんとは、もうほとんどお目にかかつたことはない？

上原 吉元さんとはね。彼と会つたのはね。前に会つた覚えがないから、これが最初だつたと思うのは、元総評議長の榎枝さんたちが、何とか国民会議つていうのがある。その会合に私、呼ばれて、行つてみたら、沖縄から、こういう人が来るから、ということと呼ばれて行つてみたら、彼（吉元）が来ていた。彼が沖縄問題についての講演をした。そして、私は彼の話を聞いた後で、質疑応答があつて、私はあなたのお話をお聞く限り、大変素晴らしい、大田さんの名助手であつた、副知事であつたのに、どうしてあなたみたいな人を引きずり降ろさなきゃいけなかつたのか。

佐道 （笑）

上原 もつたいないと。沖縄の関係者、けしからん！ 私が大変大きな声を出したら、あとで、大変喜んで、挨拶してくれましたね（笑）

佐道 そうですか。

上原 それが、初めてだったんですね。その後、なんかで一回くらいは会つていますね。

佐道 だいたい、もう二時間以上また例によつてお伺いして、ありがとうございました。だいたい、今回、今日の目的にしていたことは、お話ししたと思ひます。どうもありがとうございました。

了

平成16年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕  
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕  
発行：2005年3月25日《無断転載禁》

---

政策研究大学院大学(政策研究院)  
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2  
Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446